

松前町

福山城下町遺跡(2)

—松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和5年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

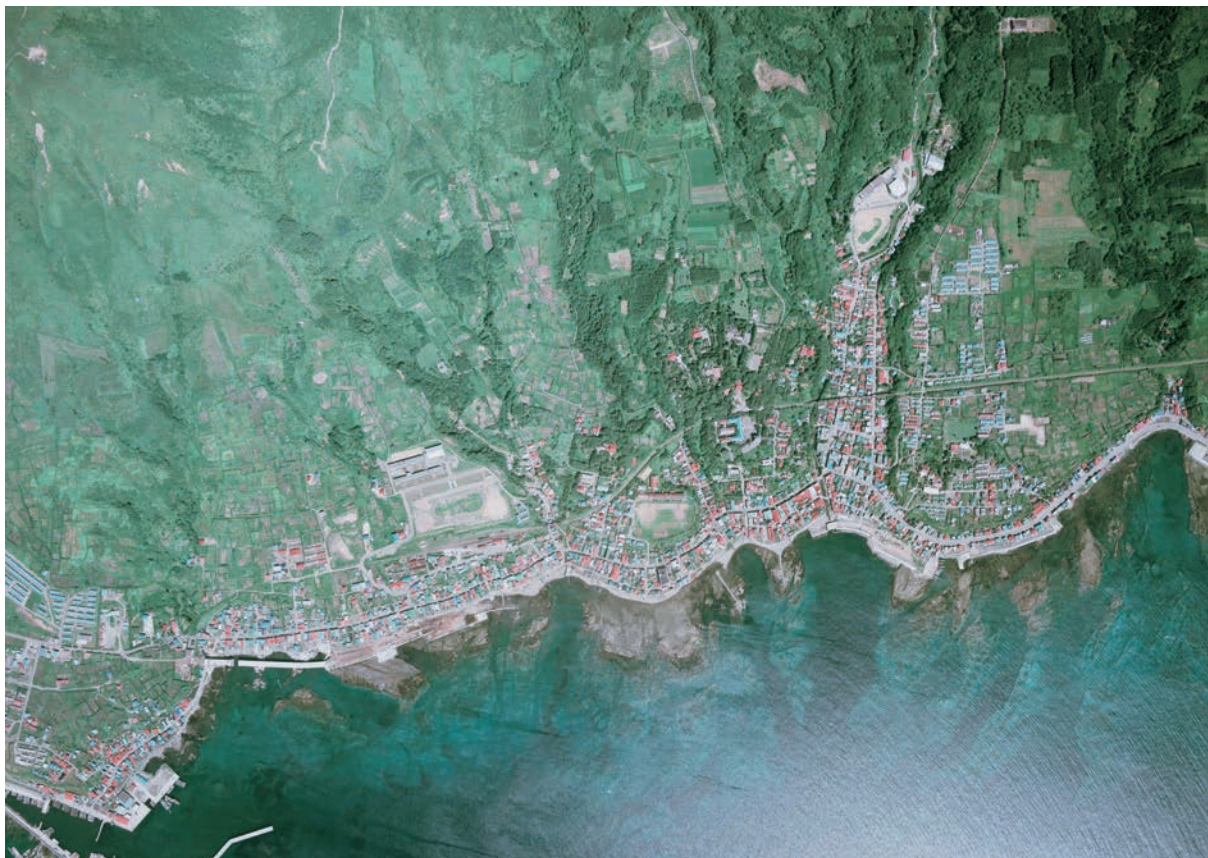
松前町

福山城下町遺跡(2)

—松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和5年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡周辺空中写真

国土地理院の空中写真「CHO76-21 C19-4」(昭和51年撮影)を使用



遺跡遠景 (矢印部分が発掘区)

口絵 2



舟敷 出土状況 D地区 地番 14-1 北東から



舟敷上位 遺物出土状況



火災面 磁器片出土状況 D地区 地番 15-2 IV層 東から



D 炉1 土層断面 D地区 地番 14-1 東から



D 炉2 坩堝出土状況 D地区 地番 14-1 北から



繊維製品出土状況 D地区 地番 13 南から



舟敷北側 縄出土状況 北東から



漳州窯系磁器



火事場整理穴出土遺物

B掘込2



3

D13木製品集中



6



7



8



44



45



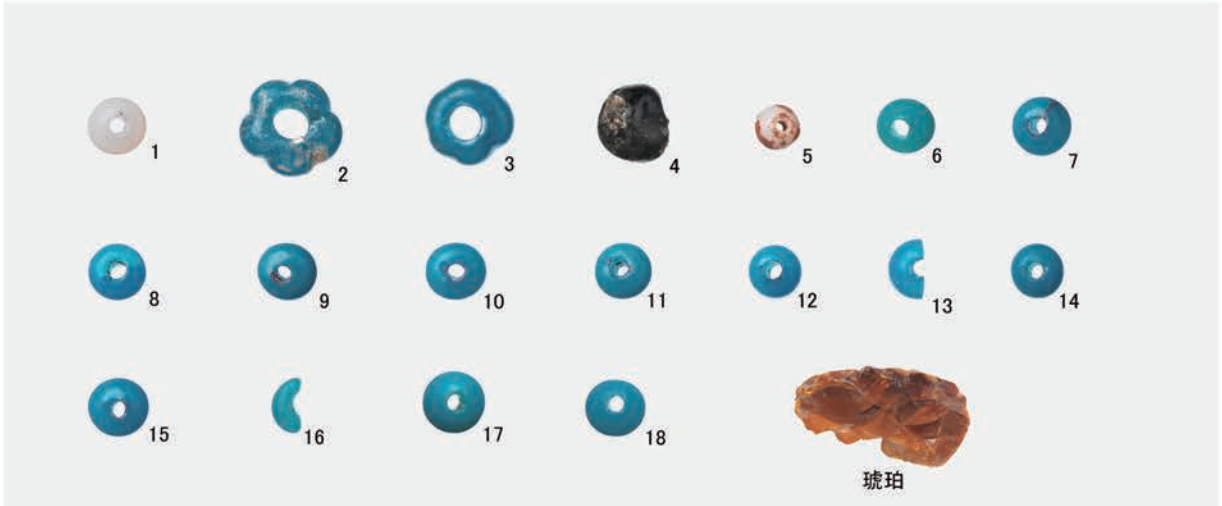
46

D14-1木製品集中

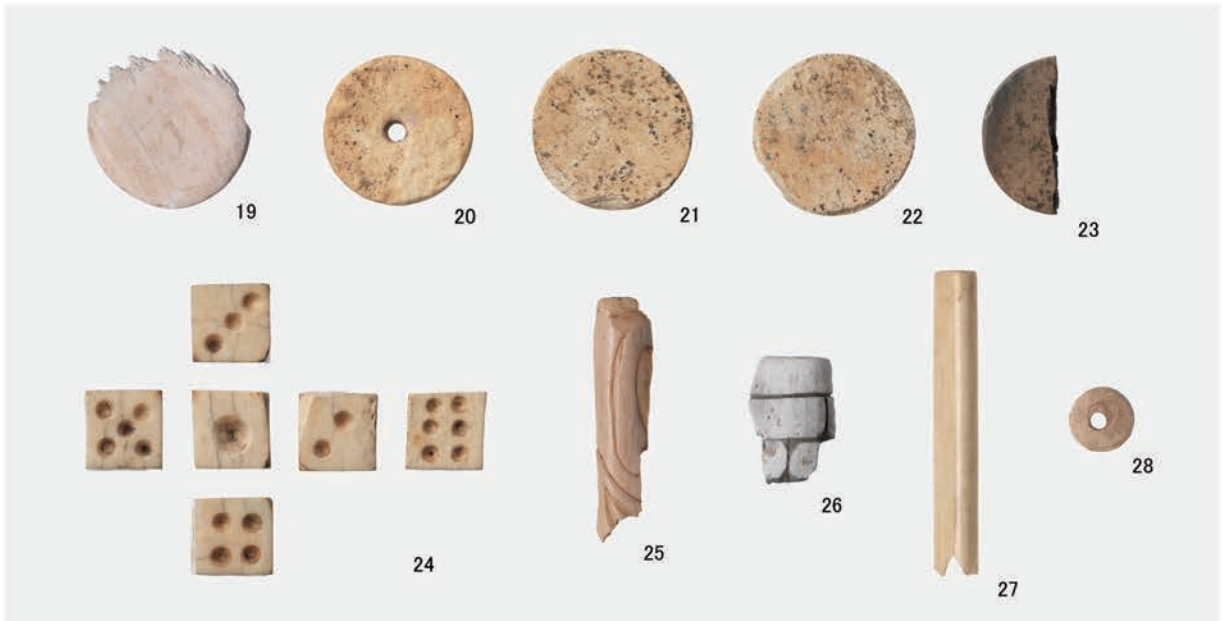


D14-1木製品集中
(④14-1地先)

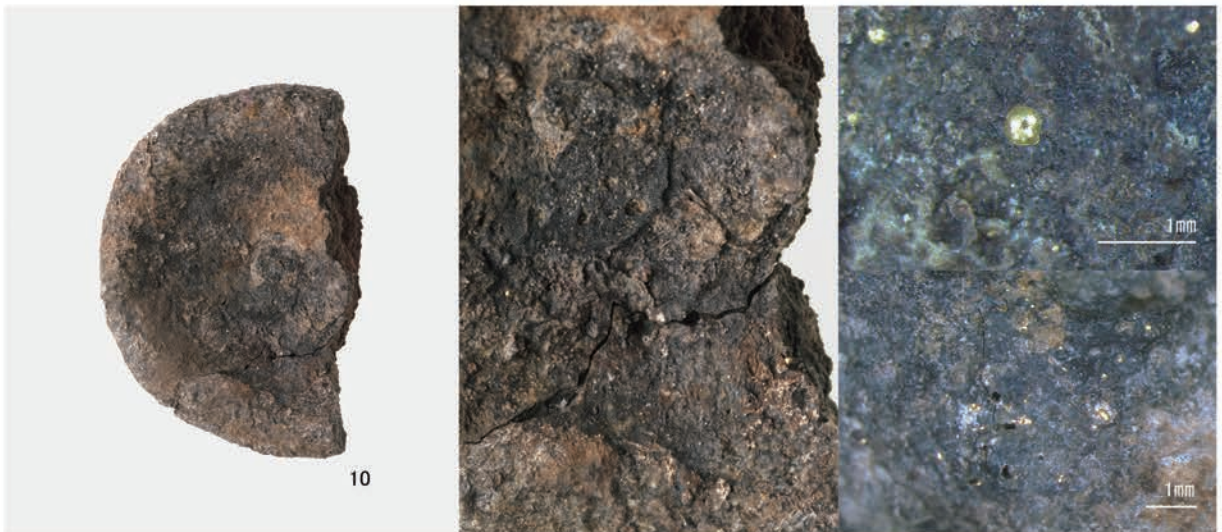




ガラス玉等



骨角貝製品



埴埴



『松前屏風』(唐津内町周辺)

松前町郷土資料館所蔵



『松前分間絵図』(唐津内町周辺)

『松前町史』史料編第二巻付図に加筆

例 言

1. 本書は、北海道渡島総合振興局が行う松前港線改良工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和4（2022）～5（2023）年度に実施した松前町福山城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。当センターが調査した福山城下町遺跡においては2冊目の報告書となる。
2. 福山城下町遺跡の発掘調査については、当センターが令和5年3月に発行した『調査年報34』・『テエタ49』、同6年3月に発行した『調査年報35』・『テエタ50』、南北海道考古学情報交換会が令和4年12月に発行した『第43回南北海道考古学情報交換会発表資料集』、同5年12月に発行した『第44回南北海道考古学情報交換会発表資料集』に概要を報告しているが、本報告書の内容が優先する。
3. 発掘調査は第1調査部第1調査課、第2調査部第2調査課が担当した。
4. 整理作業の担当は、新家水奈、山中文雄である。
5. 木製品、金属製品の保存処理作業は第1調査部第1調査課主査立田 理（令和4年当時第1調査部普及活用課主査）、主任田口 尚の協力を得た。
6. 現地の写真撮影は令和4年度は吉田裕吏洋が、令和5年度は中山昭大が行った。掲載遺物の撮影は第1調査部第1調査課長中山昭大、主任菊池慈人が行った。一部吉田裕吏洋（第2調査部第2調査課当時）も行っている。
7. 本書の編集は新家・山中が行った。執筆者は各項目文末に示した。
Ⅱ章掲載の周辺の遺跡分布地図は、第1調査部第2調査課主査柳瀬由佳の協力を得た。
8. 付編Ⅰ（DVD）の分析・鑑定は以下の機関・個人に依頼・委託または協力を得た。
 - 1 枝の年代測定：株式会社加速器分析研究所
 - 2 人骨のC/N比分析、年代測定：株式会社パレオ・ラボ
 - 3 出土生材、種子の年代測定：株式会社パレオ・ラボ
 - 4 火山灰同定：アースサイエンス株式会社
 - 5 土壌中の珪藻分析：いしかり砂丘の風資料館（志賀健司氏）
 - 6 土陶磁器鑑定：東京大学埋蔵文化財調査室（堀内秀樹氏）
 - 7 鍛冶関連遺物の分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 8 埴埜等附着物の化学分析：国立科学博物館（沓名貴彦氏）
 - 9 木製品樹種同定：第1調査部第1調査課 立田 理、菊池慈人
 - 10 ガラス玉組成分析：奈良文化財研究所（田村朋美氏）、余市町教育委員会（高橋美鈴氏）
 - 11 動物遺存体の鑑定：第2調査部第3調査課 課長 土肥研晶（令和4年当時第1調査部第2調査課）、第1調査部第2調査課 主査 福井淳一
 - 12 出土人骨の取り上げ・保存・鑑定：新潟医療福祉大学（澤田純明氏）
9. 調査に当たっては、下記の諸機関および個人よりご指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。北海道教育委員会、松前町役場、松前町教育委員会 佐藤雄生、松前町唐津地区町内会、松前町議会、松前町立松城小学校、松前警察署、松前消防署、ほくでんネットワーク福島、NTT東日本株式会社つうけん、函館バス株式会社、河野土建株式会社、恵庭市教育委員会郷土資料館 杉浦正和、北海道大学大学院農学研究院 佐野雄三、北海道立文書館 山田 正、標津町教育委員会 小野哲也、国立アイヌ民族博物館 森岡健治、安土城考古博物館 大道和人、勝山市監査委員事務局 宝珍伸一郎、元興寺文化財研究所 瀬戸哲也、同志社大学 浜中邦弘。

記号等の説明

遺構図・層序図

1. 方位記号は座標北（方眼北）を指す。
2. 平面図の「・」付きアラビア数字は、その地点の標高（単位：m）を表す。
3. 平面図の破線は遺構等の重なりで隠れる（下になる）部分を表す。
4. 断面図の一点鎖線は、線の上下が同層であることを示す。
5. 平面図・断面図には、必要に応じて、礫の略号「S」、木の略号「W」を付けた。
6. 堆積物の粘り・締りの判定には、『土壌調査ハンドブック』（日本ペドロジー学会編1997）に記された「粘着性」・「堅密度」を用いた。両者の判定基準は以下のとおりである。なお、注記では前者を「粘；」後者を「堅；」と略称した。
 - (1) 粘着性「なし」：土壌がほとんど指に付着しない。「弱」：土壌が一方の指に付着するが、他方の指には付着しない。指を離したときに土壌はのびない。「中」：両指頭に付着する。指を離したときに土壌が多少糸状にのびる傾向を示す。「強」：両指頭に強く付着する。指を離したときに土壌が糸状にのびる。
 - (2) 堅密度「すこぶるしょう」：ほとんど抵抗なく指が貫入する。「しょう」：指が土層内にたやすく深く入る。「軟」：はっきりと深い指のあとが容易にできる。「堅」：強く押ししても指のあとがわずかしかなかったり残らない。「固結」：移植コテによってやっと土壌を削れる。
7. 白頭山苫小牧テフラについては、略号の「B-Tm」を用いたところがある。
8. 遺構の計測値で、欠損部分や未調査部分がある場合は現存長を（ ）で閉じて示した。

遺物図

1. 遺物の計測値で、欠損部分がある場合は現存長を（ ）で閉じて示した。

その他

1. 令和5年度の調査工程「1～6期」は、発掘区内の位置を表すため、「①～⑥地区」と呼び替えることがある。
2. D地区地番14-1をD14-1、①地区地番84-2地先を①84-2地先のように、地区地番の語を略することができる。

目 次

口 絵	
例 言	
記号等の説明	
目 次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

I 調査の経過

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の経過	2

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6

III 調査の方法

1 発掘作業の方法	19
2 整理作業の方法	21

IV 現地調査の状況

1 概 要	25
2 A地区	27
3 B・①地区	28
4 C・②・③地区	28
5 D・④・⑥地区	30
6 E・⑤地区	36

V 遺 物

1 概 要	63
2 土陶磁器	63
3 金属製品	118
4 金属生産関連遺物	140
5 木製品等	144
6 石製品	178

7	骨角貝製品	182
8	ガラス玉	189

引用文献

写真図版

報告書抄録

付編 I 自然科学分析 (DVD所収)

- 1 福山城下町遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)
- 2 福山城下町遺跡の放射性炭素年代測定および炭素・窒素安定同位体比測定
- 3 福山城下町遺跡の放射性炭素年代測定
- 4 福山城下町遺跡の火山灰同定
- 5 福山城下町遺跡の珪藻遺骸群集と古環境
- 6 福山城下町遺跡出土陶磁器の様相
- 7 福山城下町遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査
- 8 福山城下町遺跡出土非鉄金属生産関連遺物の科学調査
- 9 福山城下町遺跡出土木製品の樹種同定について
- 10 福山城下町遺跡出土ガラス製遺物の自然科学分析
- 11 福山城下町遺跡出土の動物遺存体
- 12 福山城下町遺跡から出土した人骨について

付編 II カラー図版 (DVD所収)

挿図目次

II 遺跡の位置と環境		図IV-14 D地区13遺構図(2)・14-1断面図(1)…	49
図II-1 遺跡位置図……………	11	図IV-15 D地区14-1断面図(2) ……	50
図II-2 福山城下町遺跡の範囲と発掘区の位置…	12	図IV-16~19 D地区14-1遺構図(1)~(4)	51~54
図II-3 文化年間の福山城下町……………	13	図IV-20 D地区15-2断面図・遺構図(1) ……	55
図II-4 「明治26~27年福山町見取り図」・ 大正7年「地籍図」……………	14	図IV-21~23 D地区15-2遺構図(2)~(4)	56~58
図II-5 松前町の遺跡……………	15	図IV-24 ④地区15-3・15-3地先・17-2・ 17-2地先平面図・断面図・遺構図 …	59
III 調査の方法		図IV-25 ⑥地区12断面図・遺構図……………	60
図III-1 令和4・5年度福山城下町遺跡(字唐津) 発掘区……………	24	図IV-26 E・⑤地区平面図・断面図……………	61
IV 現地調査の状況		V 遺物	
図IV-1 A地区平面図・断面図……………	37	図V-1 出土陶磁器産地別構成比……………	70
図IV-2 A地区遺構図……………	38	図V-2~13 磁器(1)~(12)……………	86~97
図IV-3 B・①地区平面図……………	39	図V-14~27 陶器(1)~(14)……………	98~111
図IV-4 B地区断面図(1)・①地区断面図 ……	40	図V-28~33 瓦・土製品ほか(1)~(6)	112~117
図IV-5 B地区断面図(2)・遺構図……………	41	図V-34 銭計測位置……………	120
図IV-6 C・②・③地区平面図・C地区断面図…	42	図V-35~39 鉄製品(1)~(5)……………	121~125
図IV-7 C地区遺構図……………	43	図V-40~43 非鉄製品(1)~(4)……………	126~129
図IV-8 ②・③地区断面図・③地区遺構図…	44	図V-44~47 貨幣(1)~(4)……………	130~133
図IV-9 D・⑥地区平面図(Ⅱ・Ⅲ層)……………	45	図V-48・49 金属生産関連遺物(1)・(2)	142・143
図IV-10 D地区平面図(Ⅳ層)……………	46	図V-50~76 木製品等(1)~(27)……………	148~174
図IV-11 D地区平面図(Ⅶ層)……………	46	図V-77・78 石製品(1)・(2)……………	180・181
図IV-12 D地区13~14-1断面図……………	47	図V-79 骨角貝製品関連グラフ……………	182
図IV-13 ④地区13地先断面図・ D地区13遺構図(1)……………	48	図V-80・81 骨角貝製品(1)・(2)……………	186・187
		図V-82 ガラス玉……………	190

表目次

II 遺跡の位置と環境		表V-4 産地・層位別土陶磁器点数……………	70
表II-1 発掘区地番対照表……………	16	表V-5~9 掲載磁器一覧(1)~(5)……………	71~75
表II-2 福山城下町遺跡発掘調査歴一覧表…	16	表V-10~12 掲載陶器一覧(1)~(3)……………	76~78
表II-3 松前町の遺跡(擦文・中~近世)……………	17	表V-13・14 掲載瓦・土器・土製品・人形ほか 一覧(1)・(2)……………	79・80
III 調査の方法		表V-15 産地・層位別陶磁器点数……………	80
表III-1 金属製品処理作業項目……………	22	表V-16 産地・層・遺構別細分類陶磁器点数…	85
IV 現地調査の状況		表V-17 鉄製品等集計表……………	134
表IV-1 遺構数一覧表……………	25	表V-18 非鉄製品等集計表……………	135
表IV-2 遺構一覧表……………	62	表V-19 貨幣集計表……………	136
V 遺物		表V-20 掲載鉄製品一覧表……………	137
表V-1 出土遺物総点数……………	68	表V-21 掲載非鉄製品一覧表……………	138
表V-2 土陶磁器点数……………	68	表V-22 掲載貨幣一覧表……………	139
表V-3 遺構出土土陶磁器点数……………	69		

表V-23 掲載金属生産関連遺物一覧表……………	141
表V-24・25 掲載木製品等一覧表(1)・(2) ……………	175・176
表V-26 木製品等樹種別集計表……………	177
表V-27 石製品集計表……………	179

表V-28 掲載石製品一覧表……………	179
表V-29 骨角貝製品集計表……………	188
表V-30 掲載骨角貝製品一覧表……………	188
表V-31 掲載ガラス玉一覧……………	189

写真図版目次

図版1 遺跡近景	図版30 令和5年度⑥地区地番12(2)
図版2 A地区	図版31 鉄製品(1)
図版3 B地区	図版32 鉄製品(2)
図版4 C地区(1)	図版33 鉄製品(3)
図版5 C地区(2)	図版34 非鉄製品(1)
図版6 D地区地番13(1)	図版35 非鉄製品(2)、貨幣(1)
図版7 D地区地番13(2)	図版36 貨幣(2)
図版8 D地区地番13(3)	図版37 貨幣(3)
図版9 D地区地番13(4)	図版38 貨幣(4)
図版10 D地区地番14-1(1)	図版39 金属生産関連遺物(1)
図版11 D地区地番14-1(2)	図版40 金属生産関連遺物(2)
図版12 D地区地番14-1(3)	図版41 木製品等(3)
図版13 D地区地番14-1(4)	図版42 木製品等(4)
図版14 D地区地番14-1(5)	図版43 木製品等(5)
図版15 D地区地番14-1(6)	図版44 木製品等(6)
図版16 D地区地番14-1(7)	図版45 木製品等(7)
図版17 D地区地番14-1(8)	図版46 木製品等(8)
図版18 D地区地番15-2(1)	図版47 木製品等(9)
図版19 D地区地番15-2(2)	図版48 木製品等(10)
図版20 D地区地番15-2(3)、 E地区地番10-5・11-6・11-8	図版49 木製品等(11)
図版21 令和5年度①地区	図版50 木製品等(12)
図版22 令和5年度②地区地番17-1地先	図版51 木製品等(13)
図版23 令和5年度③地区地番18-1(1)	図版52 木製品等(14)
図版24 令和5年度③地区地番18-1(2)	図版53 木製品等(15)
図版25 令和5年度③地区地番18-1(3)	図版54 木製品等(16)
図版26 令和5年度④地区地番14-1地先	図版55 木製品等(17)
図版27 令和5年度④地区地番17-2地先	図版56 木製品等(18)
図版28 令和5年度④地区地番15-3地先、 ⑤地区地番11地先(1)	図版57 木製品等(19)
図版29 令和5年度⑤地区地番11地先(2)、 ⑥地区地番12(1)	図版58 石製品
	図版59 骨角貝製品(1)
	図版60 骨角貝製品(2)

I 調査の経過

1 調査要項

事業名 松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査委託
事業委託者 北海道渡島総合振興局
事業受託者 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 福山城下町遺跡（北海道教育委員会登録番号：B-02-29）
所在地 松前郡松前町字唐津10-5・11-6・11-7・11-8・12・13-2・14-3・15-3・
15-4・17-2・18-4・19-2・88-2・85-4・85-5・86-2・87-2・88-
2・89-2・90-2・91-2・92-2・92-4・93-3・94-2
調査面積 (令和4年度) 531m²
(令和5年度) 854m²
現地調査期間 (令和4年度) 令和4年5月12日～9月30日
(令和5年度) 令和5年7月11日～9月29日
整理期間 (令和4年度) 令和4年10月3日～令和5年3月31日
(平成5年度) 令和5年5月22日～令和6年3月29日

2 調査体制

[令和4年度]	[令和5年度]
理事長 長沼 孝	理事長 長沼 孝
専務理事 馬橋 功（事務局長兼務）	専務理事 馬橋 功（事務局長兼務）
常務理事 鈴木 信（第1調査部長兼務）	常務理事 鈴木 信（第1調査部長兼務）
第2調査部 部長 村田 大	第2調査部 部長 村田 大
第2調査課 課長 新家 水奈（発掘担当者）	第2調査課 課長 新家 水奈
主査 吉田 裕吏洋（発掘担当者）	主査 山中 文雄（発掘担当者）
主査 山中 文雄（発掘担当者）	第1調査部第1調査課
第1調査部第1調査課 主査 坂本 尚史	課長 中山 昭大（発掘担当者）
	主任 菊池 慈人（発掘担当者）

3 調査にいたる経緯

(1) 道道松前港線工事に関わる過去の発掘調査

道道松前港線拡幅工事に関わる発掘調査は、平成17（2005）年度からすでに松前町教育委員会（以下、町教委）によって数回にわたり行われている。経緯は平成5年6月に松前町が北海道の「歴史を生かすまちづくり」プロジェクトの整備モデル地区に指定されたことに始まる。

これに伴い、福山城下の「商店街ゾーン」のまちなみ整備の一環として道道松前港線（通称「城下通り」）の改良工事が渡島支庁函館土木現業所（当時。以下、土現）によって計画された。整備の対象は「松城工区」、「福山工区」、「唐津工区」の大きく3つの工区に分けられ、平成16年12月、土現から北海道教育委員会（以下、道教委）あてに「松城工区」の工事に関わる「埋蔵文化財保護のための事前協議書」が提出された。道教委は翌平成17年に要発掘と回答、土現は町教委に発掘調査を委託し、

同年11月より町教委により459m²が調査された。うち199m²は「福山城 (B-02-53)」、260m²は「福山城下町遺跡 (B-02-29)」である。翌平成18 (2006) 年、町教委によって報告書が刊行された (2006 町教委)。この調査により、城下一帯が「福山城下町遺跡」の名称で埋蔵文化財包蔵地として再認識され、登載されるにいたる。

同年、道教委によって唐津・松城・福山の3工区にわたる試掘調査が行われた。試掘の結果を踏まえ、土現に対し「要発掘調査」の回答がなされた。土現は町教委に埋蔵文化財調査を依頼、町教委はこれを受託し、同年9月より790m²について発掘調査を行った。この調査により、唐津～松城～福山地区まで途切れなく遺跡が包蔵されていることが裏付けられた。調査は平成19年2月まで続けられ、同年発掘調査報告書が刊行されている (2007 町教委)。

同年4月、引き続き土現からの事前協議を受け、道教委は要発掘の回答を行う。6月には町教委が土現との契約により松城地区の60m²の発掘調査を受託している。調査は夏に行われ、発掘調査報告書が同年度内に刊行された (2008 町教委)。

平成24 (2012) 年北海道渡島総合振興局 (以下、振興局) は「松前港線 交付金事業」に関わる「埋蔵文化財保護のための事前協議書を道教委に提出した。事業予定地5,070m²内に「福山城下町遺跡」の所在が周知であったため、この事前協議書には町教委からの「所在調査及び試掘調査の必要」を記した調書が添付された。翌平成25 (2013) 年、町教委による試掘調査が行われた。この試掘調査の結果を踏まえ、道教委は要発掘・工事立会の回答を出し、町教委は翌平成26 (2014) 年7月に振興局から委託された発掘調査を受託、契約を締結した。発掘調査は平成26年9月から開始され、発掘調査報告書が平成27 (2015) 年に刊行された (2015 町教委)。

一方事業は異なるが、平成22 (2010) 年、財団法人北海道埋蔵文化財センター (当時。以下、センター) が字福山の一部で「福山城下町遺跡」の発掘調査を行っている (町道朝日豊岡線代行事業改良工事に関わる埋蔵文化財発掘調査 2012 北埋調報290)。また、平成29 (2017)、30 (2018) 年には弘前大学による学術調査が字豊岡、字松城で行われている (弘前大学 2018、2019)。

(2) 埋蔵文化財保護のための事前協議

令和3 (2021) 年、北海道渡島総合振興局函館管理部事業課 (以下事業課) より、唐津地区の道道松前港線改良工事 (工事面積1855.7m²) に伴う「埋蔵文化財保護のための事前協議書」が道教委に提出された。道教委はこれを受け、同年10月現地で範囲確認調査を行い、工事面積1855.7m²のうち、770.9m²について発掘調査が必要と判断した (その後603m²に変更)。調査は公益財団法人北海道埋蔵文化財センター (以下、センター) が受託し、令和4 (2022) 年4月事業課と契約を交わした。

4 調査の経過

(1) 令和4年度の発掘調査の経過

令和4 (2022) 年4月より準備を行い、松前町の桜まつり終了後5月12日から現地調査を開始した。人力調査必要数20名の人工確保が難しく、5月は6名でスタートし、6月1日付で7名の人工を追加し、9月末まで計13名で調査を行った。

令和4年度の福山城下町遺跡の調査は、道道松前港線の歩道部分を海・山両側で行った。範囲確認調査で最も遺物が多く出土した海側のD地区、西側交差点北角にあたるA地区から着手し、6月A地区終了後、東端のE地区に着手、E地区終了後北側 (山側) のB地区の調査を東から西へ進めた。9月にはB地区と並行して西側交差点南角のC地区の調査に着手した。D地区は最も包含層が厚く、ま

た残りが良く、遺物、遺構も多く検出されたため5～9月末まで調査が続いた（図Ⅲ－1）。

調査開始後まもなく、発掘調査内に残る信号機、電柱、NTTケーブル、消火栓などの障害物の扱いについて6月16日、道教委、北海道渡島総合振興局函館建設管理部松前出張所（以下、出張所）、センターの3者で現地協議を行った。その際出張所から工事区内の障害物等の扱いや歩道縁石、車道の掘削に関して「24条申請」（道路承認工事申請（道路法第24条））不提出の指摘を受け、強く提出を求められた。これを受けセンターは出張所に7月13日、9月20日の2度申請を行ったがいずれも受理されず、令和4（2022）年度調査が可能となったのは、障害物、歩道縁石、車道部分を含まない範囲、計531m²であった。結果、9月26日出張所より令和4年度調査分に関しては「24条申請」書不要の連絡があり、障害物周辺、縁石部分、車道部分は次年度以降に調査が先送りとなった。

また調査が進むにつれ、地表面から80cmに満たない深度であっても、部分的に近世の遺物包含層が残存していることが判明し、センターは道教委に報告、8月下旬道教委、事業課、センターの3者で現地協議を行い、立会対象範囲であった車道本線部分も本調査対象となった。事業課は現地調査期間延長により対応するようセンターに要請したが、調査区拡張に必要な積算材料が事業課から提示された時期が遅れ、センター側からの積算資料提出後、事業課から延長の有無の回答があったのは発掘調査終了予定日が迫る9月21日であった。検討の結果、同年の発掘調査期間延長は不可能と判断され、現地調査は9月29日に終了した。

（2）令和5年度の発掘調査の経過

令和4年度の現地調査の結果、隣接する町道を含む車道下の調査も必要とされ、道教委より提示された面積は当初918m²であった。しかし未買収地および建造物の移転等が間に合わないなどの理由で126m²が先送りされ、854m²が調査対象となった。令和5年度は車道本線の調査であるため、「道路承認工事申請」が必要となることが出張所より前年度から指摘されていた。このため令和5年3月2日に事業課、出張所、センターとの3者打ち合わせ（出席者事業課1名、出張所6名、センター4名）を松前町の出張所にて行い、申請に関する注意事項等を確認した。申請に必要と提示された各方面との協議簿を作成するため、3月16、17日に現地でNTT東日本（つうけん）、福島町ほくでんネットワーク、松前消防署、松前警察署、松前町役場建設水道課、松前町政策財政課、函館バス株式会社の各担当者と協議を行った。

5月22日付で事業課との契約が行われ、道路掘削に際し必要とされた「道路承認工事申請」を提出したが、出張所より数回（4/28、5/23、6/2、6/21、6/22、6/23）にわたる訂正の通達があり、再度松前町水道課、函館バス、松前町松城小学校、松前町中学校、松前町唐津地区町内会と協議した上、協議簿を作成し追加提出した。松前出張所および事業課の審査が完了したのは7月4日、その後渡島総合振興局函館建設管理部より7月10～14日にかけて再三の修正、訂正、質問事項等があり、道路使用許可が下りたのは契約開始から2か月後の7月20日であった。現地での実際の調査開始は7月25日からとなった。

現地採用の作業員は松前町内だけでは確保が難しく、近隣の福島町、知内町からも募集を行った。調査は7月25日から作業員11名で行い、道路の片側交互通行や町道の通行止めのため6期（6地区）に分けて実施し（図Ⅲ－1）、9月29日に終了した。現状復帰は10月31日に完了した。

松前港線の車道部分は集水桝等の設置予定箇所を除き、地表面から80cmの掘削を行った。舗装の路盤・路床やNTTの通信ケーブル、U字構の設置による攪乱のため遺構は確認されなかったが近世の陶磁器等が出土した。地表から190cm掘削した箇所からは旧福山街道の造成土、街道造成以前の土坑

を確認した。令和4年度に調査したD地区に隣接する地番14-1地先からは沢状地形が確認され、刀の柄と鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。町道部分は80cm掘削の場所でも遺構の残りがよく、唐津ヶ丘線部分では焼土粒や炭の混じる土層が残っており、陶磁器等が出土した。海岸通り4号線下では黄褐色ローム層の上下で火災の痕跡を確認した。また、陶磁器、瓦、金属製品等が多数入っていた火災後の整理土坑と考えられる穴も検出した。

(3) 整理作業の経過

現地での整理作業（一次整理作業）は、雨天時で発掘作業が困難な日などに行った。作業内容は図面の点検、遺物の水洗・乾燥・分類、遺物カード・台帳の作成、注記、仮収納等である。

センターでの整理作業（二次整理作業）は、現地調査終了後の令和4（2022）年10月3日から開始し、令和5（2023）年度は5月～7月の現地調査と並行して整理を続け、令和6（2024）年3月まで行った。

作業内容は、未了の遺物水洗作業、注記作業、遺物台帳の表計算ソフトへの入力、木製品・金属製品のクリーニング・保存処理、土陶磁器片の再分類、台帳・注記の修正、土陶磁器片の接合・復元、木製品の接合・鑑定、遺物実測、遺構図等の調整、各種図面のトレース、写真データ整理、掲載遺物の写真撮影、挿図・写真図版作成、遺物集計、原稿執筆、報告書レイアウト作業などである。

（新家）

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

(1) 松前町の位置

福山城下町遺跡は、北海道渡島総合振興局管内の松前郡松前町に所在する（図Ⅱ-1）。遺跡のある松前町は北海道の南端に位置し、渡島半島南西部にあたる松前半島の南端部を占める。町の範囲は東西18.8km、南北31.5kmの広がりを持ち、面積は293.25km²を測る。域内は北東端の大千軒岳（1072m）を主峰とする松前山地（宮内2003）が大部分を占め、海岸部を雛壇状の海岸段丘が取り巻く。町の西側から南側は日本海に面し、松前湾西端の弁天島から約60km西北西に渡島大島、同地点から約25km西南西に松前小島が浮かぶ。北海道最南端の白神岬と大千軒岳を結ぶ稜線は、日本海と津軽海峡の分水嶺となっており、同線の東側は松前郡福島町である。北側は大千軒岳から西北西に延びる山稜を境にして、檜山振興局管内の檜山郡上ノ国町と接する。

前出の白神岬は津軽海峡西口の北端にあたり、対になる南端は津軽半島最北端の龍飛崎である。前者から後者までは南東へ20kmほど、前者から津軽半島西部の小泊岬西端までは南へ30kmほどの距離である。なお、好天時には松前半島南岸の各所から、青森県の最高峰である岩木山（1625m）が眺望できる。福山城から岩木山までの距離は南南東へ約90kmを測る。

松前町は半島の先端部に位置するため風が強いものの、対馬暖流と津軽暖流に挟まれた温暖な地域であり、道内では最も早く桜が開花する。1991～2020年にかけての年平均気温は、札幌の9.2℃に対し松前は10.5℃、1月の平均気温は札幌の-3.2℃に対し、松前は-0.5℃である。一方、同期間の年平均風速は、札幌の3.6mに対し松前は4.6mで、12月と1月は6mを越す。（気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」<https://www.data.jma.go.jp/stats/etrn/index.php> 2024年2月16日閲覧）。

(2) 城下町周辺の地形と地質

城下町周辺の地形は、山地、海岸段丘、沖積低地に大別される。山地は城下町の背後、海岸線から1.5～2km内陸に入った辺りに分布し、東から七面山（187m）、神止山（154m）、勝軍山（215m）、御髪山（274m）が並ぶ。海岸段丘は山地と海岸の間を雛壇状につなぎ、秦ほか（1990）は段丘をⅠ段丘（標高40～115m）、Ⅱ段丘（標高20～50m）、Ⅲ段丘（標高15～40m）に区分している。Ⅰ～Ⅲ段丘はいずれも更新世の段丘であるが、海岸部には完新世の海岸段丘（標高3～7m）が発達するという。沖積低地は海岸沿いや河川沿いに形成されている。なお、本書の文中では海岸段丘を台地、沖積低地と完新世の海岸段丘とを合わせて低平地と表現することがある。

河川は東から及部川、伝治沢川、大松前川、小松前川、唐津内沢川が沖積低地を形成しながら南流し、松前湾に流入する。松前湾は東端の白神岬と西端の弁天島の間を緩い弧で結ぶ。湾内は水深が浅いうえに、多くの岩礁が点在し、字唐津の潮間帯では海食台も見られる。松前三湊の一つ福山湊は、城下町に面する湾の西端側に位置し、伝治沢川河口の大潤（大泊潤）、大松前川河口の大松前潤、小松前川河口の小松前潤、唐津内沢川河口の唐津内潤等に船着き場があった。

松前町周辺の基盤岩は先第三系の松前層群である。それを不整合に覆う新第三系が広く分布し、中新世の福山層、国縫層はグリーンタフ変動と関係する。福山層は上部と下部に区分されており、上部の主体をなす凝灰岩（流紋岩質溶結凝灰岩を伴う流紋岩凝灰岩）は淡緑色灰色を呈するものが多い（秦ほか1990）。一方、5万分1地質図『松前』を見ると、下部の主部を占める安山岩溶岩及び同質火砕

岩は、大松前川と唐津内沢川に挟まれた潮間帯に海食台として露岩する。なお、福山城から北北東へ約1km、福山層上部が分布する大松前川右岸側に、神明石切り場跡が立地する（松前町2009）。ここから切り出された緑色凝灰岩は、安政元年（1854）に竣工した福山城の石垣石に用いられた。

松前半島周辺で金鉱脈は発見されていないが、大千軒岳に源を発する知内川流域を中心に砂金が採取されている。元和～寛永年間（1615～43）には、松前町南東部の大沢川、福島町南部の曾津己（旧礼髭村）を皮切りに、知内川流域、さらには東西両蝦夷地で砂金採取が本格化した。また、松前町南西部の赤神川上流では鉛が産出する。明和4年（1767）には赤神村の鉛山が良好であるという報告（「福山秘府」金銀山之例）があるものの、天明年間（1781～89）には廃絶したようである。その後、文政12年（1829）～天保2年（1831）にかけて、鉛山の操業をめぐる記事が残されているが、実際に稼行されたかどうかは不明である。

福山城下町遺跡として周知されている範囲は、松前町字唐津、松城、福山（福山92-8・93-3を含む）の海岸沿いや河川沿いの低平地である（図Ⅱ-2）。今回の発掘区は、字唐津を通る道道松前港線のうち、町道唐津ヶ丘線との交差点西側から町道海岸通り4号線との交差点東側までの区間で、延長124mに及ぶ。標高は6.5m前後で、小松前川と唐津内沢川の間では標高が最も高く平坦である。唐津ヶ丘線との交差点から海岸線までの距離は約90mで、国指定史跡の松前氏城跡福山城跡は、同交差点から北東へ約400m、標高約25mの海岸段丘（「福山台地」）に立地する（上述のⅡ段丘）。発掘区のすぐ北側、松城小学校が建つ海岸段丘（「西館台地」）は標高約15mで（上述のⅢ段丘）、段丘崖によって発掘区の低平地と隔てられている。

2 歴史的環境

(1) 福山城下町の変遷

本節では福山城下町の変遷と構造について、『北海道近世史の研究』（榎森1982）・『松前町史』（松前町1984・1988）に依拠しながら概観する。福山城下町は、松前藩の福山館（福山城）を中心に建設された近世城下町である。城下町の建設は、慶長5年（1600）、福山（松前）の港町に程近い海岸段丘「福山台地」に、藩主松前氏の新たな拠点となる福山館を築くことから始まる。同11年に福山館が完成すると、それまでの拠点であった徳山館（大館）は廃止され、元和5年（1619）には徳山館周辺の寺院や町が福山城下へ移転される。なお、永正11年（1514）に蠣崎氏（後の松前氏）が上ノ国の勝山館より大館に移って以後、大館は徳山館に改称された。大館は道南十二館の一つで、15世紀中葉以降の松前における政治・軍事上の拠点であったが、山城であるうえに、すでに蝦夷地交易の拠点となっていた福山の港町とはやや距離があった。松前藩の経済的基盤は、幕府から認められた蝦夷地交易の独占権にあるので、海岸部の「福山台地」に城郭を移し、港町と密接に結び付くことによって、松前地・蝦夷地における政治・経済の拠点となる福山城下町が建設された。

初期の城下町は、福山館を中心にその北側に寺町が形成され、一部重臣の屋敷が館の周囲に配置されていたに過ぎなかったようである。上級家臣らは商場知行制によって直接商行為に携わるため、海岸沿いの低平地で町人と混住していた。寛文9年（1669）頃の町数は14で、浜沿いの通り町は東西12、13町程の広がりを持ち、家数は600～700軒（侍屋敷140～150軒、町屋敷540～550軒）を数える（『津軽一統志』巻第十）。なお、近江商人の進出は寛永年間（1624～44）に本格化する。

享保～延享年間（1716～48）になると、場所請負制の成立によって、上級家臣らは直接商行為に携わらなくなっていく。人口増加に伴い海岸沿いの低平地が過密化したこともあり、同所で町屋と混在していた上級家臣らの屋敷が台地上に移転し始める。その結果、台地は城郭・武家地・寺社地、低平

地は町人地という地区分けが進み、近世城下町の特徴である身分別居住が達成される。なお、城下町周縁部に足軽町が配置されるのもこの時期である。

城下の家数・人口は享保元年（1716）が726軒・3,775人、延享2年（1745）が1,017軒・4,833人、安永6年（1777）が1,448軒・6,004人、文化6年（1809）が2,135軒・7,084人と、右肩上がりに推移する。安永6年における城下町の範囲は、東西19町15間に広がり、39の町が存在していた。なお、松前地と蝦夷地全域の幕領化に伴い、松前藩は文化4年（1807）～文政4年（1821）の間、陸奥国伊達郡梁川に転封され、その間の松前には松前奉行所が置かれた。

(2) 福山城下町の構造

宝暦年間（1751～1763）に小玉貞良が描いた『松前屏風』や、文化3年（1806）制作の『松前市中地図』、文化年間（1804～1818）制作の『松前分間絵図』には、近世城下町としての景観を整えた福山城下町が描かれている。以下では、図Ⅱ-3を用いて城下町の構造を概観する。

城郭の福山館は、城下町の中央、「福山台地」に立地する平山城で、城郭をとりまく段丘崖が総郭の役割を果たす。段丘崖がない城郭の北側には寺院を集中させ、城郭背後の防衛を固めている。武家地は大松前川沿いの蔵町^⑬（丸数字は図Ⅱ-3の町名、以下同）の北側や神明町^⑫にもあるが、大半は西館・馬形・愛宕・生符^{にしだて まがと あたご いげっぶ}の台地に集中し、町人地と比べて広い敷地を有する。西館・馬形にも寺院が集められ、武家地の防衛を固めている。城下周縁部に多いとされる寺社地、足軽町は、前者が上述したように福山館の北側や西館・馬形の武家地近くに集められ、後者は松前藩の足軽がきわめて少ないこともあり、城下町東縁部の東横町^②とトラメキ町^①に配置された程度である。なお、福山城下町における武士人口の割合は近世を通じて低く、文化3年（1806）は24.72%である。この値は一般的な近世城下町の半分程度にとどまる。

町人地は、海岸沿いや大松前川・小松前川・唐津内沢川沿いなどの低平地に密集し、海岸沿いの町屋は街村状に展開する。商人町の中心は、福山館大手門の直下で沖ノ口役所のある小松前町^⑭、その東西の大松前町^⑮、枝ヶ崎町^⑰、唐津内町^⑱である。これらの町の海岸には、船着き場や荷揚げ場があり、通りには問屋・場所請負人の店が並ぶなど、港町の景観を呈する。

城下に職人町は形成されなかったが、元禄～享保元年（1688～1716）頃には、大工・檜物屋・鍛冶屋（「松前蝦夷記」）等が存在した。天保元年（1830）頃になると、大工・木挽・左官・船大工・畳刺・石工・屋根師・曲師・鍛冶職・銅屋・桶屋・張替師・表具師・経師・塗師・合羽師・仕立職・衣師・袋物師・漆屋・染屋・焼継・佛師等、職種が多岐にわたっている（榎森1982）。

(3) 唐津内町の変遷

発掘区の所在地は松前町字唐津である。字唐津は、昭和15年7月の町名改正及び大字の廃止と字地番の改正によって、福山町から松前町へと町名が改正されたのと同時に、大字唐津内町、大字西館町の一部、大字湯殿沢町の一部、大字唐津内沢町の一部が統合されて成立した。

小松前川と唐津内沢川に挟まれた字唐津の海岸部は、近世に唐津内町とよばれた町人地である。史料上の初出は『津軽一統志』で、寛文9年（1669）頃における城下の町名の一つとして、唐津内町が挙げられている。口絵8上半には、宝暦年間（1751～1763）に制作された『松前屏風』のうち、唐津内町周辺を掲載した。向かって右の河川が小松前川、左の河川が唐津内沢川である。屏風から当時の唐津内町の様子をうかがうと、松前港線の前身である福山街道の両脇に漆喰壁の町屋が立ち並び、小松前川右岸の町屋には、近江商人の大和屋「①」、沢屋「全」の暖簾が見られる。浜には、緑色凝灰

岩とみられる土台石の上に漆喰壁の蔵が数軒建つ。入江状の海岸線は澗を表現しているのかもしれない。なお、大和屋の出店開設年代は、寛永15年（1638）頃である。

文化年間（1804～1818）制作の『松前分間絵図』（口絵8下半）では、海岸に沿ってのびる街道（福山街道）の両脇が町人地として黄色く塗り潰されている。背後の「西館台地」には、東から「蠣崎時松」、「松前勇馬」、「蠣崎将監」という重臣の武家地がある。同台地の屋敷地は、城郭に近い比較的最早い時期に設置されたようである。屋敷地の奥には赤色で表された寺社地がある。街道から「西館台地」へと延びる坂道のうち、小松前川から西に2本目の坂道が町道海岸通り4号線の延長部分、3本目の坂道が町道唐津ヶ丘線（交差点より北側部分）の前身とみられ、発掘区は両者に挟まれた街道とその周辺に位置する。唐津内沢川に架かる橋付近には、「橋キハヨリ廣小路百十二間」（口絵8の「百十三間」は誤転記）と記されていることから、唐津ヶ丘線は「広小路」と呼ばれていたことがわかる。小松前川河口の小松前澗、唐津内沢川河口の唐津内澗には、岩礁（海食台）に設置された係留杭が見られる。なお、唐津内町の家数・人口は、文化6年（1809）の時点で142軒・518人を数える。

弘化4年（1847）に松前を訪れた松浦武四郎は、唐津内町について、「仲買、小宿、請負人にし伊達、山田、山杣等有町並美々敷立并たり。南西海ニ面し船懸り澗有。上の方大夫松前内記、蛸崎蔵人邸宅有。」、同町背後の西館町について、「番人支配人多し。此処ニ大夫蛸崎将監新に屋敷を築き給う。市中の木蔵多し、うしろの方は皆墓所。其うしろに到りては畑計也」（『蝦夷日誌』巻之一）と記す。なお、後述する「明治26～27年の福山町見取り図」（以下、「見取り図」）には、発掘区西側交差点の南東側（「広小路」南端の東側）に「伊達屋」がある（図Ⅱ-4上半）。伊達屋（当主は伊達林右衛門）は寛政8年（1796）にマシケの場所請負人となり、天保年間（1831～45）には、ハママシケ、マシケ、北蝦夷地（栖原屋と共同経営）の各場所を経営した大商人である。

唐津内町における明治元年までの火災記事として、①貞享2年（1685）6月26日、②宝永6年（1709）3月21日、③享保9年（1724）9月5日、④天保4年（1833）7月28日、⑤明治元年（1868）11月5日の5件が知られている（『松前町史』1984・1988）。宝永6年は罹災人家蔵等214戸、享保9年は罹災19戸、天保4年は唐津内町西側を焼き、被災家屋79戸と記録されている。明治元年の火災は、福山城をめぐる攻防戦の末、旧幕府脱走軍に敗れて退却する松前藩兵の放火によるもので、城下町の3分の2を焼失し、唐津内町は全焼した。

明治・大正時代における発掘区周辺の様子については、昭和38年に鎌倉兼助氏からの聞き書きによって作成された明治26～27年（1893～94）の「見取り図」と、大正7年（1918）の「地籍図」をもとに述べる。表Ⅱ-1には、現在の地番と上記の図に見える町屋等の名称や旧地番を対照させて示した。

図Ⅱ-4上半は、明治26～27年の「見取り図」に発掘区を重ねたものである。それによると、発掘区西側の交差点より北西側の区画（A地区）には女竈・木材店が、東西2つの交差点に挟まれた北側の区画（B地区）には田川米店・許勢仁七・耶蘇教会・小松屋本店・伊達屋支配人・山田合羽屋・連絡船長・藤田・宮川菓子屋が、発掘区西側の交差点より南西側の区画（C地区）には米屋・大工が、東西2つの交差点に挟まれた南側の区画（D地区等）には伊達屋・関谷酒造・山本古物屋・瀬戸物屋・笠木屋が、発掘区東側の交差点より南東側の区画（E地区）には大滝屋・村山二三郎（呉）の町屋が軒を連ねる。

『北海道實業人名録完』（以下、『人名録』）の「福山港並附近実業人名」（明治26年10月時点）には、唐津内町の実業家18名が掲載されている。発掘区内では、B地区の地番89（旧地番13）に「荒物砂糖商・武田勇作」の名前が見える。ただし『見取り図』を見ると、前者の敷地は「耶蘇教会」となっている。なお、番地の記載はないが、『人名録』の「酒造業・関谷重兵衛」は、『見取り図』の「関谷酒造」（D

地区の地番15-1~3〔旧地番47-1・2〕とみられる。

図Ⅱ-4の下半は大正7年の「地籍図」に発掘区を重ねたものである。それによると、A・B・E地区はいずれも宅地で、C地区の18-1~3・32は分筆されておらず、地目は宅地(四五ノ一)と畑(四五ノ二)である。D地区とその東西側は、15-1~3の一部が分筆されておらず地目は畑(四七ノ二)、14-1・2も分筆されておらず地目は畑(四八)である。36(四九ノ三)、37(四九ノ四)も地目は畑で、それ以外の地番は宅地である。

(4) 過去の発掘調査

松前港線改良工事に伴う福山城下町遺跡の発掘調査は、松前町教育委員会(以下、町教委)によって、平成17~19年度に字松城の旧小松前町、同18年度に字福山の旧大松前町、字唐津の旧唐津内町、同26年度に字福山の旧大松前町と枝ヶ崎町で実施されている。また、町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴い、同22年度に当センターが字福山の蔵町で調査を行っている。このほか、弘前大学による学術目的調査が、同29年度に字豊岡の正行寺北側で、同30年度に字松城の旧小松前町で行われている。なお、弘前大学による字豊岡の調査は遺跡の範囲外であるが、城下町を構成する「馬形台地」の武家地であることから、本項で触れる。以下では、近世の町ごとに過去の発掘調査を概観する。

ア 旧唐津内町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成18年度に行われた。「H・Iブロック」(図Ⅱ-2のd)では、江戸後期頃の大きな掘り込みや、土蔵土台石の掘り込み地業が検出された。後者については、掘り込みに岩盤屑とロームが交互に版築されており、「松前の江戸期特有の積み上げ地業」と評されている。出土した陶磁器は16世紀末から幕末までのもので、特に幕末に近い肥前産の陶磁器が多いという(町教委2008)。なお、「H・Iブロック」(SP1760~1800)は今回の発掘区(SP1636~1760)東側に隣接する。

イ 旧小松前町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成17~19年度に行われた。平成17年度に調査された「B地区」(図Ⅱ-2のa)では、天神坂に通じる道路跡のローム層や、土蔵の漆喰とみられる残骸等が検出されている。遺物は同年度に調査した福山城沖之口坂にあたる「A地区」(図Ⅱ-2のk)出土のものと一緒に報告されており、陶磁器以外に瓦の出土が多かったようである(町教委2006)。

平成18年度は、「B~Gブロック」(図Ⅱ-2のc)が調査された。「Bブロック」では木製開渠と土留板が検出され、開渠側板の一方にはゴロタ石が敷かれる。「Cブロック」では隣地境界の土留石や木製暗渠等が検出され、暗渠側板の下には栗石が敷き詰められる。「Dブロック」では幕末・明治の敷地境界石垣、土台石の可能性のある石列、木製開渠等、「Eブロック」では敷石のある開渠遺構、複数の土留石垣等、「Fブロック」では、幕末・明治の土蔵の土台石垣の根石、明治以降の石列等が検出された。「Gブロック」では、天保以降の火災面、幕末・明治の建物の土台石(もしくは道路の縁石)と敷石が検出された。土台石の下には幕末の道路面と思われるロームが堆積する。これらの地区から出土した陶磁器は、16世紀末から幕末までのものがあり、肥前産が多いとされる(町教委2008)。

平成19年度に調査された「Jブロック」(図Ⅱ-2のe)では、幕末・明治の礎石が検出された。礎石は店前の雨よけ庇の土台であった可能性があるという(町教委2008)。

弘前大学による学術目的調査は、平成30年度に旧小松前町の一部(図Ⅱ-2のh)で行われた。調査の結果、18世紀前葉頃の火災面と17世紀前葉頃の火災面が検出された。前者の火災は、享保4(1719)年か同14年(1729)のどちらかである可能性が高いようで、火災の後片づけのために掘られた土坑か

ら、緑褐釉刷毛目文大鉢がまとまって出土している。このほか、胎土目積の唐津焼小皿2枚が合わせ口の状態で出土しており、近世初期の地鎮遺構と考えられている（弘前大学2019）。

ウ 旧大松前町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成18・26年度に行われた。平成18年度に調査された「Aブロック」（図Ⅱ-2のb）では、近世後期の石垣遺構（土台石の隅石）が検出されている。大松前町の火災記事は幾つかあるが、その痕跡が見られず、近世後期の盛り土が主体であることから、度重なる水害によって、それ以前の生活面が削平された可能性が指摘されている（町教委2008）。

平成26年度は、旧大松前町から旧枝ヶ崎町に至る256mの区間が調査された。（図Ⅱ-2のg）旧大松前町にあたる町道中町線から町道蔵町線にかけての範囲では、遺構は検出されていない。遺物は陶磁器、瓦、金属製品等が報告されている（町教委2015）。

エ 旧枝ヶ崎町

松前港線改良工事に伴う発掘調査が、町教委によって平成26年度に行われた（図Ⅱ-2のg）。調査は同年度の旧大松前町における調査と一連のものである。調査の結果、町道蔵町線以東の「1～2地区」で石列、「5～6地区」で石垣、「6～7地区」で土蔵土台石2基と開渠遺構が検出されている。遺物は陶磁器、瓦、金属製品、ガラス玉等が報告されている（町教委2015）。

オ 旧蔵町

町道朝日豊岡線代行事業改良工事に伴う発掘調査が、当センターによって平成22年度に行われた（図Ⅱ-2のf）。調査の結果、蔵2棟・溝5条・礎石列17列・掘立柱列1列・井戸5基・埋設樽（桶）8基・木柵1組・柵1基・石組2か所・配石2か所・礫集中8か所・土坑5基・炉7か所・灰集中1か所が検出された。遺構の年代は18世紀後半～19世紀中葉が主体で、特徴的なものを以下に幾つか挙げる。「蔵2」は土台に石垣を用いており、在地産とみられる緑色凝灰岩の切石が2、3段隙間なく積み重ねられる。井戸柵は底のない結桶を積み重ねたものが多いが、「井戸2」には隅柱を縦板で囲った木柵が用いられる。「炉1」は石廟の屋根（笏谷石製）を裏返して炉床としたもので、銅や鉄の小鍛冶が行われたと考えられる。

遺物の大部分を占める陶磁器は、18世紀後半～19世紀中葉を主に、16世紀後葉～17世紀前葉に遡るものもある。特徴的な遺物として、鏡、簪、筭、毛抜、鬢盤、油壺、紅皿といった装身具や化粧道具が目につく。蔵町は倉庫や遊郭が多いところと伝えられており、検出された蔵の石垣や装身具・化粧道具の多さなどは、それを裏付けるものと考えられる（北埋調報290）。

カ 「馬形台地」

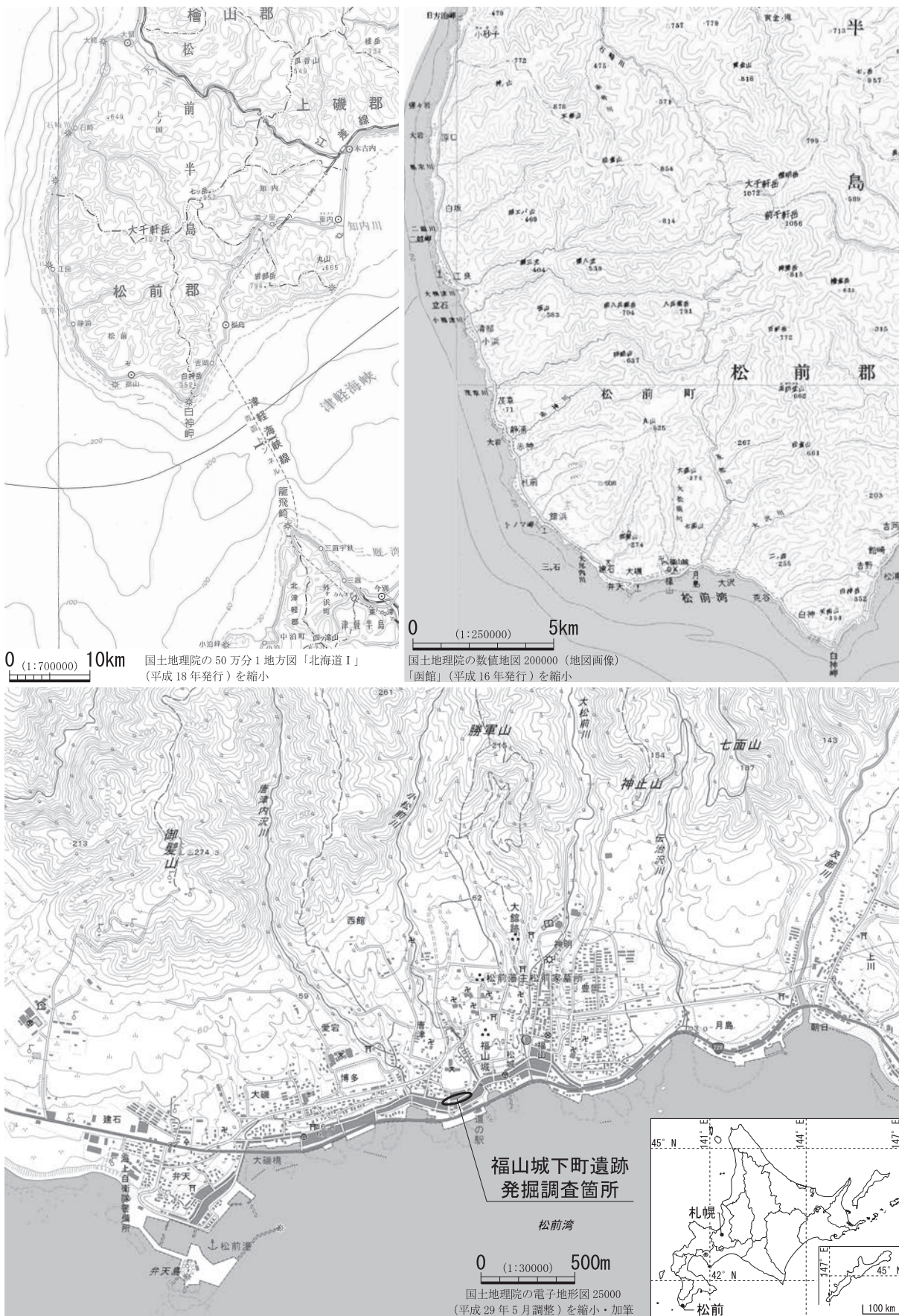
字豊岡の正行寺北側（図Ⅱ-2のi）で、弘前大学による学術目的調査が平成29年度に行われた。調査地点は武家屋敷と正行寺の墓地とに挟まれた空閑地であったようで、19世紀中葉の墓1基、江戸後期・幕末の廃棄土坑等が検出されている。遺物は表土・攪乱や廃棄土坑から得られたものが大部分を占め、「土坑3」では19世紀前葉から中葉の陶磁器を中心とする遺物が大量に出土している。特徴的な遺物として、コンプラ瓶、オランダ産の銅板転写軟質磁器、ガラス玉14点等がある（弘前大学2018）。

（山中）

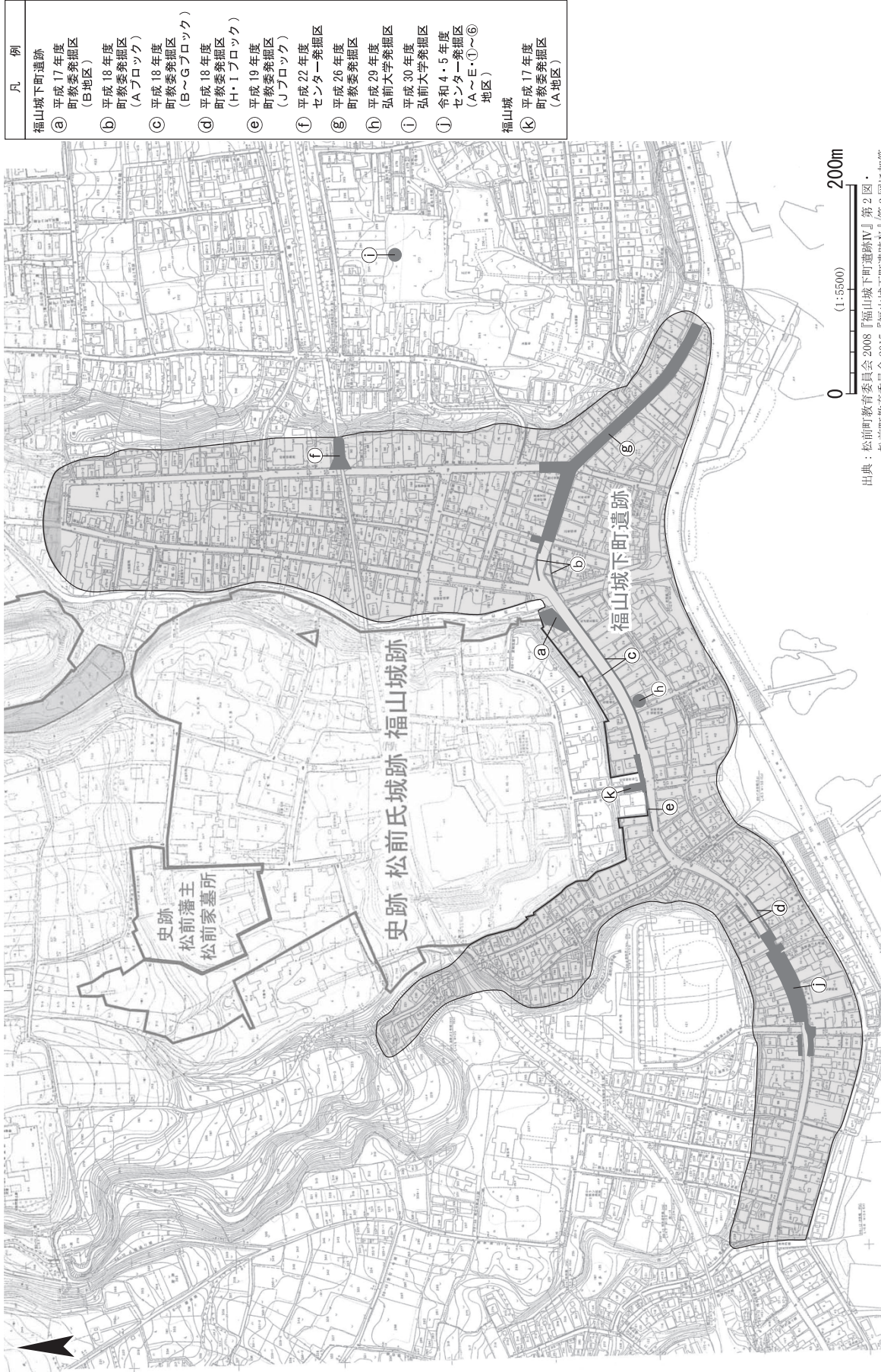
(5) 松前町の遺跡

北海道教育委員会が公開している「埋蔵文化財包蔵地数」（『北の遺跡案内』北海道教育委員会HP）によると、松前町では令和5（2023）年4月現在、122か所の遺跡が登録されている（表Ⅱ-3、図Ⅱ-5）。ここでは擦文文化期・中世・近世に関する遺跡を表と図で掲載するにとどめる。

（新家）



図II-1 遺跡位置図



図Ⅱ-2 福山城下町遺跡の範囲と発掘区的位置

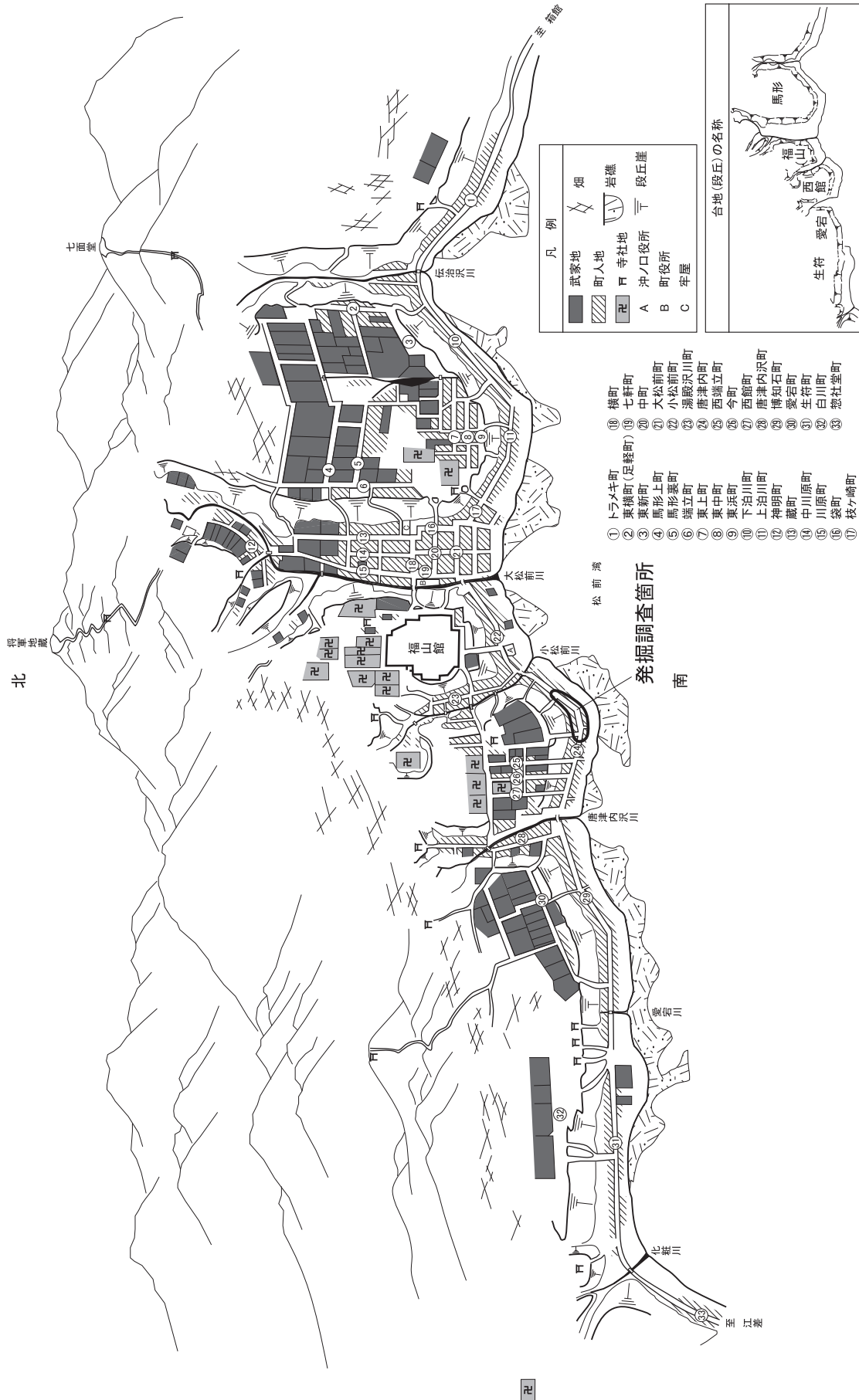


図 II-3 文化年間の福山城下町



図Ⅱ-4 「明治26～27年福山町見取り図」・大正7年「地籍図」



図II-5 松前町の遺跡

表Ⅱ-1 発掘区地番対照表

地区	平成28年「基図」	大正7年「地籍図」		明治26～27年「見取り図」	明治26年
	地番(字唐津)	地番(大字唐津内町)	地目	店名・人名等	『北海道實業人名録』完
E	10-5	51	宅	村山二三郎(呉)	
E	11-6	50	宅	大滝屋	
E	11-8	50	宅	大滝屋	
⑥	12	49-1	宅	笠木屋 瀬戸物屋	
D	13	49-2	宅	笠木屋 瀬戸物屋	
D	14-1	48	畑	山本古物屋	
D	15-2	47-1	宅	山本古物屋 関谷酒造	福山唐津内町 酒造業 関谷重兵衛
④	15-3	47-1・47-2	宅・畑	関谷酒造	福山唐津内町 酒造業 関谷重兵衛
④	17-2	46-1	宅	伊達屋	
C・③	18-1	45-1・45-2	宅・畑	大工	
C	19	44-3	宅	米屋	
B	85-2	10-1	宅	宮川菓子屋 藤田	
B	85-3	10-1	宅	藤田 連絡船長	
B	86	10-2	宅	山田合羽屋	
B	87	11	宅	山田合羽屋 伊達屋支配人	
B	88	12	宅	小松屋本店	
B	89	13	宅	耶蘇教会	福山唐津内町13番地 荒物砂糖商 武田勇作
B	90	14	宅	許勢仁七	
B	91	15	宅	田川米店	
B	92-1	15	宅	田川米店	
A	93-2	17	宅	越後木材 今与衛門	
A	94	17	宅	女竈	

表Ⅱ-2 福山城下町遺跡発掘調査歴一覧表

調査年度 (西暦)	字唐津	字松城	字福山			字豊岡	調査目的 (開発事業名)	調査面積 (㎡)	調査主体者
	旧唐津内町	旧小松前町	旧枝ヶ崎町	旧大松前町	旧蔵町	正行寺北側			
平成17 (2005)		○					記録保存調査 (松前港線改良工事)	260	松前町教育委員会
平成18 (2006)	○	○		○			記録保存調査 (松前港線改良工事)	790	松前町教育委員会
平成19 (2007)		○					記録保存調査 (松前港線改良工事)	60	松前町教育委員会
平成22 (2010)					○		記録保存調査 (町道朝日豊岡線代行事業改良工事)	277	(公財)北海道埋蔵文化財センター
平成26 (2014)			○	○			記録保存調査 (松前港線改良工事)	5,070	松前町教育委員会
平成29 (2017)						○	学術目的調査	50	弘前大学
平成30 (2018)		○					学術目的調査	36	弘前大学
令和4 (2022)	○						記録保存調査 (松前港線改良工事)	531	(公財)北海道埋蔵文化財センター
令和5 (2023)	○						記録保存調査 (松前港線改良工事)	854	(公財)北海道埋蔵文化財センター

表II-3 松前町の遺跡(擦文・中～近世)

登載 番号 (B-02)	遺跡名	所在地 (松前町字)	立地	時代	種別	調査西暦年 と調査主体者
7	上川遺跡	上川1、2、4、17～27、 762、763、朝日500～ 505	砂丘	縄文(晩期)、中世、近 世	遺物包含地	1976町教委、 2019弘前大
8	東山遺跡	東山1～19、48～56、 91～125、224～246、 254～266、朝日330 ～396	海岸段丘(低～中位)上 舌状台地、及部川西岸	縄文(前・中期)、続縄 文、近世	集落跡	1999～2004町教委
9	松城遺跡	松城301～307、320、 329、340～352	海岸段丘(低位～中位)	縄文(前・中・後期)、近 世	集落跡	1990、1991、2003町 教委
14	大尽内遺跡	館浜	大尽内川(河口付近) 右岸の小砂丘上	縄文(晩期)、続縄文 (前半・後半期)、擦文	遺物包含地	1974町教委
24	静浦A遺跡	静浦267～274	海岸段丘	縄文(晩期)、続縄文 (前半期)、擦文	遺物包含地	
25	静浦B遺跡	静浦442～444	海岸段丘	縄文(後期)、擦文	遺物包含地	
29	福山城下町遺跡	唐津、松城、福山(福山 92-8、93-3を含む)	低位段丘面	近世	集落跡	2005～2007、2014、 2015町教委、 2018弘前大、 2011、2022、2023セ ンター
31	高野遺跡	高野104～122	海岸段丘	縄文(早・前・中・後・晩 期)、近世	墳墓	1973町教委 1981郷土資料館
34	弁天B遺跡	弁天193～195、199、 201～209、222～ 226	段丘縁辺	続縄文(前半期)、擦文	遺物包含地	
35	大館跡	神明、福山	東は、バッコ沢、西と南は 小館沢を挟んで福山台 地と対峙する台地上	中世	城館跡	
37	白坂遺跡	白坂215、216、221、 222、225	海岸段丘、緩斜面	縄文(早・前・中・後・晩 期)、続縄文、擦文	遺物包含地	1980～1982町教委
53	福山城	松城193ほか	台地	近世	城跡	1980、1983～1999、 2003～2007、2009～ 2011、2013～2016町 教委(計31回)
54	松前藩主松前家墓所	松城307、328、329、 330-13		近世		
58	静浦D遺跡	静浦362～364、373 ～381	海岸段丘	擦文	集落跡	
59	豊岡遺跡	豊岡9	海岸段丘	近世	集落跡	
67	江良B遺跡	江良858～863、916	海岸段丘	縄文(中期)、擦文	遺物包含地	
72	神明石切り場跡	神明194ほか	大松前川西岸にある沢 地	近世	製作跡(生産 地)	2006～2010町教委
74	清部A遺跡	高野408～410	海岸段丘	縄文(中期)、擦文	遺物包含地	
86	館浜B遺跡	館浜193～197	湯ノ沢川左岸	縄文(早期)、続縄文 (前半期)、擦文	遺物包含地	
88	館浜D遺跡	館浜286～300、302、 303	海岸段丘	縄文(前期)、擦文(後 半期)	遺物包含地	
105	札前D遺跡	札前309、355	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
107	札前第1地点遺跡	札前368、375	海岸段丘	縄文(前期)、擦文	集落跡	1984、1989、1991町 教委
111	清部D遺跡	高野493	傾斜地	縄文、擦文	遺物包含地	
113	清部F遺跡	小浜194～196、206 ～211	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
116	原口E遺跡	神山61、64～78	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
117	原口F遺跡	原口330	海岸段丘	擦文	遺物包含地	
119	大館遺跡	西館152～155、171、 福山303～311	大松前川支流の大館を 挟む河川敷	中世、近世	遺物包含地	2009町教委
120	バッコ沢牢屋跡遺跡	神明69、70、209～ 212、220	大松前川支流の河川 敷	中世、近世	集落跡	2009、2010町教委
121	日枝社通遺跡	神明71、121～128、 158～167、178、 196、212～219、294	大松前川とその支流 (通称バッコ沢)に挟ま れた舌状台地	縄文、近世	遺物包含地	2010町教委
122	館浜G遺跡	館浜505	海岸段丘	縄文(早・前期)、近世	遺物包含地	2012町教委

※北海道教育委員会「北の遺跡案内」「松前町属性データ」に加筆。

※調査主体者 町教委:松前町教育委員会、郷土資料館:松前町郷土資料館、弘前大:弘前大学

Ⅲ 調査の方法

1 発掘作業の方法

(1) 基準点等の設置

今回の調査では、平成28年2月に作成された北海道函館建設管理部の「松前港線（地交-86）工事実測実施設計委託平面図」を基図として使用した。座標系は平面直角座標第Ⅺ系である。

令和4・5年度とも、発掘調査に先立って発掘区周辺に仮設4級基準点（以下、基準点）を10箇所程度設置し、発掘区の外周とそこに含まれる各地番の筆界に測量鋏を打設した。基準点測量に使用した既知点は、1級基準点「H20-1-1」、3級基準点「H20-3-1」・「H20-3-2」の3点で、基準点の設置と発掘区の区画等は、トータルステーションを使用した。水準測量は一等水準点「第6370号」の標高を電子レベルで観測し、各基準点に取り付けた。以上の基準点等設置業務は、函館市の株式会社ノース技研に委託した。

(2) 発掘区の地区区分と地番

令和4年度は、字唐津を通る松前港線の歩道部分531m²を「A～E地区」に分けて調査した（図Ⅲ-1）。「A地区」は松前港線と唐津ヶ丘線との十字路交差点（以下、西側交差点）より北西側の区画で、地番93-2・94の南側が含まれる。「B地区」は西側交差点の北東側から地番85-2（無地番地との筆界線）までの区画で、地番85-2・85-3・86・87・88・89・90・91・92-1の南側が含まれる。「C地区」は西側交差点より南西側の区画で、地番18-1・19の北側が含まれる。「D地区」は西側交差点の南東側から松前港線と海岸通り4号線との丁字路交差点（以下、東側交差点）までのうち、地番13・14-1・15-2の北側を含む区画である。「E地区」は東側交差点より南東側の区画で、地番10-5・11-6・11-8が含まれる。

令和5年度は松前港線の車道部分を中心に、町道唐津ヶ丘線の一部と町道海岸通り4号線の一部、合わせて854m²を「1～6期」に分けて調査した（図Ⅲ-1）。この区分けは、松前港線の片側交互通行や町道の通行止めの際、発掘区周辺の交通に支障を来さないように設定した発掘調査の「順番」であるが、発掘区内における位置を表すために「①～⑥地区」と呼び替えて説明する。「①地区」は松前港線の中央線付近より北側の区画、「②地区」は西側交差点南東部の区画である。「③地区」は西側交差点南西部から発掘区西端までの区画で、地番18-1の北東端が含まれる。「④地区」は松前港線の中央線付近より南側の区画で、東端は海岸通り4号線の中央線延長上にあり、西端は地番17-1地先の西側で「②地区」に接する。地区内には地番15-3・17-2の北側が含まれる。「⑤地区」は松前港線の中央線付近より南側の区画のうち、海岸通り4号線の中央線延長上から発掘区東端までの区画で、地番10-5・11-6・11-8の北端が含まれる。「⑥地区」は海岸通り4号線下の区画で、地番12の北東部とその東側に接する細長い無地番地の西側が含まれる。

なお、①～⑥地区の道路は、⑥地区の海岸通り4号線にかかる地番12を除き、地番のない「無地番地」である。このため、地区内の位置は、付近の地番に「地先」という言葉を加えて表した。例えば、松前港線の北側車道部分にあたる①地区のうち、地番87に面する部分が「87地先」、同線の南側車道部分にあたる④地区のうち、地番14-1に面する部分が「14-1地先」である。

(3) 層 序

層序は地区・地番により異なるが、Ⅰ層が現代の道路造成土（主に路盤）、Ⅱ層が近現代の造成土、Ⅲ～Ⅵ層が近世以前の造成土で、Ⅶ層は自然堆積層が主体である。大局的に見ると、Ⅲ層は17世紀初頭～19世紀後半、Ⅳ層は16世紀後半～17世紀初頭、Ⅴ・Ⅵ層は15世紀～16世紀後半、Ⅶ層は16世紀後半以前の堆積物と推測される。地山は自然堆積の砂礫層で、灰黄褐色（10YR 4/2）を呈し、10cm程度の礫が目立つ。上面付近から擦文土器が出土する。浜側のC・D・③・④地区の一部では、砂礫層の上に、にぶい黄褐色（10YR 4/3）の細粒火山灰が堆積しており、分析の結果、白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）に対比された（付編Ⅰ-4）。同火山灰の年代は「AD946の冬」（奥野2018）とされる。

層相の記載にあたっては、『新版標準土色帖（26版）』（小山・竹原2004）の「土色」、『土壤調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロロジー学会編1997）の「粘着性」・「堅密度」を用いた。

(4) 発掘と記録

発掘区は字唐津を通る道道松前港線のうち、町道唐津ヶ丘線との交差点西側から町道海岸通り4号線との交差点東側までの区間で、延長124mに及ぶ。調査にあたって、発掘区の両脇にある住宅や店舗の出入りに支障を来さないよう、各地区を細かく分けて掘削するとともに、その周りをガードフェンスで仮囲いするなどの安全対策を講じた。掘削で生じた排土等は、発掘区周辺の民有地を数箇所借地して、そこに集積した。令和5年度の発掘区は、道道と2本の町道の車道部分であるため、前者は片側交互通行、後者は車両通行止めにして調査を実施した。片側交互通行範囲の両端等には、安全通行のため交通誘導警備員を24時間体制で配置した。

調査に先立ち、発掘区内のアスファルト舗装をコンクリートカッターで切断・除去し、次いで現代・近現代の造成土（Ⅰ・Ⅱ層）をバックホウで除去した。Ⅰ・Ⅱ層の厚さは、合わせて0.8～1m程度である。表土除去をはじめ、発掘調査に関する一連の工事は、令和4・5年度とも松前町の河野土建株式会社に委託した。

令和4年度のA～E地区では、地山の砂礫層が現れるまで調査を行った。令和5年度の①～⑥地区は、大部分が深さ80cmまでの調査であるが、集水桝等の設置予定箇所（図Ⅲ-1の斜線部分）は、深さ190cmまで調査を行った。調査対象である近世以前の造成土は、礫混じりで固く締まっており、ねじり鎌、ピッケル型の片手鋏、移植ゴテを使い分けて掘り下げた。深掘り部分では、壁面に法勾配を付けたり、アルミ矢板で土止めしたりして、安全を確保したうえで調査を進めた。

遺物の取上げは、出土層位と取上げ年月日を記録したうえで、本節（1）で述べた「基図」に表記されている地番ごとに行った。道路下で地番がない「無地番地」は、同（2）で述べたとおり、地番に「地先」を付けて取り上げた。なお、遺構に関連する遺物や特徴的な遺物には、出土地点を計測して取上げたものもある。

確認した遺構は適宜調査し、平面図と断面図または立面図を作成した。層序断面図は主に各地区の壁面で図化した。但し、深掘り部分の壁面には法勾配を付けているため、垂直の面を図化したものではない。遺構や層序の図化は、手実測、トータルステーション（以下、TS）による観測、写真計測を併用し、作図の際の基点をTSで記録した。なお、写真撮影に使用したカメラはニコンZ6Ⅱである。

(5) 遺構番号の付け方

今回の調査で検出した遺構は、礎石、石積、石列、柱、柵、杭、溝、炉、土坑、掘込、火事場整理穴等である。令和4年度のA～E地区で検出した遺構については、地区名を冠した上記の遺構に1か

ら始まる番号を付けて区別した。すなわち、B地区の礎石1は「B礎石1」、C地区の礎石1は「C礎石1」、C地区の土坑1は「C土坑1」、D地区の土坑1は「D土坑1」が遺構名となる。なお、遺物集中は地区・地番を冠して表し、D地区地番13の木製品集中は、「D13木製品集中」などとした。

令和5年度の①～⑥地区では、③地区（190cm掘削範囲）、④地区（190cm掘削範囲）、⑥地区で遺構を検出した。③地区はC地区に、④・⑥地区はD地区に隣接することから、これらの地区で検出した遺構はC・D地区で用いた遺構名の続き番号を付けることにした。具体的に説明すると、C地区の土坑は令和4年度に「8」まで使用していたので、③地区の土坑は「9」から番号を付け、「C土坑9」などとした。一方、D地区の土坑は「13」まで使用していたが、「10」が欠番となっていたので、④地区で検出した3基の土坑には「10・14・15」という番号を付け、「D土坑10」・「D土坑14」などとした。また、⑥地区の火事場整理穴は、「D火事場整理穴1」とし、同地区で検出した1か所の礎石には、D地区の礎石の続き番号を付け、「D礎石14」とした。

(山中)

2 整理作業の方法

土陶磁器類

現地では遺物の水洗・乾燥、分類、遺物カード・手台帳の作成、注記等の基礎的な整理作業（一次整理）を行った。注記は土陶磁器の色調に合わせ、白色と黒色のポスターカラーを使い分け、保護のため文字の上からラッカーを塗布した。注記項目は遺跡名の略称、字名、地区名、番地、層位、遺物番号で、注記例は以下のとおりである。

令和4年度

遺構出土：フカ・Aド2・フ：1 （遺跡字名・地区名遺構名（土坑）・層位：点取り遺物番号）

フカ・Dド3・フ・1 （遺跡字名・地区名遺構名（土坑）・層位・整理遺物番号）

包含層出土：フカ・D15-1・IV上：5 （遺跡字名・地区名番地・層位：点取り遺物番号）

フカ・B88・II・128 （遺跡字名・地区名番地・層位・整理遺物番号）

令和5年度

遺構出土：フ6カ・12ゴミ1・フ・20 （遺跡工期字名・地区名遺構名（ゴミ穴1）・層位・遺物番号）

包含層出土：フ3カ・18-1地・IV・60（遺跡工期字名・地区名（地先）・層位・遺物番号）

：フ2カ・カラ・III・40 （遺跡工期字名・地区名（町道唐津ヶ丘線）・層位・遺物番号）

なお、遺構の追加や遺構名の変更により、以下の地区・層位出土の遺物注記はそれぞれ読み替えが必要である。

B86区 IV層 → 遺構 B掘込2 覆土

B89区 ゴミ穴、沢 → 遺構 B掘込1 覆土

D13区 IV層の一部 → 遺構 D13 木製品集中

D13区 VI層 → 遺構 D掘込5 覆土

D13掘込2 → D掘込2A

D14-1掘込2 → D掘込2B

D14区 IV層の一部 → 遺構 D14-1 木製品集中

D15-2区 IV層上面・点取り → 遺構 D15-2 磁器片集中

E11-6・E11-8区 ゴミ穴 → 遺構 E掘込1 覆土
 第6期 12区 ゴミ穴1 覆土 → ⑥12 D火事場整理穴1 覆土
 第6期 12区 掘込 → ⑥12 D掘込6

台帳のデータ化と並行して接合復元作業を進めた。接着にはセメダインやアロンアルファを用い、さらに補強が必要な部分にはバイサムを使用した。大まかな分類等は鈴木第一調査部長が行い、不明な部分の土陶磁器鑑定を東京大学埋蔵文化財調査室、松前町教育委員会佐藤雄生氏に依頼・委託した。

木製品

水洗後、隔週ごとに水替えを行いながら、分類・台帳作成・掲載遺物の選定を進めた。まず（掲載遺物については実測・写真撮影・樹種同定を行ったのち）EDTA（エチレンジアミン四酢酸二ナトリウム）で2週間洗浄し、その後トレハロースに6週間含浸した。濃度を数段階で上げ、含浸温度を最高70℃まで上げた。風乾により結晶化を促進させながら乾燥させた後、スチームクリーナーによるクリーニングを数回行い表面の糖結晶を拭き取った。なお、漆製品・繊維製品の工程は上記とは異なり、最高液温を55℃に維持し、最終段階で一瞬高濃度にさらし、皮膜を生成した。

金属製品

ア) 出土～台帳作成

出土後、土を落として十分に乾燥させた後、分類・台帳作成・掲載遺物の選択を行った。

イ) 保存処理

遺物番号ごとに現況をデジタルカメラにより撮影し、受取順に金属処理番号（金No）を付し、金属処理台帳を作成した。台帳は鉄製品と非鉄製品に大きく分け、非鉄製品は銭、煙管とそれ以外に区分している。銭を除く報告書掲載遺物はほぼ全て、非掲載は一部エックス線撮影を行った。

保存処理は、脱塩→錆落とし→樹脂含浸の順で行った。詳細は、脱塩（鉄＝オートクレーブによる高温高圧脱塩・非鉄＝BTA／エタノール溶液の減圧含浸）→錆落とし（掲載遺物全て、非掲載非鉄製品の一部）→樹脂含浸（鉄＝NAD-10による含浸を3回・非鉄＝BTA、パラロイドB72／ソルベントナフサ溶液の減圧含浸を1回）である。鉄製品の掲載遺物は全て樹脂含浸による保存処理を行ったが、非掲載遺物は一部のみである。非鉄金属は全て保存処理を行っている。以下表にした。

表Ⅲ-1 金属製品処理作業項目

	鉄製品		非鉄製品	
	報告書掲載遺物	非掲載遺物	報告書掲載遺物	非掲載遺物
脱塩	○（オートクレーブ）		○（BTA／アルコール減圧含浸）	
錆落とし	○	×	○	×（一部○）
保存処理	○（NAD-10）	×	○（BTA／B72 SV溶液）	
収納	○（RPシステム）			

以上の処理を行ったのち、RPシステム（三菱ガス化学株式会社）により収納した。なお、鍛冶遺構等から出土した鍛冶関連遺物（鉄滓など）の分析をパリノサーヴェイに委託した（付編I-7）。

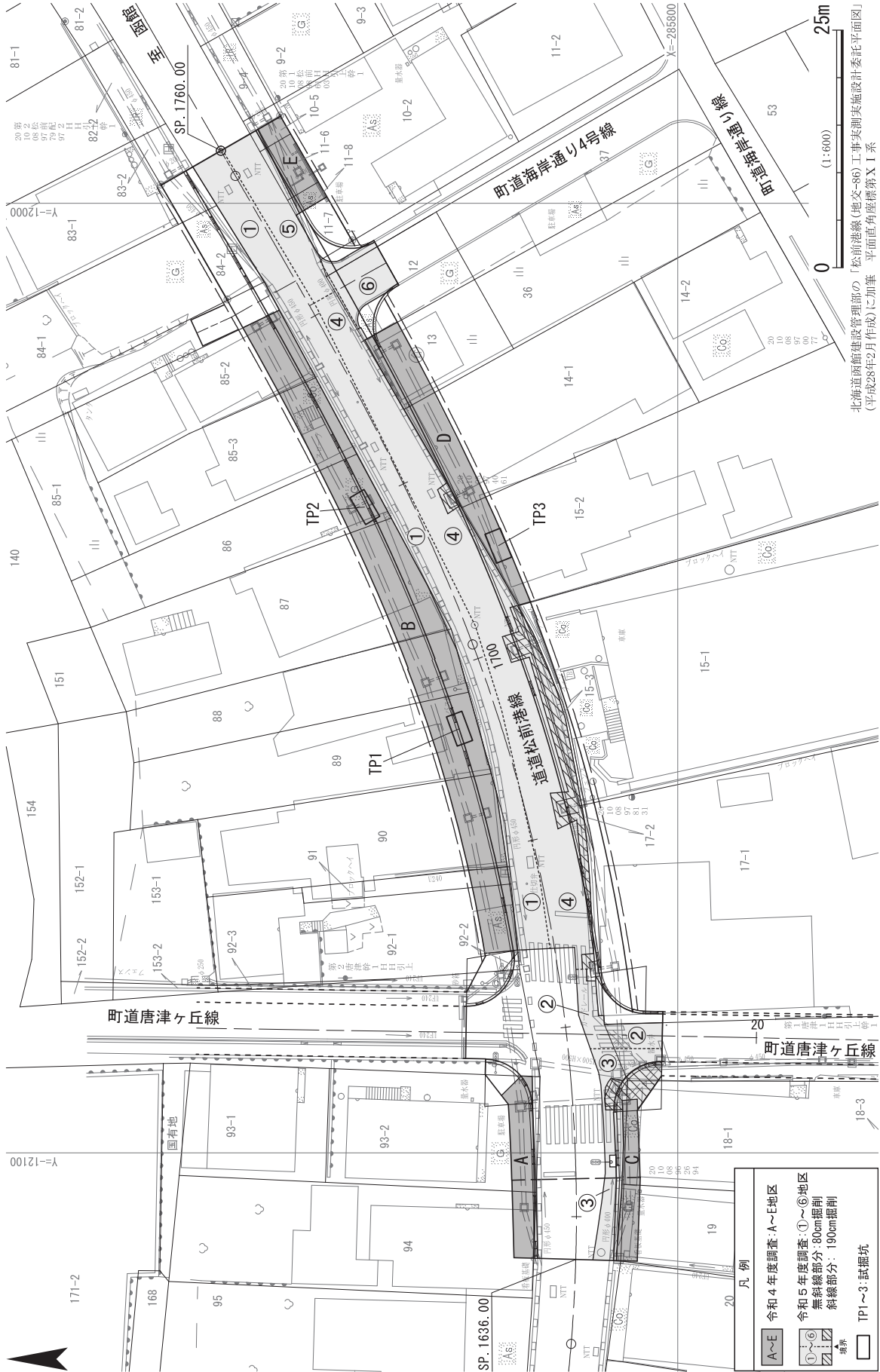
その他の遺物

骨角器・動物遺存体の同定・鑑定は令和4年度は1部2課土肥研晶、令和5年度は1部2課福井淳一が行った。出土人骨の取り上げ・保存・鑑定を新潟医療福祉大学に、人骨の年代測定およびC/N比

分析を(株)パレオ・ラボに委託した。ガラス玉の組成分析は奈良文化財研究所に依頼した。土壌中の珪藻分析をいしかり砂丘の風資料館に、坩堝付着物等の化学分析を国立科学博物館に、火山灰同定をアースサイエンスに依頼した（付編Ⅰ各節参照）。

整理作業終了後の遺物は、種別ごとに「掲載遺物」と「非掲載遺物」に大別し、分類ごと、地区ごとにコンテナにおさめ、「遺物収納台帳」を作成した。調査報告終了後の出土遺物は、北海道教育委員会の指示により松前町教育委員会に移管の予定である。

(新家)



図III-1 令和4・5年度福山城下町遺跡(字唐津)発掘区

IV 現地調査の状況

1 概要

令和4年度は、松前港線の歩道部分531m²（A～E地区）を調査した。検出した遺構は、石積1か所、礎石17か所、石列1条、柱1か所、柵1か所、炉3か所、溝1条、土坑23基、掘込8基、磁器片集中1か所、木製品集中2か所である。

令和5年度は、松前港線の車道部分を中心に、町道唐津ヶ丘線の一部と町道海岸通り4号線の一部、合わせて854m²（①～⑥地区）を調査した。検出した遺構は礎石1か所、土坑19基、火事場整理穴1基、掘込1基、全年度に調査した木製品集中のつづきが1か所である。現地調査における各地区の概要は以下のとおりである。

A地区

地番93-2で礎石1か所（A礎石1）、94で柱1か所（A柱1）と土坑2基（A土坑1・3）、93-2・94の境界で土坑1基（A土坑2）を検出した。

B地区

地番85-3で礎石1か所（B礎石1）、86で掘込1基（B掘込2）、89で掘込1基（B掘込1）を検出した。掘込はどちらも部分的な検出にとどまるが、上端の幅4～5m、深さ0.6～0.9mを測り、長軸は松前港線と直交する方向にのびるようである。掘込2の覆土から、舷側板の破片や漆塗椀が出土した。

C地区

地番18-1で礎石1か所（C礎石1）、19で礎石1か所（C礎石2）と土坑8基（C土坑1～8）を検出した。C土坑1・2は中心間距離が1.8mを測り、柱穴の可能性がある。C土坑3～8は、長径20～30cm台の土坑6基が密集し、一部に切り合いが見られる。

D地区

地番13では、Ⅲ層で石積1か所（D石積1）、礎石1か所（D礎石8）、土坑2基（D土坑8・11）を検出した。D石積1は、松前港線と直交する方向に割石が積み重ねられたものである。D土坑8は、

表IV-1 遺構数一覧表

地区	地番	石積	礎石	石列	柱	柵	炉	溝	土坑	掘込	火事場整理穴	磁器片集中	鍛冶関連遺物集中	木製品集中	立杭	合計
A	93-2		1													1
	93-2・94								1							1
	94				1				2							3
B	85-3		1													1
	86									1						1
	89									1						1
C	18-1		1													1
	19		1						8							9
D	13	1	1					1	3	2				1	3	12
	14-1		9			1	3		2	3			1	1	19	39
	15-2		3	1					7			1				12
E	11-6・8									1						1
	18-1								8							8
	18・18-1地先								1							1
	18-1地先								5							5
	18-1・無地番地								1							1
④	無地番地								1							1
	15-3地先								1							1
	17-2地先								2							2
⑥	12								1	1					3	
合計		1	18	1	1	1	3	1	42	9	1	1	1	2	22	104

*④14-1地先の木製品集中はD14-1木製品集中に含めた。

掘込面の位置から近代のものかもしれない。坑内には燻瓦が集積されていた。くぼ地に堆積するⅣ層からは、炉鉤、蓋、箸、編物糸受木、下駄、杭、薄板目板、樹皮巻、布等の木製品・繊維製品を中心に、陶器、土錘、小刀、釘、棒状鉄製品、銭（天聖元宝等）、骨角製の矢中柄等が出土した（D13木製品集中）。同層の年代は、陶器や小枝の放射性炭素年代（付編Ⅰ-1）から、16世紀後半～17世紀初頭と推測される。木製品集中の下には、上端の幅が約5m、深さが約0.9mの掘込（D掘込5）があり、B地区の掘込2基と形状・規模が類似する。D掘込5の覆土上位に相当するⅤ層からは、小札、釘、銭（治平通宝）、海獣骨、ウマの臼歯等が得られており、骨は掘込内の覆土にも多く見られる。このほか、Ⅳ層上面で溝1条、Ⅶ層でD掘込5、土坑1基（D土坑13）を検出した。なお、D掘込1・2Aは、近現代のものである。

地番14-1では、Ⅲ層で礎石8か所（D礎石4～7・9～11・13）、炉3か所（D炉1～3）、土坑2基（D土坑9・12）、掘込3か所（D掘込2B・3・4）、灰白色堆積物等の広がりを検出した。D炉1で得られた多数の薄板状鉄片は、分析の結果、ねずみ鑄鉄の破片であることが判明した（付編Ⅰ-7）。同炉は、ねずみ鑄鉄破片を脱炭し、鋼として再利用するための鍛冶炉と推測される。D炉2は炉1の約30cm下に位置する。灰層から出土した3点の埴塙は、それぞれ金の熔解、銀の熔解、銅合金のリサイクルに使用されたと推定されている（付編Ⅰ-8）。D炉1・2は、どちらも18世紀前葉のものともみられる。灰白色堆積物は、漆喰の可能性があるので蛍光X線分析を行ったが、漆喰に特徴的なカルシウムが検出されなかった。なお、D柵1は近現代のもので推測される。

沢状地形に堆積するⅣ層からは、板綴舟の舟敷片、櫂、捧酒箸、漆塗椀、曲物把手、杭、薄板目板、樹皮巻、縄等の木製品・繊維製品を中心に、陶磁器、釘、骨角製の矢中柄等が出土した（D14-1木製品集中）。陶磁器や小枝・クルミ殻の放射性炭素年代（付編Ⅰ-1・3）から、同層の年代は16世紀中葉～17世紀初頭と推測される。なお、Ⅳ層から採取した土壌について、珪藻分析を行っている（付編Ⅰ-5）。沢状地形外のⅣ層では、炉に伴うものではないが、羽口、鉄滓等が比較的まとまって出土した（D14-1鍛冶関連遺物集中）、一部の鉄滓を分析したところ、精練鍛冶滓、鍛錬鍛冶滓であることが判明した（付編Ⅰ-7）。

このほか、Ⅶ層で礎石1か所（D礎石12）、人骨の両下肢と右上肢の一部等を検出した。人骨については、放射性炭素年代と炭素・窒素安定同位体比を測定するとともに（付編Ⅰ-2）、年齢・性別等の人類学的所見を得ている（付編Ⅰ-12）。

地番15-2では、Ⅲ層で礎石2か所（D礎石1・2）、土坑7基（D土坑1～7）、Ⅳ層で礎石1か所（D礎石3）、Ⅶ層で石列1条（D石列1）を検出した。Ⅳ層上面（火災面）では、16世紀後葉とみられる中国産磁器（漳州窯系）の破片がまとまって出土した（D15-2磁器片集中）。伴出した唐津焼から、火災が起きた年代は17世紀前葉と推測される。

E地区

近現代に掘削された掘込（E掘込1）が大部分を占める。

①・④・⑤地区・②・③地区北部（松前港線車道分）

①・④・⑤地区・②・③地区北部は松前港線の車道部分にあたり、一部をのぞき深さ80cmまで掘削した。アスファルト舗装の下は、路盤（碎石等）、路床（暗褐色土）によって構成されており、通信ケーブルや配水管が帯状に敷設されている部分もあった。路床の暗褐色土には近世の陶磁器等も含まれるが、近現代のガラス片も散見される。なお、①84-2地先に残存する自然堆積の黒褐色土は、「西館台地」へと伸びていた坂道の東側にあたる部分であろう。また、⑤11地先の縁石付近では、深さ80cmでローム層の一部を検出したため、その下位に近世の造成土が残存する可能性がある。

④14-1 地先にある190cm掘削部分では、標高約5m以下に堆積するIV層から、刀子の鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。この部分は、舟敷片等が出土したD14-1木製品集中の北西側にあたる。木製品のほかには、唐津焼、中国産磁器、小刀、骨角製の矢中柄、ウマの頭蓋骨、クジラの尾椎骨等が得られている。

④15-3 地先、④15-3 地先・17-2 地先にある2箇所の190cm掘削部分では、旧福山街道の造成土を確認した。造成土は厚さ30~40cmを測り、礫を多量に含む。このほか④17-2 地先等で、街道造成以前の土坑3基（D土坑10・14・15）を検出した。

②・③地区南部（唐津ヶ丘線）

唐津ヶ丘線の80cm掘削部分のうち、②地区南部では、標高5.2m付近に広がる焼土粒や炭の混じる土層から、17世紀後葉の陶磁器、寛永通宝等が出土している。一方の③地区南部は、側溝施工の際に攪乱を受けており、深さ80cmで近世の造成土は確認されなかった。

唐津ヶ丘線と松前港線との交差点南西側にある③地区の190cm掘削部分では、地番18-1を中心に土坑16基（C土坑9~24）を検出した。土坑には長径50~60cmの楕円形や、長径20cm以下の柱穴状・杭状のものなどがあり、覆土から珠洲焼の破片が出土している。

⑥地区（海岸通り4号線）

地番12では、褐色ローム層の上下で火災の痕跡を検出した。同層の直下にある19世紀後半の火事場整理穴（D火事場整理穴1）からは、陶磁器、瓦、金属製品、石製品、礫等が大量に出土したものの、海岸通り4号線部分は掘削深度が80cmであるため、調査は穴の上面付近にとどまる。このほか、ローム層よりも下位で礎石1か所（D礎石14）を検出した。なお、12の東側に隣接する無地番地は、電柱の支線等による攪乱を受けており、深さ80cmで近世の造成土は確認されなかった。

2 A地区

層序

A-B A93-2 南東側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲa層とⅣa層はロームが主体の張土で、それぞれが一時期の地表面であった可能性が高い。地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。

C-D A93-2 西側の断面で、向きは松前港線と直交する。I層は現代の造成土、II層は近現代の造成土である。Ⅲ層上面のⅢ1層・Ⅲ1'層はローム主体で、この面からA土坑2が掘り込まれる。IV1層とIV2層は、浜側へ傾斜する地形を平坦にするための造成土とみられる。地山砂礫層は台地側で約4.9m、浜側で約4.4mを測る。

E-F A94北側の断面で、向きは松前港線と平行する。I層は現代の造成土、II層は近現代の造成土である。II2層は焼土塊と炭化物を多量に含んでおり、近現代の火災跡とみられる。Ⅲ1層はローム主体の張土で「A-B」のⅢa、「C-D」のⅢ1層に相当する。地山砂礫層の標高は約4.7mを測る。

遺構

A礎石1 A93-2のⅢ層で検出した。掘込に張られたロームに大形の凝灰岩がのる。

A柱1 A94のⅢ層で検出した。柱は地山砂礫層に張ったロームに据えられており、根元には根固めの礫がまとまる。形状は角柱状で、長さ45cm、直径14cmを測るが、腐朽が著しい。掘方は確認されなかった。

A土坑1 A94のⅢ層上面から掘り込まれる。坑内に大きさ10~15cmの礫が集中する。

A土坑2 A93-2・94のⅢ層上部で検出した。上部には大きさ20~25cmの扁平礫がやや重なって置かれ、その下に大きさ10cm前後の礫がまとまる。下位の覆土2層には大きさ5cm前後の礫が多く

含まれる。礫と覆土は鉄分の沈着により固結している。

A土坑3 A94の地山砂礫層で検出した。Ⅲ層で検出したA土坑1の下位に位置する。

3 B・①地区

層序

A-B B85-2北東側の断面で、向きは松前港線と平行する。1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。3は砂質の黒色土である。地山砂礫層から漸変しており、自然堆積であろう。後述する「K-L」の黒色土に連続すると推測される。地山砂礫層の標高は約5.5mを測る。

C-D B85-2・85-3の断面で、向きは松前港線と平行する。Iは現代の造成土、1は近現代造成土のⅡ層に相当する。2は自然堆積の黒色土とみられ、「A-B」の3に類似する。地山砂礫層の標高は約5.4mを測る。

E-F B85-3・86の断面で、向きは松前港線と平行するI層は現代の造成土で、1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。B掘込2の覆土は5つに分かれ、覆土から漆塗椀2点と舷側板の破片1点が出土している。7は砂質の黒色土で、自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は地番85-3で約5.2m、86で約5.1mを測る。

G-H B89の断面で、向きは松前港線と平行する。Iは現代の造成土で、1~10は近現代造成土のⅡ層に相当する。B掘込1の覆土は5つに分かれる。12・13は砂質の黒褐色土・黒色土で自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は東側で約4.9m、西側で約5.1mを測る。

I-J B90の断面で、向きは松前港線と平行する。I層は現代の造成土である。1・8・14はロームの張土で、6・12は焼土粒が目立つことから火災に関連すると考えられる。15は砂質の黒褐色土で自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は約5.0mを測る。

K-L ①84-2地先の断面である。アスファルト舗装の下は、厚さ約60cmの路盤碎石層である。1の黒色土はK-Lの周囲でしか見られない。地山砂礫層から漸変しており、自然堆積と考えられる。地山砂礫層の標高は約5.5mを測る。1に類似する黒色土は、地番85-2のA-B等でも検出されている。昭和30年代に撮影された写真（図版1上）等によると、A-B~K-Lの間は「西館台地」へのびる坂道があった場所であることから、K-Lの黒色土は、削平された坂道の東脇付近と推測される。この坂道は『松前分間絵図』（口絵8下）で見ると、小松前川から西へ2本目の坂道にあたる。

遺構

B礎石1 B85-3で検出した。地山砂礫層から漸変した黒色土に大形の凝灰岩が据えられる。

B掘込1 B89に位置する。上端・下端の幅は広いところで前者が5.8m、後者が4.6mを測り、底面はおおむね平坦である。北側は攪乱を受けていたが、松前港線と直交する方向にのびるようである。

B掘込2 B86に位置する。上端の幅5.9m、下端の幅4.3mを測り、底面はほぼ平坦である。B掘込1と断面の規模・形状が類似しており、両者は同種の遺構と考えられる。覆土から漆塗椀2点と舷側板の破片1点（木4）が出土している。漆塗椀のうち1点は、木質部が腐朽しており、塗膜だけが残存する（写真図版3の4段目中央）。もう1点（木3）は内側に円形の蓋（木5）を伴う。

4 C・②・③地区

層序

A-B C18-1北東側の断面で、向きは松前港線と平行する。I層は現代の造成土、1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。3~11は近世以前の造成土で、3はロームの張土である。9は1~

5 cmの砂利を多く含み、C礎石1が据えられる。12・13は地山砂礫層から漸変した黒褐色～暗褐色土である。地山砂礫層の標高は約4.2mを測る。遺物は3～8をⅢ層、9～11をⅣ層、12・13をⅤ層として取り上げた。

C-D C19北東側の断面で、向きは松前港線と直交する。Ⅰ層は現代の造成土である。1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。4には2 cm以下の砂利が多く含まれる。地山砂礫層の標高は約3.9mを測る。遺物は3・4をⅢ層、5をⅣ層、6をⅤ層、7をⅥ層として取り上げた。

E-F C19南側中央の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅰ層は現代の造成土である。1・2は近現代造成土のⅡ層に相当する。3～7は近世以前の造成土で、3はロームの張土である。4は0.5～1 cmの砂利を多く含み、C礎石2が据えられる。7には微細な焼土粒やローム粒を多く含む。8は砂質の黒褐色土、9は暗褐色砂である。遺物は3～5をⅢ層、6・7をⅣ層、8をⅤ層、9をⅥ層として取り上げた。

G-H ②地区唐津ヶ丘線下（無地番地）の断面で、向きは同線と平行する。アスファルト舗装の下には路盤の碎石、路床の黒褐色土が堆積しており、後者から出土した遺物をⅡ層として取り上げた。標高5.2m付近に堆積する1の黒褐色土は、上面等に焼土粒・炭が目立ち、火災に関連すると考えられる。2は攪乱より南側では褐色のロームであるが、北側では黒褐色土と混在する。3は砂質の黒褐色土で、焼土粒・炭を含む。4は褐色のローム層である。遺物は陶磁器、釘、古寛永通宝等が出土しており、1～3をⅢ層として取り上げた。出土した陶磁器等から、1の火災は17世紀後葉頃に起きた可能性がある。

I-J ③18-1地先の断面で、向きは松前港線と平行する。最上位の碎石は道路側溝に伴うものである。1は礫を多量に含む黒褐色土で、2との層界に鉄盤層が形成されている。2は暗褐色土である。上面からC土坑23・24が掘り込まれ、後者の底面は地山砂礫層に達する。両者とも覆土にローム粒を含む。3は黒褐色土、4・5は砂、6はB-Tmの上に生成された黒褐色土である。地山砂礫層の標高は約4.1mを測る。遺物は1をⅢ層、2～6をⅣ層として取り上げた。なお、③地区のⅣ層はC地区のⅣ～Ⅴ層に相当する。

遺 構

C礎石1 C18-1で検出した。A-Bの9に据えられる。

C礎石2 C19で検出した。E-Fの4に据えられる。

C土坑1・2 C19の黒褐色土上面（C-Dの5・E-Fの8）で検出した。どちらも同じ程度の大きさで、平面は略円形を呈する。覆土は埋戻しとみられ、ロームと砂が混在し、焼土粒・炭化物粒を含む。両者の中心間距離は1.8mを測ることから、柱穴と考えられる。底面で検出した礫は根固めに用いられた可能性がある。

C土坑3～8 C19のB-Tm上面で、土坑6基のまとまりを検出した。いずれも長径20～30cm台であるが、4と6がやや深い。4は5に、6は7に切られる。覆土は黒褐色または黒褐色でローム粒を含む。検出状況が後述するC土坑9～24と類似する。

C土坑9～24 ③18-1の北東端を中心に、B-Tm上面等で土坑16基のまとまりを検出した。B-Tmからの深さはいずれも10cm程度以内であるが、I-JにかかるC土坑23・24のように、2の下から掘り込まれたと推測される。大きさは、20cm以下のもの（9・12・15・18・19・21・22）、20～40cm程度のもの（13・14・20・23・24）、40cm以上のもの（10・11・16・17）に分けられる。20の底面には、礎盤石とみられる直径約20cmの扁平礫が据えられる。覆土はいずれも砂質の黒褐色土であるが、17にはローム塊が含まれる。11と12の覆土から珠洲焼の破片が出土している。

5 D・④・⑥地区

層序 (D13・④13地先)

E-F D13から14-1 東側にかけての断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲbの褐色ローム層から下を手掘りで調査した。14-1 側のⅢb層は間に褐灰色土を挟む。Ⅲ2層は近世の造成土で、石積1等を検出した。14-1 側では薄い砂礫層を挟んで上下に分かれる。Ⅳ層は黒褐色の粘土で、D掘込5の上にあたる部分から木製品を中心とする遺物が多く出土した (D13木製品集中)。Ⅴ層との層界には鉄盤層が形成される。Ⅴ層はD掘込5の覆土上位に相当し、小札、釘、銭 (治平通宝)、海獣骨、ウマの臼歯等が出土した。Ⅴ礫層はD掘込5の掘上げ土の可能性もある。Ⅴ1層は貝殻片・骨片を多く含む。Ⅵ層は20cm以下の礫を多く含む造成土である。

G-H D13東壁の断面で、向きは松前港線と直交する。標高5.7m付近に堆積するⅢ上面ロームから下を手掘りで調査した。D土坑8はⅢ上面ロームより上から掘り込まれている。Ⅲ層は近世の造成土で、間に砂利層を挟む。Ⅳ層の黒褐色粘土からは、E-Fでも述べたように、木製品が多く出土した。層中には焼土の薄層や骨片の集中する部分が見られる。D掘込5の底面は浜側に向かってやや傾斜する。

W-X ④13地先の松前港線中央付近の断面で、向きは松前港線と平行する。アスファルト舗装の下は碎石と砂の路盤で、1は路床の灰黄褐色土である。2は褐色ロームで、3の暗褐色土を覆う。4は砂である。

遺構 (D13)

D石積1 Ⅲ層で検出した。石積は北側と南側に分かれているが、西側のツラがほぼ揃うことなどから、一連のものとして扱った。現存長は約2.3mを測り、南側はD掘込2によって失われているが、北側は松前港線の車道部分に向かってややのびる可能性がある。北側は凝灰岩の割石が2段、南側は緑色凝灰岩と安山岩の割石が2段に積まれている。安山岩の割石は、南側南端の上下2個である。北側の上端はおおむね同じ高さであるが、南側は浜へと傾斜する地形に沿って石が積まれるため、上端が傾く。石積の無い中央部から南側の石積の東側にかけて、Ⅲ層に10cm以下の垂角礫が集中する。北側の石積のすぐ横には、長軸を縦にした大形礫が据えられており、この部分の割石とc-d2段目の割石が石積のツラよりややずれている。なお、石積下のⅣ層上面で浅いくぼみを確認した。くぼみの内側や外側の所々には薄い焼土や炭が見られることから、くぼみが形成されたのちに火事があり、その後造成土 (Ⅲ層) と石積が施工されたと考えられる。くぼみの西端は断面E-Fの13と14-1の地境付近に及ぶ。Ⅳ層上面では、このくぼみとよく似た浅い溝状のくぼみ (D溝1) も検出されている。

D溝1 D石積1 東側のⅢ層を掘り下げていたところ、石積と平行する帯状の礫集中を検出した。礫は約10cm以下の垂角礫が主体である。Ⅳ層上面で、礫集中の下に浅い溝を検出したことから、帯状の礫集中は、溝を埋める際に形成されたようである。溝の内側は全体が炭で覆われる。

D礎石8 D石積1の端から約30cm南西側のⅢ層で検出した。周囲には15cm以下の礫がめぐる。地番14-1のD礎石6・7と直線上に並んでおり、隣接するD礎石7との中心間距離が1.8mであることから、これらと同一建物の礎石と考えられる。図はD礎石6・7と一緒に示す。

D土坑8 Ⅲ上面ロームとほぼ同じ高さで、割れた燻瓦のまとまりを確認した。瓦のほとんどは板瓦である。まとまりの外側にはⅢ上面ロームを切る輪郭が観察されたため、瓦は土坑内に集積されたものと判断した。土坑の約半分は発掘区外にある。坑内の南側では、数枚の瓦が重なって出土しており、坑底には2枚の瓦が敷かれていた。D土坑8の掘込み面は、調査を開始したⅢ上面ロームより約20cm高い位置にあり、掘削時期は近代の可能性もある。

D土坑11 III層で検出した柱穴状の土坑である。覆土中に大形礫3点がまとまっていた。

D土坑13 底面に炭の薄層が堆積する皿状の土坑である。B-Tm上面よりやや上のVII層から掘込まれている。約半分が法尻の奥にある。

D掘込1 覆土にガラス片やビニール片が含まれていたため、近現代のものと判断した。D掘込2Aを切る。

D掘込2A 当初は地番13~14-1にまたがるD掘込2として調査していたが、壁面を養生する土のう袋を撤去した際に、断面Q-RのIII上面ロームより上から掘り込まれていること、地境から14-1側には40cm弱しかはみ出さないことがわかった。このため、D掘込2を地番13が主体の「D掘込2A」、後述する地番14-1東側が主体の「D掘込2B」に分離した。D掘込2Aは近現代に掘削されたもので、D掘込2Bを切り、D掘込1に切られる。

D掘込5 北側から東側が発掘区外にあり、南側はD掘込1により失われている。形状や規模が不明な部分もあるが、西壁と底面の一部のほか、断面E-Fで両側の立ち上がりを確認した。同断面における上端の幅は約5.2m、下端の幅は約4.3mを測る。底面はE-F間が平坦で、G-H間がやや浜側に傾斜する。壁の立ち上がりは急で、VII層に相当する黒褐色土(VII')やローム(VII'')から掘り込まれる。覆土からは獣骨の出土が目立ち、底面に張られたロームの下から珠洲焼、擦文土器が出土している。また、覆土上位に相当するV層からも、小札、釘、銭(治平通宝)、海獣骨、ウマの臼歯等が得られている。B掘込1・2は、形状や規模がD掘込5と類似することから、関連する遺構の可能性もある。

D13木製品集中 IV層の黒褐色粘土から、炉鉤、蓋、箸、編物糸受木、下駄、杭、薄板目板、樹皮巻、布等の木製品・繊維製品を中心に、陶器、土錘、鉄釘、小刀、銭(天聖元宝等)、骨角製の矢中柄等が出土した。集中範囲の下にD掘込5が位置することから、木製品等は掘込が埋没する過程で生じたくぼ地に集積されたと考えられる。集中の西側に立杭3本、東側に薄い焼土や灰の集中が見られた。IV層の年代は、陶器や小枝の放射性炭素年代(付編I-1)から、16世紀後半~17世紀初頭と推測される。

層序(D14-1)

I-J D14-1東側の断面で、向きは松前港線と直交する。III1・III2は近世の造成土で、両者の間にあるIII砂利はD炉2の下に敷かれた砂利に連続する。IV2'は下位の段差を埋めるように堆積した造成土で、鉄滓等が出土している。V1は貝殻片・骨片を多く含む。VIロームは台地側からせり出す大形礫の集積(VI)やB-Tmの上に堆積する黒褐色土(VII)を覆う。地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。なお、火山灰(B-Tm)同定の試料は断面I-Jから採取した(付編I-4)。

K-L D14-1東側の断面で、向きは松前港線と直交する。台地側(L側)にはE-F間にのびるIIIbロームの端が見られる。D礎石4はD掘込3覆土の上に据えられる。3・4はIII層に相当し、浜側(E側)にはD炉2に敷かれたロームと砂利がつづく。5上面(標高約5.0m)には炭が広がっており、それより下位の6~8で出土した遺物はIV層として取り上げた。7(標高約4.8m)は炭が主体で、下位の8からは羽口片や鉄滓等の鍛冶関連遺物が多く出土した。これらはIV2層として取り上げたものがある。9は砂礫を多く含む造成土が台地側からせり出しており、VII(10~12)と人骨が出土した掘込を覆う。10~12は砂または砂質の堆積物で自然堆積のように見受けられる。間にB-Tmを挟む。人骨を伴う掘込は、VII上面の10から掘削される。地山砂礫層の標高は約4.3mを測り、浜側にやや傾斜する。

M-N D14-1中央部の断面で、向きは松前港線と直交する。D掘込3により、M側(浜側)は地山砂礫層以下まで掘削されている。III2は近世の造成土、IVは焼土粒を含む黒褐色粘土で、K-LのIV上面に連続する。Vの灰黄褐色土は、S-Tの沢状地形掘込に堆積するVと同一とみられる。VIIは

砂質の黒褐色土である。地山砂礫層の標高は約4.4mを測る。

O-P D14-1 西側の断面で、向きは松前港線と直交する。ア～オは灰白色土やロームで、Ⅲ1の黒色土に切られる。Ⅲ2a・bは近世の造成土で、Ⅲ2cは小砂利層である。Ⅳ層は沢状地形を埋める黒色土で、木製品を中心とする遺物が多数出土した（D14-1 木製品集中）。カより下位では砂質土に変化していき、凸レンズ状の砂層を数枚挟む。沢状地形であるため、地山砂礫層の標高は周囲より低く、約3.7mを測る。なお、珪藻分析に用いた土壌は、Ⅳ層のD1～5で採取した（付編I-5）。このうち、D5は舟敷片の底に付着していた土壌を試料としたもので、土層断面から採取したものではない。

Q-R D14-1 南西側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲ1の黒色土とD炉3がD掘込3に切られる。D炉3が形成されたⅢ2aの上面には小礫がやや目立つ。

S-T D14-1 北西側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅲは近世の造成土で、中位に砂利層を挟む。Ⅳは沢状地形を埋める黒褐色～黒色土で、木製品を中心とする遺物が多数出土した（D14-1 木製品集中）。Ⅳ2はⅣ1に比べて砂質で、Ⅴとの層界に鉄盤層が形成されている。S-TのⅤ層からは遺物が出土していない。なお、沢状地形は元々存在したと思われるが、肩にあたる部分が掘り込まれていること、Ⅶの上にいる堤状の砂礫層が地形の維持に関与していることから、同地形は人工的に形成・維持されていた可能性がある。

遺 構 (D14-1・④14-1 地先)

D14-1 灰白色堆積物 D14-1 西側のⅢ層掘り下げ中に、灰白色の堆積物やロームの広がりを検出した。これらは建物の漆喰壁や土壁の可能性があるので、範囲等を記録した。D掘込3や攪乱によって失われている部分もあるが、断面O-P・Q-Rにも見られることから、さらに南西側へと伸びようである。堆積物の上面にはD礎石10が、直下にはD礎石11が位置し、前者は堆積物の上面を掘り込んで設置される。なお、灰白色堆積物について蛍光X線分析を行ったが、漆喰に特徴的なカルシウムが検出されなかった。

D礎石4・13 Ⅲ上面ロームの直下で検出した。両者の中心間距離は1.8mを測り、どちらもD掘込3の上に位置する。

D礎石5 D礎石4の上面から約30cm下のⅢ層で、焼土やロームに一部が覆われた状態で検出した。当初は礎石と考えていたが、ほぼ同じ高さで検出したD炉1の金床石の可能性があるので、D炉1等と合わせて図示した。

D礎石6～8 Ⅲ層で検出した。松前港線に沿って並ぶ3個の礎石で、三者の中心間距離は1.8mを測る。D礎石6・7は地番14-1、D礎石8は地番13に位置し、後者の上面は前者より約5cm低い。D礎石6・8の周りには15cm以下の礫がめぐる。

D礎石9 Ⅲ層で検出した。列をなす礎石はないが、礎石10・11と上面標高が近い。

D礎石10 Ⅲ層の灰白色堆積物を掘り込んで割石が設置される。上面はロームで覆われる。

D礎石11 Ⅲ層の灰白色堆積物直下で検出した。

D礎石12 自然堆積とみられるⅦ層の黒褐色土に設置される。

D炉1 D14-1 東側のⅢ層を掘り下げ中、焼土を含むロームの広がりを検出した。トレンチを入れて堆積状況を観察したところ、ロームの下で焼土と黒色灰を確認した。黒色灰の上面には薄板状の鉄片がまとまっていたことから、鍛冶炉の可能性があると判断した。炉は皿状に浅く掘りくぼめられており、黒色灰が全体に広がる。南端はD掘込2Bの掘削で失われている。断面は1が炉を埋めるローム、2が焼土、3が黒色灰、4が灰黄褐色灰である。2の焼土はロームを含み軟らかい。遺物は板状の凝

灰岩片や肥前系陶器等が2付近にまとまっていた。2～4の土壌を採取して水洗選別したところ、薄片状鉄片、羽口片等が得られている。薄片状鉄片（図版40）は、分析によってねずみ鑄鉄破片と判断され、D炉1では鑄鉄破片を脱炭して鋼としていた可能性が指摘されている（付編I-7）。

D炉2 D炉1の約30cm下で検出した。D土坑12の掘削により大部分が失われている。炉の周りにはロームが張られており、その下には砂利が敷かれる。焼土の上に堆積する灰層からは埴塙が3点出土し、灰を水洗選別したところ、釘や骨片等が回収された。3点の埴塙は、それぞれ金の熔解、銀の熔解、銅合金のリサイクルに使用され、未水洗の灰からも金粒子、銀粒子、銅粒子が得られている（付編I-8）。

D炉3 Ⅲ層で検出した。D掘込3の掘削で大部分が失われている。灰層を伴う。

D土坑9 D炉1に隣接する皿状の土坑である。覆土2はにぶい黄橙色の粘土である。

D土坑12 D炉2の灰層やローム・砂利を切って掘削される。掘込2の掘削で南側の上部が失われていた。

D掘込2B・4 Ⅲ上面ロームの直下で検出した。D掘込2Bは、D掘込2から分離した地番14-1側の掘込である。上位にはロームや砂礫を切る別の掘込があり、D掘込4として区別した。D掘込4の平面形、およびD掘込2Bと3との切り合い関係は、壁面の崩落により確認できなかった。D掘込2BはD掘込2Aに切られる。

D掘込3 Ⅲ上面ロームの直下で検出した。覆土は4層に分かれる。覆土1上面は砂・炭が多く、焼土粒を含む。遺物が比較的まとまって出土した。壁面の崩落により、D掘込2Bとの切り合い関係を確認できなかった。

D14-1 鍛冶関連遺物集中 D14-1東側のⅣ層（Ⅳ2・Ⅳ2'層を含む）で、羽口片や鉄滓等が比較的まとまって出土した。いずれも造成土中に廃棄されたものと考えられる。主な遺物について出土地点を計測して取上げ、分布図を作成した。出土地点を計測しないで取上げたものを合わせると、集中付近から出土した遺物は、羽口片7点、鉄滓38点、鑿1点、釘1点、青磁片2点を数える。

D14-1 木製品集中（④14-1 地先を含む）

D14-1西側の沢状地形に堆積するⅣ層から、板綴舟の舟敷片、櫂、捧酒箸、漆塗椀、曲物把手、杭、薄椗目板、樹皮巻、縄等の木製品・繊維製品を中心に、陶磁器、釘、骨角製の矢中柄等が出土した。Ⅳ層の層厚は約1.5mを測る。木製品は標高4.8m付近より下位から出土したものがほとんどで、舟敷片を挟んだ上下で特に多い。同層からはアワビの貝殻も多く出土する。Ⅳ層上位にあたる標高4.8m前後では、絵唐津等の陶器が目立ち、完形に近いものも得られている。舟敷は長軸両端と一方の舷側が欠損していた。舟敷西端側の直下から舟材の一部が、舟敷中央南側の下から縄が出土している。

令和5年度に調査した④14-1地先にある190cm掘削部分でも、Ⅳ層から刀の鞘、曲物、箸、杭等の木製品が出土した。この部分は、D14-1で検出された沢状地形の北西側にあたる。木製品のほかには、唐津焼、中国産磁器、小刀、骨角製の矢中柄、ウマの頭蓋骨、クジラの尾椎骨等が得られている。

Ⅳ層の年代は、陶磁器や小枝・クルミ殻の放射性炭素年代（付編I-1・3）から、16世紀中葉～17世紀初頭と推測される。なお、④14-1地先のⅣ層上位からは、17世紀後半の仏飯器（図V-13-a181）、1636～1659年鑄造の古寛永通宝（図V-44-75）が出土した。これらの遺物からみると、沢状地形がⅢ層に覆われる時期は17世紀後半となるが、D14-1のⅣ層では17世紀後半の遺物がないことから、④14-1地先の仏飯器、古寛永通宝は混入の可能性がある。

D14-1 人骨出土状況 D14-1東側の掘削で生じた法尻付近で、膝関節が強く屈曲した人骨左下肢が出土した。地表からの深さは約2mを測る。写真撮影後に左下肢を取上げたところ、壁面の内部

にも骨が見られたため、改めてその周囲を精査した。その結果、人骨はB-Tmを切る深さ30cmほどの浅い掘込内にあり、掘込の上は造成土で覆われていることがわかった（断面K-L）。後日、地番14-1中央～西側を掘り下げた際に、B-Tm上面で右下肢の膝関節が強く屈曲した人骨の一部と不整形の掘込を検出した。掘込の覆土は砂質の黒褐色土で、10cm以下の礫を含む。新潟医療福祉大学の澤田純明氏のご教示によると、出土状況図を作成した人骨の部位は、右の骨盤から下肢、右の肘付近から掌の一部ということである。掘込は造成土下のⅦ層から掘削されているので、16世紀のものと推測される。人骨については、放射性炭素年代と炭素・窒素安定同位体比を測定するとともに（付編I-2）、年齢・性別等の人類学的所見を得ている（付編I-12）。

D柵 1 D14-1西側のⅢ層掘り下げ中に検出した。支柱には柄穴のある柱が転用されており、柱の底はⅣ層中に据えられる。横木は松前港線と直交する方向にのびる。周囲には立杭が1本ある。当初はⅢ層の遺構と思われたが、後に近現代の攪乱内に設置されていることがわかった。参考資料として掲載した。

層序 (D15-2)

U-V D15-2北側の断面で、向きは松前港線と平行する。Ⅱ層は近現代の造成土で、Ⅲロームから下を近世以前の造成土として調査した。Ⅳ層上面（標高4.9m前後）は炭や焼土が広がる火災面で、そこから中国産磁器（漳州窯系）の破片がまとまって出土している。Ⅶ層に含まれるシルト粒はB-Tmと思われる。地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。

遺構 (D15-2)

D礎石 1・2 D15-2のⅢ層で、松前港線に平行する礎石を2か所検出した。どちらも上面がやや南に傾く。礎石同士の間距離は1.8mを測り、列をなすと考えられる。2は割石である。

D礎石 3 D15-2のⅣ層で検出した。Ⅳ層上面の火災面より下に位置する。

D石列 1 D15-2のⅦ層で、複数の大形礫が並ぶ状況を確認した。大形礫のうち地面と接する3個の礫は、長軸を南南西-北北東に向けて並べられており、現在の松前港線と平行する。石列は北北東側へさらにのびると予想される。Ⅶ層にはB-Tmとみられるシルトが所々に見られる。

D土坑 1～7 D15-2のⅣ層上面で検出した。いずれも火災後に掘削されたものである。D土坑1は断面の様子から柱穴の可能性がある。D土坑2は発掘区の壁面付近で検出した。壁面に残る上部の断面を見ると、本土坑は漏斗状を呈し、掘込面をⅢロームで覆われる。覆土4で出土した有孔礫は、坑外にはみ出ていたため、Ⅳ層の遺物かもしれない。D土坑3は試掘坑（TP1）の掘削で南側が失われている。D土坑4・5は形状が楕円形もしくは隅丸方形に近い。どちらも覆土から金属製品が出土した。D土坑6は断面の様子や底面の礫のまとまりから、柱穴の可能性がある。D土坑7は柱穴状である。

D15-2 磁器片集中 D15-2のⅣ層上面（火災面）で、中国産磁器（漳州窯系）の破片約200点がまとまって出土した。磁器片に混じって、唐津焼1点、焜炉片11点、煙管雁首1点、釘3点も得られている。これらの遺物はD15-2の中央部で出土したが、断面U-Vの西側、Ⅳ層上面がややくぼんだ部分で特に集中していた。接合作業の結果、磁器片は20個体程度の碗に復元された。接合関係（図IV-22・23）は、5mほど離れた東西の破片がよく接合するなど、広範囲にわたるものが多く、集中の西側だけ、東側だけで接合するものは少ない。漳州窯系磁器は16世紀後葉のものとみられるが、伴出した唐津焼から、火災が起きた時期は17世紀前葉と推測される。

層序 (④15-3地先・17-2地先)

A-B ④15-3地先の断面で、向きは松前港線と直交する。1・5は黒色土である。6は砂礫を多

く含み、上位に大形礫が集中する。7には水成堆積とみられるシルトの薄層が2、3枚挟在する。地山砂礫層の標高は約4.4mを測る。A-Bの平面上の位置からみて、6より上位は福山街道の造成土で、1・5の黒色土は踏み付けにより形成された可能性もある。遺物は1～6をⅢ層、7以下をⅣ層として取り上げた。なお、④地区のⅢ層はD地区のⅢ～Ⅵ層に、Ⅳ層はD地区のⅦ層に相当する。

C-D ④15-3地先・17-2地先の断面で、向きは松前港線と平行する。1はローム塊を多く含む黒褐色土で、2・2'は砂礫を多く含む。3はローム粒を多く含む灰黄褐色土で、砂礫をほとんど含まない。4はローム粒を多く含む黒褐色土で、上位に20cm程度以下の礫が目立つ。D土坑15は4から掘り込まれる。5の黒褐色土は自然堆積とみられ、地山砂礫層の標高は約4.3mを測る。C-Dの平面上の位置からみて、砂礫を多く含む2・2'は福山街道の造成土で、1は踏み付けにより形成された可能性もある。3は街道の造成土かどうか、現時点では判然としない。遺物は1・2・2'をⅢ層、3～5をⅣ層で取り上げた。なお、④地区のⅢ層はD地区のⅢ～Ⅵ層に、Ⅳ層はD地区のⅦ層に相当する。

E-F ④17-2地先の断面で、向きは松前港線と直交する。1は標高5.0m付近に堆積する黒褐色土で、C-Dの1とは連続しない。2はC-Dの2よりも砂礫が少ない。4からD土坑10が掘り込まれる。

遺構 (④15-3地先・17-2地先)

D土坑10・14・15 ④15-3地先・17-2地先にまたがる190cm掘削部分で、土坑3基のまとまりを検出した。いずれも福山街道の造成土より下の4から掘り込まれている。D土坑10は3基のうち最も大型であるが、半分以上が法面の下にある。D土坑14は底面で礎盤石とみられる扁平礫が出土した。D土坑15は柱穴状である。

層序 (⑥12)

A-B ⑥12の発掘区西壁の断面である。1は近現代の造成土、2～7は皿状のくぼみを版築で平坦にしており、くぼみの中央には別の版築a～dが施工される。9は焼土粒や炭を含んだ砂で、皿状にくぼむ。くぼみの中央部には10cm程度の角礫等が集中する。12は厚さ約10cmの褐色ロームである。上面は被熱により赤色化していることから、火災があったと判断される。皿状にくぼんでいるため、上面の標高は5.6～5.8mを測る。12の直下では火事場整理の穴が検出されており、覆土の陥没によってくぼみが生じたと考えられる。12直下の火災は、穴から出土した陶磁器より、19世紀後半に発生したと推測される。遺物は1～11をⅡ層、12上面で焼土粒に紛れて出土したものをⅢ層上面、14・15をⅢ層、13を火事場整理穴の覆土として取り上げた。

C-D ⑥12の発掘区南壁の断面で、向きは海岸通り4号線と直交する。上部は碎石層が大部分を占めるが、南西端側(D側)ではA-Bから連続する1・3～5・7が残存する。12の褐色ロームはA-Bと異なり水平であることから、火事場整理穴の中心からはずれていると予想される。被熱により赤色化した上面は標高約5.8mを測る。13は火事場整理穴の覆土で、焼けた砂と細礫のまとまり(13')も見られた。

遺構 (⑥12)

D礎石14 ⑥12の松前港線側に位置する。周囲の土層はロームと黒褐色土との版築である。なお、1の上面は標高約5.8mを測り、被熱による赤色化と炭の薄層が見られる。断面A-Bのうち、12上面の火災面に連続する可能性が高い。

D火事場整理穴1 ⑥12に堆積する褐色ロームの直下で検出した。直径は4mを超えるようで、穴の南～西部は調査範囲外にのびる。内部には焼けた砂や礫が目立ち、遺物は陶磁器、瓦、金属製品、石製品等が大量に出土している。遺物の多くが焼けていることから、火事場整理の穴と判断した。掘削時期は、出土した陶磁器等から19世紀後半と推測される。なお、唐津ヶ丘線下の⑥地区は、掘削深度

が80cmに制限されているため、調査は穴の上面付近にとどまる。

D掘込 6 ⑥12に位置する。覆土にガラス片等が含まれることから、近現代のものと判断した。

6 E・⑤地区

層 序

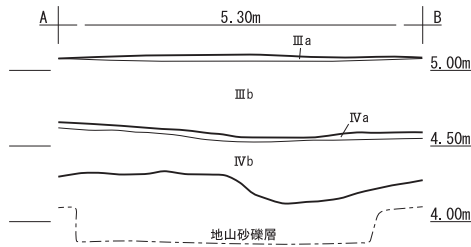
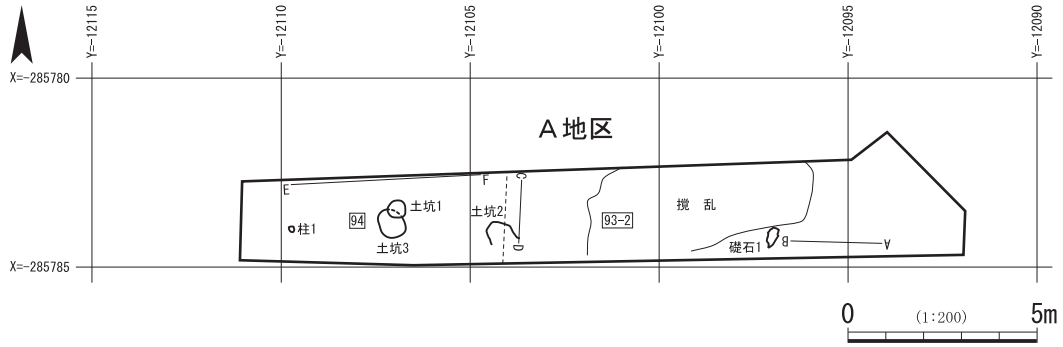
A-B E掘込1の断面で、E地区南壁の地番11-6中央から11-8南端の範囲を図化した。覆土1は掘込のくぼみを埋める褐色ロームで、遺物や礫等を含まない。覆土2からは陶磁器、金属製品、貝殻片等様々な遺物が大量に出土した。

C-D ⑤11地先の断面で、向きは松前港線と平行する。2は地表から約80cm下、標高5.4m付近に堆積する褐色ロームで、挟在する黒褐色土と薄い互層になる部分がある。3は暗褐色土で焼土粒や炭を含む。4は砂礫質の黒褐色土である。2のロームは、C-Dを中心として松前港線がのびる方向に長さ約4m、C-Dから道路中央に向かって幅約0.5mの範囲が残存する。

遺 構

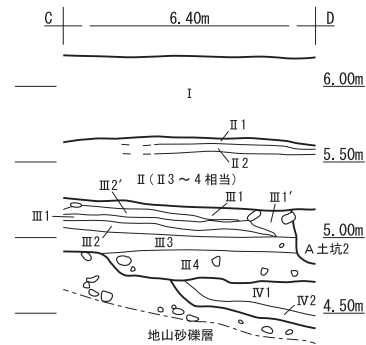
E掘込 1 大型の掘込で、南側から西側が発掘区外にのびるが、北側は⑤地区の断面C-Dまでは及んでいない。様々な遺物が覆土より大量に出土したことから、廃棄土坑と考えられる。出土した陶磁器からみて、近現代に掘削されたと推測される。

(山中)



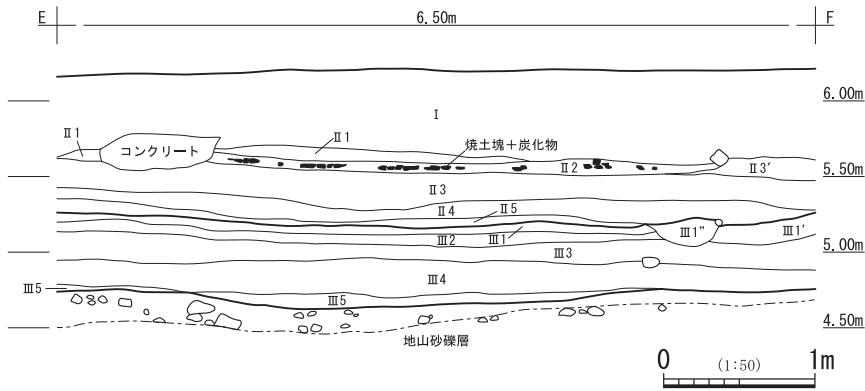
A-B 注記

- IIIa: 黄褐色ローム主体 10YR5/6 粘; 中~強 堅; 堅 張土
- IIIb: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中~弱 堅; やや軟
- IVa: 黄褐色ローム+黒褐色土 「黄褐色ローム」 10YR5/6 粘; 中 堅; やや軟 ローム+炭化物+焼土粒 「黒褐色土」 10YR3/2 粘; 弱 堅; やや軟
- IVb: 褐灰色土 10YR4/1 粘; 弱~なし 堅; 軟 砂質



C-D 注記

- III2': 黒褐色土 10YR2/2 堅; 堅 ローム粒 3%含む
 - IV1: 褐色土 10YR4/6 堅; 堅 ローム主体土
 - IV2: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 弱~なし 堅; 堅 砂質 ローム含む
- ※他の層位はE-F注記に記載

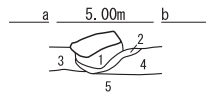
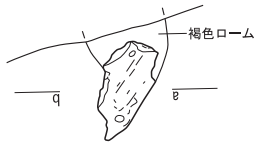


E-F 注記

- I: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 強 堅; すこぶる堅 碎石を多量に含む 現地表の碎石
 - II1: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; すこぶる堅 ローム主体の張土 焼土粒 炭化物粒散在
 - II2: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 堅 焼土塊+炭化物多量に混入 焼土面
 - II3: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 直径10~50mmのローム粒を含む 礫7%含む
 - II3': 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 礫混入なし
 - II4: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 堅 直径10mmのローム粒を5%含む
 - II5: 黒色土 10YR2/1 粘; 中~強 堅; 堅 直径10mmのローム粒を5%含む 炭化物粒散在
 - III1: 黄褐色ローム主体 10YR5/6 粘; 中~強 堅; 堅 張土
 - III1': 黄褐色ローム主体 10YR5/6 粘; 強 堅; 堅 炭化物粒・焼土粒を3%含む
 - III1'': 黄褐色ローム主体 10YR5/6 粘; 強 堅; 堅 炭化物粒・焼土粒を3%含む
 - III2: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 弱 堅; すこぶる堅 ローム塊・炭化物粒を7%含む
 - III3: 黒色土 10YR2/1 粘; 強 堅; 堅~やや軟 ローム塊・直径10mmの礫をそれぞれ3%含む
 - III4: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; やや軟 ローム塊を5%含む III3よりローム塊が大粒で混入量が増える
 - III5: 黄褐色ローム+黒褐色土 10YR5/6+10YR2/3 粘; 強 東西両側等では部分的にロームのみとなる
- ※II5・III1・III1' はIII層上面、III1'' はIII層上部、II2・III3はIII層、III4・III5はIII層下部で遺物取上げ

図IV-1 A地区平面図・断面図

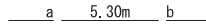
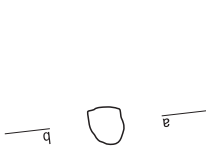
A 礎石 1



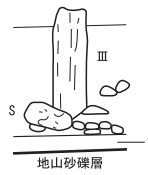
A 礎石1注記

- 1: 褐色ローム 10YR4/6 粘; 強 堅; やや軟~堅
- 2: 黒色土 10YR2/1 粘; なし 堅; 堅 砂質
- 3: 灰黄褐色ローム主体 10YR4/2 粘; 強 堅; やや軟 砂質
焼土粒・炭化物粒多
- 4: 黒褐色土 10YR2/2 粘; なし 堅; やや軟 砂質
- 5: 暗褐色砂 10YR3/4 粘; なし 堅; しよう

A 柱 1



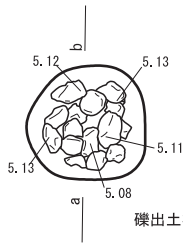
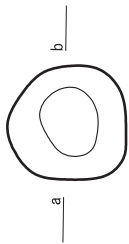
-----III上面見通し



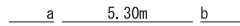
A 柱1注記

- 1: にぶい黄褐色ローム 10YR5/3 粘; 強 堅; すこぶる堅
- III: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 軟 礫の混入少ない

A 土坑 1



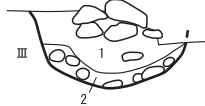
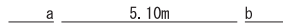
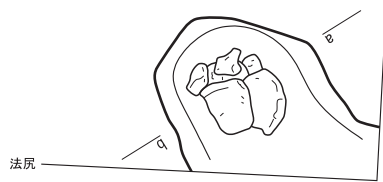
礫出土状況



A 土坑1注記

- 1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; やや軟 10~15cm大の礫配置
- 2: 黒褐色土 10YR2/1 粘; 強 堅; やや軟

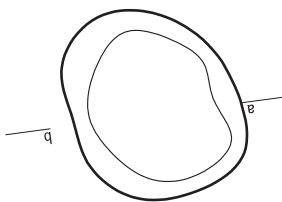
A 土坑 2



A 土坑2注記

- 1: 黒色土 10YR2/1 粘; 強 堅; やや軟 上部に20~25cmの扁平礫が折重なって配置
- 2: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 中~強 堅; 固結 鉄分が沈着した礫が密集 ローム粒を含む
- III: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 強 堅; やや軟~堅 直径0.5cmのローム粒を30%含む 炭化物粒多い

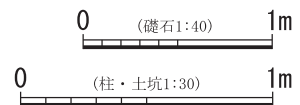
A 土坑 3



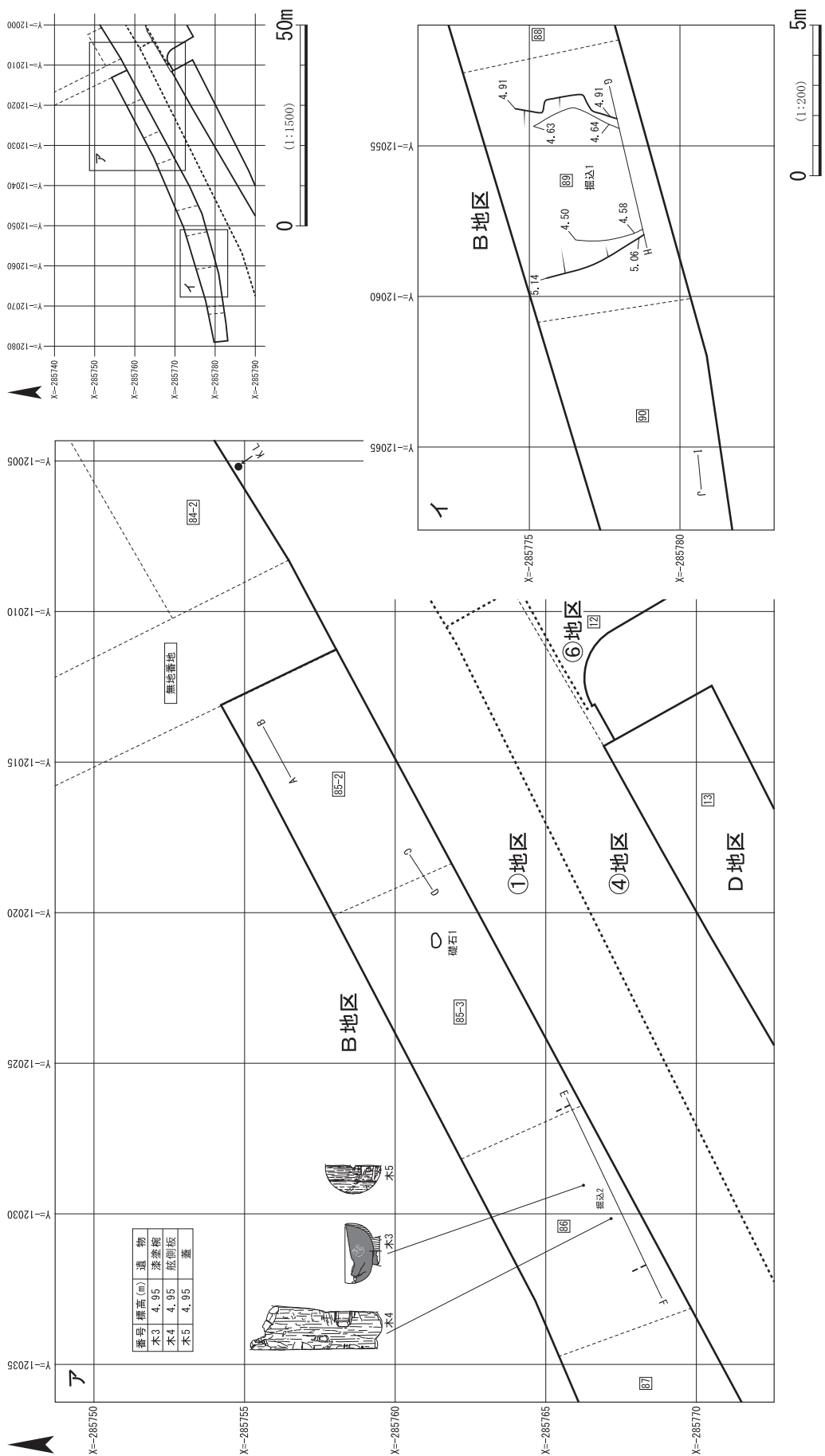
地山砂礫層

A 土坑3注記

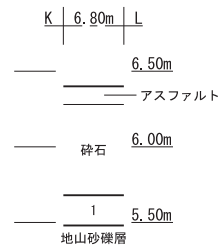
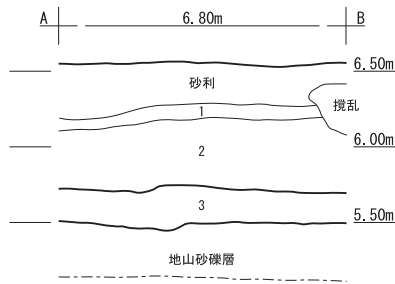
- 1: 黒色土 10YR2/1 粘; 強 堅; 弱 砂を少し含む 拳大の礫を含む
- 2: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 弱 堅; なし 砂質



図IV-2 A地区遺構図



図IV-3 B・①地区平面図



A-B 注記

II 層

1: 黄褐色ローム 10YR5/6 粘; 強 堅; 堅 ローム+シルト
 2: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; やや堅 ローム+シルト

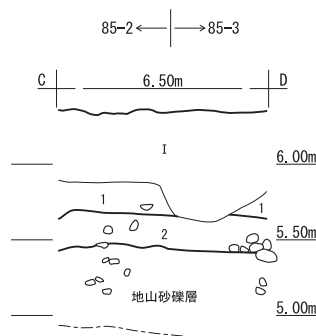
自然堆積層

3: 黒色土 10YR1.7/1 粘; なし 堅; 軟 砂質

K-L 注記

自然堆積層

1: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 軟~堅 15cm程の礫を含む



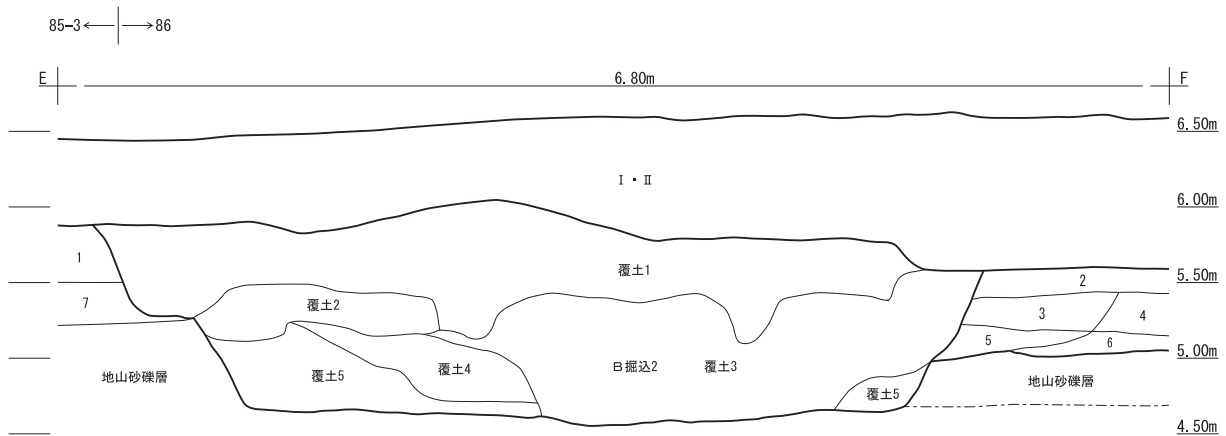
C-D 注記

II 層

1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 ローム+粘土 5~10mmの焼土塊を多く含む 拳大の礫を含む

自然堆積層

2: 黒色土 10YR2/1 粘; 弱 堅; 軟 砂 拳大の礫を含む



E-F 注記

III 層

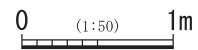
1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 ローム+シルト
 2: 褐灰色土 10YR4/1 粘; 強 堅; やや堅 粘土+シルト
 3: にぶい黄褐色ローム 10YR4/3 粘; 強 堅; やや堅 粘土+ローム 炭化物粒を微量に含む
 4: 黄褐色ローム 10YR5/6 粘; 強 堅; やや軟 粘土+ローム
 5: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; やや軟 粘土+シルト
 6: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; やや軟 粘土+ローム+シルト

自然堆積層

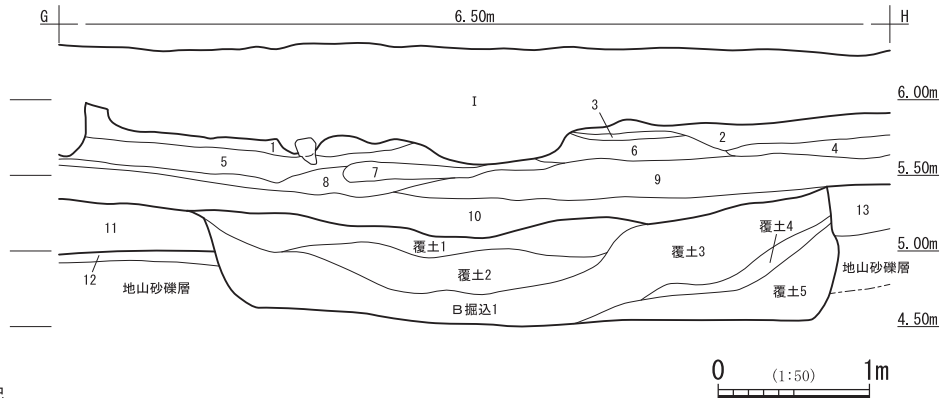
7: 黒色土 10YR1.7/1 粘; なし 堅; 軟 砂質

B掘込2

覆土1: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 強 堅; 堅 ローム+シルト 直径5~20mmの砂利を多く含む
 覆土2: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 粘土 礫を少し含む
 覆土3: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 粘土+シルト 直径20mm弱の砂利を微量含む
 覆土4: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 堅 粘土+シルト 直径10~20mmの砂利を多く含む
 覆土5: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 強 堅; 軟 粘土+シルト ローム 焼土粒を均質に含む



図IV-4 B地区断面図 (1)・①地区断面図



G-H 注記

II層

- 1: 黄褐色ローム 10YR5/8 粘; 強 堅; 堅 ローム
- 2: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 堅 砂+土 ローム粒と直径2~5mmの砂利を少し含む
- 3: 黄褐色ローム 10YR5/8 粘; 強 堅; 堅 ローム
- 4: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 中 堅; 堅 砂+土 ローム粒と直径2~5mmの砂利を含む
- 5: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 砂+土 直径1~10mmの砂利を多く含む
- 6: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 軟 砂+土 直径1~10mmの砂利を多く含む
- 7: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 土+ローム 直径2mm程のローム粒を含む
- 8: 砂利層 堅; 堅 砂利は20mm以下
- 9: 黒色土 10YR1.7/1 粘; 強 堅; 堅 5~20mmのローム塊を含む
- 10: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 ローム粒・炭化物粒を均質に含む 直径2~5mmの砂利を少し含む 10cm程の礫を少し含む

III層

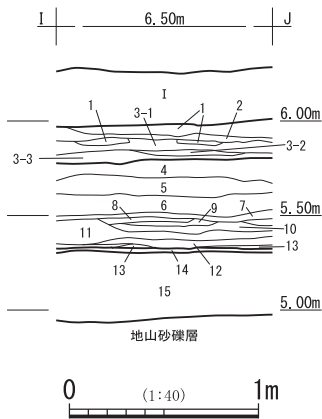
- 11: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 堅 砂+粘土+ローム 直径5mmのローム粒を微量に含む 拳大の礫を微量に含む

自然堆積層

- 12: 黒褐色土 10YR2/3 粘; なし 堅; 軟 砂質
- 13: 黒色土 10YR1.7/1 粘; なし 堅; 軟 砂質

B礎込1

- 覆土1: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 5cm弱のローム塊を多く含む 直径10mmの砂利を微量に含む 拳大の礫を少し含む
- 覆土2: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム 直径5~10mmのローム粒を多く含む
- 覆土3: 暗褐色土 10YR3/4 砂+粘土 直径5~10mmのローム粒を微量に含む 直径5~10mmの砂利を微量に含む 拳大以上の礫を多く含む
- 覆土4: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 弱 堅; 軟 砂+粘土 炭化材・焼土を含む
- 覆土5: 黒色土 10YR2/1 粘; 弱 堅; 軟 砂質 直径5mmのローム粒を微量に含む 拳大の礫を少量含む



I-J 注記

II層

- 1: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 強 堅; 堅
- 2: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 弱 堅; 軟 砂質
- 3-1: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 2~10mmのロームが塊状に入る
- 3-2: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 上面に直径2mmの砂が3cm程堆積
- 3-3: 黒色土 10YR2/1 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 2cm程のロームが塊状に入る

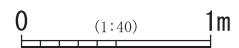
III層

- 4: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 3cm程のロームが塊状に入る
- 5: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 直径2~5mmの砂・ローム粒・焼土粒を含む
- 6: にぶい黄褐色ローム 10YR4/3 粘; 強 堅; 堅 ローム+粘土 1~50mm程の焼土粒 1~20mm程の炭化物を均質に含む
- 7: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 弱 堅; 軟 粘土 直径5mmの砂を多く含む
- 8: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 強 堅; 堅
- 9: 黒色土 10YR2/1 粘; 強 堅; 堅 粘土+炭化物粒 2mm程の焼土粒・炭化物粒を少量含む
- 10: 褐色土 10YR4/4 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム 直径5~10mmの砂を多く含む
- 11: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム 直径2mmの焼土粒を少量含む
- 12: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム 5mm程の焼土塊を均質に含む
- 13: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム 上面に炭化物層が1mm程堆積
- 14: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 強 堅; 堅

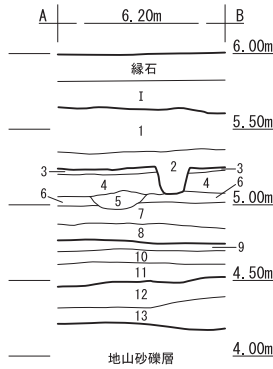
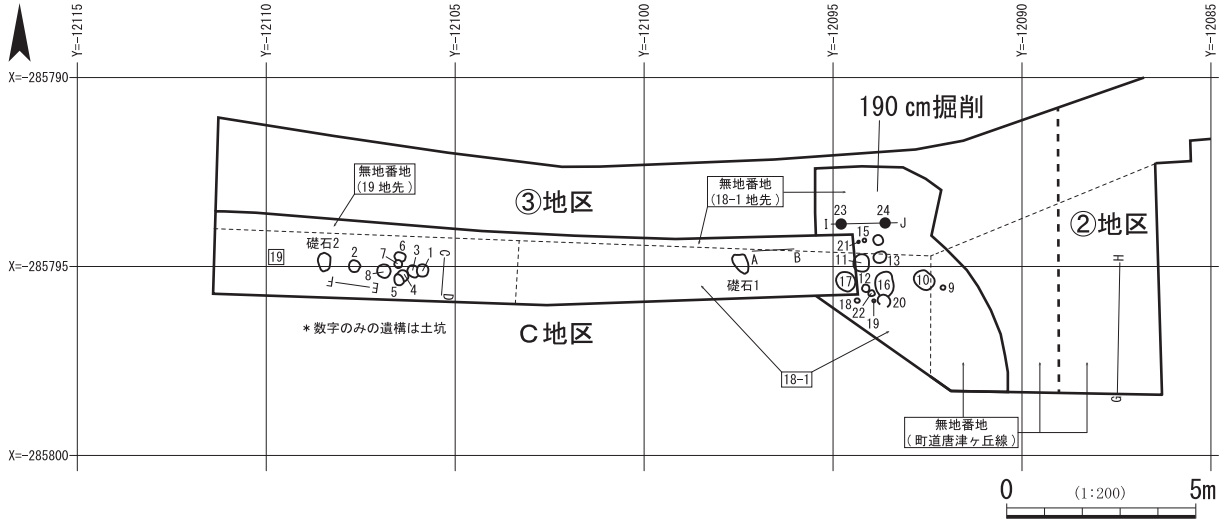
自然堆積層

- 15: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 弱 堅; 軟 砂質 直径10mmの砂を微量に含む 拳大の礫を少量含む

▲ B礎石 1

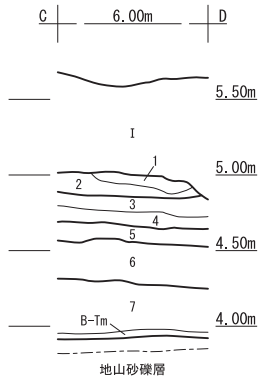


図IV-5 B地区断面図 (2)・遺構図



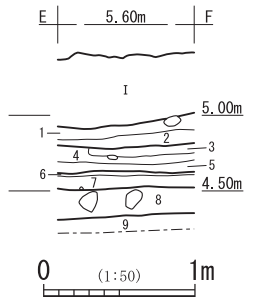
A-B 注記

- II層
 1: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム
 2: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 堅 粘土+ローム 直径10mmの砂利を含む
 III層
 3: 褐色ローム 10YR4/6 粘; 強 堅; 堅
 4: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 弱 砂+ローム+粘土 直径10~20mmの砂利を多く含む
 5: 直径10~60mmの砂利
 6: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 軟 ローム+粘土 砂を多く含む
 7: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 堅 土+粘土 直径5mmのローム粒を少量含む
 8: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 弱 堅; 軟 砂+粘土+ローム 直径5mmの砂利を多く含む
 IV層
 9: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 軟 8よりやや明るい 砂+粘土+ローム 直径10~50mmの砂利を多く含む
 10: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 軟 砂+粘土 ローム粒を均質に含む 直径50mm程の礫を多く含む
 11: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 強 堅; 軟 粘土+ローム
 V層
 12: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 強 堅; 軟 砂+粘土 微細なローム粒を均質に含む
 13: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 弱 堅; 軟 黒色の海砂に微細なローム粒を均質に含む



C-D 注記

- II層
 1: 暗赤褐色土 5YR3/6 粘; 弱 堅; 軟 砂・ローム粒・焼土粒を均質に含む
 2: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 軟 微細なローム粒を少量含む
 III層
 3: 暗褐色土 10YR3/4 粘; 弱 堅; 軟 砂・微細なローム粒を微量含む
 4: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 弱 堅; 堅 砂・直径5~20mmの砂利を多く含む
 IV層
 5: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 弱 堅; 軟 砂・微細な砂を少量均質に含む
 V層
 6: 黒色土 10YR2/1 粘; 強 堅; 軟 微細な砂・ローム粒・焼土粒を少量含む
 VI層
 7: 暗褐色砂 10YR3/4 粘; なし 堅; 軟 微細なローム粒を含む



E-F 注記

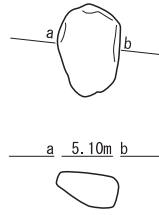
- II層
 1: 暗赤褐色土 5YR3/6 粘; 弱 堅; 軟 砂+ローム・焼土粒・直径5mmの砂を均質に含む
 2: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 軟 土+ローム
 III層
 3: 褐色ローム 10YR4/6 粘; 強 堅; 堅
 4: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 弱 堅; 軟 砂 直径5~10mmの砂を多く含む 微細なローム粒を含む
 5: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 軟 土+粘土
 IV層
 6: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅; 軟 粘土 直径5~10mmの砂を多く含む
 7: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 強 堅; 軟 粘土 微細な焼土粒・ローム粒を多く含む
 V層
 8: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 弱 堅; 軟 砂質
 VI層
 9: 暗褐色砂 10YR3/4 粘; なし 堅; 軟 微細なローム粒を含む

図IV-6 C・②・③地区平面図・C地区断面図

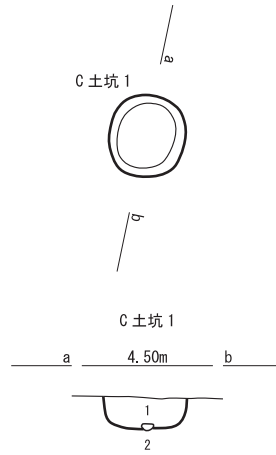
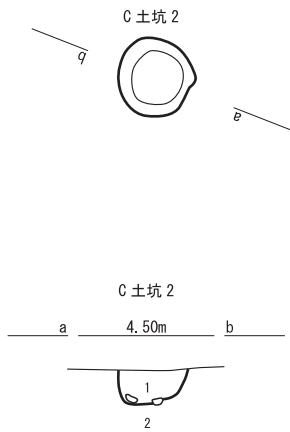
C礎石 1



C礎石 2



C土坑 1・2

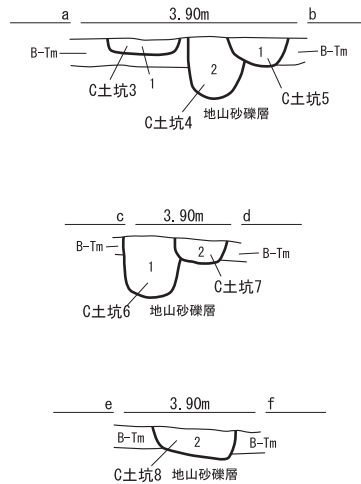
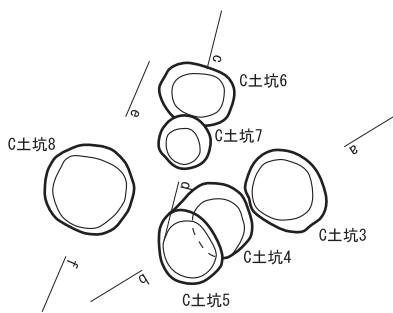


C土坑 1・2 注記

1: 褐色土 10YR4/6 粘; 強 堅: 堅 ローム+砂 炭化物粒・焼土粒を含む
V層

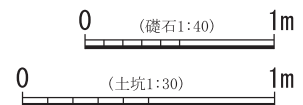
2: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 弱 堅: 軟 砂質

C土坑 3～8

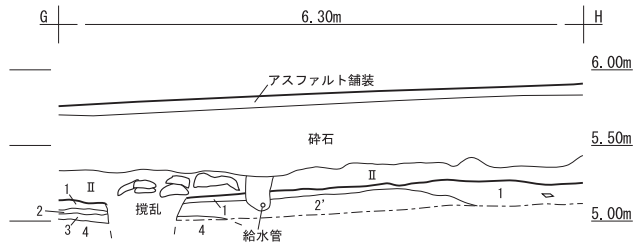


C土坑 3～8 注記

1: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 強 堅: 軟 砂+粘土 ローム粒を少量含む
2: 黒色土 10YR1/2 粘; 強 堅: 軟 砂+粘土 ローム粒を微量含む



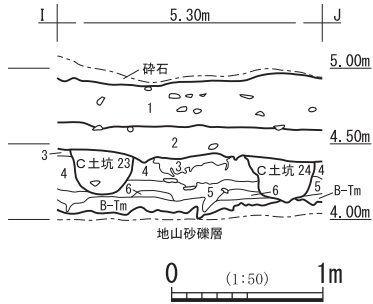
図IV-7 C地区遺構図



I-J 注記

III層

- 1: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 焼土粒・炭を含む
- 2: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
- 2': ロームと黒褐色土の薄い互層 粘; 中 堅; 堅
- 3: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 堅 焼土粒・炭を含む
- 4: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅



G-H 注記

III層

- 1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中~強 堅; 堅 砂礫質 10 cm以下の礫を多量に含む
- 2 との層界に鉄分の盤層が形成

IV層

- 2: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; 堅 砂礫質 10 cm以下の礫をやや多量に含む
- 3: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅 砂質
- 4: 10YR3/3 砂 1 cm以下の礫を微量に含む
- 5: 10YR3/2 粘; 弱 堅; 堅 砂
- 6: 黒褐色土

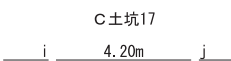
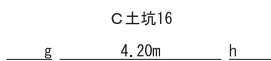
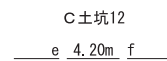
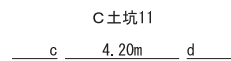
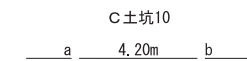
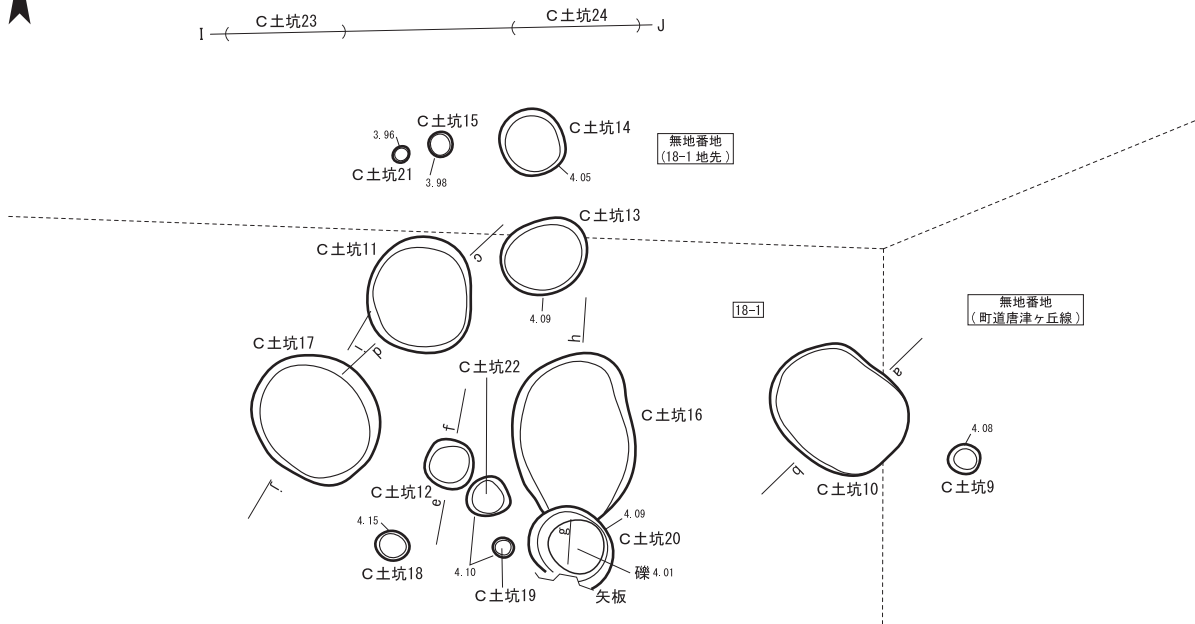
C 土坑 23

黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 1 cm程度のローム粒をやや多量に含む 10 cm以下の礫を少量含む

C 土坑 24

黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 堅 ローム粒を少量含む

C 土坑 9 ~ 24

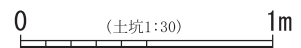


C 土坑 9 ~ 16・18 ~ 22 注記

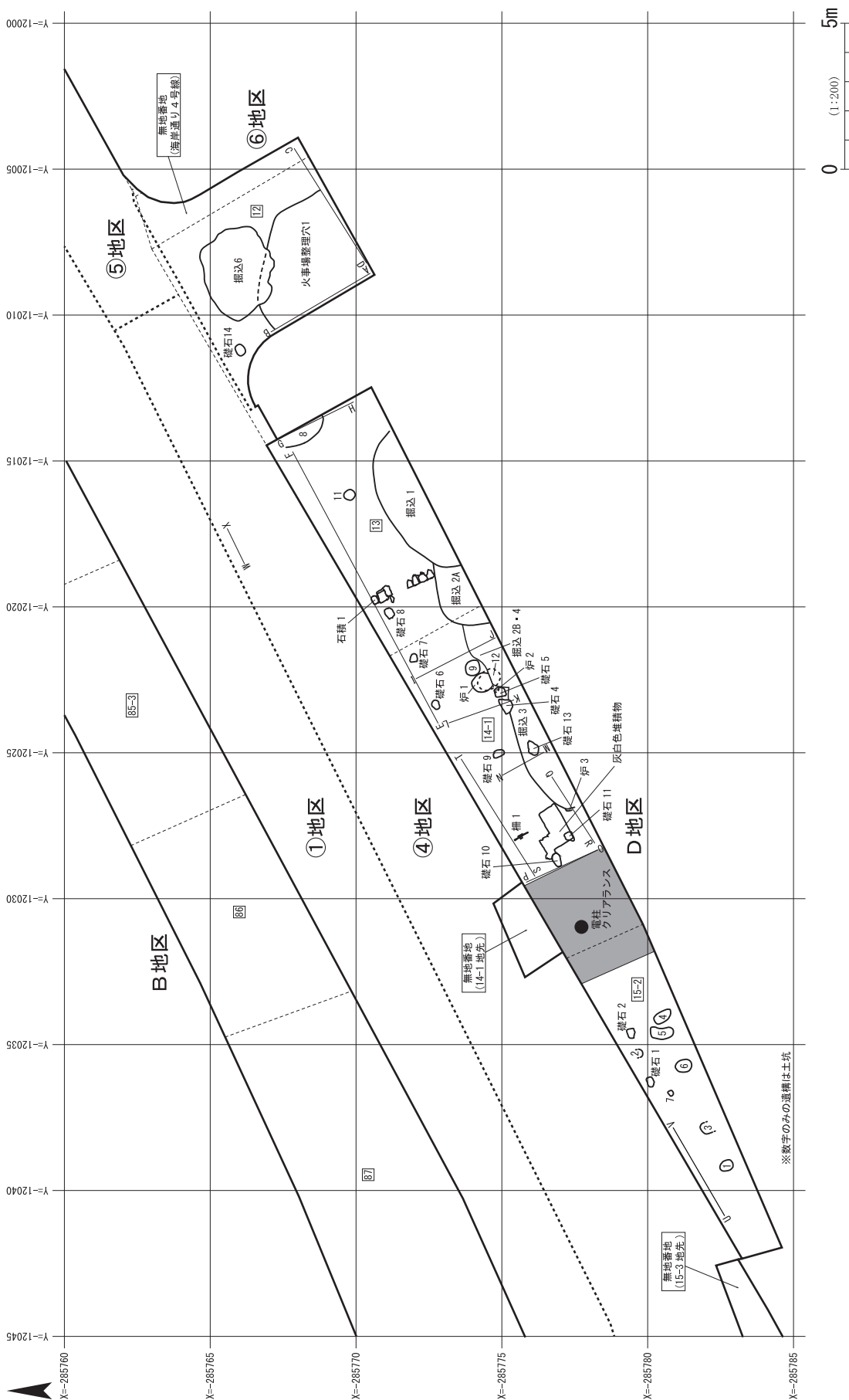
- 1: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 弱 堅; 軟 砂質

C 土坑 17 注記

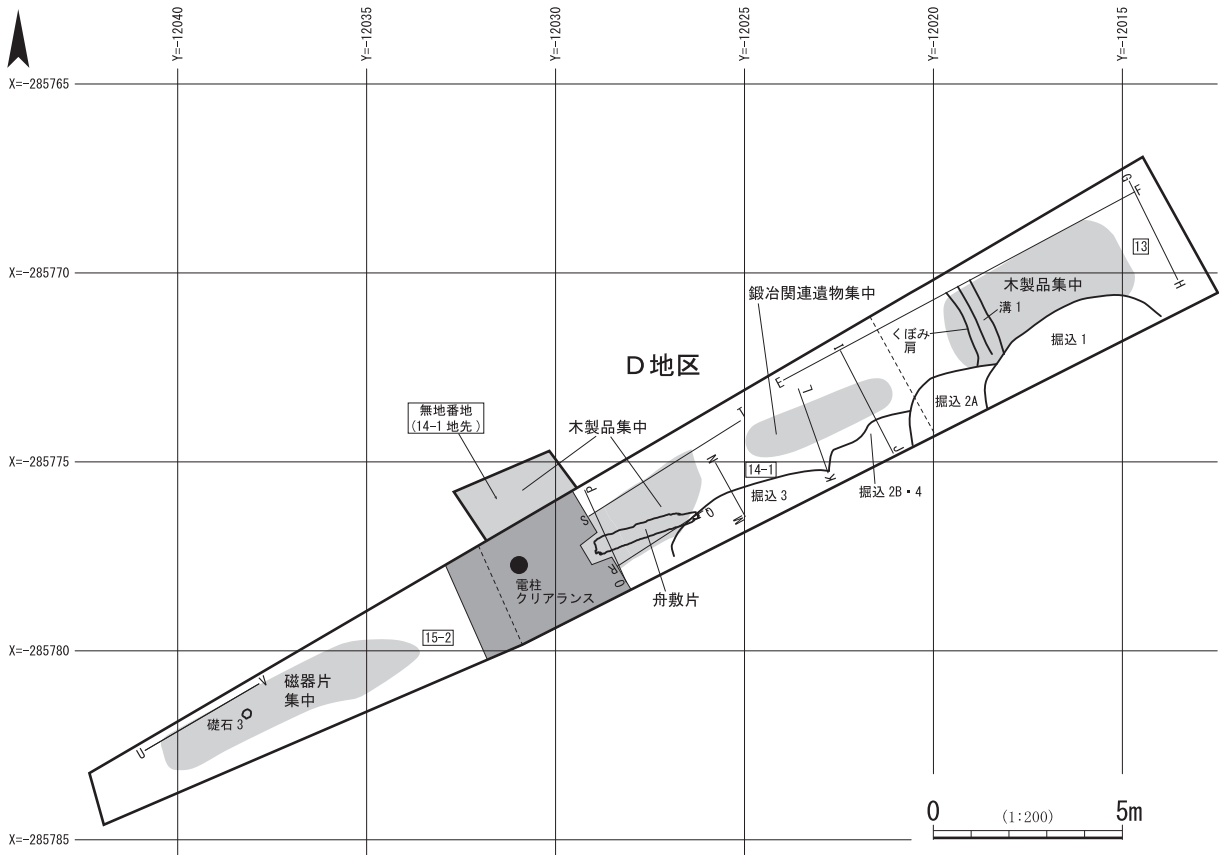
- 1: 褐色ローム主体 10YR4/6 粘; 中 堅; 軟~堅
- 2: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中~強 堅; 堅 砂質



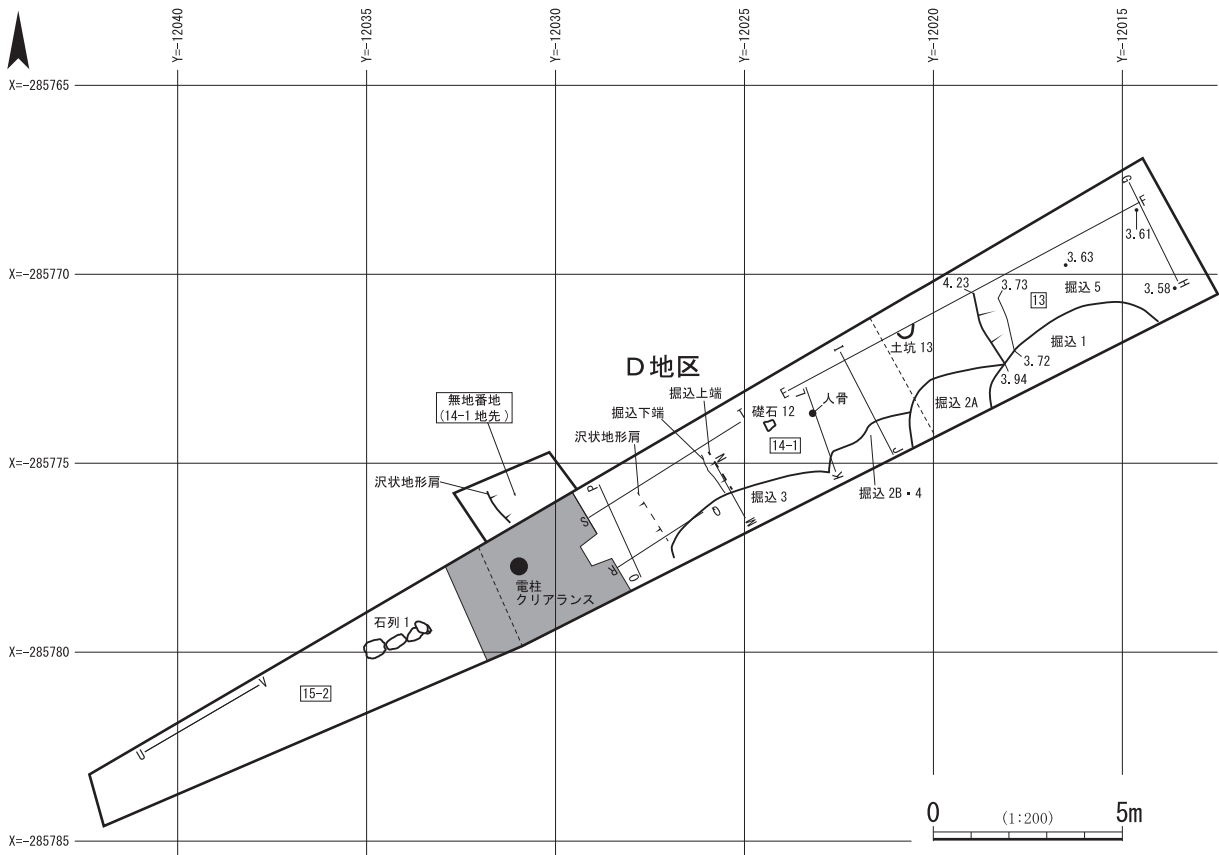
図IV-8 ②・③地区断面図・③地区遺構図



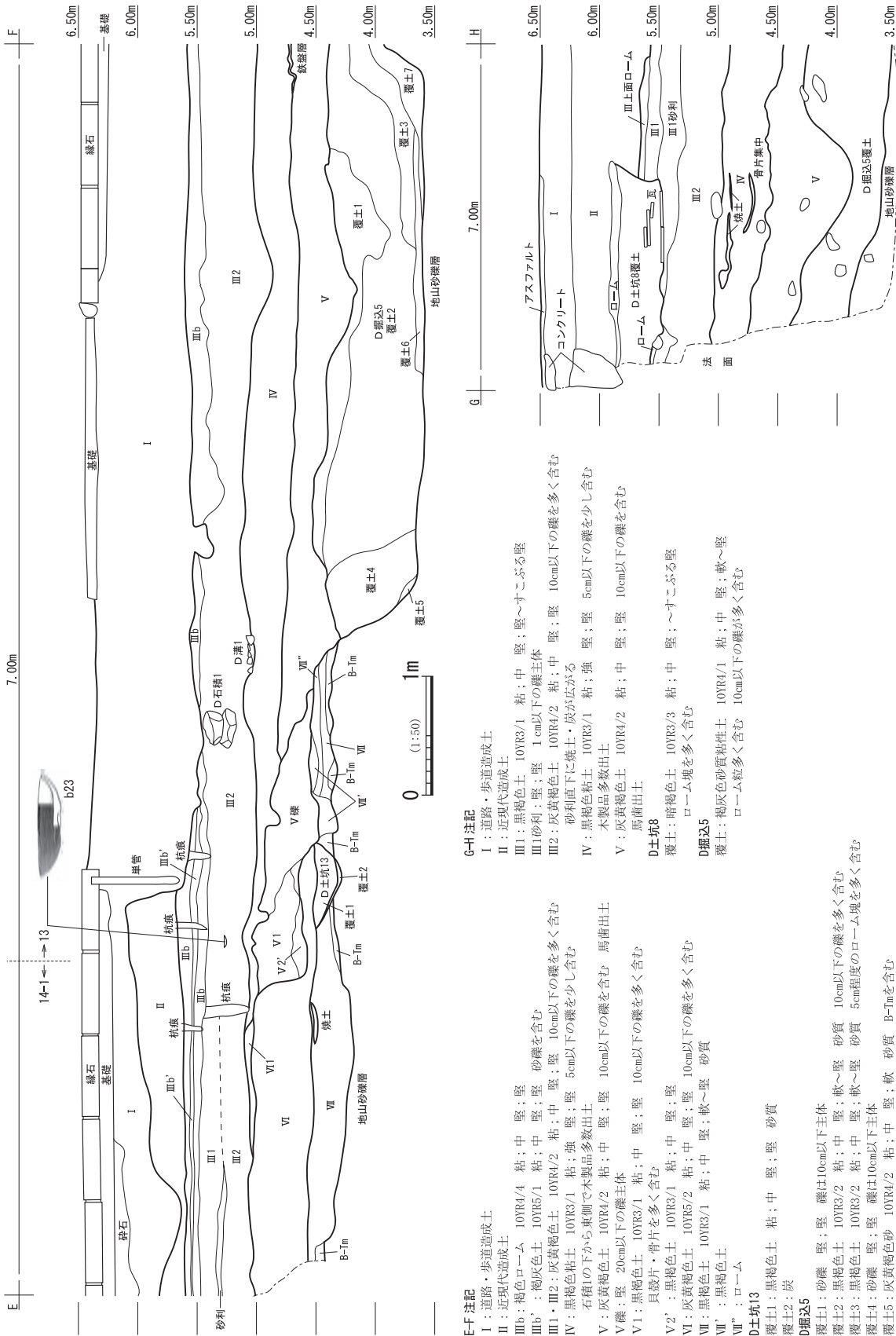
図IV-9 D・⑥地区平面図 (Ⅱ・Ⅲ層)



図IV-10 D地区平面図 (IV層)



図IV-11 D地区平面図 (VII層)



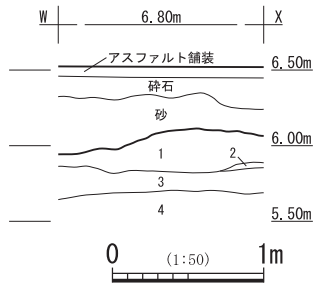
E-F 注記

- I : 道路・歩道造成土
- II : 近現代造成土
- IIIb : 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
- IIIb' : 褐色ローム 10YR5/1 粘; 中 堅; 堅 砂礫を含む
- III1・III2 : 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を多く含む
- IV : 黒褐色粘土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 5cm以下の礫を少し含む
- 石積1の下から東側で木製品多数出土
- V : 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む 馬歯出土
- V礫 : 堅 20cm以下の礫主体
- V1 : 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を多く含む
- 貝殻片・骨片を多く含む
- V2' : 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
- VI : 灰黄褐色土 10YR5/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を多く含む
- VII : 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 軟~堅 砂質
- VII' : 黒褐色土
- VII'' : ローム
- D土坑13
- 覆土1 : 黒褐色土 粘; 中 堅; 堅 砂質
- 覆土2 : 炭
- D土坑5
- 覆土1 : 砂礫 堅; 堅 礫は10cm以下主体
- 覆土2 : 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 軟~堅 砂質 10cm以下の礫を多く含む
- 覆土3 : 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 軟~堅 砂質 5cm程度のローム塊を多く含む
- 覆土4 : 砂礫 堅; 堅 礫は10cm以下主体
- 覆土5 : 灰黄褐色砂 10YR4/2 粘; 中 堅; 軟 砂質 B-1mを含む
- 覆土6 : 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
- 覆土7 : 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 軟~堅

G-H 注記

- I : 道路・歩道造成土
- II : 近現代造成土
- III1 : 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅~すこぶる堅
- III1砂利 : 堅; 堅 1cm以下の礫主体
- III2 : 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を多く含む
- 砂利直下に焼土・灰が広がる
- IV : 黒褐色粘土 10YR3/1 粘; 強 堅; 堅 5cm以下の礫を少し含む
- 木製品多数出土
- V : 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む
- 馬歯出土
- D土坑8
- 覆土 : 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; ~すこぶる堅
- ローム塊を多く含む
- D土坑5
- 覆土 : 褐灰色砂質粘性土 10YR4/1 粘; 中 堅; 軟~堅
- ローム粒多く含む 10cm以下の礫を多く含む

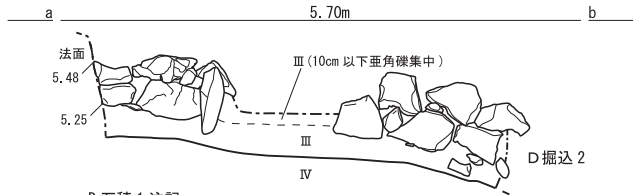
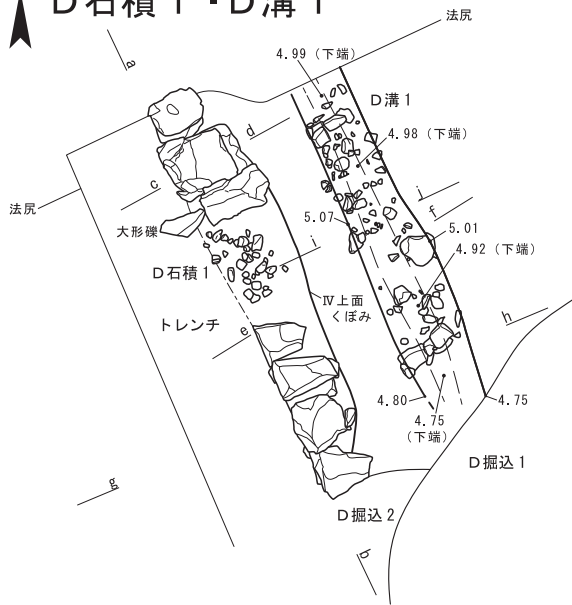
図IV-12 D地区13~14-1断面図



W-X 注記

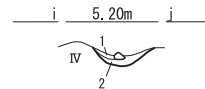
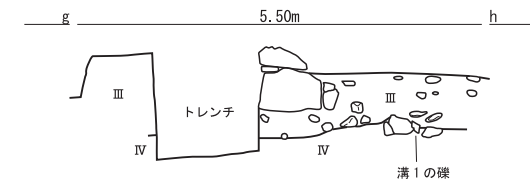
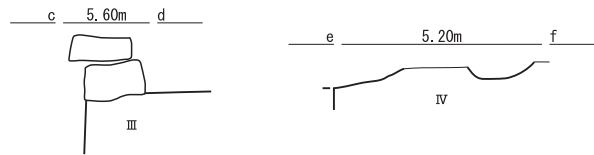
- II 層
 1: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅
 3cm程度以下の礫を多く含む
 2: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
 3: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; 堅
 5cm程度以下の礫を多く含む
 4: 褐灰色砂 10YR6/1 粘; なし 堅; 堅
 5cm程度以下の礫を少し含む

D 石積 1・D 溝 1



D 石積 1 注記

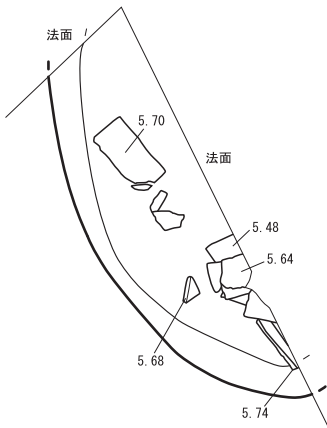
- III: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅 5cm 程度以下の礫を含む
 IV: 黒褐色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 堅 上面の所々に焼土と炭の薄層あり



D 溝 1 注記

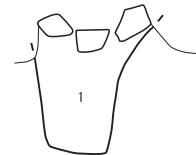
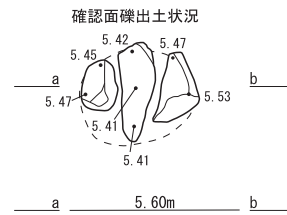
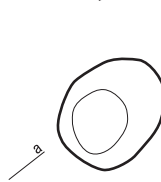
- 1: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 礫の間の土 III層
 2: 炭層 灰黄褐色土を含む

D 土坑 8



※断面は図IV-12G-Hに図示

D 土坑 11



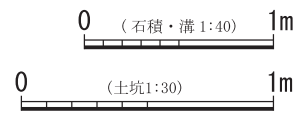
D 土坑 11 注記

- 1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中~強 堅; 軟~堅
 2cm 以下の礫を多く含む

D 土坑 13

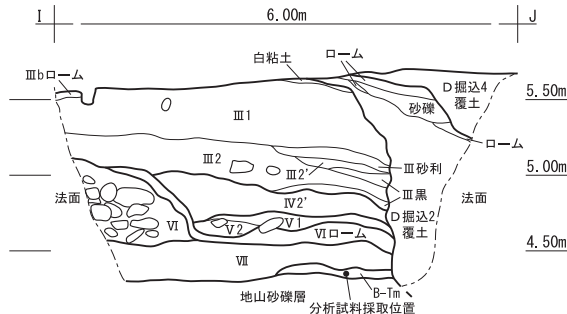
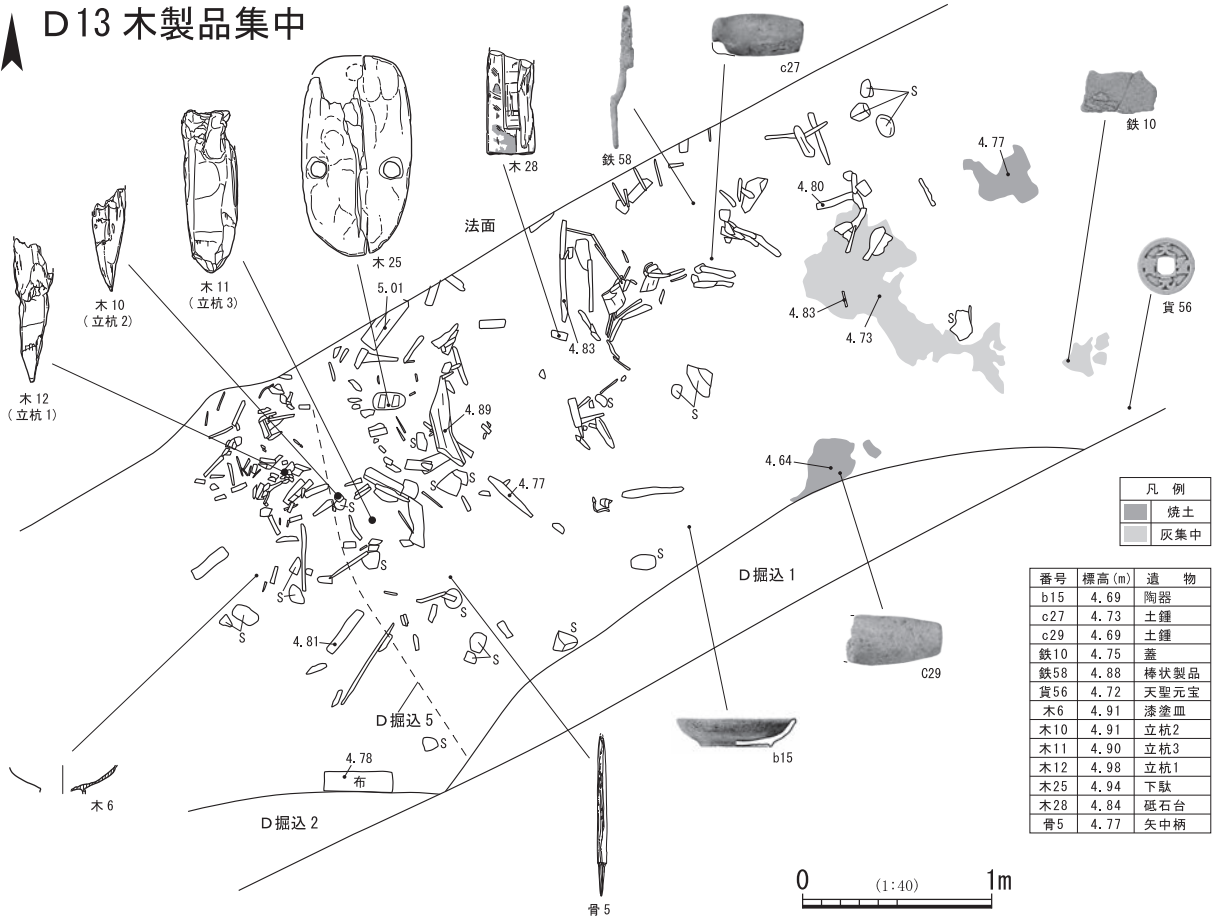


※断面は図IV-12E-Fに図示

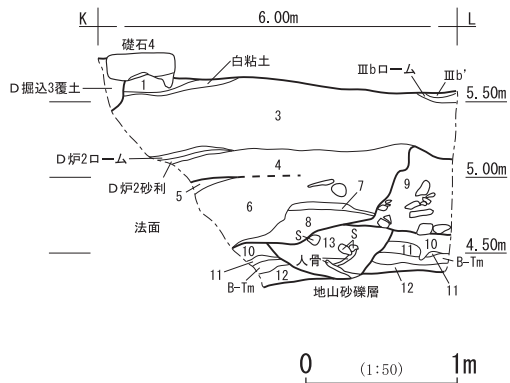


図IV-13 ④地区13地先断面図・D地区13遺構図 (1)

D13 木製品集中

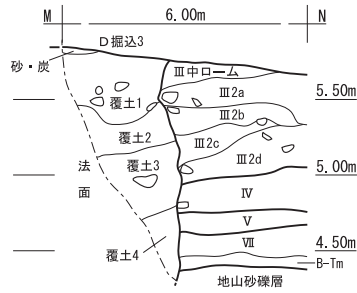


I-J 注記
 白粘土：にぶい黄橙色 10YR6/4 粘；中 堅；堅 砂質
 III1：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；堅 10cm以下の礫を含む
 III砂利：堅；堅 5cm以下の礫主体
 III2'：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；堅
 III2：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；堅
 III3：黒色土 10YR2/1 粘；中 堅；堅
 IV2'：暗褐色土 10YR3/3 粘；中 堅；軟～堅 5cm以下の礫を含む
 V1：黒色土 10YR1.7/1 粘；中 堅；軟 貝殻片・骨片を多く含む
 V2：暗褐色土 10YR3/3 粘；中 堅；軟～堅
 VI：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；堅 30cm以下の礫を多量に含む
 VII：黒褐色土
D掘込2
 砂礫：堅；堅 簀出土
 覆土：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；堅 砂礫を含む
D掘込4
 覆土：黒色土 10YR2/1 粘；中 堅；堅 砂礫を含む



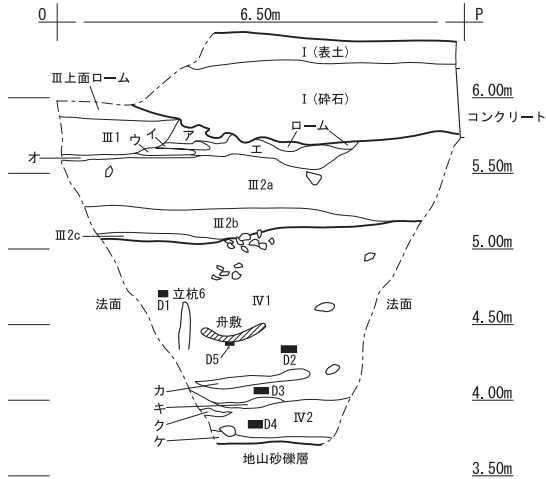
K-L 注記
III層
 1：灰黄褐色土 10YR4/2 粘；中 堅；堅
 白粘土：にぶい黄橙色 10YR6/4 粘；中 堅；堅 砂質
 IIIb'：褐灰色土 10YR5/1 粘；中 堅；堅 砂礫を含む
 3：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；堅 砂礫を含む
 4：灰黄褐色土 10YR4/2 粘；中 堅；堅 5上面の炭より上
IV層
 5：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；堅 上面に炭が広がる
 6：灰黄褐色土 10YR4/2 粘；中 堅；堅 砂礫を含む 5上面の炭より下
 7：炭主体 粘；強 堅；軟～堅 IV2層
 8：灰黄褐色土 10YR4/2 粘；中 堅；軟～堅 砂礫を含む IV2層
VI層
 9：にぶい黄褐色土 10YR4/3 粘；中 堅；堅 15cm程度以下の礫を多く含む
VII層
 10：黒褐色土 粘；中 堅；軟～堅 砂質 腐植層
 11：暗褐色砂 10YR3/4 粘；中 堅；軟～堅 粘土質
 12：黒褐色砂 10YR3/2 粘；中 堅；軟～堅 粘土質
D掘込覆土(人骨出土)
 13：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；軟～堅 砂質 10cm以下の礫を含む

図IV-14 D地区13遺構図 (2)・14-1断面図 (1)



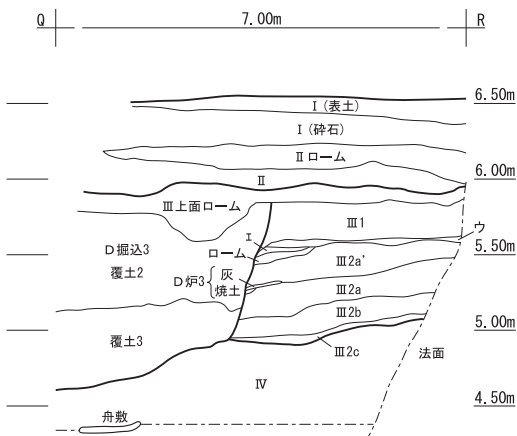
M-N 注記

- III 2a: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; すこぶる堅 5cm以下の礫が多い
 - III 2b: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; すこぶる堅
 - III 2c: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 堅
 - III 2d: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 1cm程度の礫が目立つ
 - IV: 黒褐色粘土 10YR3/1 粘; 中 堅; 軟~堅 焼土粒を含む
 - V: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅
 - VII: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 砂質
- D掘込3**
 覆土1: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; すこぶる堅
 10cm以下の礫を多く含む 上面に砂・炭が多い
 覆土2: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 5cm以下の礫を含む
 覆土3: 砂礫 5cm以下が主体 貝殻片を多く含む
 覆土4: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 軟~堅 ロームを含む



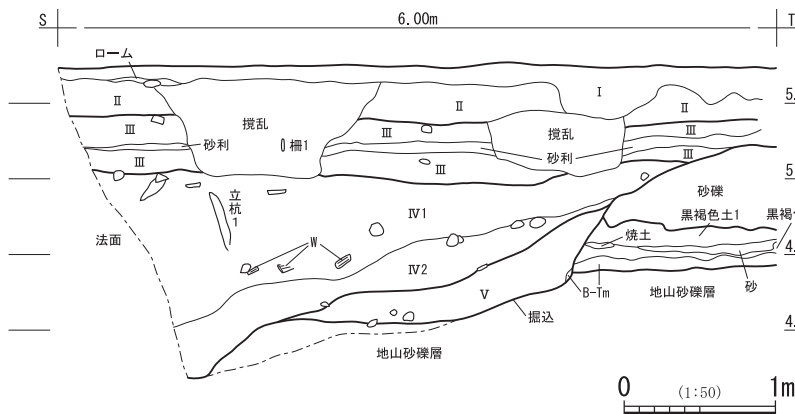
O-P 注記

- III 1: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む
ロームの小塊を少量含む
 - III 2a: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む
 - III 2b: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; 堅
 - III 2c: 灰黄褐色砂利 10YR5/2 堅; 堅 5cm程度以下の砂礫
 - IV 1: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 軟~堅 カの下位では砂質化 木製品出土
 - IV 2: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 軟 砂質 木製品出土
- ア: ロームと黒褐色土が混在
 イ: 浅黄色土 2.5Y7/4 粘; 中 堅; 堅
 ウ: 灰白色土 2.5Y8/2 粘; 中 堅; 堅
 イとの間にローム粒を含む黒褐色土の薄層が見られる部分もあり
 エ: 黒褐色土 ローム・ア・イが混在
 オ: ロームに灰白色土が混在
 カ: 黒褐色砂 2.5Y3/1
 キ: 褐色砂 7.5YR4/6 3cm程度以下の礫を含む 酸化鉄集積
 ク: 黒褐色砂 2.5Y3/1 3cm程度以下の礫を含む
 ケ: 黒褐色砂 2.5Y3/1 地山との層界に鉄分集積
- D1~D5: 珪藻分析試料採取位置



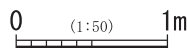
Q-R 注記

- II: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 砂礫を含む
 - III 1: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む
ロームの小塊を少量含む
 - ウ: 灰白色土 2.5Y8/2 粘; 中 堅; 堅
 - エ: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
 - III 2a': 褐灰色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む
 - III 2a: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を含む
 - III 2b: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; 堅
 - III 2c: 灰黄褐色砂利 10YR5/2 堅; 堅 5cm程度以下の砂礫
 - IV: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 軟 木製品出土
- D炉3**
 灰: にぶい黄褐色土 10YR6/3 粘; 中 堅; 軟~堅
 焼土: にぶい赤褐色土 5YR4/3 堅; 堅
- D掘込3**
 覆土2: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 5cm以下の礫を含む
 覆土3: 砂礫 5cm以下が主体 貝殻片を多く含む

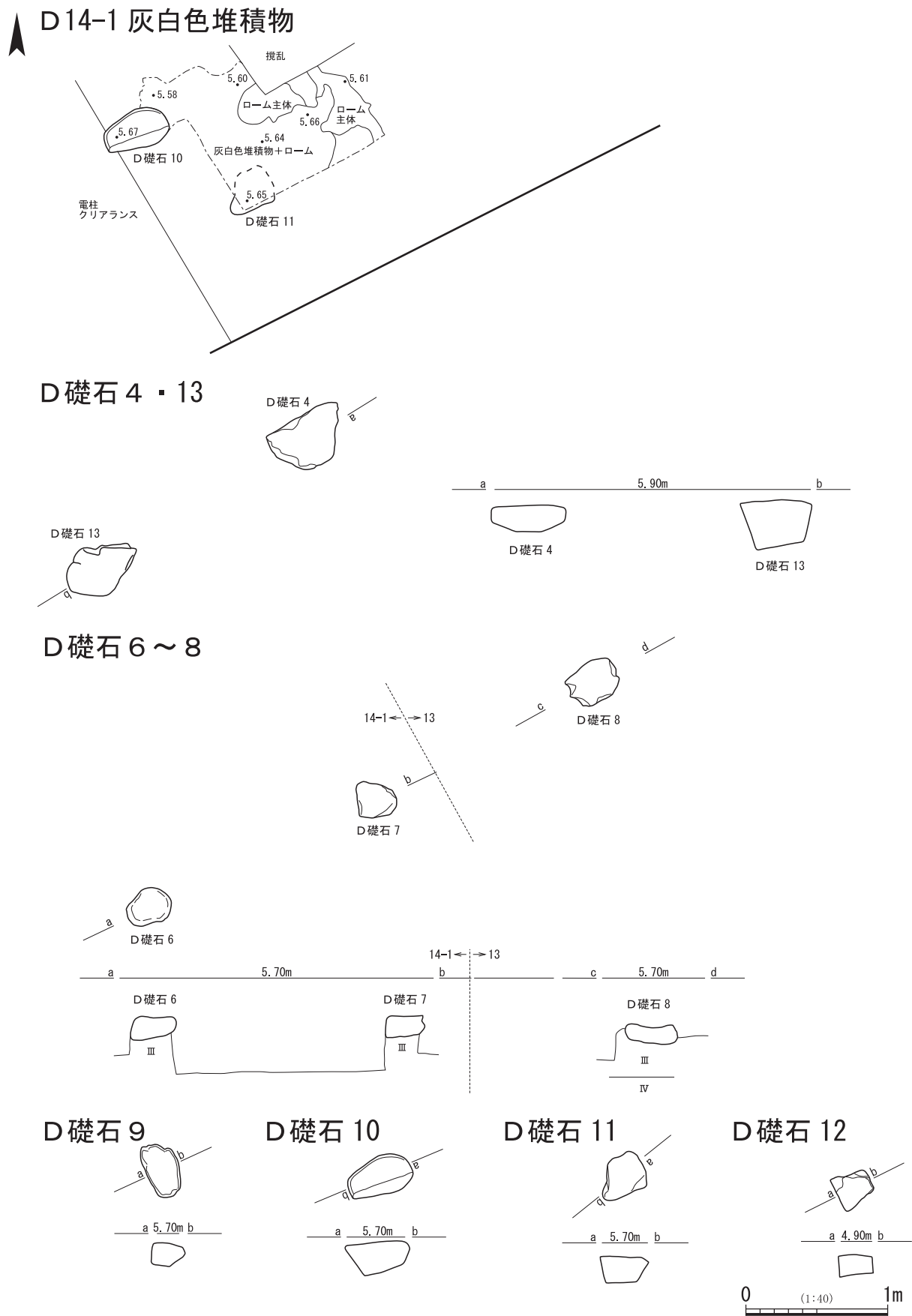


S-I 注記

- I: 緑石基礎下の礫層
- II: 近現代造成土
- III: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
砂礫を含む 中間に5cm程度以下の砂利層を挟む
- IV 1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 軟~堅
粘土質 砂礫を含む 木製品出土
- IV 2: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 軟 砂質
木製品出土
- V: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 軟~堅
IV2との層界に鉄盤層形成
- VI層
砂礫: 15cm以下の礫主体
- VII層
黒褐色土1: 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 砂礫を含む
砂: 5cm以下の礫を少し含む
黒褐色土2: 10YR3/1 粘; 中 堅; 軟 砂質
自然堆積

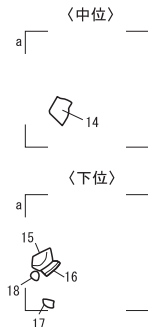
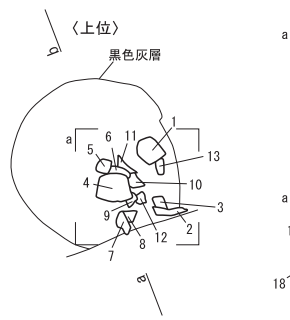
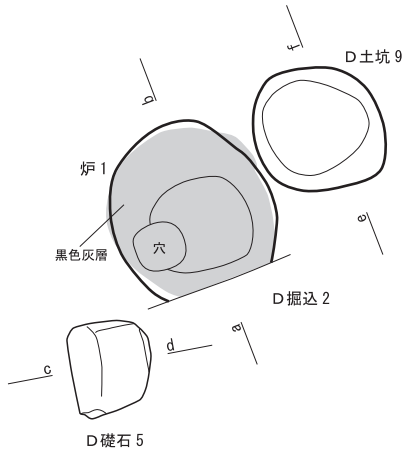


図IV-15 D地区14-1断面図 (2)



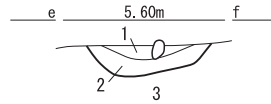
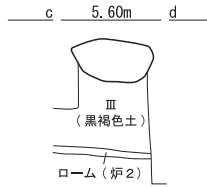
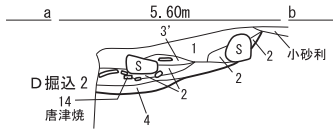
図IV-16 D地区14-1遺構図 (1)

D炉1・D礎石5・D土坑9



番号	標高(m)	遺物
1	5.46	礎
2	5.45	礎
3	-	礎
4	5.46	礎
5	-	礎
6	-	礎
7	5.43	陶器
8	-	陶器
9	-	陶器
10	5.42	陶器
11	-	陶器
12	-	礎
13	-	礎
14	5.42	陶器
15	5.42	礎
16	5.39	陶器
17	-	礎
18	-	礎

D炉1 遺物出土状況



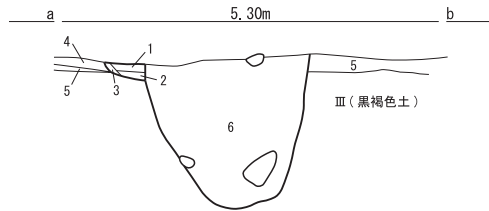
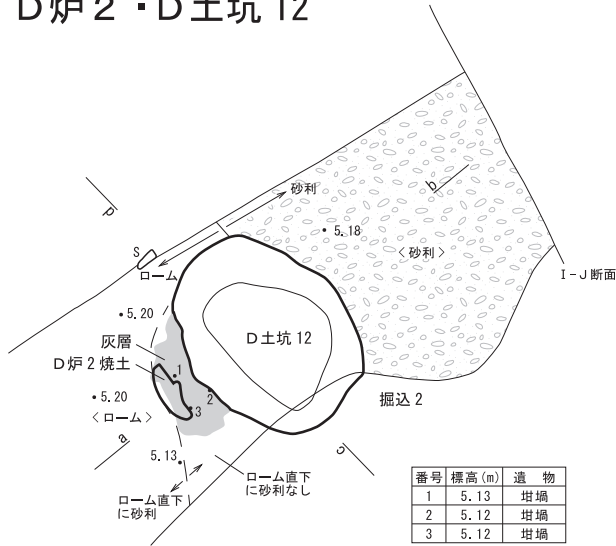
D炉1 注記 (A-B)

- 1: 褐色ローム 10YR4/4 堅; 軟~堅
- 2: にぶい赤褐色焼土 5YR4/4 粘; 中 堅; 軟 ロームを含む
- 3: 黒色灰 10YR2/1 粘; 中~強 堅; 軟
上面に焼土が斑に見られる
- 3': 黒色灰 10YR2/1 粘; 中~強 堅; 軟
- 4: 灰黄褐色灰 10YR4/2 粘; 中~強 堅; 軟 砂質

D土坑9 注記 (E-F)

- 1: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 軟
塊状のロームを含む
- 2: にぶい黄褐色粘土 10YR6/4 粘; 中 堅; 堅
小礫をやや多く含む
- III層
- 3: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 軟~堅 炭を含む

D炉2・D土坑12

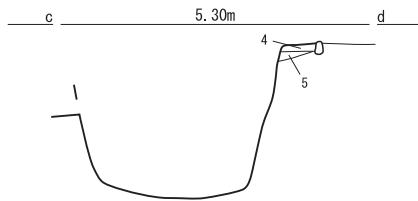


D炉2 注記

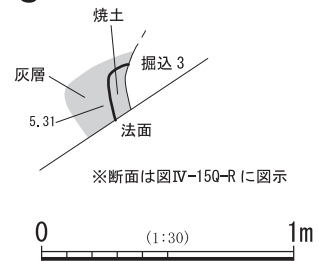
- 1: にぶい黄褐色灰 10YR5/3 粘; 中 堅; 軟~堅
- 2: 灰黄褐色砂 10YR4/2 粘; 弱 堅; 軟~堅
- 3: にぶい赤褐色焼土 5YR4/4 粘; 弱 堅; 軟
- 4: 褐色ローム 10YR4/4 堅; 堅
- 5: 砂利 5cm以下

D土坑12 注記

- 6: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 軟
小礫・ローム粒・炭を少し含む

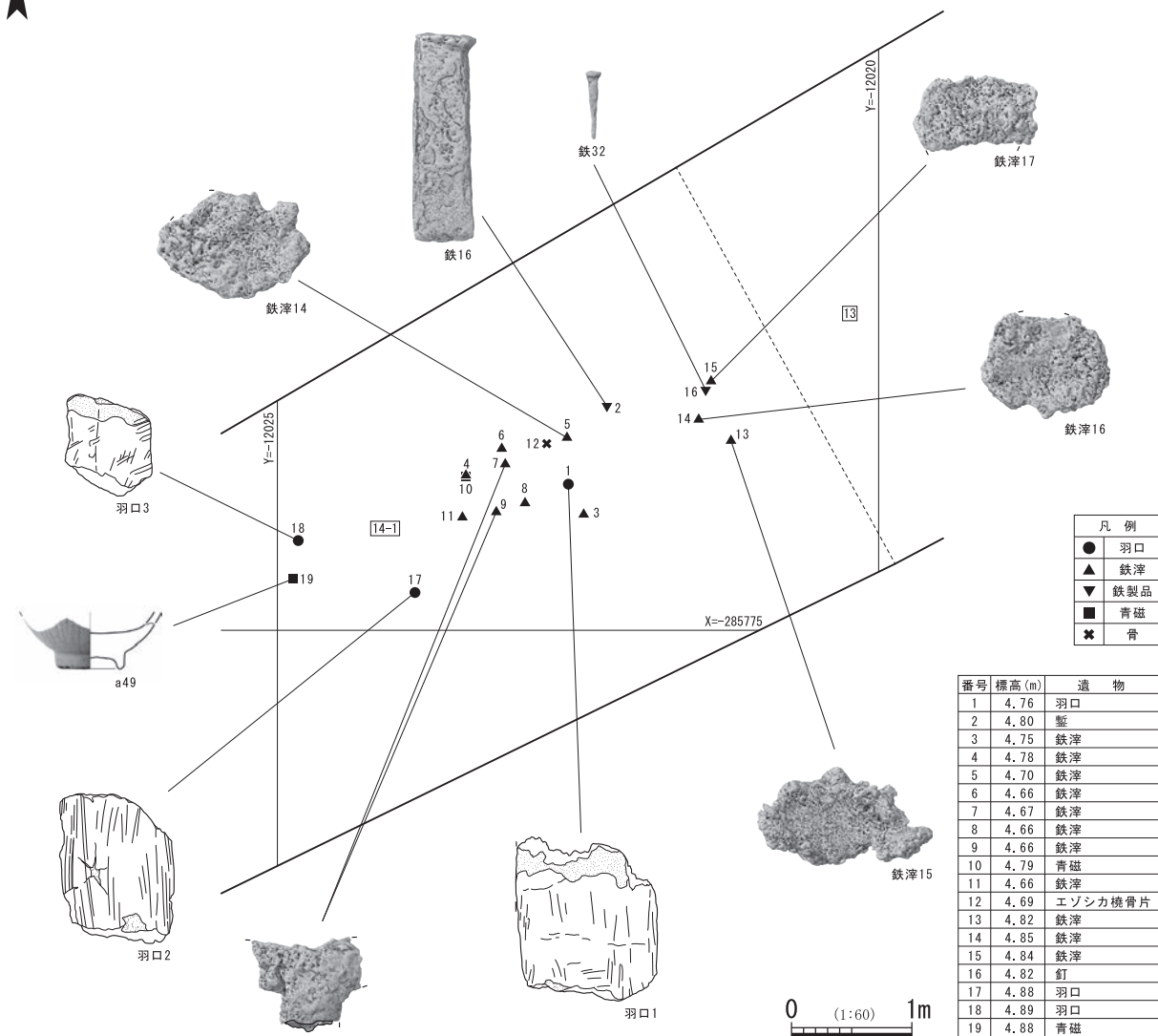


D炉3

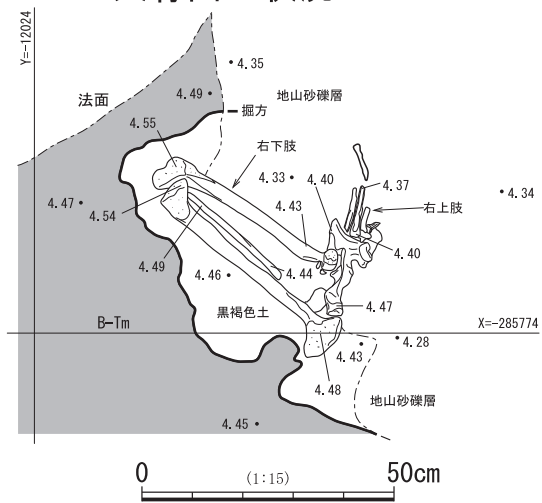


図IV-17 D地区14-1遺構図 (2)

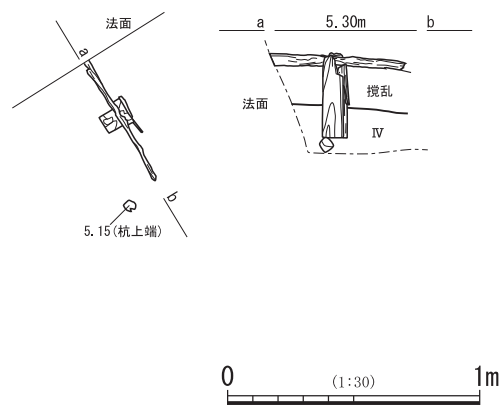
D14-1 鍛冶関連遺物集中



D14-1 人骨出土状況

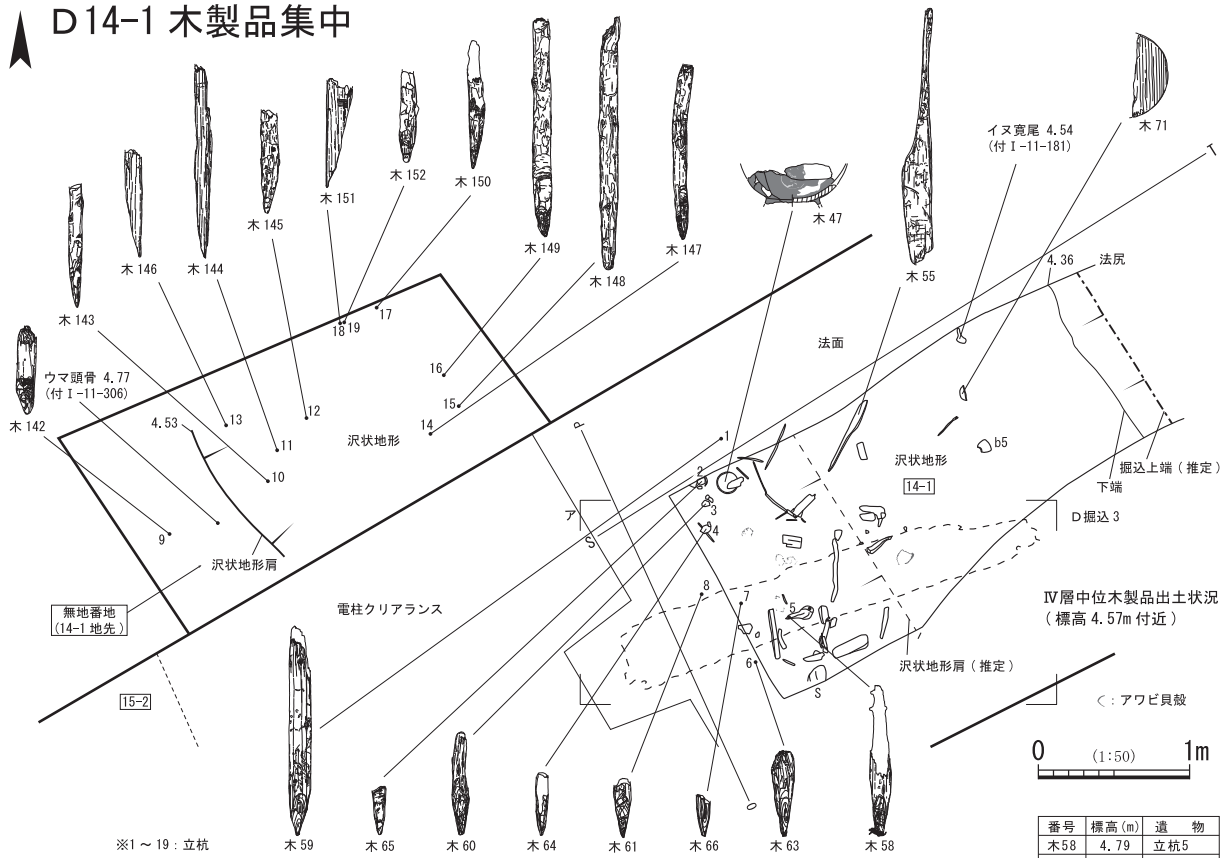


D柵 1



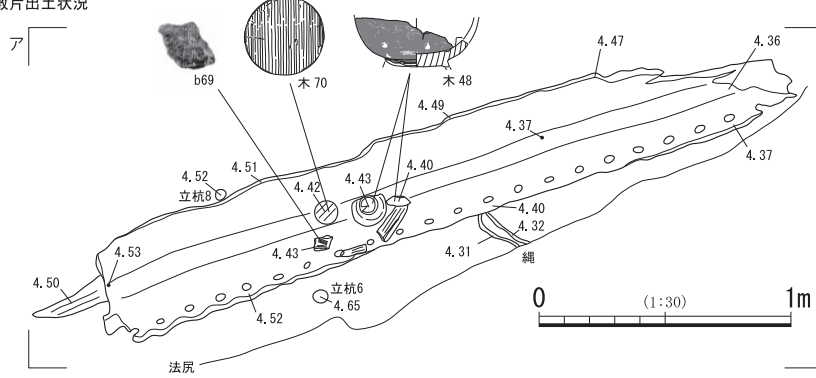
図IV-18 D地区14-1遺構図 (3)

D14-1 木製品集中

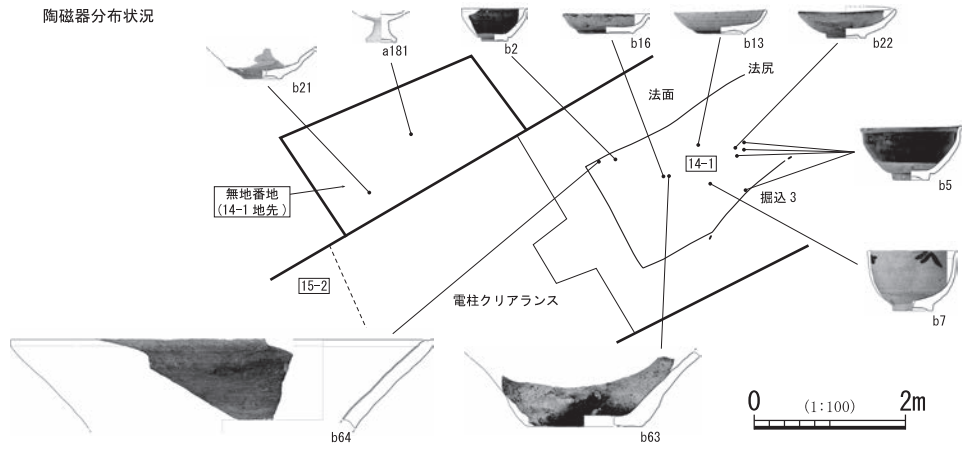


番号	標高(m)	遺物
木58	4.79	立杭5
木59	4.89	立杭1
木60	4.77	立杭3
木61	4.52	立杭8
木63	4.65	立杭6
木64	4.72	立杭4
木65	4.67	立杭2
木66	4.57	立杭7
木47	4.57	漆塗椀
木55	4.55	早椀
木71	4.59	蓋
木142	4.85	立杭9
木143	4.83	立杭10
木144	5.02	立杭11
木145	5.10	立杭12
木146	4.78	立杭13
木147	4.83	立杭14
木148	4.97	立杭15
木149	4.80	立杭16
木150	4.85	立杭17
木151	4.76	立杭18
木152	4.72	立杭19

舟敷片出土状況



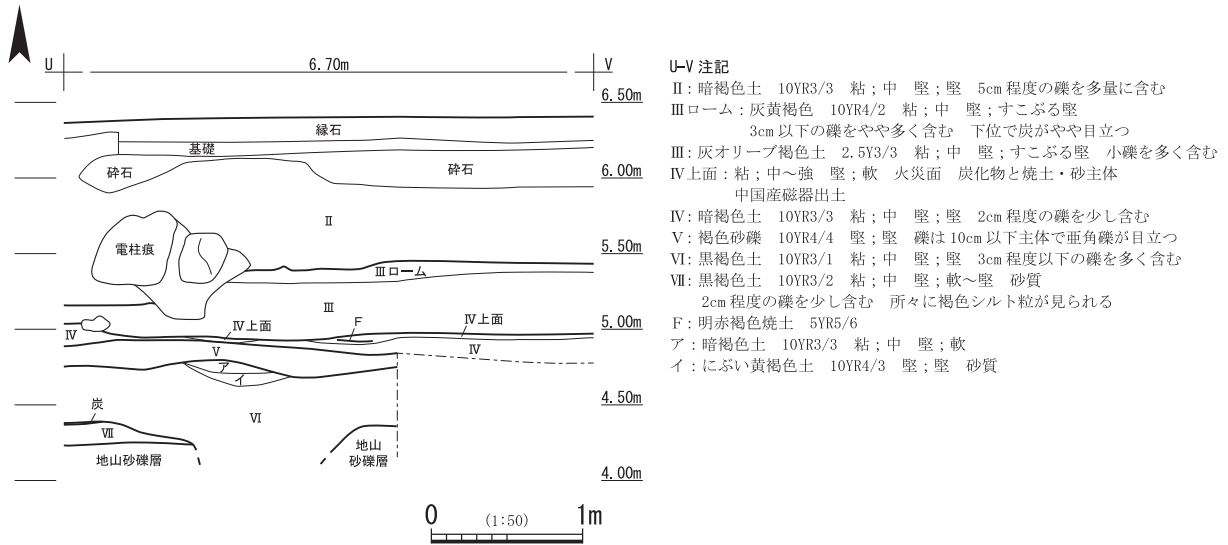
陶磁器分布状況



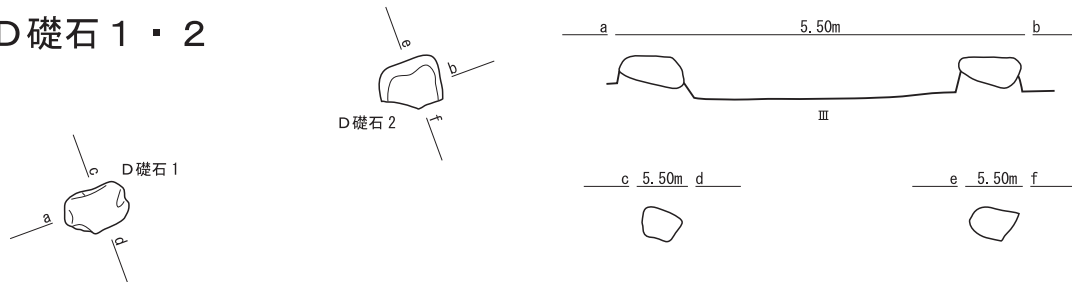
番号	標高(m)	遺物
木48	4.40	漆塗椀
	4.43	
木70	4.42	曲物蓋
b69	4.43	播鉢

番号	標高(m)	遺物
b21	5.08	陶器
a181	4.99	仏飯器
b22	4.85	陶器
b7	4.79	陶器
b16	4.77	陶器
b13	4.74	陶器
b64	4.63	播鉢
b5	4.62	陶器
	4.61	
	4.60	
	4.54	
b2	4.33	陶器
b63	4.23	陶器

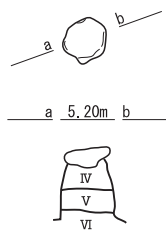
図IV-19 D地区14-1遺構図 (4)



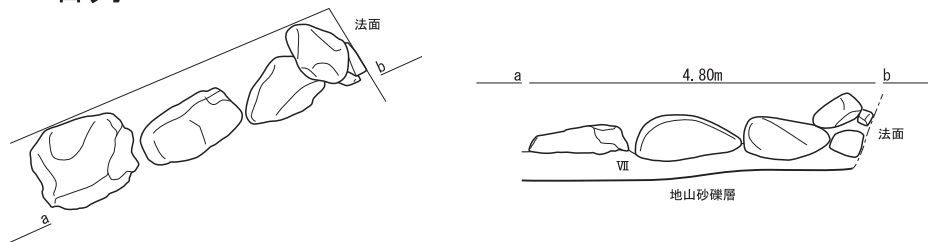
D 礎石 1・2



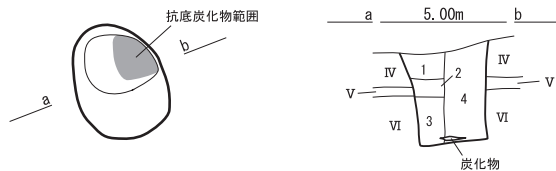
D 礎石 3



D 石列 1

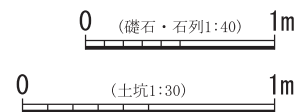


D 土坑 1



D 土坑 1 注記

- 1: にぶい黄褐色土 10YR4/3 粘; 弱 堅; 軟 砂質 直径 0.1 ~ 1.5cm の小砂利を含む
- 2: 褐色土 10YR4/4 粘; 弱 堅; 軟 砂質 砂と直径 0.1 ~ 1.0cm の砂利
- 3: 褐色ローム主体 10YR4/6 粘; 中~強 堅; 軟
- 4: 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中



図IV-20 D地区15-2断面図・遺構図 (1)

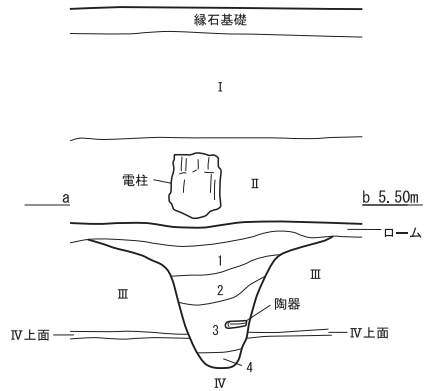


D土坑 2

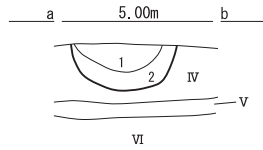
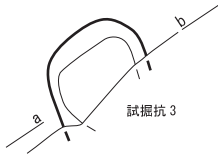


D土坑 2 注記

- ローム：にぶい黄褐色 10YR4/3 粘；強 堅；堅 III層上面
 1：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；すこぶる堅 直径0.5mmの小砂利を3%含む
 2：黒褐色土 10YR3/1 粘；中～弱 堅；すこぶる堅 直径1.0mmの小砂利を15%含む
 3：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；すこぶる堅 直径0.5～1.5mmの小砂利を50%以上含む
 橙色の鉄錆状の粒子混在
 4：黒色土 10YR2/1 粘；強 堅；すこぶる堅



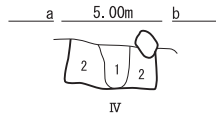
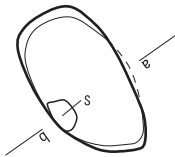
D土坑 3



D土坑 3 注記

- 1：黒褐色砂利 10YR3/2 堅；軟 直径1～3mmの砂利層
 2：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；軟

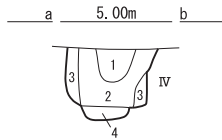
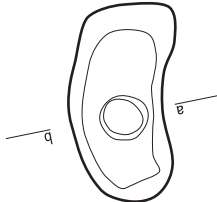
D土坑 4



D土坑 4 注記

- 1：褐色ローム主体 10YR4/6 粘；強 堅；すこぶる堅
 2：黒褐色土 10YR2/3 粘；強 堅；堅 直径0.5～2.0cmの礫と直径0.5cmのローム粒を10%含む

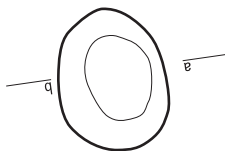
D土坑 5



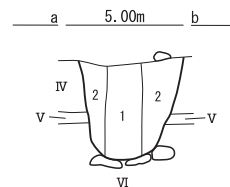
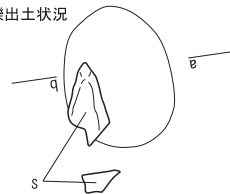
D土坑 5 注記

- 1：にぶい黄褐色砂利 10YR5/3 堅；堅 直径0.1～2.0cmの砂利層
 2：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；堅 直径0.5cmのローム粒を5%含む
 φ0.1～2.0cmの小砂利がやや混 上面～上部金属製品出土層
 3：黒褐色土 10YR3/1 粘；中 堅；堅 焼土粒・炭化物粒を3%含む
 4：黒褐色砂利 10YR3/2 堅；やや軟 直径1.0cmの小砂利層

D土坑 6



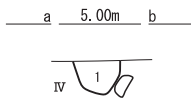
確認面礫出土状況



D土坑 6 注記

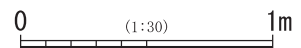
- 1：褐色ローム主体 10YR4/6 粘；中 堅；やや軟
 2：黒褐色土 10YR3/2 粘；中 堅；堅 砂利・礫・ローム粒を多く含む

D土坑 7

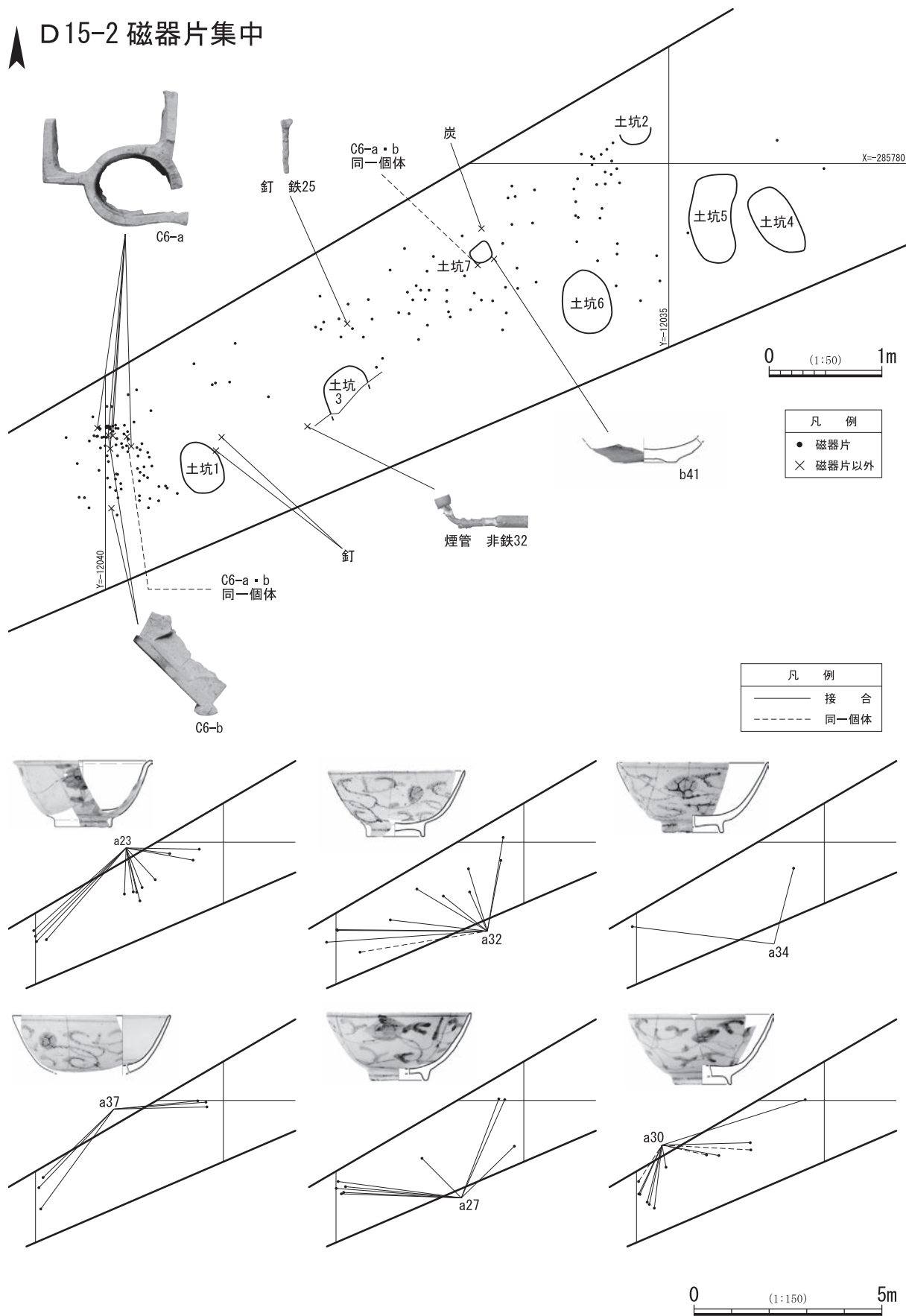


D土坑 7 注記

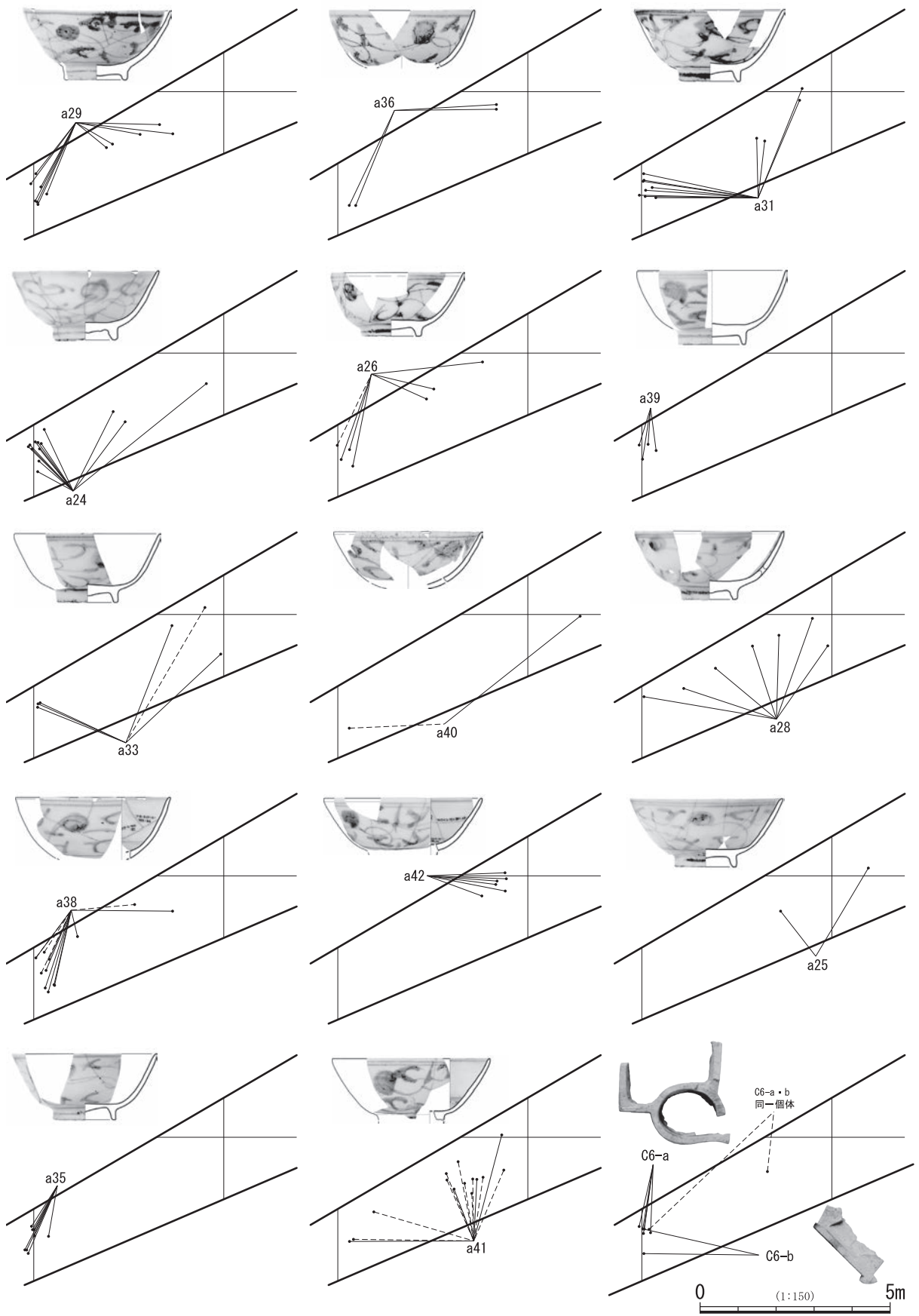
- 1：黒褐色土 10YR3/2 粘；中～強 堅；すこぶる堅 ローム粒を3%含む



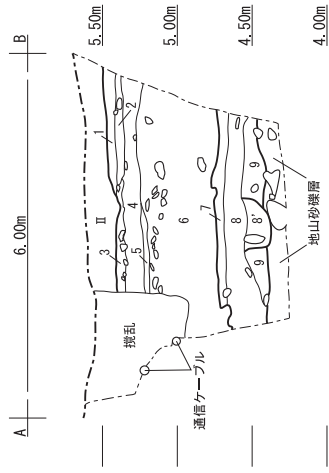
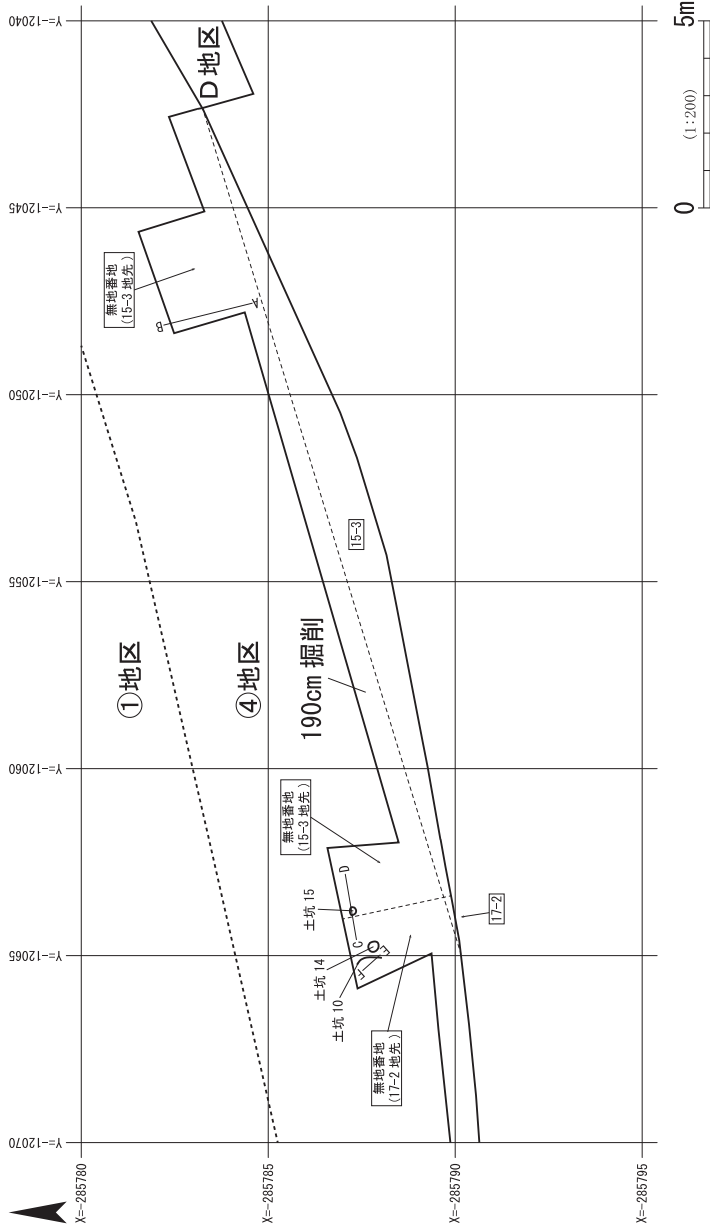
図IV-21 D地区15-2遺構図 (2)



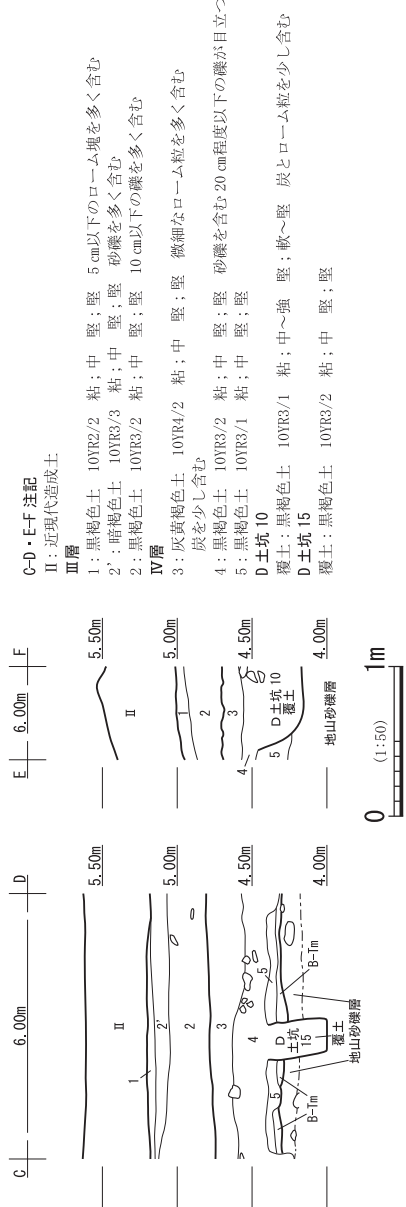
図IV-22 D地区15-2遺構図 (3)



图IV-23 D地区15-2遺構图 (4)

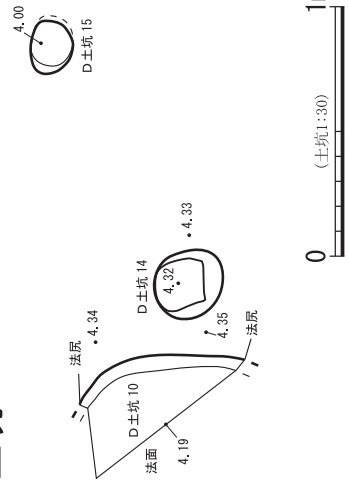


- A-B 注記**
II: 近現代造成土
- III層**
1: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 軟~堅
2: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 軟~堅 砂礫を含む
3: 砂礫 堅; 堅
4: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 1cm以下の礫を多く含む
5: 黒色土 10YR2/1 粘; 中 堅; 堅
6: 灰黄褐色砂礫 堅; 堅 10cm以下の礫を多く含む
大形のもの上位に集中
- IV層**
7: 黒褐色粘土 10YR3/2 粘; 中~強 堅; 軟~堅
層中に厚さ3mm程度の薄層(灰黄褐色シルト~砂)を2、3枚挟む
8: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中~強 堅; 軟~堅
8': 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中~強 堅; 軟~堅 ローム塊・粒を含む
9: 黒色土 10YR2/1 粘; 中~強 堅; 軟~堅 1cm程度のローム粒を含む

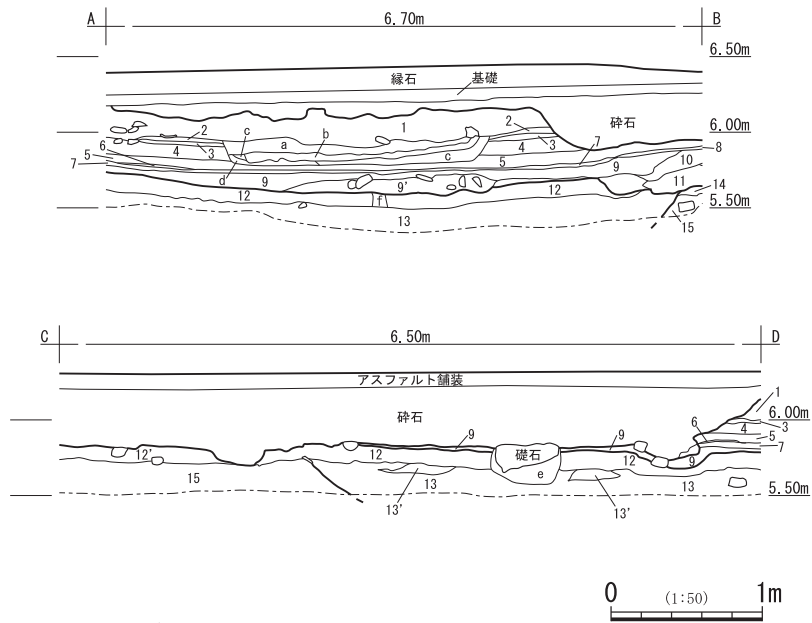


- C-D・E-F 注記**
II: 近現代造成土
- III層**
1: 黒褐色土 10YR2/2 粘; 中 堅; 堅 5cm以下のローム地を多く含む
2': 暗褐色土 10YR3/3 粘; 中 堅; 堅 砂礫を多く含む
2: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 10cm以下の礫を多く含む
- IV層**
3: 灰黄褐色土 10YR4/2 粘; 中 堅; 堅 微細なローム粒を多く含む
炭を少し含む
4: 中 堅; 堅 砂礫を含む 20cm程度以下の礫が目立つ
5: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
D土坑10
覆土: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中~強 堅; 軟~堅 炭とローム粒を少し含む
D土坑15
覆土: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅

D土坑 10・14・15



図IV-24 ④地区15-3・15-3地先・17-2・17-2地先平面図・断面図・遺構図



A-B・C-D 注記

II層

- 1: にぶい黄褐色土 10YR4/3 粘; 中 堅; 堅 3cm程度(最大15cm)の礫を多く含む
- 2: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
- 3: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
- 4: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅 3cm以下(最大12cm)の礫を多く含む
- 5: 褐灰色土 10YR4/1 粘; 中 堅; すこぶる堅
- 6: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
- 7: 灰黄色粘土 2.5YR6/2 粘; 中 堅; すこぶる堅 砂質
- 8: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅
- 9: 灰黄褐色砂 10YR4/2 堅; 堅 焼土粒・炭を含む
- 9': 砂礫集中部分
- 10: 9と7が混在 粘; 中 堅; 堅
- 11: 暗褐色土 10YR4/4 粘; 中 堅; 軟 ロームを含む

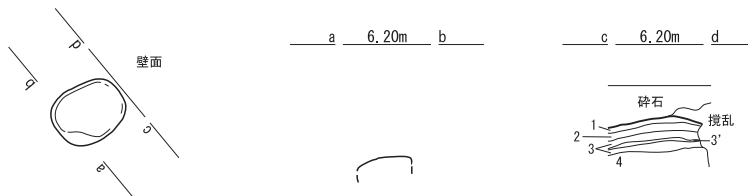
III層

- 12: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅~すこぶる堅 混入物のほとんどないローム 上面に焼土
- 12': 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅~すこぶる堅 灰黄褐色土(10YR3/2)と2cm以下の礫を多く含む
- 14: 焼土
- 15: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 堅 5cm以下の礫を多く含む

火事場整理穴1覆土

- 13: 灰黄褐色砂礫 10YR4/2 焼土・炭を多く含む 30cm程度以下の焼け礫が目立つ
- 13': にぶい赤褐色砂 5YR4/4 粘; なし 堅; 堅 1cm以下の礫を多く含む
- a: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
- b: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅~すこぶる堅 1cm以下の礫を含む
- c: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅
- d: 細礫 粘; なし 堅; 堅 1cm以下の礫層
- e: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; 軟 焼土粒を多く含む
- f: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅

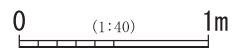
▲ D 礎石 14



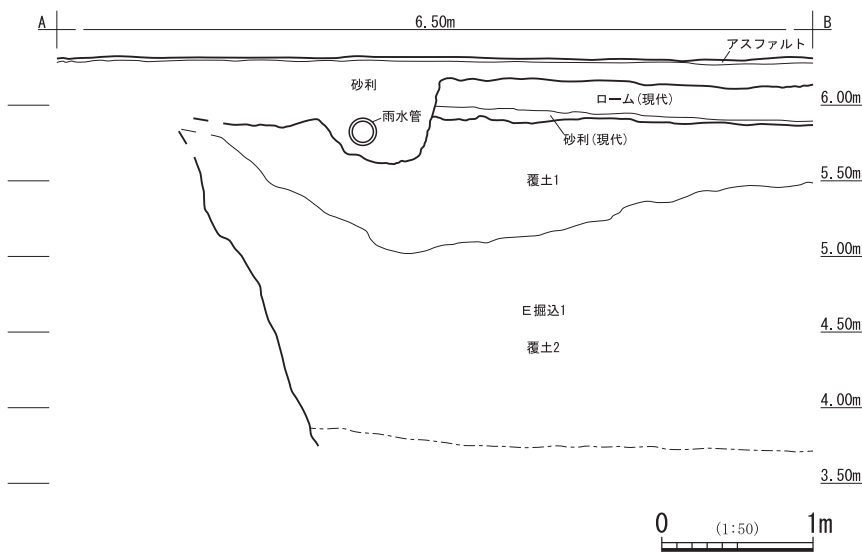
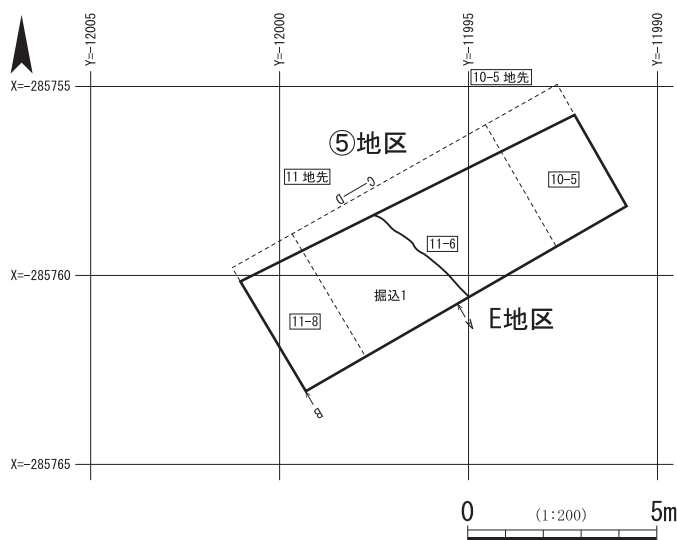
C-D 注記

III層

- 1: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; すこぶる堅 上面に焼けている部分があり、その上に炭化物の薄層がのる
- 2: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; すこぶる堅
- 3: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; すこぶる堅 黒褐色土を挟む(3')
- 4: 黒褐色土 10YR3/2 粘; 中 堅; すこぶる堅 1cm程度の礫を多く含む



図IV-25 ⑥地区12断面図・遺構図

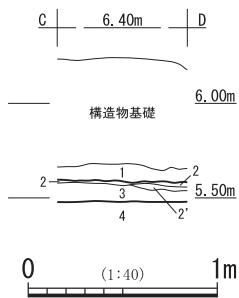


A-B 注記

E掘込1

覆土1: 褐色ローム 10YR4/6 粘; 強 堅; 堅 遺物や礫等の混入なし 近現代の攪乱層

覆土2: 黒褐色土 10YR2/3 粘; 中 堅; 堅 砂利・貝殻片・陶磁器を含む 焼土や炭はない



C-D 注記

II層

1: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅

III層

2: 褐色ローム 10YR4/4 粘; 中 堅; 堅

2': 2と黒褐色土(10YR3/1)の薄い互層 焼土粒や炭を少し含む

3: 暗褐色土 7.5YR3/3 粘; 中 堅; 堅 1cm以下の焼土粒や炭を含む

4: 黒褐色土 10YR3/1 粘; 中 堅; 堅 4cm以下の礫を多く含む

図IV-26 E・⑤地区平面図・断面図

表IV-2 遺構一覽表

遺構名	地区地番	所属層位	推定年代(C=世紀)	上端長径×短径/下端長径×短径/深さ(m)	備考
A礎石1	A93-2	A-III	17C~19C後半	0.54×0.29/0.09	凝灰岩
A柱1	A94	A-III	18C	0.15×0.13/0.44	
A土坑1	A94	A-III	18C~19C後半	0.47×0.45/0.28×0.23/0.28	A土坑3より新しい
A土坑2	A93-2・94	A-III	18C~19C後半	(0.78)×(0.70)/(0.71)×(0.53)/0.31	
A土坑3	A94	A-III?	15C~16C?	0.79×0.66/0.63×0.50/0.32	
B礎石1	B85-3	B-II~III?	15C以降	0.48×0.31/0.16	凝灰岩
B掘込1	B89	B-III	16C?	(3.46)×5.77/(2.76)×4.56×/0.92	
B掘込2	B86	B-III	16C	(-)×5.88/(-)×4.32/1.30	
C礎石1	C18-1	C-III	16C~18C	0.57×0.36/-	
C礎石2	C19	C-III	16C~19C	0.49×0.33/0.17	
C土坑1	C19	C-V	15~16C	0.33×0.30/0.27×0.23/0.13	C土坑3~8より新しい
C土坑2	C19	C-V	15~16C	0.31×0.31/0.22×0.21/0.14	C土坑3~8より新しい
C土坑3	C19	C-V~VI	15~16C	0.34×0.29/0.25×0.24/0.07	
C土坑4	C19	C-V~VI	15~16C	0.31×(0.28)/0.24×0.20/0.24	
C土坑5	C19	C-V~VI	15~16C	0.30×0.24/0.23×0.19/0.10	C土坑4を切る
C土坑6	C19	C-V~VI	15~16C	0.30×(0.24)/0.21×0.17/0.24	
C土坑7	C19	C-V~VI	15~16C	0.21×0.21/0.14×0.14/0.10	C土坑6を切る
C土坑8	C19	C-V~VI	15~16C	0.35×0.35/0.29×0.28/0.13	
C土坑9	③無地番地	③-IV	15C末~16C	0.13×0.12/0.09×0.08/0.05	
C土坑10	③18-1・無地番地	③-IV	15C末~16C	0.56×0.46/0.54×0.42/0.07	
C土坑11	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.46×0.41/0.39×0.37/0.13	
C土坑12	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.21×0.20/0.17×0.15/0.05	
C土坑13	③18-1・18-1地先	③-IV	15C末~16C	0.35×0.30/0.30×0.26/0.09	
C土坑14	③18-1地先	③-IV	15C末~16C	0.27×0.25/0.23×0.21/0.09	
C土坑15	③18-1地先	③-IV	15C末~16C	0.10×0.10/0.08×0.08/0.03	
C土坑16	③18-1	③-IV	15C末~16C	(0.66)×0.49/(0.63)×0.42/0.06	
C土坑17	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.53×0.47/0.47×0.39/0.13	C地区内
C土坑18	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.14×0.12/0.11×0.09/0.03	
C土坑19	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.08×0.08/0.06×0.06/0.09	
C土坑20	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.35×(0.28)/0.29×(0.25)/0.08	礎盤石
C土坑21	③18-1地先	③-IV	15C末~16C	0.08×0.06/0.05×0.05/0.03	
C土坑22	③18-1	③-IV	15C末~16C	0.21×0.20/0.15×0.17/0.08	
C土坑23	③18-1地先	③-IV	15C末~16C	(0.42)×(-)/0.19×(-)/0.29	断面のみ
C土坑24	③18-1地先	③-IV	15C末~16C	(0.46)×(-)/0.28×(-)/0.30	断面のみ
D石積1	D13	D-III	17C	(2.31)×0.63/0.58	
D石列1	D15-2	D-VII	15~16C	(1.84)×0.46/0.36	
D礎石1	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.35×0.24/0.16	泥岩、D礎石2と並ぶ
D礎石2	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.34×0.26/0.16	泥岩、D礎石1と並ぶ
D礎石3	D15-2	D-IV	17C前葉	0.23×0.22/0.10	チャート
D礎石4	D14-1	D-III	19C後半	0.57×0.41/0.18	D礎石13と並ぶ
D礎石5	D14-1	D-III	18C前葉	0.37×0.32/0.17	泥岩、D炉1の金床石か
D礎石6	D14-1	D-III	17C	0.33×0.26/0.17	玄武岩、D礎石7・8と並ぶ
D礎石7	D14-1	D-III	17C	0.29×0.26/0.15	玄武岩、D礎石6・8と並ぶ
D礎石8	D13	D-III	17C	0.38×0.28/0.14	泥岩、D礎石6・7と並ぶ
D礎石9	D14-1	D-III	18~19C	0.40×0.24/0.17	泥岩
D礎石10	D14-1	D-III	18~19C	0.46×0.28/0.22	斑れい岩
D礎石11	D14-1	D-III	18C	0.38×0.31/0.19	チャート
D礎石12	D14-1	D-VII?	16C?	0.27×0.25/0.15	泥岩
D礎石13	D14-1	D-III	19C後半	0.54×0.37/0.34	閃緑岩、D礎石4と並ぶ
D礎石14	⑥12	⑥-III	17~19C後半	0.39×0.31/(0.08)	斑れい岩
D炉1	D14-1	D-III	18C前葉	掘込部分(0.66)×0.64/0.36×0.39/0.25	D炉2より新しい
D炉2	D14-1	D-III	18C前葉	灰部分(0.50)×(0.25)/0.07	
D炉3	D14-1	D-III	18C前葉	灰部分(0.34)×(0.22)/0.05	
D溝1	D13	D-IV	17C初頭	(1.90)×0.40/(1.90)×0.16/0.10	
D土坑1	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.47×0.36/0.40×0.31/0.42	
D土坑2	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	(0.28)×(0.11)/(0.12)×(0.05)/0.52	
D土坑3	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	(0.36)×0.40/(0.29)×0.32/0.18	
D土坑4	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.66×0.37/0.60×0.37/0.20	
D土坑5	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.79×0.42/0.63×0.31/0.29	
D土坑6	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.57×0.43/0.34×0.26/0.41	
D土坑7	D15-2	D-III	17C前葉~19C後半	0.19×0.17/0.10×0.08/0.12	
D土坑8	D13	D-II	19C後半(近代?)	(1.71)×(0.53)/(1.58)×(0.45)/0.48	
D土坑9	D14-1	D-III	18C前葉	0.52×0.49/0.42×0.38/0.13	
D土坑10	④17-2地先	④-IV	15C末~16C	(0.71)×(0.41)/(0.67)×(0.35)/0.30	
D土坑11	D13	D-III	17~19C	0.46×0.38/0.24×0.23/0.50	
D土坑12	D14-1	D-III	18C前葉	0.82×0.65/0.58×0.39/0.61	D炉2を切る
D土坑13	D13	D-VII	16C	(0.47)×(0.21)/(0.21)×(0.13)/0.25	
D土坑14	④17-2地先	④-IV	15C末~16C	0.30×0.26/0.24×0.22/-	礎盤石
D土坑15	④15-3地先	④-IV	15C末~16C	0.21×0.17/0.20×0.17/0.38	
D火事場整理穴1	⑥12	⑥-III	19C後半	(3.93)×(3.36)/(-)×(-)/(0.28)	
D掘込1	D13	D-II	近現代	(5.20)×(1.42)/(-)×(-)/(-)	
D掘込2A	D13	D-II	近現代	(2.69)×(1.24)/(-)×(-)/(-)	
D掘込2B	D14-1	D-III	19C後半	(2.64)×(1.08)/(-)×(-)/(1.37)	
D掘込3	D14-1	D-III	19C後半	(4.68)×(0.88)/(-)×(-)/(1.55)	
D掘込4	D14-1	D-III	19C後半	(-)×(-)/(-)×(-)/(0.45)	
D掘込5	D13	D-VII	16C	(2.07)×(5.24)/(1.44)×(4.78)/(0.95)	
D掘込6	⑥12	⑥-II	近現代	2.91×2.52/(-)×(-)/(-)	
D欄1	D14-1	II	近現代	(0.55)×0.12/0.34	
D15-2磁器片集中	D15-2	D-IV上面	17C前葉	7.20×1.60	
D13木製品集中	D13	D-IV	16C後半~17C初頭	4.93×2.28	集中内立杭3本
D14-1木製品集中	D14-1・④14-1地先	D-IV	16C中葉~17C初頭	泥状地形西側層~東側層(3.39)×3.67	集中内立杭19本
D14-1鍛冶関連遺物集中	D14-1	D-IV	16C後半	3.85×0.85	
D14-1灰白色堆積物	D14-1	D-III	18~19C	(1.45)×(1.20)/0.05(Q-R)の層厚	
D14-1人骨掘込	D14-1	D-VII	16C	B-Tm上面(0.72)×(0.50)/(-)×(-)/0.35(K-Lの深さ)	
E掘込1	E11-6・8	E-II	近現代	(5.03)×(3.38)/(-)×(-)/(2.20)	

V 遺物

1 概要

2か年度の調査で出土した遺物の総点数は、土陶磁器25,935点、金属製品2,603点、木製品6,021点、繊維製品4点、石製品34点、骨角貝製品64点、ガラス玉18点、動物遺存体417点である(表V-1)。

土陶磁器は主に近世の食膳具(碗・皿・坏など)、調理具(搗鉢・鍋など)、貯蔵具(甕・壺など)、仏神具、化粧道具、火道具、喫煙具、遊具類など幅広い器種がみつかり、357点掲載した。金属製品は鉄製品、非鉄製品、銭を分け、227点掲載した。また、金属生産関連の遺物についても後述する。木製品には舟敷、下駄、木札、漆塗椀、箸などがあり、主な地区ごとに計164点掲載した。石製品は硯、砥石など15点を掲載した。骨角貝製品は31点掲載した。ガラス玉は18点全点掲載し、分析結果は付編I-10に掲載した。このほか動物遺存体は魚貝類、鳥類(ニワトリなど)、哺乳類(イヌ、ネコ、シカ、ウマ、アシカなど)などのほか、人骨が半体出ている。動物遺存体の詳細は付編I-11、出土人骨についての鑑定結果は付編I-12に掲載した。

なお、整理作業中に変更した層位・遺構名は、各文や表、動物遺存体をはじめとする分析結果中では変更前の名称が使われている場合がある。変更についてはⅢ章参照。

2 土陶磁器(図V-1~33、表V-2~16)

(1) 分類等

「a磁器」、「b陶器」、「c土器・瓦類ほか」の3つに分け、a→b→cの順で掲載した。掲載点数内訳は、磁器185点、陶器116点、土器ほか56点、計357点である。胎土には磁・陶・土・瓦質・半磁半陶(軟質胎土)・土師質などがあり、「土器その他」の掲載一覧にのみ「胎土」の項目を設けた。

a磁器類 陶石に粘土や石灰などを混ぜたものが材料。ロクロや型作りなどで成形後、高温焼成したものの。染付や色絵で彩色されるものが多い。出土している磁器類の主な産地は肥前・北部九州産が最も多い。そのほか瀬戸・美濃産、中国など。形状は碗、皿、蓋物、盤、坏、鉢、瓶・德利類、水柱、猪口、急須、合子、段重、香炉、火入れ、灰吹き、紅猪口、植木鉢、仏飯器、散蓮華、戸車、碇子、面子など。

b陶器類 粘土を材料とし、たたらづくり、手びねり、型作り、ロクロなどで成形後施釉し、磁器よりもやや低い温度で焼成する。碗、皿、鉢、盤、向付、搗鉢、甕・壺類(須恵器含む)、香炉、火入れ、水柱、土瓶、瓶・德利類、植木鉢、鍋類(土鍋・行平など)がある。主な産地は肥前・北部九州が主体で、そのほか瀬戸・美濃、京・信楽、堺、備前、丹波、須佐、石見、津軽、珠洲、越前などがある。

c土器・瓦類ほか 低温焼成によるもの。縄文時代・続縄文時代・擦文時代のいわゆる土器のほか、中～近世のかわらけ、灯明皿、焜炉、七厘、管状土錘、人形、飯事道具、箱庭道具、遊具、窯道具、鍛冶道具(埴塙・轆の羽口など)がある。瓦質製品には風炉、火鉢などがある。なお瓦は胎土が陶質(瓦質)であるが、ここで掲載した。胎土がやや粗くもろい赤茶色の陶製(鉄泥塗瓦・釉薬瓦)のものと、硬質で灰色がかった「瓦質」の主に2種類が出土している。また、素焼きであっても明らかに(中)近世のものは、粘土の精製度合いが粗く焼成温度が低い縄文土器や擦文土器などと区別

するため、胎土を「陶」としたものがある。

掲載した土陶磁器の観察表（表V-5～14）の項目は以下の通りである。

器種の記載：500円玉（φ26.5mm）大未満の破片は器種分類を行っていない。主な器種名は以下のとおりである（東京大学1998ほか）。なお法量については既刊の報告書（北埋調報290）を参考にした。

- ・碗 上方が開口する碗形の製品。「小碗（口径が91mm以下のもの）」、「中碗（口径が91mm～120mmのもの）」という呼称を使用している部分がある。
- ・皿・盤 上方が開口する平状の製品。大型（口径258mm以上）のものは大皿または盤。
- ・鉢 上方が開口する碗形、桶形、筒形などの製品のうち、法量・器形から「碗」「猪口」「仏飯器」類などには分類されない製品。
- ・坏 小法量（口径が90mm以下）の高台を有する碗形の製品。
- ・擂鉢 内面に擂目を有する鉢形製品。
- ・甕・壺 胴部と縊れる頸部を有する袋物製品。
- ・急須 注口と把手を有する蓋付の茶器。
- ・瓶・徳利 強くすぼまる頸部を有する袋物製品。内面は無釉が多い。
- ・水注 注口と把手を有する蓋付の製品。通常高台が付く。
- ・猪口 小法量（口径が90mm以下）の高台のない桶形の製品。
- ・土鍋・行平鍋 蓋付で外面下半無釉、上半から内面施釉の鉢形製品。土鍋は両把手、行平は注口を有する片手鍋。
- ・土瓶 蓋付で注口と、別胎質の持手（植物性の弦など）を上につけるための把手（耳）を有する注器。急須より大きく直火で使用することを前提とする。
- ・香炉・火入れ 多くは内面下半が無釉の鉢形、筒形製品。香炉は足が付くことも多い。
- ・仏飯器 碗形に高い足がつく製品。
- ・紅猪口 小さく浅い皿状の型押し製品（口径50mm以下）。内面～口縁付近まで施釉、しのぎ模様の外側は無釉。
- ・かわらけ 素焼の小皿。
- ・灯明皿 素焼きまたは低火度釉を施した土・陶製の皿状の灯火具。内面に灯芯を支えるための段や欠けを有すものもある。油を受ける「灯明皿受け」を下に敷いて使用することもある。
- ・焜炉・七厘 風口を有する素焼きの火器。焜炉は全体形状が不明なものが出ている。七厘は鉢形で多くは3本脚が付き、内側にサナ（穴の開いた素焼の板）を乗せて使用。
- ・火鉢 瓦質で足付の火器道具。
- ・瓦 湾曲した板状、筒状の製品。屋根を葺く以外に外壁に漆喰で塗りこめて、ナマコ壁に利用する平板状のものがある。
- ・植木鉢 底部に孔が開いた桶形の製品。出土・掲載したものは3脚付である。
- ・人形 人・動物などを象った土・陶製品。
- ・遊具 土玉、土鈴、独楽、面子など。
- ・飯事道具 ミニチュアの碗や鉢など。
- ・土錘 素焼で管状の紡錘形の土製品。漁撈具。
- ・土器 縄文土器、続縄文土器、擦文土器など。
- ・坩堝・羽口 土製の鍛冶道具。

種類の記載：磁器表の項目である。白磁、染付、青磁、色絵、染付青磁、呉須赤絵、瑠璃釉など。

破片点数：掲載遺物の接合点数、同一と思われるが非接合の破片点数を記した。

製作地の記載：磁器の主な製作地は波佐見を含む肥前、瀬戸、京、中国景德鎮、中国龍泉窯、中国漳州窯、中国福建・広東省の諸窯である。なお中国産のものは窯が複数存在し、周辺地域の類似した磁器類を含めるため、「景德鎮系」、「龍泉窯系」、「漳州窯系」、「中国南方系」という表現を使用した。

陶器の主な産地は肥前、瀬戸・美濃、京・信楽、石見、丹波、堺、越前、備前、珠洲、越後、須佐などである。土器や瓦、遊具等で産地が明確なものは乏しい。近現代のものと思われるものについては産地特定をあえて行っていない。

年代の記載：おおむね世紀を、まれに西暦を使用し、1世紀内の細分は以下のように表記した。

2分割する場合は「前半」「後半」または「1/2」「2/2」を世紀の数字の後に付けた。

3分割する場合は「前葉」「中葉」「後葉」または「1/3」「2/3」「3/3」を世紀の数字の後に付けた。

4分割する場合は「1/4」「2/4」「3/4」「4/4」を世紀の数字の後に付けた。

5分割する場合は「1/5」「2/5」「3/5」「4/5」「5/5」を世紀の数字の後に付けた。

例：16_{2/2} = 1551～1599年ごろ、17_{3/4} = 1651～1675年ごろ 15_{5/5} = 1481～1499年ごろを示す。

また、世紀数字の後に「初」や「末」を付して表現したものもある。

計測値：口径・器高・底径を記した。土製管状土錘は、底径の代わりに穴径を記した。口縁部の破片がある場合は、図上で推測した口径を記した。（ ）で記したものは残存計測値である。

残存部位：口縁部、頸部、胴部、底部、脚部、完形などの名称で表記した。

備考：胎土、形状の特徴、目積み跡、格子目タタキ痕、高台の特徴、文様・釉薬の記述、被熱、海あがり※（野上2010、佐藤2014）、漆継、分類型式名、出土地点や層位の特徴などを記入した。成形については、ほとんどがロクロ成形であるため、それ以外の「型作」、「木型打ち込み」、「型押し」、「手づくね」、「輪積み」などを追記した。

※海あがり（海揚げり、海上がり）品とは陸上からの廃棄や積載船の沈没など何らかの理由で海中に入ったため全体が摩耗した土陶磁器片のことである。中近世では城下の火災後の整地に海砂や海砂利が客土として利用されており、整地層・攪乱層などで多く出土する。また松前町内の海岸には現在も多く海あがり土陶磁片が打ち上げられている。製作地、年代、器種などがバラバラで、摩耗・摩滅により接合・復元も難しく、遺物本来の情報を調査に反映できないことが多い。

実測図・展開写真について

断面図は、破片の残存部を最大限合成し器形を反映できるように作成した。遺物の写真図版ページは設けず、遺物実測図・展開図内にカラー写真を合成し、写真図版と実測図を兼ね合わせた。図・写真の縮尺はページごとにスケールを付した。おおむね3分の1大で掲載し、紅猪口は2分の1大、土製品のうち、人形と飯事道具、遊具等は3分の2大で掲載した。

(2) 磁器

185点掲載した。出土量の割合は陶器に比べ、2か年の調査とも磁器が圧倒的に多い（表V-2、図V-1）。現唐津地区が単なる町人地であっただけでなく、城下で武家もあった福山城下町の性格を表している。今回部分的ではあるが中世の層まで調査を行った結果、中国各地で生産された磁器が国産の陶器とともに数多く出土していることも、城下町成立以前からこの地域がそれなりの需要を持っていたことを表している。

製作地は肥前が多く、ついで中世の中国産、近世の瀬戸、京となる（表V-4、図V-1）。肥前

産の磁器には複数個体の揃えで利用されていたと思われるものも多く、同一の様子が施された同形の破片が複数個体分存在することがわかる器もある。器種は碗・皿がほとんどで、瓶・徳利、その他容器類が続く。

中国産磁器には産地が龍泉窯系、漳州窯系、景德鎮系、南方系と多数ある。出土層位はⅠ・Ⅱ層や攪乱層からも出土するが、C区やD区のⅢ層以下Ⅳ・Ⅴ層からの出土が顕著である（表Ⅴ-4）。併出する国産品は珠洲産や越前産の播鉢、瀬戸・美濃皿、唐津皿などである。

碗（碗の蓋も含む）（a1～a66）66点掲載した。a23～a61は中国産である。a23～a42は16世紀後葉の漳州窯系の青花碗で、D15-2地区Ⅳ層上面（火災面）で出土した一括資料である。接合状況から、掲載した20個体相当があったと思われる。ほとんどの破片が被熱し、表面の光沢が失われている。基本の唐草（折枝花）文様は共通するが、内外の圏線文は、一重あるいは二重のもの、圏線文がないものなど個体ごとに異なる。呉須の色合いや濃さ、高台の高さなどもそれぞれで違う。特にa23は端反り口縁で、呉須の色合いも他の個体と趣を異にする。a28は施釉以前から胴部に5mmほどの穴が1か所開いていた（図中の↑か所）。これらの碗と共に陶b41の瀬戸の丸皿、土c6-a、bの焜炉？が併出している。a9、a12はいわゆるコンニャク判で施文されている。器生産の効率化を図り、絵付けを簡易化した江戸中～後期に肥前で採用された染付技法である。実際にコンニャクが使われたかは不明であるが、コンニャク様の軟らかい素材を用い、スタンプのように使用して施文した。筆で直接手描きするよりも輪郭が滲み、内側は薄色になる。

皿（a67～a143）出土量は碗よりも多く、77点掲載した。a102～a143は中国産である。a142の漳州窯皿はa23～a42の漳州窯碗と併出したものである。a84、a92は道道を挟んだB区とD区で、a110は町道を挟んだD区とE区でそれぞれ出土したものが接合した。

鉢（a144～a148）完形品はなく、破片を5点掲載した。a146～a148は口径が20cm以上ある大型のものである。

その他（a149～a185）掲載青磁盤3点（a149～a151）のうちa150とa151は龍泉窯系である。a149は、令和4年度調査B区出土品（-b）と令和5年度調査D区地先出土品（-a）で、同一個体と思われる盤である。掲載杯（a152～a162）のうち7点が中国産である。a169・a170の瑠璃釉植木鉢は19世紀のものであるが、瀬戸の陶工三代目川本治兵衛の作とのことで（付編Ⅰ-6参照）、a169の底部には墨書がみられる。

（3）陶器

116点掲載した。出土点数の割合は土陶磁器全体の29.3%である。主な製作地は肥前、瀬戸・美濃、京・信楽で、播鉢や甕・壺では肥前・北九州（上野・高取系）、珠洲、越前、堺、備前、丹波、須佐、瀬戸などがある。播鉢や甕・壺は大型な個体が多く、必然的に破片数も多くなるため、集計表の数値はそのまま個体数の多さを反映しているわけではない。また、過去の松前町内での報告等で見られる悪戸焼（津軽）や箱館焼（函館）の破片は出土していないことは今回の調査の特徴の一つである。

碗（b1～b10）天目碗4点は16世紀の瀬戸・美濃系、b10の煎じ茶碗は18世紀の京・信楽系である。

皿（b12～b44）磁器同様、碗より出土点数が多い。瀬戸・美濃や肥前が主であるが、b36は朝鮮系と思われる破片である。b21～b25は胎土目が明瞭に残る。b41は磁a23～a42の漳州窯碗片と共に火災面で出土している。

鉢（b50～b56）b52とb53は、いずれも道道を挟んで山側の地区と海側の地区からそれぞれ出土した破

片が接合している。

播鉢(b57~b79) 15世紀の珠洲産、15~17世紀の越前産のほか、肥前、瀬戸、備前、須佐、堺産(17~18世紀)のものが出土している。b63は舟敷よりも下位で、b69は舟敷きの上に乗った状態で出土したものである。

甕・壺(須恵器含む)(b80~b102) 個体が大型なため破片数も多い。17世紀を中心とした肥前産が主だが、10世紀の五所川原の須恵器甕、14~15世紀の珠洲産、18世紀の信楽、19世紀の丹波や石見もみられる。b99は信楽の腰白茶壺である。

香炉(b104・b105) 肥前のもので、掲載品を含め揃えて10個体以上の破片が出土している。ほぼ完形に近い状態に復元できた2点を掲載した。

その他 b113の灯明皿、b116土瓶蓋は近代明治期のものである。

(4) 瓦・土製品・遊具・土器など

56点掲載した。c6の焜炉は磁a23~a42の漳州窯碗片と共にIV層上面の火災面で出土している。全形は不明であるが、一部扇形をした部分がある。なお、陶器製と思われたためここで掲載したが、凝灰岩を削って成形された石製品である。

瓦片713点のうち硬質で濃灰色のもの(355点)は胎土を「瓦質」とし、赤茶系の瓦(358点)は胎土を「陶」として区別した。両者とも産地・時期は不明である。瓦質の瓦には壁に漆喰で塗りこめた「ナマコ壁」に使われたと思われる「平瓦」と、湾曲し屋根を葺くのに使われたと思われる「屋根瓦」がある。赤茶系の瓦には、ガラス質の釉薬がかかり、表面に光沢があるものと、鉄泥により表面はつや消しで胎土が脆弱なものがあり、前者は「石見瓦(近現代)」、後者は「越前瓦(18~19世紀)」と思われるが、明確な区別は避けた。出土瓦の多くがI~II層出土で、IV~VI層からの出土はほとんどみられない。

c31~c33は土人形である。土師質の白みがかかった胎土から京都産の可能性もある。西行を象ったと思われるc31は風呂敷包を背負っているが笠は持たず頭巾をかぶっている。像の右肩(向かって左側)に小さな猿が乗っている。作成時の作業痕と思われる細い穴が足の下に一か所みられる。c32の犬(狛犬?)は台座に乗っており、形状はやや扁平。犬の後頭部に鬣があり、表情は歯を見せている。c33の狛犬は乗っている台座が中空である。c37の土鈴は、本体側面(図では裏側にあたり、表現できていない)に切れ込みの加工跡があり、ここから破損したと思われる。c46の擦文土器はB-Tm直下で出土したものである(図版9)。

(5) 出土傾向

磁器・陶器・土器瓦の出土量割合、磁器・陶器の産地割合を円グラフにした(図V-1)。12年前の当センターの調査(北埋調報290)に比べ、15世紀の遺物(特に中国磁器)が顕著である。また限定的ではあるが、D区では続縄文・擦文までの層位を調査できたことから、10世紀から近世までの連続する各層を調査できたことも大きな成果と言える。なお、中国産磁器(貿易陶磁)や瀬戸・美濃産の詳細分類については、次項(6)や付編I-6の東京大学埋蔵文化財調査室 堀内秀樹氏の考察を参照されたい。このほか、全体の出土数のうち海あがり片が1万点以上(4割以上)をしめている。

(新家)

表V-1 出土遺物総点数

土陶磁器	金属製品	木製品	繊維製品	石製品	骨角貝製品	ガラス玉	動物遺存体	計
25,935	2,603	6,021	4	34	64	18	418	35,097

表V-2 土陶磁器点数

分類	磁器						陶器						その他瓦・土製品・遊具・土器							その他計	総計						
	碗・皿・鉢ほか	坏・猪口	瓶・德利ほか	紅猪口	甕・壺	急須	その他	碗・皿・鉢ほか	甕・壺	土瓶	瓶・德利	土鍋・行平・鍋	その他	かわらけ	火道具	瓦・埴	土鍾	人形・遊具	埴塙・鞆・羽口			土器(縄文く擦文)	その他				
層位	I	442	3	37	9	1	3	371	866	41	62	42	26	3	10	290	474	1	4	128	4	1	8	6	152	1,492	
	II	3,942	69	313	82	15	8	5,015	9,444	614	349	690	330	89	121	1,742	3,935	2	88	441	4	15	3	60	51	664	14,043
	III	1,146	13	44	8	4	1	539	1,755	326	55	236	18	8	6	128	777		8	15	1	3	19	3	49	2,581	
	IV	204	1	2	1			83	291	109	18	25	1	9	1	17	180		3		1	10	4		18	489	
	V	89	2	2				22	115	28	13	5				3	49						2		2	166	
	VI	31						4	35	7	1					2	10			1				5		6	51
	最終面	3			1			2	6		2	1				4	9							26		26	41
	砂利	108		8	5	1	233	355	5	18	21	5	9	5	9	219	277			20				1	21	653	
	攪乱など	318	9	32	12	3	1	884	1,259	64	23	77	15	5	14	122	320		3	27		3	3	3	39	1,618	
	B調	58	2	8	6			102	176	10	9	7	11	1	1	38	77			13				1	14	267	
	包含層計	6,341	99	446	124	23	14	7,255	14,302	1,206	550	1,104	401	120	162	2,565	6,108	3	106	645	5	23	17	128	64	991	21,401
	遺構計	1,865	46	109	41	32		743	2,836	349	163	545	134	23	37	247	1,488	1	79	68	6	8	8	30	10	210	4,534
	合計	8,206	145	555	165	55	14	7,998	17,138	1,555	703	1,649	535	143	199	2,812	7,596	4	185	713	11	31	25	158	74	1,201	25,935

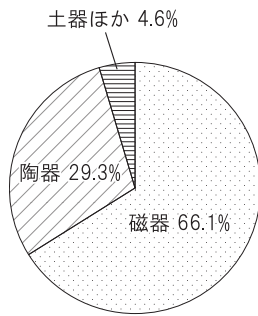
表V-3 遺構出土陶磁器点数

遺構名	分類	磁器				陶器				その他瓦・土製品・遊具・土器							その他計	総計									
		碗・皿・鉢ほか	坏・猪口	瓶・德利ほか	紅猪口	甗・壺	その他	磁器計	碗・皿・鉢ほか	插鉢	甗・壺	土瓶	瓶・德利	土鍋・行平・鍋	その他	陶器計			かわらけ	火道具	瓦・埴	土錘	人形・遊具	埵埴・輪・羽口	土器(縄文く捺文)	その他	
A	A土坑1							1								1										1	
	B掘込2	21					3	24	16	7	1					24	1	1						1	3	51	
B86	B掘込1	192	6	15	2	178	393	24	43	134	22	4	11	81	319		18	16					1	6	788		
	D石積1	4				3	7	1							1											8	
D13	D土坑8		1			4	5	1							1			20							20	26	
	D掘込1	170		4	8	33	215	18	9	21	18	2	1	13	82		3	5					3	1	13	310	
	D掘込2A	10				11	21	11	1	1		1		4	18			1					1	2	41		
	D掘込5	5				9	49	43	10	7				5	65		1						1	19	20	26	
	木製品集中	40				2	3	3						2	6			3							5	119	
	D土坑12	1				3	3			10																9	
	D炉1	2				2	2																			16	
	D炉2	105	2	5	5	16	133	28	13	15	11	4	15	4	86				2							6	
	D掘込2B	116		13	1	18	148	18	14	14	14	1	16	12	89											226	
	D掘込3	28			2	6	36	10	3	1	1	1	3	18	54											1	238
	D掘込4	30	1			30	61	29	3	5				5	42								1			1	104
木製品集中	1				1	1																				1	
D14-1	D土坑1																									1	
	D土坑2							1							1											1	
	D土坑3	4				4																				4	
	D土坑4									1					1											1	
	D土坑6						1																			1	
	磁器片集中	200				2	202	3							3		10									10	215
E10-5	E掘込1	4	1			7	12	1	2	2				2	7											19	
	E掘込1	324	10	7	7	237	885	108	11	116	19	8	1	51	314								1			17	916
	E掘込1	51	1	1		29	82	5	1	3	17	1		10	37		1									1	120
③18-0	C土坑11									2					2											2	
	C土坑12									1					1											1	
⑥12	D掘込6	9	2			32	43	2		5	2	1	1	9	20											1	64
	D火事場整理穴1	547	24	62	16	32	120	801	25	34	208	30	5	2	35	339										56	1,196
遺構計		1,865	46	109	41	32	743	2,836	349	153	545	134	23	37	247	1,488	1	79	68	6	8	8	30	10		210	4,534

表V-4 産地・層位別 土陶磁器点数

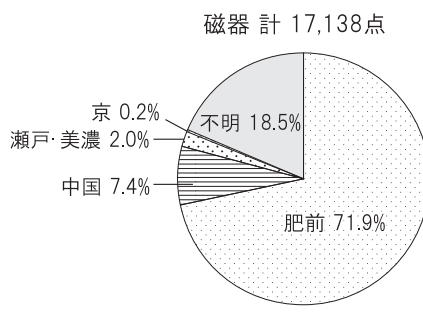
産地・胎土	肥前(北九州含む)				瀬戸・美濃			中国			京・信楽				越前			
	磁器	陶器	土 ほか	計	磁器	陶器	計	磁器	陶器	計	磁器	陶器	土 ほか	計	陶器	土 ほか	計	
包含層	I	744	78		822	15	4	19	12		12		21		21		62	62
	II	7,143	1,282	7	8,432	116	91	207	245		245	8	212	1	221	22	174	196
	III	1,276	434		1,710	3	82	85	277		277	2	44		46	23	1	24
	IV	69	24		93		94	94	205	5	210					18		18
	V	9	3		12		28	28	102		102					15		15
	VI	24	4		28		2	2	9		9						1	1
	最終面	5	1		6		2	2										
	砂利	310	23		333	2		2					2		2		16	16
	攪乱	777	115	3	895	6	13	19	27	1	28		15		15	3	1	4
	B調	108	25		133	2	1	3	2		2		3		3		9	9
包含層計	10,465	1,989	10	12,464	144	317	461	879	6	885	10	297	1	308	81	264	345	
遺構計	1,857	573	3	2,433	210	127	337	393	1	394	26	262	4	292	22	7	29	
合計	12,322	2,562	13	14,897	354	444	798	1,272	7	1,279	36	559	5	600	103	271	374	

産地・胎土	備前		北陸			東北		石見		その他			不明				総計	
	陶器	計	磁器	陶器	計	陶器	計	陶器	計	陶器	土 ほか	計	磁器	陶器	土 ほか	計		
包含層	I			1	1	3	3	6	6		7	7	95	361	83	539	1,492	
	II	19	19	1	18	19	1	1	15	15	22	20	42	1,931	2,253	462	4,646	14,043
	III	7	7		2	2			20	20	1	4	5	197	164	44	405	2,581
	IV	1	1		6	6	1	1	6	6	3		3	17	22	18	57	489
	V						1	1						4	2	2	8	166
	VI													2	4	5	11	51
	最終面				1	1								1	5	26	32	41
	砂利										2	2	43	252	3	298	653	
	攪乱	4	4		1	1			3	3			449	165	35	649	1,618	
	B調				1	1			1	1		1	64	46	4	114	267	
包含層計	31	31	1	30	31	6	6	51	51	26	34	60	2,803	3,274	682	6,759	21,401	
遺構計	5	5		4	4			60	60	8	8	8	350	426	196	972	4,534	
合計	36	36	1	34	35	6	6	111	111	34	34	68	3,153	3,700	878	7,731	25,935	

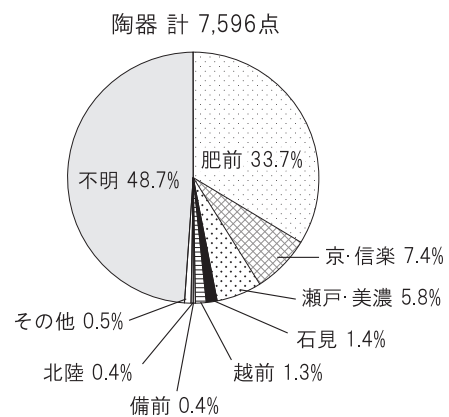


合計 25,935点

主な胎土別割合



磁器 産地別割合



陶器 産地別割合

図V-1 出土陶磁器 産地別構成比

表V-5 掲載磁器一覽 (1)

掲載番号	図番号(V-)	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代(C)	大きさ(cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径	器高	底径		
a1	2	碗	染付青磁		B89	II	4	4	肥前	17 _{5/4}	11.0	(5.4)	—	口縁~胴	歌貫胎土、天目形、内面細目、外面青磁軸
a2	2	碗	染付		B90	II	27	27	肥前	17 _{5/4}	5.4	6.7	4.3	口縁~底	離れ砂、胎土明灰色、高台内胎中状、外面口縁連弧文、胴部斑文、高台脇無軸、呉須の春色懸く灰色、被熱
a3	2	碗	染付		B86	II	1	1	肥前	1770~80's	10.3	5.2	4.1	口縁~底	小広東碗、見込に虫文、外面宝貝くし
a4	2	碗	染付		B89	II	4	4	肥前	1770~80's	10.4	(4.2)	—	口縁~胴	小広東碗、外面家屋山水帆船舟
a5	2	碗	色絵		B90	II	2	2	肥前	17 _{5/4}	10.0	6.0	4.0	口縁~底	外面上絵、草花
a6	2	碗	染付		B90	II	1	1	肥前	17 _{5/4}	10.4	5.8	4.4	口縁~底	外面草木山水
a7	2	碗	染付		B90	II	9	9	肥前	17 _{5/4}	8.3	(5.3)	—	口縁~胴	外面花、被熱
a8	2	碗	染付		B90	II	5	5	肥前	17 _{5/4}	9.1	5.1	3.1	口縁~底	褐軸染付(徳碗・化粧道具?)、内面桜文、外面湯輪
a9	2	碗	染付		B91	I	1	1	肥前	17末~18前葉	10.0	(5.2)	(4.3)	口縁~底	外面紅葉と鳥(コンニャク判)、高台内胎し「大明年製」銘
a10	2	碗	染付	D堀込2B	D14-1	覆土上位	1	1	肥前	18後葉	—	(3.1)	4.1	底	筒形碗、見込手描五弁花、外面米裂に菊花、海あがり
a11	2	碗	染付		D15-2	II	10	10	肥前	18後半	10.2	4.8	3.8	口縁~底	外面斑文、折枝松
a12	2	碗	染付		D15-2	B調擾乱	4	4	肥前	18後葉~19初	10.2	5.8	4.2	口縁~底	外面3か所五七桐(コンニャク判)
a13	2	碗	染付	D火事場整理穴1	6期12	覆土	7	7	肥前	19中葉	9.6	4.8	4.4	口縁~底	見込岩波、外面草花、流水と松、被熱
a14	2	碗	染付		B88	II	4	4	瀬戸・美濃	19前葉~中葉	10.3	6.2	3.9	口縁~底	内面口縁羽彫縁唐、見込に寿、外面に割菊?、湯
a15	2	碗	染付	D堀込6	6期12	覆土	1	1	瀬戸	19中葉	9.0	4.7	3.8	口縁~底	見込・外面に草花
a16	2	碗	染付	D火事場整理穴1	6期12	覆土	2	2	瀬戸	19中葉	9.2	(4.2)	—	口縁~胴	外面雲?窓に蓮
a17	2	碗	染付		B88	II	1	1	瀬戸・美濃	19中葉	8.4	4.2	3.0	口縁~底	見込宝珠、外面木目
a18	2	碗	染付		B88	I	1	1	瀬戸・美濃	19中葉	8.0	(3.3)	—	口縁~胴	外面割菊と?
a19	2	碗	染付		B89	II	3	3	関西系	19中葉	9.2	4.4	3.2	口縁~底	内面口縁波、外面器脚軸
a20	2	碗	白磁on染付		B89	II	1	1	瀬戸	19 _{5/4}	—	(2.8)	3.3	底	木型打込、見込に寿、被熱
a21	3	碗	染付		6期12	覆土	20	20	肥前	19 _{1/5} ~ _{2/3}	11.4	7.4	4.3	口縁~底	蓋付、22蓋とセット、内面口縁雷文、見込十字雲、外面蓮弁内に雲、揃えの破片多数
a22	3	碗蓋	染付	D火事場整理穴1	6期12	III コーユム上	1	1	肥前	19 _{1/3} ~ _{2/3}	10.0	2.8	4.2	口縁~底	21碗の蓋、内面雷文、見込十字雲、外面蓮弁内に雲、5唇以上あり
a23	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV 上面	14	14	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	10.5	5.0	4.3	口縁~底	端反り口縁、離れ砂、見込花弁、外面草花、ビンホール顯著、被熱、表面に爛れ、森碗V a類
a24	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV 上面	16	16	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.0	5.2	4.8	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、弱い被熱、見込に薄い曇り、キズ無し、森碗V a類
a25	3	中碗	染付	D堀込3	D14-1	砂利	2	2	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	—	—	—	—	—
a25	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III	7	7	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.4	5.1	4.6	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込に薄い曇り、キズ無し、森碗V a類
a26	3	中碗	染付	D土坑6	D15-2	IV 上面	8	8	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	—	—	—	—	—
a26	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III	1	1	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	10.0	5.3	4.6	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込に曇り無し、キズ無し、森碗V a類
a27	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV 上面	7	7	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.0	5.2	4.4	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールやや顯著、弱い被熱、見込欠失、森碗V a類
a28	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III	2	2	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	—	—	—	—	—
a28	3	中碗	染付	D土坑3	D15-2	IV 上面	10	10	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.2	5.1	4.2	口縁~底	施釉後で焼成前の孔あり、離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込曇りと放射状キズ、森碗V a類
a29	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III	1	1	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.2	5.4	4.7	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホール顯著、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗V a類
a29	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV 上面	12	12	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.2	5.4	4.7	口縁~底	焼成時に胎土片破片溶着、離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込雨水曇り、キズ無し、森碗V a類
a30	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV 上面	10	3	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.0	5.3	4.4	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗V a類
a30	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	B調擾乱	2	2	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	—	—	—	—	—
a31	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV 上面	13	13	漳州窯系	16 _{5/5} ~ _{17_{2/4}}	11.4	5.6	4.6	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗V a類

表V-6 掲載磁器一覽 (2)

掲載番号	図番号(V-)	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代(C)	大きさ(cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径	器高	底径		
a32	3	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III IV上面	1 10	11	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	10.4	5.0	4.4	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入目立つ、ビンホール顕著、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗Va類
a33	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV上面	5 1	6	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	10.0	5.1	4.4	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入あり、ビンホールあり、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗Va類
a34	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV上面	5 5	6	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	11.4	5.4	4.7	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入目立つ、ビンホール顕著、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗Va類
a35	4	中碗	染付	磁器片集中 D土坑1	D15-2	IV上面 覆土	2 4	6	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	10.8	5.0	4.6	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、弱い被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗Va類
a36	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III IV上面	1 4 7	15	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	11.0	5.4	5.4	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、貫入目立つ、ビンホール顕著、弱い被熱、見込曇り無し、キズ有り、森碗Va類
a37	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV上面	6	6	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	(12.0)	(4.3)	—	口縁~胴	外面折枝花、貫入目立つ、ビンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森碗Va類
a38	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	III IV上面	2 11 4	17	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	11.6	(4.6)	—	口縁~胴	外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森碗Va類
a39	4	中碗	染付	磁器片集中 D土坑3	D15-2 D14-1	IV上面 砂利	4 1 3	4	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	(11.2)	5.5	5.0	口縁~底	離れ砂、見込花弁、外面折枝花、未被熱、見込曇り無し、キズ無し、森碗Va類
a40	4	中碗	染付	磁器片集中 D土坑3	D15-2	III IV上面	3 2 1	11	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	11.2	(3.6)	—	口縁~胴	外面折枝花、貫入あり、ビンホールあり、被熱、表面に爛れ、見込欠失、森碗Va類
a41	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	II III IV上面	1 3 9	19	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	(11.8)	(4.5)	—	口縁~胴	外面折枝花、貫入あり、ビンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森碗Va類
a42	4	中碗	染付	磁器片集中	D15-2	IV上面	6	6	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/4}	(11.8)	(3.9)	—	口縁~胴	外面折枝花、ビンホールあり、弱い被熱、見込欠失、森碗Va類
a43	4	碗	青磁	B89	B89	III II下ローム	1 1	1	龍泉窯系	16 _{5/5} ~17 _{1/5}	—	(1.7)	4.9	底	軟質胎土、見込蛇の目細刺、高台外面彫、高台内露胎、森碗IIb類
a44	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	4	9	龍泉窯系	14 _{5/5} ~15 _{1/4}	—	(3.1)	6.0	底	外面片切形蓮弁、見込み細刺、瀬戸V類
a45	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	14 _{5/4} ~15 _{1/4}	13.0	(3.6)	—	口縁	瀬戸IV類新~IV類
a46	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	14 _{3/4} ~15 _{1/5}	16.0	(4.7)	—	口縁~胴	失透粗、瀬戸IV類新
a47	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	15 _{2/5} ~15 _{1/5}	15.0	(5.5)	—	口縁~胴	内面草花文、外面雷文と?、瀬戸V類新
a48	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~15 _{1/5}	—	(3.7)	6.0	胴~底	海あがり、瀬戸V類
a49	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	16 _{1/4} ~2 _{1/4}	—	(3.1)	4.7	底	内面線刻花、外面線描蓮弁、瀬戸VI類新、出土写真あり
a50	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~16 _{2/4}	13.0	(4.8)	—	口縁~胴	瀬戸V or VI類
a51	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	1	龍泉窯系	16 _{3/4} ~4 _{1/4}	14.0	(4.4)	—	口縁~胴	壁崩落土、外面線描蓮弁、瀬戸VI類
a52	4	碗	青磁	B89	B89	IV上面	1	3	龍泉窯系	16 _{3/4} ~4 _{1/4}	13.0	(4.2)	—	口縁~胴	瀬戸VII類
a53	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	II	1	1	景德窯系	15 _{2/2}	12.0	(4.1)	—	口縁~胴	内面口縁四方瓣?、外面唐草?、小野碗群・碗V類
a54	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	IV上面	1	1	景德窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	—	(3.1)	5.1	底	蓮子碗、外面芭蕉文、小野碗C群・碗I類
a55	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	IV上面	1	1	景德窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	12.0	(4.8)	—	口縁~胴	蓮子碗、外面口縁?文、芭蕉文、小野碗C群・碗I類
a56	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	V	2	2	景德窯系	16 _{2/3} ~未	12.0	(4.9)	—	口縁~胴	内面青海波に梅花、小野碗群・碗VII?、被熱
a57	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	IV	1	1	漳州窯系	16 _{2/4} ~4 _{1/4} ?	(12.2)	(6.1)	—	口縁~胴	外面花弁、森碗I類?
a58	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	III II	1 1	2	漳州窯系	16 _{2/4} ~4 _{1/4} ?	13.0	(3.1)	—	口縁	外面草花、森碗I類?
a59	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	IV	1	1	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{1/5}	—	(2.6)	4.7	底	見込蛇の目軸刺、見込に細かい捺痕、外面?、森碗IIb類
a60	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	IV	1	2	漳州窯系	16末~17 _{1/4}	14.0	(4.6)	—	口縁~胴	軟質胎土、外面口縁不明文、芭蕉文、森碗Va類
a61	5	碗	染付	E挿込1	E11-6	III	1	2	漳州窯系	16 _{3/4} ~17 _{1/4}	14.0	(4.4)	—	口縁~胴	軟質胎土、見込軸刺、外面草花、森碗Va類
a62	5	碗(蓋)	白磁	B89	B89	II	2	2	肥前	1670~1680's	11.3	3.3	4.1	口縁~底	口縁、色が入れれば柿右衛門、蓋つき碗の初期のもの、伊万里の最も良い時期の白磁
a63	5	碗(蓋)	染付	B88	B88	I	6	6	瀬戸	19 _{1/2}	9.1	2.9	3.6	口縁~底	内面口縁釘彫文、見込芭蕉文、外面朝顔と蝶、柄内「変形字」銘

表V-7 掲載磁器一覽 (3)

掲載 番号	図番号 (V-)	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代 (C)	大きさ (cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径	器高	底径		
a64	5	碗(蓋)	染付		B89	II 黒(II)の下	1	3	肥前	19前葉~中葉	4.0	2.6	9.4	口縁~底	内面雷文帯、見込窓に唐草、外面菊花、楕に菊唐、楕に菱形字、銘、肥前V期
a65	5	碗(蓋)	染付		B88	I	6	6	肥前	19中葉	7.0	2.6	4.1	完形	内面雷文帯、見込双葉葵、外面双葉葵、宝文?雷文帯、肥前V期
a66	5	碗(蓋)	染付		B85-3	II	1	1	肥前	19中葉	—	(1.4)	3.7	つまみ	見込「五良太清製」銘、外面?楕に「菱形字」銘、祥瑞?肥前V期
a67	5	皿	染付		B85-3	II	10	11	肥前	17 _{2/4}	12.8	2.4	5.3	口縁~底	離れ砂、高台内施軸、口縁、見込柳・月
a68	5	皿	染付	D堀込1	B89	覆土	2	6	肥前	17 _{2/4}	—	(2.2)	6.5	胴~底	離れ砂、見込柳・月
a69	5	皿	染付	B堀込1	B89	覆土	2	2	肥前	17 _{2/4}	—	(1.3)	6.5	底	離れ砂、見込柳・月
a70	6	皿	染付	E堀込1	E11-6	覆土	2	2	肥前	17 _{2/4}	13.8	3.3	6.0	口縁~底	歌寛胎土、離れ砂、高台内施軸、高台内施軸、内面口縁渦文、見込山水
a71	6	皿	染付		D13	III	2	2	肥前	17 _{2/4}	14.4	2.7	8.2	口縁~底	離れ砂、高台径大きい、高台内施軸、見込草文、ピンホールあり
a72	6	皿	染付		B89	II	1	1	肥前	17 _{2/4}	—	(1.9)	5.7	胴~底	離れ砂、高台内施軸、見込草文
a73	6	皿	染付		B90	II	6	6	肥前	17 _{2/4}	13.2	3.0	12.2	口縁~底	離れ砂、胎土明灰色、高台内施軸、見込草文
a74	6	皿	染付	B堀込1	B89	覆土	2	2	肥前	17 _{2/4}	12.6	4.1	5.9	口縁~底	離れ砂、高台内施軸、見込草花、外面縹線、ピンホールあり
a75	6	皿	染付	B堀込1	B89	覆土	1	1	肥前	17 _{2/4}	14.0	3.0	5.5	口縁~底	型打輪花皿、離れ砂、高台内施軸、高台内施軸、内面口縁結目付欄目、見込草花
a76	6	皿	染付		D13	III	1	2	肥前	17 _{2/4}	13.4	3.4	2.9	口縁~底	離れ砂、初期伊万里、高台内施軸、型打、菊花皿、見込草花
a77	6	皿	染付		B88	II	1	1	肥前	17 _{2/4}	—	(1.5)	6.5	胴~底	離れ砂、高台内施軸、見込龍
a78	6	皿	色絵		E10-5	III	1	3	肥前	1650~1660's	24.0	(2.5)	—	口縁~胴	古九谷皿、内面口縁亀甲文、見込色絵
a79	6	皿	染付	B堀込1	B89	覆土	11	11	肥前	17後葉	14.2	3.4	7.4	口縁~底	内面割菊、外面菊花、被熱
a80	6	皿	染付	木製品集中	4期14-1地先	IV	1	1	肥前	1670~1690	—	—	—	底部	見込手描五弁花、高台転化「箱」銘、有田柑右衛門、南川原窯の辻製、上等級
a81	6	皿	染付		B91	I	1	11	肥前	17後葉~18前葉	14.1	2.5	8.8	口縁~底	見込渦文、草花、外面草文、筒個体数点あり、被熱
a82	7	皿	染付		B88	II	7	7	肥前(佐佐見)	17後葉~18前葉	12.8	3.6	3.8	口縁~底	見込蛇の目軸刺、草花
a83	7	皿	染付		D13	II	2	2	肥前(佐佐見)	17後葉~18前葉	13.0	3.9	4.3	口縁~底	見込蛇の目軸刺、花卉
a84	7	皿	白磁の染付		D15-2	VI	1	1	肥前	17後葉~18前葉	—	(1.9)	4.1	底	見込蛇の目軸刺、B区とD区で接合、被熱
a85	7	皿	染付		B89	IIの下のローム III2a	1	2	肥前	17後葉~18前葉	—	(1.9)	4.1	底	見込蛇の目軸刺、B区とD区で接合、被熱
a86	7	皿	染付		B90	II	3	3	肥前	18 _{3/3}	21.4	4.6	13.0	口縁~底	見込荒織、外面唐草
a87	7	皿	染付		B88	I	3	3	瀬戸	19前葉~中葉	7.6	2.2	4.3	口縁~底	型打輪花皿、見込草文
a88	7	皿	染付		B89	II	1	5	肥前	19 _{2/3}	14.8	4.1	8.7	口縁~底	型打輪花皿、蛇の目目形高台、口縁、見込窓に遠山・東屋・山水、内面墨輪唐草
a89	7	皿	染付	D火事場整理穴1	6期12	IIの下のローム	1	1	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	12.6	3.1	8.1	口縁~底	型打輪花皿、蛇の目目形高台、口縁、見込遠山・山水、網干・図、帆船、塔の文様
a90	7	皿	染付	D火事場整理穴1	6期12	覆土	13	13	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	13.4	3.1	7.8	口縁~底	型打輪花皿、蛇の目目形高台、内面口縁墨輪の雷文、見込雲文、被熱
a91	8	皿	白磁		6期12	覆土	28	28	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	22.6	3.5	13.4	口縁~底	型打三角皿、内面口縁菊花、四方禪、見込墨輪唐文、外面幾何学文、被熱
a92	8	皿	白磁		C18-1	II	1	1	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	13.9	4.0	8.6	口縁~底	型打菊花皿、蛇の目目形高台、口縁
a93	8	皿	染付		B89	II(II)の下 III	1	2	肥前	19 _{2/3}	13.2	3.0	7.6	口縁~底	型打輪花皿、見込龍、墨輪唐文、若松、蛇の目目形高台、B区とD区で接合
a94	8	皿	染付		B91	I	1	1	肥前	19 _{2/3}	15.0	(3.0)	—	口縁~胴	型打輪花皿、内面口縁雷文帯、見込不明文、外面唐草文?
a95-a	8	皿	色絵		B89	II	1	1	肥前	19 _{2/3}	15.0	4.6	10.0	口縁~底	型打輪花皿、蛇の目目形高台、高台内に不明銘、口縁に口紅装飾、内面色絵・金彩の菱文唐草文、外面雷文
a95-b	8	皿	染付	D火事場整理穴1	6期12	覆土	3	4	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	—	3.2	—	口縁~底	型打菱形皿、付高台、口縁、見込家屋山水、外面折松葉文、高台に雷文、被熱、楕に血複紋
a96	8	皿	染付	D火事場整理穴1	6期12	覆土	9	9	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	11.3	3.9	6.9	口縁~底	型打長皿、付高台、内面口縁細唐草文、見込松竹梅文、外面如意頭胡唐草、高台内に「寄玉宝鼎之珍」銘、高台脇飾唐文、楕に血複紋、被熱
a97	8	皿	染付		D14-1	II	1	1	瀬戸	19 _{2/3}	—	(1.2)	—	底	見込草文
a98	8	皿	白磁		D13	II	1	1	瀬戸	19 _{2/3}	8.2	2.1	4.0	口縁~底	型打角皿、見込陽刻梅文、凹窓に紗線形文
a99	8	皿	白磁		B89	II	1	1	瀬戸	19 _{2/3}	—	2.3	(3.5)	口縁~底	型打角皿、内面口縁陽刻紗線形文、見込陽刻雲文、波文、海あがり
a100	8	皿	染付		B88	II	1	1	瀬戸	19 _{2/3}	—	(1.2)	—	底	型打角皿、内面口縁陽刻紗線形文、見込花文?、海あがり?
a101	8	皿	白磁		D14-1	II	1	1	瀬戸	19 _{2/4}	9.8	1.9	5.0	口縁~底	木型打込
a102	8	皿	青磁		B86	II	1	1	龍泉窯系	14 _{3/4} ~15	—	(1.8)	5.8	底	目跡、瀬戸IV類新
a103	8	皿	青磁		4期17-2地先	IV	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~15	11.0	(1.9)	—	口縁	口折皿、瀬戸V類、被熱、旧福山街道

表V-8 掲載磁器一覽 (4)

掲載番号	図番号(V-)	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代(C)	大きさ(cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径	器高	底径		
a104	8	皿	青磁		D15-2	VI	2	2	龍泉窯系	15 _{1/4} ~4/5	12.6	3.6	7.0	見込中央に磨痕、瀬戸V類	
a105	9	皿	青磁		B88	II	1	1	龍泉窯系	14 _{3/4} ~4/5	27.3	(2.2)	—	口折皿、瀬戸IV類新~V類	
a106	9	皿	青磁		B90	II	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~4/5	11.2	(2.0)	—	口折皿、片切底運弁、瀬戸V類、被熱	
a107	9	皿	青磁		D13	V	2	2	龍泉窯系	15 _{3/4} ~5/5	12.3	3.0	3.0	腰折絞花皿、瀬戸VI類古	
a108	9	皿	青磁		D13	覆土	1	1	龍泉窯系	15 _{3/4} ~16 _{3/4}	12.4	(2.3)	—	腰折絞花皿、瀬戸VI類	
a109	9	皿	青磁		D13	II	1	1	龍泉窯系	15 _{3/4} ~16 _{3/4}	—	(2.4)	5.2	腰折印花文皿、瀬戸VI類、貝骨層	
a110	9	皿	青磁	E箱込1	E11-6	覆土	1	2	龍泉窯系	15 _{3/4} ~16 _{3/4}	12.6	(2.6)	—	腰折皿、漆継、瀬戸VI~VII類	
a111	9	皿	青磁		D13	III	1	1	龍泉窯系	15 _{3/4} ~16 _{3/4}	—	(1.4)	5.4	高台内面脇に離れ砂付着、見込露胎、瀬戸VI又はVII類、海あがり	
a112	9	皿	白磁		D15-2	III	2	2	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	15.0	3.3	8.4	量付露胎、新垣・瀬戸C類皿Ia(森田E群)	
a113	9	皿	白磁		D14-1	III	2	2	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	11.8	3.0	6.1	量付露胎、新垣・瀬戸C類皿Ia(森田E群)、被熱	
a114	9	皿	白磁	木製品集中	D14-1	IV	2	2	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	12.6	3.0	7.0	量付露胎、新垣・瀬戸C類皿Ia(森田E群)、被熱	
a115	9	皿	白磁		D13	V	10	4	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	11.0	2.6	6.2	量付露胎、新垣・瀬戸C類皿Ia(森田E群)	
a116	9	皿	白磁		D13	IV	1	1	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	9.0	2.5	5.4	量付露胎、新垣・瀬戸C類皿Ia(森田E群)	
a117	9	皿	白磁		D13	IV	1	1	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	9.2	1.8	5.7	見込吃の目軸刺、量付露胎、新垣・瀬戸C類皿Ia(森田E群)	
a118	9	皿	白磁	木製品集中	D14-1	IV	1	1	泉徳窯系	16 _{5/5} ~17 _{1/5}	—	(1.9)	5.0	量付露胎、新垣・瀬戸C類皿I(森田E群)?、海あがり	
a119	9	皿	白磁		C18-1	IV	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~15 _{3/3}	—	(1.3)	3.9	量付~高台内面露胎、新垣・瀬戸D類皿I-c(森田D群)	
a120	9	皿	白磁		4期15-3E地先	IV	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~15 _{3/3}	—	(1.8)	—	外面体部下半~高台内露胎、新垣・瀬戸D類皿I-c(森田D群)、旧福山街道	
a121	9	皿	白磁		B85-2	II	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~15 _{3/3}	9.0	2.2	4.4	目跡、投入高台、新垣・瀬戸D類皿I-c(森田D群)	
a122	9	皿	白磁		D15-2	IV	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~15 _{3/3}	—	(1.3)	4.8	外面体部~高台内露胎、目跡、投入高台、新垣・瀬戸D類皿I-c(森田D群)、被熱	
a123	9	皿	白磁		D13	IV	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~16 _{1/2}	13.5	(2.0)	—	軟質胎土、高台外面脇露胎、新垣・瀬戸D類皿II(森田E群)	
a124	9	皿	白磁	D箱込2B	D14-1	覆土下位	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~16 _{1/2}	12.0	(2.3)	—	胎土明灰白色、新垣・瀬戸D類(森田D群)	
a125	9	皿	白磁		D14-1	IV	1	1	中国南方系	15 _{1/2} ~16 _{2/2}	—	(1.8)	4.4	軟質胎土、高台外面脇~高台内露胎、見込露胎、新垣・瀬戸D類皿III-a(森田D群)、海あがり	
a126	10	皿	染付		4期17-2地先	IV	4	4	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	12.2	(1.5)	—	外面草花文、小野皿B、群VI又はVII類、旧福山街道	
a127	10	皿	染付		B88	I	2	2	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	11.3	2.7	6.2	見込獅子文、外面唐草、小野皿B、群VII類	
a128	10	皿	染付	D箱込2B	D14-1	覆土下位	2	2	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{1/2}	—	(2.7)	6.5	見込獅子文、外面唐草、小野皿B、群VII類	
a129	10	皿	染付		4期15-3W地先	III	2	2	泉徳窯系	16 _{3/4} ~4/4	—	(1.7)	—	絞籠文、小野皿B群VII類、旧福山街道	
a130	10	皿	染付	木製品集中	4期14-1地先	IV	3	3	泉徳窯系	16 _{5/5} ~17 _{3/5}	11.6	2.8	6.1	型打打輪花皿、量付に離れ砂、見込絞籠山水、右塔、東屋、森皿V類、出土写真あり	
a131	10	皿	染付		D13	III	1	1	泉徳窯系	15 _{2/2} ~16 _{3/5}	—	(1.4)	5.4	基筋底、早込上蓋J字文、外面不明文、小野皿B群IX又はX類、被熱	
a132	10	皿	染付		D13	III	2	2	泉徳窯系	16 _{3/4} ~4/4	9.6	(1.5)	—	内面口縁四方拳、小野皿B群X類	
a133	10	皿	染付		B86	II	3	3	泉徳窯系	16 _{3/4} ~4/4	14.5	2.9	7.3	見込獅子文、小野皿B群X類	
a134	10	皿	染付		B86	III	1	1	泉徳窯系	16 _{3/4} ~4/4	10.2	2.2	5.6	見込蓮花、高台内鉢、小野皿B群X類	
a135	10	皿	染付		A94	II下位	1	1	泉徳窯系	16 _{3/4} ~4/4	11.3	(3.0)	—	小野皿B群	
a136	10	皿	染付		D14-1	IIb	1	1	泉徳窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/5}	—	(1.3)	8.0	量付に離れ砂付着、見込紗綾形文、ウロコ文、小野皿B群(森皿IVa類)?	
a137	10	皿	染付		B87	I	1	1	泉徳窯系?	15 _{5/5} ~17 _{2/5}	—	(2.5)	6.0	量付に離れ砂、見込寿文、内面龍文	
a138	10	皿	染付		B86	II	3	3	泉徳窯系?	15 _{5/5} ~17 _{2/5}	14.4	2.6	8.2	量付に離れ砂、見込寿文、量付~高台内露胎	
a139	10	皿	染付	D箱込1	D13	覆土	1	1	漳州窯系	15 _{3/3} ~16 _{5/5}	10.9	3.4	4.0	軟質胎土、基筋底、外面体部下半~高台内露胎、波瀾文の肩付?、森皿Ib類(小野皿B群IV類)	
a140	10	皿	染付		E10-5	III	2	2	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/5}	12.0	(2.4)	—	軟質胎土、端反、内面口縁四方拳、見込無袖、見込文様?、森皿IIb類?	
a141	10	皿	染付		D13	IV	1	1	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/5}	9.1	(2.2)	—	軟質胎土、見込露胎、外面龍物文、高台外面脇露胎、森皿IIIb類	
a142	10	皿	染付	磁器片集中	D15-2	IV上面	1	1	漳州窯系	15 _{3/3} ~17 _{2/5}	—	(2.2)	15.4	量付に離れ砂、高台内中央露胎、見込草木文、森大皿Ib又はIIb類、火災面で漳州窯碗と併出、被熱	
a143	10	皿	呉須赤絵		A94	II下位	6	6	漳州窯系	16 _{5/5} ~17 _{2/5}	—	(4.0)	—	軟質胎土、色絵(呉須手)、内面龍物文、鳥文、顕著な貫入、漆継、森大皿I類	
a144	11	鉢	蒸竹鉢	D火事場整理穴1	6期12	覆土	22	22	肥前	17末~18 _{1/4}	11.0	7.4	6.6	外面に離れ砂、高台内中央露胎、見込草木文、森大皿Ib又はIIb類、火災面で漳州窯碗と併出、被熱	
a145	11	八角鉢	染付	D火事場整理穴1	6期12	覆土	2	2	肥前	18 _{3/3} ~19 _{2/3}	10.4	(5.2)	—	型打、内面口縁つまぎ文、外面8面意に山水、被熱	
a146	11	鉢	染付		2期町道唐津ヶ丘線	III	3	3	肥前	17 _{1/2} ~3/4	24.0	(6.0)	—	内面草花文、出土写真あり	
a147	11	鉢	染付		B89	II	1	2	肥前	19中葉	25.0	(5.7)	—	内面口縁雷文、外面花井文	
a148	11	鉢	青磁		B90	II	25	6	肥前	17 _{3/4}	28.0	11.2	10.2	貫入	

表V-9 掲載磁器一覽 (5)

掲載 番号	図番号 (V-)	器種	種類	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代 (C)	大きさ (cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径	器高	底径		
a149-a	11	盤	青磁		4期D15-2地先	II	1	2	肥前	1630~1640 s	—	(3.5)	—	型打、内面口縁・見込斜格子線刻に鉄軸	
a149-b					B89	III	1				—	(2.3)	—	口折、内面蓮弁、瀬戸V類	
a150	11	盤	青磁		A94	IV	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~15 _{1/5}	32.0	(2.3)	—	見込草花文、瀬戸V類	
a151	11	盤	青磁		D13	IV	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~15 _{1/5}	—	(1.5)	—	業地は瀬戸の白磁(白玉)、京で七宝焼付により施文、清水寺の文様、京土産風	
a152	11	環	染付		B88	II	1	1	瀬戸・京	19	6.2	3.1	2.7	漣手酒環、内面口縁幾何学文帯、見込黒木	
a153	11	環	染付		E11-8	覆土	1	1	肥前	19中葉	6.2	2.9	2.6	—	
					B89	覆土	2				7.5	4.8	3.6	—	
a154	11	環	白磁		B90	II	8	11	瀬戸・美濃	19中葉	—	—	—	口縁	
a155	11	環	染付		B88	II	1	1	肥前	19前葉~中葉	7.6	3.8	3.0	—	外面に雁?
a156	11	環	染付		D13	V	1	1	泉徳窯系	15 _{3/5} ~?	6.0	(2.4)	—	外面植物文、森小環I類	
a157	12	環	白磁		B90	III	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~16 _{1/2}	7.6	3.2	(3.2)	—	軟質胎土、尖透釉、新理、瀬戸D類環III(森田D群)
a158	12	環	白磁		4期15-3地先	III	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~16 _{1/2}	—	(2.2)	3.3	—	新理、瀬戸D類環III(森田D群)、旧福山街道
a159	12	八角環	白磁		4期17-2地先	IV	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~16 _{1/2}	—	(2.8)	—	—	型打、新理、瀬戸D類環I又はII(森田D群)、旧福山街道
a160	12	八角環	白磁		D14-1	V1	1	1	中国南方系	14 _{2/2} ~16 _{1/2}	6.6	(1.6)	—	—	型打、新理、瀬戸D類環I又はII(森田D群)、貞混じり黒土
a161	12	環	白磁		A94	III下部	1	1	泉徳窯系	16 _{1/3} ~19 _{1/5}	—	(1.2)	2.6	—	見込蛇の目軸刺、新理、瀬戸C類杯(森田E群)
a162	12	環?	染付		D14-1	III	1	1	泉徳窯系	16 _{1/5} ~17 _{1/2} ?	7.4	(2.4)	—	—	型打輪花環、内面植物文、外面波と雁、新理、瀬戸I群?、礎石5より下
a163	12	猪口	染付		B89	II	1	2	肥前	18後葉~19前葉	7.2	5.7	5.2	—	外面山水
a164	12	瓶徳利	染付	Dx事務所整理穴1	6期12	覆土	10	6	肥前	17末~18 _{1/4} ?	4.0	(21.0)	—	—	外面草に雁、被熱
a165	12	瓶徳利	白磁の染付	Dx事務所整理穴1	6期12	覆土	26	8	肥前	17末~18 _{1/4} ?	—	(23.5)	—	—	無文、被熱
a166	12	灰吹	青磁		B86	II	2	2	肥前	18~19中葉	5.8	7.1	4.8	—	高台なし、内面下2/3無釉
a167	12	香炉	青磁		D15-2	黒色土IV(3期)	1	1	龍泉窯系	15 _{1/4} ~15 _{1/5}	—	(1.5)	4.0	—	内面無釉、瀬戸V類、村井モーター前TP-3
a168	12	蓋物(蓋)	染付		B88	II	1	1	肥前	18 _{2/2} ~19 _{1/2}	7.1	2.0	—	—	筒形の容器の蓋、外面葡萄文
					B89	覆土	58				—	—	—	—	
a169	12	植木鉢	瑤璃釉		B89	II	32	1	瀬戸	19中葉	25.6	19.1	14.0	—	川本治兵衛三代自作、三本脚、口縁5か所菱文貼付、胴部双葉菱文貼付、底に墨書あり、被熱
a170	12	植木鉢	瑤璃釉		D15-2	II	1	1	瀬戸	19半	—	(5.5)	—	—	川本治兵衛三代自作、矢羽根文貼付、海あがり
a171	13	植木鉢	染付		B89	覆土	29				—	—	—	—	
					B89	II	12	41	肥前	19中葉	22.9	15.0	6.1	—	3本獸脚、口縁流文、梅文、内面唐草、外面雲龍
a172	13	紅猪口	白磁		B89	II	1	1	肥前	19?	2.4	1.2	0.9	—	ミニチュア、型押、全面施釉、外面鏡
a173	13	紅猪口	白磁		B90	II	1	1	肥前	19?	2.3	1.3	1.0	—	ミニチュア、型押、全面施釉、外面鏡
a174	13	紅猪口	白磁		B90	II	1	1	肥前	19前葉~中葉	4.7	1.5	1.5	—	型押、外面鏡、内面施釉、外面縁のみ施釉
a175	13	紅猪口	白磁		B90	II	1	1	肥前	19前葉~中葉	4.6	1.5	1.6	—	型押、外面鏡、内面施釉、外面縁のみ施釉
a176	13	紅猪口	白磁		B91	I	1	1	肥前	19前葉~中葉	4.8	1.4	1.9	—	型押、外面鏡、内面施釉、外面縁のみ施釉、被熱
a177	13	紅猪口	白磁		B89	黒(IIの下)	1	1	肥前	19	4.6	1.6	1.4	—	型押、外面鏡、内面施釉、外面1/3施釉
a178	13	紅猪口	白磁		B91	II	1	1	肥前	19	4.6	1.5	1.4	—	型押、外面鏡、内面・外面縁施釉
a179	13	仏飯器	染付		B91	砂利	1	1	瀬戸・美濃	19前葉~中葉	5.0	(1.9)	(1.4)	—	型押、外面唐草彫文、海あがり
a180	13	仏飯器	染付		B90	II	14	5	肥前	17後葉	8.4	(4.0)	—	—	胴部欠損、外面草花?
a181	13	仏飯器	染付		4期14-1地先	IV	1	1	肥前	17後半	—	(3.5)	3.5	—	外面一重縁線文
a182	13	戸車	白磁		6期12	覆土	2	2	肥前	18後葉~19中葉	3.4(径)	0.8(厚)	1.3(穴径)	—	外輪面に施釉
a183	13	戸車	白磁		6期12	覆土	1	1	肥前	18後葉~19中葉	3.4	0.9	1.3	1/3	—
a184	13	戸車	白磁		3期唐津ヶ丘 繰遣ヶ下	II	1	1	肥前	18後葉~19中葉	5.0	1.0	1.4	1/6	—
a185	13	戸車	白磁		4期15-3地先	II	1	1	肥前	18後葉~19中葉	7.0	1.6	2.2	1/6	—

表V-10 掲載陶器一覽 (1)

掲載 番号 (V-)	器種	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代 (C)	大きさ (cm)			残存部位	備考
					接合	非接合			口径	器高	底径		
b1	碗		B86	II	3	4	瀬戸・美濃	16後葉	12.0	6.1	3.0	口縁～底	丸碗、黒褐色鉄釉、大窯3段階後半
b2	天目碗	木製品集中	D14-1	IV	1	1	瀬戸・美濃	16中葉	7.8	3.8	3.1	口縁～底	小ぶり、内面全面・外面底部以外、黒褐色鉄釉、出土写真あり
b3	天目碗		B86	II	1	1	瀬戸・美濃	16	11.4	5.5	4.4	口縁～底	褐色鉄釉、藤澤大窯3段階後半～4段階前半
b4	碗		B86	II	8	8	肥前	16末	7.2	3.6	3.1	口縁～底	黒鉄釉、肥前I期
b5	天目碗	木製品集中	D14-1	IV	4	1	瀬戸・美濃	16後葉	12.0	6.3	4.3	口縁～底	内面全面、外面底部以外、鉄釉、口縁黄褐色
b6	天目碗	木製品集中	D14-1	IV	3	3	瀬戸・美濃	16前葉～中葉	11.0	(4.8)	—	口縁～底	黒褐色鉄釉、鉄線掛、藤澤大窯2～3段階前半
b7	碗	木製品集中	D14-1	IV	1	1	肥前	16末～17初	10.6	7.0	4.8	口縁～底	鉄線唐津、灰釉、肥前I-2期、出土写真あり
b8	碗		B90	II	8	8	肥前	17前葉～中葉	11.6	7.7	4.4	口縁～底	鉄釉、外面インツチン、肥前II期
b9	碗	E船込1	E11-6	覆土	1	1	瀬戸・美濃	17前葉～中葉	—	(2.4)	6.0	底	丸碗、オリーブ色灰釉、藤澤登窯第1～6小期
b10	腰折碗		D13	III1	6	1	京・信濃	18中葉～後葉	—	(4.0)	4.1	底	煎じ茶碗、外面鉄絵、胎土目
b11	湯呑		B88	I	3	3	相馬	19	6.4	5.8	3.4	口縁～底	見込にロクコ痕、外面馬の絵
b12	皿		D13	IV	1	—	瀬戸・美濃	16中葉	10.3	2.5	5.5	口縁～底	印花丸皿 (菊花)、輪トチ痕、オリーブ色灰釉、藤澤大窯2段階
b13	皿	木製品集中	D14-1	IV	1	1	瀬戸・美濃	16中葉	11.0	2.8	5.7	口縁～底	印花丸皿 (菊形)、輪トチ痕、オリーブ色灰釉、藤澤大窯2段階、出土写真あり
b14	皿	B船込2	B86	覆土	6	1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.3	2.8	5.8	口縁～底	丸皿、輪トチ痕、オリーブ色灰釉、被熱、藤澤大窯2～3段階
b15	皿		D13	IV	1	1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.4	2.4	6.2	口縁～底	丸皿、輪トチ痕、オリーブ色灰釉、被熱、藤澤大窯2～3段階、出土写真あり
b16	皿	木製品集中	D14-1	IV	1	1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.4	2.4	6.5	口縁～底	丸皿、輪トチ痕、オリーブ色灰釉、灯明痕、藤澤大窯2～3段階
b17	皿		D14-1	III2	1	1	瀬戸・美濃	16中葉～末	—	(1.0)	6.0	底	丸皿、輪トチ痕、削り込みみ底、オリーブ色灰釉、藤澤大窯2～3段階
b18	皿	B船込1	B89	覆土	1	1	瀬戸・美濃	16中葉～末	10.5	(1.5)	—	口縁	折縁皿、オリーブ色灰釉、藤澤大窯3～4段階前半
b19	皿		B87	II	1	1	瀬戸・美濃	16後葉	11.6	2.4	5.4	口縁～底	腰折皿・端反形、茶褐色鉄釉
b20	皿	木製品集中	D14-1	IV	2	2	瀬戸・美濃	16中葉～末	—	(1.7)	6.0	底	内茶皿、オリーブ色灰釉、藤澤大窯3～4段階前半
b21	皿	木製品集中	4期14-1地先	IV	1	1	肥前	16 _{3/4} ～16末	—	(3.5)	4.8	底	灰釉、胎土目、肥前I-1期
b22	皿	木製品集中	D14-1	IV	1	1	肥前	16末～17初	11.5	3.6	4.6	口縁～底	胎土目、灰釉、出土写真あり、肥前I期
b23	皿	木製品集中	D13	III2	1	1	肥前	16末～17初	11.4	2.3	4.4	口縁～底	碁筋底、高台にも胎土目、灰釉、肥前I-1期、出土写真あり
b24	皿	A土坑1	A94	覆土	1	2	肥前	16末～17初	—	(3.3)	8.8	底	胎土目、灰釉、肥前I-2期
b25	皿		A94	III	1	1	肥前	16末～17初	—	(2.6)	5.1	底	胎土目、灰釉、肥前I-2期
b26	皿		B86	II	1	1	肥前	16末～17初	—	(2.3)	4.2	底	碁筋底、内面オリーブ色灰釉、肥前I-1期
b27	皿		D15-2	IV	1	1	肥前	16末～17初	12.4	3.6	5.4	底	輪花皿、灰釉、肥前I-1期
b28	皿		A94	III	1	1	肥前	17前葉	—	(1.4)	4.4	底	胎土目、灰釉、海あがり、肥前I期
b29	皿		B86	II	1	1	肥前	16 _{3/4} ～16末	12.0	(2.1)	—	口縁	なぶり口、灰釉、皮鯨手、肥前I-1期
b30	皿		D15-2	III	1	1	瀬戸・美濃	16末～17初	6.0	(1.6)	—	口縁	折縁皿・端反形、内面ソズ、藤澤大窯4段階後半
b31	皿		C19	III	2	2	瀬戸・美濃	16末～17初	12.8	2.9	6.2	口縁～底	丸皿、志野、削り込みみ底、円錐ピン跡、藤澤大窯4段階後半～末
b32	皿		A94	III	1	1	肥前	16 _{3/4} ～17初	11.3	3.1	5.2	口縁～底	灰釉、胎土目、肥前I期
b33	皿		B90	II	5	5	肥前	16末～17初	15.0	(2.7)	—	口縁～底	鉄線唐津、肥前I-2期
b34	皿		D15-2	IV黒(島調)	1	1	肥前	16末～17初	12.6	3.3	4.8	口縁～底	鉄線唐津、胎土目、肥前I期、B欄村井モーター前P-3
b35	皿		2期町道唐津ヶ丘線	III火災面	2	3	肥前	17中葉～末	20.0	(3.0)	—	口縁	銚子皿、銅線釉、肥前III期、出土写真あり
b36	皿		D13	IV	3	3	朝饒彥?	16後半～17前半	17.0	(3.0)	—	口縁	伊羅呂灰釉、被熱
b37	皿		B85-3	II	1	1	瀬戸・美濃	17前葉	13.3	2.9	7.0	口縁～底	丸皿、見込円錐ピン跡、底面にトチ目、灰釉、藤澤登窯第1～2小期
b38	皿	D土坑12 D桶込2B	D14-1	覆土上位 (5F1より下)	3	4	瀬戸・美濃	17前葉	12.2	3.3	7.1	口縁～底	丸皿、鉄絵志野、見込円錐ピン跡、底面にトチ目、内面唐草文、藤澤大窯4段階後半～末
b39	皿		B86	II	1	1	瀬戸・美濃	17前葉	11.0	2.5	6.0	口縁～底	丸皿、鉄絵志野、美文、藤澤登窯第2小期
b40	皿		D15-2	IV	1	1	瀬戸・美濃	17前葉	—	(2.0)	7.2	底	菊花皿、志野鉄釉、見込円錐ピン跡、底面輪トチ痕、藤澤登窯第1小期
b41	皿	磁器片集中	D15-2	IV土面	1	1	肥前	16 _{5/5}	—	(2.1)	5.8	底	灰釉、火災面で瀧州窯碗と併出、肥前I期
b42	皿	E船込1	E11-6	覆土	2	2	瀬戸・美濃	17前葉	—	(1.2)	8.0	底	丸皿、底面にトチ目跡、真志野、藤澤大窯4段階後半～末
b43	皿		D14-1	III砂利	2	1	瀬戸・美濃	17初～中葉	12.6	2.6	6.8	口縁～底	菊花皿、志野鉄釉、見込円錐ピン跡、藤澤登窯第1小期
b44	皿		E10-5	II	1	1	肥前	17中葉～末	—	(1.5)	4.7	底	見込碗の目軸刺、肥前III期
b45	盤		D13 D14-1	地山砂礫 VI	1	2	瀬戸・美濃	14後葉～15後葉	37.0	(2.6)	—	口縁	オリーブ色灰釉、藤澤古瀬戸後期II～IV新

表V-11 掲載陶器一覧(2)

掲載 番号	陶器号 (V-)	器種	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代(C)	大きさ (cm)			残存部位	備考
						接合	非接合			口径	器高	底径		
b46	16	盤		D13	地山砂	1	1	瀬戸・美濃	14後葉～15後葉	—	(2.7)	—	脚	脚目付、オリーブ色灰釉、藤澤古瀬戸後期II～IV新、海あがり
b47	16	向付		B90	II	1	1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(2.0)	—	底	鉄絵志野、碁笥底、藤澤大窯4段階後半～末、海あがり
b48	16	向付		D14-1	III2	1	1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(1.5)	—	底	鉄絵志野、底面目跡?、藤澤大窯4段階後半～末
b49	16	大皿		D14-1	覆土下	1	1	瀬戸・美濃	16末～17初	—	(3.2)	13.1	底	内、底面に目跡、赤褐色鉄釉
b50	16	鉢	D相込1	D13	III1	1	1	瀬戸・美濃	16末～17初	(2.1)	10.0	底	鉄絵志野、内面円錐ビン跡、高台内輪トチ痕、藤澤大窯4段階後半～末	
b51	17	鉢		D13	III1	1	1	肥前	16後葉～17初	21.4	(5.5)	—	口縁～胴	灰釉、肥前I期
b52	17	鉢		B89	IIの下のローム III砂利(8割)	4	6	肥前	17中葉	—	(2.9)	10.2	底	押型による菊文と不明文、B区とD区で接合、肥前III期、被熱、村井モーター前PP-3
b53	17	鉢		D15-2 B85-3	III1(灰回り) III2	9	16	肥前	17中葉	—	(7.0)	—	底	縁に施釉、B区とD区で接合
b54	17	大鉢		D13	III2	4	4	肥前	17中葉～後葉	43.0	(8.6)	—	口縁	鉄絵唐津、白色化粧土
b55	17	鉢	D火事場整理穴1	B90	覆土	11	11	肥前	17末～18中葉	23.5	9.4	6.7	口縁～底	刷毛目、肥前IV期
b56	17	鉢		B89	II	2	15	肥前	18前葉～中葉	21.0	12.3	9.2	口縁～底	内面全面と外面上半分鉄釉、被熱
b57	18	福鉢	C土坑12	3期C18-1	覆土	1	1	珠洲	15前半	24.0	(2.7)	—	口縁	吉岡V期
b58	18	福鉢		C18-1	IV	2	2	珠洲	15前半	33.0	(4.5)	—	口縁	口縁波状縮目文、11本縮目?、吉岡V期
b59	18	福鉢		D13	IV	1	1	珠洲	15後半	32.0	(2.8)	—	口縁	口縁波状縮目文、7本縮目、吉岡VI期
b60	18	福鉢		D14-1	V1(貝骨) IV(貝骨埋り 黒上の暗褐色)	1	1	越前	15末～16前半	38.0	(5.6)	—	口縁	11本縮目、木村V1～2期
b61	18	福鉢		D14-1	IV	1	1	越前	15末～16前半	30.0	(8.2)	—	口縁	12本縮目?、内面灰化物付着、木村V1～2期
b62	18	福鉢		D13	IV	1	1	越前	15末～16前半	37.0	(8.7)	—	口縁	11本縮目、口縁外側灰化物付着、木村V1～2期、木集中1
b63	19	福鉢	木製品集中	D14-1	IV	2	1	越前	15末～16後半	—	(8.9)	14.0	底	種目底紙、内底面おこげ付着、外底面灰化物付着、被熱、木村V期、舟敷より下で出土
b64	19	福鉢	木製品集中	D14-1	IV	1	1	越前	16後半	34.0	(7.1)	—	口縁	10本縮目?、木村V3期、杭2上端近く
b65	19	福鉢		D13	IV	1	1	越前	16後半	39.0	(6.5)	—	口縁	9本縮目、内面おこげ付着、木村V3期
b66	19	福鉢		D13	IV	1	1	越前	16後半	33.0	(6.5)	—	口縁	9本縮目、外面灰化物付着、木村V3～V11期
b67	19	福鉢	E相込1	E11-6	覆土	1	1	越前	16後半～17前葉	33.0	(9.1)	—	口縁	8本縮目、木村V3～V11期
b68	19	福鉢		A94	III	2	2	越前	17中葉～後葉	28.0	(3.4)	—	口縁	8本縮目、木村V2～3期
b69	19	福鉢	木製品集中	D14-1	IV	1	1	越前	不明	—	(5.8)	—	胴	8本縮目、海あがり、舟敷の上位にあった
b70	20	福鉢		B86	II	1	1	瀬戸	17?	30.0	(2.8)	—	口縁	藤澤大窯4段階末
b71	20	福鉢		C19	III	1	1	瀬戸	17前半	35.0	(4.0)	—	口縁	9本以上縮目
b72	20	福鉢		B90	II	2	2	須佐	17後葉～18前葉	31.0	(5.1)	—	口縁	10本縮目
b73	20	福鉢	2期町道唐津ヶ丘線	B89	III火災面	1	1	肥前	17中葉～末	—	(4.3)	—	胴	17本縮目?、肥前II～III期、出土写真あり
b74	20	福鉢	B相込1	B87	覆土	1	7	肥前	17末～18前半	37.0	(14.3)	16.6	口縁、底	9本縮目?、全面暗赤褐色鉄釉、肥前IV期
b75	21	福鉢		B89	II	12	7	肥前	17末～18前半	34.4	14.2	19.0	口縁～底	11本縮目?、全面鉄釉、被熱、肥前IV期
b76-a	22	福鉢	B相込2	B86	覆土	1	4	肥前	17末～18前半	33.8	(10.2)	—	口縁、 胴～底	11本縮目?、赤褐色鉄釉、離れ砂付着、肥前IV期
b76-b	22	福鉢		B85-3	II	3	1	肥前	18前葉～中葉	32.0	(5.3)	—	口縁	10本縮目、白神I型式
b77	21	福鉢		D14-1	覆土	1	1	界	18前葉～中葉	—	(9.5)	—	胴～底	9本縮目?、白神I型式
b78	21	福鉢	D相込2B	D14-1	覆土	2	2	界	18前葉～中葉	53.0	(4.4)	—	口縁～底	7本縮目、内面底部にクールマーク状に縮目文、白神I型式2段階
b79	21	福鉢	D火事場整理穴1	6期12	覆土	14	14	界	18後半	60.0	(15.0)	—	口縁～肩	外面平行タタキ、吉岡IV2期
b80	23	甕		B91	II	1	1	珠洲	14後半	—	(12.7)	—	胴	吉岡V期
b81	22	甕	C土坑11	3期C18-1	覆土	2	2	珠洲	15前半	—	(4.6)	—	胴	旧福山街道
b82	22	甕		4期17-2地先	IV	1	1	珠洲	不明	—	(5.6)	—	胴～肩	藤原壺I a-b型、旧福山街道
b83	22	甕		4期15-3E地先	IV	1	1	五所川原	10中葉～後葉	—	(8.0)	—	口縁	頸部浅い狭径線文を覆位沈雑が上下で挟む、藤原壺II類 (MD16号 d2)
b84	22	甕		D14-1	V1	1	1	五所川原	10 _{1/4}	46.0	(8.0)	—	口縁	同心円タタキ、赤褐色鉄釉、肥前I～II期
b85	22	甕・壺		D14-1	覆土 III III1 III2	2 1 1 1	7	肥前	16末～17前葉	—	(9.6)	—	胴	
b86	23	甕		B90	II	3	3	肥前	17中葉	32.0	(8.5)	—	口縁	被熱

表V-12 掲載陶器一覧 (3)

掲載 番号 (V-)	器種	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代 (C)	大きさ (cm)			残存部位	備考
					接合	非接合			口径	器高	底径		
b87-a	甗	D炉1	D14-1	覆土	1	8	肥前	17中葉～	—	—	—	格子目タタキ、網状突帯、被熱、被礫と併出	
b87-b	甗	D炉1	D14-1	III2(礎石6 より下)	1	1	丹波	17以前?	16.0	(2.9)	—	自然釉	
b87-c	甗	D炉1	D14-1	II	5	5	北九州	19中葉	17.7	(13.8)	—	内面口縁～外面光沢のある褐色鉄釉	
b88	甗	D炉1	D14-1	II	1	1	丹波	19	30.0	(6.3)	—	口縁灰釉、体部褐色鉄釉上に黒色鉄釉流し掛け	
b89	甗	D炉1	D14-1	II	28	19	石見	19?	7.0	11.6	9.4	蓋付?、内外面に鉄釉、被熱、98と同じ粘土	
b90	甗	D炉1	D14-1	II	18	18	肥前	17前葉～中葉	13.2	17.7	8.2	蓋付?、内外面鉄釉掛け	
b91	甗	D炉1	D14-1	III 火災面	2	8	肥前	17後半	—	(7.9)	—	内面格子目タタキ、外面黒褐色鉄釉、出土写真あり、肥前III期以降	
b92	甗	D炉1	D14-1	II	1	1	肥前	17後半	12.0	17.2	11.0	内面格子目タタキ、外面沈線	
b93-a	甗	D炉1	D14-1	II	24	2	肥前	17後半	12.4	17.8	11.0	内面格子目タタキ、外面沈線	
b93-b	甗	D炉1	D14-1	III	22	51	肥前	17後半	12.4	17.8	11.0	内面格子目タタキ、外面沈線	
b94	甗	D炉1	D14-1	III	16	9	肥前	17後半	—	(19.3)	13.6	内面格子目タタキ、褐色鉄釉	
b95	甗	D炉1	D14-1	II	27	8	肥前	17後半～18	—	(19.3)	13.6	内面格子目タタキ、褐色鉄釉	
b96	甗	D炉1	D14-1	II	1	1	肥前	17後半～18前葉	8.6	15.7	7.2	内面口縁土灰釉、外面全体に鉄釉掛け、土灰釉の上から外面上半分鉄釉流し掛け	
b97	甗	D炉1	D14-1	II	8	9	石見	19?	20.5	18.5	—	内外面褐色釉の上から黒色鉄釉流し掛け、被熱、91と同じ粘土	
b98	甗	D炉1	D14-1	III	47	18	信楽	17後半～18前葉	—	(22.1)	13.4	腰白茶壺、外面灰釉、被熱	
b99	甗	D炉1	D14-1	III	2	4	信楽	17後半～18前葉	—	(22.1)	13.4	腰白茶壺、外面灰釉、被熱	
b100	甗	D炉1	D14-1	II	3	5	信楽	18	13.6	(18.5)	16.0	外面灰釉	
b101	甗	D炉1	D14-1	II	47	13	肥前	17後半	21.2	26.3	15.4	内面格子目タタキ、外面黒褐色鉄釉、沈線	
b102	甗	D炉1	D14-1	III	6	17	肥前	18～19	—	(26.0)	22.0	内面格子目タタキ、内外面褐色鉄釉、外面褐色鉄釉の上から黒色鉄釉流し掛け、出土写真あり	
b103	片口鉢	D炉2B	D14-1	覆土	1	1	肥前	17中葉～末	12.0	(5.4)	—	オリーブ色灰釉、肥前III期	
b104	香炉	D炉2B	D14-1	II	2	2	肥前	17後半	15.0	6.7	6.4	匍え複数個体あり、割高台、口縁内外のみ銅緑釉、他は無釉、被熱	
b105	香炉	D炉2B	D14-1	III	3	3	肥前	17後半	14.4	5.9	6.2	匍え複数個体あり、割高台、口縁内外のみ銅緑釉、他は無釉、被熱	
b106	水注	D炉2B	D14-1	II	3	1	関西系?	19	8.4	8.8	5.6	把手欠失、茶褐色鉄釉	
b107	土瓶	D炉2B	D14-1	II	2	8	肥前?	19	6.4	(4.2)	—	銅緑釉	
b108	瓶	D炉2B	D14-1	II	12	5	肥前	17後半	4.0	(27.2)	10.0	沈線、被熱	
b109	徳利	D炉2B	D14-1	IV	5	6	石見	19中葉	—	(8.0)	—	外面褐色鉄釉の上から黒色鉄釉流し掛け	
b110	徳利	D炉2B	D14-1	II	8	8	不明	不明	—	(10.8)	—	外面鉄釉、被熱	
b111	榎木鉢	D炉2B	D14-1	II	1	1	瀬戸・美濃	18末～19中葉	—	8.3	21.4	底中央の孔の周囲に小孔複数、外面透明釉	
b112	灯明皿	D炉2B	D14-1	II	2	2	備前	17末～18	11.4	2.0	4.0	被熱	
b113	灯明皿	D炉2B	D14-1	II	2	2	京・信楽	明治(19後葉)	11.6	2.8	4.6	透明釉、焦げ底	
b114	土鍋蓋	D炉2B	D14-1	II	13	13	不明	不明	15.4	(3.7)	—	蓋まみ部欠失 波状沈線文	
b115	行平碗蓋	D炉2B	D14-1	II	14	15	不明	不明	16.0	(3.4)	—	蓋まみ部欠失 表面飛脚とイッチン	
b116	土瓶(蓋)	D炉2B	D14-1	II	1	1	益子	明治(19後葉)	10.9	4.4	8.2	完全形(蓋のみ) カエルのつまみ、白化粧土、山水図(鉄絵、緑釉)	

表V-13 掘載瓦・土器・土製品・人形ほか一覽(1)

掲載番号	図番号 (V-)	器種	胎土	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代(C) ・時期	大きさ(cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径 (長さ)	器高 (径)	底径 (穴径)		
c1	28	かわらけ	土		B88	I	1	1	不明	中世	10.0	(1.9)	—	口縁	手づくね、外面口縁ヨコナデ、内面ヨコナデ、いわゆる「しろ焼」
c2	28	かわらけ	土		B89	II	1	1	不明	中世	10.0	(2.0)	—	口縁	口縁端つまみ上げ、外面ナデ上げ、外面ヨコナデ、いわゆる「あか焼」
c3	28	灯明皿	土		B89	II	3	3	不明	近世	10.0	2.3	4.0	口縁～底	灯明底がつく、回転糸切痕、内外面回転ナデ
c4	28	灯明皿	土		D14-1	III2	3	3	在館?	近世	11.4	1.8	5.6	口縁～底	内側に突起、低火度軸、内外面回転ナデ、皿底と外底面に沈線
c5	28	袋物?	土	D掘込1	D13	覆土下	6	2	不明	17?	—	(1.8)	—	胴～底	低火度軸
c6-a	28	焜炉?	凝灰岩	磁器片集中	D15-2	IV上	3	11	不明	17?	(13.0)	(13.0)	(5.0)	—	胴形、火災面で濠州窯碗と併出
c6-b	28	焜炉?	凝灰岩	磁器片集中	D15-2	IV上	3	11	不明	17?	(13.0)	(13.0)	(5.0)	—	胴形、火災面で濠州窯碗と併出
c7	28	焜炉	土	D火事場整理穴1	6期12	覆土	1	32	不明	不明	25.0	(7.5)	—	口縁	表に刻みあり、刺かかれあり、内面刷毛目、突起1
c8	28	サナ	土		6期12	II	2	2	不明	不明	13.0	(1.2)	—	—	七重、被熱
c9	28	七厘	土		B89	II	1	1	不明	近代?	—	10.1	—	胴～風口	—
c10	29	火鉢	瓦質		B89	II	1	1	不明	不明	31.0	(5.7)	—	口縁	ペンガラ
c11	29	火鉢?	瓦質		B86	II	1	2	不明	不明	24.2	(10.4)	—	口縁～胴	風炉?押型文、花菱と葉
c12	29	火鉢	瓦質	B掘込2	B86	覆土	1	1	不明	不明	31.0	(6.6)	—	口縁	内面輪目、海あがり
c13	29	火鉢	瓦質		B89	II	1	1	不明	不明	34.0	(6.1)	—	口縁	外面に突起、海あがり
c14	29	火鉢	瓦質		D14-1	IV1火災面	1	1	不明	不明	(6.1)	(10.7)	(4.1)	脚	風炉?
c15	29	棧瓦	陶	B掘込1	B89	覆土	1	1	不明	不明	9.4	(2.5)	—	—	軒瓦、三つ拍文様、鉄軸
c16	29	切隅瓦	陶		B89	II	1	1	越前?	18~19?	18.0	19.4	6.7	—	◎印、唐草文、全面鉄軸
c17	29	面戸瓦	瓦質		D15-2	II	1	1	不明	19~	(7.5)	4.5	3.1	—	—
c18	30	平瓦	陶		6期12	II	1	1	越前?	—	25.0	22.4	2.6	—	鉄肥がけ、裏面に縦織の刷毛目、西トレンチIIローム下白粘土、出土写真あり
c19	30	平瓦	瓦質		B88	I	2	4	不明	不明	29.8	30.5	2.4	—	釘片残存、面ナデ
c20	31	平瓦	瓦質	D火事場整理穴1	6期12	覆土	2	2	不明	不明	30.4	19.1	2.3	—	ナデの後、表面回転刷毛目、裏面波状、直の刷毛目
c21	31	管状土罐	土	D掘込2B	D14-1	覆土上位	1	1	不明	不明	(2.9)	—	—	破片	—
c22	31	管状土罐	土		B86	II	1	1	不明	不明	4.1	3.3	1.4	—	—
c23	31	管状土罐	土		B86	II	1	1	不明	不明	4.2	3.3	1.4	欠け	—
c24	31	管状土罐	土		B90	II	1	1	不明	不明	4.7	2.8	0.9	—	—
c25	31	管状土罐	陶		C18-1	IV	1	1	不明	不明	4.8	2.5	0.9	—	—
c26	31	管状土罐	土	D掘込2B	D14-1	覆土上位	1	1	不明	不明	6.0	(4.9)	(2.0)	半損	—
c27	31	管状土罐	土	木製品集中	D13	IV	1	2	不明	不明	(8.2)	3.9	1.8	一端欠け	黒斑
c28	31	管状土罐	土		B86	II	1	1	不明	不明	(9.0)	3.8	1.4	両端欠け	—
c29	31	管状土罐	土		D13	IV	1	1	不明	不明	(8.6)	4.5	1.6	一端欠け	出土写真あり
c30	31	管状土罐	土	D掘込5	D13	覆土	1	1	不明	不明	(8.7)	4.5	1.5	一端欠け	—
c31	32	人形	土		B89	II	1	1	京都	19?	7.6	3.7	2.2	ほぼ完形	型作、西行?肩に線
c32	32	人形	土	B掘込1	B89	覆土	1	1	京都	19?	4.3	3.4	1.3	ほぼ完形	型作、狛犬
c33	32	人形	土	D火事場整理穴1	6期12	覆土	1	1	京都	19?	6.2	4.0	2.6	ほぼ完形	狛犬、台は中空
c34	32	飯事道具	土	D掘込1	D13	覆土	1	1	京都	19?	2.0	1.0	1.1	完形	ミニチュア碗、梅花印
c35	32	飯事道具	土		B88	II	1	1	京都?	19?	3.2	2.4	1.9	完形	ミニチュア碗、回転糸切痕
c36	32	遊具	土	B掘込1	B89	覆土	1	1	不明	19?	3.6	1.4	—	欠け	細葉
c37	32	遊具	土	B掘込1	B89	覆土	1	1	不明	19?	5.2	(2.9)	—	半損	土鈴
c38	32	遊具	土		B86	III	1	1	不明	不明	2.2	2.2	2.2	完形	土玉
c39	32	窯道具	陶		B88	II	1	1	不明	不明	4.3	1.1	1.8	完形	輪トチ?

表V-14 掲載瓦・土器・土製品・人形ほか一覽 (2)

掲載番号 (V-)	図番号 (V-)	器種	胎土	遺構名	発掘区	層位	破片点数		製作地	年代・時期	大きさ (cm)			残存部位	備考
							接合	非接合			口径 (長さ)	器高 (径)	底径 (穴径)		
e40	32	恵山・深鉢	土		B85-2	II	1	1		恵山式期	—	—	—	沈線	
e41	32	恵山・深鉢	土		D14-1	V	1	1		恵山式期	—	—	—	沈線	
e42	32	恵山・深鉢	土		B87	II	1	1		恵山式期	—	—	—	縁部繩文のあとナゾ	
e43	32	椀文・坏	土	D堀込1	D13	覆土下層	1	1		8前半	—	—	—	外面ヨコミガキ、海綿骨針、宇田川早期丸椀による沈線、内面ヨコミガキ、外面ヨコミガキ→タテミガキ、炭化物付着、宇田川前期	
e44	32	椀文・深鉢	土		D14-1	地山砂礫	1	1		8後半	—	—	—	頰	
e45-a	32	椀文・坏	土		C19	VI	2	4		8後半 ~9前半	—	—	—	口縁~底	回転ナゾ、宇田川前~中期前半
e45-b	32	椀文・深鉢	土		D13	地山砂礫	3	3		9前半	—	—	—	脚下半	内面ヨコミガキ、炭化物付着、宇田川中期、出土写真あり
e46	33	椀文・深鉢	土		D13	覆土	3	3		9前半	—	—	—	口縁~脚	段状沈線、口縁内面ヨコミガキ、脚部内面斜めハケ、脚部外面タテハケ、炭化物付着、宇田川中期
e47	33	椀文・深鉢	土	D堀込5	D13	覆土	1	1		9前半	—	—	—	頰~脚	頰部内面ヨコミガキ、脚部外面ヨコミガキ、頰部外面タテハケ、脚部外面タテハケ、炭化物付着、宇田川中期
e48	33	椀文・深鉢	土	D堀込5	D13	覆土	1	1		9前半	—	—	—	頰~脚	頰部内面ヨコミガキ、脚部外面ヨコミガキ、頰部外面タテハケ、脚部外面タテハケ、炭化物付着、宇田川中期
e49	33	椀文・深鉢	土		D13	地山砂礫	1	1		9前半	—	—	—	頰~脚	内面頰~脚部ヨコミガキ、頰部外面ヨコミガキ、頰部外面タテハケ、炭化物付着、宇田川中期
e50	33	椀文・深鉢	土		4期15-3W地先	III	1	1		11前半	—	—	—	口縁	内外面ヨコミガキ、宇田川中期後半、旧福山街道
e51	33	椀文・深鉢	土		B89	II	1	1		9前半	—	—	—	口縁	段状沈線、内外面ヨコミガキ、宇田川中期
e52	33	椀文・深鉢	土		B90	II	1	1		9前半	—	—	—	口縁	段状沈線、内外面ヨコミガキ、宇田川中期
e53	33	椀文・不明	土		D14-1	III	1	1		9前半	—	—	—	口縁	内面ナゾ?、外面タテミガキ、宇田川中期
e54	33	椀文・深鉢	土	D堀込5	D13	覆土	1	1		9前半	—	—	—	頰~脚	内面ヨコミガキ、外面頰部ヨコミガキ、外面脚部タテハケ、炭化物付着、宇田川中期
e55	33	椀文・深鉢	土		B89	II	1	1		10前半	—	—	—	底	再利用、炭化物付着、宇田川晩期
e56	33	椀文・深鉢	土		4期15-3W地先	III	1	1		10前半	—	—	—	底	海綿骨針、内面~内底ナゾ、外面タテハケ→タテミガキ、外面底ナゾ、旧福山街道

表V-15 産地・層位別 陶磁器点数

産地など 層位	中国						瀬戸・美濃						肥前						珠洲				越前		総計			
	青磁		白磁		染付		陶器			陶器			磁器			陶器		陶器		陶器		計						
	碗	皿	皿	碗	碗	皿	天目碗	碗	皿	鉢	挿鉢	計	碗	皿	挿鉢	甌・壺	碗	皿	計	挿鉢	甌・壺	計	挿鉢	甌・壺		計	挿鉢	甌・壺
III	23	15	47	79	72	236	9	14	41	1	2	67	27	134	25	151	350	223	910	1	1	2	17	6	23	1,238		
IV	29	17	84	34	34	198	21	1	107	2		131	2	10	1	12	23	12	60	3	3	6	22	4	26	421		
V	6	7	50	10	7	80	5		22			27			1	1	2	5	9						12	3	15	131
VI	2	4	1			7				2		2		2	1	1	21	2	26									35
最終面										2		2			1	1	1	1	3									6
合計	60	43	182	123	113	521	35	15	170	7	2	229	29	146	29	164	397	243	1,008	5	4	9	51	13	64	1,831		
D堀込2B	2		1		3	6			4			4	2	1	9	4	42	11	69				1	1	2	81		
D堀込3				7		7			2	1	2	5		8	4	5	56	23	96								108	
D15-2磁器片集中	1		1	197	1	199	2					2		1					1								202	
D14-1木製品集中	1		3	6	11	21	8		5			13	6	7		3	2	3	21				1	1	3	59		
D堀込5	1		5			6																					6	
合計	4		10	210	15	239	10		11	1	2	24	8	17	13	12	100	37	187				1	1	4	1	5	456
総計	64	43	192	333	128	760	45	15	181	8	4	253	37	163	42	176	497	280	1,195	5	5	10	55	14	69	2,287		

(6) 17世紀前葉以前の陶磁器と播鉢付着炭化物について若干の所見

Ⅱ層の総土陶磁器点数：14,043点はⅢ層：2,581の約+5.4倍ほどあって、Ⅱ層は引き続き人間活動が大きく増えている時期である（表V-2）。つまり「福山城下町発展期：1619年以降、下述参照」といえる。その様相は、堀内秀樹氏による広範な考察が付編Ⅰ-6に収められているので参照を乞う。

福山城の築城は1600年に始まり、1606年に完成し、1619年に大館街・寺街が福山城下へ移転された。1600～1619年は「福山城下形成期」といえる。「福山城下形成期」の遺構は、町並に従うⅢ層の礎石建物・冶金遺構がある。それ以前は遺構配置から街区の形成はうかがえないようであり、Ⅳ層の排滓などの集中・木製品集中・磁器片集中、Ⅶ層の屈葬？人骨掘込（Ⅳ-5・付編Ⅰ-12）がある。

上述の状況における陶磁器について他の福山城下町遺跡調査地点と比較する。そのための対象は、総土陶磁器破片数25,935点におけるⅠ層～最終面破片数18,863点のうち、Ⅲ層以下の破片数：18%（=3,328/18,863点）を用い（表V-2）、相応するⅢ層以下の海浜側遺構（D掘込2B・3・5、D15-2磁器片集中、D14-1木製品集中）を代表とした（表V-3）。

・Ⅲ層以下の生産地組成とその変遷について

包含層について。Ⅲ層～最終面における特定産地抽出片数/Ⅲ層～最終面破片数：55%（1831/3328点）において（表V-15上段）、Ⅲ層：68%（1238/1831点）・Ⅳ層：23%（421/1831点）・Ⅴ層：7%（131/1831点）・Ⅵ層：2%（35/1831点）・最終面：1%以下（6/1831点）となる。Ⅲ層の総土陶磁器点数（2,581点）はⅣ層（489点）の約+5.3倍で接続する包含層間比較の最大値であり（表V-2）、遺跡形成が本格化したのはⅢ層以降といえる。なお、Ⅴ層～最終面の肥前陶磁器は、肥前合計の4%（38/1026点）（表V-15上段）であり、Ⅳ層以下に及ぶ掘削（Ⅱ～Ⅲ層の城下町形成・発達に関わる地業、例えば掘込1～3、土坑など）により混入した可能性が高く、Ⅱ層における古相の中国産磁器出土もその影響の結果である。

Ⅲ層の最頻出は中国染付と肥前産陶磁器である。Ⅳ層の最頻出は中国産青磁と中国白磁と美濃瀬戸産と珠洲・越前産である。Ⅲ層の主要な陶磁器は肥前産陶磁器であり、Ⅲ層の中において中国染付→肥前産磁器への遷移があった。Ⅳ層の主要な陶磁器は中国産磁器と美濃瀬戸産陶器であり、Ⅳ層の中において中国青磁・白磁→中国染付への遷移があった。Ⅴ層の主要な陶磁器は中国白磁・美濃瀬戸陶器である。Ⅵ層の組成は中国青磁・美濃瀬戸陶器である。福山城下形成初期以前の海岸部では、日本海側北部における中世後期組成が成立していた。

海浜側遺構について。D掘込2B：36%（抽出片数81/掘込2B総破片数226点、D掘込3：45%（抽出片数108/掘込3総破片数238点である（表V-3・15）。これらはともにⅢ層帰属であるが、越前を含まないD掘込3はD掘込2Bよりも古相を呈している可能性がある。D15-2磁器片集中：94%（抽出片数202/磁器集中総破片数215点）、D14-1木製品集中：57%（抽出片数59/木製品集中総破片数104点）はともにⅣ層帰属であるが（表V-3・15）、D15-2磁器片集中は中国染付がかなり多く、D14-1木製品集中は各種の中国産磁器と美濃瀬戸産陶器を含むことから、D15-2磁器片集中はD14-1木製品集中よりも新相を呈している。D掘込5：23%（抽出片数6/掘込5総破片数26点）はⅤ～Ⅵ層に帰属するが、中国産白磁を主体とするのでⅤ層の状況を呈している。

・Ⅲ層以下の細分組成とその変遷について

上述の傾向について生産地・細分時期を通じてより細かくみる。表V-16は表V-15のうち細分型式1～2単位の短い資料体を更に抽出集計した。よって表V-16と表V-15の数は一致しない。なお、Ⅲ層自体は前述したように肥前Ⅲ期以降の遺物を含むが、下層との連続性をみるため肥前Ⅱ期までを集計した。

包含層について。青磁は、瀬戸碗V類と瀬戸皿VI類がⅢ層で多数を、瀬戸皿VI類がⅣ層で最多である。白磁は、福建広東D類皿がⅣ層で、景德鎮C類皿IaがⅤ層で最多である。中国染付は、景德鎮E群碗がⅢ層で最多を占め、景德鎮B₁群皿がⅢ・Ⅳ層で多数を占め、漳州碗Va類がⅢ・Ⅳ層で最多を占める。瀬戸美濃は、丸皿大窯1・2段階がⅣ・Ⅴ層で多数を占め、志野丸皿大窯4段階後半～末がⅣ層で最多を占める。肥前は、陶器皿Ⅱ期と磁器皿Ⅱ期がⅢ層で最多を占める。珠洲は播鉢V期がⅣ層で、越前は播鉢V1・2期がⅤ・Ⅳ層で多数を占める。

各層の主要な組成は、Ⅲ層：肥前陶器皿Ⅱ期・磁器皿Ⅱ期＋染付漳州碗Va類＋染付景德鎮E群碗＋染付景德鎮E群皿。Ⅳ層：白磁福建広東D類皿＋青磁瀬戸皿VI類＋丸皿大窯1・2段階＋丸皿大窯3・4段階＋志野丸皿大窯4段階後半～末＋染付漳州碗Va類。Ⅴ層：白磁景德鎮C類皿Ia＋丸皿大窯1～2段階＋丸皿大窯2段階。Ⅵ層：青磁瀬戸V類皿、例数が極めて少ないものの、白磁・中国染付・肥前・珠洲・越前が空欄であるため有意と考える。

以上より、包含層の暦年代は、Ⅲ層：17世紀1/5以降、Ⅳ層：16世紀3/3以降、Ⅴ層：15世紀3/3以降、Ⅵ層：15世紀2/2以降、の堆積と考えられる。

遺構はD15-2磁器片集中を除くと、例数が極めて少なく詳細な組成は不詳であるものの、先述した大まかな傾向（表V-15）と齟齬はない。代表的な細分類は、D掘込2B：肥前陶器皿・碗I～Ⅱ期、D掘込3：染付漳州碗Va類、D15-2磁器片集中：染付漳州碗Va・b類、D14-1木製品集中：天目碗大窯3段階後半、D掘込5：白磁福建広東D類皿、である。

・Ⅳ層上面の磁器集中について

分布は、低い密度で広がる東側（点取り破片数の4割）と高い密度で纏まる西側（点取り破片数の6割）で構成される。接合関係は、東側に収まる2個体、西側に収まる2個体、東西にまたがる16個体である。調査区D15-2に広がる火災面にある遺物分布が2か所にまとまるので、被災散乱したのではなく、火災（文献史料にない火事）の後片付けによりこの遺構が形成されたと考えられる。

表面の爛れ・呉須の変色なし「被熱」：2点、表面の光沢がやや失われた「弱い被熱」：17点、未被熱：1点である。呉須が変色するまで過度に被熱した個体は見当たらないので、容器に収納された状態であったり、未被熱もあることから火事による家屋倒壊により破損した個体も加わると考えられる。

復元個体数は20個であるが、これらと接合しない底部片がある。高台や底面の厚さなどの形態、呉須の色調、釉調、被熱度合の違いにより復元個体20個と別な個体の可能性があるものに以下がある。①：「遺物No.165＋点取りNo.43」は別個体、②：「遺物No.262」は別個体または掲載a37と同一個体、③：「点取りNo.96」は別個体または掲載a37と同一個体、④：「点取りNo.70」は別個体または掲載a38と同一個体、⑤：「点取りNo.55」は別個体または掲載a41と同一個体、⑥：「点取りNo.103」は別個体または⑦と同一個体。したがって、個体数は20＋1～6個体あった可能性がある。碗の型式は、森碗Vb類（森1995年分類碗F₃）は掲載a23の1個体、森碗Va類（森1995年分類碗F₁）は掲載a24～a42の19個体である。他には被熱した森大皿IbまたはⅡb（掲載a142）が1片出土している。Vb：Va＝1：15という出土比でVa類が極めて多く組成する。なお出土量が多い下記①SK404におけるVbとVaの掲載比は4：1と逆である。

森碗Va・b類の編年上の位置付けは、大坂城三の丸跡出土資料群により比定され、碗Va類は豊臣後期から徳川初期（1598～1650年）にかけて出土し（森1992、森1995、鋤柄・森1999）、Vb類は1615年以降に出現するようである（森1995の表1より）。①元和8年＝1622年埋没下限である大坂城下町跡AZ87-5次調査地第4b層上面SK404は、Va（F₁・F₂）類とVb（F₃）類と肥前陶器（多量の胎土目：そのうちI-2期が多い、極少量の砂目：Ⅱ期）と志野丸皿が出土した1598～1622年の遺構で

ある（大阪市文化財協会2009）。いっぽう下限の例は、②第Ⅲ遺構面および第3下層から数点のVa類と肥前磁器なし肥前Ⅱ期（1610～1650年）陶器（大阪市文化財協会1988）、大坂城下町跡の③OJ91-2次調査地第4層上面SK401から数点のVb類と④OJ92-18次調査地第4c層SK403から数点のVa類と極少量の肥前Ⅱ-1期（1610～1630年）砂目磁器がともに掲載されている（大阪市文化財協会2009）。①より、V類は1598～1622年頃まで量的にあることから需要と供給があり、③④より1630年までは伝世などにより残存すると考えられる。

碗の見込みに細かい擦痕が付いている個体があるので、搬入後すぐ被熱したのではなく、使用期間がある。東側の集中からは回転糸切痕が残る肥前Ⅰ期（1580～1610年）肥前陶器皿（掲載b41）も出土した。磁器集中は、Va・b類の組成から1615年頃以降の可能性があり、①SK404の出土比より古相を示しているように思われることから、1615年以前にまずVa類・Ⅰ期肥前陶器皿が組成・使用され、続いてVb類が加わり、被災した経緯が想定できる。なおB地区Ⅱ層から蛇の目高台・口縁端部つまみ上げ肥厚・浅鉢に近い森皿H₃（森1995）7片出土しており、Ⅱ層の中国産磁器は攪乱による下層からの混入があるものの数量が多いので、17世紀前半までは輸入染付が遺跡に持ち込まれていたと考えられる。

①：大多数を占めるVa類が一度に被災してVb類（1個体）も含まれていること、②：胴部に焼成前の孔（掲載a28）や胴部に胎土片溶着（掲載a30）や内側高台脇～高台内の厚さ1mm未満の「遺物No.262」（未掲載）などの不良品が含まれること、③：当該期の大阪においてもVb類の出土量は少ない（森1995の表1より）状況下で1点出土したということ、から漳州窯系の供給が十分にあって受容もあったということが推定される。①②③より流過程は以下と推定される。生産地（中国）での梱包が集散地（日本・大阪?）で荷解きされ、再度組み合わせられて、福山城下町に搬入されたと考えられる。

北海道における漳州窯系碗皿の出土例は以下である。松前町福山城下町遺跡では、旧唐津内町地点で碗：20点以上、小松前町地点で大皿：1片（関根2019）、旧枝崎町地点で大皿：1片（松前町教委2015）、旧蔵町地点で碗Va：2点（北埋調報290）。上ノ国市街地遺跡の掲載遺物で碗Ⅱb類：1点・1片、碗Va類：1点、碗Vb類：1点、碗V類：12点、皿Ⅲ類：1片、皿Ⅲb類：4片、大皿Ⅰ類：1片（上ノ国町教委2011・2019）。津別町ツベットウンチャシ跡の碗Va：1片（津別町教委2009）。

北海道での分布は、碗Vaがかなり多く、松前地に多出するいっぽうで道東にも出土する。現時点では松前地を介しての広がり捉え、上ノ国町勝山館内から漳州窯系碗皿が出土しないので、供給中継点は潜在的量を予想させる旧唐津内町地点の磁器集中の一括例から福山城下町遺跡と考える。

・Ⅳ層以下（大館街・寺街の福山城下への移転以前）における小松前町地点・旧蔵町地点との比較

旧唐津内町地点から、小松前町地点は福山街道を東へ約360m、旧蔵町地点は福山街道・蔵町の通りをめぐって北東へ約800m、離れた地点である。

小松前町地点では、段丘面からの客土より肥前陶磁器・瀬戸美濃・越前に混じって中国磁器が出土し、瀬戸V類末（15世紀中葉）の青磁碗が掲載され（関根2019）、僅かに城下整備以前の間活動が認められる。旧蔵町地点では旧河道の泥炭層・Ⅳ層から、アイヌ民族・和人の骨製・木製品、人四肢骨、瀬戸Ⅳ'類（14世紀末～15世紀初頭）の青磁碗・瀬戸美濃皿大窯2～4段階前半（15世紀中葉～16世紀末）などが出土した（北埋調報290）。旧唐津内町地点浜側D地区Ⅳ層では鉄に関わる鍛冶関連遺物集中、火災整理の磁器集中・土坑、アイヌ民族・和人の骨製・木製品が混在する木製品集中、Ⅶ層では屈葬?人骨掘込などがある。

旧唐津内町地点Ⅳ層以下と旧蔵町地点泥炭層・Ⅳ層の類似した状況は15世紀中ば～17世紀初めにあ

たる。それは「大館期：1456頃～1513年」から「徳山館期：1514～1600年」から「福山城下形成期：1600～1619年」まで、にあたる。この時期の海浜・河川では、アイヌ民族・和人が入り混じって多様な生業を展開する様相がみられ、いっぽうで葬地にもなっていた。網野善彦のいう「無縁」の場（網野1978）が考古学的に表れたといえる。

総土陶磁器点数はⅥ層/最終面：Ⅴ層/Ⅵ相：Ⅳ層/Ⅴ層=1.2：3.3：2.9なので（表Ⅴ-2）、Ⅴ層で増加しⅣ層（16世紀3/3以降、ほぼ「徳山館期」の後半期）で伸びが横ばいである。交易・税徴収場所が海岸部へ固定化して人間活動が活発化したものの、街の形成が未熟であったと考えられる。

・付着炭化物から見た播鉢の使用について

播目が磨滅し、炭化物・おこげが底部外面・口縁部内外面に付着する播鉢が、煮炊にも用いられたことを示している。そして、それは越前に多く（19%：15/77片）あり、珠洲（8%：1/12片）・肥前（3%：9/315片）播鉢にはみられ、堺（0%：0/33片）播鉢にはみられない。

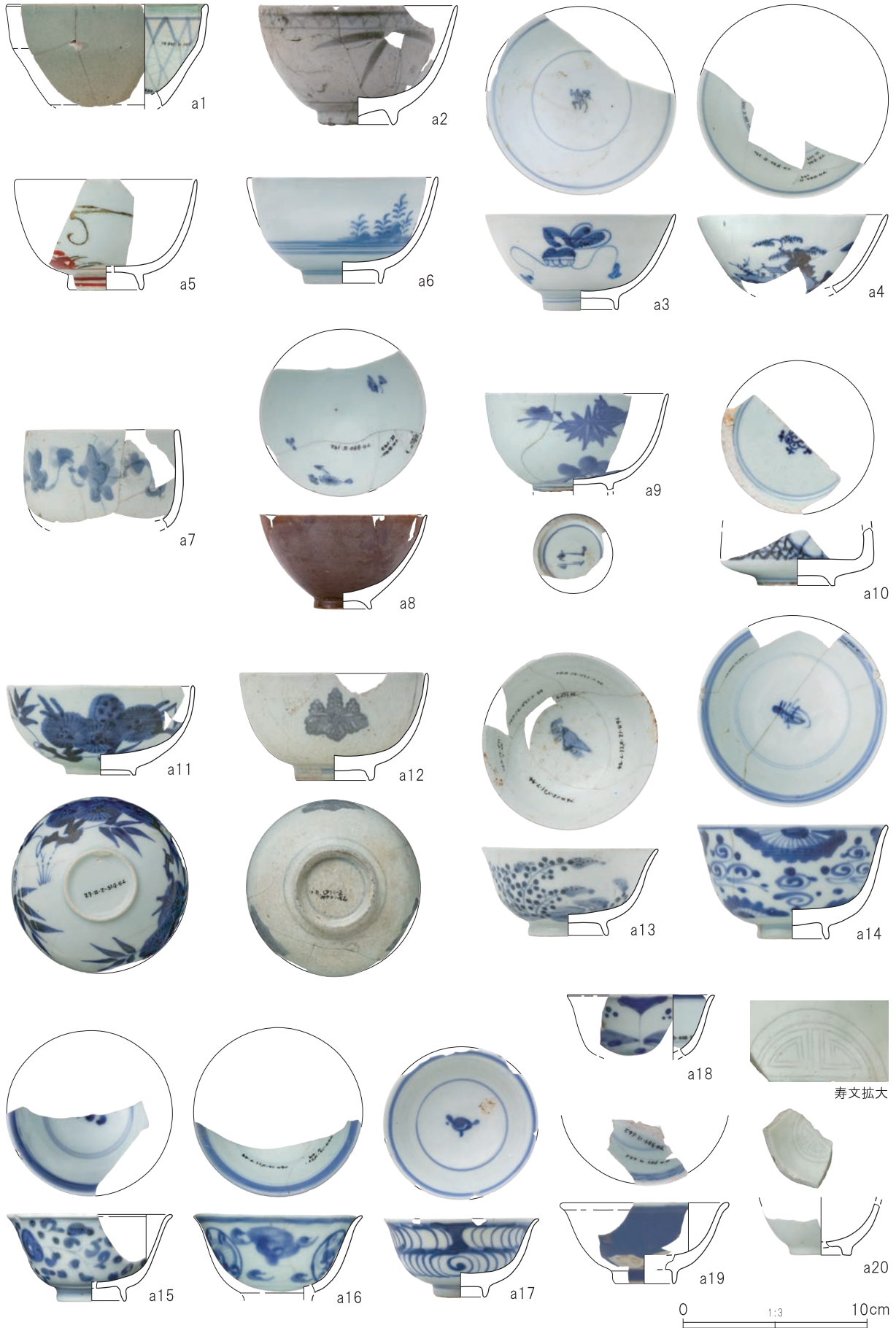
まずは何を煮沸したのかということである。上ノ国町伝花沢館出土15世紀後半の珠洲播鉢2点の付着炭化物の安定同位体C/N比は、 $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}} = -17.2/-17.4$ 、 $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}} = 13.9/13.5$ であり、海生魚類・海棲哺乳類である。残存脂質分析でも海生魚類・海棲哺乳類と解析された（上ノ国町2021）。これらの食材が播鉢の煮炊で調理されていた。そして、本報告の16世紀後半以前の屈葬？人骨の右尺骨から得られた安定同位体C/N比は、 $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}} = -15.615$ 、 $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}} = 12.976$ であり、海生魚類・海棲哺乳類・海棲貝類を多く摂取していたと解析された（付編Ⅰ-2）。これらより食材は海棲動物が多く含まれていた。転用播鉢で調理が行われたということは通常の煮炊でもこれら食材が使用されていた可能性を示す。

時期が判明した付着個体においては、越前Ⅴ1～2期（1490～1550年）：8点、越前Ⅴ3～Ⅵ1期（1550～1620年）：4点、肥前Ⅱ～Ⅲ期（1610～1690年）：3点、である。珠洲は時期不明であるものの出土傾向から推定される下限は15世紀末で、越前に先行・並行する事例と考えられる。そして、肥前17世紀末以降、堺18世紀後半以降にはみられない。播鉢の用途転用は、珠洲15世紀後半に始まり17世紀前葉には下火になり肥前17世紀末以降には行われなくなると考えられる。煮炊に適した耐火性、擦目の磨滅が顕著な越前播鉢に転用が多くあることは、二つの条件がそろそろ程度の軟質胎土によると考えられる。肥前17世紀前葉以降の減衰は、より硬質の肥前の供給増と土鍋・鉄鍋などの専用煮沸具の普及が考えられる。

上ノ国町伝花沢館・勝山館跡・青森県十三湊遺跡では同様に珠洲・越前播鉢の転用が少例みられ、播鉢の煮炊具への転用は北日本にひろがりが見られる。正確な計数に基づく評価ではないが、当該地点における件数は発掘面積の大きい勝山館跡・十三湊遺に比べて多い印象があり、印象の原因は転用播鉢の頻用・播鉢自体の供給量の少なさ、とも考えられる。今後精査の必要がある。

・播鉢付着炭化物からみた動物油脂の利用について

近世アイヌ民族例は、北海道では海獣油・鯨油や鯨油の副産物としての石焼鯨（菊池2002）があり、津軽では鮫（アブラザメ）漁による魚油生産が行われ（菊池2001）、石焼鯨を生産した可能性もあること（菊池2002）から鯨油の生産も行われていた可能性がある。また、やや遡る例として、1621年作成のデ・アンジェリスの『蝦夷國報告書』には「蝦夷人が松前に持来て売る物品は（中略）海驢（註では蝦夷ではアシカを指してトドという）の魚の油（後略）」後述では「海驢は油をとる」（兒玉1954）とある。くわえて、福山城下町遺跡小松前町地点出土では、17世紀第4四半期の肥前陶器皿の付着炭化物が海生哺乳類？の灯明油（関根ほか2020）と解析された。近世江戸において蠟燭よりも安価な植物油、さらに安価な魚油が照明に多用されたことと符合する。そして、江戸とは異なり海生哺



图V-2 磁器 (1)

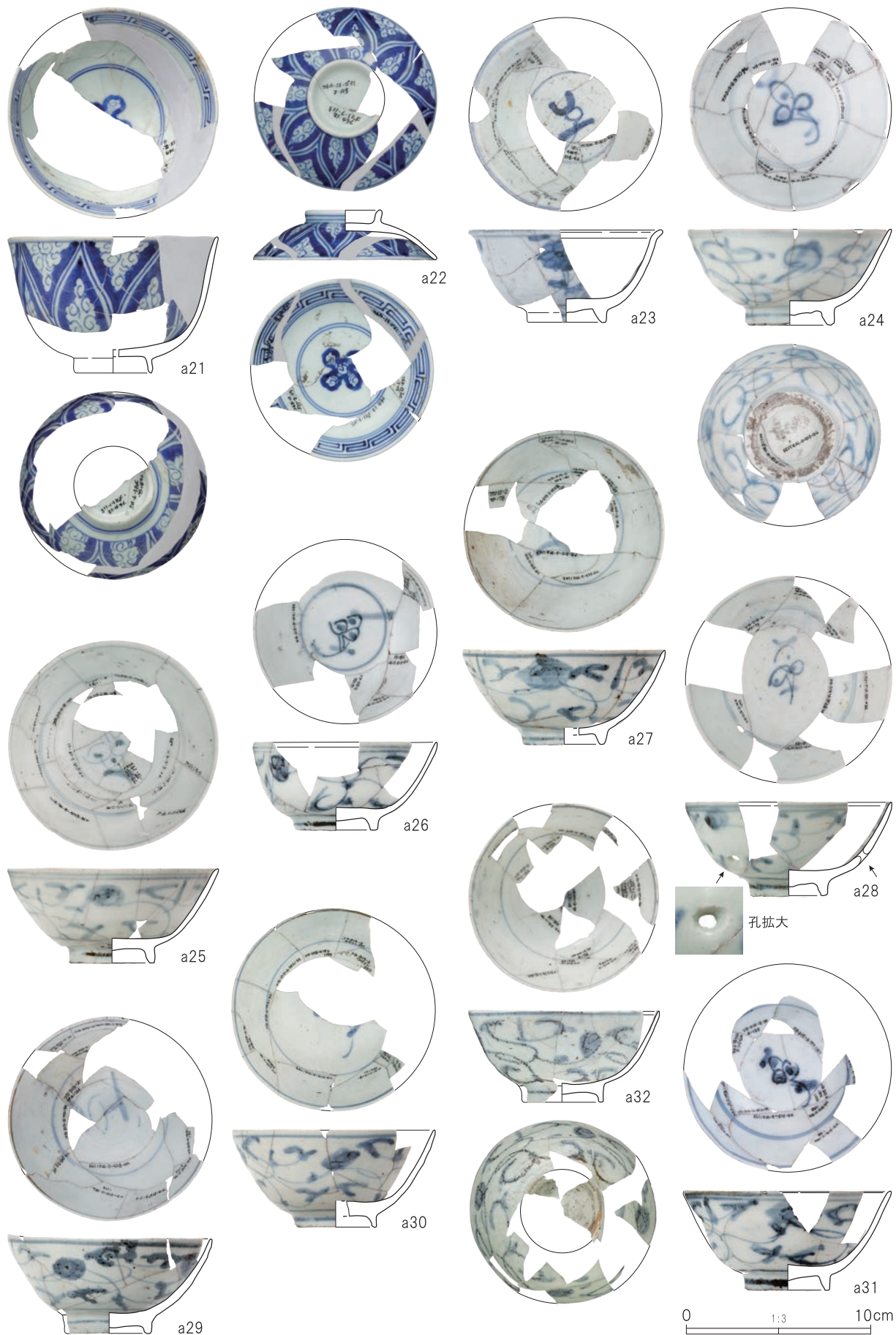
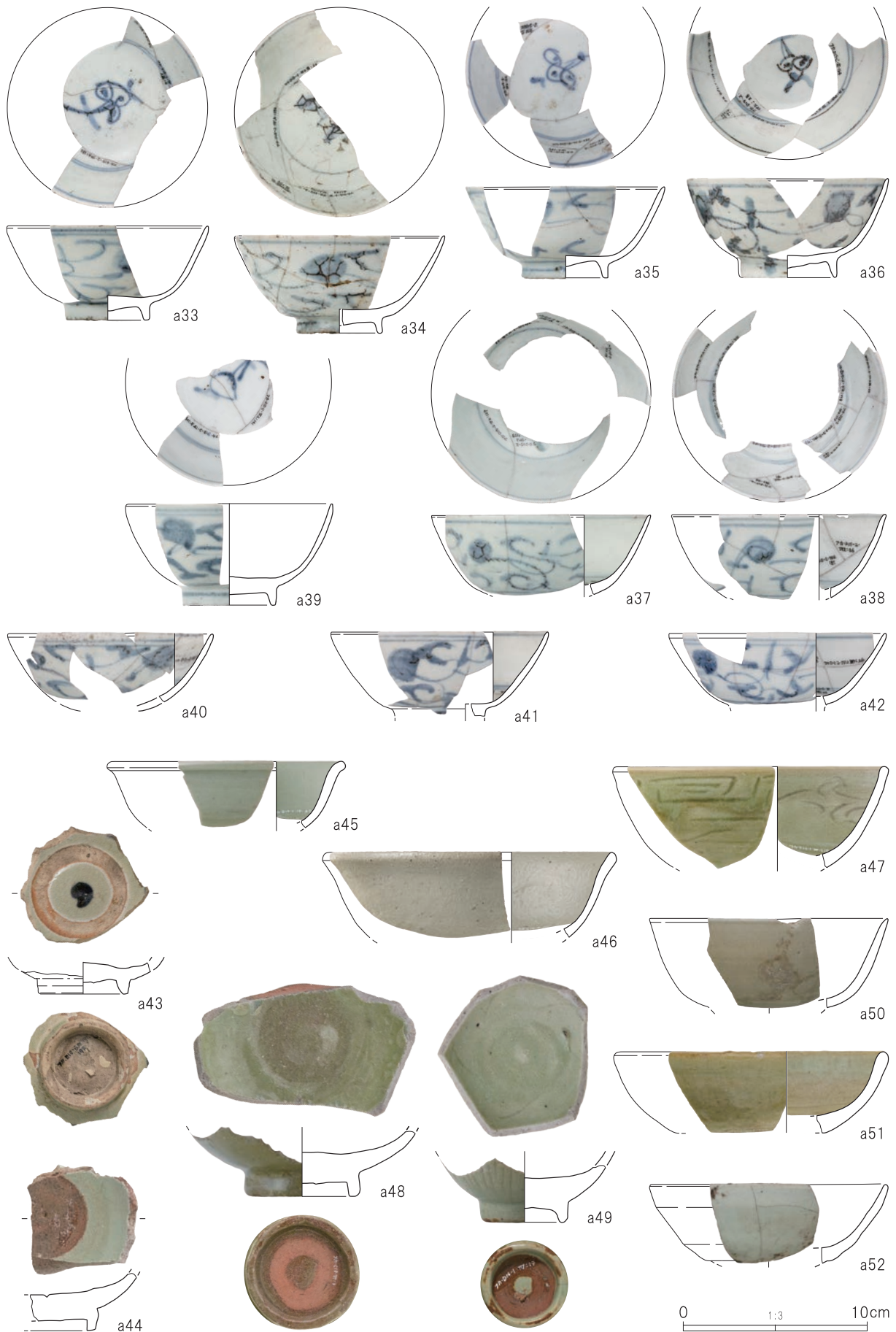
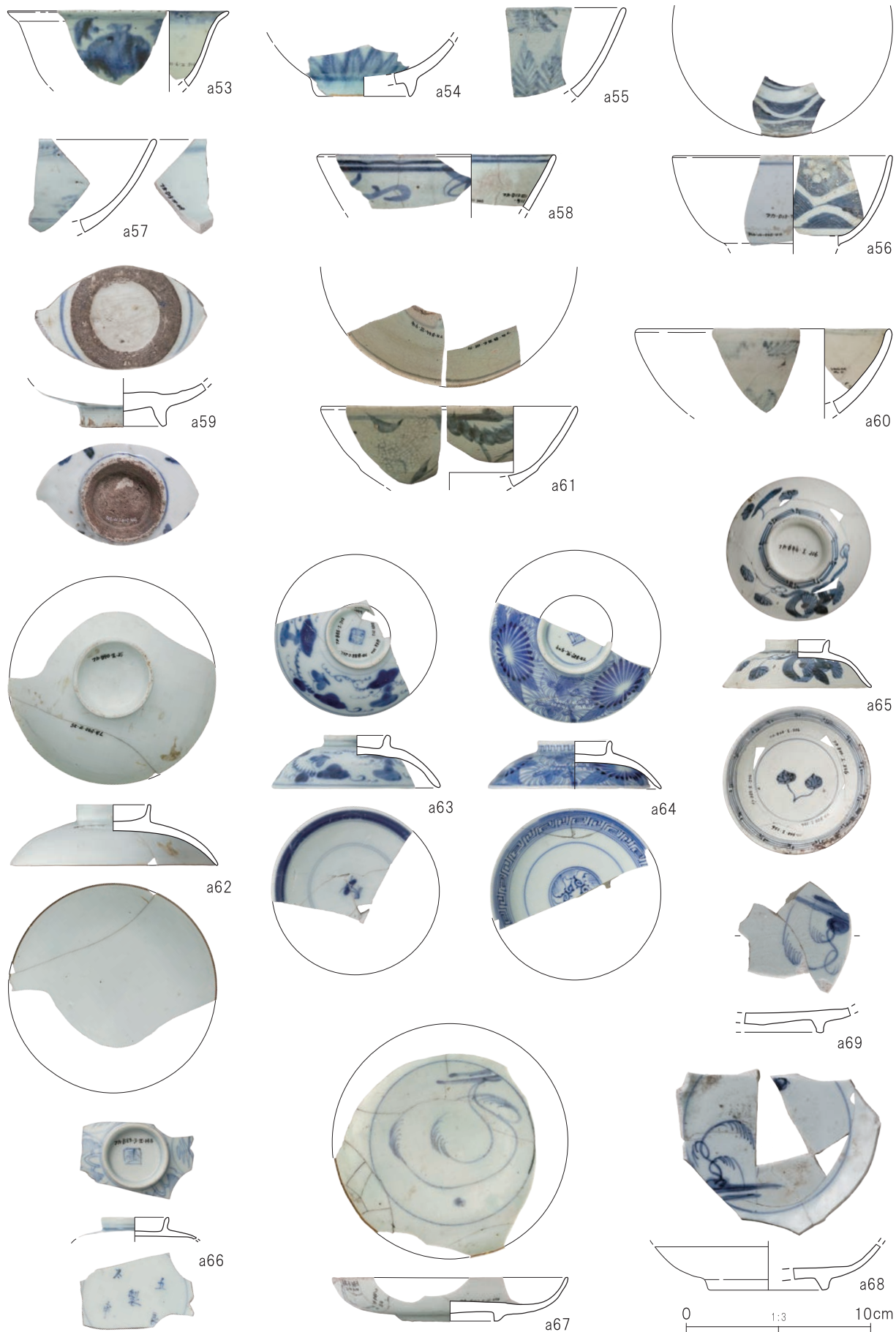


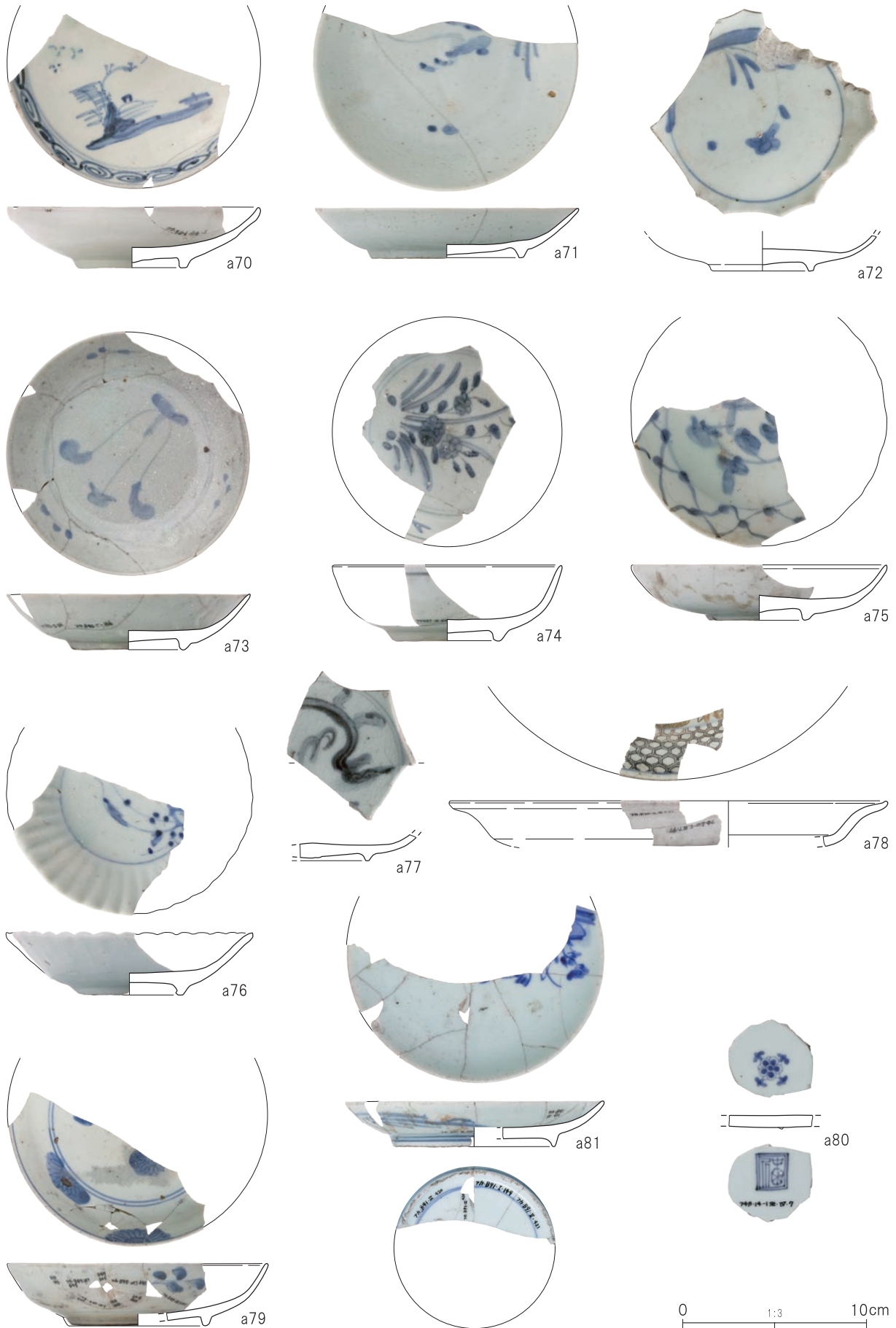
图 V-3 磁器 (2)



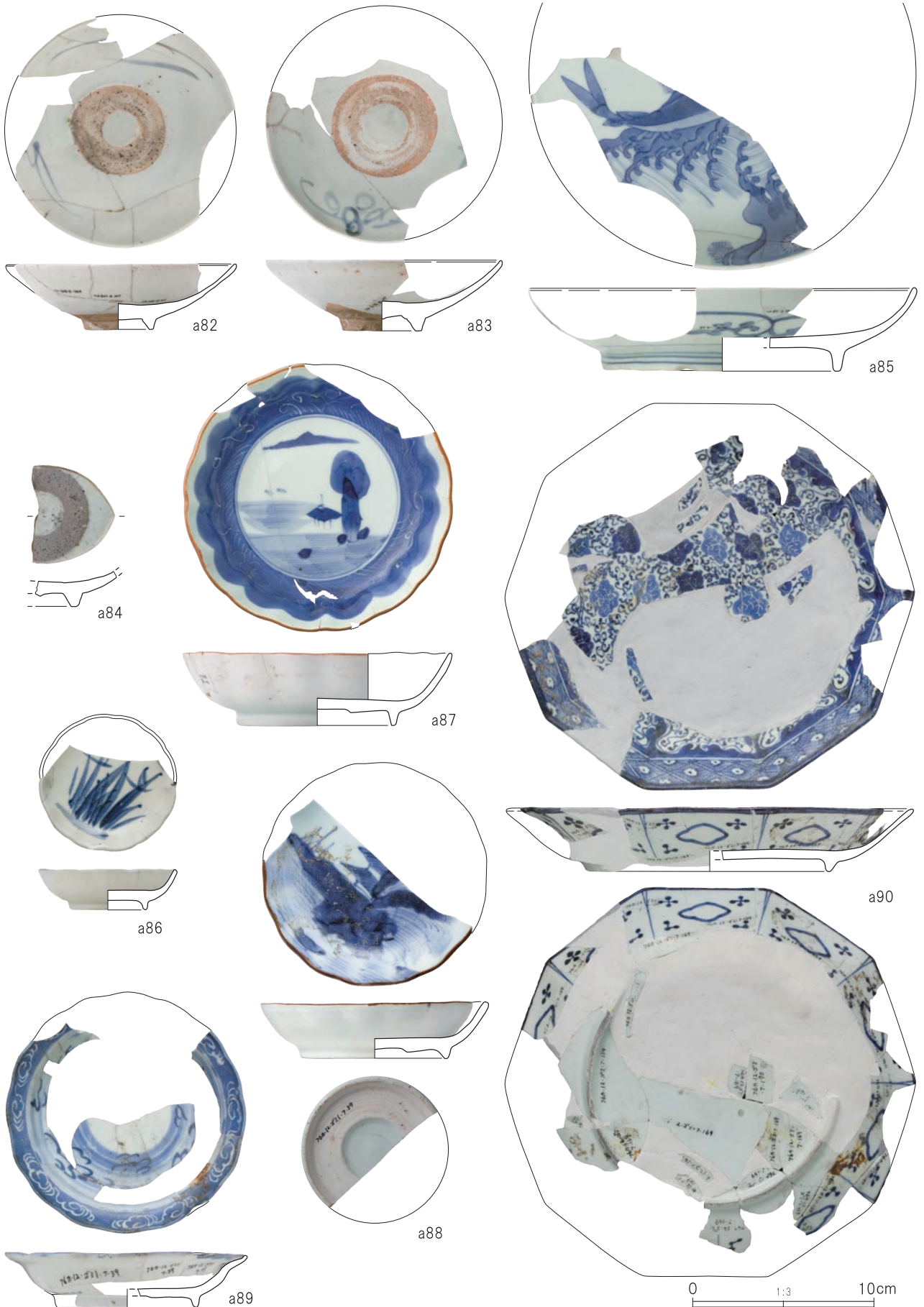
图V-4 磁器 (3)



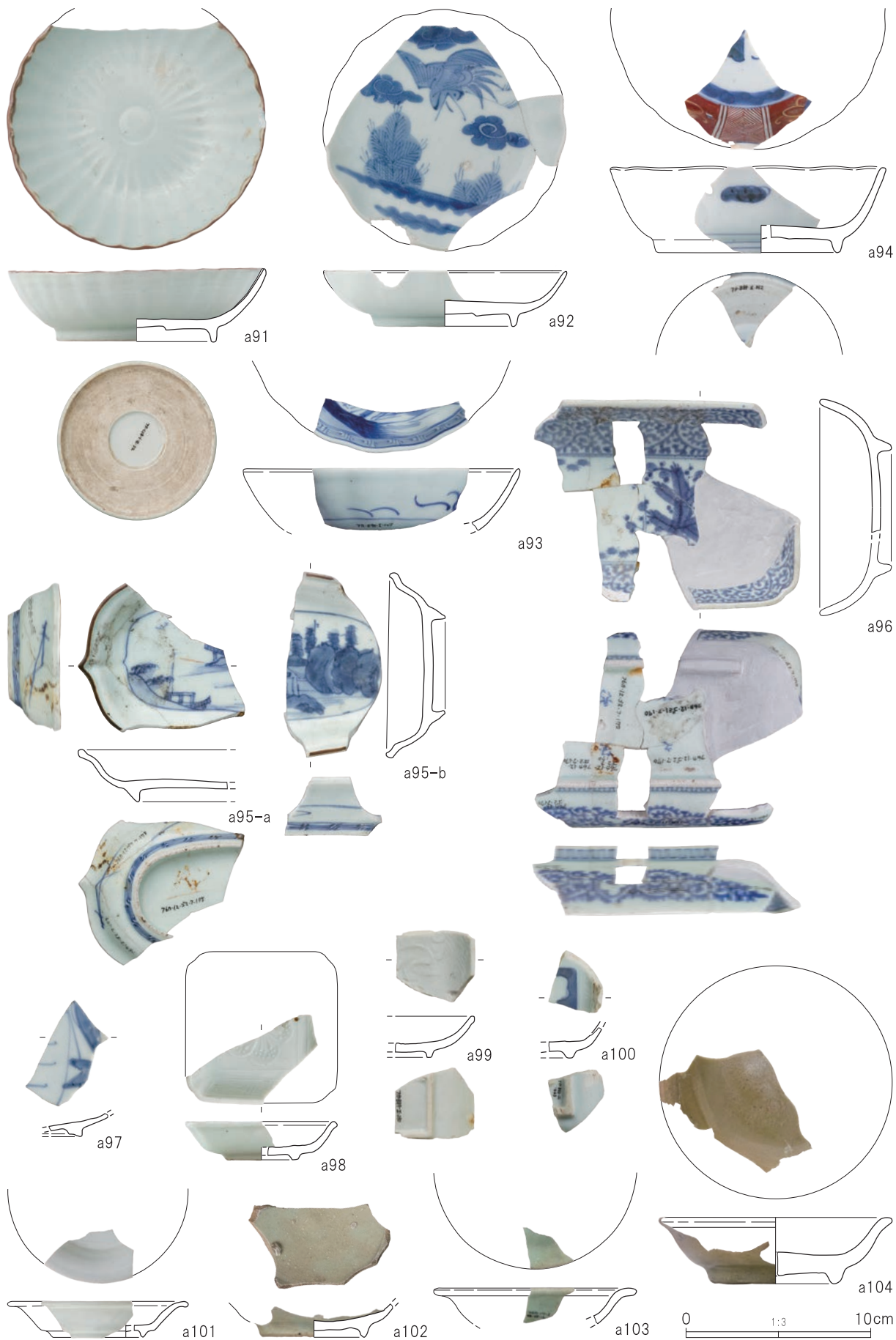
图V-5 磁器 (4)



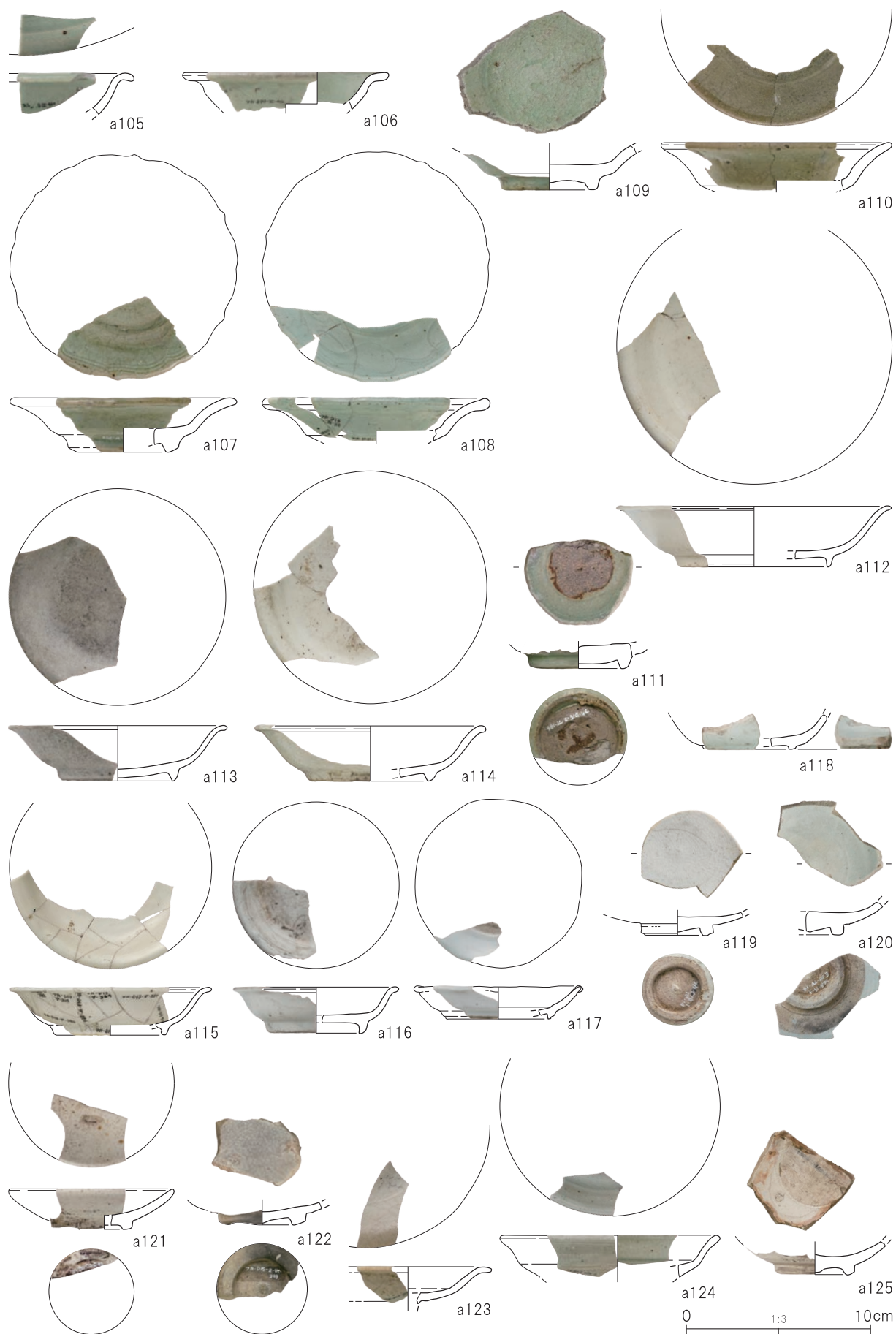
图V-6 磁器 (5)



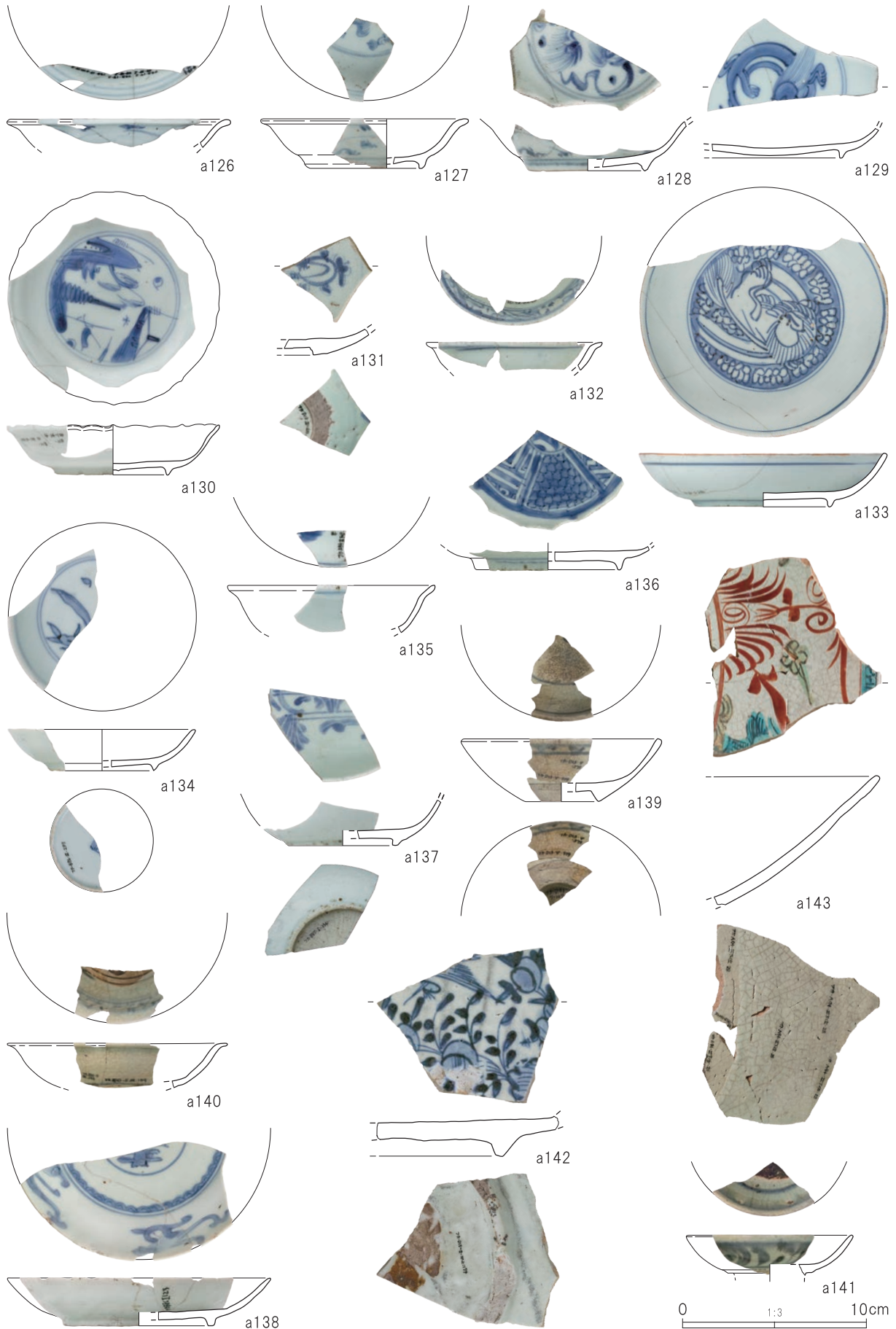
图V-7 磁器 (6)



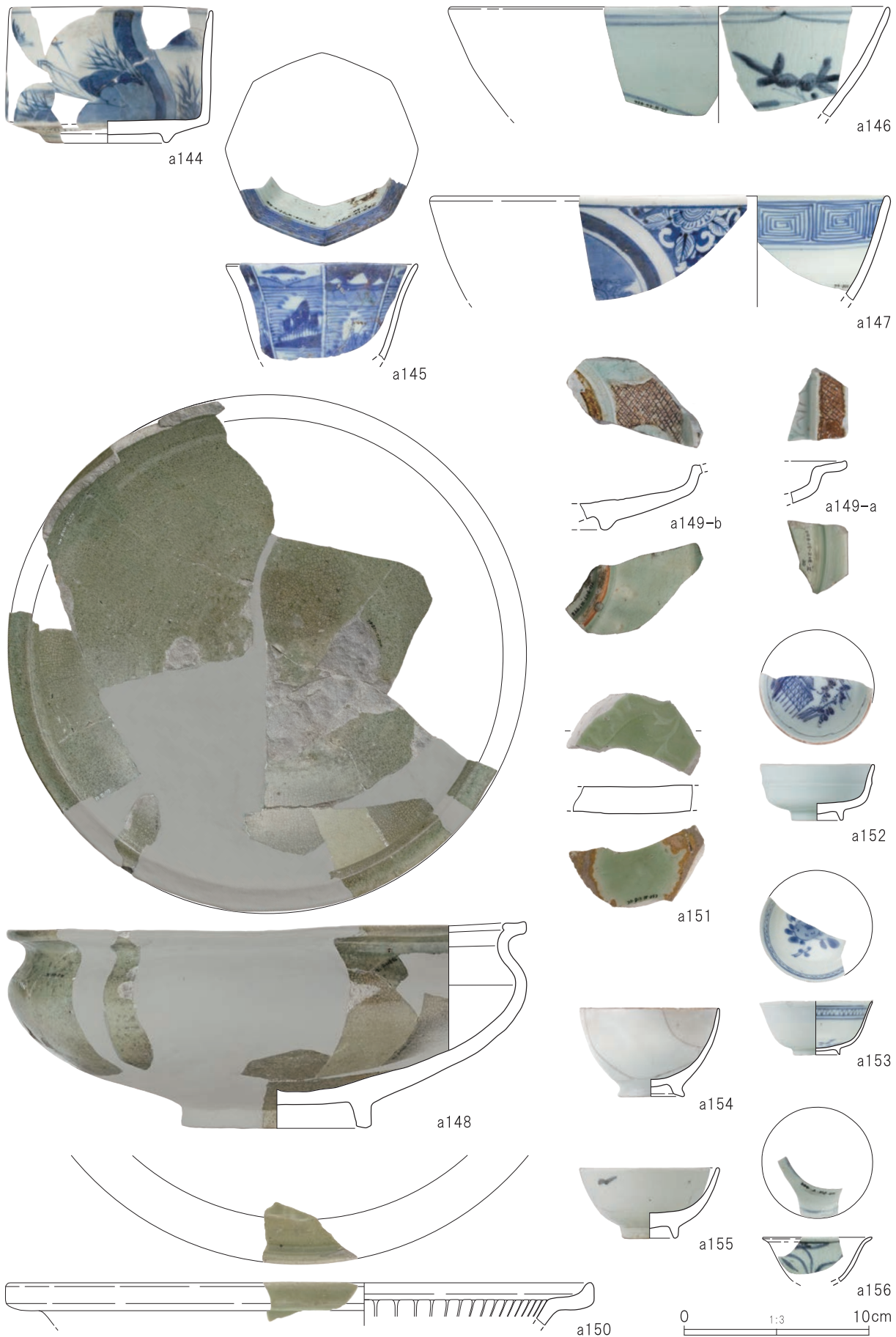
图V-8 磁器 (7)



图V-9 磁器 (8)



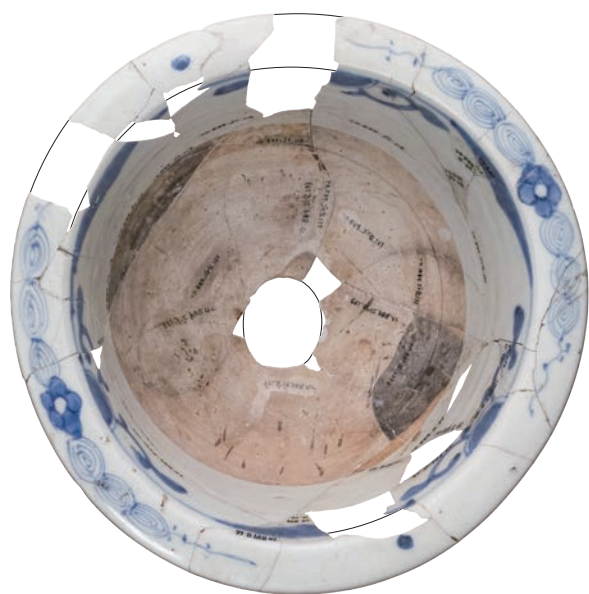
图V-10 磁器 (9)



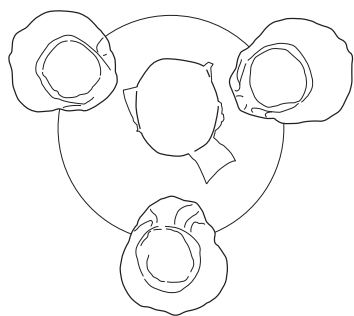
图V-11 磁器 (10)



图V-12 磁器 (11)



a171



a172



a173



a175



a177



a174



a176



a178



a179



a182



a183



a184



a185



a180



a181

0 1:2 3cm

※No.a172~a179

0 1:3 10cm

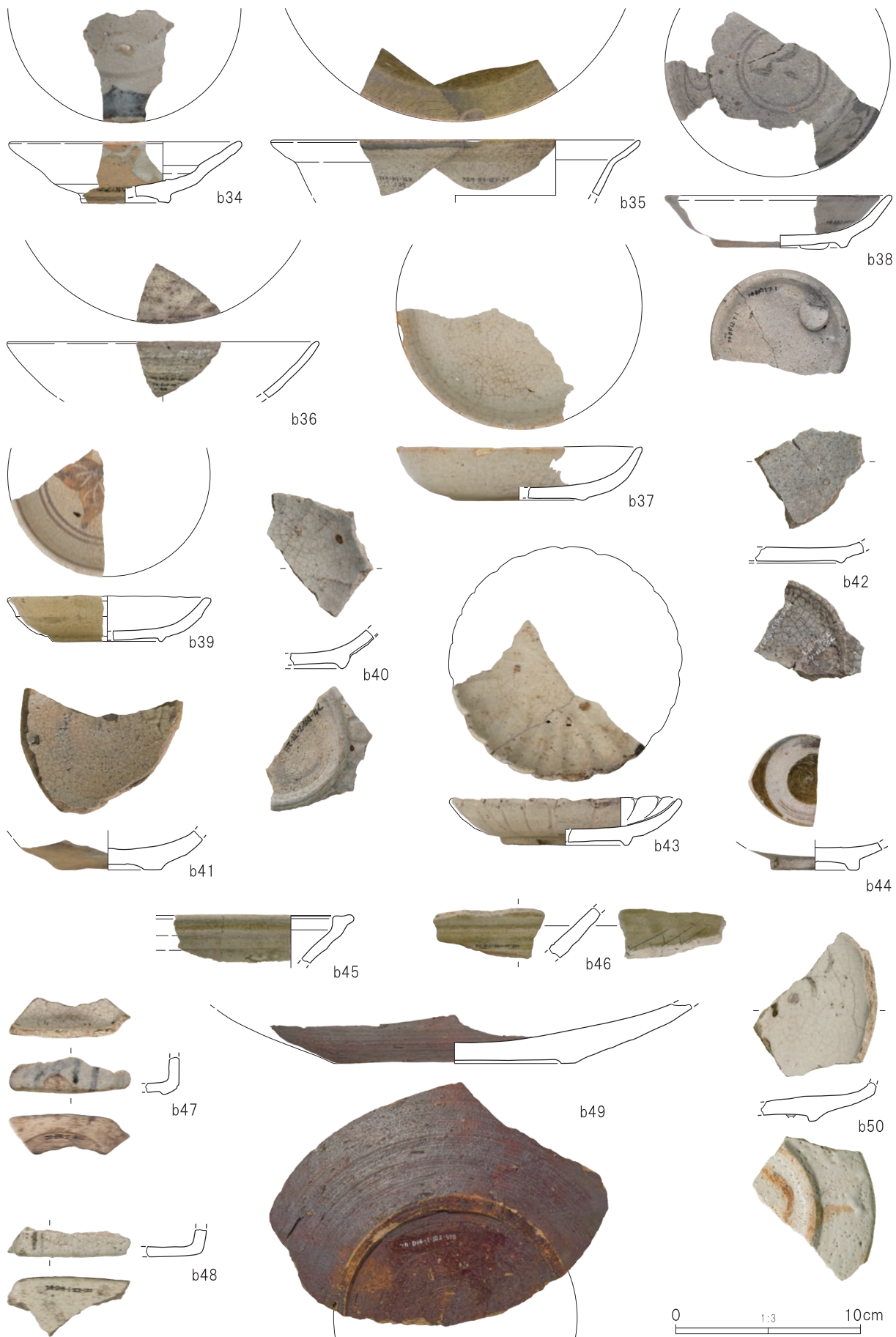
图V-13 磁器 (12)



图V-14 陶器 (1)



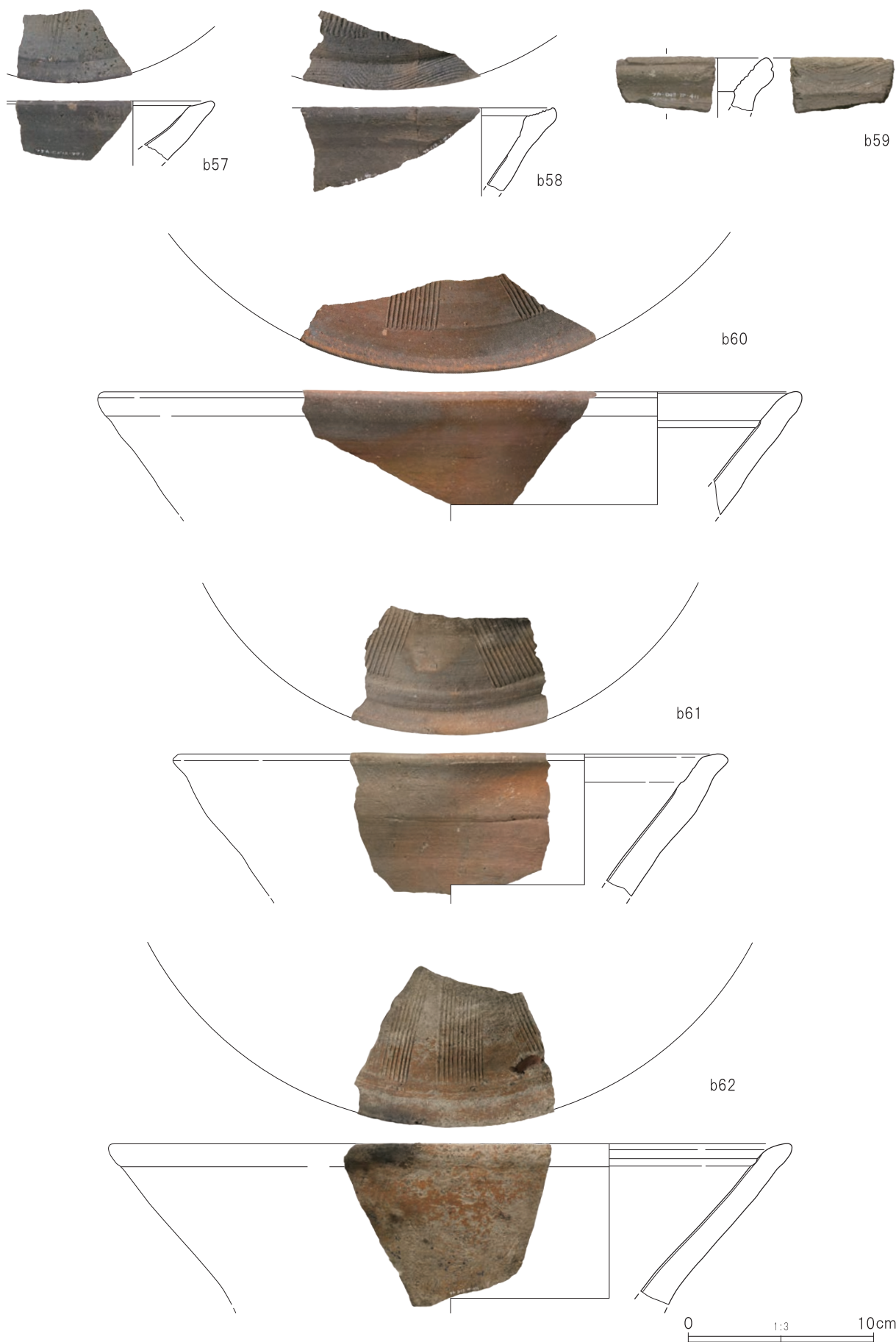
图V-15 陶器 (2)



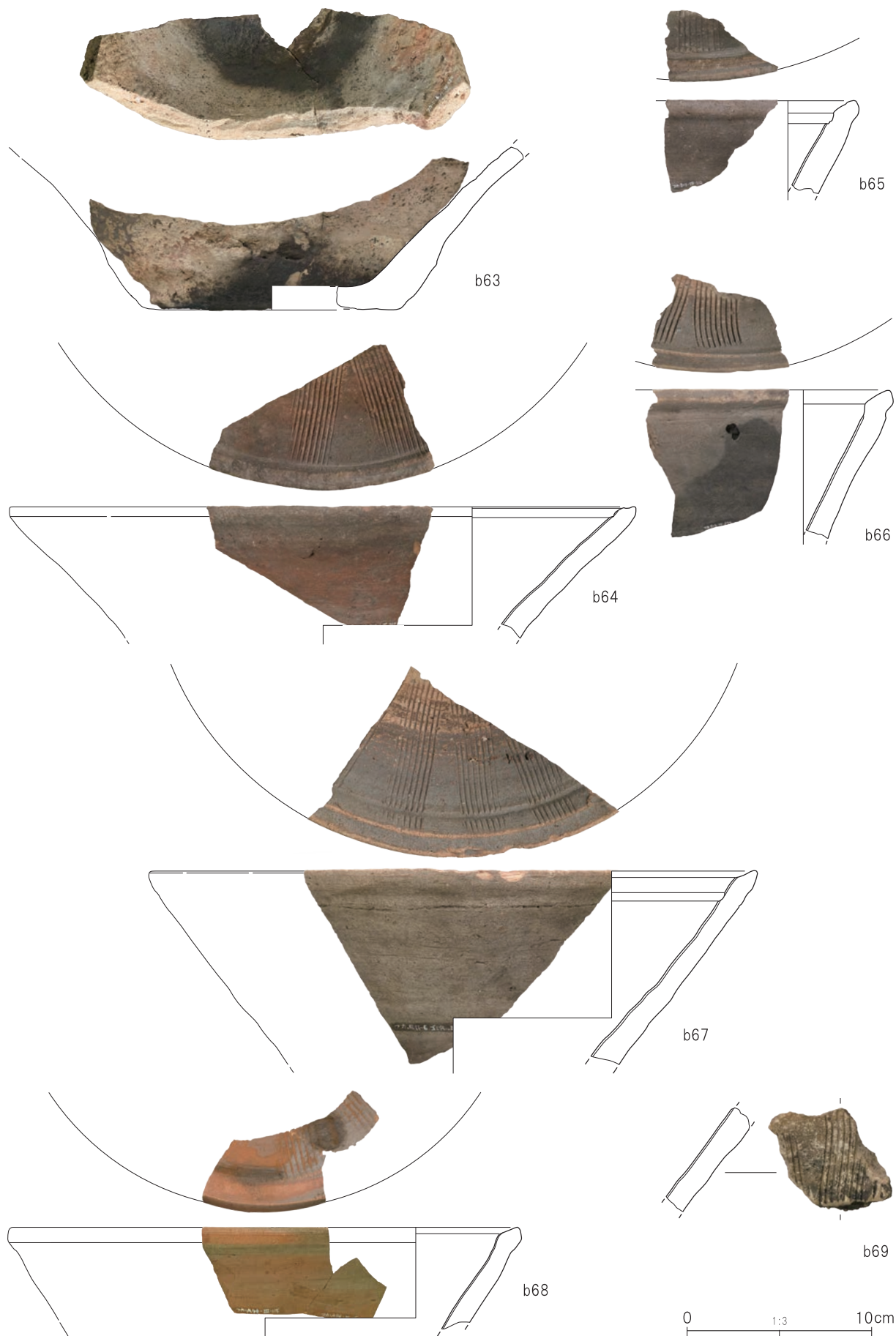
图V-16 陶器 (3)



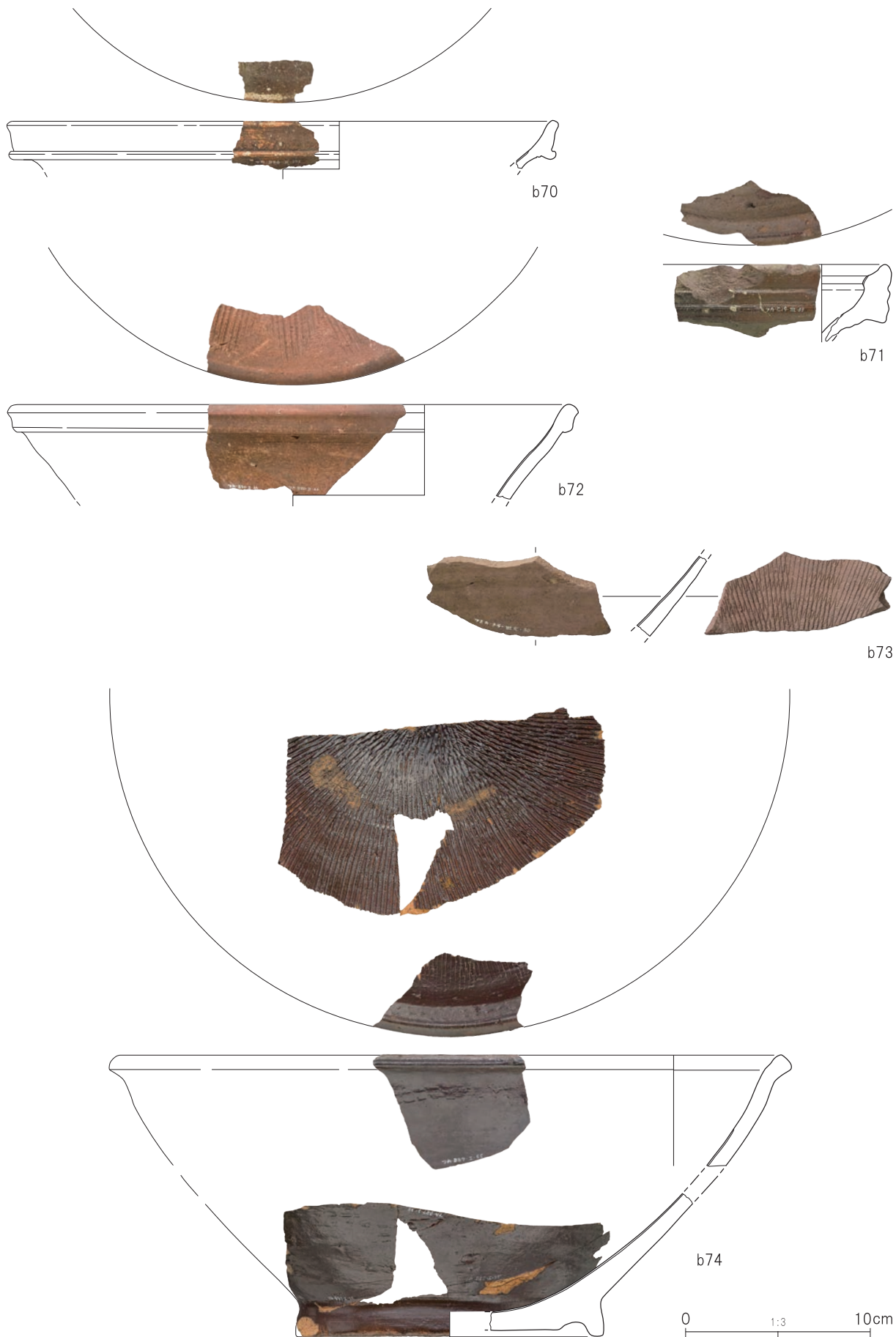
图V-17 陶器 (4)



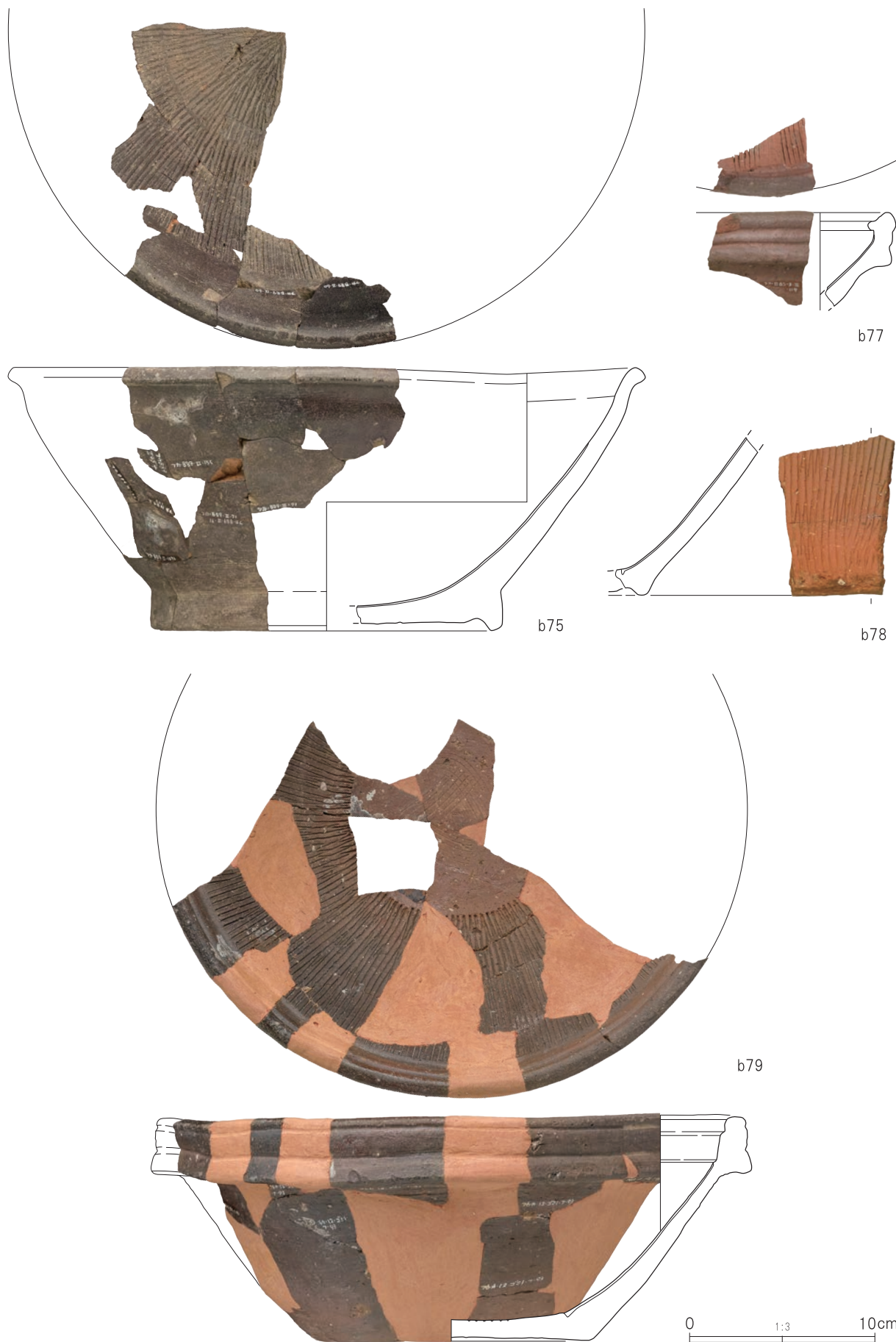
图V-18 陶器 (5)



图V-19 陶器 (6)



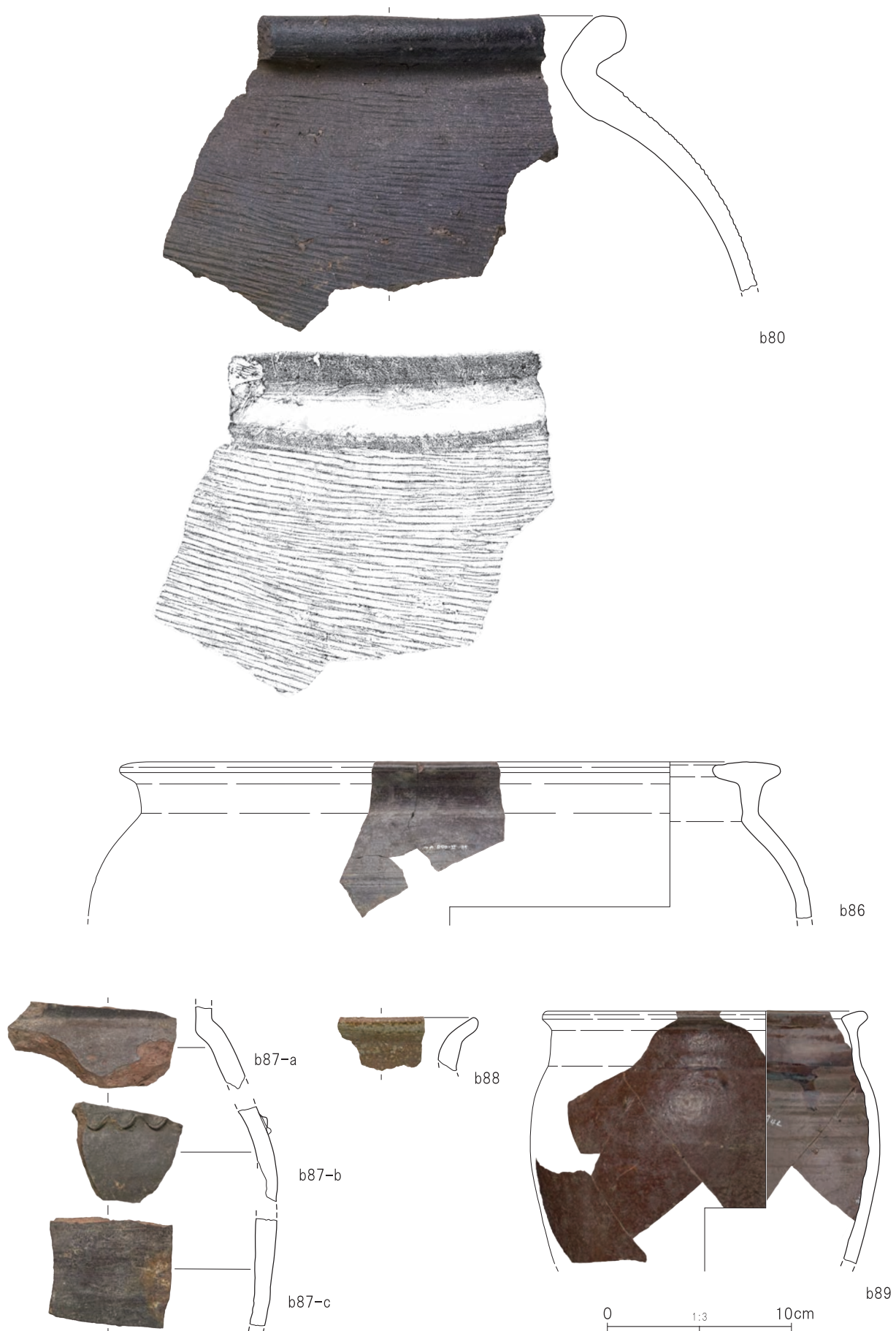
图V-20 陶器 (7)



图V-21 陶器 (8)



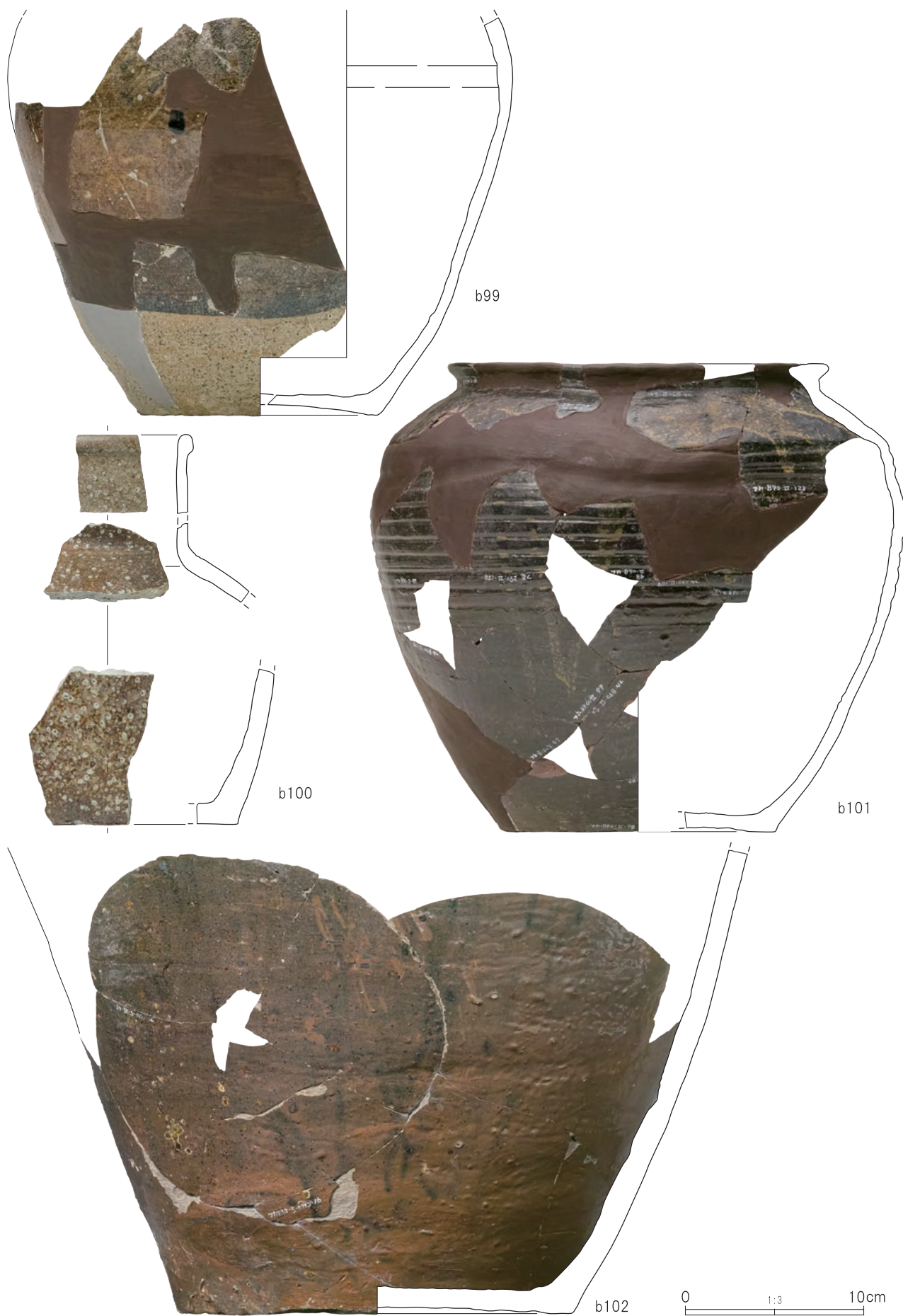
图V-22 陶器 (9)



图V-23 陶器 (10)



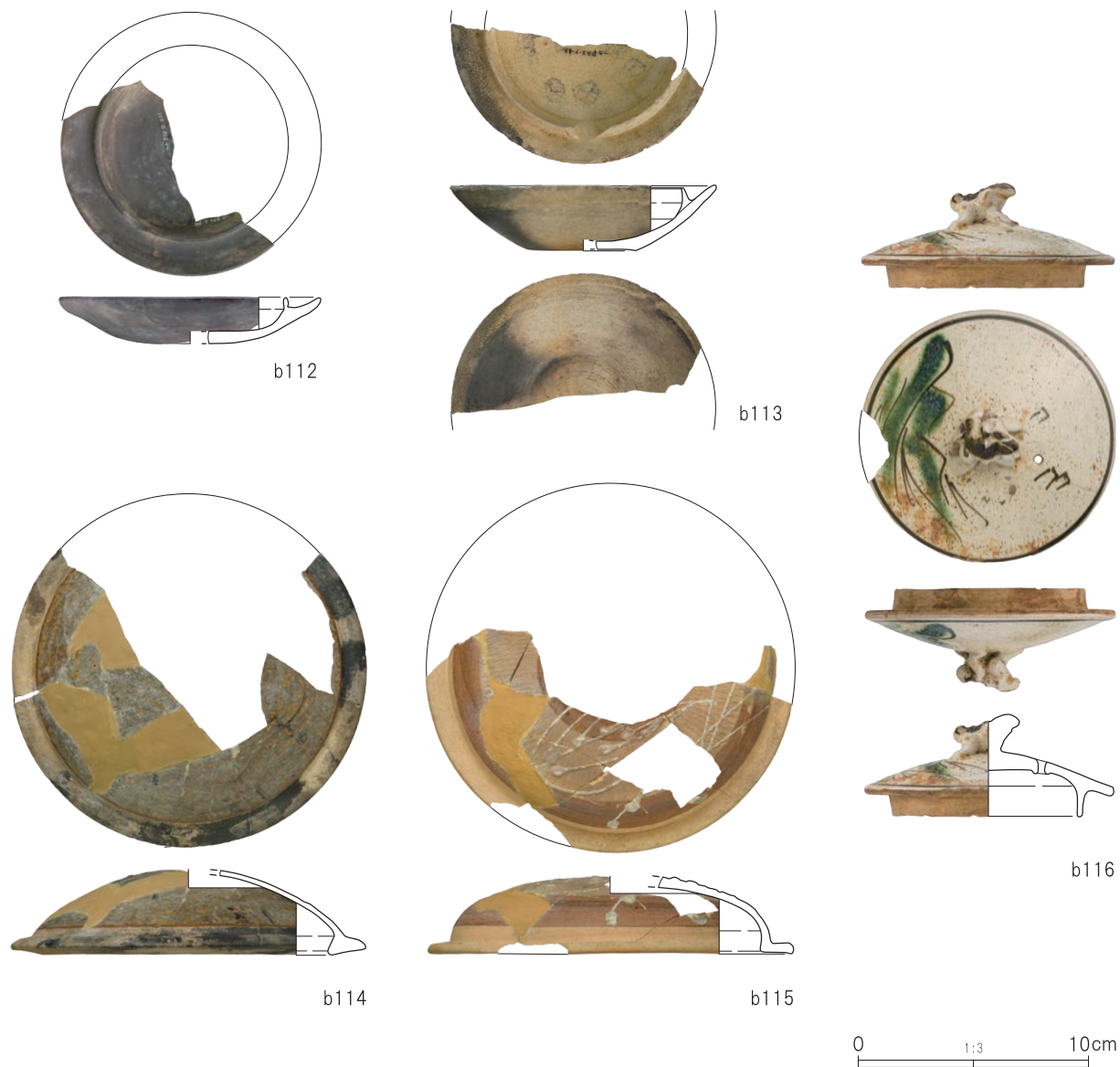
图 V-24 陶器 (11)



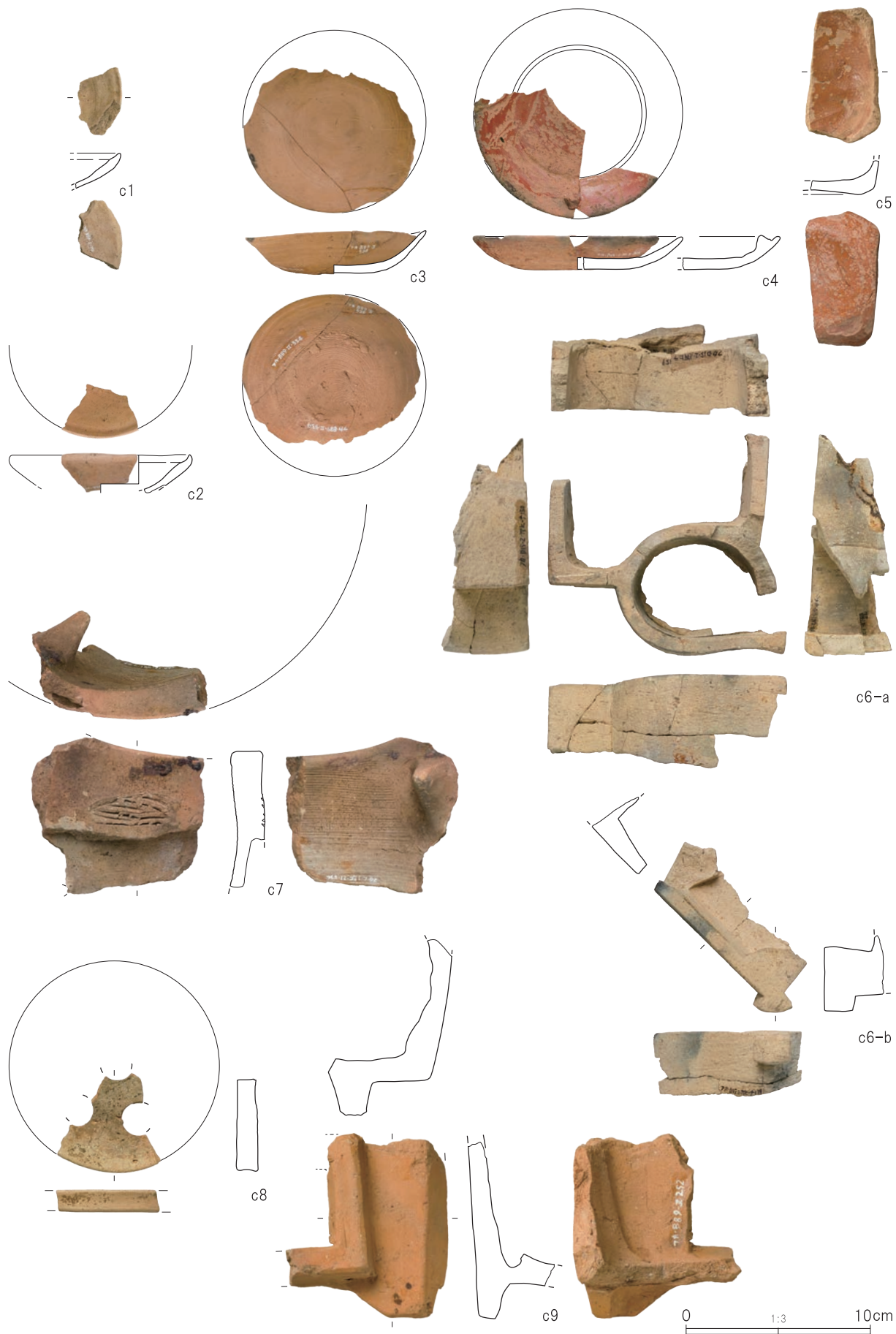
图V-25 陶器 (12)



图V-26 陶器 (13)



图V-27 陶器 (14)



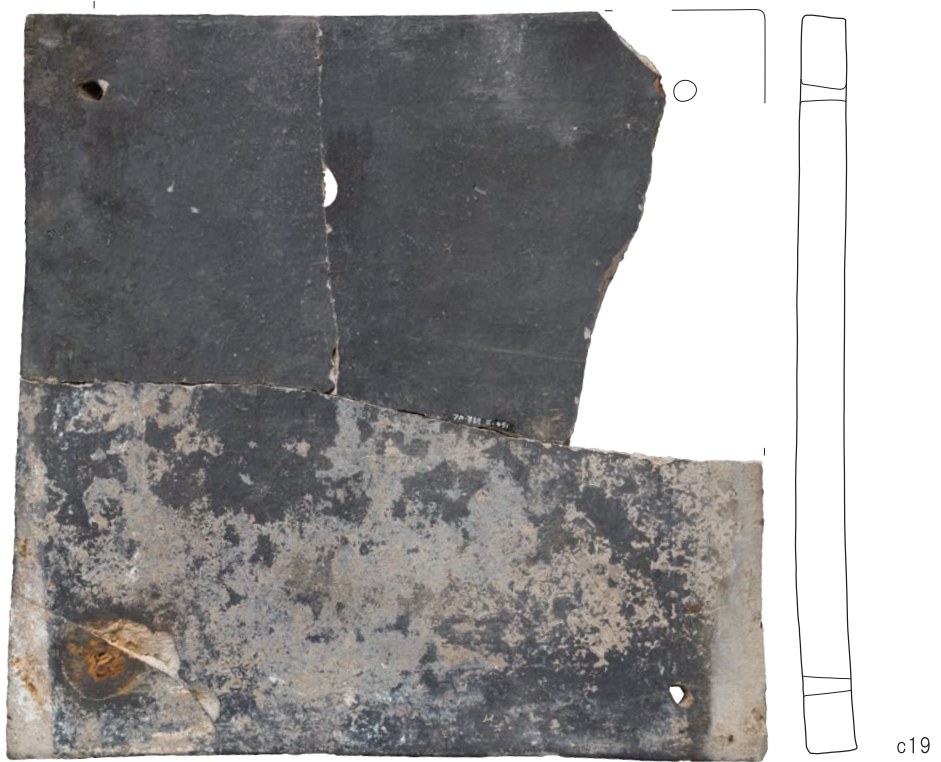
図V-28 瓦・土製品ほか (1)



図V-29 瓦・土製品ほか (2)



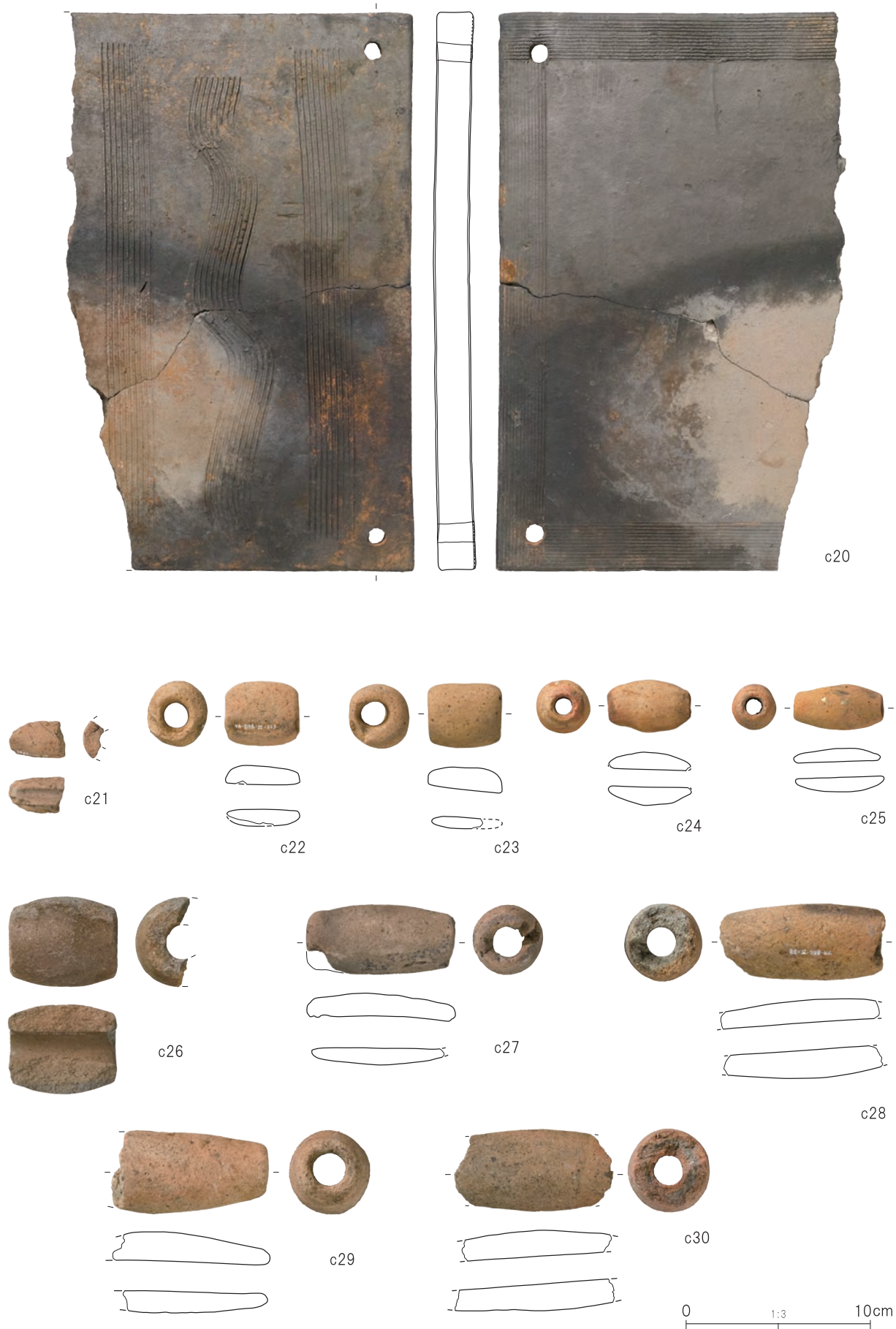
c18



c19



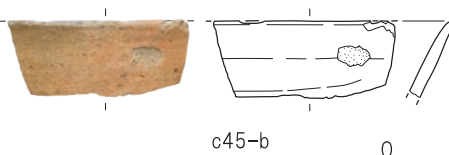
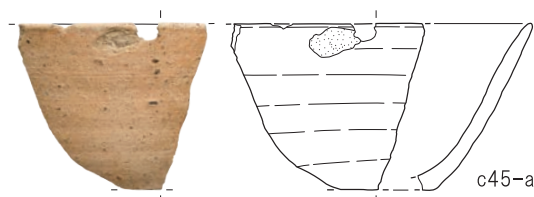
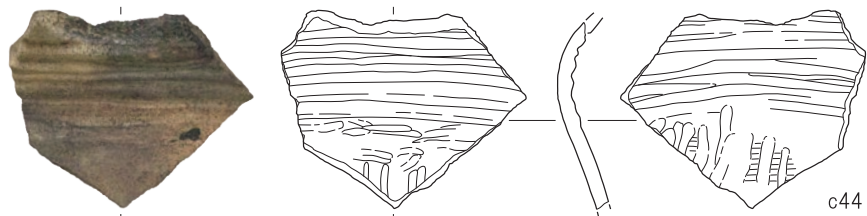
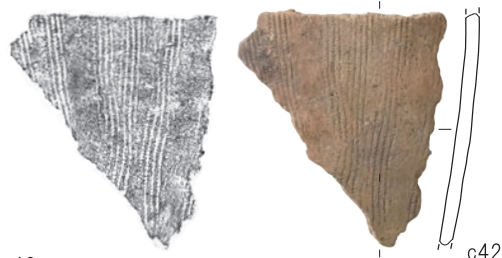
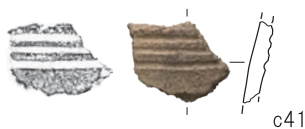
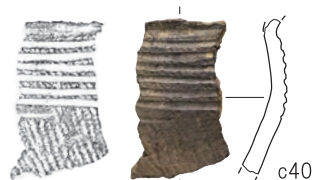
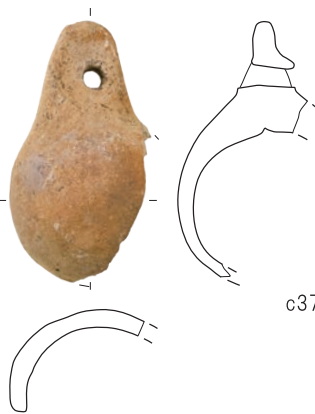
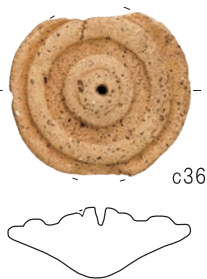
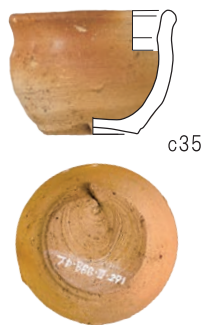
図V-30 瓦・土製品ほか (3)



図V-31 瓦・土製品ほか (4)



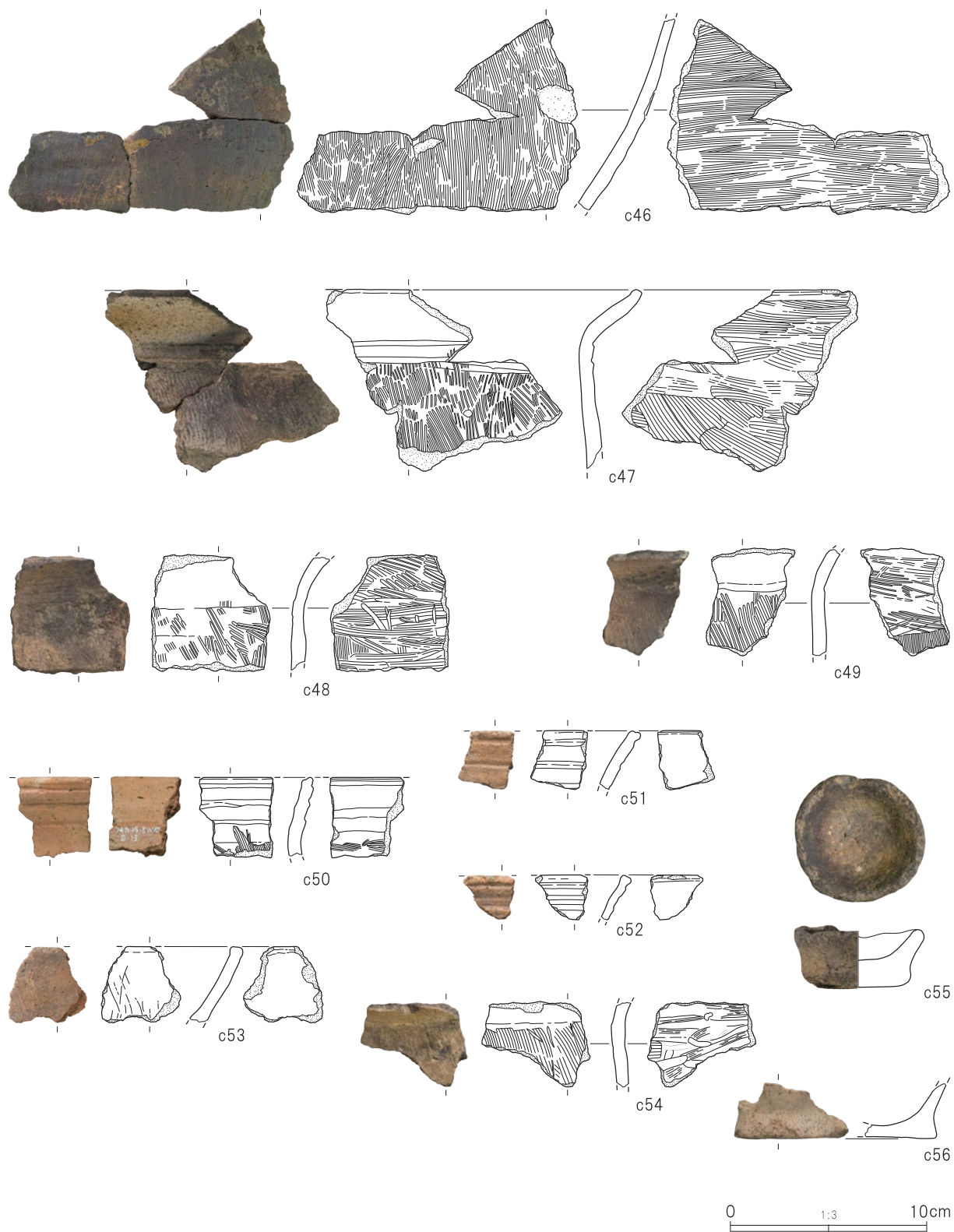
模様部分拡大



0 2:3 3cm
※No. c31~c39

0 1:3 10cm

図V-32 瓦・土製品ほか (5)



図V-33 瓦・土製品ほか (6)

3 金属製品

2,603点（鉄製品1,918点、非鉄製品292点、貨幣393点）が出土している。地番・層位別の内訳は表V-17~19のとおりである。このうち非掲載品は大分類のみにとどめている。以下、前報告（北埋調報290）の項目を踏襲し、図化遺物の詳細について記載する。なお、金属製品等の実測図（図V-35~47・49）は、3Dスキャナ型三次元測定機（KEYENCE VLシリーズ）で作成した三次元データから図化した。

(1) 鉄製品

刀類・武具類

分類は刃渡20cm以上とみられるものを刀。20cm以下を小刀とした。小刀は小野哲也の分類を用いた（小野2000）。1・2は刀。1は切先から茎まで緩やかに外反りする丸棟、平造の脇差である、腐食により判然としないが、鞘に納められた状態とみられる。鍔のみで鏢^{はばき}はない。X線では刃区、棟区は不明瞭。目釘は1か所のみで、茎の中心よりやや鍔側に寄った位置にある。鍔は銅製。図化面側のみわずかに銀、金、ヒ素が認められた。2は全長不明であるが刀とした。平棟、平造で棟側に一本樋が認められる。3~7は小刀。7を除き、棟部が基軸と平行ないわゆるI類に属する。3~5は小柄とみられる。3・4は茎が身幅の中央付近にある両区である。3は茎が長い。切先を欠損する。5・6は棟区がなく、棟部が茎と直線となるもの。5は刃身に木質が残る。6は残存状況が悪く、切先、棟区が不明瞭である。一部木質が残る。7は刃身が棟部側に外湾するII類に属する可能性があるもの。両区は不明瞭であるが、茎とみられる部分に木質が残る。8は小札。本小札の再加工品とみられる。

生活具・工具

9・10は茶釜の蓋。鑄造である。接合しないが質感、厚みが類似しており同一個体の可能性がある。11~15は鉄鍋である。11は底部で丸湯口がつく。12は口縁部。11と溶着状態で出土。同一個体かもしれない。13~15は脚部のある破片。15は脚のみで長さ5.3cmの大型となる。16は鑿^{たがね}。基部はやや潰れる。17は毛抜。右側を欠損する。18・19は釣針。20は用途不明。21・22は分銅。21は宝塔形。明瞭ではないが、頂突起部に水平方向の貫通孔、底部に垂直方向の貫通しない細穴がある。22は釣鐘形。重さは21が200.3g、22は228.4gである。54~59は鍛造で棒状を呈する。54は屈曲する部分がある。55の断面は丸みを帯びる。56はヤスの可能性がある。57・59は図の上方の断面がやや扁平となる角棒。58は2段に屈曲し先端は巻釘状に加工される。

釘

23~53、60~66は和釘。金属遺物の中で最多である。大火による焼失により建築材に残った釘等が遺棄されたものが多いとみられる。51・62は脚部にやや不自然な変形が認められ、転用されている可能性がある。23~53は、基脚部の断面が概ね正方形を呈する「建築用和釘」。60~66が長方形を呈するいわゆる「舟釘」である。建築用、舟釘の順に推定長順に記す。1寸2分（36mm）23~25。1寸5分（45mm）26。1寸6分（48mm）27~35。2寸（60mm）36~41。2寸5分（75mm）42~44。3寸（90mm）44・45。3寸5分（105mm）47~49。4寸（120mm）50。4寸5分（135mm）51。以上48以外は、角釘の頭を鍛き巻き、頂部が平坦となる金箱文夫の分類（金箱1984）における巻頭M2にあたる。52・53は同分類の折釘C。長さは1寸6分である。舟釘は60が1寸4分。61が2寸。62~64が4寸。65が4寸4分。66が5寸4分。頭の形状は66が不明な他は全て折釘である。

鍔

67・68は平鍔。69~73は2寸5分~6寸5分までの鍔である。比較的大きな72・73は断面がやや扁平となる傾向がある。

その他

74～77は用途の不明なもの。74・75は扁平棒状な素材を用いる。74は「L」字状の扁平厚手。図の右手は欠損しているとみられる。75は緩やかな曲線を描く。76・77は薄い金属管に糸を巻き付けたもの。錆色の色調から便宜上ここに分類した。仙台城跡で規格、構造が極めて類似するものが出土している（東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2008 図54-24）。

(2) 非鉄製品

刀装具等

1は釶、2は切羽。縁は「こきざみ」となる。3・4は鏝。素材は純銅である。3は丸形で四隅に切込があり、折り曲げられる。5は目貫。図柄は蕪^{かぶ}。6・7は小柄、8は筭^{こうがい}である。9の図柄も蕪とみられる。9は先端が匙状、末端は矢筈状に加工され、頸部中央には穿孔される。耳かきとしたが、簪や筭の一部の可能性もある。10は鞞^{こはぜ}である。図化面中央の一部が金色を呈する。素材となる銅の他に、金、水銀が認められた。鍍金されていたとみられる。

装身具等・その他

11は鏡の一部とした。裏面は平滑。表面は水面、樹木、岩等の庭園風の図柄が鋳出される。図左方に小ぶりの鈕^{ちゆう}があり、出土時には繊維が残存していた。12は簪。完形であるが、折り曲げられ変形している。素材は銅を主とし、亜鉛が混じる真鍮製である。13は鈴。正面と下面に中心を避けて菊花文が刻まれている。素材は銅を主として、亜鉛、鉛が認められる。14は分銅。重さは51.9gである。対となる面に刻印がなされるが判読できない。素材は真鍮である。15は小型の容器。口縁内部に輪、対突起には穿孔がなされ、蓋がつくとみられる。16は銅環、17・18は乳金物。18には輪環がつけられる。17の素材はやや鉛の多い青銅。19・20は飾金具。19は把手状、20は八双金具。21は銅鍋である。真鍮とみられるがやや鉛が多い。22～26は用途不明。22は鳥と植物をモチーフとした抽象的な図柄の鋳造品。風鐸の舌部等が考えられるが不明である。23・24は工具の可能性もある。25・26は形状から木質の端部につけられた金具とみられる。

銅釘

27～31は銅釘。27～30は折釘、31は平鋌である。

煙管

部位名称、編年は古泉弘（古泉1983・1985）に従った。32～42は脂返が大きく湾曲する河骨形の雁首。32～34は比較的湾曲が強いもの。32・33は首部に肩がつく。32は肩部が輪状に刻まれ糸巻様に装飾される。36～42は比較的湾曲が弱いもの。37～42は首部に段差がない。37は線刻により花卉様の図柄が描かれる。43～46は脂返を欠くⅡ類Bに属する雁首。44は首部に直交する線刻が4～5mm単位で刻まれている。45は首の直線部に直交する線刻を施し、線間は刷毛目状に仕上げられている。47～56は吸口。47のみ肩が作出されるⅠ類。他はⅡ類である。54～56は線刻による文様が描かれる。54は6～7条の刻線が5単位つけられる。56は樹木状の文様が描かれる部分がある。

(3) 貨幣

鉄銭を含め393点が出土している。寛永通宝が最も多い。

寛永通寶

分類にあたっては、川根正教の形式（川根1995・1996）に従い、特徴ある字体の名称については藤光秀雄（藤光2013）の名称を用いた。1～20はⅠ期、古寛永。21～49は新寛永。21～27はⅡ期、背に

「文」字のあるいわゆる文銭。28はⅥ～Ⅶ期、四文銭。背11波である。色調がやや赤味を帯びる。29～49はⅢ～Ⅴ期に相当する。字画ごとに特徴を記す。「寛」32～34は「寛」の見画末尾が曲がって上に延びるいわゆる「虎ノ尾寛」。37は見画の末画が内側に跳ねる「内跳寛」。「永」35・36・44・45は点が草書になる「草点永」。「通」29～45は頭が「コ」または「ユ」、46～49は「マ」となる。「寶」46～49は、貝画の5画が1画の左に出る「爪貝寶」。

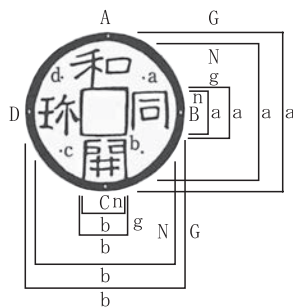
中国銭

唐銭、北宋銭、南宋銭、明銭が出土している。記載は日本出土銭総覧（兵庫埋蔵銭調査会1996）によった。50：開元通寶（初鑄621、以下同）、51：乾元重寶（758）、52：宋通元寶（960）、53・54：天禧通寶（1017）、55・56：天聖元寶（1023）、57・58：皇宗通寶（1038）、59：至和元寶（1054）、60：治平通寶（1064）、61：熙寧元寶（1068）、62～65：元豊通寶（1078）。62・63は篆書体。64は行書体。66・67：元祐通寶（1086）、66は篆書体。67は行書体。68：紹聖元寶（1094）、69・70：聖宋元寶（1101）、70は穿が多角形に加工される。71～74：洪武通寶（1368）。72・73は背に一銭。75：永樂通寶（1408）。

不明・その他

76～78は判読できないもの。全て左画が「寶」となる四字である。79は鉄銭・銅銭複数枚が連なる。80～86は無文、87～89は輪銭、87は6枚以上が溶着する。90は雁首銭、92は鉄銭。銘は不明、方穿である。91は鉛製の円盤。便宜上ここに掲載した。93は新南鐐二朱銀（1824～1830）。94は帝政ロシアアレクサンドル二世治下のもの。5コペイカ1864と記されている。

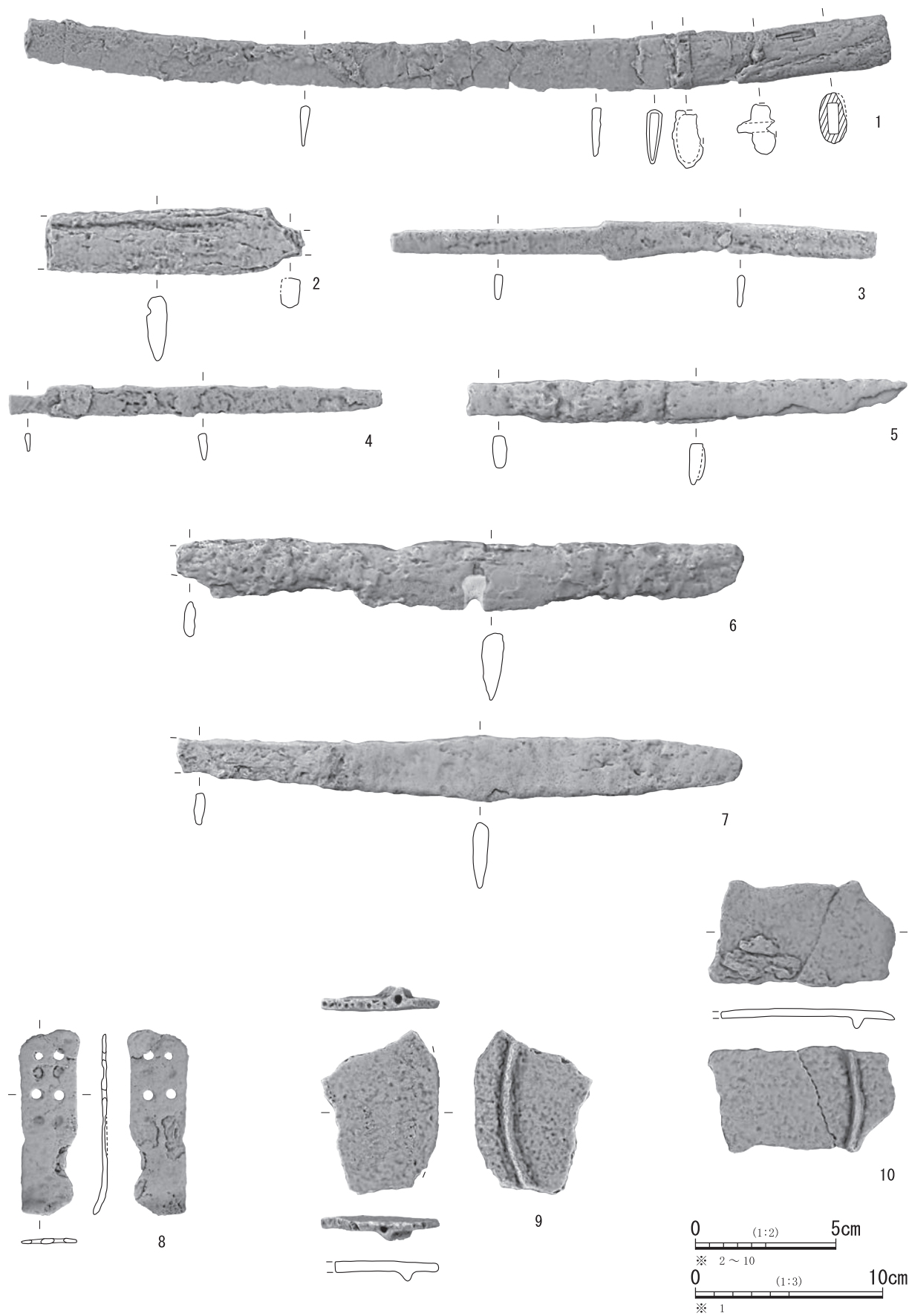
（立田）



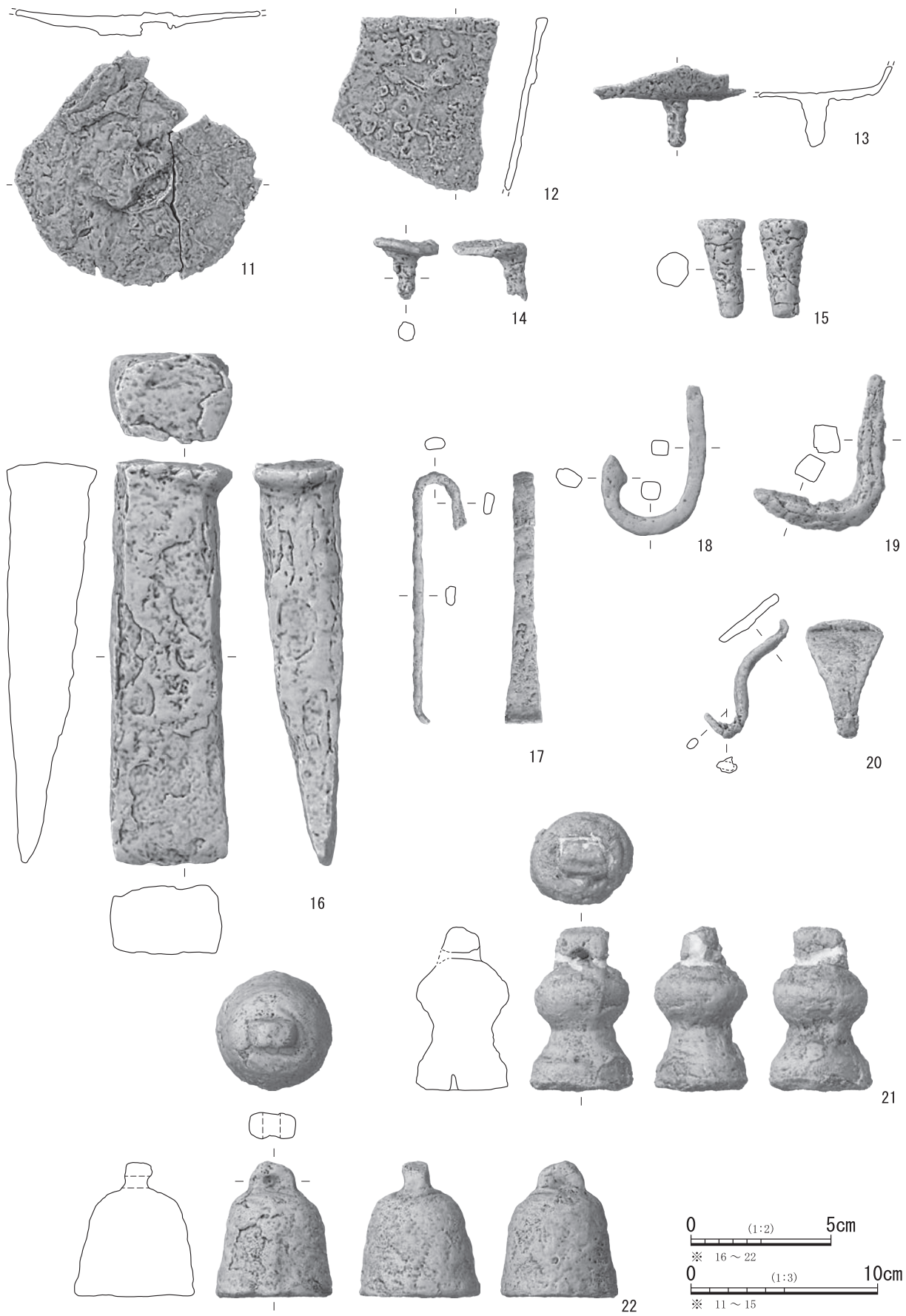
$$\begin{aligned} \text{外縁外径 } G &= \frac{Ga+Gb}{2} & \text{外縁内径 } N &= \frac{Na+Nb}{2} \\ \text{内郭外径 } g &= \frac{ga+gb}{2} & \text{内郭内径 } n &= \frac{na+nb}{2} \\ \text{外縁厚 } T &= \frac{A+B+C+D}{4} & \text{文字面厚 } t &= \frac{a+b+c+d}{4} \end{aligned}$$

出典：奈良文化財研究所編 2010 『発掘調査のてびき—整理・報告書編—』55頁 同成社

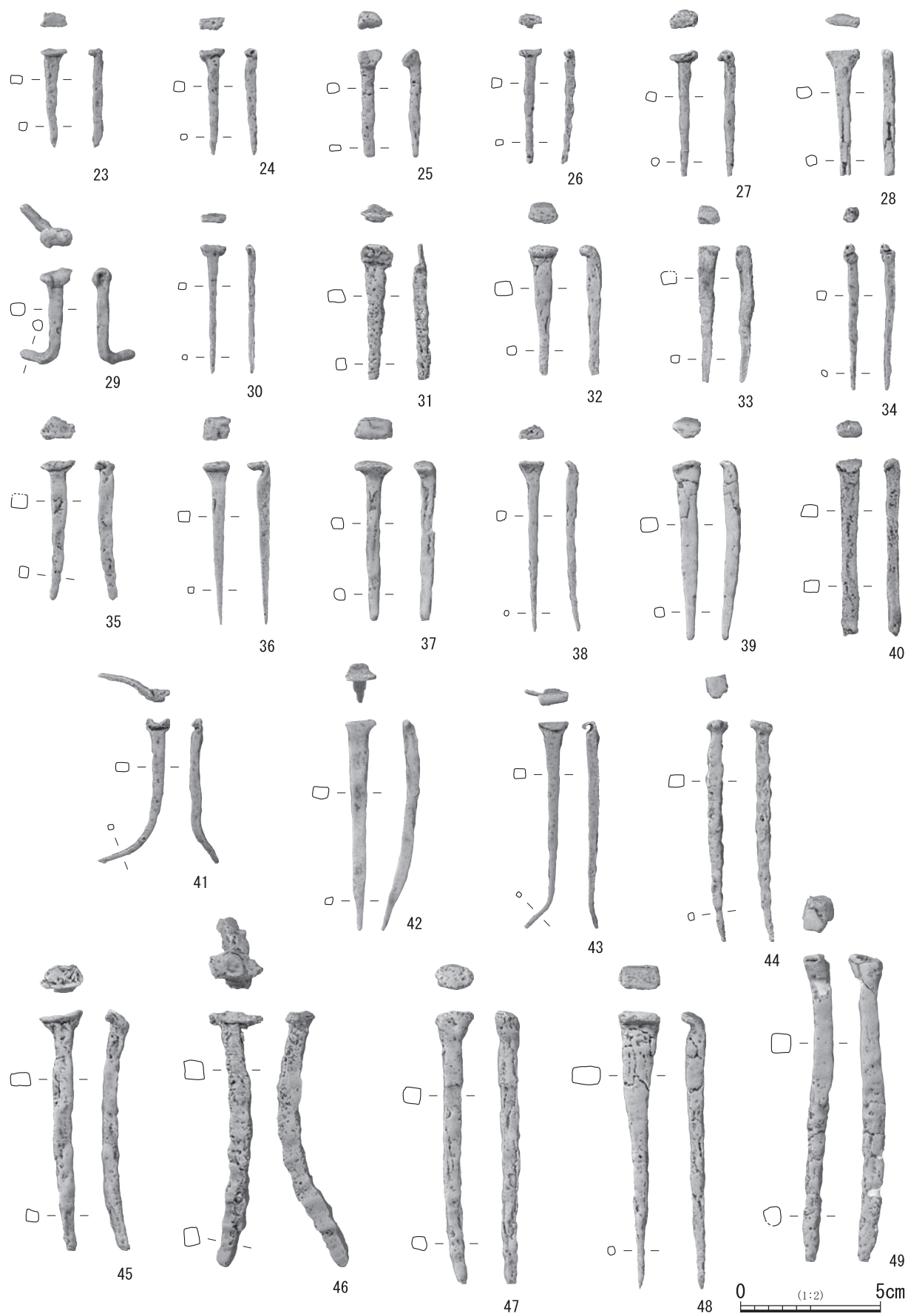
図V-34 銭計測位置



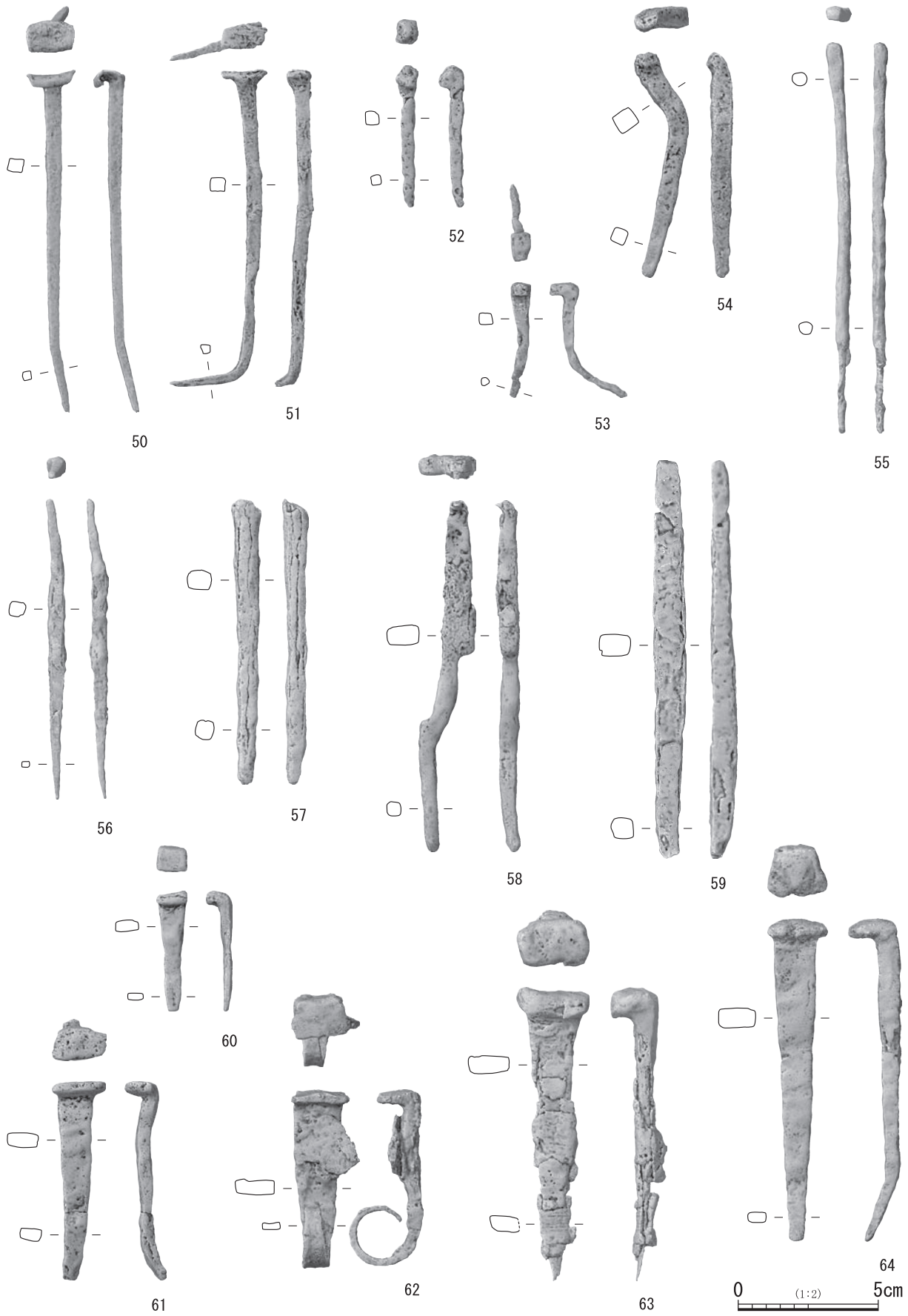
図V-35 鉄製品 (1)



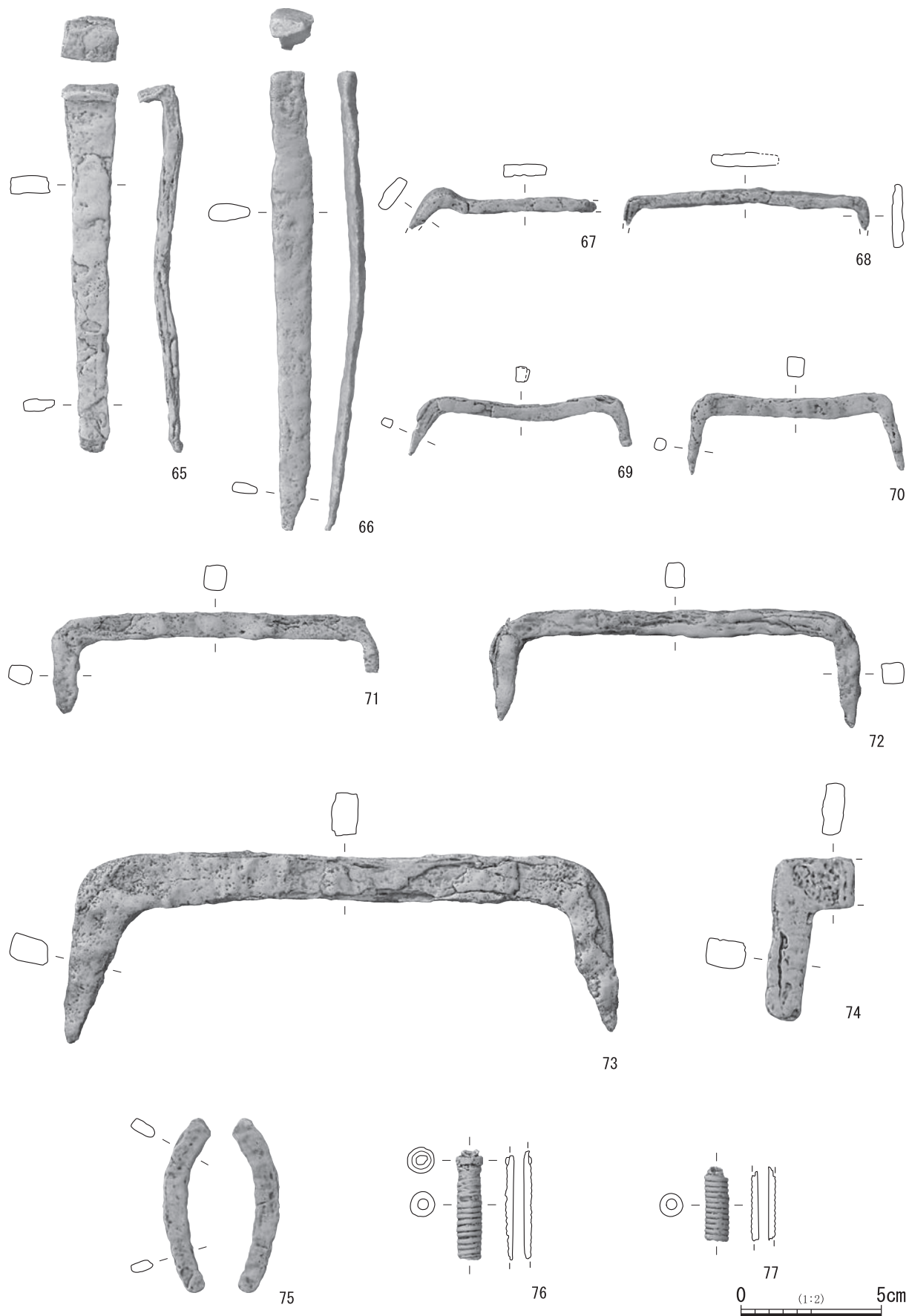
図V-36 鉄製品 (2)



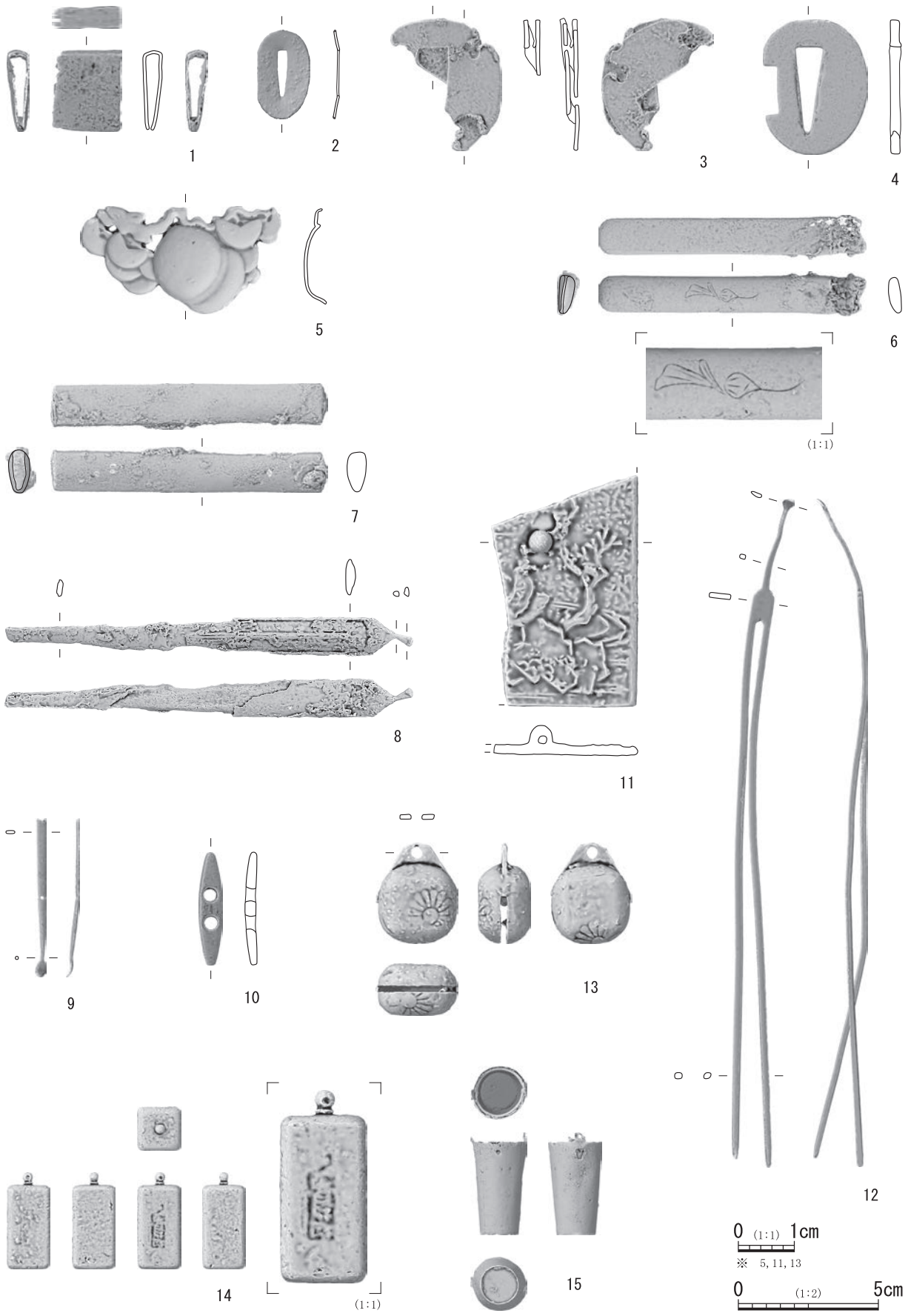
図V-37 鉄製品 (3)



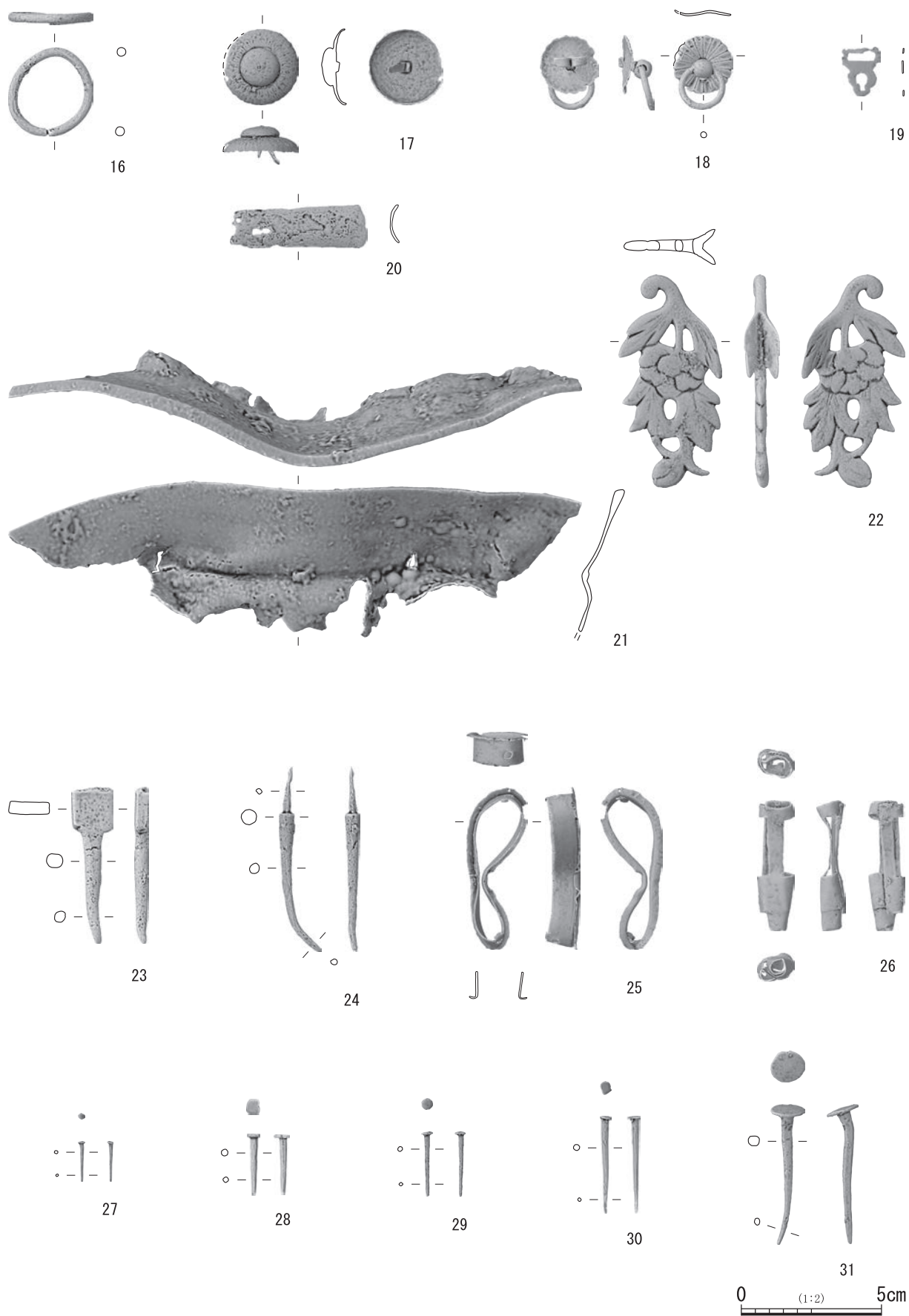
図V-38 鉄製品 (4)



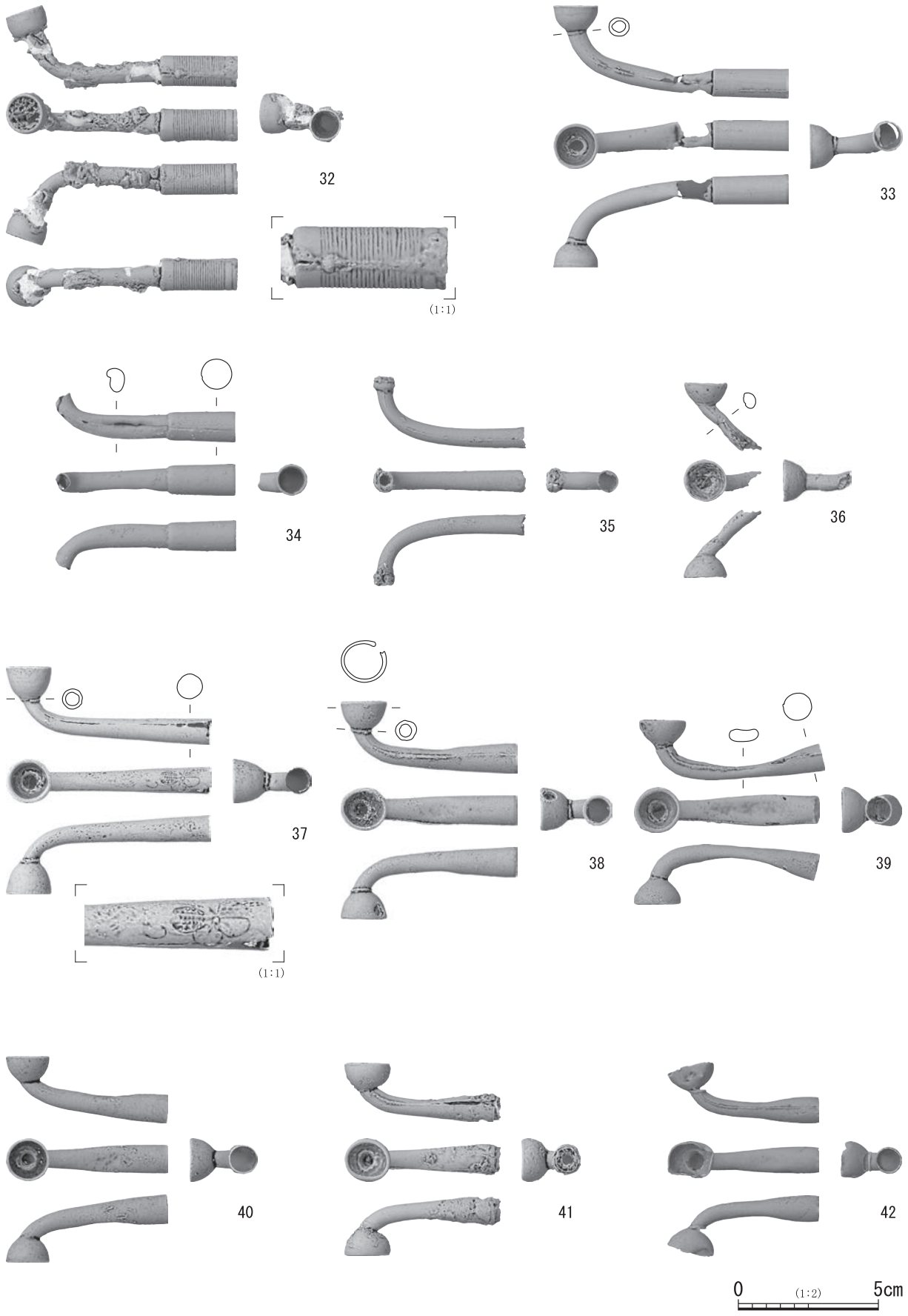
図V-39 鉄製品 (5)



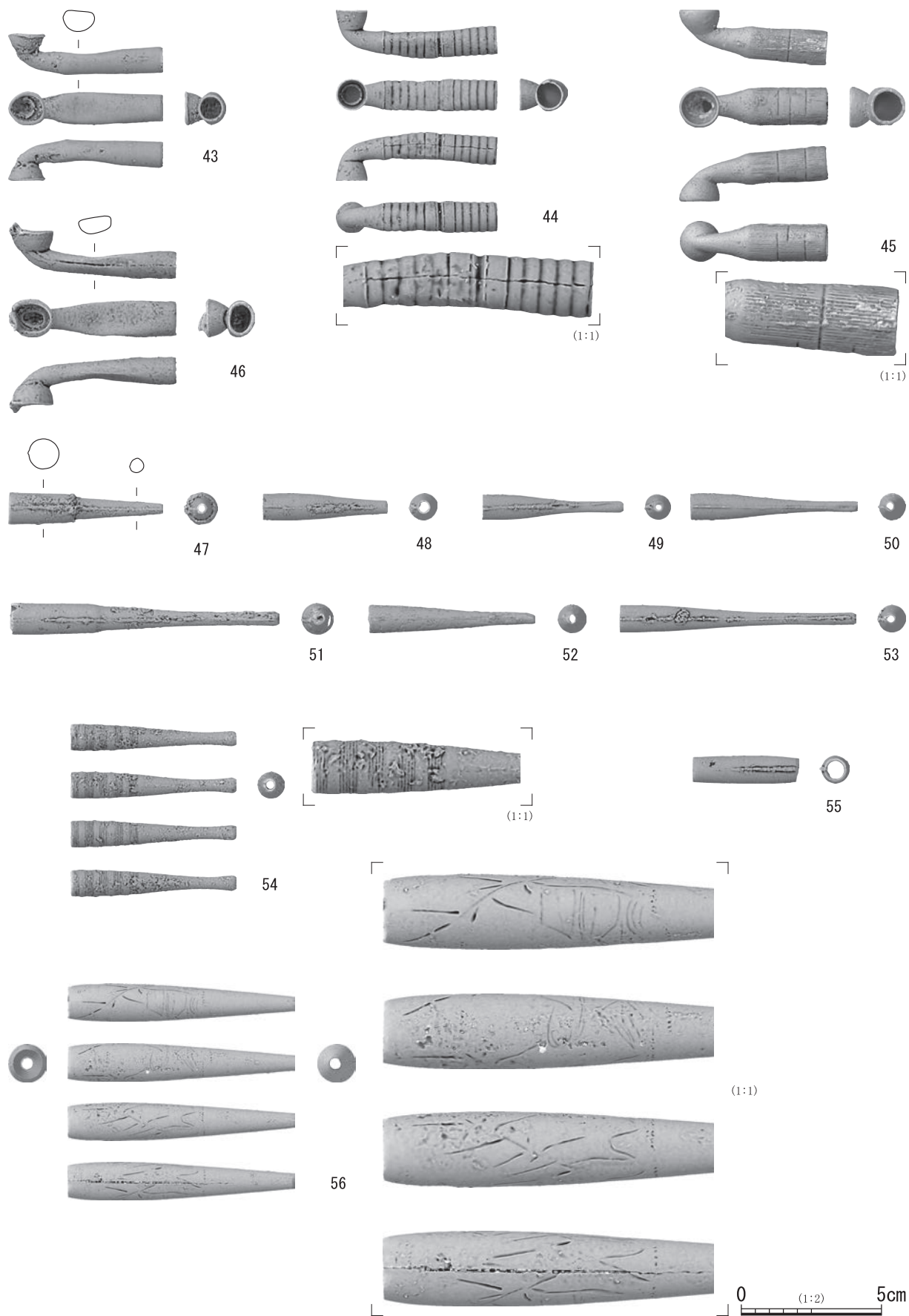
図V-40 非鉄製品 (1)



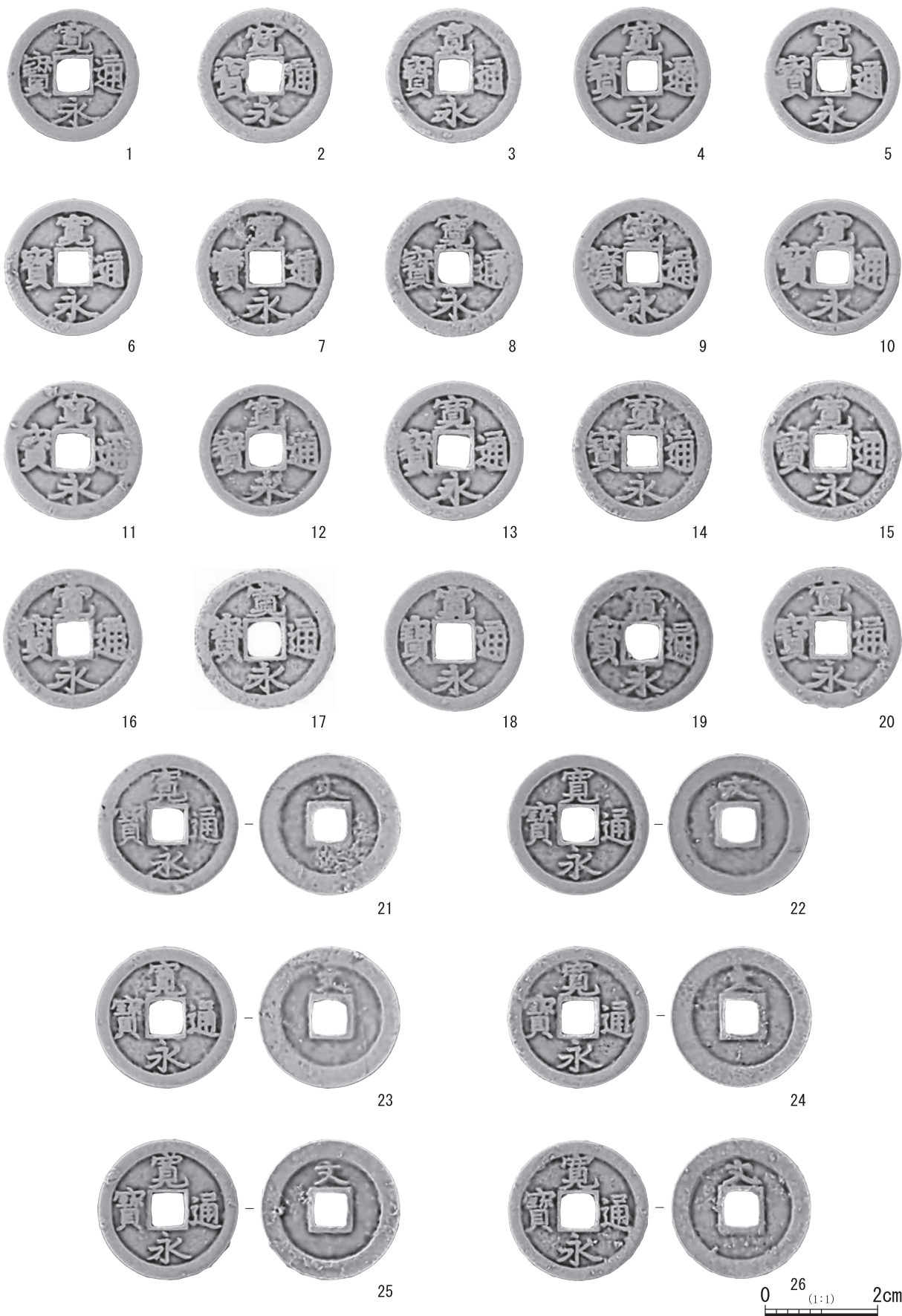
図V-41 非鉄製品 (2)



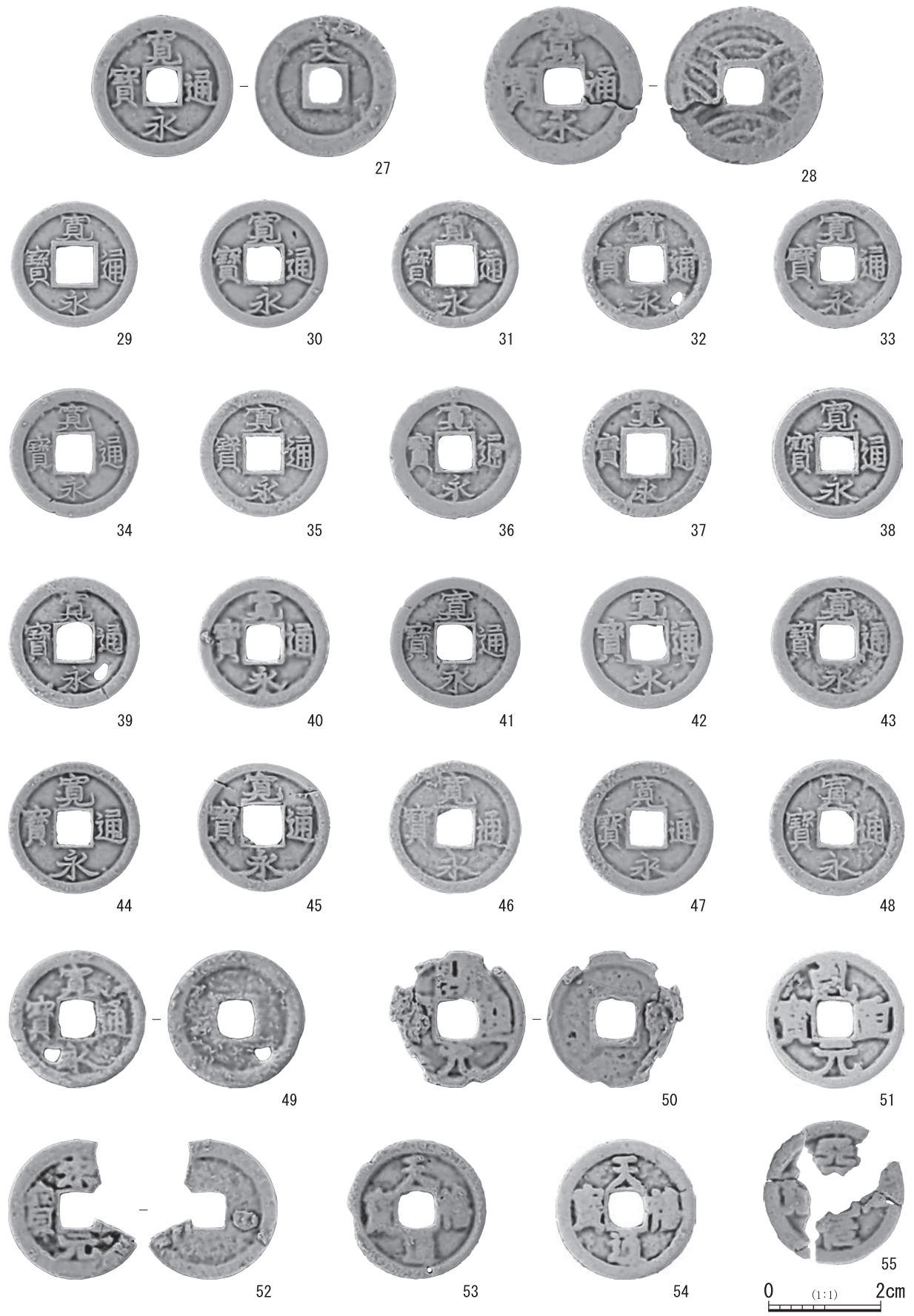
図V-42 非鉄製品 (3)



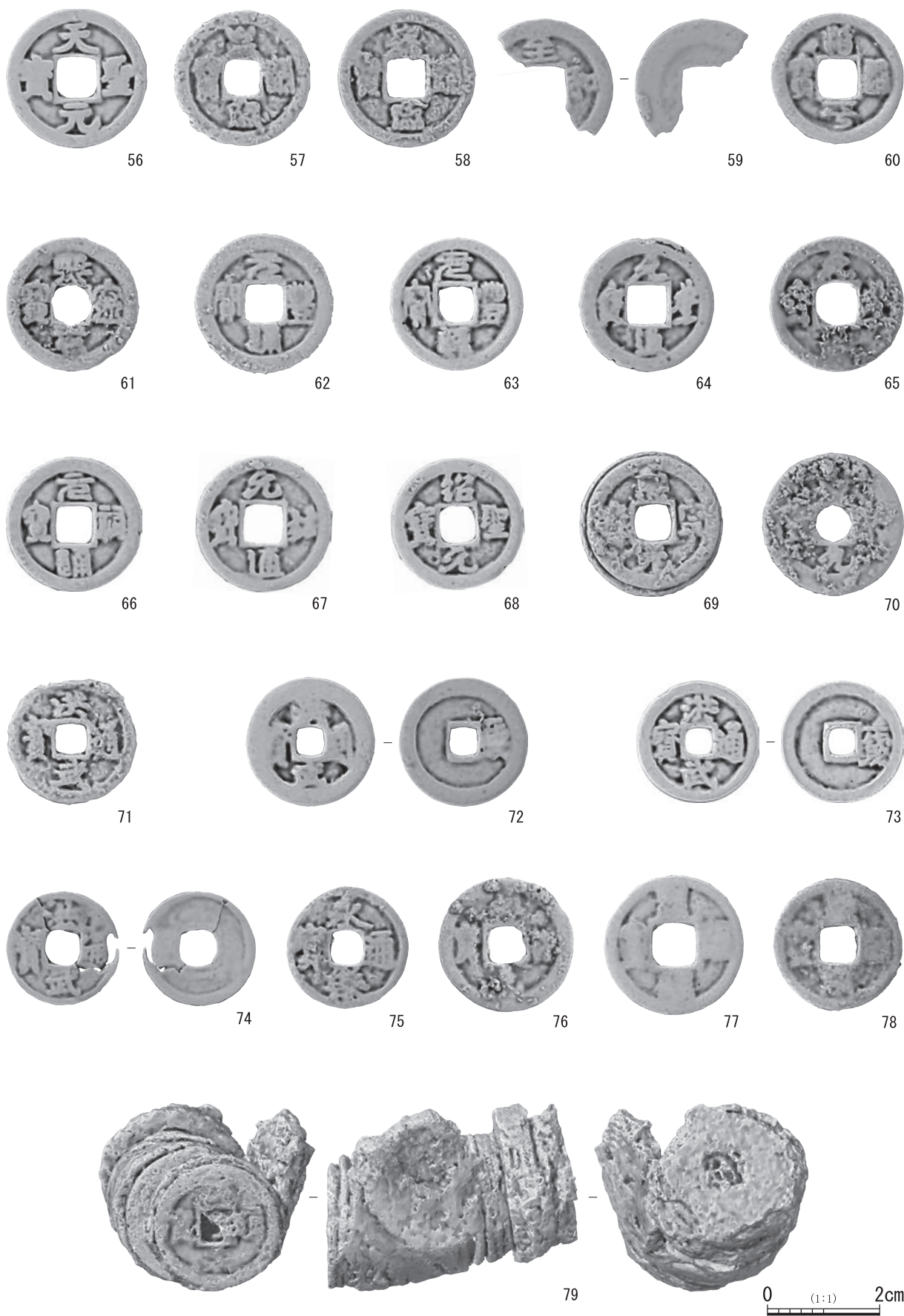
図V-43 非鉄製品 (4)



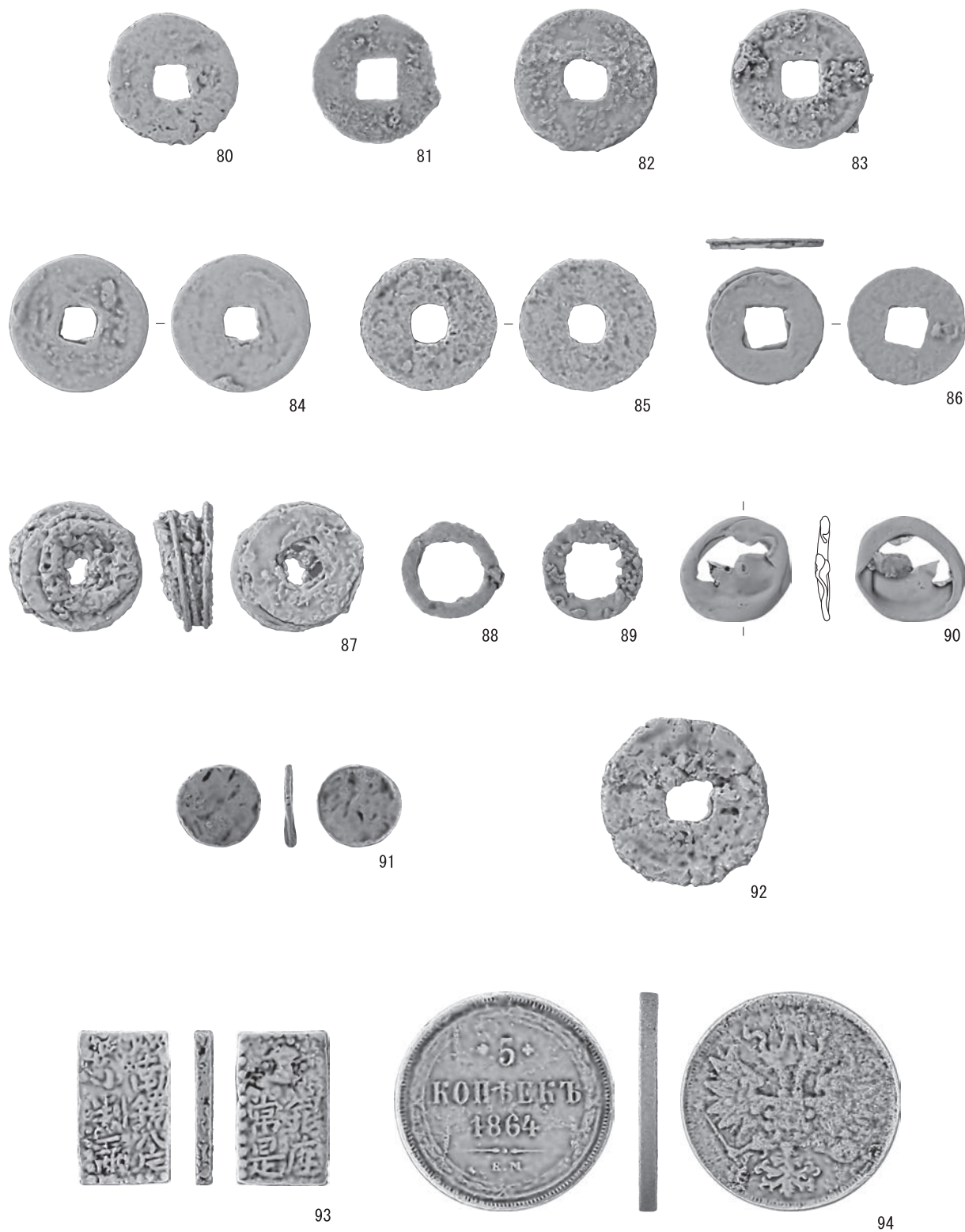
图V-44 貨幣 (1)



圖V-45 貨幣 (2)



图V-46 貨幣 (3)



0 (1:1) 2cm

図V-47 貨幣 (4)

表V-17 鉄製品等集計表

地区	地番	遺構等	層位	刀	小刀	小札	蓋	鉄鍋	壺	楔	毛拔	筭?	釣針	分銅	釘	鋌	鋸	鉤	金具	棒状製品	針?	針金	鍔	鉄腕	鉄滓	薄板状鉄片	鉄製品	不明	鉄	洋釘	合計
A	-		I・II												49	1												1	1	52	
	93-2		III上面~上部												2	1														3	
	94		III上面												4															4	
	94		III	1	1			1							6	1														10	
B	-		I・II		3			45							898	15			2		2	3	1	1		5	110	1	21	1,107	
	86		III												10	2					1								2	15	
	89	B掘込1	覆土												86	2													3	91	
	89		III												1															1	
	89		不明												1	1														2	
C	91		砂利												1															1	
	-		I・II												10													4		14	
	18-1		III		4										3		2													9	
	18-1		IV																						1					1	
	19		III					1							13			1							1					16	
D	19		V									1																		1	
	19		VI		1																									1	
	-		I・II												1													1		2	
	13		III		1			5			1				20													1		28	
	13	木製品集中	IV		6		2								11					3					7					29	
	13	D掘込5の上	V			1									7					1										9	
	13	D掘込1	覆土						1						14										1	5			21		
	13	D掘込2A	覆土												3															3	
	13	D掘込5	覆土												1															1	
	14-1		III	1				3							32	3				1								7		47	
	14-1		III中ローム (D炉1・1層相当)												4																4
	14-1		III中ローム下 (D炉1確認面相当)												3																3
	14-1		IV					1							4									33			6			44	
	14-1	木製品集中	IV		1										5															6	
	14-1		V												1					1					2		1			6	
	14-1	D炉1	覆土																						34					34	
	14-1	D炉2	灰層												1																1
	14-1	D土坑9	覆土												1																1
	14-1	D土坑12	覆土												1																1
	14-1	D掘込2B	覆土												6		1														7
14-1	D掘込3	覆土上面												15	1	1												1		18	
14-1	D掘込3	覆土												30														1		31	
14-1	D掘込4	覆土																										1		1	
14-1		不明																						1						1	
15-2		III												6																6	
15-2		IV上面												4														1		5	
15-2	D土坑4	覆土					1																							1	
15-2	D土坑5	覆土											1				1													2	
15-2	試掘坑3	-												4													3			7	
E	10-5		III												19															19	
	10-5		IV												4																4
	10-5		攪乱												3													1		4	
	11-6		III												7		1											1		9	
	11-6	E掘込1	覆土		1			2		1		1	1	132	4		1							1			11			155	
11-8	E掘込1	覆土												1																1	
②	唐津ヶ丘線		III											14																14	
④	14-1地先		IV											1																1	
	15-3西地先		III												3															3	
⑥	-		II												1															1	
	12		III												1															1	
	12	D火事場穴1	覆土					7							52															59	
合計				2	18	1	3	64	2	1	1	1	2	2	1,496	1	34	3	1	8	1	2	3	1	47	34	6	161	1	22	1,918

表V-19 貨幣集計表

地区	地番	遺構等	層位	古寛永通寶	新寛永通寶	新寛永(文銭)	新寛永(背十一波)	寛永通寶	開元通寶	乾元重寶	宋通元寶	天禧通寶	天聖元寶	皇宋通寶	至和元寶	治平通寶	元豐通寶	元祐通寶	紹聖元寶	聖宋元寶	洪武通寶	永樂通寶	中国銭	無文銭	輪銭	鉄銭	雁首銭	新南鐮二朱銀	ロシア銅貨	半銭銅貨	竜一銭銅貨	桐一銭青銅貨	不明	合計					
A	93-2		II		2																													2					
	93-2		III																															1	1				
	94		III																					1	2										3				
	94		III下部											1											11										12				
B	85-2		II	1																1														1	3				
	85-3		II					1		1	1	1	1											1			1							1	8				
	86		II	3	1	2			1																18										1	26			
	86		III																						5										5				
	87		II	1	1																			1											3	6			
	88		I	3	8	1		1									1										7				1				2	22			
	88		II	5	4																			1					1						2	20			
	89	B掘込1	覆土	1	5	1											1										3									1	11		
	89		II	6	13	1		2														1			1	2	44									1	71		
	89		不明											1																						1	1		
	90		I		1																															1	1		
	90		II	12	3			1				1					1	1			2				3	1									3	28			
	90		DVII相当																						1											1	1		
C	19		II	1	1	1		1																											2	6			
	19		III	1		1									1													1								4	4		
	19		IV														1																			1	3		
	19		VI																						1											1	1		
	13	木集中	IV										1												5											1	7		
	13	D掘込1	覆土	1	3	1																														2	7		
	13	D掘込2A	覆土					1																													1	1	
	13		II		2																																2	2	
	13		III	5	3	1														1					1	2											13	13	
	13	D掘込5の上	V														1																				1	1	
D	14-1	D掘込2B	覆土		1			1																1												2	5		
	14-1	D掘込3	覆土	1																					1												1	3	
	14-1	D掘込4	覆土		1																				1												2	4	
	14-1		II		1																																1	1	
	14-1		III	2	1													1																			1	9	
	14-1		IV																																		1	1	
	14-1		V																																		1	3	
	14-1		VI																																		1	2	
	15-2	試掘坑3	-		3																																1	4	
	15-2		II		1																																1	2	
	15-2		攪乱		1																																	1	1
E	10-5		IV																																		5	6	
	11-6	E掘込1	覆土	5	22	1		7														1			2	1	3									5	47		
	11-6		II		4																					1											5	5	
	11-6		III	1	3																																	4	4
	11-8	E掘込1	覆土		1																						1											2	2
①	92-1		表面採集			1																														1	1		
②	唐津ヶ丘線		III火災層	2																																	2	2	
	唐津ヶ丘線		攪乱	1			1																														2	2	
③	唐津ヶ丘線		攪乱																																		1	1	
	18-1		II																											1							1	1	
④	14-1地先	沢状地形	IV	1																																	1	1	
	15-3地先		II	1	2	1																															1	5	
	17-2地先		IV																																		5	5	
	18-3		II																																		1	1	
⑤	10-5		攪乱																																		1	1	
	12	火事場穴1	覆土		1														1						1	1										1	5		
⑥	12		II	1	5																																6	6	
	12		攪乱																																		1	1	
	無地番地		攪乱		1																																1	1	
合計				55	95	12	1	15	1	1	1	2	2	2	1	1	4	2	2	3	6	1	1	20	47	68	1	1	1	1	1	1	1	49	398				

表V-20 掲載鉄製品一覧表

挿図	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構等	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	金No.	備考
V-35	1	31	刀	D14-1	41	Ⅲ2	46.3	4.1	2.2	204.4	1317	断面E-F・Ⅲ2上面砂利層出土
"	2	"	刀	A94	8	Ⅲ	(9.3)	2.4	(0.9)	(34.0)	490	
"	3	"	小刀	D14-1/木製品集中	98	Ⅳ	17.3	1.4	0.3	18.2	493	
"	4	"	小刀	D13/木製品集中	40	Ⅳ	13.3	1.2	0.4	13.8	81	
"	5	"	小刀	D13/木製品集中	34	Ⅳ	15.7	1.6	0.9	20.0	79	
"	6	"	小刀	A94	9	Ⅲ	(20.4)	2.6	(0.8)	(67.2)	491	
"	7	"	小刀	B88	29	Ⅱ	(20.1)	2.4	0.6	(53.6)	492	
"	8	"	小札	D13/D掘込5の上	45	V	6.6	2.2	0.5	13.3	34	
"	9	"	蓋	D15-2/D土坑4	1	覆土	(5.8)	(4.2)	0.8	30.1	513	
"	10	"	蓋	D13/木製品集中	28	Ⅳ	(6.7)	(3.8)	0.7	30.3	61	
V-36	11	"	鉄鍋	⑥12/D火事場穴1	1	覆土	(12.6)	(13.3)	1.2	(150.7)	23-41	
"	12	"	鉄鍋	⑥12/D火事場穴1	15	覆土	(9.4)	(9.0)	(0.6)	(63.5)	23-55	
"	13	"	鉄鍋	⑥12/D火事場穴1	15	覆土	(4.4)	(8.2)	(7.1)	(47.5)	23-55	
"	14	"	鉄鍋	D14-1	11	Ⅲ1	(3.3)	(3.5)	(4.0)	(21.0)	516	
"	15	"	鉄鍋	D14-1	57	Ⅲ2	(5.3)	(2.6)	(2.6)	(45.0)	518	
"	16	"	鑿	D14-1/鍛冶遺物集中	25	Ⅳ	14.5	4.4	3.2	697.0	497	
"	17	"	毛抜	D14-1	39	V1	9.0	(1.9)	(1.3)	(8.8)	522	
"	18	"	釣針	C19	19	V	5.4	3.7	0.7	10.4	3	
"	19	"	釣針	E11-6/E掘込1	105	覆土	5.6	4.7	1.1	21.6	503	
"	20	"	不明	E11-6/E掘込1	68	覆土	4.3	3.0	2.8	9.0	506	
"	21	"	分銅	E11-6/E掘込1	103	覆土	5.9	3.7	3.3	200.3	507	
"	22	"	分銅	D15-2/D土坑5	1	覆土	4.9	4.2	4.3	228.4	525	
V-37	23	32	釘	D14-1	59	Ⅲ2	3.5	0.9	0.5	1.5	546	
"	24	"	釘	D14-1/D土坑9	1	覆土	3.8	0.9	0.4	1.3	568	
"	25	"	釘	D15-2/磁器片集中	143	Ⅳ上面	3.8	0.9	0.7	3.4	558	
"	26	"	釘	⑥12/D火事場穴1	3	覆土	4.1	0.8	0.5	1.7	23-65	
"	27	"	釘	D14-1	19	Ⅲ中ローム焼土	4.5	1.0	0.7	2.1	541	D炉1の1(ローム)相当層出土
"	28	"	釘	D13/D掘込5の上	44	V	4.5	1.2	0.5	2.8	35	
"	29	"	釘	D14-1/D土坑12	1	覆土	3.4	1.8	1.5	2.9	569	
"	30	"	釘	D14-1/D掘込3	40	覆土	4.6	0.9	0.3	1.5	565	
"	31	"	釘	D14-1	65	Ⅲ2	4.8	1.1	0.6	3.4	549	
"	32	"	釘	D14-1/鍛冶遺物集中	37	Ⅳ2'	4.6	1.0	0.8	3.5	544	
"	33	"	釘	D14-1/木製品集中	102	Ⅳ	4.9	0.8	0.7	2.6	526	
"	34	"	釘	D14-1/木製品集中	103	Ⅳ	5.2	0.6	0.5	1.7	527	
"	35	"	釘	E11-6/E掘込1	42	-	5.0	1.2	0.8	3.7	575	
"	36	"	釘	D13/木製品集中	36	Ⅳ	5.8	0.9	0.8	3.7	73	
"	37	"	釘	D13/D掘込5の上	47	V	5.7	1.3	0.8	5.6	31	
"	38	"	釘	D14-1/木製品集中	94	Ⅳ	6.1	0.9	0.5	2.4	554	
"	39	"	釘	D13/D掘込5の上	43	V	6.4	1.0	0.7	5.1	33	
"	40	"	釘	D14-1	90	V	6.4	0.9	0.6	8.4	553	
"	41	"	釘	D14-1/D掘込3	48	覆土	5.2	2.5	1.0	3.6	566	砂利層出土
"	42	"	釘	D13/D掘込5の上	50	V	7.5	1.0	1.4	9.4	68	
"	43	"	釘	D14-1/木製品集中	96	Ⅳ	7.3	1.1	0.6	4.8	556	
"	44	"	釘	⑥12/D火事場穴1	3	覆土	7.9	0.8	0.8	6.6	23-65	
"	45	"	釘	D14-1	20	Ⅲ中ローム焼土	8.6	1.5	1.0	8.9	542	D炉1の1(ローム)相当層出土
"	46	"	釘	⑥12/D火事場穴1	3	覆土	9.2	1.9	2.5	21.6	23-65	
"	47	"	釘	E11-6/E掘込1	7	覆土	9.7	1.4	0.9	14.8	580	
"	48	"	釘	B86	2	Ⅲ	9.9	1.5	0.9	11.7	530	
"	49	"	釘	B89/B掘込1	129	覆土	11.0	1.1	1.3	13.2	535	
V-38	50	"	釘	A94	1	Ⅲ	12.2	1.7	1.6	14.0	528	
"	51	"	釘	D14-1	62	Ⅲ2	11.3	3.4	1.4	15.7	547	
"	52	"	釘	E11-6	3	Ⅲ	5.1	0.8	0.9	1.7	572	
"	53	"	釘	D14-1/D炉2	1	灰層	4.1	0.7	1.1	2.8	1342	
"	54	"	棒状製品	D14-1	89	V	8.0	1.9	0.9	21.2	552	
"	55	"	棒状製品	D13/木製品集中	24	Ⅳ	13.9	0.9	0.6	10.6	77	
"	56	"	棒状製品	D13/D掘込5の上	42	V	10.7	0.7	0.8	9.6	82	
"	57	"	棒状製品	D13/木製品集中	39	Ⅳ	10.1	1.1	0.9	18.6	80	
"	58	"	棒状製品	D13/木製品集中	26	Ⅳ	12.5	2.1	0.9	22.6	78	
"	59	"	棒状製品	D14-1	21	Ⅲ2	14.2	1.2	0.9	41.2	494	
"	60	"	釘	D13/木製品集中	25	Ⅳ	4.3	1.1	0.9	5.4	59	
"	61	"	釘	E11-6/E掘込1	41	覆土	7.1	1.9	1.4	12.1	574	
"	62	"	釘	⑥12/D火事場穴1	3	覆土	6.4	2.4	2.6	30.1	23-65	
"	63	"	釘	D13	11	Ⅲ1	10.5	2.6	2.0	28.9	48	
"	64	"	釘	D15-2	3	Ⅲ	11.5	2.1	1.9	25.4	557	
V-39	65	"	釘	B89	228	Ⅱ	13.1	2.0	1.6	48.5	537	
"	66	"	釘	D14-1/D掘込3	34	覆土	16.4	1.6	1.5	26.1	562	砂利層出土
"	67	33	錠	D14-1	40	Ⅲ2	(6.7)	(1.5)	(1.6)	(16.5)	515	
"	68	"	錠	D15-2/D土坑5	2	覆土	(8.8)	(1.5)	(2.6)	(33.9)	520	
"	69	"	錠	D14-1	45	Ⅲ1	7.9	2.1	1.0	11.2	512	
"	70	"	錠	E11-6	1	Ⅲ	7.7	2.9	0.8	13.3	523	
"	71	"	錠	D14-1	68	Ⅲ2a	11.7	3.6	0.9	34.5	524	
"	72	"	錠	B89	136	-	13.2	4.2	1.2	48.5	499	
"	73	"	錠	B89/B掘込1	120	覆土	19.8	6.8	1.6	158.4	498	
"	74	"	不明	E11-6/E掘込1	123	覆土	5.8	3.2	1.0	29.6	501	
"	75	"	不明	D14-1	80	Ⅳ	6.2	1.7	0.4	6.6	1331	
"	76	"	不明	E11-6/E掘込1	124	覆土	3.9	0.9	0.9	3.9	502	
"	77	"	不明	E11-6/E掘込1	125	覆土	2.7	0.9	0.9	2.1	500	

* 金No.は金属製品の保存処理番号を表す。

表V-21 掲載非鉄製品一覧表

挿図	掲載 番号	図版	遺物名	地区地番/遺構	遺物 番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	金No.	備考
V-40	1	34	鐘	B89/B掘込1	83	覆土	2.9	2.4	0.8	9.2	278	
"	2	"	切羽	⑥12/D火事場穴1	3	覆土	3.2	1.9	0.2	2.5	23-58	
"	3	"	鏝	B87	3	II	4.6	3.9	0.6	14.8	272	
"	4	"	鏝	B90	1	II	4.8	3.7	0.4	31.7	282	
"	5	"	目貫	B92-1	1	II	3.6	1.9	4.0	1.7	291	
"	6	"	小柄	D14-1	100	IV	9.5	1.3	0.6	13.2	297	
"	7	"	小柄	E11-6/E掘込1	19	覆土	9.7	1.4	0.8	31.9	294	
"	8	"	筭	B86	1	III	14.5	1.4	0.5	24.2	595	
"	9	"	耳かき	B89/B掘込1	4	覆土	5.6	0.4	0.2	1.3	276	
"	10	"	鞋	C18-1	10	III	4.0	0.8	0.4	6.0	22	
"	11	"	鏡	D13	1	III1	4.1	2.6	0.5	10.5	46	
"	12	"	簪	D14-1/D掘込2B	16	覆土	23.7	1.4	1.7	19.3	270	
"	13	"	鈴	B89/B掘込1	1	覆土	1.8	1.4	0.9	2.4	273	
"	14	"	分銅	B89/B掘込1	3	覆土	3.4	1.5	1.5	51.9	275	
"	15	"	銅容器	B89/B掘込1	5	覆土	3.6	2.6	1.9	4.8	277	
V-41	16	"	銅鑲	A93-2	1	III上面~上部	3.2	3.0	0.5	5.1	271	
"	17	"	乳金物	D14-1	42	III2	2.8	2.7	1.3	5.6	283	
"	18	"	乳金物	D15-2/D土坑5	3	覆土	2.6	2.1	1.3	5.6	286	
"	19	"	飾金具	B89/B掘込1	2	覆土	1.7	1.4	0.7	0.3	274	
"	20	"	飾金具	D14-1/木製品集中	97	IV	4.9	1.5	0.4	3.8	285	
"	21	"	銅鍋	⑥12/D火事場穴1	9	覆土	20.4	5.6	1.6	107.0	23-49	
"	22	"	銅製品	⑥12/D火事場穴1	3	覆土	7.6	3.7	1.3	46.7	23-43	
"	23	"	銅製品	B89/試掘坑1	171	-	5.6	1.5	0.5	13.2	281	
"	24	"	銅製品	D14-1/木製品集中	93	IV	6.6	1.6	0.5	5.1	284	
"	25	"	銅製品	D13	54	III2	5.7	2.1	1.2	7.0	75	
"	26	"	銅製品	E11-6/E掘込1	122	覆土	4.7	0.3	0.9	5.8	290	
"	27	"	銅釘	D13	4	III上ローム	1.4	0.2	0.2	0.1	39	
"	28	"	銅釘	E11-6/E掘込1	20	覆土	2.2	0.5	0.6	0.7	288	
"	29	"	銅釘	D13	5	III1	2.3	0.4	0.4	0.3	40	
"	30	"	銅釘	D14-1/掘込3	53	覆土	3.5	0.3	0.5	0.8	287	
"	31	"	銅釘	D13	3	III1	4.9	1.2	1.1	4.5	38	
V-42	32	35	雁首	D15-2/磁器片集中	1	IV上面	8.2	1.7	2.9	10.9	90	
"	33	"	雁首	D13	2	III	8.4	1.7	3.3	11.6	87	
"	34	"	雁首	E11-6/E掘込1	6	覆土	6.4	1.1	1.7	8.1	125	
"	35	"	雁首	E11-6/E掘込1	2	覆土	5.4	0.8	2.5	6.8	121	
"	36	"	雁首	D13	3	III2	2.7	1.5	2.4	2.1	88	
"	37	"	雁首	B90	1	II	7.3	1.5	2.8	7.9	91	
"	38	"	雁首	B88	3	I	6.3	1.5	2.5	8.5	96	
"	39	"	雁首	B86	2	II	6.6	1.6	2.1	9.1	105	
"	40	"	雁首	B90	2	II	5.8	1.5	2.4	8.1	92	
"	41	"	雁首	B89	2	II	5.5	1.5	2.1	7.4	99	
"	42	"	雁首	D14-1	1	III	5.4	1.3	2.2	4.8	89	
V-43	43	"	雁首	D13/D掘込1	1	覆土	5.5	1.2	1.4	10.1	112	
"	44	"	雁首	D13/D掘込1	2	覆土	5.7	1.1	1.7	8.5	86	
"	45	"	雁首	B87	1	II	5.3	1.4	1.9	13.7	107	
"	46	"	雁首	⑥12/D火事場穴1	6	覆土	5.9	1.3	2.0	13.0	23-61	
"	47	"	吸口	B89/B掘込1	6	覆土	5.5	1.1	1.1	7.8	103	
"	48	"	吸口	B88	2	I	4.4	0.9	0.9	3.1	95	
"	49	"	吸口	E11-6/E掘込1	3	覆土	5.0	0.9	0.9	4.0	122	
"	50	"	吸口	B89	1	II	5.9	0.9	0.9	5.8	98	
"	51	"	吸口	D14-1	2	III2	9.6	1.1	1.1	6.1	116	
"	52	"	吸口	B89	3	II	5.9	1.0	1.0	3.5	100	
"	53	"	吸口	E11-6/E掘込1	4	覆土	8.4	1.0	1.0	7.5	123	
"	54	"	吸口	B88	4	I	5.9	0.9	0.9	5.6	97	
"	55	"	吸口	E11-6	2	III	3.8	1.0	1.0	8.2	118	
"	56	"	吸口	B89	5	II	8.0	1.3	1.3	12.3	102	

*金Noは金属製品の保存処理番号を表す。

表V-22 掲載貨幣一覧表

挿図	掲載番号	図版	銭種	地区地番/遺構	遺物番号	層位	外縁径		内郭径		厚さ		質量	金No.	備考
							外径平均	内径平均	外径平均	内径平均	外縁厚平均	文字面厚平均			
V-44	1	35	古寛永通寶	B86	2	II	23.63	18.84	7.45	5.75	1.00	0.64	2.76	148	
"	2	"	古寛永通寶	B88	17	II	24.17	18.77	7.81	5.50	1.36	0.89	3.45	182	
"	3	"	古寛永通寶	D13/D掘込1	6	覆土	24.15	19.32	7.07	5.51	1.19	0.66	3.16	320	
"	4	"	古寛永通寶	②唐津ヶ丘線	2	III(火災層)	24.32	20.13	6.98	5.27	1.38	0.67	3.74	23-7	
"	5	"	古寛永通寶	D13	5	III1	24.27	20.32	6.95	5.31	1.32	0.78	3.41	257	
"	6	"	古寛永通寶	B88	1	I	24.52	20.02	6.87	5.61	1.24	0.55	3.46	168	
"	7	"	古寛永通寶	B88	18	II	24.57	19.74	7.08	5.55	1.46	0.92	3.94	183	
"	8	"	古寛永通寶	B85-2	2	II	24.65	18.97	6.92	5.50	1.17	0.61	2.00	141	
"	9	"	古寛永通寶	②唐津ヶ丘線	1	III(火災層)	24.67	19.75	7.01	5.59	1.37	0.64	3.54	23-6	
"	10	"	古寛永通寶	B89	10	II	24.31	19.84	8.12	5.91	1.27	0.84	3.45	200	
"	11	"	古寛永通寶	B89	9	II	24.83	19.81	7.99	6.11	1.19	0.65	3.18	199	
"	12	"	古寛永通寶	B89/B掘込1	27	覆土	23.62	19.08	7.40	5.69	1.14	0.68	2.73	216	
"	13	"	古寛永通寶	B90	17	II	24.88	20.02	7.38	5.47	1.46	0.85	3.58	237	
"	14	"	古寛永通寶	B87	2	II	25.06	19.81	7.57	5.30	1.37	0.84	4.04	163	
"	15	"	古寛永通寶	B88	23	II	25.09	19.84	7.82	5.58	1.43	0.72	3.86	188	
"	16	36	古寛永通寶	B89	18	II	25.04	19.28	7.85	5.85	1.09	0.63	2.99	208	
"	17	"	古寛永通寶	B86	1	II	25.08	19.72	7.99	6.07	1.22	0.63	3.22	147	
"	18	"	古寛永通寶	B89	4	II	25.12	19.77	8.03	6.37	1.22	0.71	3.24	196	
"	19	"	古寛永通寶	④14-1地先/木集中	1	IV	25.20	20.11	7.87	6.22	1.18	0.66	3.25	23-19	
"	20	"	古寛永通寶	B89	17	II	25.31	19.96	7.97	5.73	1.29	0.65	3.01	207	
"	21	"	新寛永通寶	B86	5	II	25.28	19.66	7.40	5.67	1.38	0.77	4.10	151	文銭
"	22	"	新寛永通寶	B89	11	II	25.22	19.90	7.56	6.04	1.19	0.56	2.84	201	文銭
"	23	"	新寛永通寶	B89/B掘込1	28	覆土	25.23	19.95	7.73	5.87	1.38	0.70	3.83	217	文銭
"	24	"	新寛永通寶	C19	1	II	25.23	20.51	7.43	5.77	1.23	0.57	3.11	245	文銭
"	25	"	新寛永通寶	C19	4	III	25.08	20.25	7.40	5.74	1.47	0.77	4.22	248	文銭
"	26	"	新寛永通寶	D13/D掘込1	4	覆土	24.95	20.06	7.57	6.09	1.18	0.54	2.91	318	文銭
V-45	27	"	新寛永通寶	①92-1	1	表採	25.25	20.02	7.19	5.92	1.24	0.49	3.42	23-11	文銭
"	28	"	新寛永通寶	②唐津ヶ丘線	3	攪乱	28.14	20.84	8.28	6.87	1.22	0.75	4.17	23-8	背11波
"	29	"	新寛永通寶	A93-2	3	II	22.60	18.37	8.33	6.53	1.05	0.61	2.45	133	
"	30	"	新寛永通寶	B88	3	I	22.89	18.43	7.62	6.05	1.14	0.64	2.65	170	
"	31	"	新寛永通寶	B88	8	I	23.07	18.41	8.30	6.70	0.97	0.58	2.16	172	
"	32	"	新寛永通寶	B88	7	I	23.17	18.49	7.68	6.27	1.07	0.64	2.11	173	孔有り
"	33	"	新寛永通寶	D14-1	12	III2	23.18	18.35	7.72	6.14	0.85	0.56	1.79	309	
"	34	"	新寛永通寶	B89	20	II	23.24	18.41	7.92	6.52	1.14	0.68	2.68	210	
"	35	"	新寛永通寶	B90	5	II	22.81	17.87	7.47	5.88	1.12	0.62	2.50	227	
"	36	"	新寛永通寶	D13/D掘込1	1	覆土	23.60	17.45	7.65	6.04	0.96	0.60	2.28	315	
"	37	"	新寛永通寶	B88	9	I	23.13	18.13	9.43	7.01	1.00	0.54	1.97	174	
"	38	"	新寛永通寶	B88	2	I	23.36	19.09	7.82	6.15	1.20	0.65	2.89	169	
"	39	37	新寛永通寶	D14-1	1	II	23.53	18.33	7.92	6.33	1.14	0.58	2.39	301	孔有り
"	40	"	新寛永通寶	④15-3地先	5	II	23.35	18.97	7.66	6.23	1.04	0.67	2.64	23-22	
"	41	"	新寛永通寶	B90	24	I	23.42	18.74	7.53	6.34	1.15	0.61	2.49	243	
"	42	"	新寛永通寶	B89	22	II	23.70	18.96	7.67	6.06	1.04	0.69	2.69	212	
"	43	"	新寛永通寶	E11-6	2	III	23.75	18.56	7.92	6.03	1.12	0.63	2.53	337	
"	44	"	新寛永通寶	B89	40	II	23.80	19.43	7.42	6.04	1.25	0.69	2.66	221	
"	45	"	新寛永通寶	D13/D掘込2A	1	覆土	24.00	19.48	8.42	6.96	1.17	0.72	2.62	322	
"	46	"	新寛永通寶	B89/B掘込1	26	覆土	23.97	19.49	7.71	6.32	1.04	0.66	2.63	215	
"	47	"	新寛永通寶	B90	3	II	24.02	18.36	7.54	5.85	1.19	0.58	2.89	226	
"	48	"	新寛永通寶	B89	12	II	24.27	19.04	7.55	5.82	1.36	0.70	3.03	202	
"	49	"	新寛永通寶	B88	16	I	24.61	19.19	8.08	6.67	0.92	0.55	2.26	181	孔有り
"	50	"	開元通寶	B86	12	II	24.59	21.15	8.57	6.78	1.14	0.76	2.13	397	
"	51	"	胤元重寶	B85-3	1	II	24.59	20.78	8.45	6.50	1.39	0.68	2.85	394	欠損
"	52	"	宋通元寶	B85-3	2	II	(25.06)	19.85	(7.94)	(6.24)	(1.08)	0.60	1.84	395	欠損
"	53	"	天禧通寶	B85-3	3	II	25.05	20.25	8.36	6.35	1.15	0.64	2.31	143	
"	54	"	天禧通寶	B90	13	II	25.13	19.96	8.66	6.34	1.23	0.81	2.82	401	
"	55	"	天聖元寶	B85-3	5	II	-	-	-	-	1.26	(0.72)	1.64	396	6片接合
V-46	56	"	天聖元寶	D13/木集中	16	IV	25.07	20.24	8.87	7.07	1.40	0.82	3.96	408	
"	57	"	皇宋通寶	A94	3	III下部	24.35	19.39	8.56	6.35	1.20	0.72	2.52	393	
"	58	"	皇宋通寶	B89	31	-	24.62	19.82	8.93	6.84	1.30	0.77	2.85	399	
"	59	"	至和元寶	C19	6	III	-	-	-	-	(0.94)	(0.53)	1.02	404	欠損
"	60	"	治平通寶	D13	23	V	23.67	19.02	8.30	6.82	1.06	0.63	2.37	409	
"	61	"	熙寧元寶	D14-1	6	IV1	23.89	18.16	8.73	6.96	1.27	0.78	2.87	305	
"	62	"	元豐通寶	B89/B掘込1	25	覆土	25.05	19.09	8.87	6.70	1.07	0.67	3.10	398	
"	63	"	元豐通寶	C19	7	IV	23.80	19.25	8.36	6.18	1.31	0.83	3.14	405	
"	64	"	元豐通寶	B90	20	II	24.02	18.41	8.60	6.87	1.26	0.88	2.40	403	
"	65	"	中国銭	B88	4	I	24.05	18.86	8.92	7.19	1.08	0.90	2.79	171	
"	66	"	元祐通寶	B90	14	II	24.11	18.58	8.48	6.52	1.45	0.84	3.39	402	
"	67	"	元祐通寶	D14-1	3	III1	24.37	19.55	8.65	6.97	1.18	0.73	2.77	412	
"	68	"	紹聖元寶	D13	14	III1	23.72	18.41	8.06	6.51	1.34	0.71	3.13	407	
"	69	"	聖宋元寶	B90	4	II	23.98	18.31	8.62	6.38	1.39	-	6.69	400	2枚溶着
"	70	"	聖宋元寶	B85-2	1	II	25.40	17.24	8.51	6.09	1.50	1.35	3.39	140	
"	71	38	洪武通寶	D14-1	7	V2	(23.07)	(18.57)	7.52	5.13	(1.53)	0.63	2.74	410	変形
"	72	"	洪武通寶	C19	8	IV	23.06	16.13	7.30	4.91	1.65	0.71	3.94	406	
"	73	"	洪武通寶	D14-1	9	VI	21.78	16.89	6.61	4.74	1.42	0.69	3.03	411	
"	74	"	洪武通寶	E10-5	1	IV	(20.47)	(18.41)	8.52	6.40	(0.94)	0.57	1.81	413	欠損
"	75	"	永樂通寶	B89	15	II	21.80	18.60	6.99	5.74	0.70	0.43	1.31	205	
"	76	"	不明	A93-2	1	III	24.01	18.74	8.01	6.31	1.16	0.85	2.13	131	
"	77	"	不明	B87	5	II	24.95	20.71	9.72	7.61	0.97	0.84	2.85	166	
"	78	"	不明	B87	4	II	23.34	18.93	8.15	6.27	1.01	0.63	2.31	165	
"	79	"	不明	B88	6	I	-	-	-	-	-	-	66.62	416	複数枚溶着
V-47	80	"	無文銭	C19	12	VI	22.23	-	-	5.79	1.15	-	1.73	252	
"	81	"	無文銭	D13	15	IV	(21.61)	-	-	6.44	0.67	-	1.04	266	欠損
"	82	"	無文銭	D13	18	IV	23.87	-	-	6.96	1.21	-	2.44	268	
"	83	"	無文銭	D13	19	IV	23.38	-	-	6.06	1.19	-	3.08	269	
"	84	"	無文銭	D13	20	IV	23.13	-	-	5.70	1.38	-	3.28	298	
"	85	"	無文銭	D13	22	III2	22.55	-	-	6.25	0.78	-	1.76	300	
"	86	"	無文銭	D14-1	5	III	-	-	-	-	-	-	1.69	304	2枚溶着
"	87	"	輪銭	B86	16	III	-	-	-	-	-	-	5.71	161	複数枚溶着
"	88	"	輪銭	D13	13	III2上面	16.83	-	-	10.32	0.75	-	0.51	265	
"	89	"	輪銭	D14-1	2	III2	16.93	-	-	9.40	0.68	-	0.58	302	
"	90	"	雁首銭	B85-3	6	II	17.58	-	-	18.50	2.42	-	1.60	145	
"	91	"	鉛製田盤	⑥12/火事場穴1	6	覆土	13.93	-	-	14.22	1.23	-	1.78	23-46	
"	92	"	鉄銭	⑥12/火事場穴1	7	覆土	28.17	-	-	6.47	2.04	-	3.02	23-47	
"	93	"	新南鐙二朱銀	C19	18	III	-	-	-	-	2.88	-	10.32	2	
"	94	"	ロシア銅貨	B88	30	II	36.84	-	-	-	-	-	24.50	453	

* 金No.は金属製品の保存処理番号を表す。

4 金属生産関連遺物

D炉1から羽口片3点と薄板状鉄片34点、D炉2から埴塙3点、D14-1 IV層の鍛冶関連遺物集中から羽口片7点、鉄滓38点が出土した。このほか、D13のIV層で鉄滓7点、④14-1地先のIV層で羽口片1点が得られている。なお、掲載番号横の(FJ)は付編I-7、(M)は付編I-8の分析試料番号を表す。

羽口

1～3は、D14-1のIV層で近接して出土した(図IV-18)。1は先端側とみられる部分の器面が剥がれ、砂混じりの胎土が露出している。外面には褐灰色とにぶい赤褐色を呈する部分が帯状に見られる。2は表面が褐灰色を呈し、ナデ調整の痕が目立つ。砂混じりの胎土には5mm以上の礫が目立ち、大きいもので15mmを測る。接合した破片には同心円状に割れているものがあり、芯棒に粘土を巻き付けて製作したことをうかがわせる。先端側はどちらか判然としなかった。3は先端側とみられる部分の器面が剥がれ、砂混じりの胎土が露出している。外面の大部分は褐灰色を呈する。

4(FJ-6)は熔着滓(網伏せ部分)が付着した先端付近の破片である。本来の器面は裏面に図示した送風孔の一部だけで、ほかは剥離している。熔着滓は黒色で光沢があり、磁性は図の上端で強いが、多孔質の破面ではほとんどない。分析の結果、鍛冶羽口と推定されている。5は元側の破片で、端部周辺がやや外側に広がる。砂混じりの胎土にはスサが多量に認められる。6はD炉1の覆土から出土した3点が接合する。形状は先細りで、先端側とみられる部分の器面が剥がれ、砂混じりの胎土が露出している。外面には褐灰色とにぶい橙色を呈する部分が帯状に見られる。

埴塙

7(M5)は完形の皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面は丸底である。胎土には砂が混じる。内面は縁を中心に灰オリーブ色の付着物が目立つ。付着物には5mm程度の半球状の盛り上がりもわずかに見られる。縁から中央にかけて、微細な穴があいた暗赤褐色の付着物がある部分や、明赤灰に変色した部分がある。外面は灰色を呈する。8(M4)は3点が接合した。全体の半分弱が残存する皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面は丸底である。胎土には砂が混じる。内面全体に微細な穴が多数あいた灰色や暗赤灰色の熔着物が見られる。一方の縁には、光沢のある暗灰色の熔着物や赤色と黒色が墨流し状に入り交った光沢のある熔着物も付着する。暗灰色の熔着物には6mm程度以下の穴が目立つ。外面は橙色を呈する。

9～11はD炉2の灰層から出土した。9(M1)はほぼ完形の皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面は丸底である。胎土には砂が混じる。内面の大半は暗灰色の付着物で覆われ、部分的に微細な穴が見られる。一部に2mm程度以下の半球状の粒等がややまとまって付着する。外面は灰黄色、黄灰色、灰色の部分がある。10(M2)は半分を欠損する。皿形で、口唇断面は丸みを帯び、底面はやや尖った丸底である。胎土には砂が混じる。内面の大半は暗灰色の付着物で覆われており、肉眼観察で金微粒子が多数付着することを確認した。内面の縁は一部にガラス光沢があり、わずかに赤褐色の部分も見られる。外面の縁は灰色で、中央部周辺は暗赤褐色の部分が多い。11(M3)は皿形の破片である。口唇断面はやや角張り、底面は平底ぎみである。胎土には砂が混じる。内面の大半は暗灰色の付着物で覆われ、微細な穴が多数見られる。また、赤色に黒色が斑に交った光沢物や、銅とみられる緑みを帯びた微細な半球状の付着物もある。外面は灰白色と褐灰色の部分がある。

鉄滓等

12(FJ-2)は完形の椀形滓である。平面は円形ぎみで一部が突出する。網伏せ部分にはガラス質滓が熔着し、一部が剥落している。上面中央のくぼみは、ガラス質滓が取れた部分のように見られ、

その部分だけ暗赤褐色を呈する。上面は付着物のためかあまり孔が見られず、下面は多孔質である。木炭が上下両面に多数付着しており、上面には銹化した繊維状の細長い物質（長さ30~40mm、幅5mm程度）も見られる。ガラス質滓部分をのぞき磁性があり、底面中央付近の赤黒色部分でやや強い。

13~22はD14-1のIV層で近接して出土した（図IV-18）。13（FJ-5）は破損した板状の鉄滓である。図の両側面上方と下端が破面で、本来の平面形は突出部のある略円形であったと推測される。本体部の上面は比較的滑らかであるが、下面は多孔質である。突出部の上面から下面の一部にかけて、にぶい褐色の小瘤が見られる。突出部上面の根元には斜めの穴があく。本体上面に磁性はあるが、その裏面にはない。突出部上面の錆瘤部分は磁性が強い。14（FJ-3）はほぼ完形の椀形滓である。平面は楕円形に近い。上面は平坦、下面は尖底である。磁性がある。15（FJ-4）は完形の椀形滓である。平面は楕円形に近く、上面の一端に鉄片が斜めに熔着する。上面は平坦、下面は尖底みみである。木炭は熔着鉄片との境界付近に集中して付着する。上面に直径5mm程度の丸棒状物質が2点付着しており、一方は磁性があり、もう一方は磁性がない。磁性は全体的に強い。16は椀形滓で、図の上端部分を欠損する。上面はややくぼんでおり、下面は丸底の皿状である。木炭は上下両面に付着する。磁性はやや強い。17は椀形滓で、約半分を欠損する。上面はややくぼんでおり、下面は丸底である。木炭は見られない。全体的に磁性があり、上面左側でやや強い。

18は下面に凸凹があるが、板状に近い。磁性が両面とも強く、鉄塊系遺物の可能性がある。19の破面は図の左右と下端にある。全体的に磁性があるが、下端で強い。鉄滓と鉄が熔着しているようである。20は磁性の強い熔着滓が突起状に残る。熔着滓以外は全て破面で、滓内に2cm大の礫を含む。21は不定形である。磁性はやや強いが、図の上面左側は弱い。鉄滓と鉄が熔着しているようである。22は不定形で、下端に破面がある。側面上部には空隙が形成されている。木炭が付着しており、磁性は弱い。

D炉1の薄板状鉄片（ねずみ鑄鉄破片）は、写真のみ掲載した（図版40）。色調は赤褐~暗赤褐で、厚さは約3mmを測る。層状の構造が見られ、1枚1mm弱の薄層が数枚重なっている。磁性は強い。

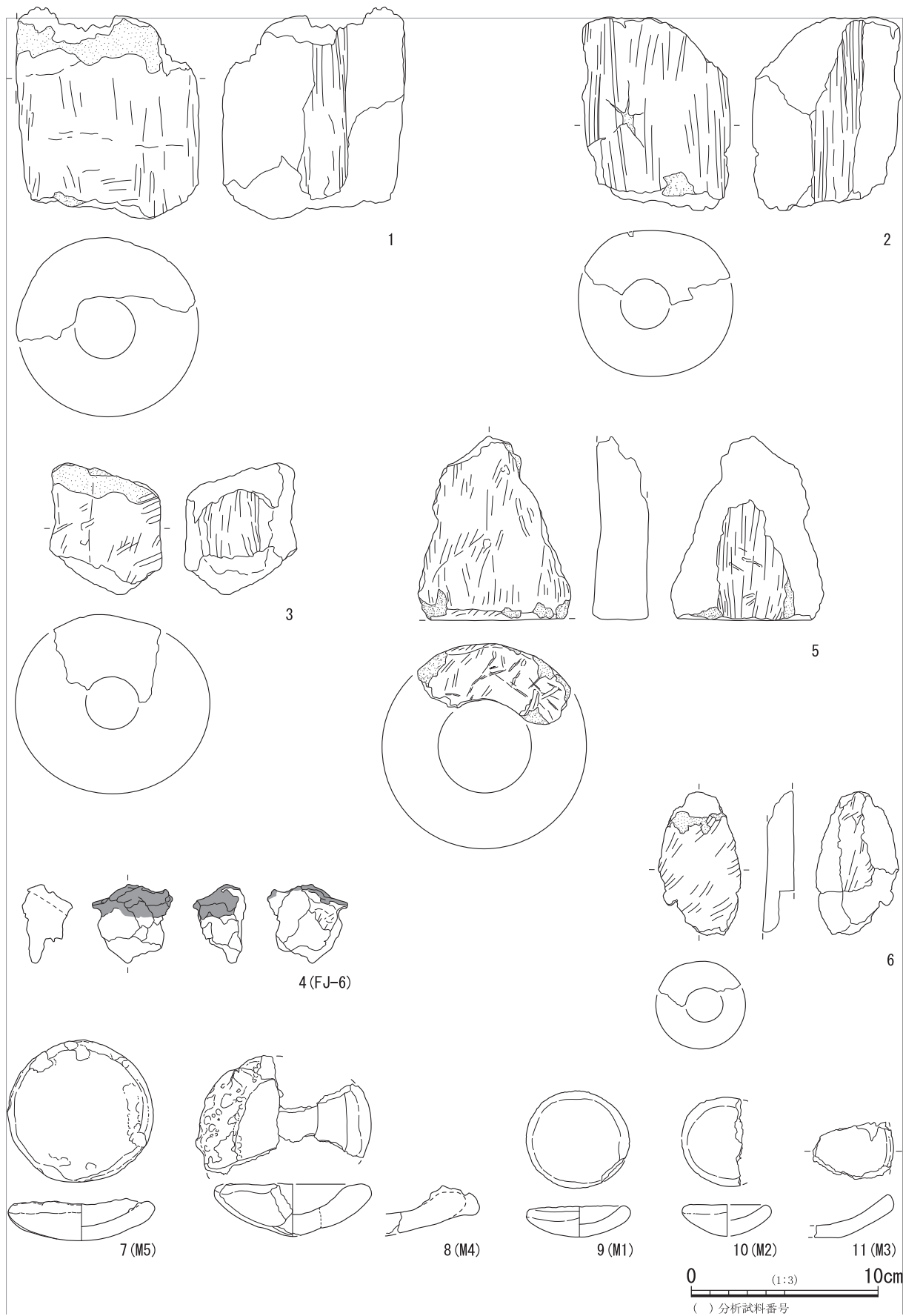
分析の結果、薄板状鉄片（FJ-1）はねずみ鑄鉄破片、12・14・15（FJ-2~4）の鉄滓は鍛錬鍛冶滓、13（FJ-5）の鉄滓は精錬鍛冶滓と推定された（付編I-7）。

このほか、付編I-8で銅塊（図版40下段のM7~9）の分析結果を報告する。（山中）

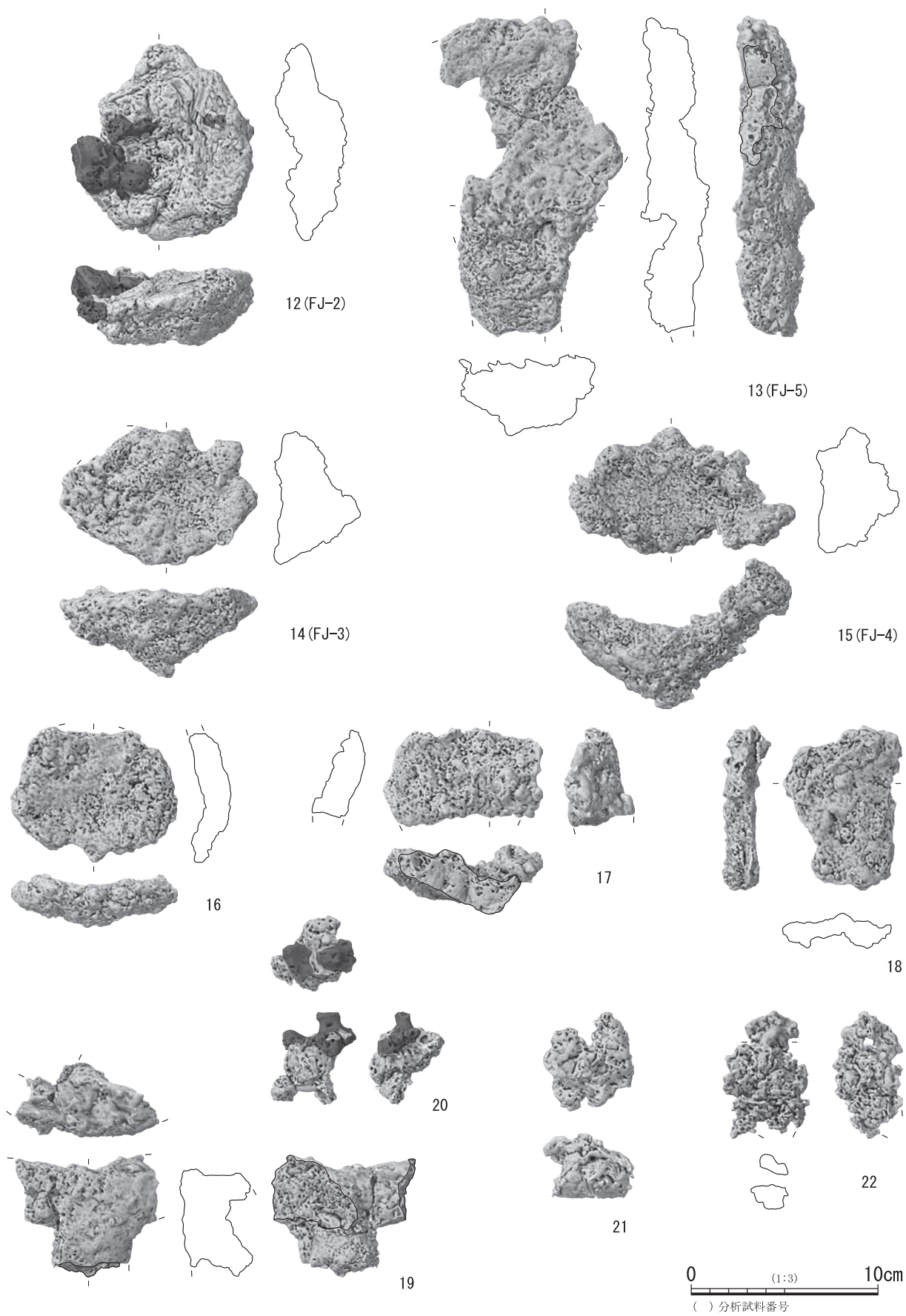
表V-23 掲載金属生産関連遺物一覧表

挿図	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅・口径(cm)	厚さ・高さ(cm)	重量(g)	金No.	備考
V-48	1	39	羽口	D14-1/鍛冶遺物集中	(1)	IV2	(11.3)	(9.8)	(5.6)	453.9	-	
"	2	"	羽口	D14-1/鍛冶遺物集中	(17)	IV	(10.3)	(7.9)	(5.1)	283.5	-	
"	3	"	羽口	D14-1/鍛冶遺物集中	(18)	IV	(7.0)	(6.0)	(4.7)	155.3	-	
"	4	"	羽口	D14-1	653	IV	(4.2)	(4.3)	(2.8)	27.7	-	熔着滓付着、分析試料FJ-6
"	5	"	羽口	D15-2	220	IV	(9.8)	(8.2)	(3.8)	191.6	-	スサ混入
"	6	"	羽口	D14-1/D炉1	1	覆土	(7.7)	(4.4)	(2.3)	43.8	-	
"	7	"	埴埴	B90	149	II	-	7.7	2.3	65.1	-	分析試料M5
"	8	"	埴埴	D14-1	647	IV	-	(8.4)	(2.8)	39.9	-	分析試料M4
"	9	"	埴埴	D14-1/D炉2	(1)	灰	-	5.5	1.7	28.7	-	分析試料M1
"	10	"	埴埴	D14-1/D炉2	(2)	灰	-	(4.8)	1.7	15.7	-	分析試料M2
"	11	"	埴埴	D14-1/D炉2	(3)	灰	-	-	(2.3)	12.5	-	分析試料M3
V-49	12	40	鉄滓	D13	41	IV	10.5	9.8	3.8	343.7	84	分析試料FJ-2
"	13	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	81・87	IV	17.1	9.7	3.8	633.7	1337	分析試料FJ-5
"	14	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	28(5)	IV	7.5	10.6	4.7	321.6	1320	分析試料FJ-3
"	15	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	34(13)	IV2'	6.7	12.0	4.4	368.2	1326	分析試料FJ-4
"	16	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	35(14)	IV2'	7.2	8.9	2.3	185.7	1327	
"	17	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	36(15)	IV2'	5.3	8.5	2.4	142.7	1328	
"	18	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	78	IV	8.8	6.4	2.0	112.6	1329	
"	19	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	30(7)・32(9)	IV	6.5	7.6	3.8	197.8	1322	
"	20	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	79	IV	4.9	4.6	3.5	40.1	1330	
"	21	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	27(4)	IV	5.3	4.8	3.5	55.8	1319	
"	22	"	鉄滓	D14-1/鍛冶遺物集中	29(6)	IV	6.8	4.6	3.7	68.7	1321	
"	-	"	薄板状鉄片	D14-1/D炉1	1	覆土	4.0	3.5	0.3	5.8	-	分析試料FJ-1(図版40上段左端)

*遺物番号の()は取上げ番号を表し、()だけのものは取上げ番号と遺物番号が同じものである。*金No.は金属製品の保存処理番号を表す。



図V-48 金属生産関連遺物 (1)



図V-49 金属生産関連遺物 (2)

5 木製品等

令和4年度5,627点、5年度361点の木製品(5,951点)・漆製品(33点)・繊維製品(4点)が出土し、うち164点を掲載した。掲載木製品等は舟敷、舷側板、櫂、鞘、刀子、矢柄、中柄、漆塗椀、曲物、樽、折敷、箱物、箸、串、捧酒箸、織機受糸木、下駄、木札、炉鉤、砥石台、浮子、建材、柱、杭、布、縄などである。掲載木製品等一覧表には名称、出土地点、層位、木取り、樹種、焼け、樹皮、計測値等の詳細を示した。

掲載木製品152点について樹種同定を行った(付編において記載しDVD-ROMに収録)。うち45%にあたる69点がスギであり、曲物、箱物、木札、箸等に使用されている(木製品等樹種別集計表参照)。舟敷のカツラは、各地のアイヌの伝承においても、ヤチダモと共に舟材に適しているとされている。木の大きさや材質、また入手しやすさなどからであろう。刀の鞘はホウノキが想定される。ホウノキは柔らかく刀身を傷つけないことや加工しやすいこと、また油分が少ないことなどから鞘の材に適しているとされ、古来ホウノキが使用されている。漆塗椀のブナは、前回の調査報告(北埋調報 290)においての、汎用品はブナ材であるという報告と整合する。漆塗椀については標津町教育委員会 小野哲也氏にご教示をいただいた。

D柵 1

1は約13cm角の芯持材の柱である。幅約1~2cm、深さ約1.5~2cmの柄孔が4か所ある。2は丸杭で、先端は連続する8面削りである。樹種は共にアスナロ。

B掘込 2

3はブナ材を横木取りした漆塗椀である。外面は黒地に赤漆による簡易な植物文を3方に配し、内面は黒地に赤漆が塗られている。黒漆は堅牢に塗り重ねられたものではなく、廉価な日常什器と考えられる。口唇と高台の一部が欠損している。4はハリギリの柵目板を使用した板綴舟の舷側版で、縄で綴じるための方形の孔を2カ所有する。5はスギの柵目板2枚を合せた小型の樽蓋である。中央に栓の孔が穿たれ、側面には固定するための木釘が4カ所残る。倒立して出土した3漆塗椀の中より出土した。

D13木製品集中

6は漆塗皿の破片である。ブナ材を横木取りし、内外面とも黒地に赤漆が塗られている。7はスギの柵目材の漆塗容器の蓋で、両面に黒漆が斑に残存する。8は両面に黒漆が塗られたスギの篋状製品である。9はスギの建材で焼けており、鉄釘が残る。10はヤナギ属の丸杭で、先端は連続して交差する3面削りである。11はクリの割杭で、1/6分割した材を6面削り全体を整形し、先端は連続して交差する5面削りである。12はタラノキの割杭で、先端は主として連続して交差する3面削りで補助は1面削りである。13はカエデ属の材を1/12分割した割杭で、先端は主として4面削りで補助は2面削りである。14は曲物蓋(底)である。15は中央に孔を有する曲物蓋である。16は柄杓の柄部分で、先端付近に孔を有する。17は桶の側板である。18は折敷の底板で木釘孔が1か所あり、筋が写かれている。19は箱物の部材である。角に挟りがあり、木釘が1カ所残る。14~19の樹種はスギ。20~24は箸である。断面は20・21が方形、22は楕円、23・24は円形である。樹種は20・21・23スギ、22カツラ、24アスナロ。25は小型で小判形の連歯下駄である。前壺はほぼ中央に、後壺は後歯より前に穿たれている。樹種はモクレン属。26は織機の受糸木である。幅約2cm、厚さ約1cmの板目材の片側に1.5~2cmの間隔、反対側には0.5~1cmの間隔の刻みがある。樹種はスギ。27は炉鉤で全体に焼けがある。樹種はカエデ属。28は砥石を嵌める溝のある砥石台で、全体に焼けがある。樹種はアスナロ。29は先端が篋状の細板で挟りがある。樹種はヤナギ属。30・31は先端の両縁に挟りがある木札である。32は篋状の細板である。33は刻みのある細棒である。30~33の樹種はスギ。34は刻みのある丸木の半割材で、樹種はモクレン属。35は1/16分割の割材で、樹種はマツ属。36は切断されたスギの板材である。37は先端が連続する3面削りの丸木材である。樹種はモクレン属。38~43は樹皮製品である。38・39は孔が穿たれている。40は結束用のバンド、41~43は樹皮巻であるが、41は焼けており灯火用であろう。44~46(写真掲載)は黒地に赤漆が塗られた布であるが、用途は不明である。

D14-1 木製品集中

47～49は漆塗椀である。いずれも外面は黒漆、内面は黒地に赤漆が塗られている。47は植物文が1カ所残る。高台の一部と口縁部から胴部にかけて欠損する。48は全体に植物模様が施され、口縁部が欠損する。52舟敷の上部より出土している。49は無文で口縁部が欠損する。いずれも日常什器であろう。樹種はブナ。50は黒漆が台表に残る小判形の連菌下駄である。前壺はほぼ中央に、後壺は後歯より前に穿たれている。刃物痕が台表裏ともに残る。樹種はモクレン属。51は生漆が塗られた折敷の底板を転用したもので、片側に3～5mmの間隔で23カ所の刻みがあり、離れて2カ所の刻みがある。織機の受糸木の可能性がある。樹種はスギ。52は板綴舟の舟敷（丸木舟）である。半割したカツラの大木から作り出している。全体の約1/4程度と推定され、平らな舟底が確認される。縁は波形を呈しており、縄で舷側版を綴じるための孔が穿たれている。孔は短径約2cm、長径約2.5～4cmの楕円形や長方形で22カ所が確認される。孔は内側から広く浅く削り、中央部で貫通させている。8カ所の孔に縄が残り、2本残る孔もみられる。縄は斜めや横を向いて残っており、2方向と縛られていたことを示している。内外面に刃幅2.8cmと4.6cmの手斧のはつり痕が多数みられる。放射性炭素年代測定において14世紀初頭～14世紀末の結果が出たが、実際に伐採された年代はやや新しい年代と考えられる（詳細は付編参照）。53は舟敷直下、54も舟敷付近から出土しており、樹種も同じカツラであり舟敷の一部と思われる。55は板目材から作り出した早櫂で、水掻き部の幅広いパドル形である。1/2程度が破損しており、先端に焼けがある。樹種はモクレン属。56は両角に抉りのある板材で、建築部材と思われる。焼けがある。樹種はアスナロ。57はスギの角材を切断したもので、建築部材と思われる。焼けがある。

立杭1～8:58は立杭5の丸杭で、先端は連続して直交する4面削りである。先端に打ち込み時の潰れがある。59は立杭1の丸杭で、先端は連続して直交する4面削りである。60は立杭3の丸杭で、先端は1面削りを主とし補助は2面削りである。61は立杭8の丸杭で、先端は連続して直交する3面削りである。63は立杭6の丸杭で、先端は連続して交差する3面削りを主とし、補助は1面削りである。64は立杭4の割杭で、先端に主とする2面削りと補助の1面削りがあり、さらに先端に補助の1面削りがある。65は立杭2の割杭で、先端は連続して交差する4面削りである。66は立杭7の割杭で、先端は連続して交差する3面削りである。樹種は58・59モミ属、60・61ヤナギ属、63・64・66トネリコ属、65ミズキ属。

62は丸杭で、先端は連続して交差する5面削りである。樹種はコナラ属。67は角杭で、先端は連続して直交する4面削り、さらに先端に1面削りがある。樹種はモクレン属。68～71は曲物の部材で、68・69は把手、70・71は蓋（底）である。樹種は全てスギ。72は桶の側板で孔が穿たれている。樹種はアスナロ。73～75は樽の部材である。73は蓋（底）で全体に焼けがある。74・75は栓で、74には孔が穿たれている。樹種は全てスギ。76～82は箱物の部材とした。76は底板で濃淡のある墨跡が残る。77は細板の縁に8カ所の木釘（孔）があり補強材と思われる。焼けがある。78は突起部に2カ所の木釘がある板状の小片で、固定するときの補強材と思われる。79は底板や側板を切断したもの。80は方形の孔が2カ所ある薄い柁目板の小片である。81は先端が切り出された細板に4カ所の木釘（孔）があり補強材と思われる。82は細角棒に2カ所木釘があり、台の縁であろうか。樹種は全てスギ。83～87は箸である。83は断面が方形で刻みを持つ。84は断面が長方形、85は断面が円形、86・87は断面が楕円形である。樹種は83・85～87スギ、84アスナロ。88～90は串である。断面は不整長方形で樹種は全てスギ。91・92は薄いスギの柁目板を篋状に加工したもの。93・94は浮子で、先端に抉りがある。樹種は93アスナロ、94カエデ属。95は矢の中柄で、両端部は細く体部は太く、鍔装着部と茎部は明瞭である。樹種はノリウツギ。96～99は矢筈付近の矢柄である。96は矢羽を装着するための樹皮が巻かれている。樹種は96・98モミ属、97スギ、99アスナロ。100～102は刀子の柄である。100は茎が残存する。101は茎の装着痕がなく未使用と思われる。102は長さ調整のために切断されたものであろう。

樹種は100アスナロ、101カエデ属、102モクレン属。103はブナの分割材から作り出された縦槌の頭部であり、約1/3が残存する。104は竹製の編針で径5mmの孔を有する。105~113は木札である。細板の両縁に挟りがある。105~109は墨書が確認されるが、部分的なため文字の判読は困難である。樹種は全てスギ。114は捧酒箸である。先を幾分尖らせ、下部は先端に向って徐々に尖らせている。シロシが全体に施されている。シロシの溝は横筋を入れた後、上から削り取り作っているが、筋の両側を斜めに削り取った溝と、片側だけ斜めに削り取った溝があり、それぞれ真直ぐと右下がりの斜めがある。間隔7mmの4本目までと6・7本目は真直ぐの両側削り、8・9本目は斜めの両側削り、5本目は真直ぐの片側削り、10本目は斜めの片側削りである。11~13本目は斜めの筋だけで削り取っておらず、また先端を整形していないことから制作途中と考えられる。7本目の溝と13本目の筋で折れているが、意図的に折られた可能性がある。樹種はヒノキ科。115・116は篋状の細板である。115は先端を篋状に削っている。116は下部を細く削り、先端を切り出している。樹種は共にスギ。117~120は刻みのある細棒である。119は焼けて先端は消失しているが串の可能性はある。樹種は117スギ、118ハリギリ、119カツラ、120ノリウツギ。121~123は板状の加工品である。121はアスナロの柁目材の先端を尖らせたもの、122はクリの板目材を加工したもの、123はスギの薄い板目材の先端を削り尖らせている。124~126は細い棒状の加工品である。樹種は124サクラ属、125ハコヤナギ属、126不明環孔材。127はスギの板材で箱物の部材か。128~131は丸木材で、128・129は先端1面削り、130・131は先端2面削りである。樹種は128カエデ属、129トネリコ属、130モクレン属、131ヤナギ属。132~135は割材で、132~134は先端1面削り、135は先端2面削りである。樹種は132ミズキ属、133ハコヤナギ属、134ハシドイ属、135カエデ属。136~138はスギの薄柁目板で曲物の原材料であろう。139は樹皮を細い带状にしたもの。140(写真掲載)は幅1cm、長さ69.7cmの二本撚りの縄である。

E地区11-6

141は孔があり道具等の一部であろう。残存状態が極めて悪く樹種は不明。

D14-1 木製品集中 (④14-1 地先)

立杭9~19: 142は立杭9の丸杭で、先端は連続して交差する3面削りで、挟りが1ヵ所入っている。143は立杭10の丸杭で、先端は交差する2面削りを主とし、補助は1面削りである。144は立杭11の割杭で、1/12分割した割材の一辺を斜めに削り尖らせている。145は立杭12の丸杭で、先端は連続して交差する3面削りを主とし、補助は2面削りである。146は立杭13の割杭で、樹皮が残る板目材の一辺を斜めに削って尖らせている。147は立杭14の丸杭で、先端は交差する2面削りを主とし、補助は2面削りである。148は立杭15の丸杭で、先端は直交する2面削りを主とし、補助は3面削りである。149は立杭16の丸杭で、先端は直交する2面削りを主とし、補助は1面削りである。150は立杭17の丸杭で、先端は直交する2面削りを主とし、補助は1面削りである。151は立杭18の割杭で、樹皮が残る板目材の一辺を斜めに削り尖らせている。152は立杭19の丸杭で、先端は連続して交差する5面削りである。樹種は142モミ属、143ブナ属、144・146・150・151コナラ属、145・149モクレン属、147ハコヤナギ属、148マツ属、152カエデ属。

153は花文の漆製品で、花卉は9枚と推定される。黒地に赤漆が塗られており、建築物等の装飾と思われる。樹種はハコヤナギ属。154は板材の切断品で建築材と思われる。樹種はヒノキ科。155は曲物の側板で、3枚の薄柁目板を樹皮で綴じ合わせている。156は小型の曲物の蓋(底)、157は樽の栓、158は柁目板に木釘孔が4ヵ所ある。箱物の底板と思われる。159は断面が円形で両端が先細る箸である。160は矢柄である。全体の約1/3程度と推定され、矢筈より約10cmの部分に矢羽を装着するための樹皮が巻かれている。155~160の樹種はスギ。161は刀子である。刀身の約2/3が残存し、柄はヒノキ科の板目材から作り出している。162は刀の鞘である。モクレン属(ホオノキを想定)の薄い柁目板を2枚貼り合わせ、樹皮製バンド19ヵ所(15ヵ所が残存し、4ヵ所の痕跡あり)と鞘尻を木釘1ヵ所で留めている。帯執は長さ13.9cm、厚さ1.3cm

の板目材から作られて溝にはめ込まれており、樹皮製バンド3カ所で固定されている。紐を通すための突起が2カ所作り出されていると推定されるが、1カ所のみが残存する。刀身の重ねが十分にとられていないようにも思われ、祭祀用の可能性も考えられる。163は両縁に挟りのあるスギの木札である。164は両端に径8mmの孔を2カ所有する菱形の細板で用途は不明である。樹種はカエデ属。(菊池)

舟敷について

舟敷片について若干の所見を記す。舟敷片には以下の加工が加わっている。船底が平底に、舷側に二～三面の面取りが施されている。これまでの出土例・現存民族例に拠れば(由良1995)、舷側の面取りは舳・艫部分寄りの加工であることから、この舟敷片は舳・艫に近い中央部の破片と考えられる。船縁には顕著な波状摩耗が形成されていることから舟敷の使用が長期にわたったと考えてよい。残存する舟敷片の両端は、切断痕がみられず、破断面が著しく磨滅していて、中央部における船底最大幅が約20cmであることから船幅において1/2以下の残存状態である。これらより相当期間風雨にさらされて腐植した状況であったことがわかる。

また、摩耗により船縁端面が波状(綴孔の上が凸、綴孔間は凹)になっていることが観察される。これは、舷側板綴孔と舟敷綴孔に縄を縫合する縄を通す回数が2回以上となることによって綴り方向が2方向となって、「レ」字状に連続した綴りになる場合に生じる。

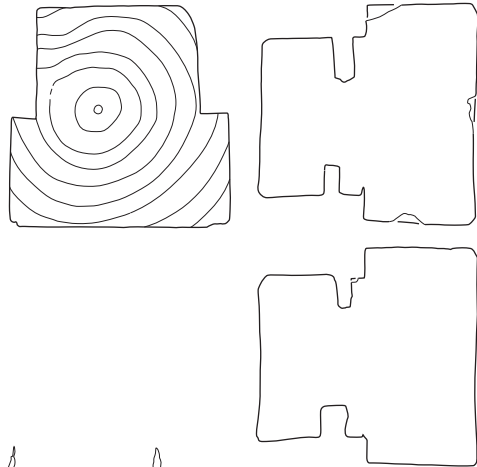
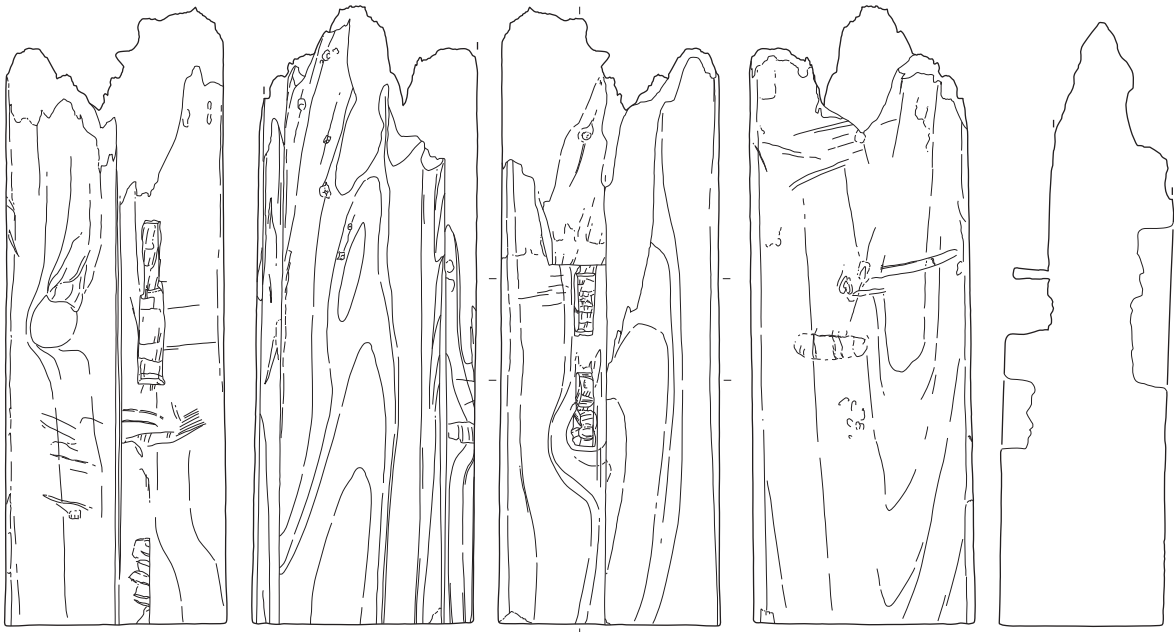
アイヌ民族例に因る「舟の送り」は、舟敷の舳・艫を本体から切断し、分離された舳・艫を川縁に長期置くという行為である(出利葉1993、由良1995)。この舟敷片には舳・艫を分割したような切断痕跡はない。くわえて、舟敷片上位の遺物は摩耗した越前播鉢片・口縁部が欠失した漆塗り椀・曲げ物底・アワビ貝殻があり、これらは5cm位舟敷片から浮いた状態で出土した。舟敷片の周辺や上層からも陶磁器片・骨角器・木製品・動物遺存体など多様な出土がある。なお、舟敷片底面は断面図(図IV-15上から2番目)において標高4.40mのIV層中程の層準にあり、標高4.33mには瀬戸美濃天目碗(図V-14 b2・b5)が、上位の層準には16世紀末～17世紀初めの陶器も含まれることから、舟敷片は16世紀中葉以降～17世紀初めに沢状地形の粘質土中に埋没したと考えられる。従って、舟敷片が板綴舟として機能していたのは16世紀中葉以前となる。

なお、遺跡等出土例には完形が多くあり、降下火山灰直下に並んで出土する例(苫小牧市教委1966)もある。これらは前述によれば偶発的に埋没(「舟の送り」を受けない)したものと考えられる。舳・艫が分割切断された事例は千歳市美々8遺跡のIB-1層出土例:近世アイヌ文化期(北埋調報102)でみられ、ユカンボシC15遺跡のIB-1～2層出土例:近世アイヌ文化期～中世アイヌ文化期の擦文文化期(北埋調報192)では分割切断されたと思われる端面を持つ舳・艫が、IB-3層出土例:10世紀中葉降下のB-Tmを挟む擦文文化中期後半では分離された舳・艫がみられる。これらより舳・艫の分割切断を伴う「舟の送り」が中世アイヌ文化期には行われていて、擦文文化中期後半まで遡る可能性がある。アイヌ民族の「舟の送り」事例、分離した舳・艫とそれに関わる一括資料が備わる事例、これらの増加が望まれる。

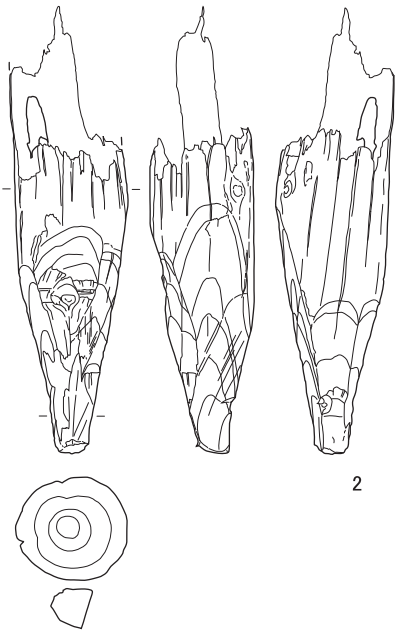
ところで、「イタオマチップ(板綴船:縫合船である準構造船)」は、『松前蝦夷記』「縄綴之舟」(松前町史編集室 1974)、『松前嘉広宛書状(控)』「縄とち船」(北海道開拓記念館 1984)、『国日記』「縄閉船・縄とち船」(青森県史編纂近世部会 2001)などと呼び近世和人は「綴じる材料」に着目した。アイヌ人は「綴じる船材形状」に着目して呼称するいっぽうで、「カリンバテシカチップ(桜皮で綴じた舟)」と「綴じる材料」に着目して呼称する場合もある。

舟敷片は分割切断痕跡がなく破断面にかなり腐朽がみられること、アイヌ民族例の「舟の送り」と合致しないこと、上位遺物が舟敷片に伴う一括遺物群ではないこと、から舟敷片の埋没に関わり特定の人為はみられず、アイヌ民族の「舟の送り」にも当たらない。よって、「舟の送り儀礼の痕跡がみられた」(関根2023、128頁)は誤りで、アイヌ民族の「舟の送り」に関する理解に乏しい。この記述・それに関わる写真の掲載が報告書刊行前に無断・無引用でなされていた、極めて遺憾である。(鈴木)

D 柵 1



1

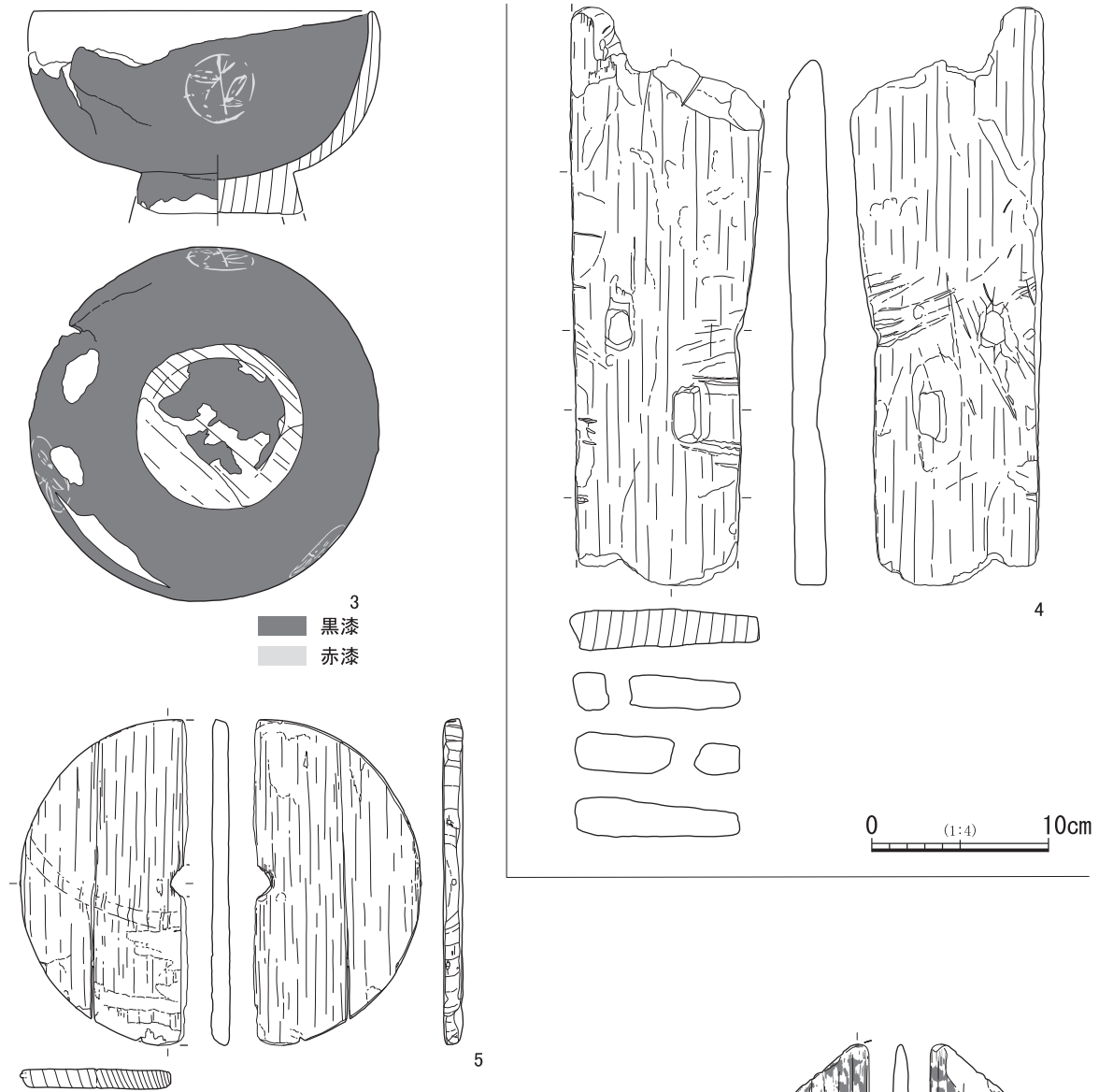


2

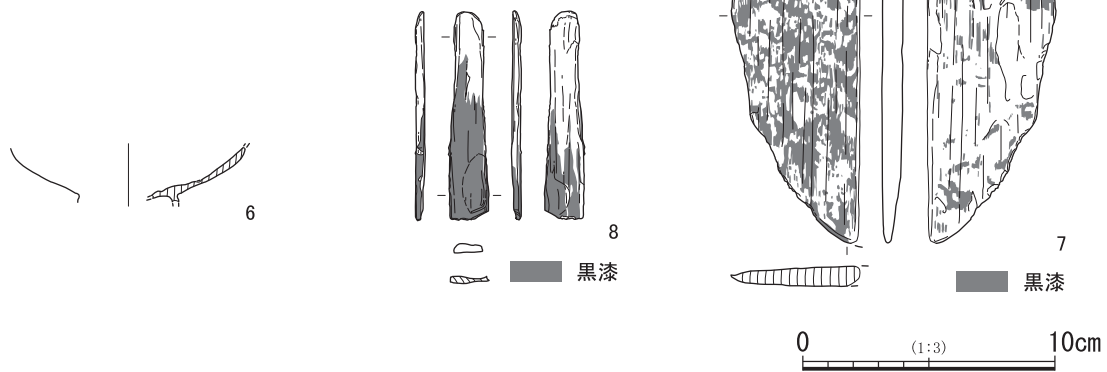
0 (1:4) 10cm

図V-50 木製品等 (1)

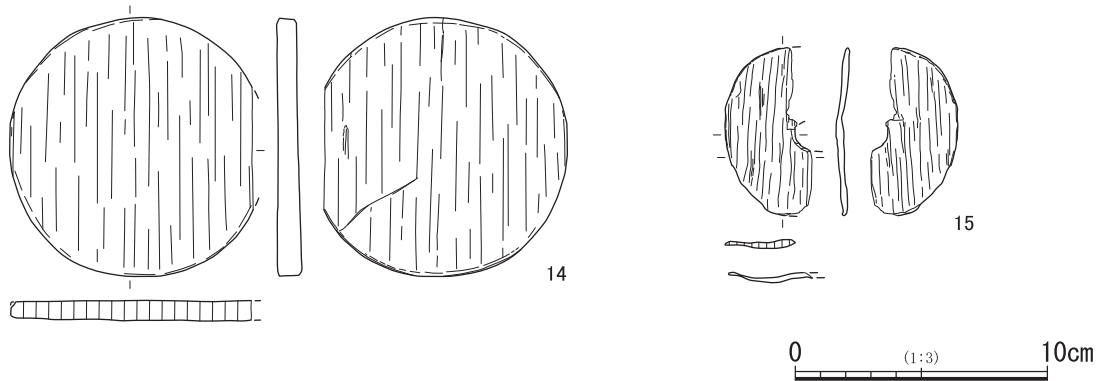
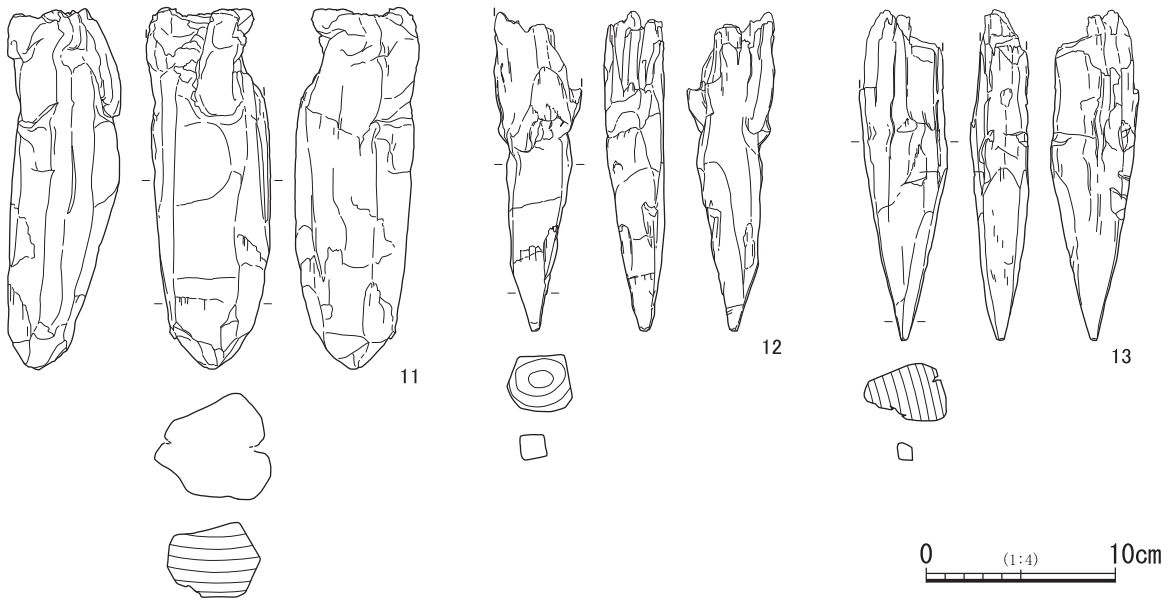
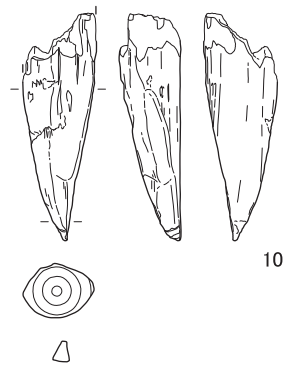
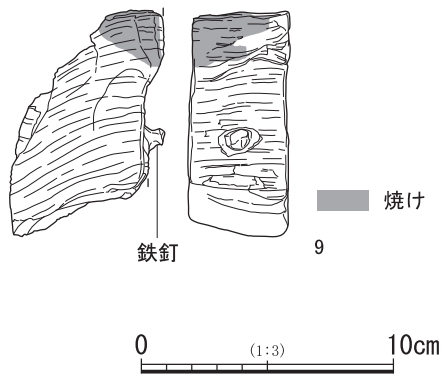
B 掘込2



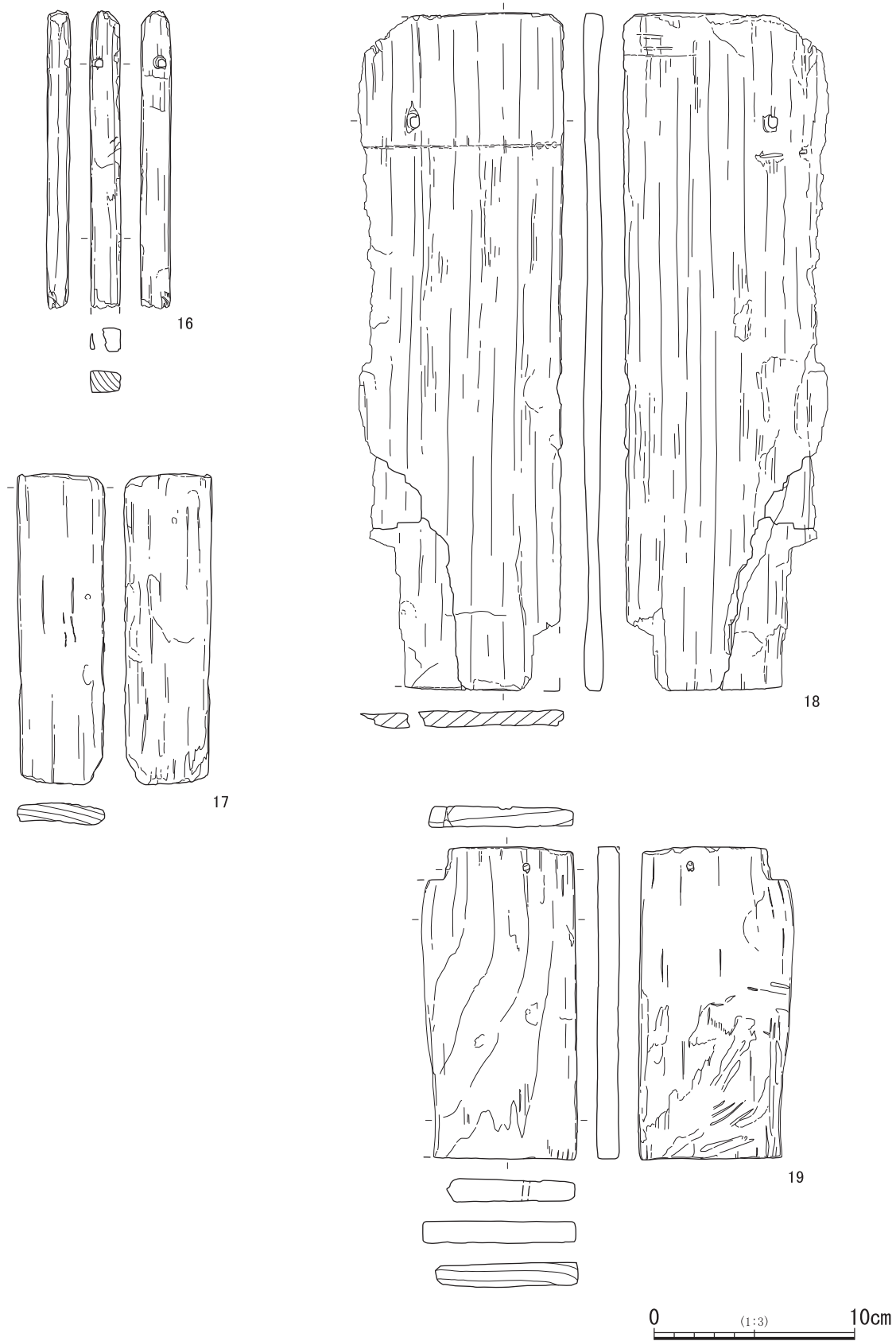
D13 木製品集中



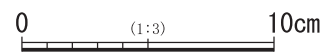
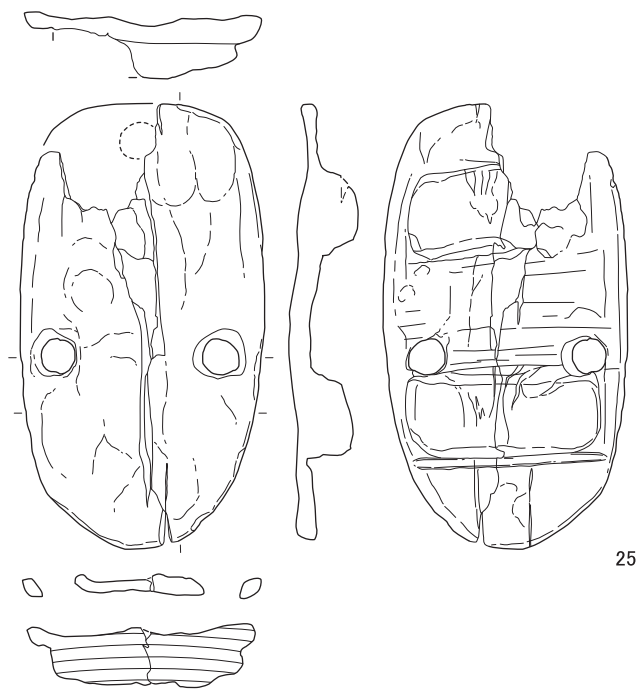
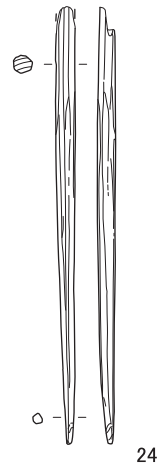
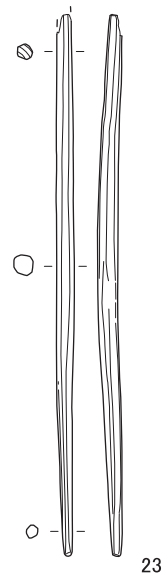
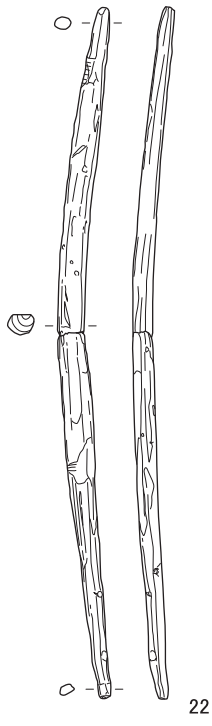
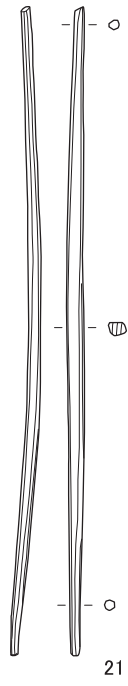
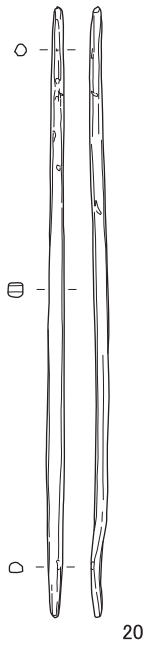
図V-51 木製品等 (2)



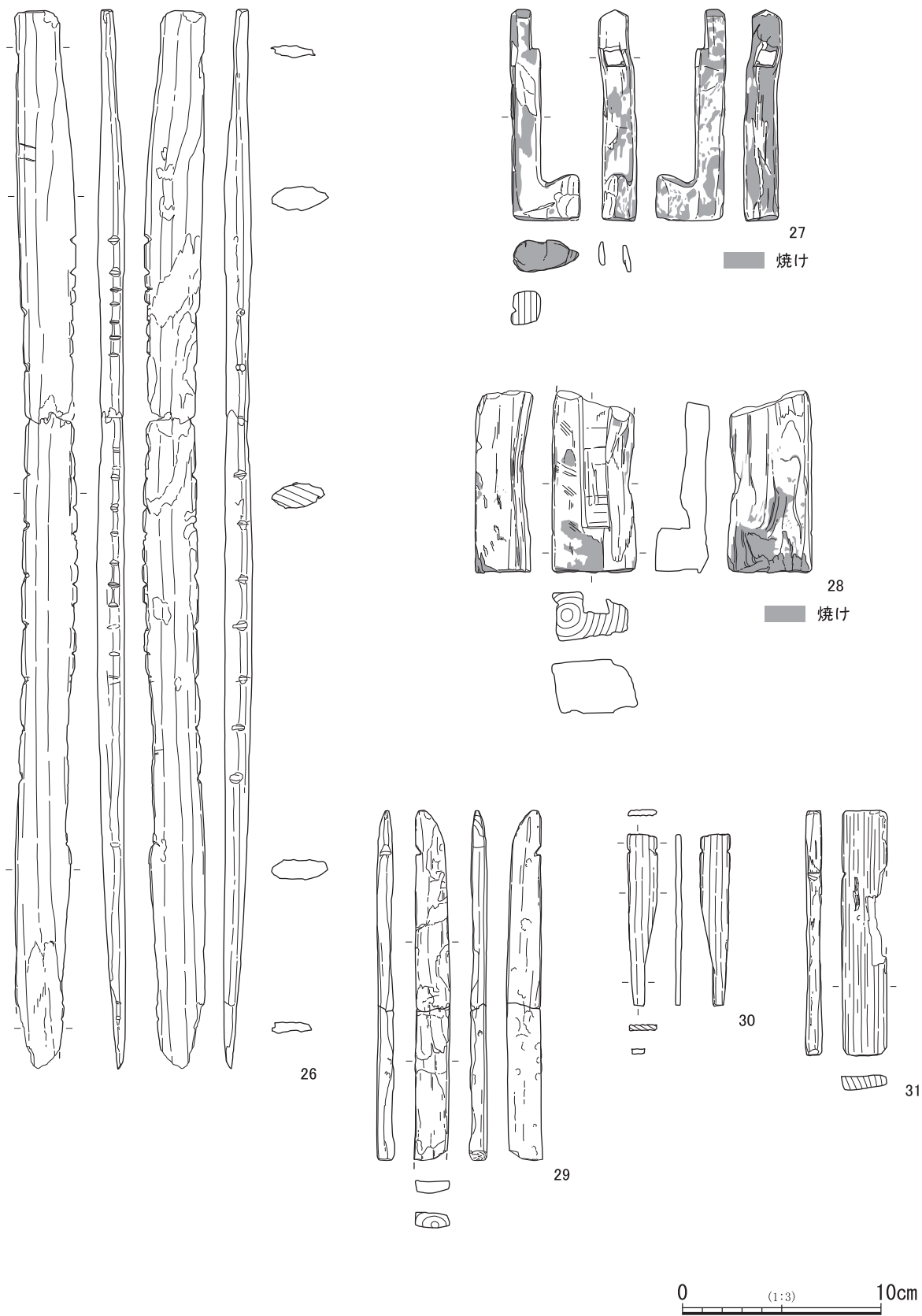
図V-52 木製品等 (3)



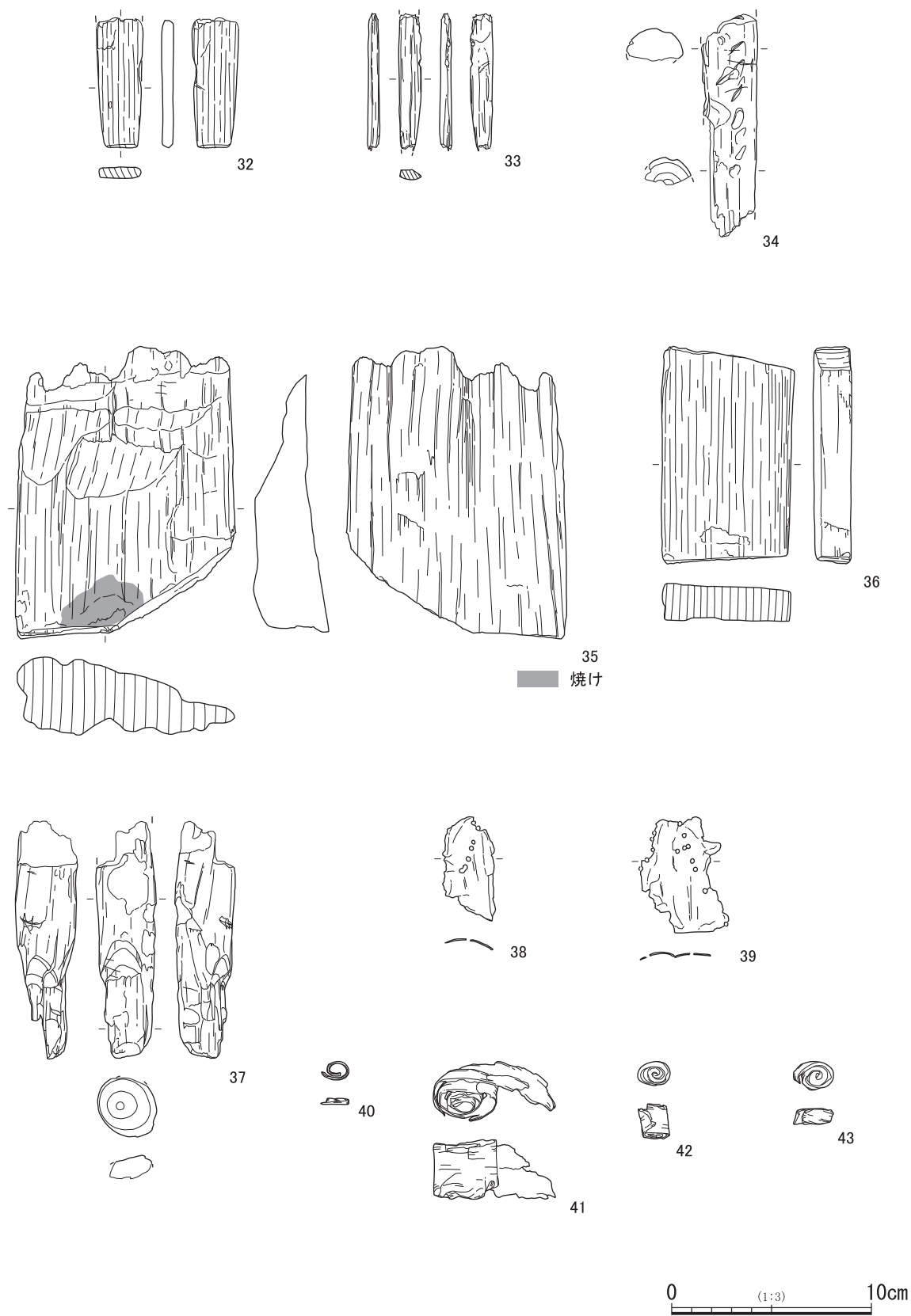
図V-53 木製品等 (4)



図V-54 木製品等 (5)

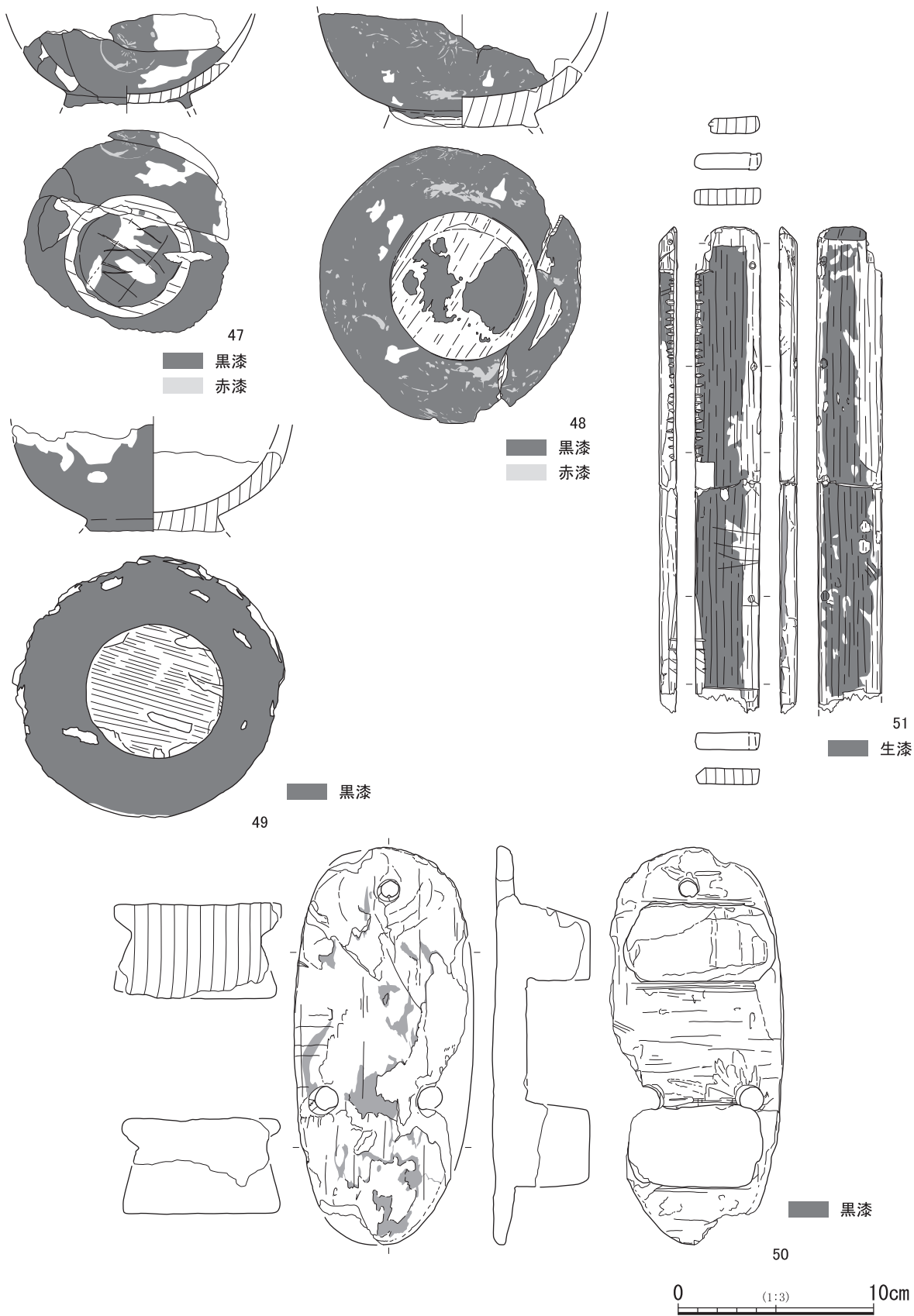


図V-55 木製品等 (6)

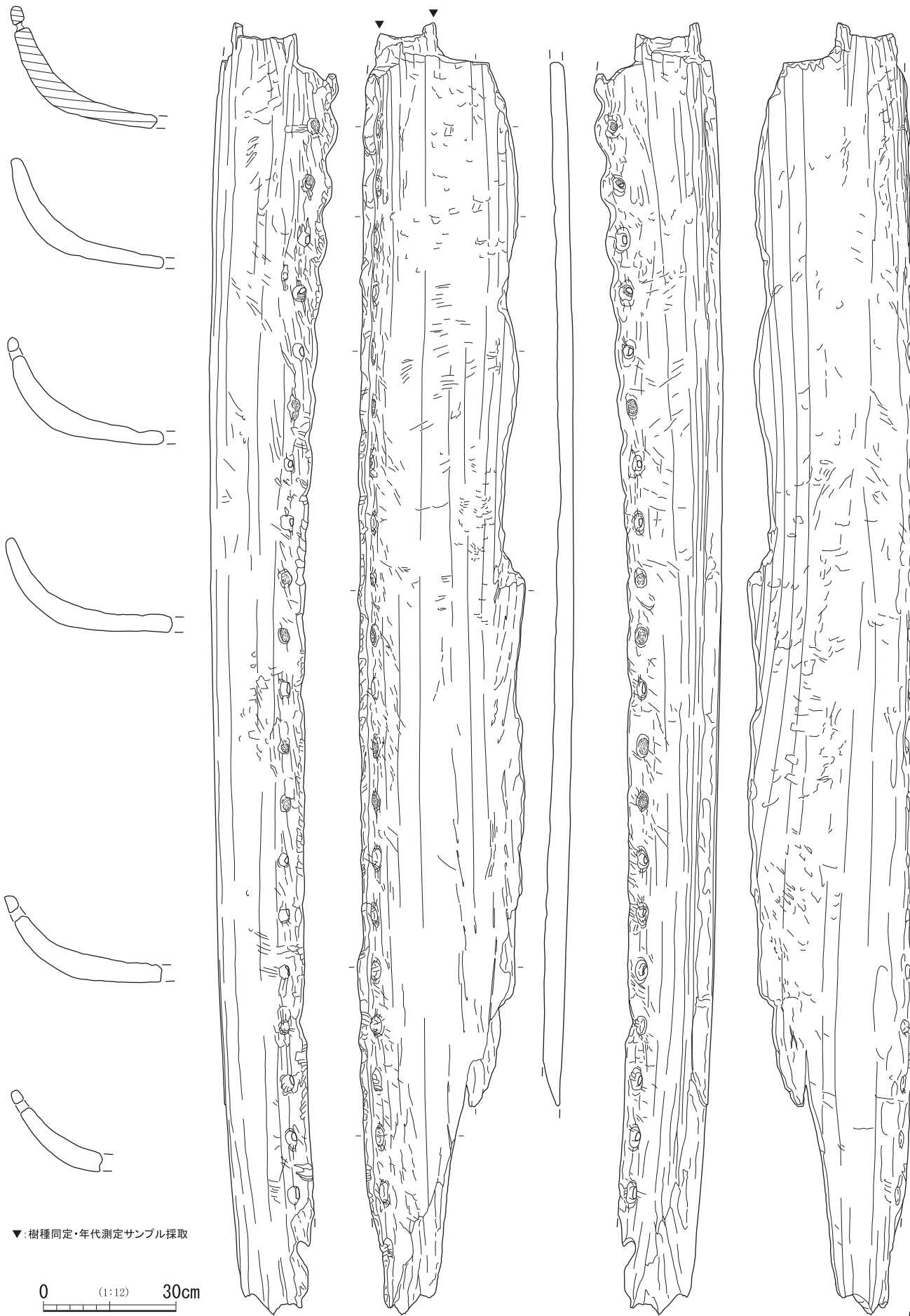


図V-56 木製品等 (7)

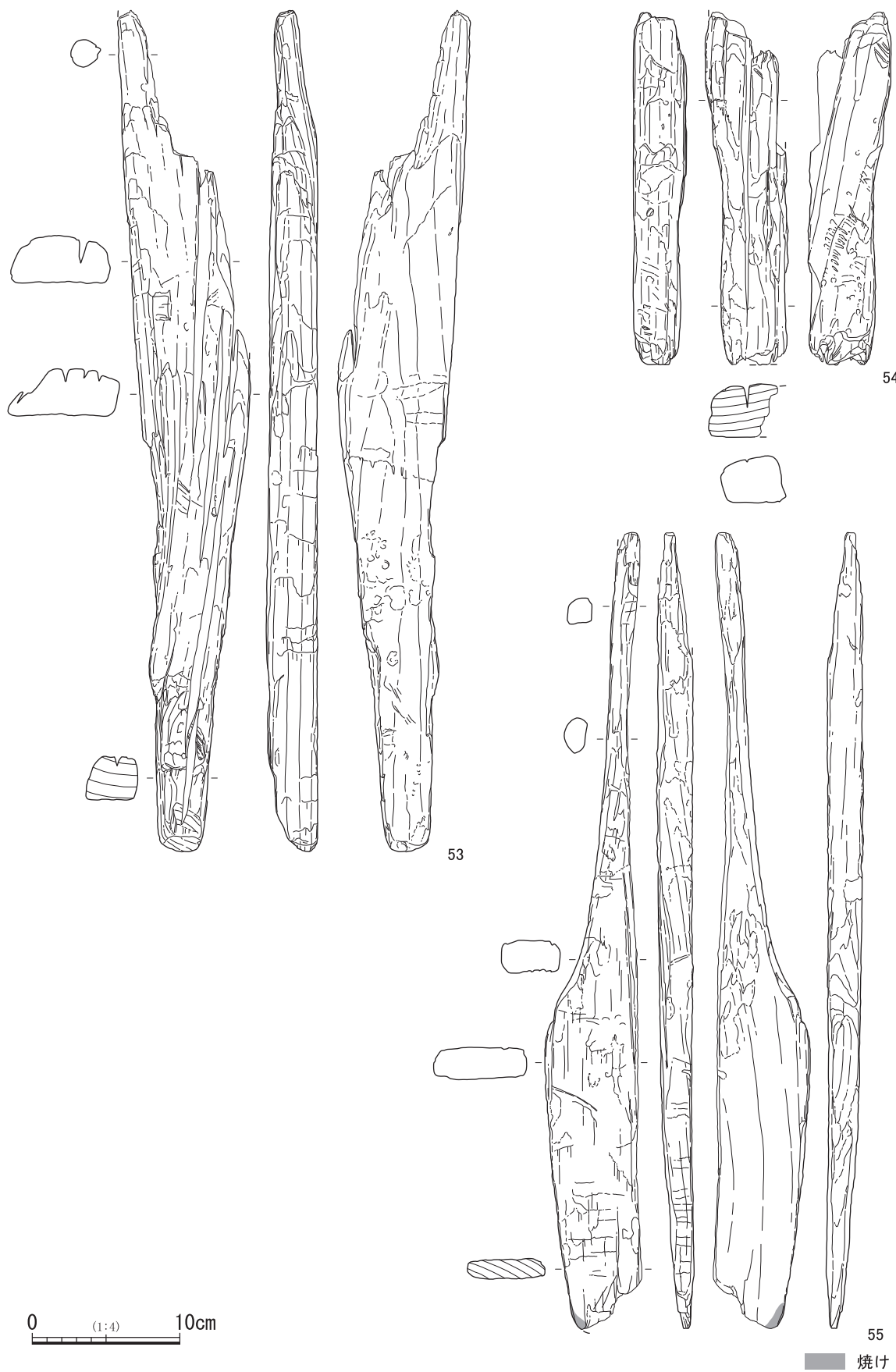
D14-1木製品集中



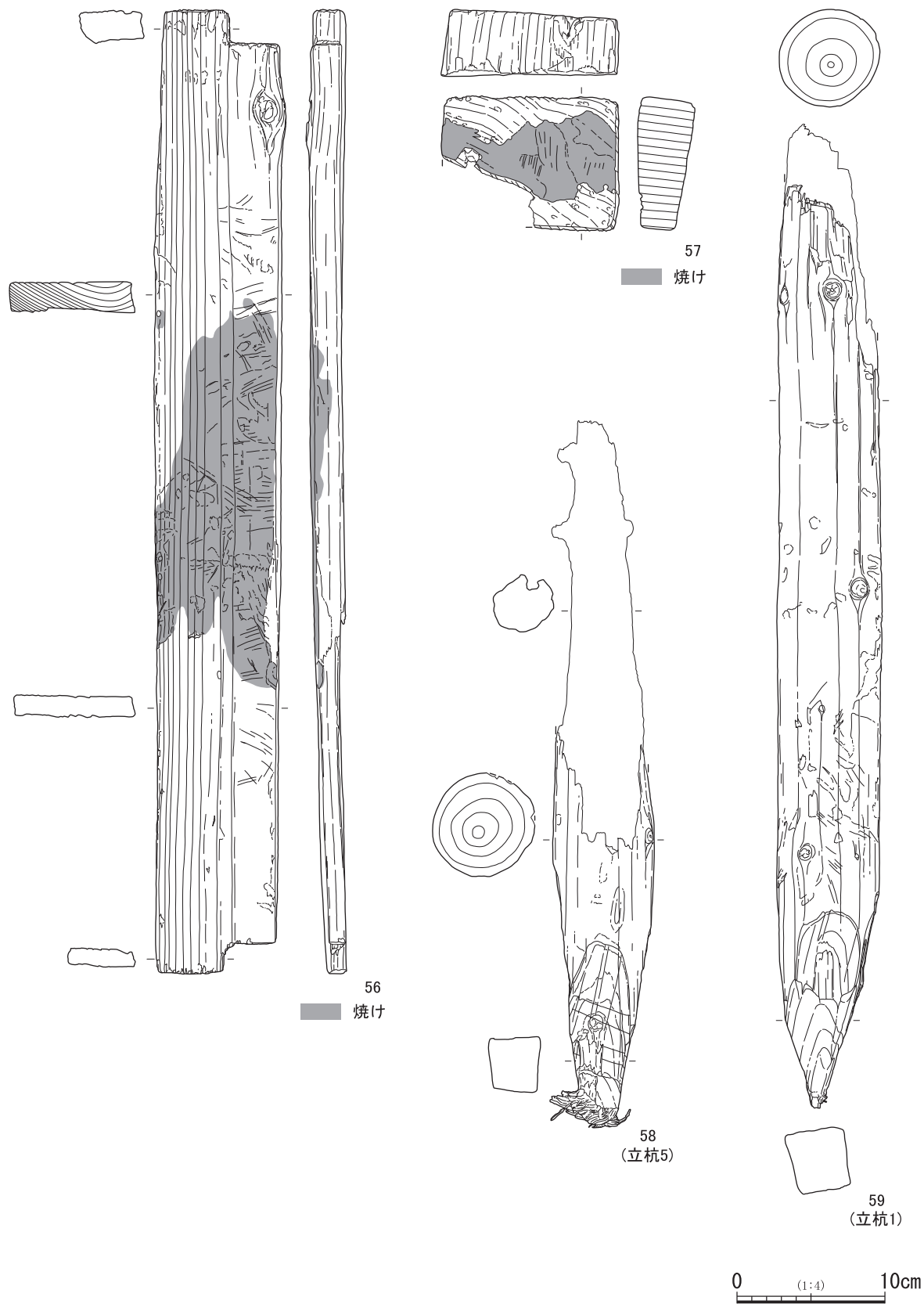
図V-57 木製品等 (8)



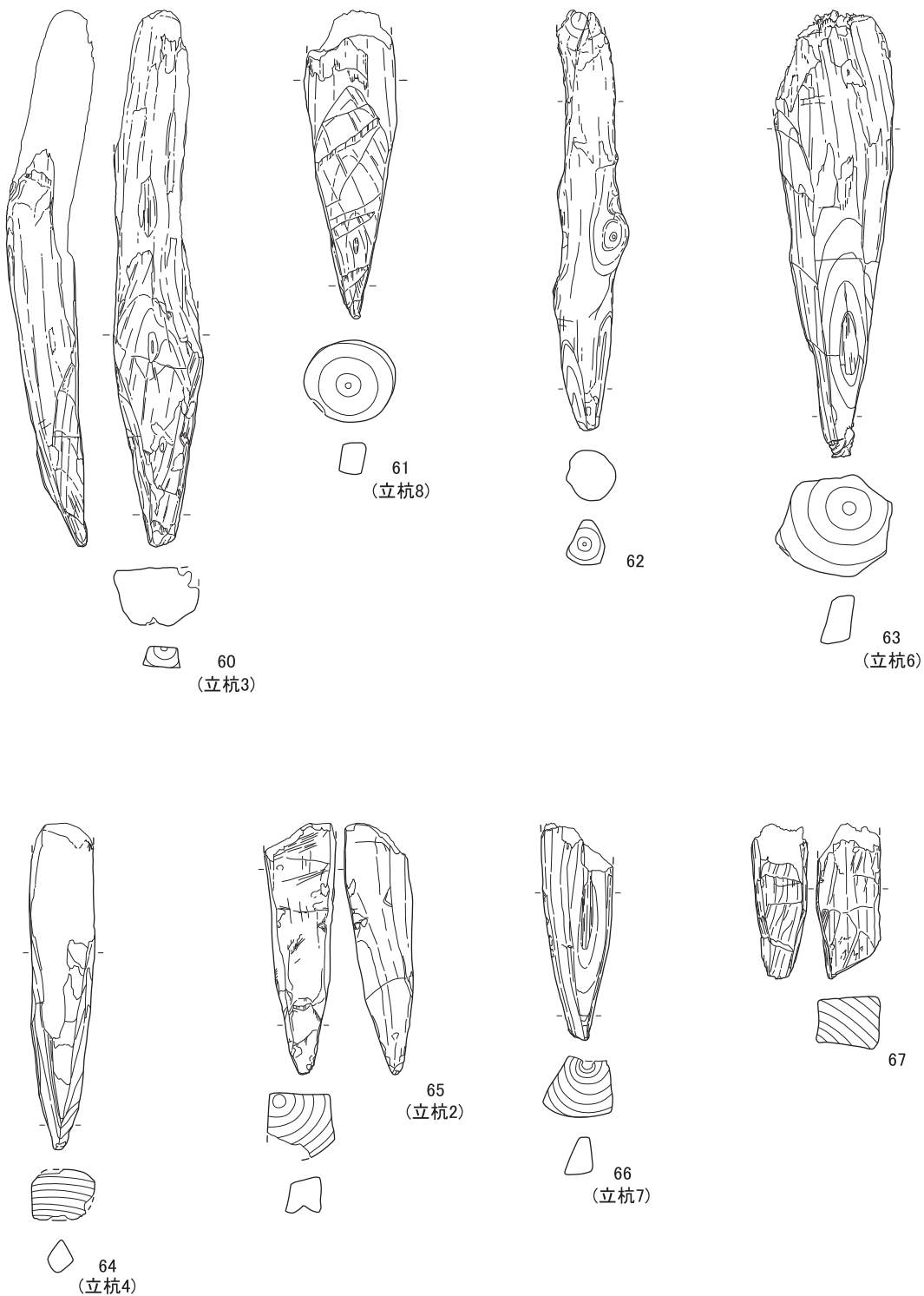
図V-58 木製品等 (9)



图V-59 木製品等 (10)

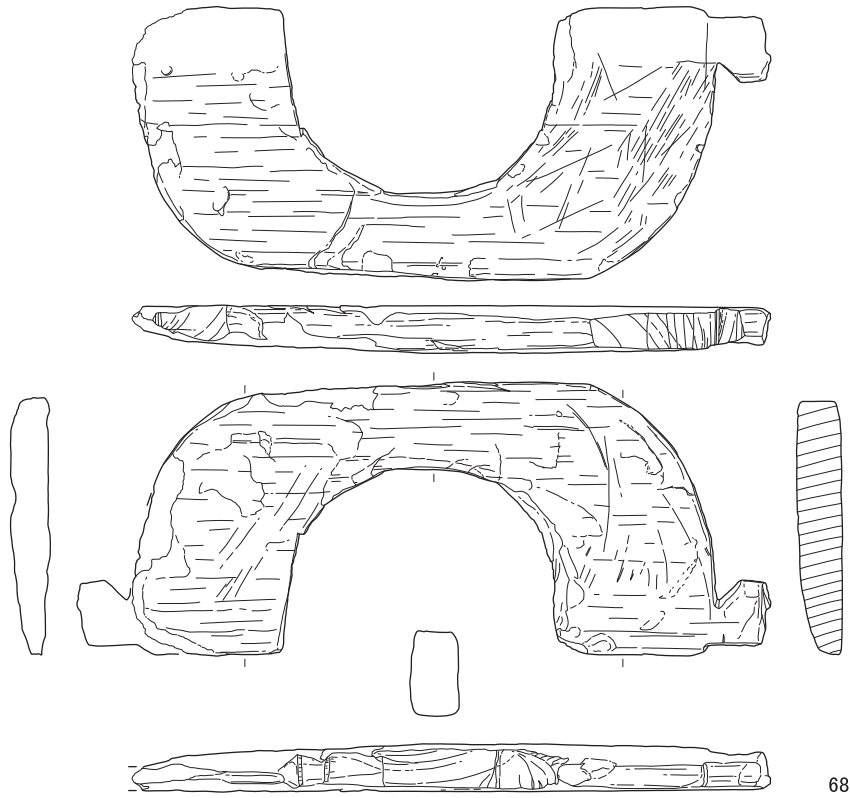


图V-60 木製品等 (11)

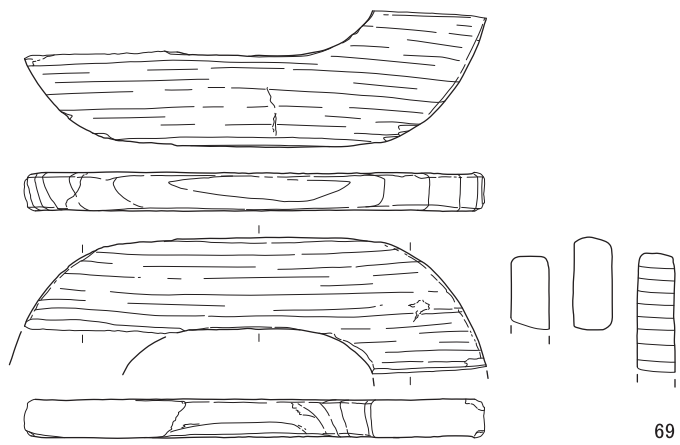


0 (1:4) 10cm

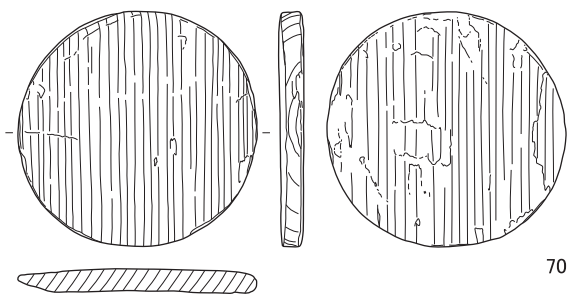
图V-61 木製品等 (12)



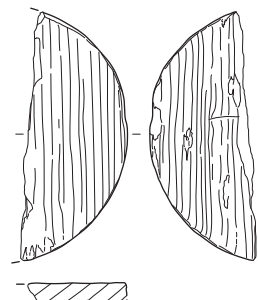
68



69



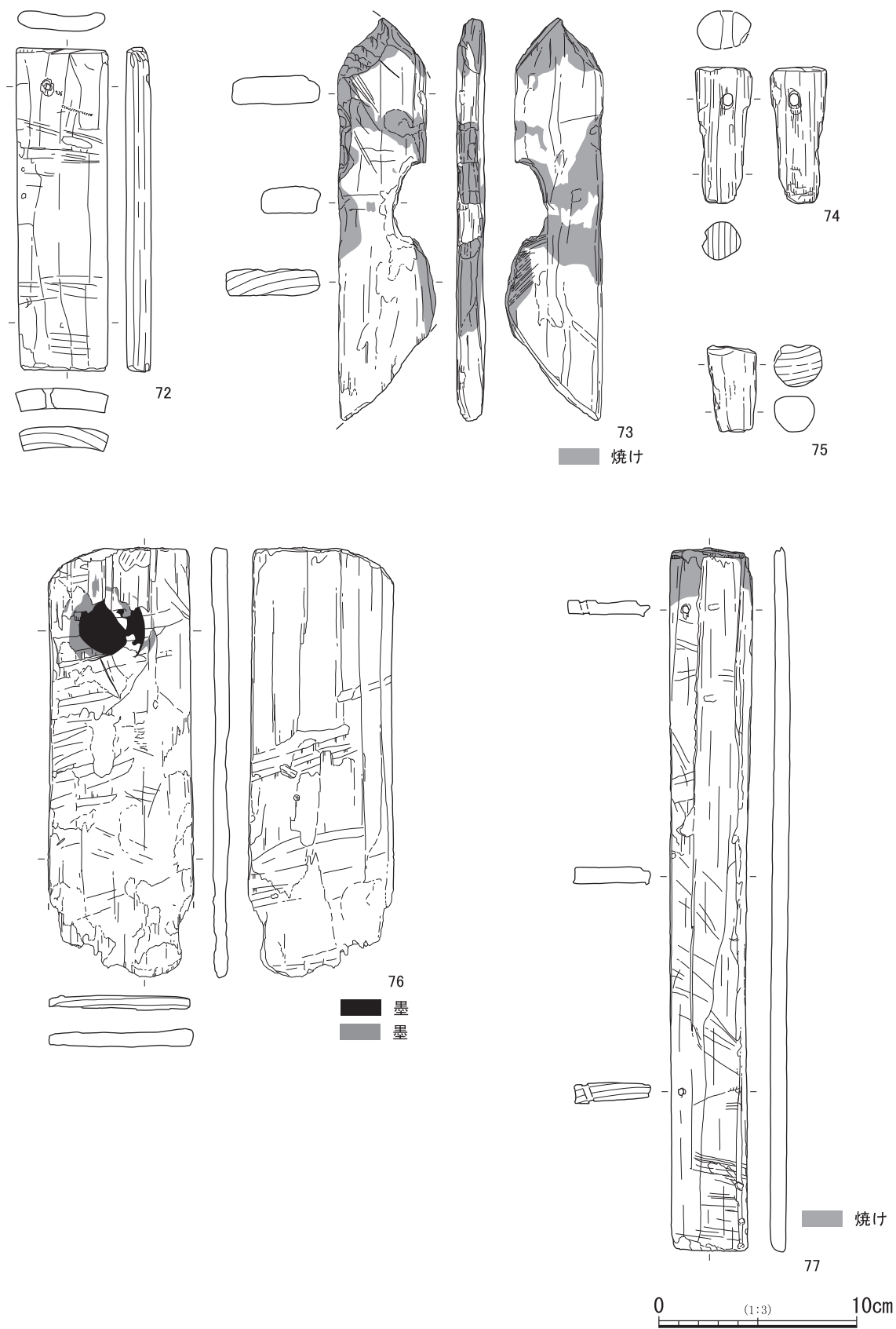
70



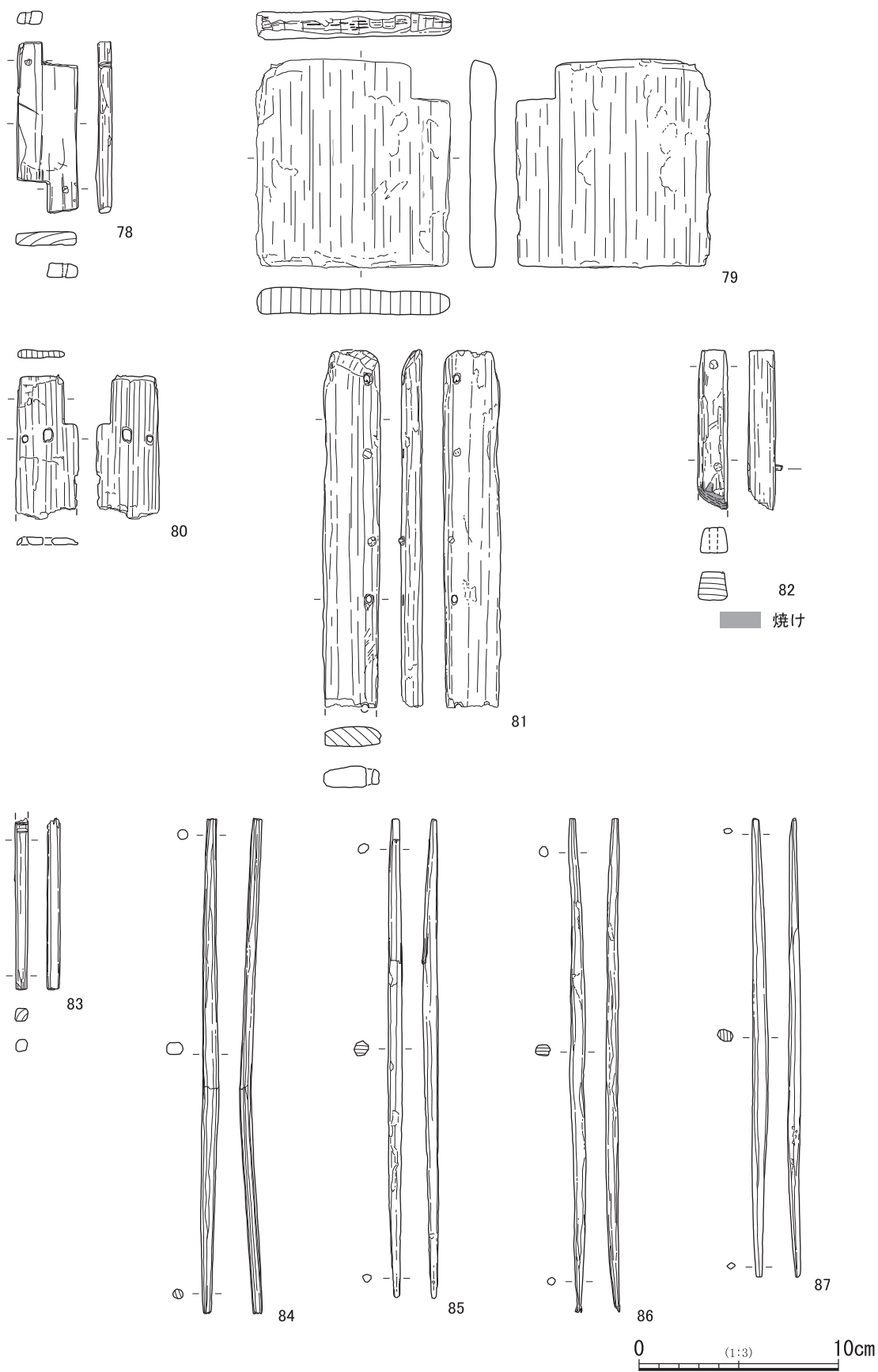
71

0 (1:3) 10cm

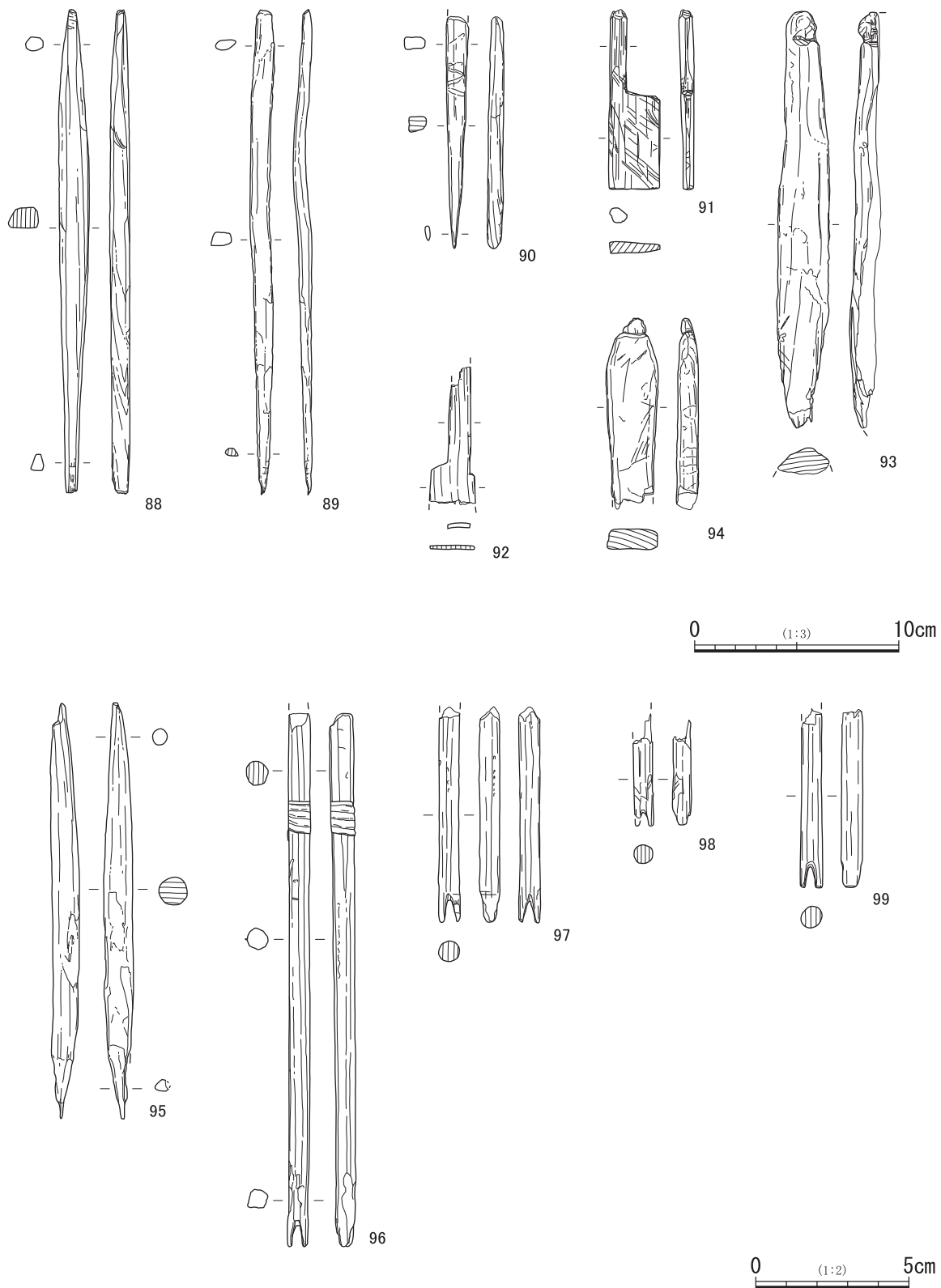
图V-62 木製品等 (13)



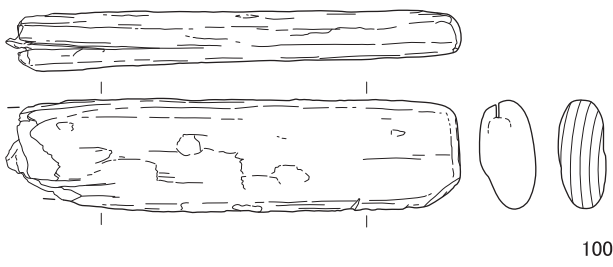
図V-63 木製品等 (14)



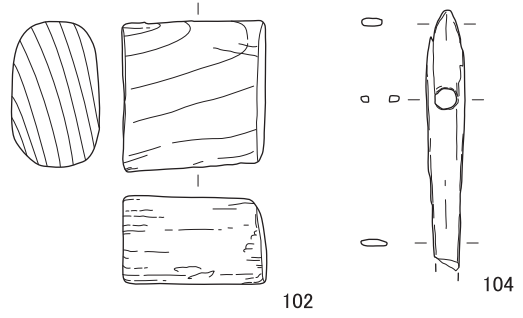
图V-64 木製品等 (15)



图V-65 木製品等 (16)

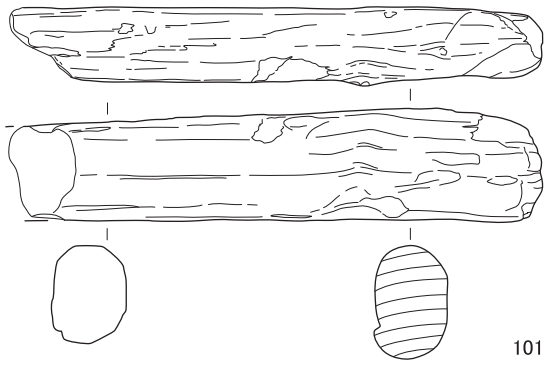


100



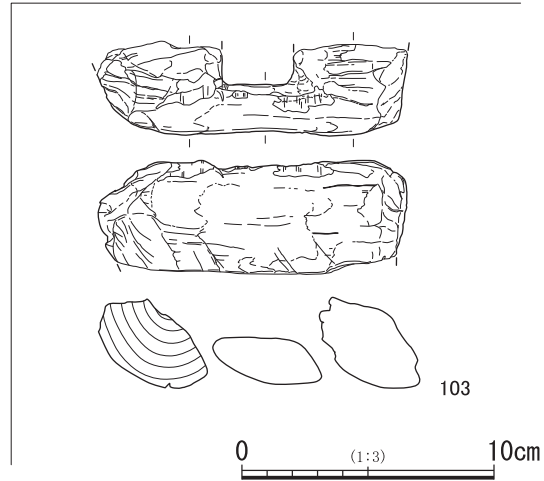
102

104



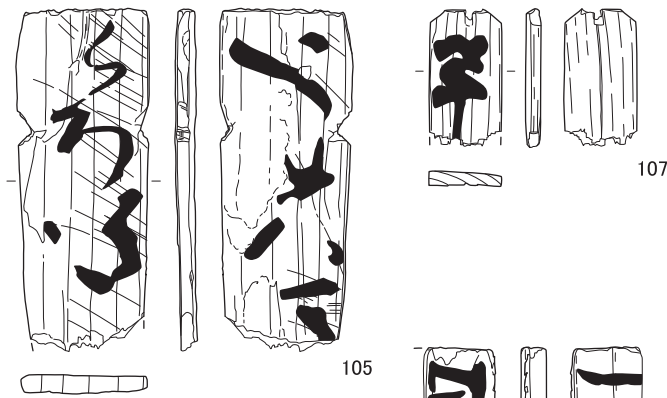
101

0 (1:2) 5cm



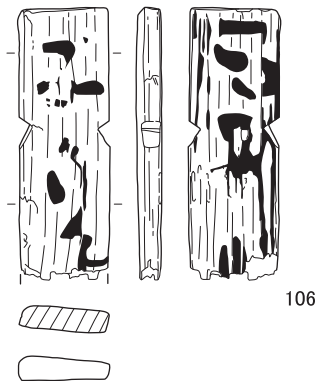
103

0 (1:3) 10cm



105

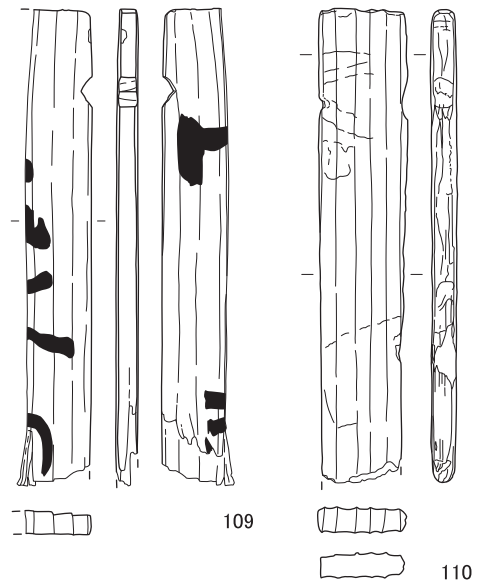
107



106



108



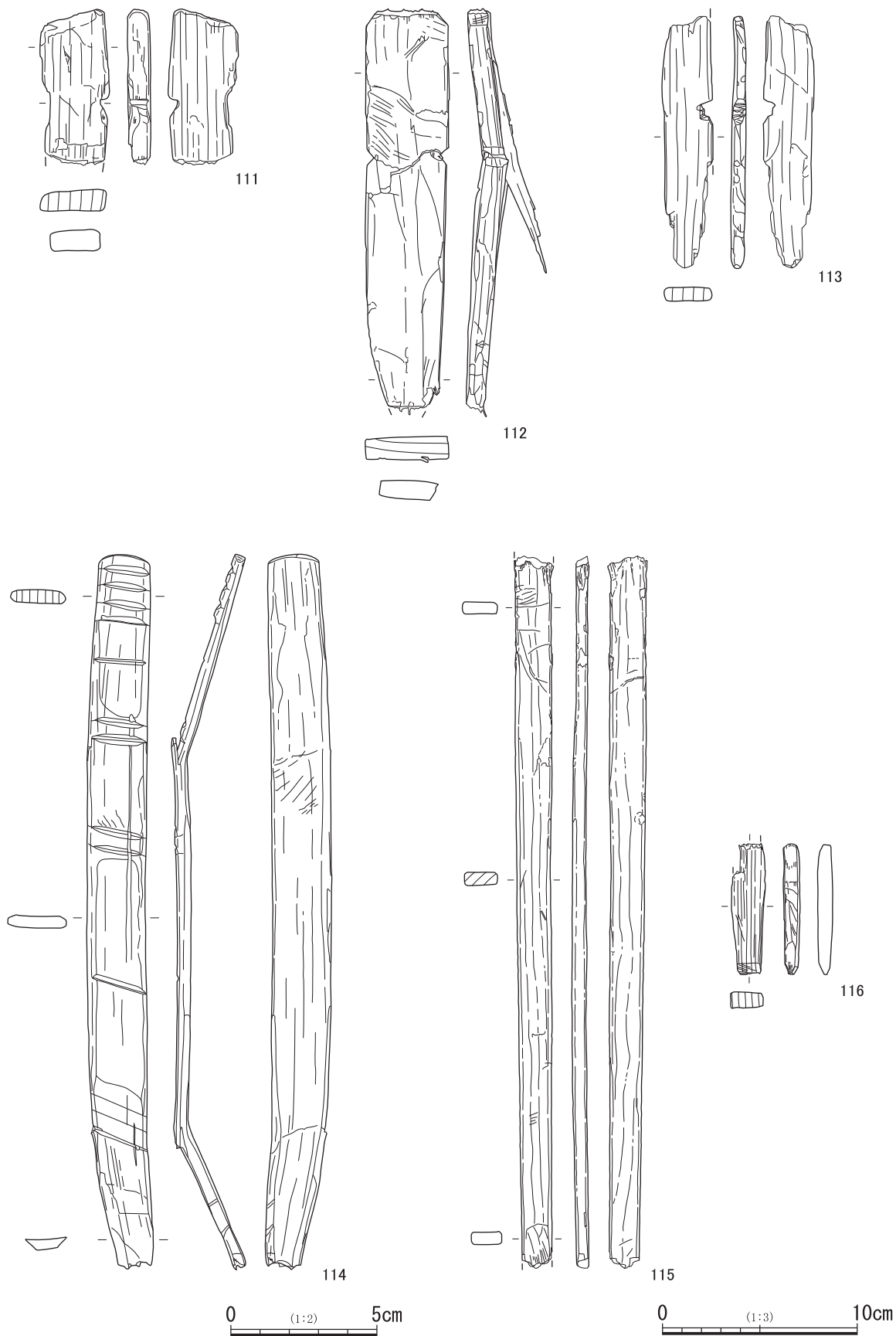
109

110

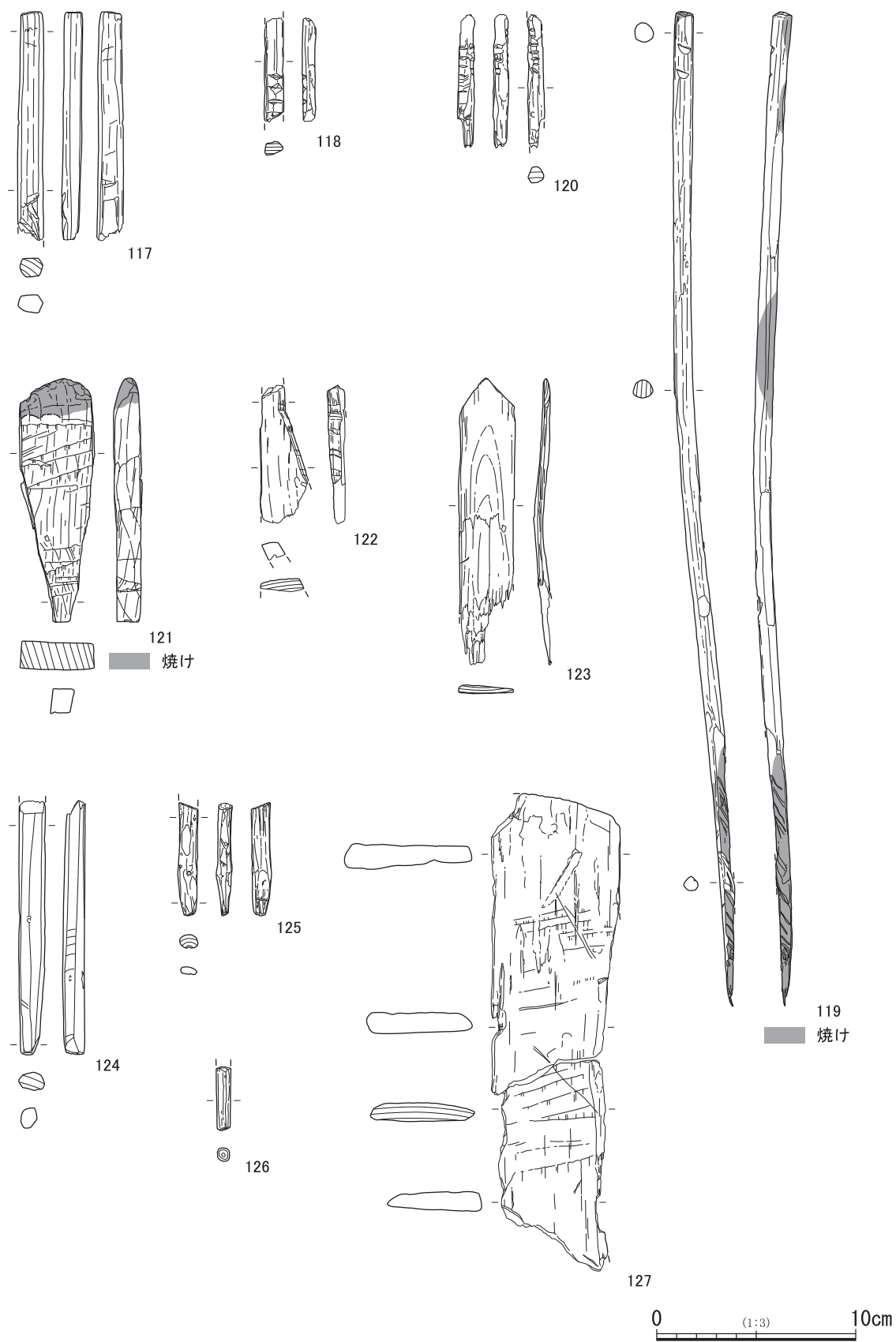
■ 墨書

0 (1:2) 5cm

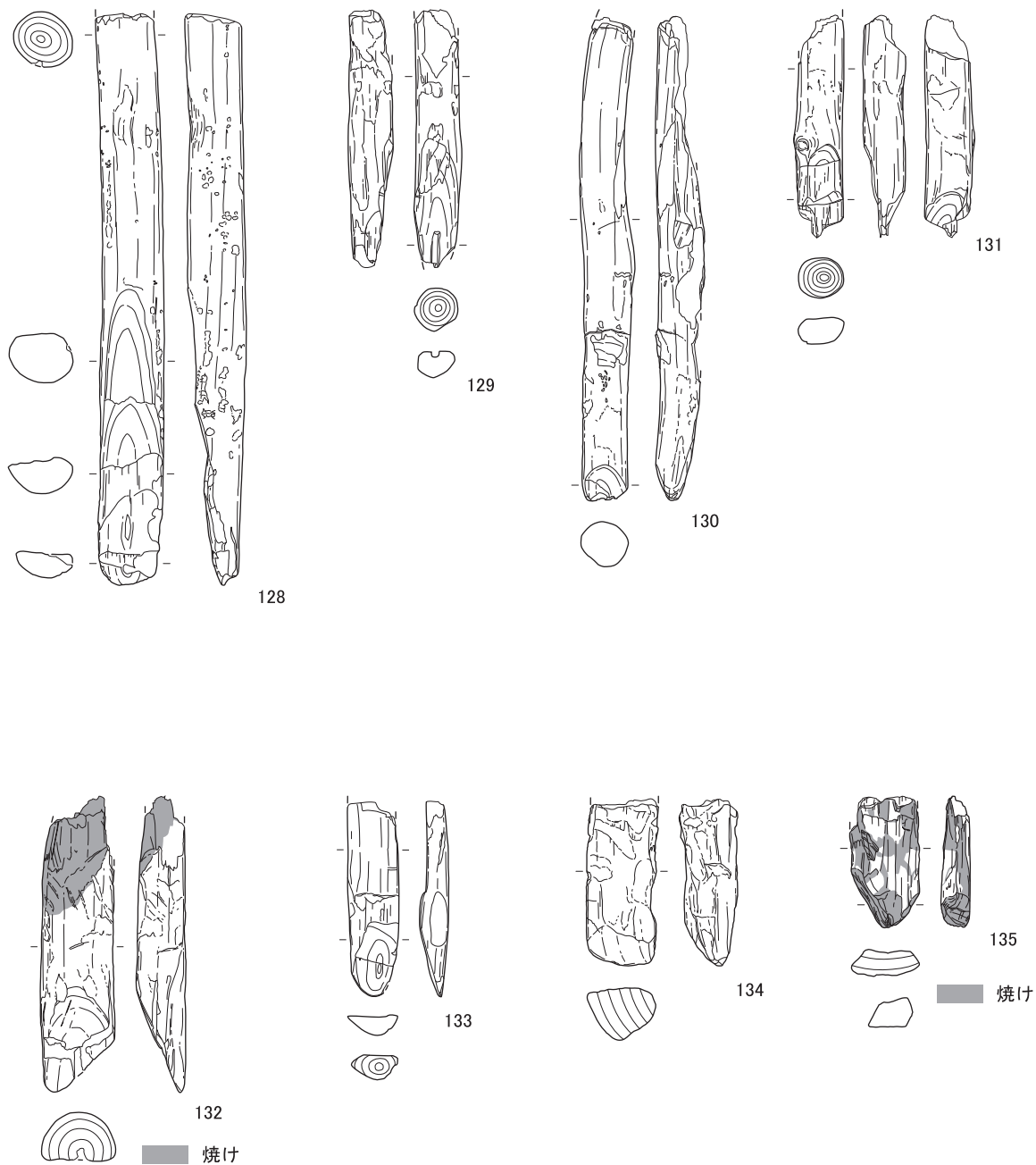
图V-66 木製品等 (17)



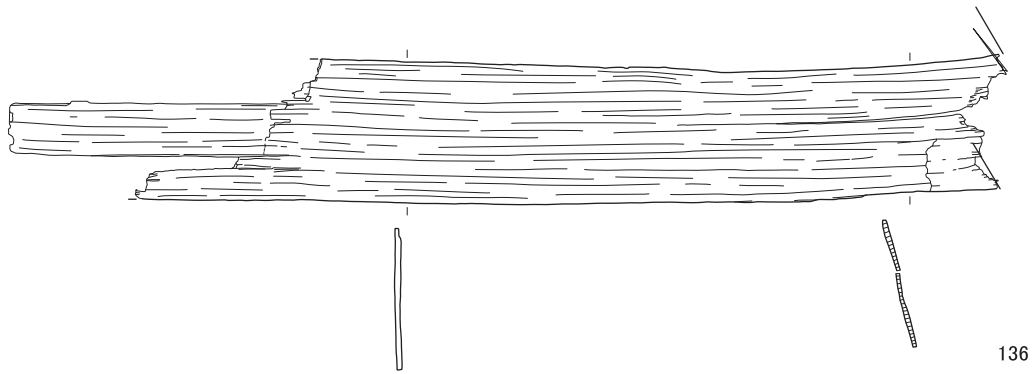
图V-67 木製品等 (18)



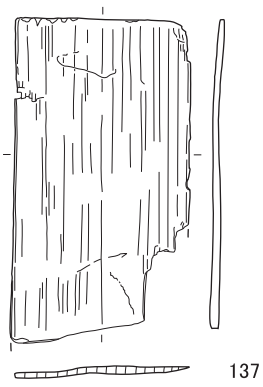
图V-68 木製品等 (19)



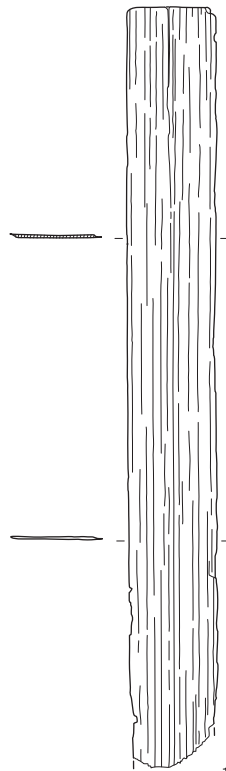
図V-69 木製品等 (20)



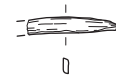
136



137



138

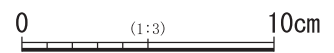


139

E地区11-6

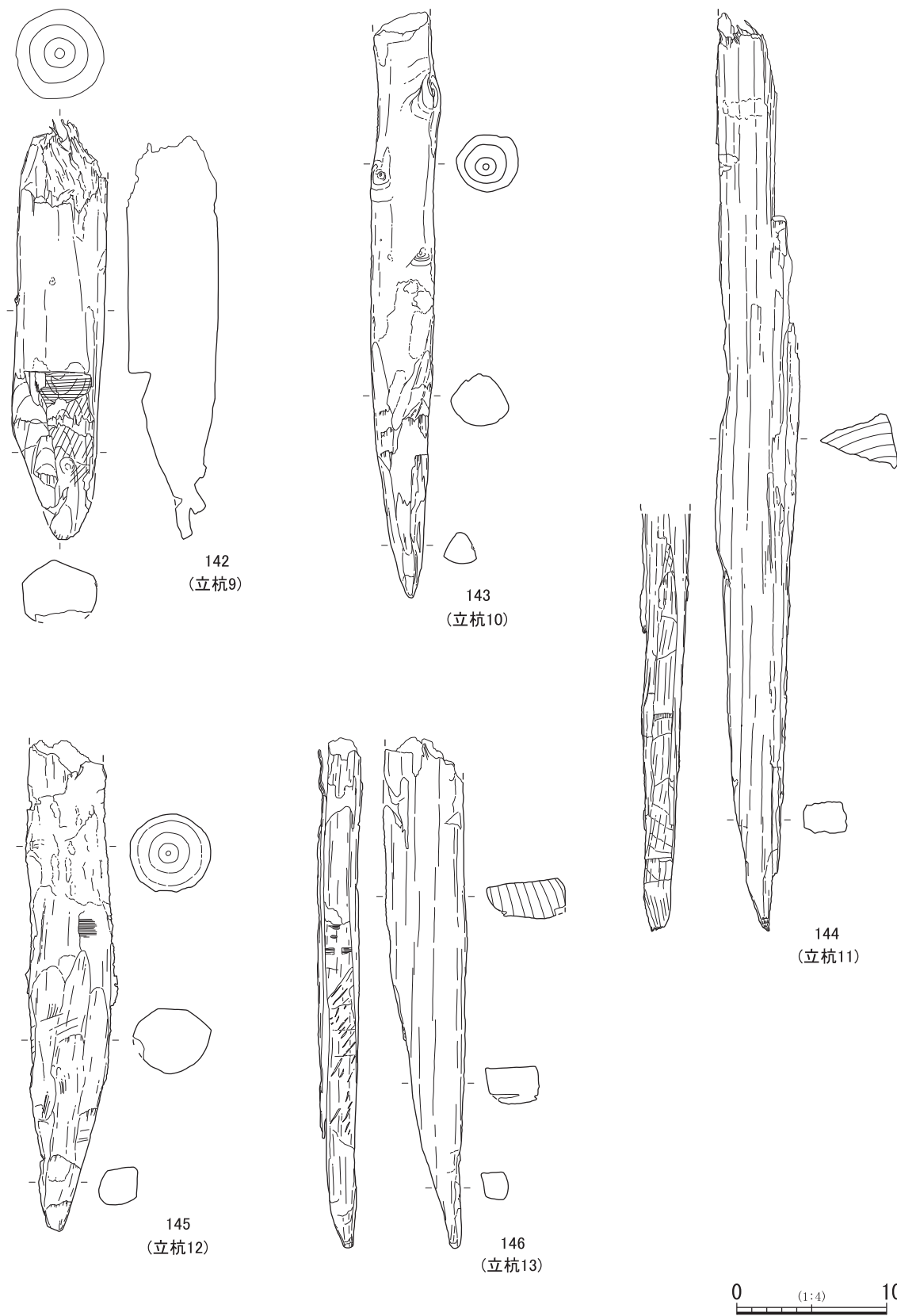


141

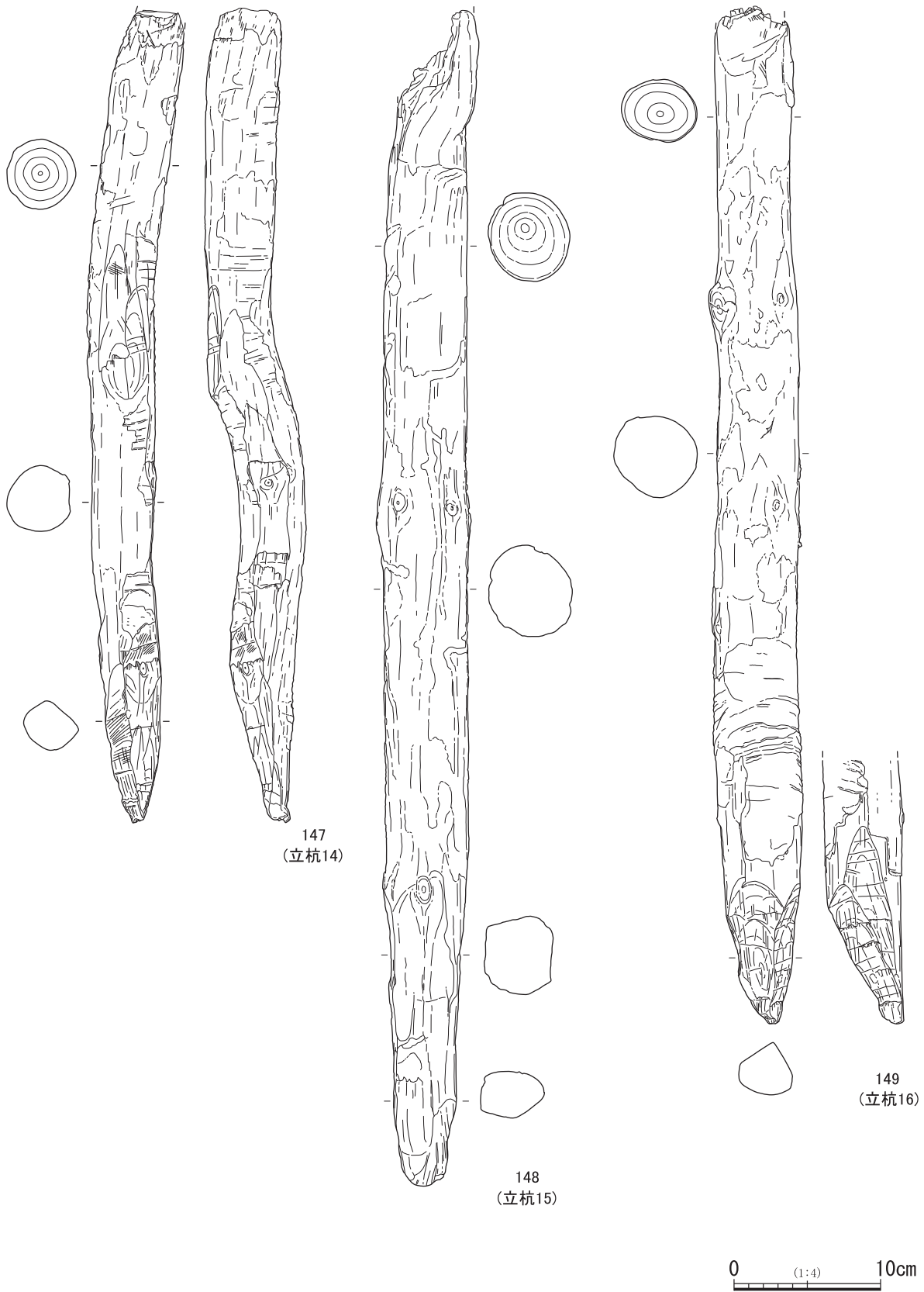


图V-70 木製品等 (21)

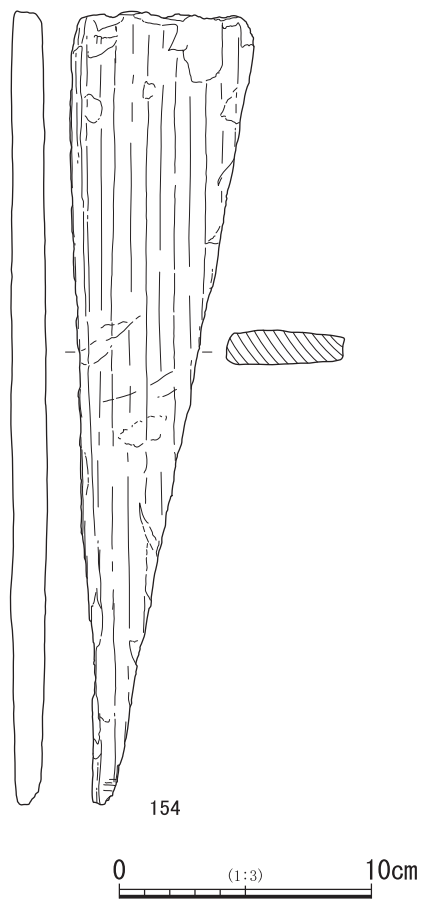
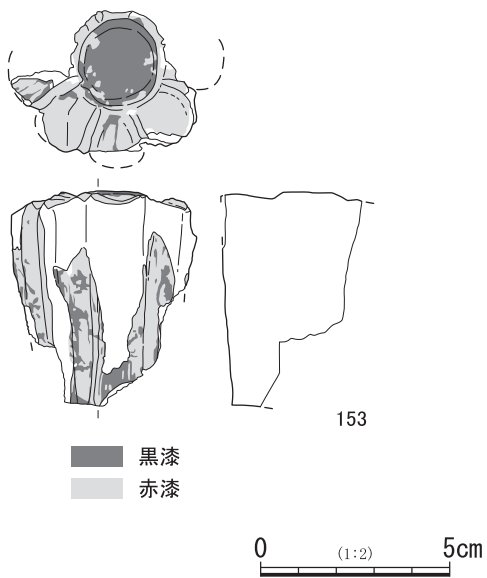
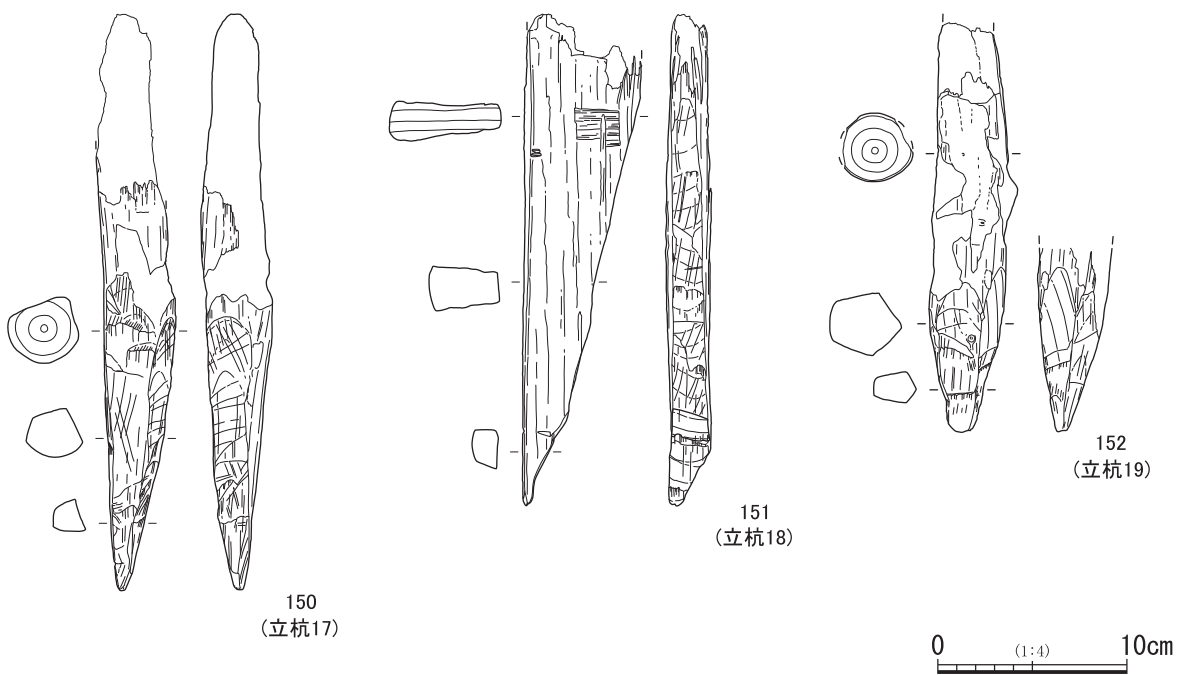
D14-1木製品集中(④14-1地先)



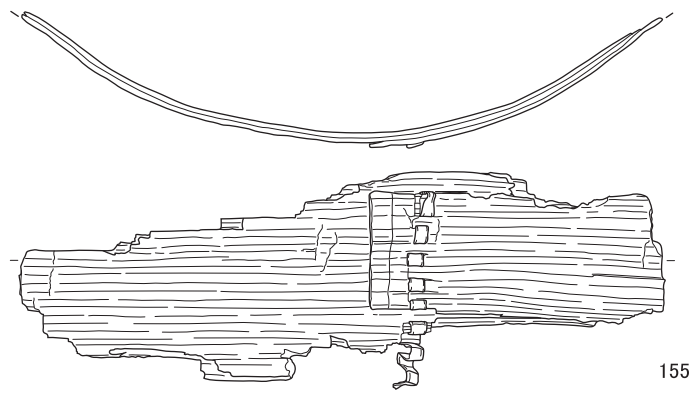
図V-71 木製品等 (22)



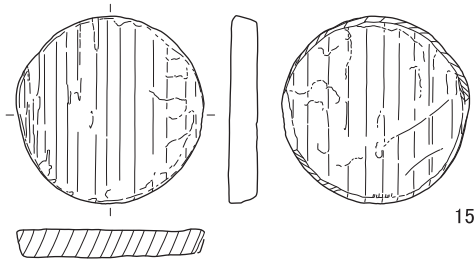
图V-72 木製品等 (23)



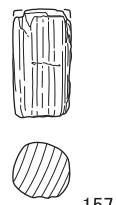
図V-73 木製品等 (24)



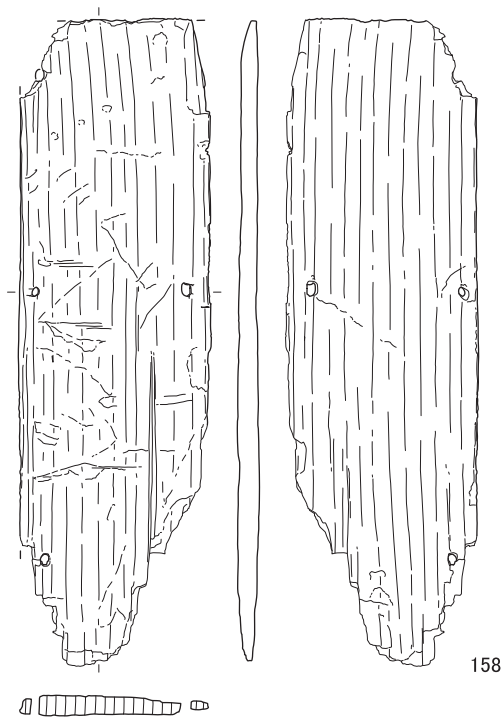
155



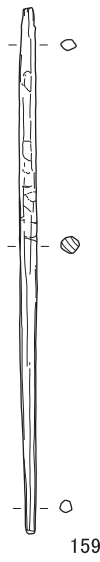
156



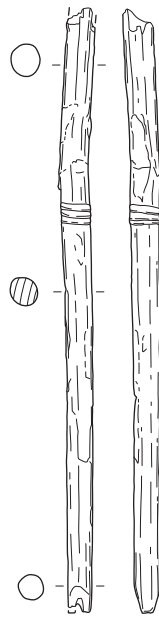
157



158



159

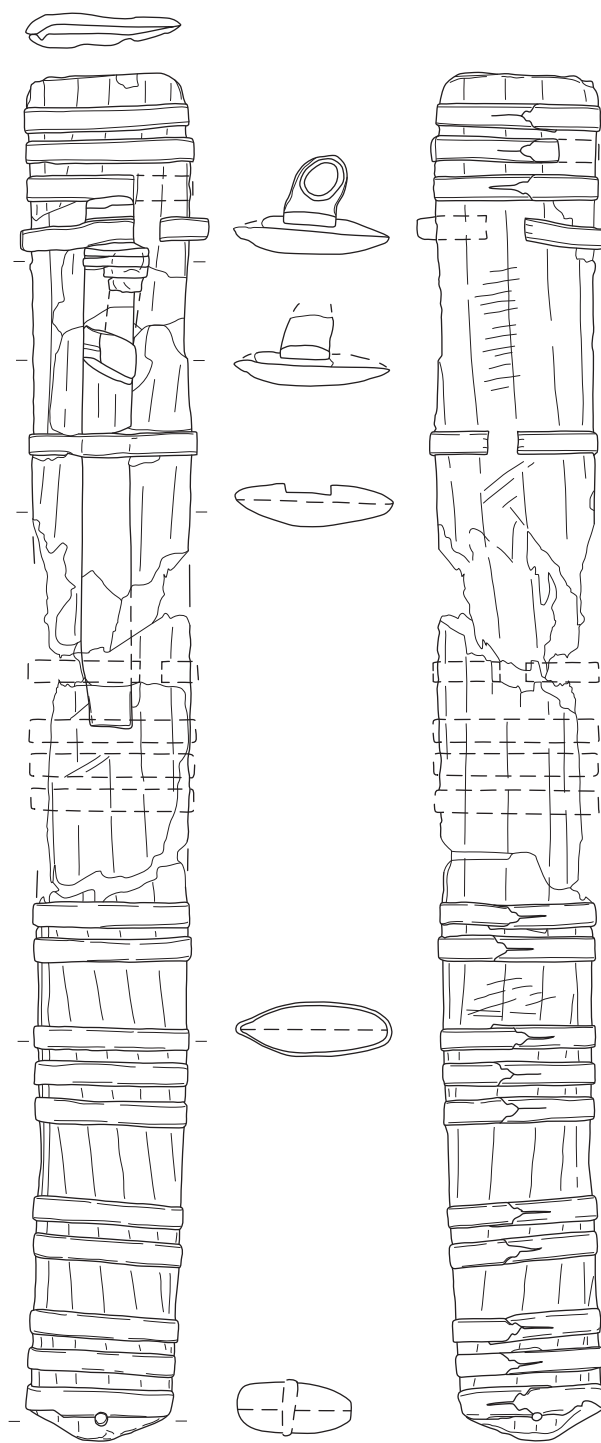


160

0 (1:3) 10cm

0 (1:2) 5cm

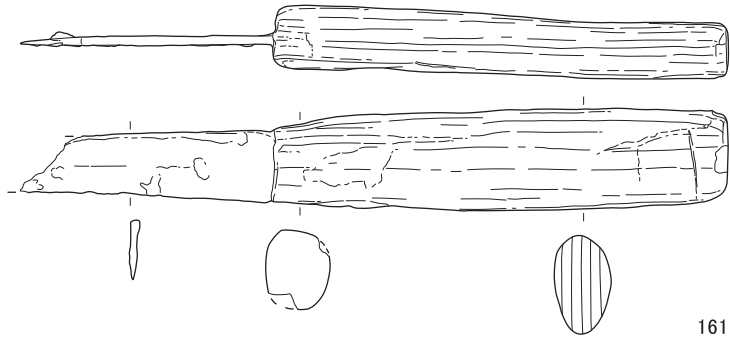
图V-74 木製品等 (25)



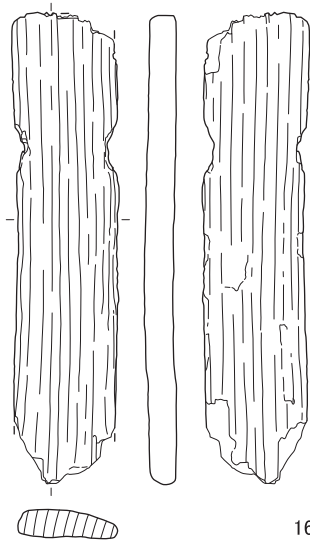
162

0 (1:2) 5cm

図V-75 木製品等 (26)



161



163

0 (1:2) 5cm



164

0 (1:3) 10cm

图V-76 木製品等 (27)

表V-24 掲載木製品等一覧表(1)

※漆塗腕計測値:器高/口径/底径

挿図	掲載番号	図版	名称	地区地番/遺構	遺物番号	層位	点数	木取り	樹種	焼け	樹皮	縮尺	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
V-50	1	41	建材(柱)	D欄1	1	Ⅲ	1	芯持	アスナロ			1/4	32.7	11.8	11.7	
"	2	"	丸杭	D欄1	2	Ⅲ	1	丸木	アスナロ			1/4	23.7	6.2	5.5	
V-51	3	口絵5	漆塗椀	B掘込2	3	Ⅳ	1	横木	ブナ			1/3	14.4	8.6	—	
"	4	42	舷側板	B掘込2	1	Ⅳ	1	榎目	ハリギリ			1/4	32.8	11	2.4	
"	5	"	樽蓋	B掘込2	4	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	13.8	7.1	0.9	
"	6	口絵5	漆塗皿	D13木製品集中	73	Ⅳ	2	横木	ブナ			1/3	9.2	2.1	4.0	
"	7	"	漆塗容器蓋	D13木製品集中	76	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	17.5	7.1	0.8	
"	8	"	漆塗椀	D13木製品集中	74	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	8.3	1.6	0.4	
V-52	9	42	建材(角材)	D13木製品集中	24	Ⅳ	1	榎目	スギ	○		1/3	9.0	6.1	4.0	
"	10	"	丸杭	D13木製品集中	6	Ⅳ	1	丸木	ヤナギ属			1/4	12.3	3.9	3.2	
"	11	"	割杭	D13木製品集中	7	Ⅳ	1	1/6分割	クリ			1/4	19.1	6.5	6.0	
"	12	"	割杭	D13木製品集中	5	Ⅳ	1	芯持	タラノキ			1/4	16.9	4.6	3.2	
"	13	"	割杭	D13木製品集中	8	Ⅳ	1	1/12分割	カエデ属			1/4	17.5	4.8	3.1	
"	14	"	曲物蓋(底)	D13木製品集中	3	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	10.3	9.7	1.0	
"	15	"	曲物蓋	D13木製品集中	10	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	6.7	3.5	0.6	
V-53	16	43	柄杓柄	D13木製品集中	21	Ⅳ	1	追榎	スギ			1/3	14.9	1.5	1.2	
"	17	"	桶側板	D13木製品集中	15	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	15.5	4.4	1.1	
"	18	"	折敷底板	D13木製品集中	16	Ⅳ	3	追榎	スギ			1/3	33.9	10.2	1.6	
"	19	"	箱物部材	D13木製品集中	20	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	15.6	7.8	1.2	
V-54	20	"	箸	D13木製品集中	29	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	24.2	0.7	0.7	
"	21	"	箸	D13木製品集中	28	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	25.7	0.7	0.8	
"	22	"	箸	D13木製品集中	55	Ⅳ	2	半割	カツラ			1/3	27.4	2.1	1.7	
"	23	"	箸	D13木製品集中	58	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	21.5	0.9	1.0	
"	24	"	箸	D13木製品集中	71	Ⅳ	1	榎目	アスナロ			1/3	17.3	0.8	0.7	
"	25	"	連筒下駄	D13木製品集中	1	Ⅳ	1	板目	モクレン属			1/3	17.7	9.8	2.8	
V-55	26	44	織機受糸木	D13木製品集中	4	Ⅳ	2	板目	スギ			1/3	53.3	3.6	1.5	
"	27	"	炉鉤	D13木製品集中	2	Ⅳ	1	榎目	カエデ属	○		1/3	10.6	3.6	2.0	
"	28	"	砥石台	D13木製品集中	9	Ⅳ	1	芯持	アスナロ	○		1/3	9.2	4.2	2.9	
"	29	"	挟付細板	D13木製品集中	18	Ⅳ	2	板目	ヤナギ属			1/3	17.6	1.9	0.9	
"	30	"	木札	D13木製品集中	11	Ⅳ	1	追榎	スギ			1/3	14.5	2.6	0.5	
"	31	"	木札	D13木製品集中	12	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	12.4	2.3	0.8	
V-56	32	"	籠状細板	D13木製品集中	13	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	6.5	2.3	0.6	
"	33	"	有刻細棒	D13木製品集中	22	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	6.9	1.2	0.6	
"	34	"	有刻細棒	D13木製品集中	60	Ⅳ	1	半割	モクレン属			1/3	11.1	2.8	1.7	
"	35	"	割材	D13木製品集中	38	Ⅳ	1	1/16分割	マツ属	○		1/3	14.6	11.0	4.2	
"	36	"	板材	D13木製品集中	30	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	10.9	6.6	1.9	
"	37	"	丸木材	D13木製品集中	32	Ⅳ	1	丸木	モクレン属			1/3	11.9	3.0	3.1	
"	38	"	有孔樹皮	D13木製品集中	49	Ⅳ	1	—	—			1/3	5.2	2.7	0.6	
"	39	"	有孔樹皮	D13木製品集中	48	Ⅳ	1	—	—			1/3	5.8	4.4	0.7	
"	40	"	樹皮卷	D13木製品集中	35	Ⅳ	1	—	—			1/3	0.9	1.4	0.3	
"	41	"	樹皮卷	D13木製品集中	25	Ⅳ	1	—	—			1/3	3.0	6.1	3.0	
"	42	"	樹皮卷	D13木製品集中	26	Ⅳ	1	—	—			1/3	1.8	1.6	1.2	
"	43	"	樹皮卷	D13木製品集中	27	Ⅳ	1	—	—			1/3	0.8	2.0	1.4	
—	44	口絵5	布	D13木製品集中	1(繊維)	Ⅳ	1	—	—			1/3	—	—	—	写真掲載
—	45	"	布	D13木製品集中	2(繊維)	Ⅳ	1	—	—			1/3	—	—	—	写真掲載
—	46	"	布	D13木製品集中	3(繊維)	Ⅳ	1	—	—			1/3	—	—	—	写真掲載
V-57	47	口絵6	漆塗椀	D14-1木製品集中	406	Ⅳ	1	横木	ブナ			1/3	4.8	—	6.5	
"	48	"	漆塗椀	D14-1木製品集中	417	Ⅳ	1	横木	ブナ			1/3	5.8	14.7	7.6	
"	49	"	漆塗椀	D14-1木製品集中	400	Ⅳ	1	横木	ブナ			1/3	4.3	5.5	7.0	
"	50	"	漆塗連筒下駄	D14-1木製品集中	325	Ⅳ	1	横木	モクレン属			1/3	20.3	9.2	5.0	
"	51	"	漆塗板	D14-1木製品集中	414・418	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	25.8	3.4	0.9	
V-58	52	45	舟敷	D14-1木製品集中	350	Ⅳ	1	横木	カツラ			1/12	292.0	38.0	29.0	
V-59	53	46	舟部材	D14-1木製品集中	351	Ⅳ	1	板目	カツラ			1/4	57.0	9.0	3.4	
"	54	"	舟部材	D14-1木製品集中	352	Ⅳ	1	板目	カツラ			1/4	24.0	5.6	3.6	
"	55	"	早櫃	D14-1木製品集中	73	Ⅳ	1	榎目	モクレン属	○		1/4	54.0	6.2	2.2	
V-60	56	47	建材(板材)	D14-1木製品集中	349	Ⅳ	1	板目	アスナロ	○		1/4	65.3	8.9	2.7	
"	57	"	建材(角材)	D14-1木製品集中	203	Ⅳ	1	四方榎	スギ	○		1/4	9.2	12.0	5.0	
"	58	"	丸杭	立杭5	160	Ⅳ	1	丸木	モミ属			1/4	47.9	7.1	7.0	
"	59	48	丸杭	立杭1	353	Ⅳ	1	丸木	モミ属			1/4	66.6	7.2	6.8	
V-61	60	"	丸杭	立杭3	391	Ⅳ	1	丸木	ヤナギ属			1/4	32.8	5.5	5.3	
"	61	"	丸杭	立杭8	355	Ⅳ	1	丸木	ヤナギ属			1/4	18.8	5.7	5.0	
"	62	"	丸杭	D14-1木製品集中	361	Ⅳ	1	丸木	コナラ属			1/4	25.6	4.7	3.1	
"	63	"	丸杭	立杭6	354	Ⅳ	1	芯持	トネリコ属			1/4	27.2	7.3	6.6	
"	64	"	割杭	立杭4	392	Ⅳ	1	1/8分割	トネリコ属			1/4	19.9	4.0	3.1	
"	65	"	割杭	立杭2	390	Ⅳ	1	偏分割	ミズキ属			1/4	15.3	4.4	4.2	
"	66	"	割杭	立杭7	233	Ⅳ	1	偏分割	トネリコ属			1/4	13.2	4.4	4.0	
"	67	"	角杭	D14-1木製品集中	194	Ⅳ	1	四方榎	モクレン属			1/4	9.5	3.9	3.5	
V-62	68	49	曲物把手	D14-1木製品集中	33	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	10.9	25.4	1.9	
"	69	"	曲物把手	D14-1木製品集中	324	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	5.5	18.3	1.6	
"	70	"	曲物蓋(底)	D14-1木製品集中	283	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	9.3	9.5	1.0	
"	71	"	曲物蓋(底)	D14-1木製品集中	71	Ⅳ	1	追榎	スギ			1/3	9.8	4.2	0.9	
V-63	72	"	桶側板	D14-1木製品集中	183	Ⅳ	1	板目	アスナロ			1/3	16.4	4.7	1.3	
"	73	"	樽蓋(底)	D14-1木製品集中	39	Ⅳ	1	板目	スギ	○		1/3	20.5	5.0	1.5	
"	74	"	樽栓	D14-1木製品集中	10	Ⅳ	1	1/12分割	スギ			1/3	6.9	2.9	2.0	
"	75	"	樽栓	D14-1木製品集中	35	Ⅳ	1	1/8分割	スギ			1/3	4.4	2.5	2.1	
"	76	50	箱物部材	D14-1木製品集中	70	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	21.7	7.4	0.9	墨
"	77	"	箱物部材	D14-1木製品集中	328	Ⅳ	1	板目	スギ	○		1/3	35.6	4.3	0.9	
V-64	78	"	箱物部材	D14-1木製品集中	112	Ⅳ	1	板目	スギ			1/3	8.6	3.1	0.8	
"	79	"	箱物部材	D14-1木製品集中	6	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	10.5	9.8	1.4	
"	80	"	箱物部材	D14-1木製品集中	8	Ⅳ	1	榎目	スギ			1/3	7.2	3.2	0.4	
"	81	"	箱物部材	D14-1木製品集中	106	Ⅳ	1	追榎	スギ			1/3	17.9	2.9	1.2	
"	82	"	箱物部材	D14-1木製品集中	189	Ⅳ	1	板目	スギ	○		1/3	8.0	1.5	1.5	

表V-25 掲載木製品等一覧表 (2)

挿図	掲載番号	図版	名称	地区地番/遺構	遺物番号	層位	点数	木取り	樹種	焼け	樹皮	縮尺	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考	
V-64	83	50	箸	D14-1木製品集中	222	IV	1	榎目	スギ	○		1/3	8.6	0.7	0.7		
"	84	"	箸	D14-1木製品集中	104	IV	1	榎目	アスナロ			1/3	24.8	0.9	1.1		
"	85	"	箸	D14-1木製品集中	30	IV	1	板目	スギ			1/3	24.0	0.7	0.8		
"	86	"	箸	D14-1木製品集中	63	IV	1	板目	スギ			1/3	24.7	0.9	0.7		
"	87	"	箸	D14-1木製品集中	202	IV	1	榎目	スギ			1/3	23.0	0.8	0.7		
V-65	88	"	串	D14-1木製品集中	62	IV	1	榎目	スギ			1/3	23.7	1.5	1.0		
"	89	"	串	D14-1木製品集中	103	IV	1	榎目	スギ	○		1/3	23.8	1.2	0.9		
"	90	"	串	D14-1木製品集中	102	IV	1	板目	スギ			1/3	11.4	1.1	0.8		
"	91	"	板材加工品	D14-1木製品集中	193	IV	1	榎目	スギ			1/3	8.8	2.5	0.7		
"	92	"	板材加工品	D14-1木製品集中	187	IV	1	榎目	スギ			1/3	6.7	2.2	0.3		
"	93	51	浮子	D14-1木製品集中	61	IV	1	板目	アスナロ			1/3	20.4	2.6	1.5		
"	94	"	浮子	D14-1木製品集中	228	IV	1	追榎	カエデ属			1/3	9.4	2.5	1.1		
"	95	"	矢中柄	D14-1木製品集中	109	IV	1	板目	アジサイ属			1/2	13.6	1.0	0.9		
"	96	"	矢柄	D14-1木製品集中	235	IV	1	榎目	モミ属			1/2	17.4	0.8	0.9		
"	97	"	矢柄	D14-1木製品集中	96	IV	1	榎目	スギ			1/2	7.0	0.7	0.7		
"	98	"	矢柄	D14-1木製品集中	221	IV	1	榎目	モミ属			1/2	3.6	0.6	0.6		
"	99	"	矢柄	D14-1木製品集中	229	IV	1	榎目	アスナロ			1/2	5.8	0.7	0.7		
V-66	100	"	刀子柄	D14-1木製品集中	197	IV	1	板目	アスナロ			1/2	3.0	12.0	1.6		
"	101	"	刀子柄	D14-1木製品集中	243	IV	1	1/16分割	カエデ属			1/2	3.0	14.1	2.1		
"	102	"	刀子柄	D14-1木製品集中	231	IV	1	榎目	モクレン属			1/2	3.8	4.0	2.3		
"	103	"	縦樋頭部	D14-1木製品集中	423	IV	1	1/6分割	ブナ			1/3	3.8	12.2	4.5		
"	104	"	竹針	D14-1木製品集中	69	IV	1	-	タケ亜科			1/2	6.8	1.0	0.2		
"	105	"	木札	D14-1木製品集中	97	IV	1	榎目	スギ			1/2	9.1	3.5	0.6	墨書	
"	106	"	木札	D14-1木製品集中	120	IV	1	追榎	スギ			1/2	7.2	2.4	0.7	墨書	
"	107	"	木札	D14-1木製品集中	223	IV	1	追榎	スギ			1/2	3.6	1.9	0.4	墨書	
"	108	"	木札	D14-1木製品集中	236	IV	1	追榎	スギ			1/2	11.7	1.9	0.7	墨書	
"	109	"	木札	D14-1木製品集中	237	IV	1	榎目	スギ			1/2	12.6	2.0	0.6	墨書	
"	110	"	木札	D14-1木製品集中	364	IV	1	榎目	スギ			1/2	12.5	2.4	0.7		
V-67	111	52	木札	D14-1木製品集中	34	IV	1	榎目	スギ			1/2	5.3	2.4	0.8		
"	112	"	木札	D14-1木製品集中	176	IV	2	板目	スギ			1/2	13.9	2.8	0.8		
"	113	"	木札	D14-1木製品集中	66	IV	1	榎目	スギ			1/2	8.6	1.7	0.5		
"	114	"	棒箸箸	D14-1木製品集中	200	IV	1	榎目	ヒノキ科			1/2	24.5	2.0	0.5		
"	115	"	籠状細板	D14-1木製品集中	380	IV	1	追榎	スギ			1/3	36.5	2.0	0.9		
"	116	"	籠状細板	D14-1木製品集中	186	IV	1	榎目	スギ			1/3	6.7	1.8	0.9		
V-68	117	"	有刻細棒	D14-1木製品集中	111	IV	1	榎目	スギ			1/3	11.5	1.3	1.0		
"	118	"	有刻細棒	D14-1木製品集中	108	IV	1	板目	ハリギリ			1/3	5.2	1.0	0.7		
"	119	"	有刻細棒	D14-1木製品集中	363	IV	1	榎目	カツラ	○		1/3	50.1	3.1	1.9		
"	120	"	有刻細棒	D14-1木製品集中	191	IV	1	板目	アジサイ属			1/3	6.7	0.8	0.8		
"	121	"	板状製品	D14-1木製品集中	319	IV	1	榎目	アスナロ	○		1/3	12.3	3.8	1.5		
"	122	"	板状製品	D14-1木製品集中	99	IV	1	板目	クリ			1/3	6.9	2.4	0.9		
"	123	"	板状製品	D14-1木製品集中	110	IV	1	板目	スギ			1/3	14.4	2.8	0.8		
"	124	"	棒状製品	D14-1木製品集中	300	IV	1	榎目	サクラ属			1/3	12.7	1.3	1.1		
"	125	"	棒状製品	D14-1木製品集中	114	IV	1	半割	ハコヤナギ属			1/3	5.7	1.0	0.8		
"	126	"	棒状製品	D14-1木製品集中	190	IV	1	丸木	環孔材			1/3	3.2	0.7	0.8		
"	127	53	板材	D14-1木製品集中	7	IV	2	板目	スギ			1/3	6.5	24.0	1.3		
V-69	128	"	丸木材	D14-1木製品集中	95	IV	1	丸木	カエデ属			1/3	25.4	3.1	2.7		
"	129	"	丸木材	D14-1木製品集中	195	IV	1	丸木	トネリコ属			1/3	11.4	2.1	2.0		
"	130	"	丸木材	D14-1木製品集中	201	IV	1	丸木	モクレン属			1/3	21.5	2.5	2.2		
"	131	"	丸木材	D14-1木製品集中	232	IV	1	丸木	ヤナギ属			1/3	9.7	2.2	1.9		
"	132	"	割材	D14-1木製品集中	301	IV	1	半割	ミズキ属	○		1/3	13.2	3.3	2.2		
"	133	"	割材	D14-1木製品集中	101	IV	1	偏分割	ハコヤナギ属			1/3	8.6	2.4	1.3		
"	134	"	割材	D14-1木製品集中	321	IV	1	1/12分割	ハシドイ属			1/3	7.4	3.2	2.6		
"	135	"	割材	D14-1木製品集中	67	IV	1	板目	カエデ属	○		1/3	5.8	3.1	1.3		
V-70	136	"	薄榎目板	D14-1木製品集中	385	IV	1	榎目	スギ			1/3	5.8	39.7	2.3		
"	137	"	薄榎目板	D14-1木製品集中	94	IV	1	榎目	スギ			1/3	12.9	7.1	0.5		
"	138	"	薄榎目板	D14-1木製品集中	93	IV	1	榎目	スギ			1/3	30.2	3.6	0.1		
"	139	"	細帯状薄皮	D14-1木製品集中	68	IV	1	-	-	○		1/3	0.7	3.6	0.2		
-	140	"	縄	D14-1木製品集中	1(繊維)	IV	1	-	-			1/3	69.7	1.0	-	写真掲載	
V-70	141	"	有孔材	E地区11-6	1	III	1	板目	-			1/3	2.5	4.1	1.5		
V-71	142	54	丸杭	立杭9	16	IV	3	丸木	モミ属			1/4	28.0	6.4	6.1		
"	143	"	丸杭	立杭10	17	IV	1	丸木	ブナ	○		1/4	39.1	4.7	4.0		
"	144	"	割杭	立杭11	18	IV	1	1/12分割	コナラ属			○	1/4	61.5	5.7	3.8	
"	145	"	丸杭	立杭12	19	IV	3	丸木	モクレン属	○		1/4	32.8	6.2	5.3		
"	146	"	割杭	立杭13	20	IV	5	板目	コナラ属	○		1/4	34.1	5.7	3.0		
V-72	147	"	丸杭	立杭14	39	IV	1	丸木	ハコヤナギ属	○		1/4	55.5	6.6	6.9		
"	148	55	丸杭	立杭15	40	IV	1	丸木	マツ属			1/4	80.4	6.0	6.3		
"	149	"	丸杭	立杭16	41	IV	1	丸木	モクレン属	○		1/4	69.6	6.5	5.5		
V-73	150	"	丸杭	立杭17	71	IV	1	丸木	コナラ属	○		1/4	30.5	4.2	3.8		
"	151	"	割杭	立杭18	72	IV	2	板目	コナラ属	○		1/4	26.1	6.3	2.4		
"	152	"	丸杭	立杭19	73	IV	1	丸木	カエデ属	○		1/4	21.7	4.7	4.1		
"	153	口絵6	漆塗飾部	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	68	IV	6	丸木	ハコヤナギ属			1/2	5.5	3.9	3.8		
"	154	56	板材	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	30	IV	1	榎目	ヒノキ科			1/3	31.9	7.1	0.9		
V-74	155	"	曲物側板	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	65	IV	56	榎目	スギ			1/3	8.6	25.6	5.4		
"	156	"	曲物蓋(底)	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	66	IV	1	榎目	スギ			1/3	7.4	7.4	1.1		
"	157	"	樽栓	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	98	IV	1	榎目	スギ			1/3	4.0	2.5	2.0		
"	158	"	箱物部材	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	67	IV	1	榎目	スギ			1/3	25.7	7.7	0.9		
"	159	"	箸	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	23	IV	1	板目	スギ			1/3	20.9	0.7	0.5		
"	160	"	矢柄	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	43	IV	2	榎目	スギ			1/2	16.0	1.0	1.0		
V-76	161	57	刀子	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	21	IV	2	板目	ヒノキ科			1/2	18.7	2.7	1.9		
V-75	162	"	刀鞘	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	64	IV	1	榎目	モクレン属			1/2	36.2	5.0	2.9		
V-76	163	"	木札	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	42	IV	1	榎目	スギ			1/2	12.3	2.7	0.5		
"	164	"	有孔細板	D14-1木製品集中(㉔D14-1地先)	22	IV	1	板目	カエデ属			1/3	14.3	2.5	1.4		

表V-26 木製品等樹種別集計表

名称	モミ属	マツ属	スギ	アスナロ	ヒノキ科	コナラ属	クリ	ハリギリ	タラノキ	トネリコ属	珪孔材	ヤマギ属	ハコヤナギ属	ブナ	カツラ	モクレン属	アシサイ属	サクラ属	カエデ属	ミズキ属	ハンドイ属	タケ亜科	総計
漆塗桶														4									4
漆塗皿														1									1
漆塗容器蓋			1																				1
漆塗			1																				1
漆塗車歯下駄																1							1
漆塗板																							1
漆塗飾部													1										1
舟敷															1								1
舟部材															2								2
舷側板								1															1
早瀬																1							1
建材(柱)				1																			1
建材(角材)				2																			2
建材(板材)																							1
丸杭	3	1		1		2				1		3	1	1		2			1				16
角杭																1							1
割柱						3	1		1	2									1	1			9
曲物側板				1																			1
曲物把手				2																			2
曲物蓋(底)				5																			5
薄柱目板				3																			3
補側板				1																			2
樽蓋(底)				2																			2
樽栓				3																			3
箱物部材				9																			9
折敷底板				1																			1
箆				8	2										1								11
串				3																			3
柄杓柄																							1
連櫛下駄				1												1							1
織機受糸木				1																			1
弓鉤																			1				1
浮子				1															1				2
砥石台				1															1				1
矢中柄																	1						1
矢柄				2	1																		5
刀子																				1			1
刀子柄				1															1				3
総廻頭部																							1
竹針																						1	1
木札				12																			12
樽酒蓋																							1
徳状細板				3																			3
有刃細棒				2											1								6
板状製品				1																			3
板材加工品				2																			2
板材				2																			3
割材																							5
丸木材										1													1
棒状製品																							5
有孔細板																							3
扱付細板																							1
総計	5	2	69	11	3	5	2	2	1	4	1	5	4	7	5	11	2	1	8	2	1	1	152

6 石製品

石製品は、硯、火打石、石臼、砥石、有孔礫、凹石、切石、削器、二次加工剥片、磨製石斧、琥珀、不明石製品が合計で34点出土した。砥石が13点で最も多い。削器、二次加工剥片、磨製石斧は縄文時代または続縄文時代の石器である。

硯

1は長方硯の破片で、角は面取りされている。硯縁は墨池側（硯首）が広い。墨堂には鋒鋨と呼ばれる微小な突起があり、ぶつぶつとした触感がある。部分的に薄く墨が残る。硯背は墨堂の裏が浅くくぼんだ覆手で、中央に「赤」とみられる文字が刻まれる。石材は泥岩とみられ、にぶい赤褐色を呈する。硯背の特徴等から赤間硯の可能性ある（日田市教育庁2015）。2の硯面は剥離しており、墨池の一部が残存する。硯背には覆手があり、煤けた部分がある（網伏せ部分）。3は長方硯の破片であろうか。角は面取りされており、両面とも長軸の一端側がやや薄くなる。表面には同じ幅の縁が器体を囲うように付く。裏面の縁は表面より広く、長軸方向にだけ付く。長軸方向の縁は、両面とも外側が面取りされている。2・3の石材は泥岩とみられる。

火打石

4は長軸両端に剥離痕が見られ、表裏は自然面、両側面は折れ面である。石質は瑪瑙である。

石 臼

5の臼面は中央部がわずかにふくらんでおり、下臼の破片かもしれない。芯棒孔は方形のようで、一部が残存する。目立ては8分画で、主溝間には副溝が7、8本切られている。石材は安山岩とみられる。

砥 石

6は角砥石である。正面には長軸にやや斜交する溝が目立つ。裏面には敲打による凹みが複数見られ、端部付近に鉄さびが付着する（網伏せ部分）。7は直方体の礫を使用したもので、中央部が浅くくぼむ。図示していないが、左側面の正面側が帯状に煤けている。8は扁平な砥石で、砥面がつるつるしていることから、仕上砥の破片とみられる。裏面には薬研彫りの溝が見られる。9は直方体に近い礫を使用したもので、全体的にやや煤けている（網伏せ部分）。図の下端は両面が剥離されている。裏面には大きな剥離面が2枚あり、一方は砥面として使用される。この砥面には、点状の使用痕のまともりも見られる。石材はいずれも凝灰岩である。

有孔礫

10はD土坑2から出土した。棒状礫の一端に貫通孔があり、両主面等に敲打痕が見られる。石材は安山岩である。11は転礫の中央から一端に抜ける貫通孔がある。石材は凝灰岩である。

凹 石

12は楕円体状の礫にすり鉢状の穿孔痕が見られる。穿孔は両面で3か所を数え、正面上部のものが大きい。裏面上部の浅い溝に右手人差指を当てると握りやすい。裏面の一部が擦れている。石材は凝灰岩である。縄文時代の石器ではないが、便宜的に凹石の名称を使用した。

切 石

13の正面中央部には、ノミによるハツリが密集する。ハツリの方向は、破損部の近くが図の左から右へ、それ以外が右から左である。正面外縁部は3～4cmの幅で研磨されており、両側面との境は面取りされている。両側面は平滑に仕上げられており、図上端の側面下部にはハツリが残る。正面のハツリと比べて、裏面のハツリは溝が大きく、ハツリ同士の間隔も空いている。裏面と両側面との間は面取りされていない。敷石のようなものかと思われる。石材は緑色凝灰岩で、笏谷石の可能性が高

い。旧蔵町の調査（北埋調報290）では、笏谷石とみられる石廟の屋根（図V-5-7-29）や縁石が出土している。

磨製石斧

14の平面は撥形で、基部の横断面は長方形に近い。全面が研磨されている。刃部は両刃で、刃縁は弧状を呈する。石材は泥岩である。

琥珀

15は写真のみ掲載した（口絵7上段）。④14-1地先で、木製品等とともに出土している。風化面と破碎面からなる。なお、旧蔵町の調査（北埋調報290）では、琥珀玉1点が報告されている（図V-5-6-27）。

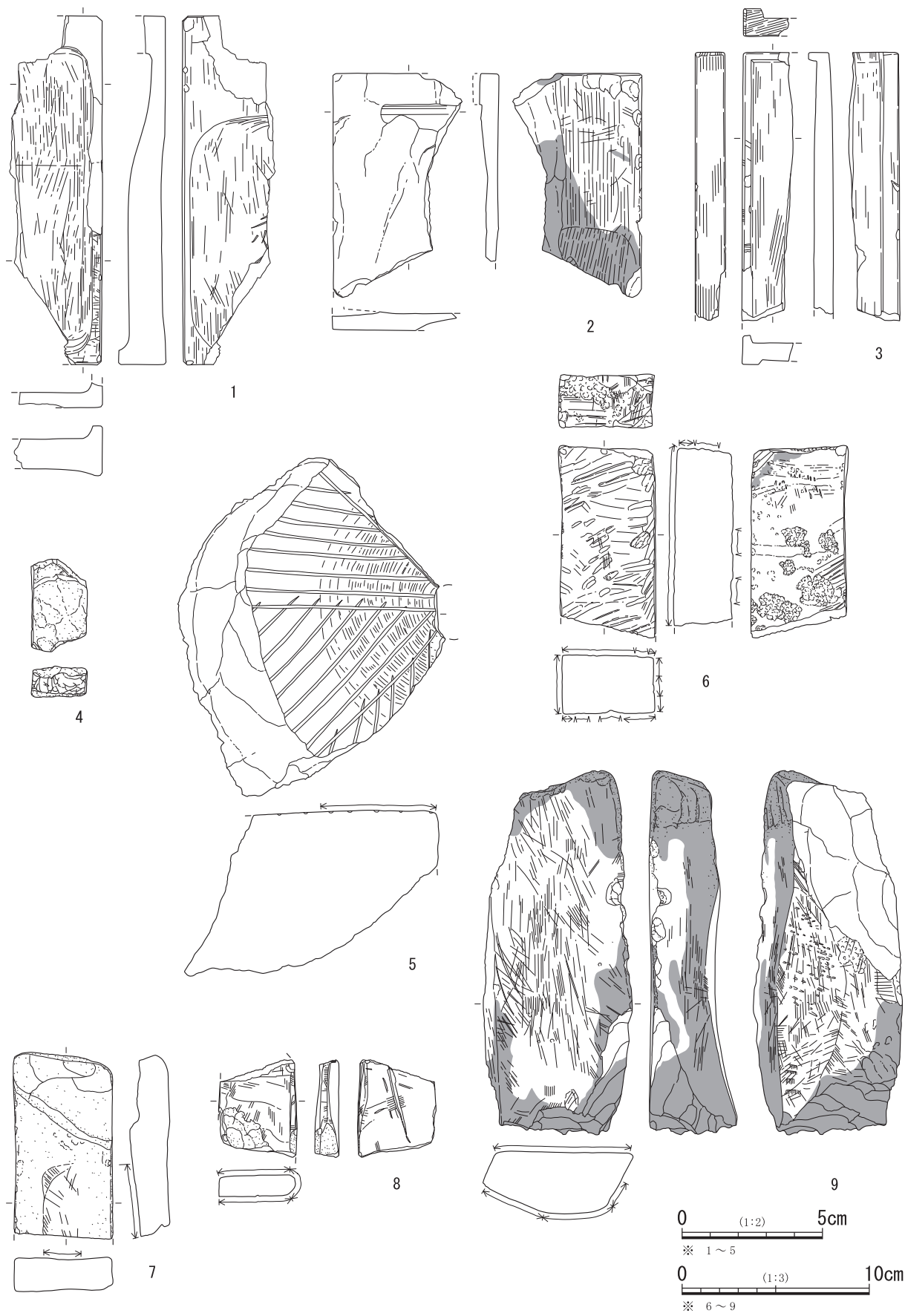
（山中）

表V-27 石製品集計表

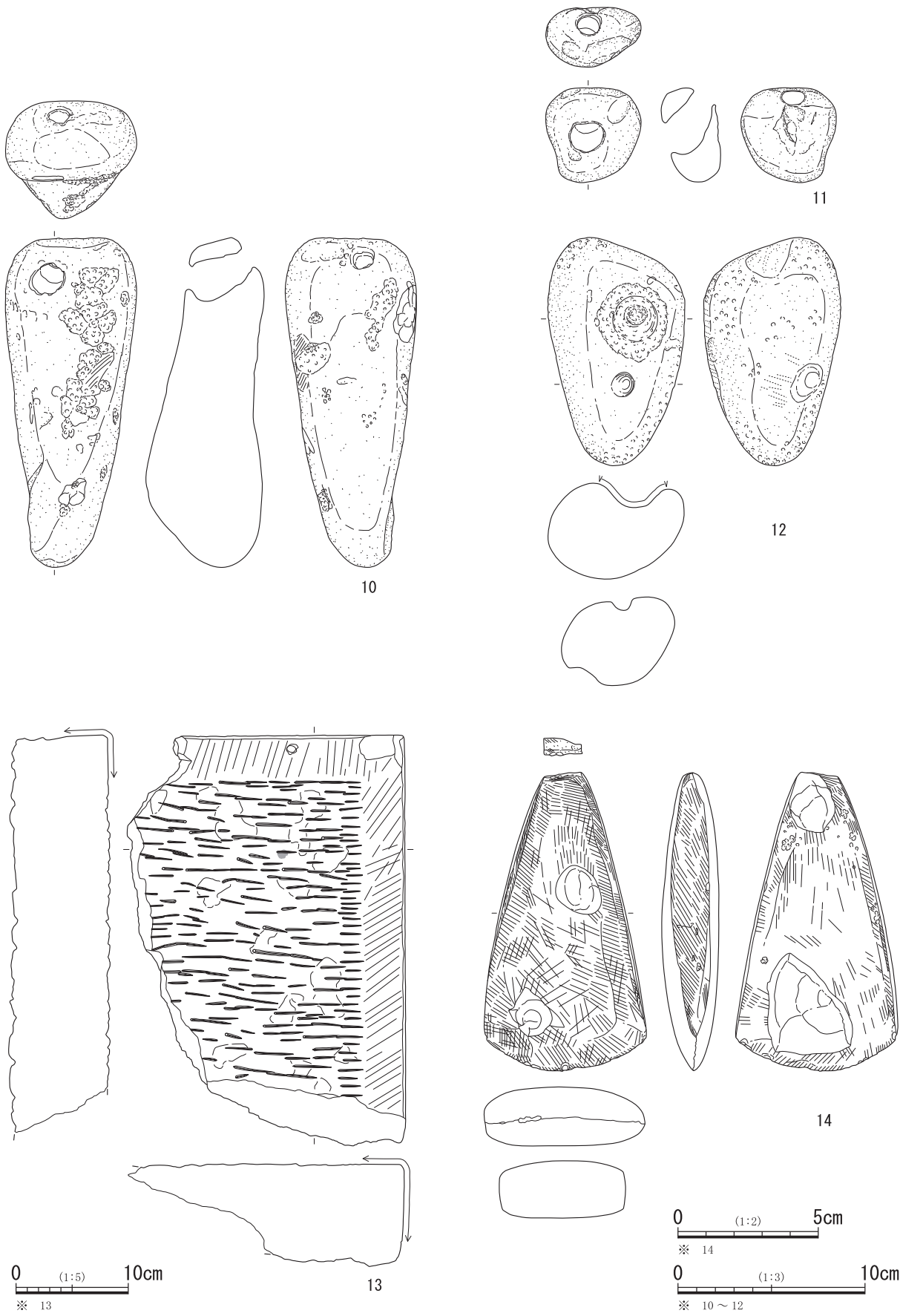
地区	地番	遺構	層位	硯	火打石	石臼	砥石	有孔礫	凹石	切石	削器	二次加工 剥片	磨製石斧	琥珀	不明	合計	
B	-		I・II	1		1	4				1	1				8	
	89	B掘込1	覆土				1									1	
	13		III	1												1	
D	13	木製品集中	IV				2	1	1				1			5	
	14-1	D掘込2B	覆土				1								1	2	
	14-1		III2b		1											1	
	14-1		III上P-A	1												1	
	14-1	木製品集中	IV				2									2	
	14-1		IV				3				1					4	
	15-2	D土坑2	坑底					1								1	
E	10-5		IV	1												1	
③	18-1地先		IV			1										1	
④	14-1地先	木製品集中	IV											1		1	
	15-3地先		II		1											1	
⑥	12	D火事場穴1	覆土							2					1	3	
	12		III上面	1												1	
合計					5	2	2	13	2	1	2	2	1	1	1	2	34

表V-28 掲載石製品一覧表

挿図	掲載 番号	図版	遺物名	地区地番/遺構等	遺物 番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
V-77	1	58	硯	③12	1	III上面	12.5	(3.3)	1.7	70.3	泥岩	
"	2	"	硯	D13	1	III	(8.0)	(4.6)	(0.7)	23.2	泥岩	
"	3	"	硯	E10-5	1	IV	(9.5)	(1.8)	1.1	25.9	泥岩	
"	4	"	火打石	D14-1	3	III2b	3.3	2.0	1.1	10.5	瑪瑙	
"	5	"	石臼	③18-1地先	1	IV	(12.1)	(9.5)	(7.5)	616	安山岩	
"	6	"	砥石	B89/B掘込1	1	覆土	(10.2)	5.3	3.2	281.7	凝灰岩	
"	7	"	砥石	D14-1/木製品集中	4	IV	(9.9)	5.4	2.2	162.4	凝灰岩	
"	8	"	砥石	D13/木製品集中	5	IV	(5.2)	4.2	1.3	37.6	凝灰岩	
"	9	"	砥石	D13/木製品集中	4	IV	19.5	8.0	4.7	755	凝灰岩	
V-78	10	"	有孔礫	D15-2/D土坑2	1	坑底	17.6	7.0	6.3	655	安山岩	
"	11	"	有孔礫	D13/木製品集中	6	IV	5.0	5.1	3.2	63.9	凝灰岩	
"	12	"	凹石	D13/木製品集中	3	IV	12.2	7.4	5.1	375.8	凝灰岩	
"	13	"	切石	⑥12/D火事場穴1	2	覆土	(36.6)	(24.8)	(9.2)	9.7(kg)	緑色凝灰岩	笏谷石
"	14	"	磨製石斧	D13/木製品集中	2	IV	10.6	5.8	2.1	179.6	泥岩	
-	-	口絵7	琥珀	④14-1地先/木製品集中	1	IV	(2.4)	(1.3)	(1.2)	1.5	琥珀	



図V-77 石製品 (1)



図V-78 石製品 (2)

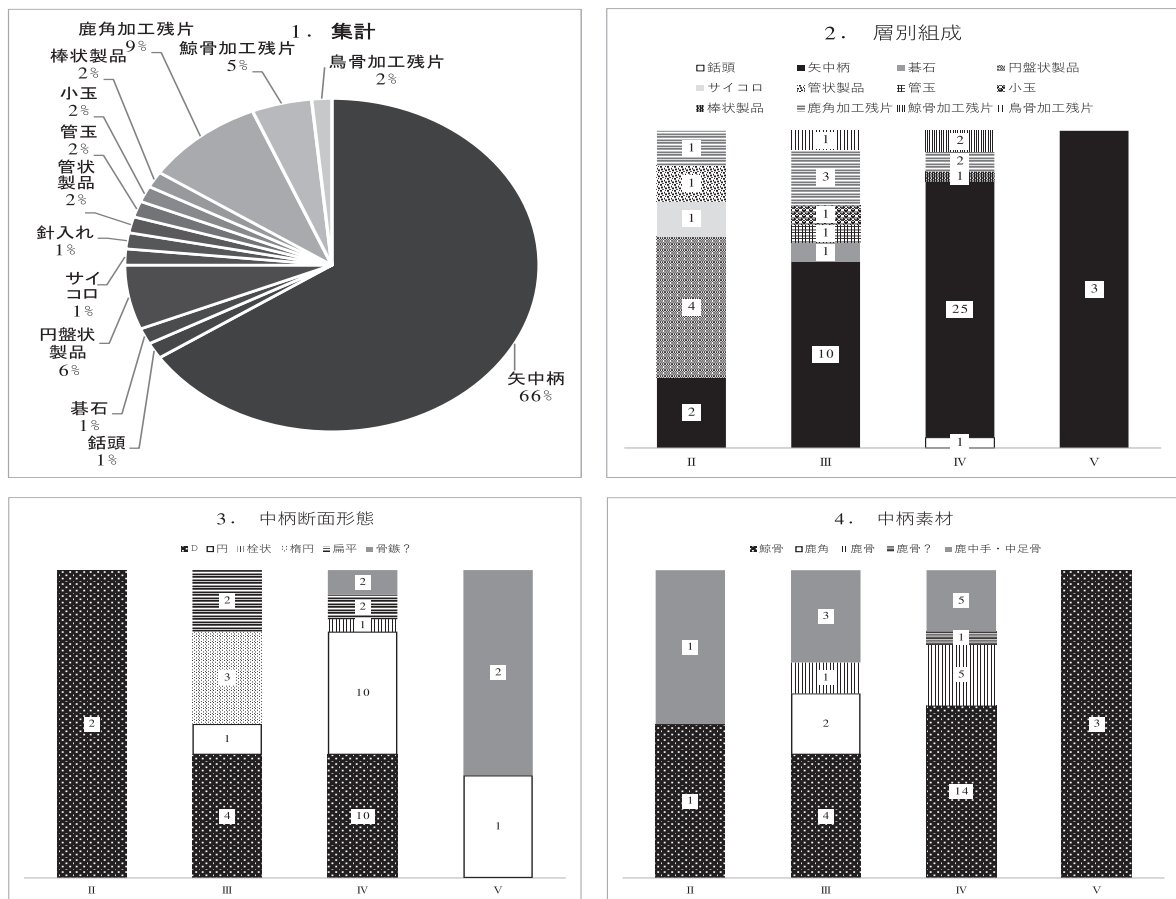
7 骨角貝製品

今回の調査では、64点の骨角器が出土した（図V-79-1）。そのうち31点を図示、記載した。

中柄が最も多く、全体で42点検出された。中・近世併行期における骨角器利用において、中柄がいかに重要であったかが反映されている。断面形態を見ると、D字形、円形が大半で、円形が古く、D字形が新しい要素の可能性がある（図V-79-3）。素材は、シカ中手・中足骨製とクジラ骨製がおよそどの時期も半々となるようである（図V-79-4）。また、銚頭片が1点得られたが、開窩式（茎溝式）の最終段階を示すものである。

層ごとの組成変遷（図V-79-2）をみると、時期が新しくなるにつれて中柄の組成率が下がるように見える。また数は少ないが、II～IV層ともに加工残片が含まれ、骨角器加工がおこなわれるような地点であったことがうかがわれる。

円盤状製品は、1点は貝製の基石とみられるが、ほかは正体不明の骨製品である。II層に集中する点から、和人が残したものと考えられる。サイコロは北海道では余市町大川遺跡出土に次ぐもので、これも骨製品である。



図V-79 骨角貝製品関連グラフ

銚頭

1はIV層出土の鹿角製縦二索孔開窩式（茎溝式）銚頭の破片とみられる。型式の存続時期からすると、中世並行期とみられる。開窩の周囲を巡らせた締着溝のための段差は丁寧に作られている。窩部分の加工は不明瞭であるが、下の索孔より少し下位までは僅かな横側方向の段が見られ、そこまで窩が達していた可能性はある。素材自体の組織構造は、表面は円形構造の集合がみえ、内部は細かな泡状ないし針状の結晶の集合にみえる。

矢中柄（骨鏃含む）

2～6はシカ骨製品。4は部位不明であるが、ほかは独特な骨内外の溝状形態が残るため中手骨ないし中足骨製とみられる。素材自体の組織構造は、焼けた骨の断面を見ると、微細なオステオンの連続がみえる。また、風化部分では平行な層板もみえる。

2は基部側を残すもの。茎部は段により明瞭に画される。茎部の基端側3分の2は黒色になっており、当時使用された接着剤の影響かもしれない。

3～5は全体の様子分かる遺存度のもの。3は先端を欠く。5に類似するが全体に断面D字状となる。茎部と胴部は円錐状に削ることで画している。表面に藍鉄鉱が付着している。4も先端をやや欠く。風化によって全体に表面が荒れている。断面基部側3分の1は三角形状だが、残る先端側はD字状となる。茎部とは不明瞭な段で画している。先端には鏃装着部が残る。5はほぼ完全品で、先端を僅かに欠く。断面三角形状を呈し、茎部を段で画す。先端は素材由来の溝のある面を削ぐことで断面D字状とし、鏃装着部を形成している。器面には金属器による稜の明瞭な削り痕が残される。

6は未成品とみられる。全体に削り痕が粗々しく残されており、茎部の境界も不明瞭。面に対し、素材由来の溝が斜めになったり、捻れていたりするので、途中で放棄したものと思われる。

7～10は一面に海綿質が広くみられるもので、シカ角製品と骨製品が含まれる。8は素材に髓腔を中心とした同心円の層状構造と連続したオステオンが確認されるので骨製とみられる。7も不明瞭ながら層状構造がみられるが、骨製品なのかシカ角製品なのか見分けがつかない。骨表面側の加工状況からするとシカ角製かもしれない。9・10は骨のような層状構造がみられない。横断面でオステオンの集合、縦断面では葉状骨の集合に見える。風化している場合、横断面では細かな泡状構造、縦断面では細かな結晶の集合中に小単位の層板が散在するようにみえることからシカ角製品とみられる。

7は完形品。断面は楕円形状を呈し、茎部は両側面と海綿質の残る面を段で画す。先端は海綿質が残る面を削ぐことで薄くし、さらに僅かな皿状のくぼみとし、鏃装着部を形成している。器面の側面～海綿質の残る面には金属器による稜の明瞭な細長い削り痕が残される。素材表面が部分的に残る面は細かな単位の削り痕が残る。8は茎部基端を欠く。断面は楕円形状を呈し、茎部は両側面と素材表面が残る面を段で画す。先端は海綿質が残る面を削ぐことで鏃装着部を形成している。海綿質が残る面の胴部では髓腔面がみられる。素材表面が残る面では、異なる成分による「エナメル質」のような層が認められる。9は両端を欠くも、両側面に段を入れて茎部とする部分は残る。胴部も主な加工は両側面で、「背面」には素材表面の皺が残り、「腹面」全面に海綿質が残る。断面は楕円形。先端側には縦方向の剥離が残され、欠損は使用の結果かもしれない。10は先端部を欠く。断面楕円形。「背面」は平滑に調整されている。「腹面」は膨らみをもつ面で、中央全面に海綿質が残される。茎部は両側面と「腹面」を削って、先細にしてある。

11～18はクジラ骨製とみられる。素材自体の構造は、径の大きな管腔が多い網目状の構造となる。

11～14の断面は胴部では円形～隅丸方形で、先端では楕円形～レンズ状～D字状に整えられるもの。基部を12～14は明瞭に段で画されるが、11はやや不明瞭。11は茎部の大半を欠く。先端部は寸詰まりで丸く整えられ、断面は鈍いレンズ状。胴部の断面が円形～ややにぶいD字状なのは、稜線が少し残るため。茎部の段差は14よりは不明瞭。12・13は完形品だが、12は先端を僅かに欠く。先端部は一面を斜めに削いで広い平坦面とし、断面D字状にしてある。胴部は削りの稜線が明瞭ながら、断面円形にしてある。茎部の段差は明瞭で、その先は円錐形にされる。14は先端と基部端を僅かに欠く完形品。表面には藍鉄鉱が付着する。先端部は断面レンズ状で、先より2cm程度まで表面が平滑で光沢をもつ。胴部は断面円形状で、表面に削りによる稜線が不明瞭に残るものの、全体に紡錘状に整えられている。

茎部は段差が明瞭になるよう画されており、その先は円錐状に整えられる。

15・16は先端側がやや平坦で断面レンズ状、胴部も平坦なもの。茎部の境界も明瞭ではない。15は先端部と茎部端を僅かに欠く完形品。表面は全体を丁寧削り、稜線が目立たなくされている。胴部断面が円形で11～14に類似するが、茎部は徐々に円錐形に整えるだけで画されてはいない。先端側は両側縁に稜を持つ断面レンズ状で、表面の光沢も強い。16は茎部端を欠く。全体に平坦で、表面の加工は丁寧だが、部分的に粗整形時の打割痕が残るため胴部断面は三角形を呈する。茎部は徐々に円錐形に整えるだけで画されてはいない。先端側は両側縁に稜を持つ断面レンズ状で、先端は尖らずに台形状になって、先端部に小さな面を持つ。これらは骨鏃かもしれない。

17・18は各々個性的な形態をしたもの。あるいは骨鏃か。17は茎部端を僅かに欠く完形品。栓状のように、先端部が平坦にされてある。折り取られたようではないので、意図的に削って整えたものとみられる。したがって中柄ではないかもしれない。胴部は削りの稜線が明瞭ながら、断面円形にしてある。茎部は僅かに段差を作り、その先は円錐形にされる。18は茎部の大半を欠くが、両側に非対称の段差を設けている。胴部は楕円形で、先端側は扁平かつ両側縁を徐々に細長い面とし、表裏面には不明瞭な稜が付される。先端は両側縁から段を入れて凸状に整えている。断面は方形。凸の先端は鈍い八状に整形される。

円盤状製品（基石ほか）

19は貝製品で、基石とみられる。表面の研磨された面に浮かび上がった成長線は、透明な部分や薄い赤褐色を呈する部分がある。裏面はほとんどが風化し、僅かに成長線がみられる。断面は扁平で、レンズ状を呈さない。状況から一般的素材であるハマグリ製とみられる。

20～23は骨製品とみられる。素材の構造を実体顕微鏡で見ると、同心円状の薄い層状構造にオステオンが散在するように見える。特に22ではオステオンの集積が明徴に確認できる。したがって、ウシの骨素材の可能性もある（奈良ほか1999）。整形はいずれも平面正円にされ、直径は20～21mm。断面は長方形で、厚さ3～6mmと幅がある。

20は穿孔され、完成品とみられる。直径19.79～20.09mm。厚さは6.02mm。孔の直径は2.31～2.52mm。表面はやや風化するが、各面とも平滑であったとみられる。21は無穿孔品だが、各面とも滑らかに平滑にされ、完成品と思える。直径21.21～21.52mm。厚さは5.38mm。22も無穿孔品だが、各面とも滑らかに平滑にされ、完成品と思える。直径21.19～21.48mm。厚さは3.53mmと薄い。23も無穿孔品とみられるが、被熱により表面は黒褐色、内部は黒色に変色している。各面とも滑らかに平滑にされ、完成品と思える。直径20.94mm。厚さは3.23mmと薄い。これらは平面正円で、直径20～21mmと同一のものに見えるが、4点中穿孔品は1点、厚さは6mm台1点、5mm台1点、3mm台2点と多様性を示す。

サイコロ

24は骨製サイコロとみられる。10.35mm前後四方に整えられている。「・」は直径4mmの窪みを回転によって作り出す。ほかの数字部分は直径2mm前後。表面はよく磨かれて光沢をもつが、点の配置にばらつきがあり、製品というよりは、自家製とみられる。素材骨組織構造は、三～四の面において同心円状の弧状かつ葉状の組織がみられる。

針入れ

25は鳥骨製品で、恐らくアホウドリの上腕骨を素材にしている。断片ながら、表面に彫刻が施されている。一辺に切断面を残しており、摩耗していることから、製作途中で割れたのではなく、成品が壊れた破片とみられる。

管状製品

26は鹿角製品で、表面に線刻で模様が刻まれている。小刀の鞘装飾ではなかったかと考えている。被熱によって表面は白色化し、内部は黒色化している。

管 玉

27は鳥骨製品で、恐らくアホウドリの橈骨を素材にしている。表面はよく研磨され光沢をもっており、切断面もよく摩耗している。

小 玉

28は骨製品で、平面に微細なオステオンが連続的に見える。1面の孔周辺には、穿孔時の加工具先端のズレで生じたC字状の溝が残る。この面は古い面らしく切断痕は不明瞭であるが、部分的に切断時に生じた段差が残されている。もう1面では鋸による切断痕と、その際に生じた小さな「バリ」が残されている。側面は風化したようで、特段の加工痕跡は残されないが、エッジに切断時に鋸の刃が当たった痕跡がみられる。

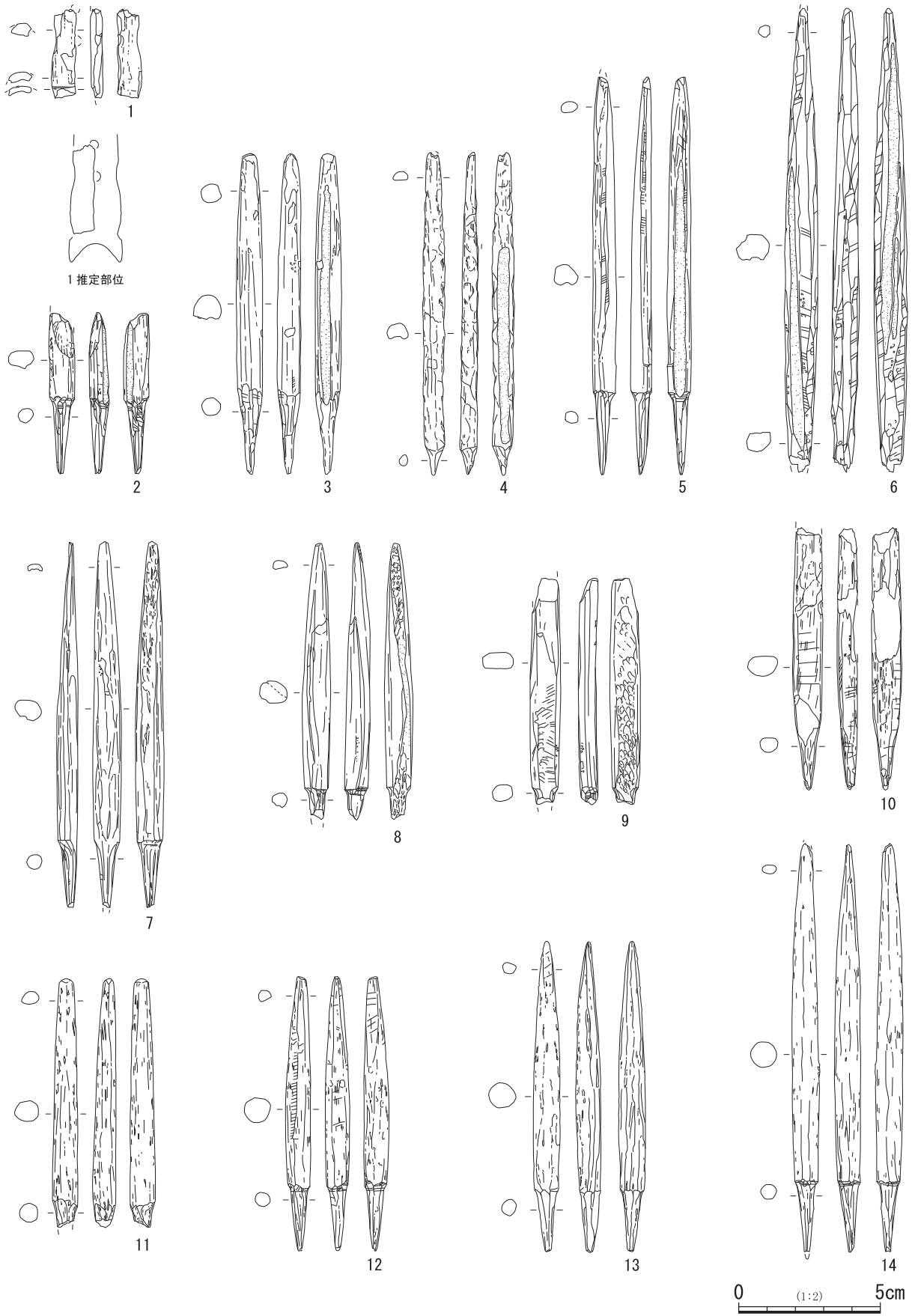
鹿角加工残片

29～31が該当する。29は鋸により横分割後、さらに鋸で縦分割された二次素材。一端に残された折断面は一度鋸で切れ目を入れたうえでなされておき、製品のための原材として用意されたものかもしれない。角表面側では凹凸を削って平滑にしようとした痕跡が残るが、全ての凹凸を削るまでには至っていない。海面質側は削りによって広く平滑な面となっている。30は粗く分割されていた枝角部分を押し削りによって分割した残片。あるいは「整形部」と「持ち手部」に区分されたうえで、残された「持ち手部」かもしれない。31は鋸によって横分割された角尖部。先端付近の凹凸が摩耗した部分は、シカ生存時の活動によるもの。

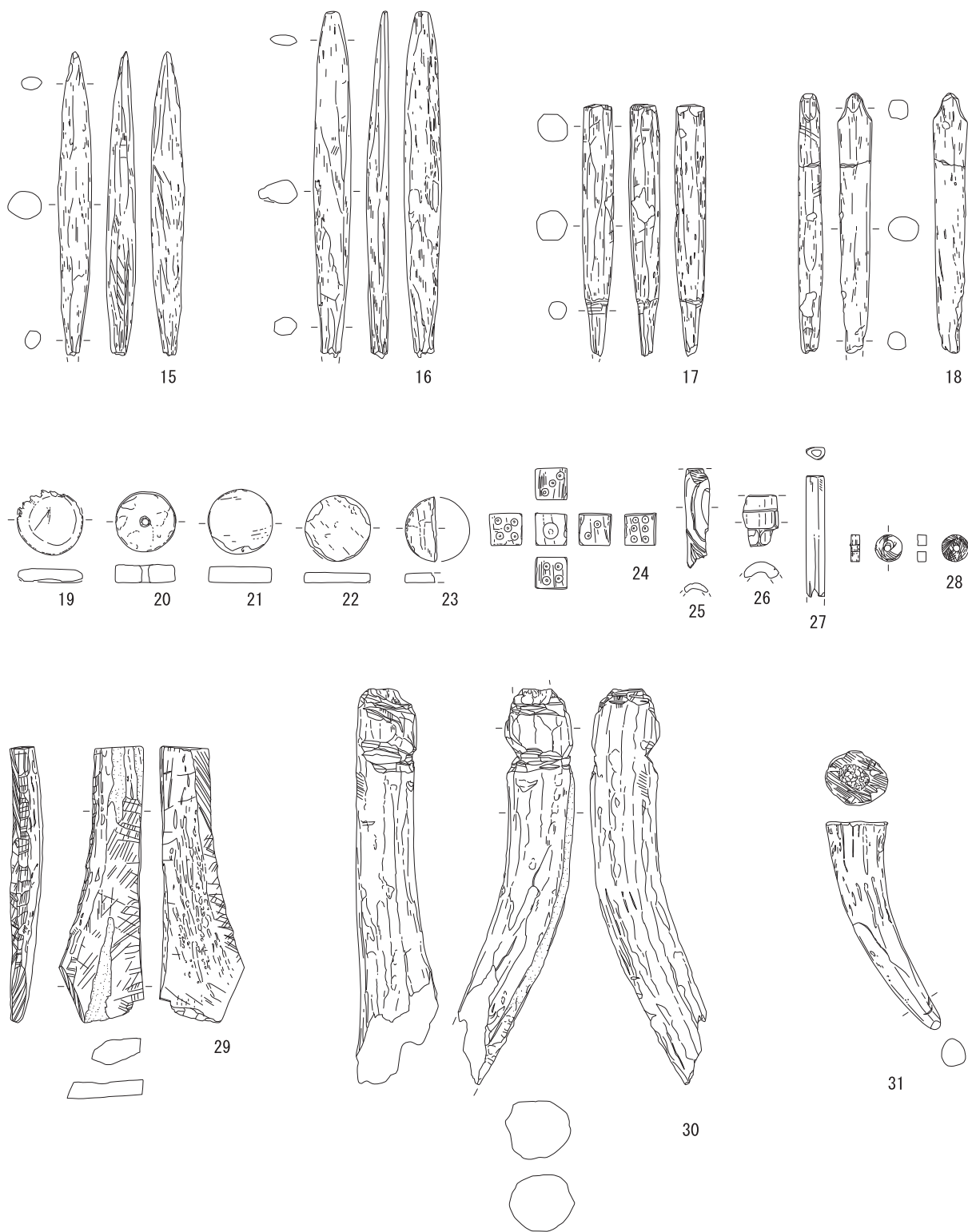
骨角器の素材分類は、肉眼で判断可能な特徴でなされることが多いが、その根拠が明示されることは少ない。しかし、ルーペや実体顕微鏡で観察すると、様々な骨自体の微細構造を見出すことができる。今回も、なるべく素材分類の根拠を示すべく、骨自体の微細構造を記述によって記載したが、誤謬もあるかもしれない。骨の微細構造による動物骨同定、骨角器素材同定を試みた当センター発行所収報文には以下がある。

(福井)

- 奈良貴史・澤田純明・百々幸雄 1999 「柏台1遺跡出土骨片の骨組織構造の検討(予報)」『千歳市柏台1遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター
- 福井淳一 2015 「骨角器」『北斗市押上1遺跡』(公財)北海道埋蔵文化財センター
- 澤田純明 2017 「館崎遺跡出土焼成骨角器の非破壊的組織形態観察に基づく素材同定(序報)」『福島町館崎遺跡』(公財)北海道埋蔵文化財センター
- 福井淳一 2017 「館崎遺跡の骨角器」『福島町館崎遺跡』(公財)北海道埋蔵文化財センター



图V-80 骨角貝製品 (1)



图V-81 骨角貝製品 (2)

表V-29 骨角貝製品集計表

地区	地番	遺構等	層位	銚頭	矢中柄	基石	円盤状製品	サイコロ	針入れ	管状製品	管玉	小玉	棒状製品	鹿角加工残片	鯨骨加工残片	鳥骨加工残片	合計
B	88		II					1		1							2
	89		II		1												1
	90		II				3										3
	92-1		II											1			1
C	19		III									1					1
	13		III		1												1
D	13		III1		1												1
	13		III2		1												1
	13	木製品集中	IV	1	9									1			11
	13	D掘込5の上	V		2												2
	13		V1		1												1
	14-1		III		1									1			2
	14-1		III1		2	1											3
	14-1		III2		2												5
	14-1	木製品集中	IV		6								1				7
	14-1		IV		2									1	2		5
	14-1		IV2'		1												1
	14-1	D掘込2B	覆土						1						1		2
	15-2		II				1										1
E	10-5		III		1												1
	10-5		IV		2												2
	11-6		III		1					1							2
	11-6	E掘込1	覆土		2												2
④	12地先		II		1												1
	14-1地先	木製品集中	IV		5												5
合計					1	42	1	4	1	1	1	1	1	6	3	1	64

表V-30 掲載骨角貝製品一覧表

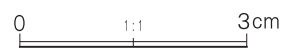
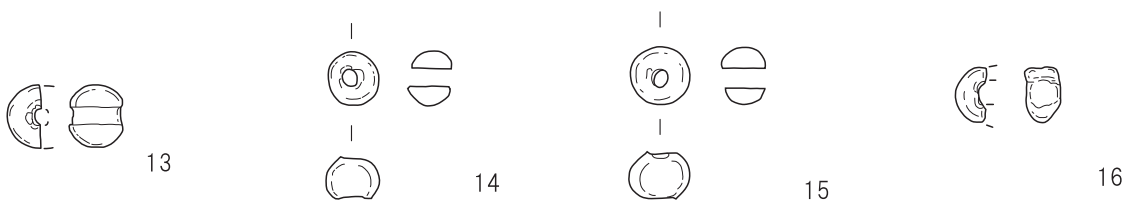
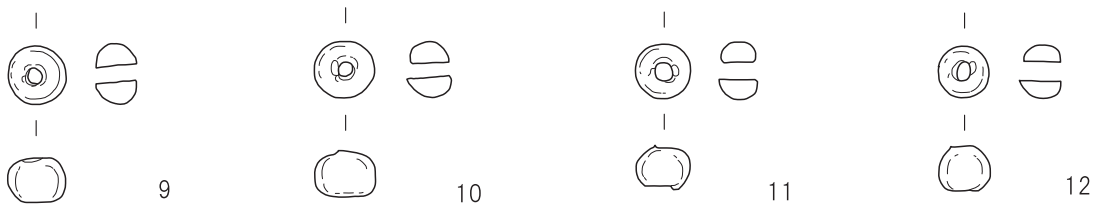
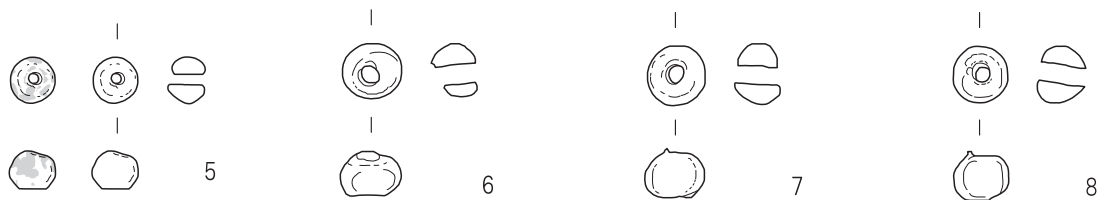
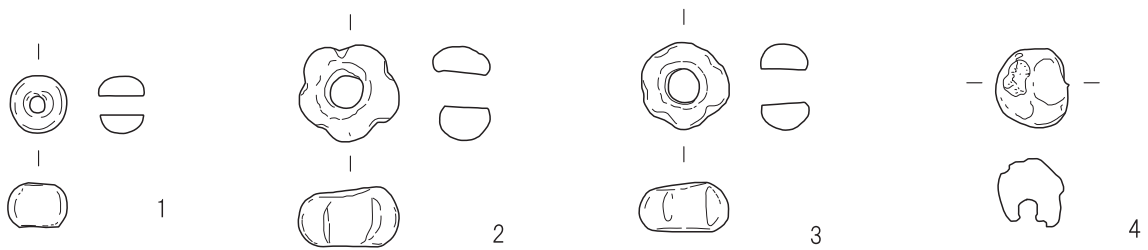
挿図	掲載番号	図版	遺物名	地区地番/遺構	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考	整理番号
V-80	1	59	銚頭	D13/木製品集中	16	IV	(3.2)	(0.9)	(0.4)	0.8	鹿角		1
"	2	"	矢中柄	D13/木製品集中	8	IV	(5.7)	0.9	0.7	2.7	鹿中手・中足骨		10
"	3	"	矢中柄	D14-1/木製品集中	9	IV	(11.3)	0.9	0.8	8.3	鹿中手・中足骨	藍鉄釘付着	3
"	4	"	矢中柄	D14-1	4	IV	(11.4)	0.8	0.6	4.4	骨	鹿?	4
"	5	"	矢中柄	D13/木製品集中	5	IV	(14.0)	0.8	0.7	8.5	鹿中手・中足骨		2
"	6	"	矢中柄	D13/木製品集中	11	IV	(16.4)	1.2	1.0	17.4	鹿中手・中足骨		12
"	7	"	矢中柄	D14-1/木製品集中	5	IV	(12.9)	1.0	0.7	7.3	鹿骨・部位不明		16
"	8	"	矢中柄	D14-1	3	III	(9.8)	1.0	0.9	6.2	鹿骨・部位不明		17
"	9	"	矢中柄	D13	2	III2	(8.0)	1.1	0.7	5.9	鹿角		18
"	10	"	矢中柄	E11-6	1	III	(9.2)	1.0	0.7	4.8	鹿角		20
"	11	"	矢中柄	D14-1/木製品集中	7	IV	(8.8)	0.9	0.9	4.8	鯨骨		22
"	12	"	矢中柄	D13/木製品集中	7	IV	9.7	0.9	0.9	5.5	鯨骨	藍鉄釘付着	24
"	13	"	矢中柄	④14-1地先/木製品集中	1	IV	11.0	1.0	0.9	6.9	鯨骨	藍鉄釘付着	56
"	14	"	矢中柄	D13/木製品集中	6	IV	(14.4)	1.0	1.0	11.2	鯨骨	藍鉄釘付着	21
V-81	15	"	矢中柄	D14-1	2	IV2	(10.0)	1.1	1.0	6.8	鯨骨		26
"	16	"	矢中柄	D13	4	V1	(11.5)	1.2	0.8	7.4	鯨骨		27
"	17	"	矢中柄	D13/木製品集中	9	IV	(8.3)	1.0	1.0	6.5	鯨骨		30
"	18	"	矢中柄	D14-1	6	IV	(8.6)	1.2	0.8	5.2	鯨骨		31
"	19	60	基石	D14-1	1	III1	(2.2)	2.2	(0.4)	2.5	貝	ハマグリ?	38
"	20	"	円盤状製品	D15-2	1	II	2.0	2.0	0.6	2.3	骨	有孔	39
"	21	"	円盤状製品	B90	3	II	2.1	2.1	0.6	2.7	骨		40
"	22	"	円盤状製品	B90	1	II	2.2	2.2	0.4	1.1	骨		41
"	23	"	円盤状製品	B90	2	II	2.1	(1.1)	0.3	0.8	骨		42
"	24	"	サイコロ	B88	1	II	1.1	1.1	1.1	2.0	骨		43
"	25	"	針入れ	D14-1/D掘込2B	1	覆土下位	(3.3)	(0.8)	(0.3)	0.7	鳥上腕骨	アホウドリ?	44
"	26	"	管状製品	B88	2	II	(1.7)	(1.2)	(0.5)	0.6	鹿角	小刀装飾?	45
"	27	"	管玉	E11-6	2	III	(4.0)	0.6	0.4	0.9	鳥機骨	アホウドリ?	46
"	28	"	小玉	C19	1	III	0.9	0.9	0.3	0.3	骨		47
"	29	"	鹿角加工残片	D14-1	18	III2	9.2	2.8	1.1	12.5	鹿角		50
"	30	"	鹿角加工残片	D13/木製品集中	12	IV	(13.1)	(3.8)	2.7	49.7	鹿角		51
"	31	"	鹿角加工残片	D14-1	16	III	6.9	3.8	1.8	13.4	鹿角		52

8 ガラス玉 (表V-31、図V-82、口絵7、付編I-10)

ガラス玉の製作地は不明であるが、成分分析結果を掲載している (付編I-10)。色は青、青緑系が多く、ほとんどが巻き付け方式で作られたものと思われる。蛍光X線分析の結果は、蜜柑玉2点がカリ鉛ガラス、白色不透明の1点と青色系の13点はカリ石灰ガラスであることが判明した。その他2点は既存の分類に帰属しないことがわかった。

表V-31 掲載ガラス玉一覧

掲載 No.	図 No.	図版	地区	地番	層位	遺物 No.	色調	計測値 (cm, g)				点数	取上げ日	備考
								長さ	幅	厚さ	重さ			
1	V-82	口絵7・ 付編10	B	85-3	II	1	白系	0.8	0.8	0.6	0.45	1	2022/7/7	完形
2	V-82	口絵7・ 付編10	B	86	II	1	青緑系	1.3	1.3	0.8	2.21	1	2022/7/8	接合完形、ミカン玉、表面摩耗
3	V-82	口絵7・ 付編10	B	86	II	2	青緑系	1.2	1.2	0.7	1.50	1	2022/7/8	完形、ミカン玉
4	V-82	口絵7・ 付編10	B	86	IV	3	黒系	1.05	1.0	0.9	0.70	1	2022/7/14	破損? 被熱
5	V-82	口絵7・ 付編10	B	88	II	1	白系	0.6	0.6	0.5	0.16	1	2022/7/14	完形、赤色顔料付着
6	V-82	口絵7・ 付編10	B	92-1	II	1	青系	0.7	0.8	0.6	0.36	1	2022/8/25	完形
7	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	1	青系	0.8	0.8	0.6	0.46	1	2022/8/30	完形
8	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	2	青系	0.8	0.8	0.7	0.42	1	2022/9/1	完形
9	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	3	青系	0.8	0.8	0.6	0.47	1	2022/9/1	完形
10	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	4	青系	0.75	0.8	0.6	0.46	1	2022/9/1	完形
11	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	5	青系	0.7	0.7	0.6	0.38	1	2022/9/1	完形
12	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	6	青系	0.7	0.7	0.6	0.35	1	2022/9/1	完形
13	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	7	青系	0.8	(0.4)	(0.7)	0.29	1	2022/9/1	破損
14	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	8	青系	0.7	0.7	0.6	0.37	1	2022/9/26	完形
15	V-82	口絵7・ 付編10	C	19	II	9	青系	0.8	0.8	0.6	0.50	1	2022/9/27	完形
16	V-82	口絵7・ 付編10	D	13	II	1	青系	(0.7)	(0.4)	(0.5)	0.16	1	2022/6/1	破片、摩耗(海あがり)
17	V-82	口絵7・ 付編10	4期	15-3	II		青系	0.8	0.8	0.7	0.55	1	23/8/22	完形
18	V-82	口絵7・ 付編10	6期	12	Ⅲローム 上面		青系	0.75	0.8	0.65	0.4	1	23/9/20	完形、焼土



図V-82 ガラス玉

引用文献

- 秋葉 實翻刻・編 1999 松浦武四郎『校訂 蝦夷日誌【一編】』北海道出版企画センター
- 網野善彦 1978 『無縁・公界・楽』平凡社
- 青森県史編さん近世部会 2001 『青森県史 資料編 近世1』
- 新垣 力・瀬戸哲也 2005 「沖縄における14～16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究 3』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 榎森 進 1982 『北海道近世史の研究—幕藩体制と蝦夷地』北方歴史文化叢書 北海道出版企画センター
- 大阪市文化財協会 1988 『大坂城跡Ⅲ』
- 大阪市文化財協会 2009 『大坂城下町跡Ⅱ』
- 奥野 充 2018 「白頭山苦小牧 (B-Tm) テフラの精密年代決定の意義」『名古屋大学 年代測定研究 2』名古屋大学宇宙地球環境研究所・年代測定研究部
- 小野哲也 2000 「刀子からマキリへ—考古学的アプローチによる」『北大史学 第40号』北大史学会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 2』日本貿易陶磁研究会
- 小山正忠・竹原秀雄 2004 『新版標準土色帖 26版』日本色研事業株式会社
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」『物質文化 43』物質文化研究会
- 上ノ国町教育委員会 2009 『史跡上ノ国館跡Ⅳ』
- 上ノ国町教育委員会 2019 『上ノ国市街地遺跡発掘調査報告書』
- 上ノ国町教育委員会 2021 『史跡上之国館跡Ⅶ』
- 萱野 茂 1978 『アイヌの民具』すずさわ書店
- 川根正教 1995 「寛永通寶銭の基礎的研究 1 (上)」『出土銭貨 第4号』出土銭貨研究会
- 川根正教 1996 「寛永通寶銭の基礎的研究 1 (下)」『出土銭貨 第5号』出土銭貨研究会
- 菊池勇夫 2001 「津軽領内におけるアイヌの動向」『青森県史 資料編 近世1』
- 菊池勇夫 2002 「石焼鯨について」『東北学 7号』東北芸術工科大学
- 木村孝一郎 2011 「越前焼の編年の研究と生産地の動向」『山陰地方における越前・常滑系陶器』山陰中世土器検討会
- 九州近世陶磁器学会 2000 『九州陶磁の編年』九州近世陶磁器学会
- 久保 泰 1977 「北海道松前町上川遺跡における縄文晩期墳墓の調査」『考古学ジャーナル 133』ニュー・サイエンス社
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』柏書房
- 古泉 弘 1985 『銅製品』『江戸—都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校内遺跡調査団
- 兒玉作左衛門ほか 1954 「蝦夷に関する耶蘇会士の報告」『北方文化究報告 9輯』北海道大学北方文化研究室
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『美沢川流域の遺跡群XⅧ』北埋調報102
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『千歳市ユカンボシC15遺跡(6)』北埋調報192
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 『松前町福山城下町遺跡』北埋調報290
- 佐藤雄生 2014 「松前の海揚がり陶磁器」『弘前大学國史研究 136』弘前大学國史研究会
- 白神典之 1992 「堺播鉢考」『東洋陶磁 19』東洋陶磁学会
- 鋤柄俊夫・森 毅 1999 「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」『研究紀要 2』大阪市文化財協会
- 関根達人 2018 『松前藩福山城下町の考古学的研究 1』平成29年度公益財団法人三菱財団研究助成「近世国家北方領域境界域における物資流通に関する考古学的研究」研究成果報告書
- 関根達人 2019 「北海道松前町福山城下町遺跡小松前町地点発掘調査報告」弘前大学人文社会科学部研究推進・評価委員会『人文社会学論叢 第7号』
- 関根達人・米田 穰・宮田佳樹・宮内信夫・堀内晶子・吉田邦夫 2020 「福山城下町遺跡の地鎮に使われた灯明皿とその油種」『北海道考古学 第56輯』北海道考古学会
- 関根達人 2021 「北海道松前町上川遺跡発掘調査報告」『北海道考古学 第57輯』北海道考古学会
- 関根達人 2023 『つながるアイヌ考古学』新泉社

- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究」『沖縄埋文研究 5』
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也 2015 「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究 35』日本貿易陶磁研究会
- 瀬戸哲也 2015 「14～16世紀の沖縄出土龍泉窯系青磁における生産地の模索」『中近世陶磁器の考古学 1』雄山閣
- 津別町教育委員会 2009 『ツペットウンチャシ跡』
- 出利葉浩司 1993 「大正年間を中心とした千歳川におけるアイヌ民族のサケ漁について」『北海道開拓記念館研究報告 32号』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報 2
別冊
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006 『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査
報告書 7
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011 『東京大学構内遺跡調査研究年報 7』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012 『東京大学構内遺跡調査研究年報 8』
- 東北大学埋蔵文化財調査室 2008 『東北大学埋蔵文化財調査年報 19』第 4 分冊
- 苫小牧市教育委員会 1966 『苫小牧市沼ノ端丸木舟発掘調査概要報告書』
- 日本ペドロジー学会編 1997 『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社
- 野上建紀 2010 「「海揚がりの肥前陶磁」展」『金大考古 第68号』
- 秦 光男・箕浦名知男・大沼晃助・加藤 誠 1990 『松前地域の地質』地質調査所
- 服部 郁 1994 「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」『研究紀要 第 2 輯』瀬戸市埋蔵文化財センター
- 日田市教育庁咸宜園教育研究センター 2015 『文人の至宝～学芸と硯の世界』
- 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要 V』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1987 「本業焼の研究（1）」『研究紀要 VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯の再検討」『研究紀要 第10輯』瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤光秀雄 2013 『寛永通寶 収集・分類・整理』文芸社
- 松井十郎編 1894 『北海道實業人名録完』北海道実業人名録編纂所
- 宮内崇裕 2003 「5-5（2）松前半島一隆起の歴史を語る階段状地形」『日本の地形 2 北海道』東京大学出版会
- 森 毅 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究 第九』大阪市文化財協会
- 森 毅 1995 「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア 149』大阪歴史学会
- 北海道 1969 「津軽一統志 卷第十（中）」『新北海道史 第七卷史料一』
- 北海道庁 1936（復刻版1991）「福山秘府」『新撰 北海道史 第五卷史料一』清文堂
- 北海道開拓記念館 1984 『松前藩主・一族書状集・II 資料解説シリーズNo.6』
- 松前町教育委員会 2006 『福山城・福山城下町遺跡』
- 松前町教育委員会 2007 『福山城下町遺跡II』
- 松前町教育委員会 2008 『福山城下町遺跡IV』
- 松前町教育委員会 2009 『神明石切り場跡II』
- 松前町教育委員会 2015 『福山城下町遺跡V』
- 松前町史編集室 1974 「松前蝦夷記」『松前町史 史料編第一巻』
- 松前町史編集室 1984 『松前町史 通説編第一巻上』
- 松前町史編集室 1988 『松前町史 通説編第一巻下』
- 本村充保 2022 『下駄の考古学』同成社
- 由良 勇 1995 『北海道の丸木舟』マルヨシ印刷
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- IAWA（国際木材解剖学者連合）委員会 2006 『針葉樹材の識別』海青社

写真図版





昭和 30 年代の字唐津空中写真 松前町郷土資料館所蔵



遺跡近景 白線内が調査区域

図版2 A地区



基本土層 A-B 地番 93-2 北東から



基本土層 C-D 地番 93-2 西から



基本土層 E-F 地番 94 南から



A 礎石 1 検出状況 地番 93-2 北東から



A 柱 1 土層断面 地番 94 北から



A 土坑 1 遺物出土状況 地番 94 東から



A 土坑 2 土層断面 地番 94 北から



A 土坑 3 土層断面 地番 94 北東から



基本土層 A-B 地番 85-2 南東から



基本土層 C-D 地番 85-2・85-3 北から



基本土層 E-F 地番 85-3・86 北から



基本土層 G-H 地番 89 北から



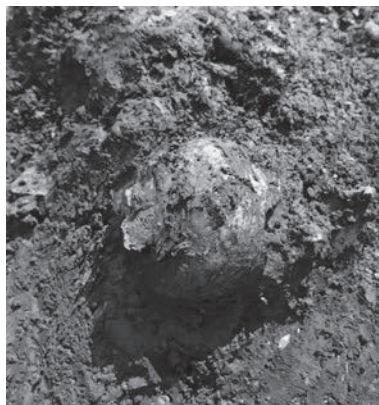
基本土層 I-J 地番 90 北から



B 礎石 1 検出状況 地番 85-3 北から



舷側板出土状況 地番 86 北東から

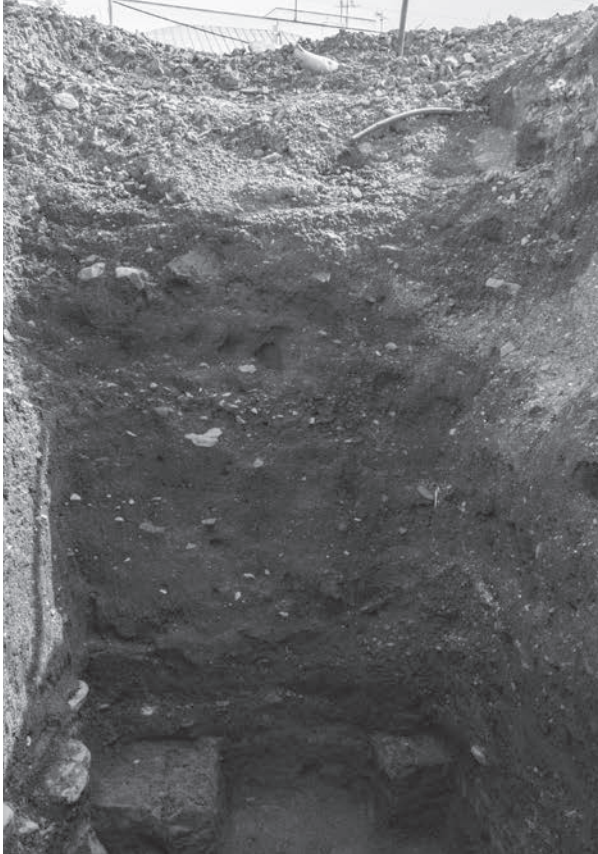


漆塗椀出土状況 地番 86 北から



漆塗椀出土状況 地番 86 北東から

図版4 C地区 (1)



基本土層 C-D 地番 19 地先 西から



基本土層 E-F、碗 (掲載 a48) 地番 19 地先 北から



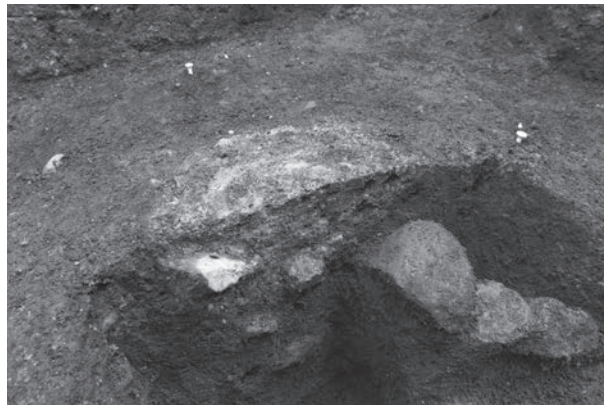
基本土層 A-B、C 礎石 1 地番 18-1 地先 南から



C 礎石 2 検出状況 南東から



C 土坑 1 土層断面 地番 19 西から



C 土坑 2 土層断面 北東から



C土坑3土層断面 西から



C土坑4(左)・5土層断面 北西から



C土坑6(左)・7土層断面 南西から

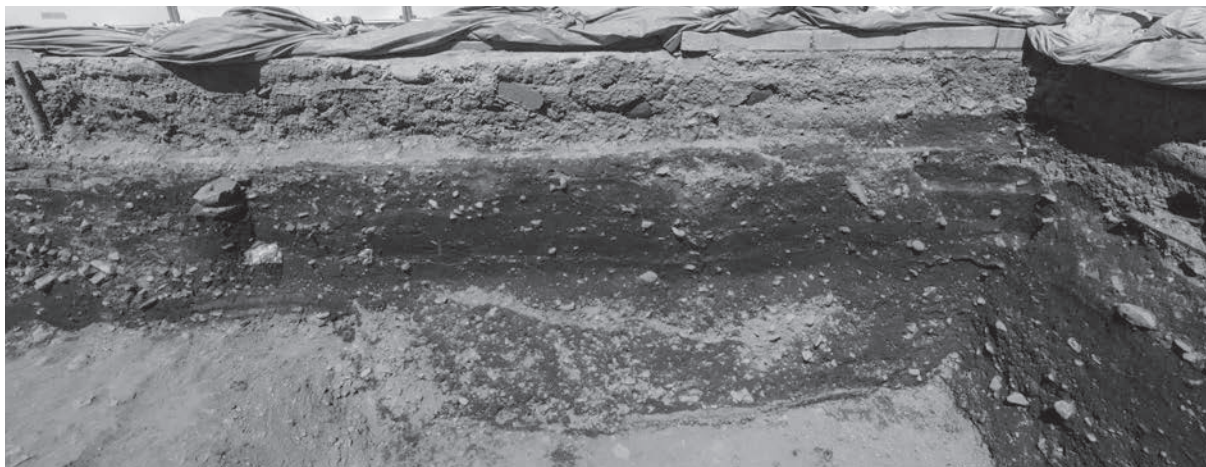


C土坑8土層断面 西から



C土坑3～8完掘 南西から

図版6 D地区地番13(1)



基本土層 E-F 南から



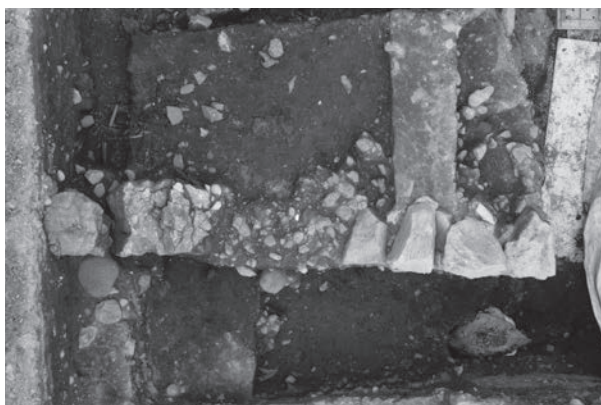
皿(掲載 b23) 出土状況 南から



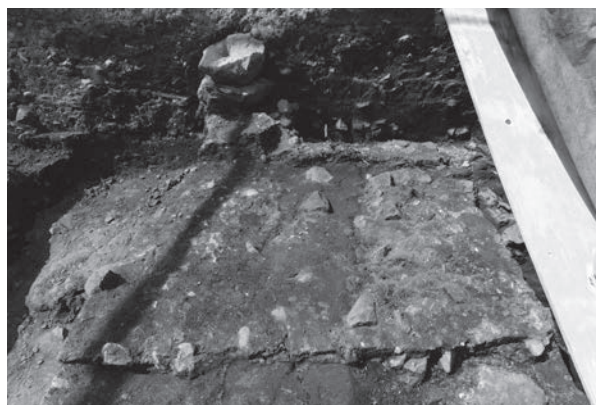
基本土層 E-F 及び G-H 南西から



D 石積 1 検出状況 西から



D 石積 1 検出状況 俯瞰



D 石積 1 下掘方(左)・溝 1 礫集中 南から



D石積1・溝1(右)検出状況 南から



D溝1炭検出状況 東から



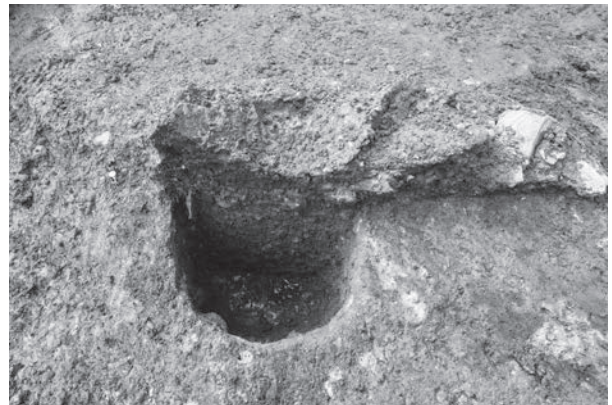
D礎石8検出状況 南西から



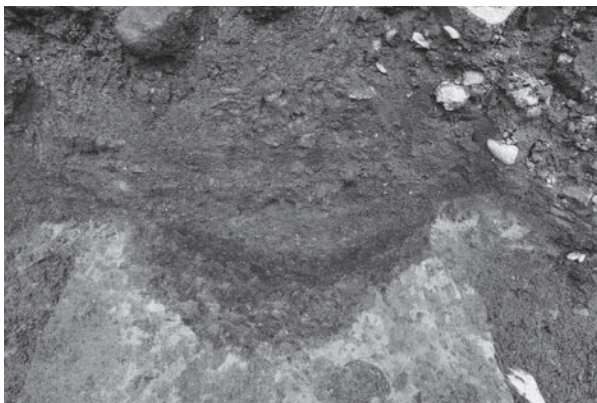
D土坑8土層断面 南から



D土坑8瓦出土状況 南西から



D土坑11土層断面 南から



D土坑13炭化材出土状況 南から



木製品出土状況 南から



木製品出土状況 南から



下駄出土状況 南東から



釘出土状況 南東から



中柄出土状況 北から



土錘(掲載c29) 出土状況 南から



瀬戸丸皿（掲載 b15）出土状況 南から



擦文土器（掲載 c46）出土状況 南から



天聖元寶出土状況 西から



馬歯出土状況 北から



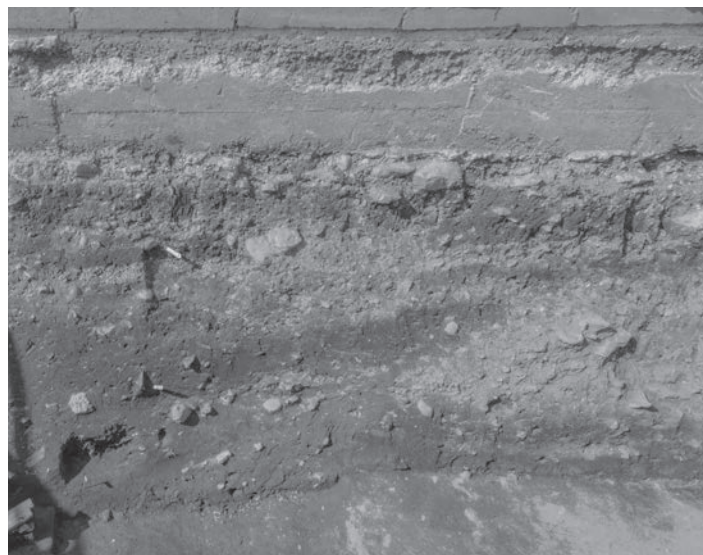
V層遺物出土状況 南から



基本土層 I-J 西から



基本土層 M-N 東から



基本土層 S-T 南東から



灰白色堆積物検出状況 北から



灰白色堆積物土層断面 O-P・Q-R 北東から



D 礎石 4 (左)・13 検出状況 北から



D 礎石 4 (上)・5 検出状況 東から



D 礎石 6 検出状況 南東から



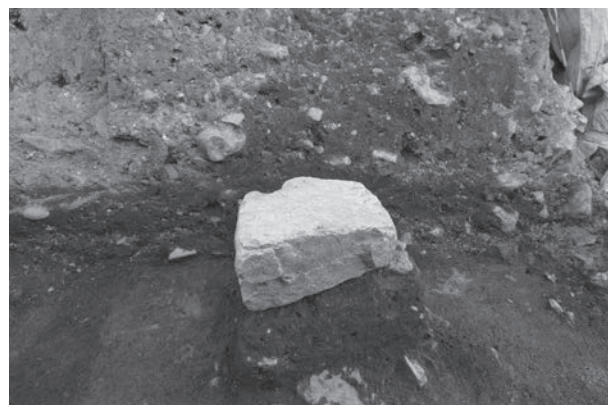
D 礎石 7 検出状況 南東から



D 礎石 9 検出状況 東から



D 礎石 10 (奥)・11 検出状況 南から



D 礎石 12 検出状況 南から

図版 12 D 地区地番 14-1 (3)



D 炉 1 検出状況 南西から



D 炉 1 土層断面 東から



D 炉 2 検出状況 北東から



D 土坑 9 土層断面 東から



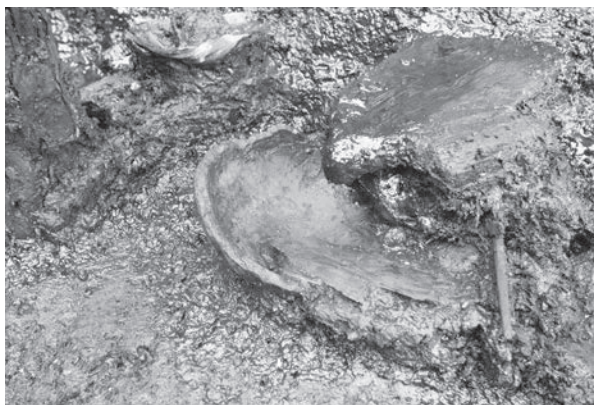
D 土坑 12・炉 2 土層断面 南から



羽口出土状況 南から



脇差出土状況 南東から



漆塗椀出土状況 南から



木製品出土状況 南から



舟敷出土状況、基本土層 O-P・Q-R 北東から



舟敷出土状況 俯瞰



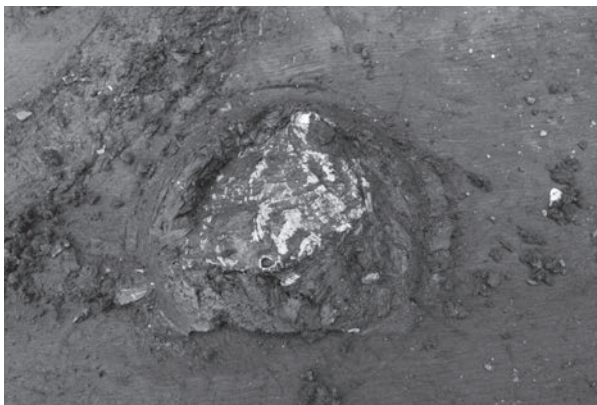
舟敷出土状況 南東から



舟敷上位遺物出土状況 東から



舟敷上位椀出土状況 北東から



舟敷上位椀の下アワビ出土状況 北東から



舟敷取り上げ作業状況 北東から

図版 16 D 地区地番 14-1 (7)



舟敷の穴に残る縄 北東から



樹皮集中出土状況 東から



櫂出土状況 西から



立杭 2 (右)・3 (中)・4 (左) 出土状況 東から



遺物出土状況 南から



天目碗 (掲載 b5) 出土状況 東から



唐津皿 (掲載 b22) 出土状況 南から



瀬戸丸皿 (掲載 b13) 出土状況 南から



D 柵 1 検出状況 南西から



人骨出土状況 東から



人骨出土状況 東から



人骨出土状況、基本土層 K-L 東から



基本土層 Q-R 南から



D 石列 1 検出状況 南から



D 礎石 1 (左)・2 検出状況 南から



D 礎石 3 検出状況 南から



D 土坑 1 完掘 南東から



D 土坑 2 土層断面 南から



D 土坑 3 完掘 南西から



D 土坑 4 土層断面 北から



D 土坑 5 土層断面 北西から



D 土坑 6 土層断面 北から



D 土坑 7 完掘 南から

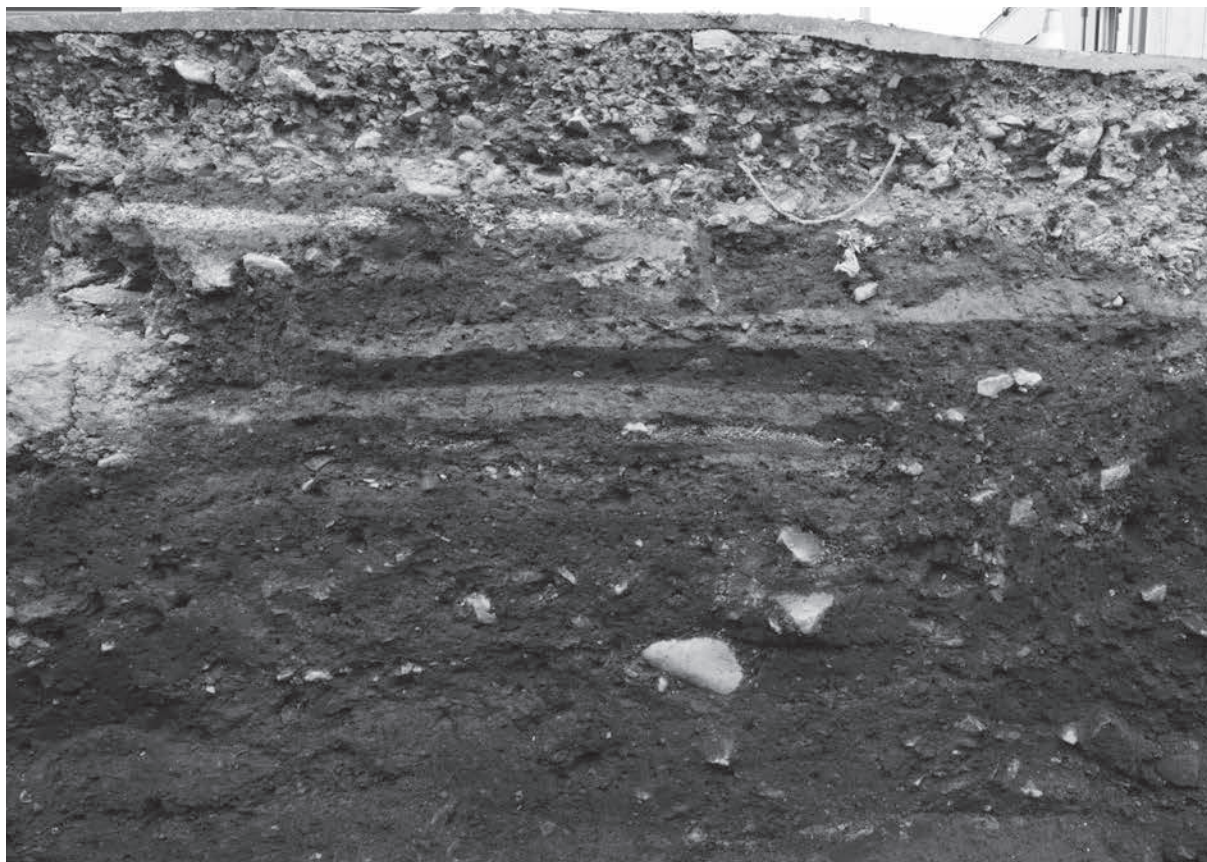
図版 20 D 地区地番 15-2 (3)、E 地区地番 10-5・11-6・11-8



磁器片出土状況 地番 15-2 南から



磁器片出土状況 地番 15-2 西から



基本土層 A-B 地番 10-5・11-6 北から



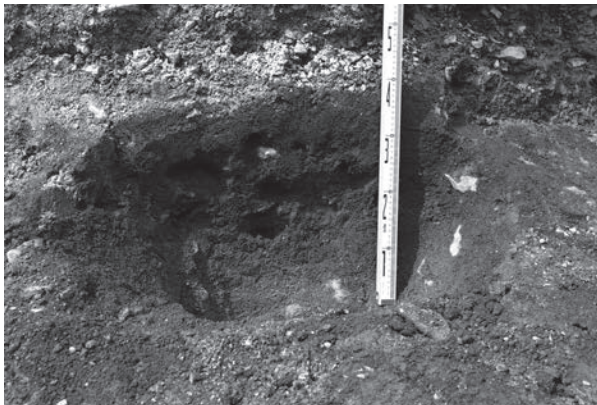
調査状況 地番 10-5・11-6・11-8 南から



大甕 (掲載 b102) 出土状況 地番 10-5 東から



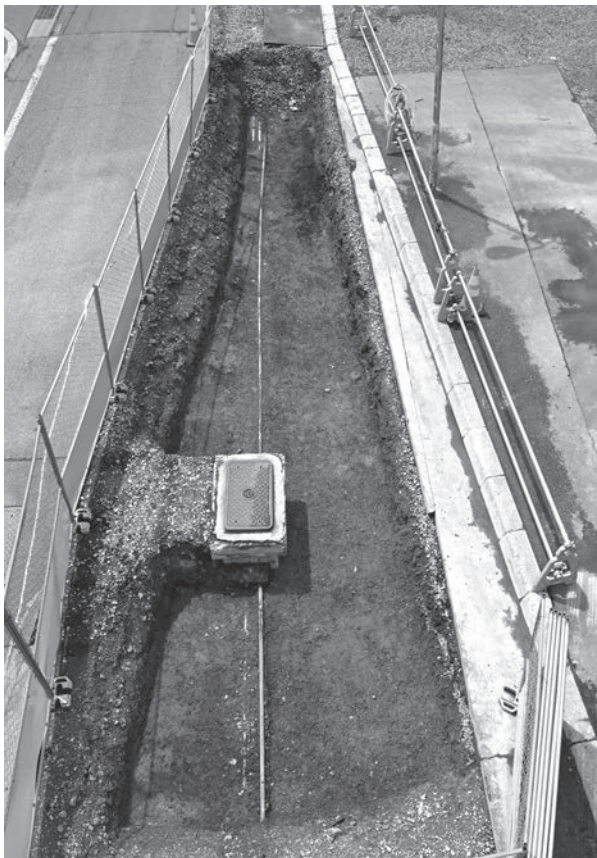
基本土層 地番 88 地先 北から



基本土層 K-L 地番 84-2 地先 南から



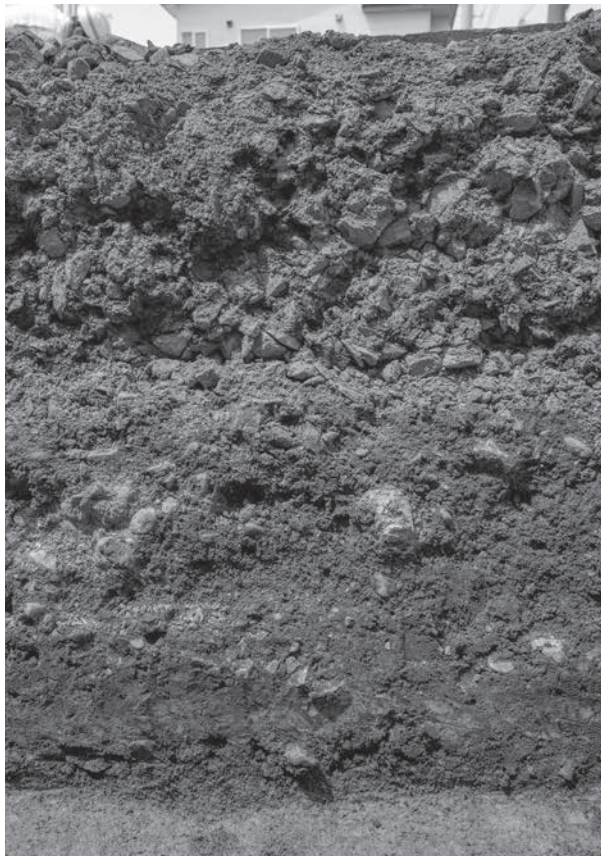
調査状況 地番 87 地先 西から



80cm掘削完了 地番 83-2 地先・84-2 地先 東から



80cm掘削完了 地番 87 地先・88 地先 東から



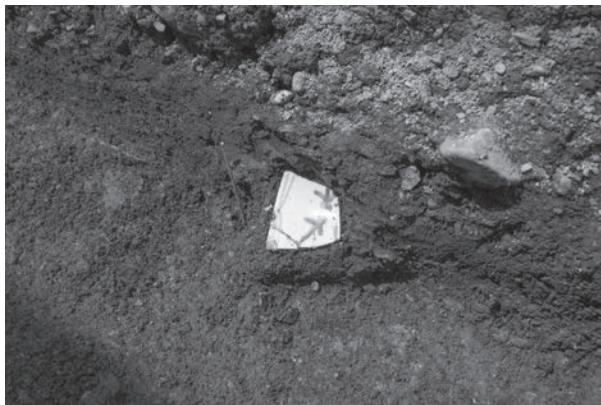
基本土層 東から



調査状況 南西から



肥前甕 (掲載 b93) 出土状況 南から



肥前鉢 (掲載 a146) 出土状況 南から



肥前播鉢、皿 (掲載 b35、b73) 出土状況 北東から



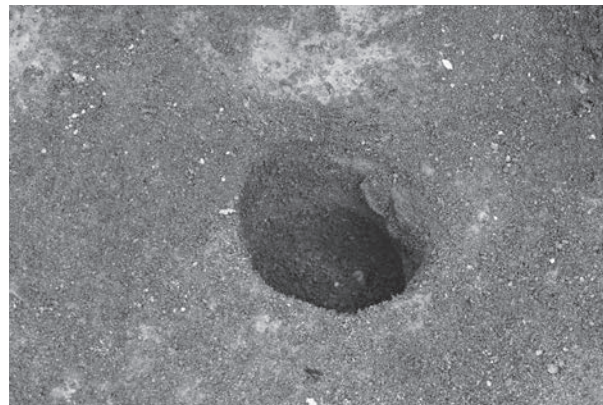
80cm掘削完了 北から



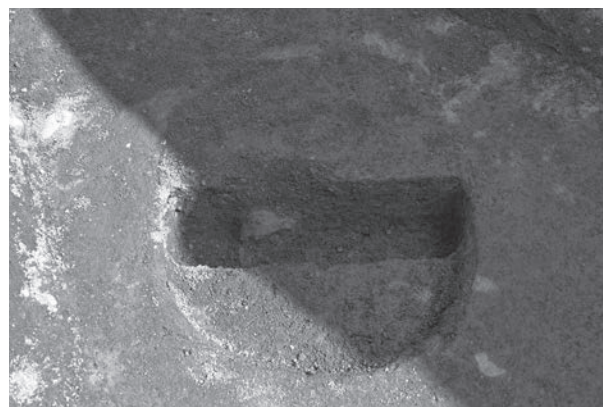
基本土層 G-H 南から



調査開始面 西から



C 土坑 9 完掘 西から



C 土坑 10 土層断面 北西から



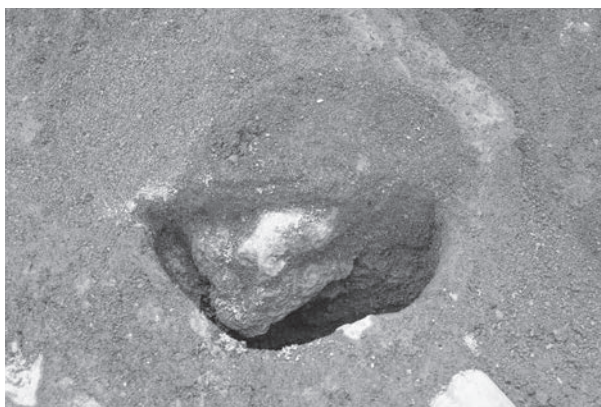
B-Tm 上面土坑検出状況 南から



C 土坑 11 土層断面 北西から



C 土坑 12 土層断面 東から



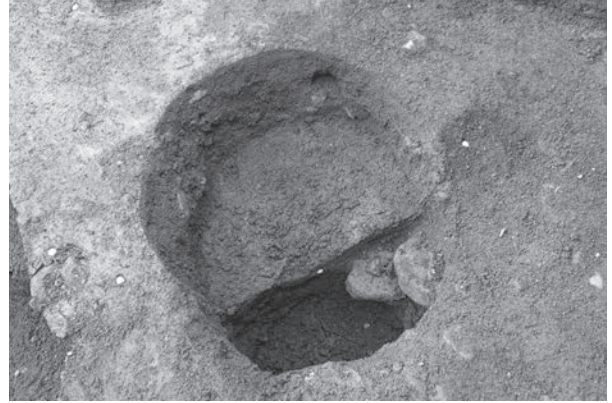
C 土坑 13 土層断面 東から



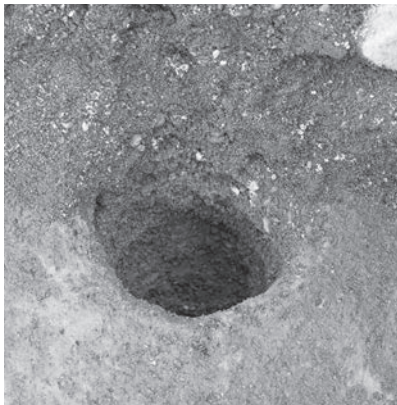
C 土坑 14 (右)・15 (中)・21 (左) 完掘 南から



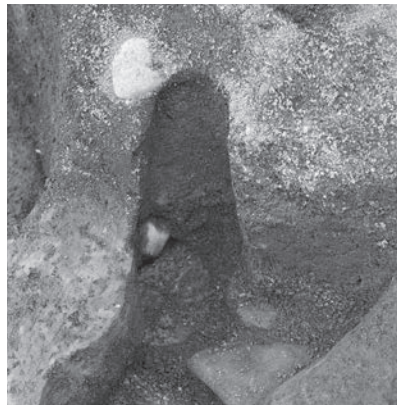
C 土坑 16 土層断面 東から



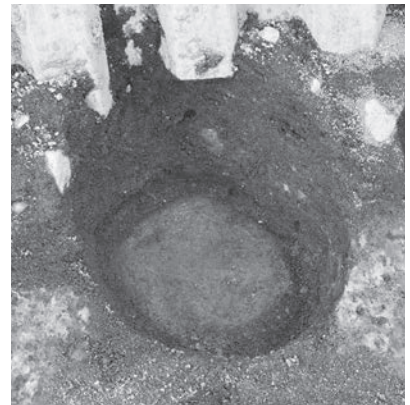
C 土坑 17 完掘 北西から



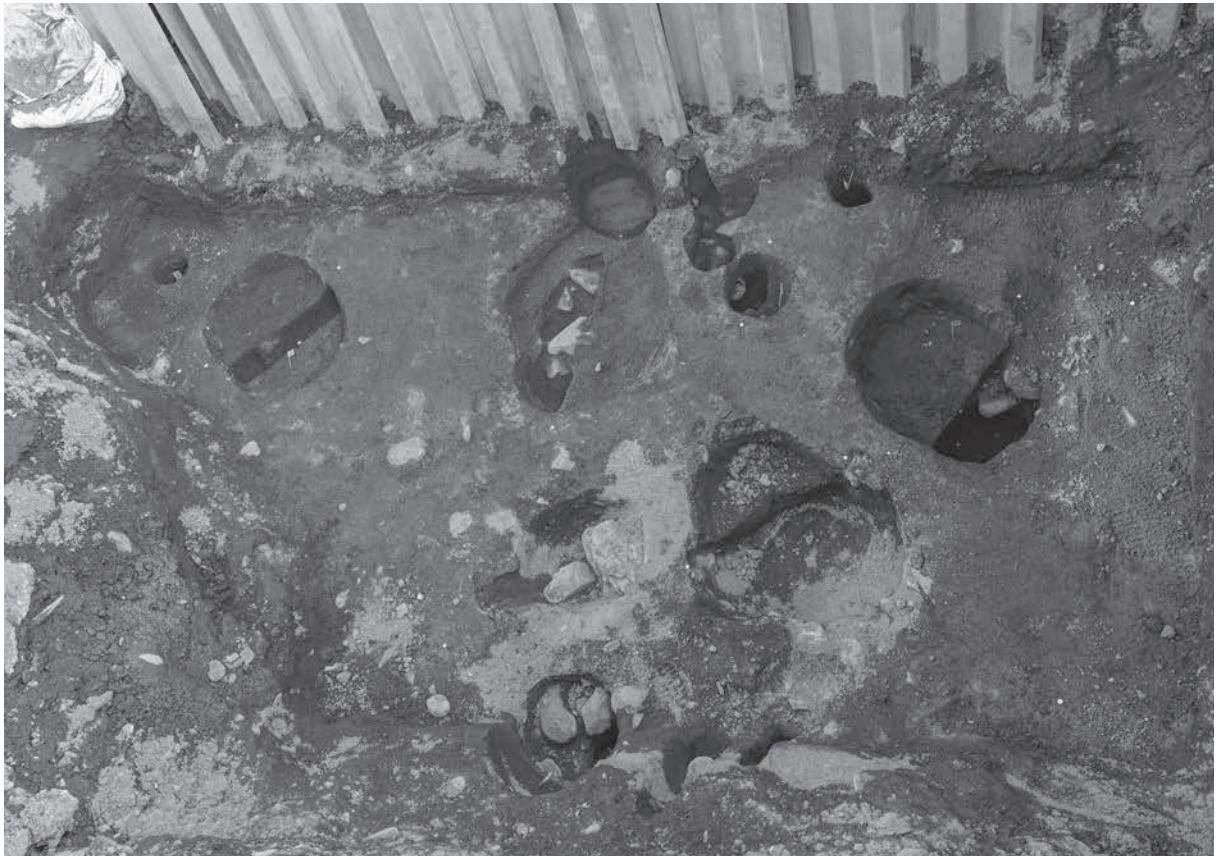
C 土坑 18 完掘 北から



C 土坑 19 完掘 北から



C 土坑 20 完掘 北から



190cm掘削完了 北から



立杭 9～11 土層断面 南東から



立杭 12 土層断面 南から



立杭 13～15 土層断面 西から



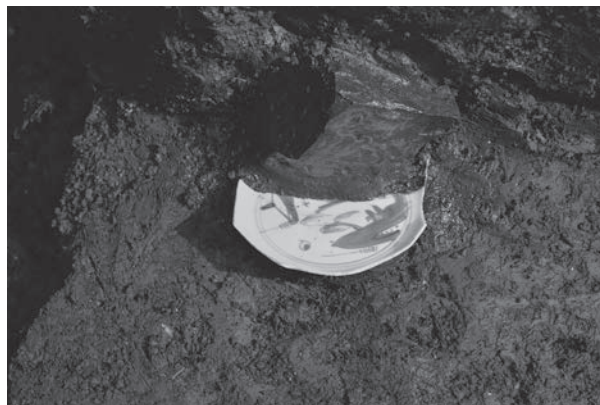
立杭 16 土層断面 南西から



立杭 17・18 土層断面 南西から



馬頭骨出土状況 東から



景德鎮皿 (掲載 a130) 出土状況 北から



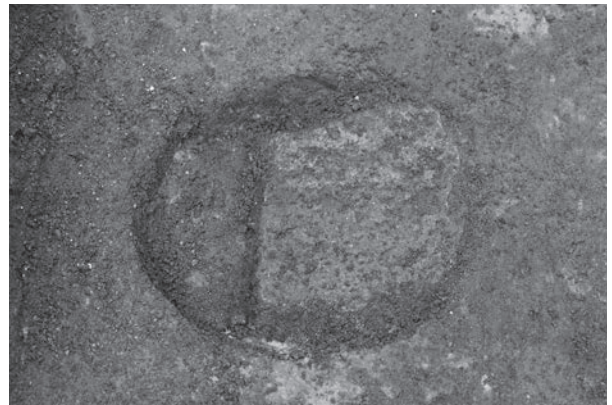
調査状況 南東から



D土坑 10 土層断面 東から



基本土層 E-F 南東から



D土坑 14 礫出土状況 東から



基本土層 C-D 南から

図版 28 令和5年度④地区地番 15-3 地先、⑤地区地番 11 地先 (1)



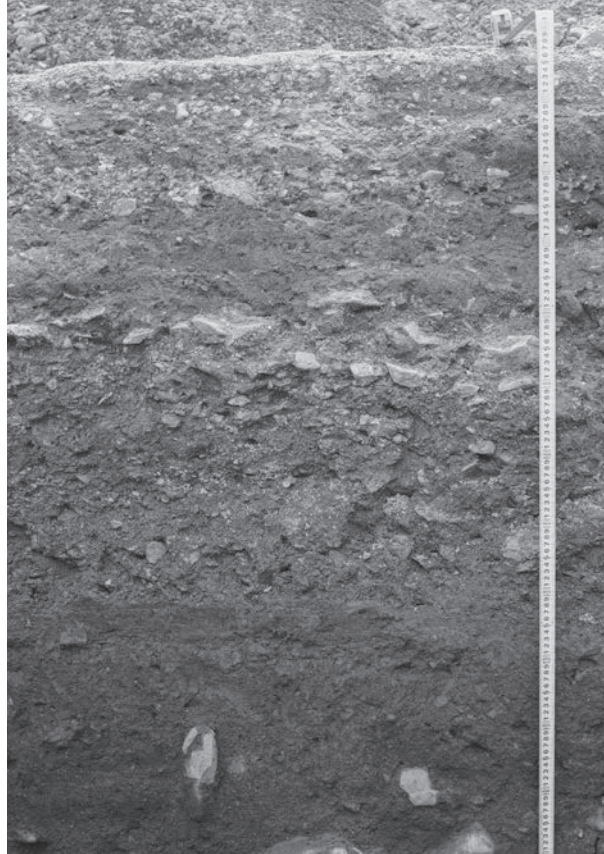
D 土坑 15 完掘 南から



80cm掘削完了 地番 15-3 地先 東から



190cm掘削完了 地番 15-3 地先 南から



基本土層 A-B 地番 15-3 地先 東から



I・II層除去状況 地番 15-3 地先 北東から



基本土層 C-D 地番 11 地先 北から



ローム層検出状況 地番11地先 西から



D礎石14検出状況 地番12 北東から



基本土層 A-B 地番12 東から



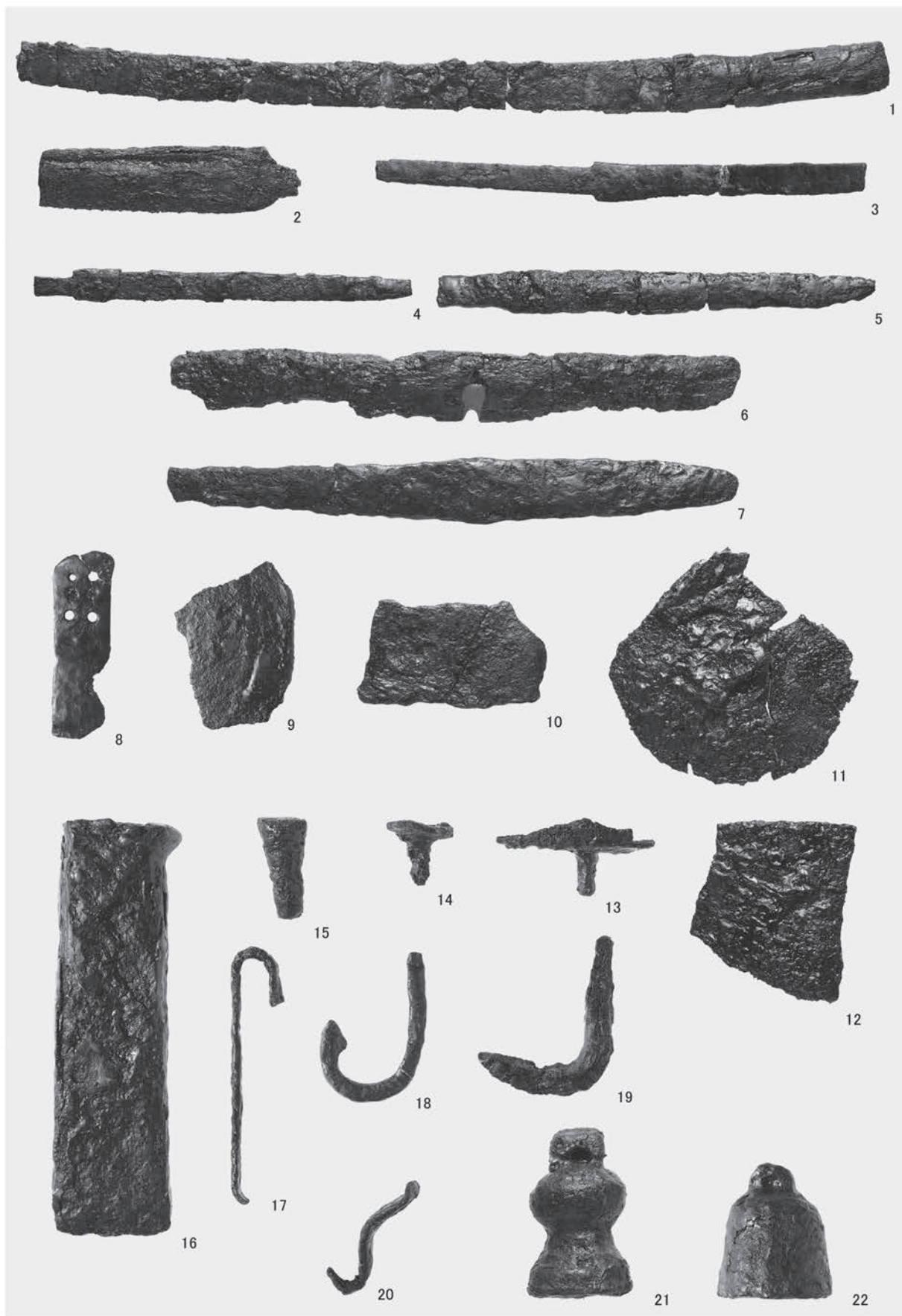
基本土層 C-D 地番12 北から



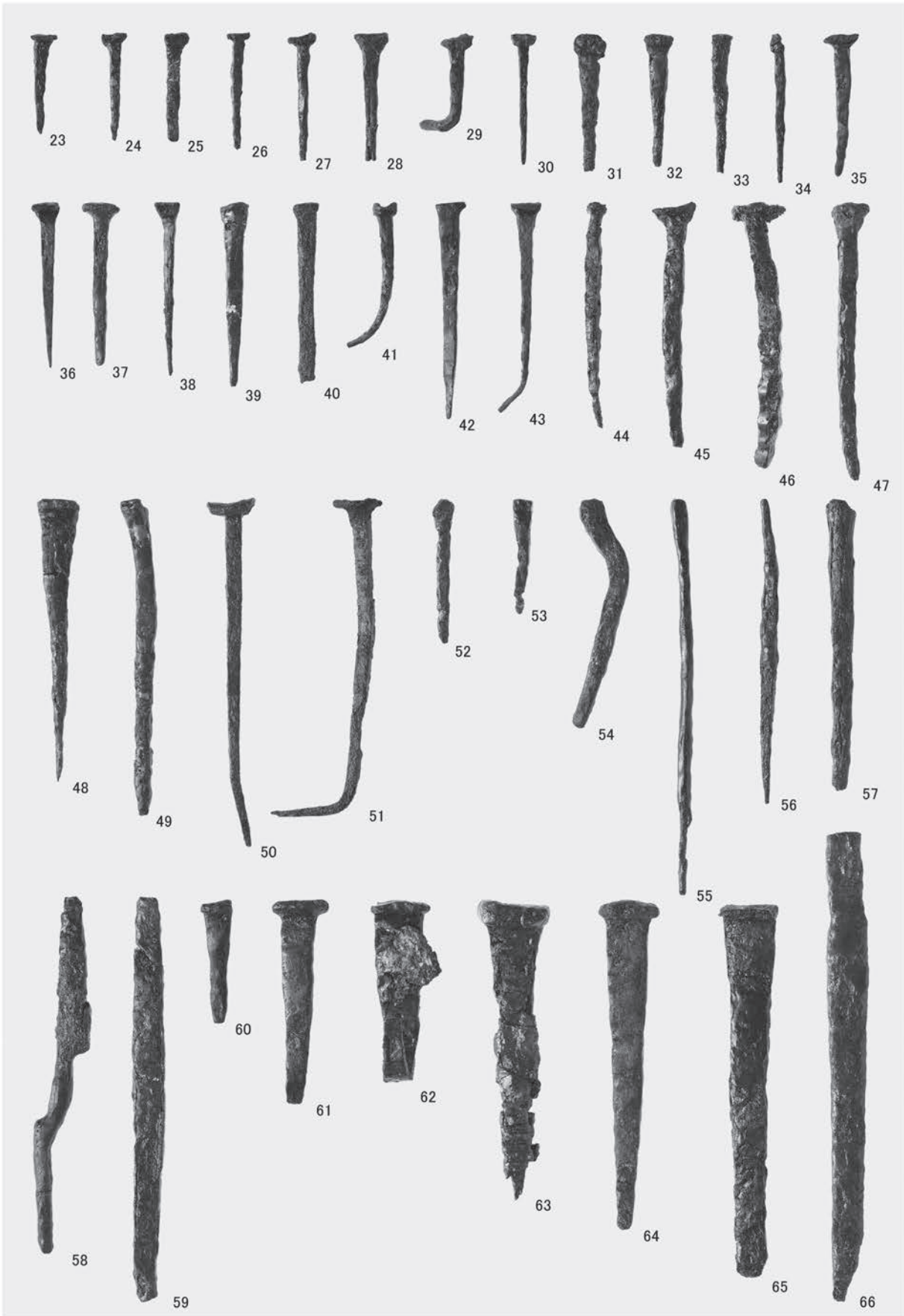
D 火事場整理穴 1 検出状況 東から



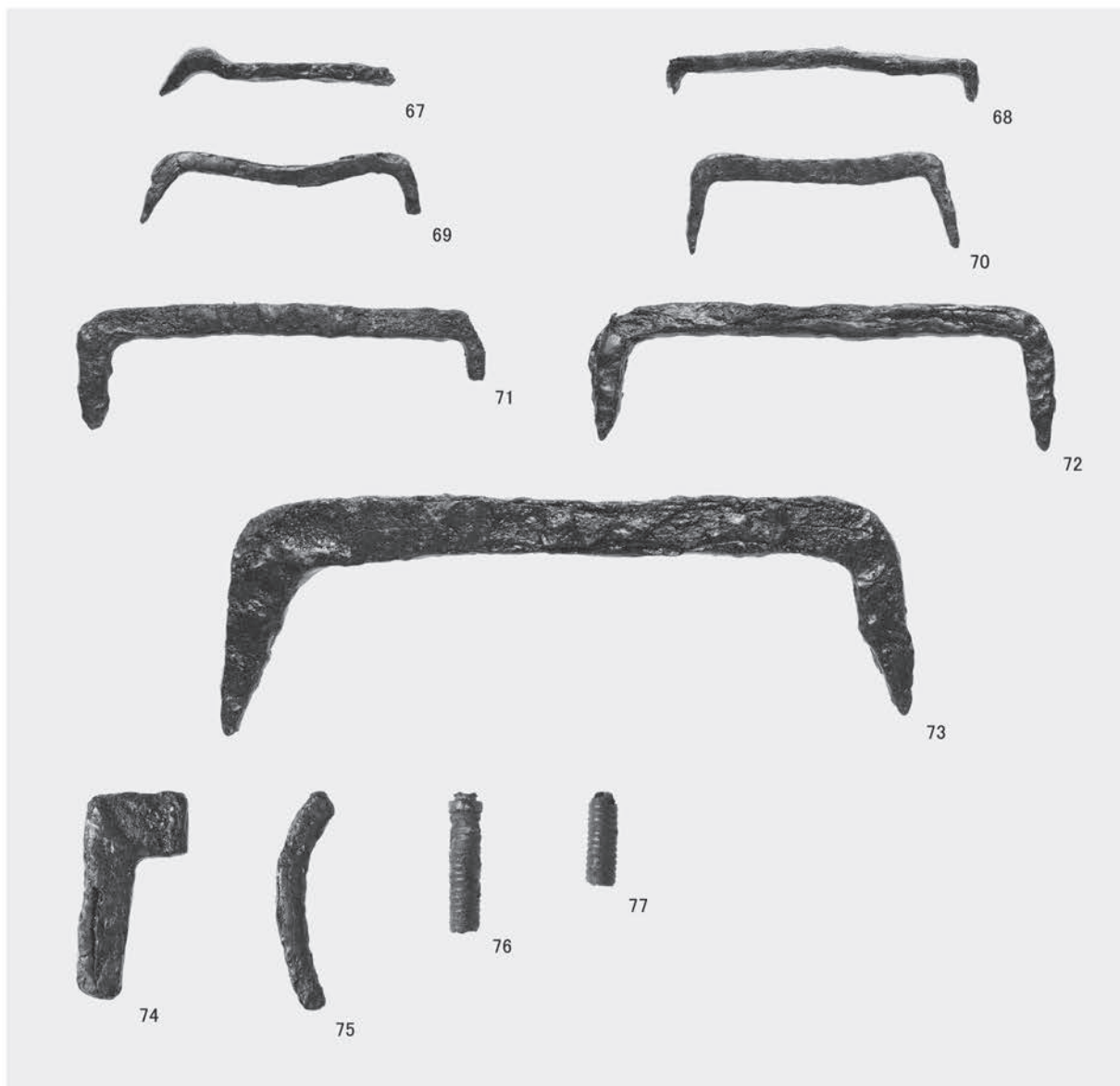
80cm 掘削完了 北東から



鉄製品(1)



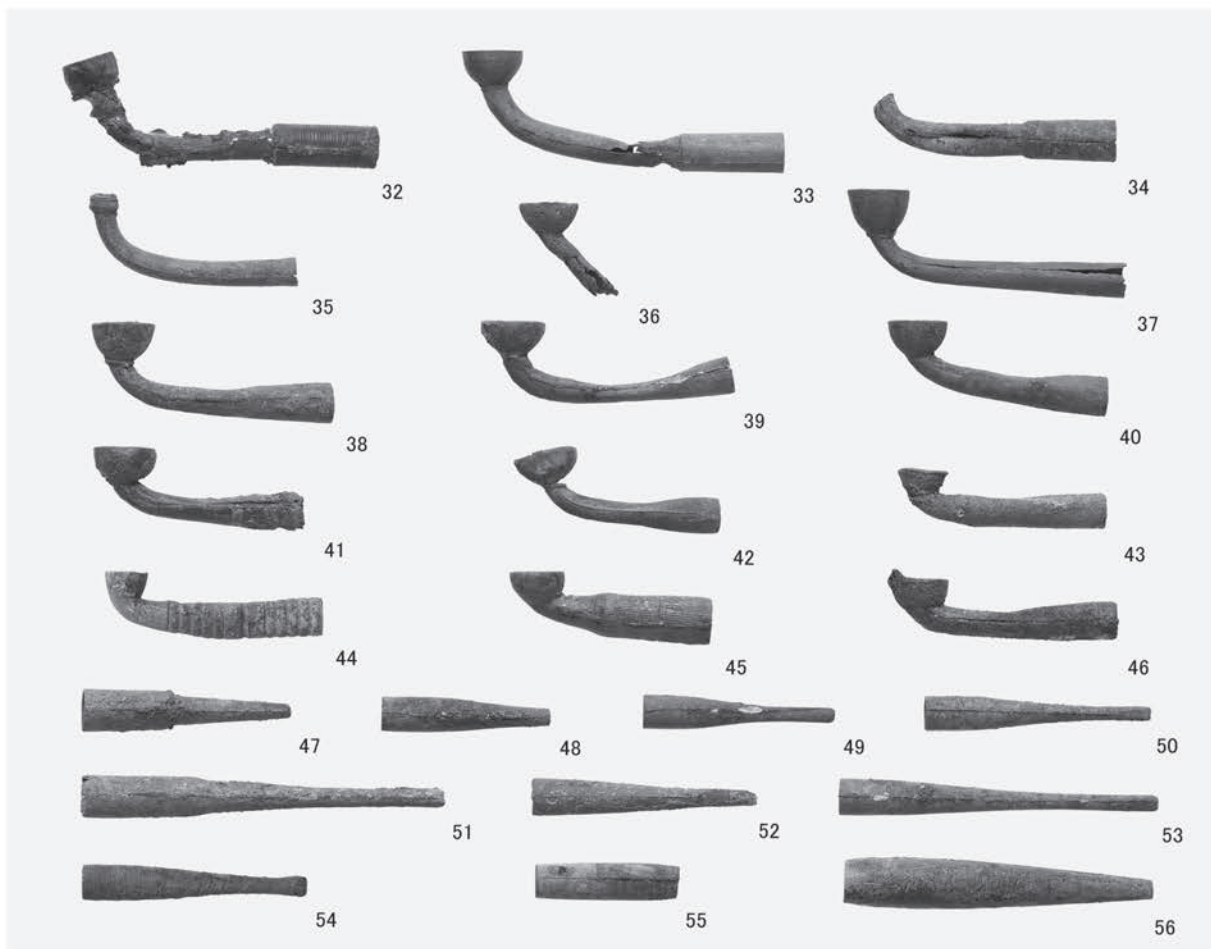
鉄製品(2)



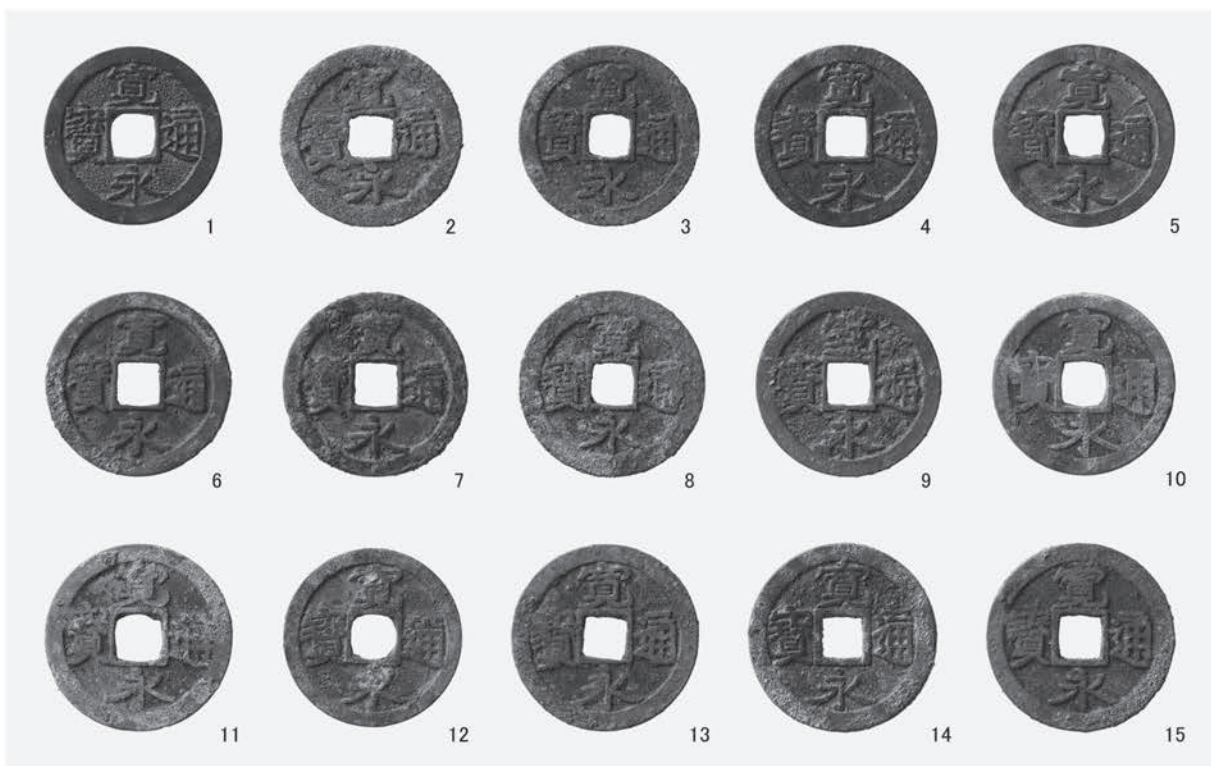
鉄製品(3)



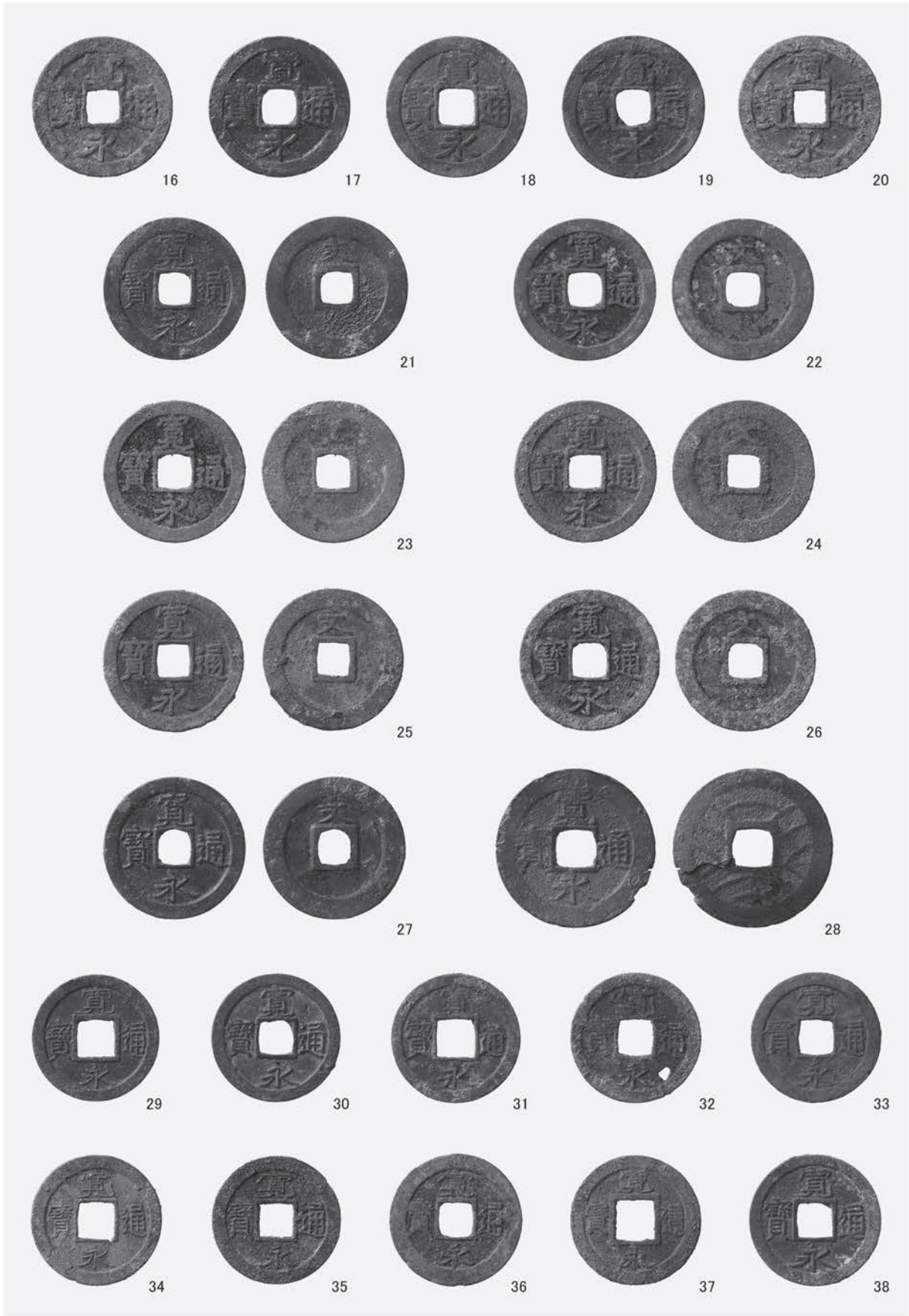
非鉄製品(1)



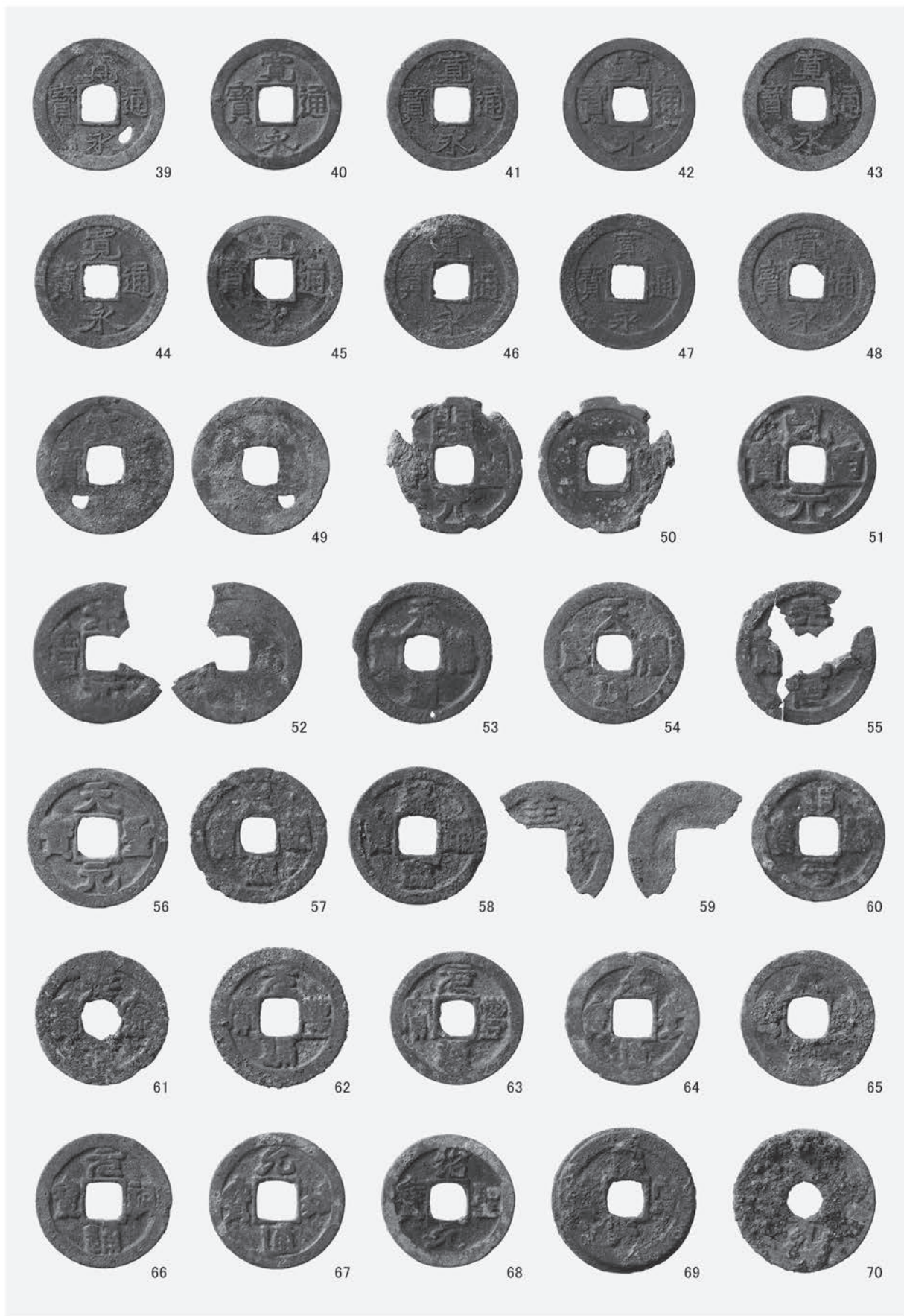
非鉄製品(2)



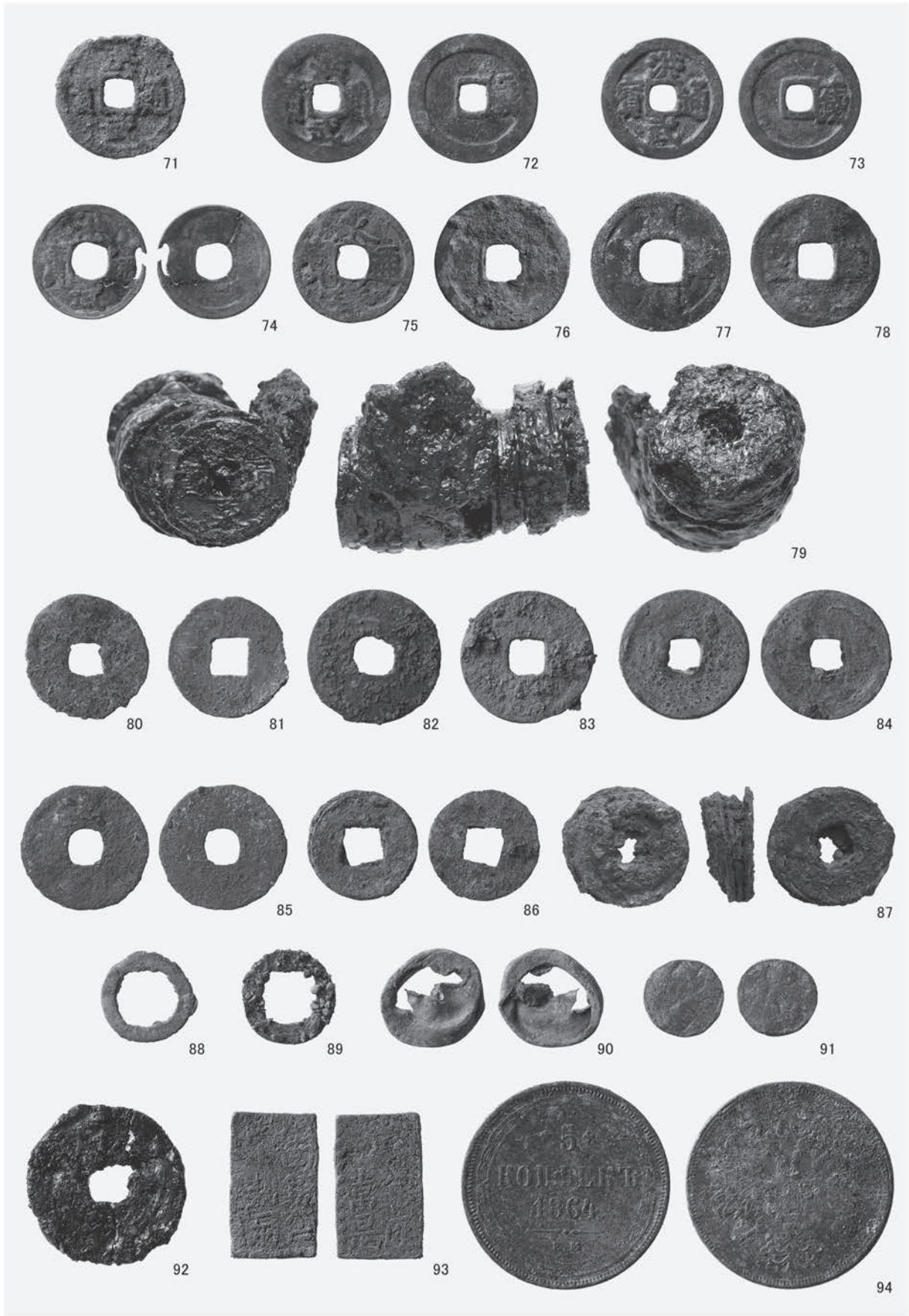
貨幣(1)



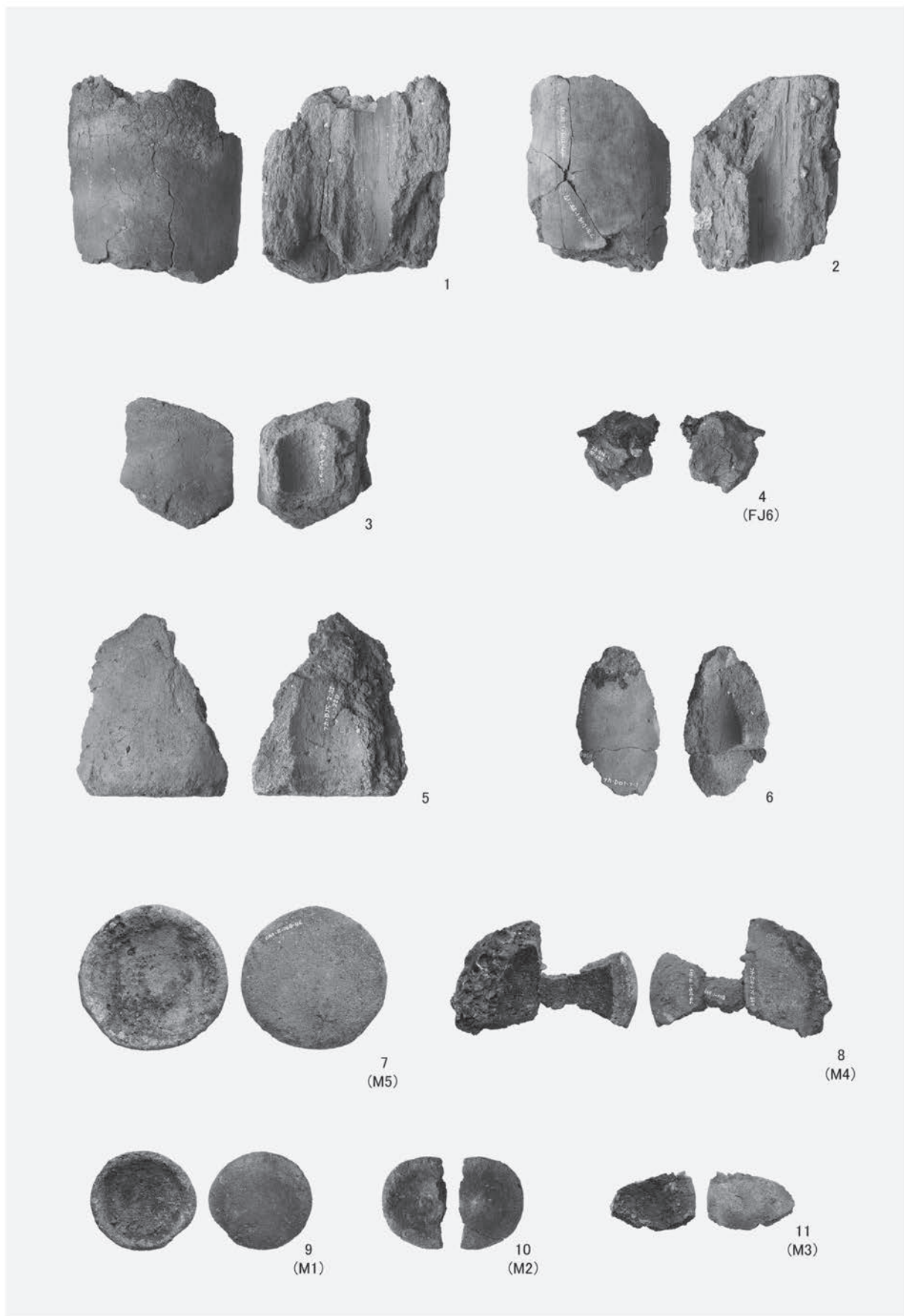
貨幣(2)



貨幣(3)

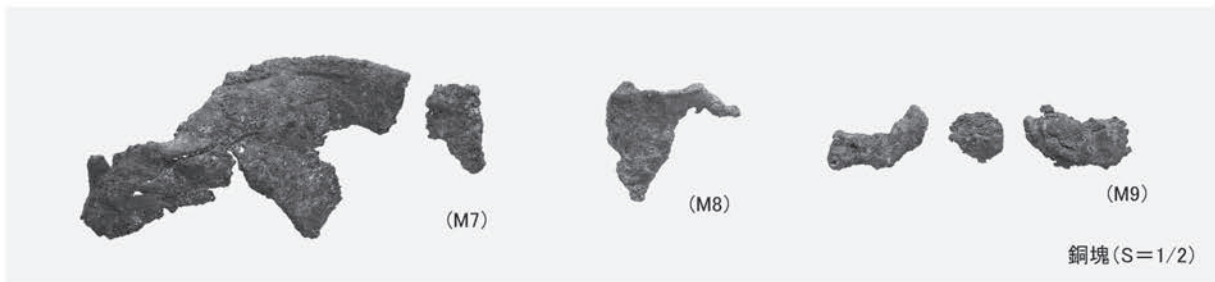
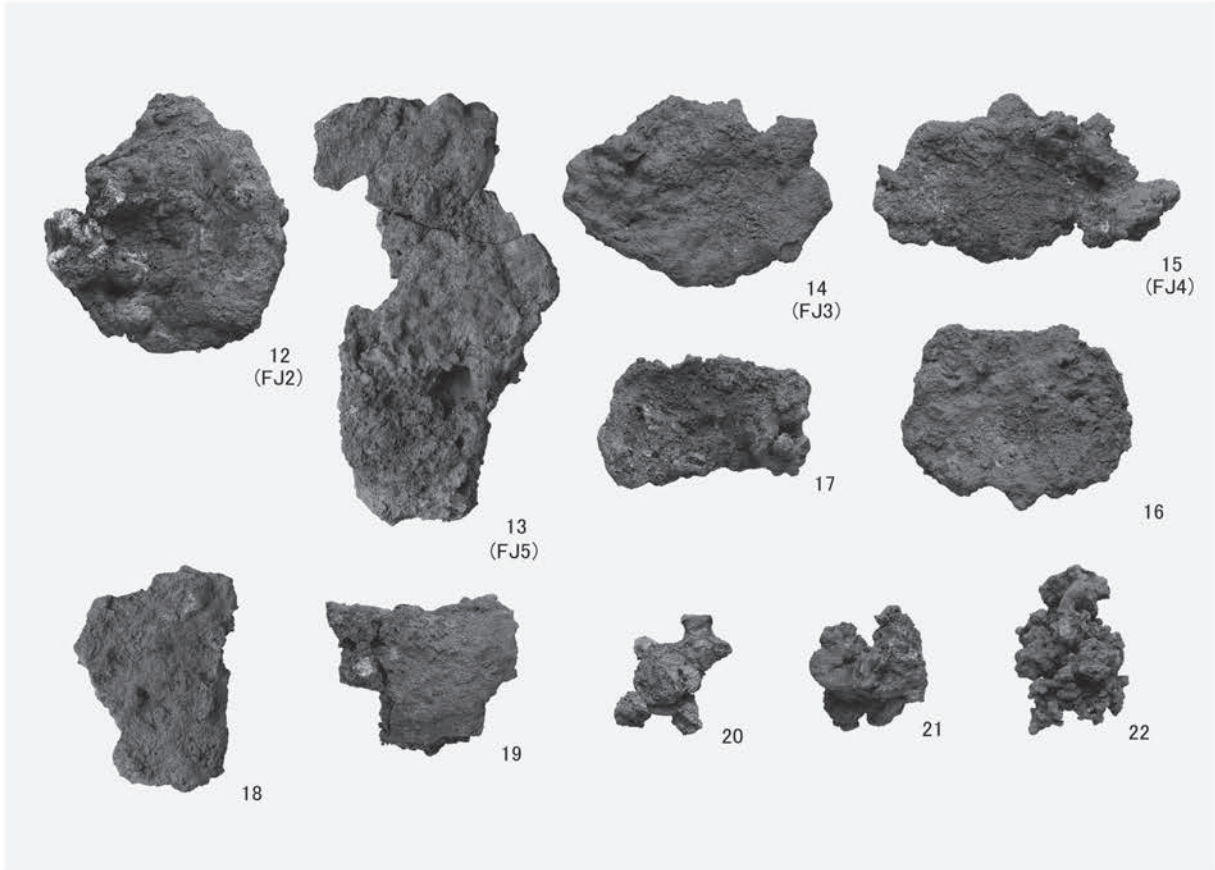


貨幣(4)



金属生産関連遺物(1)

()分析番号



金属生産関連遺物(2)

()分析番号

D柵1



1



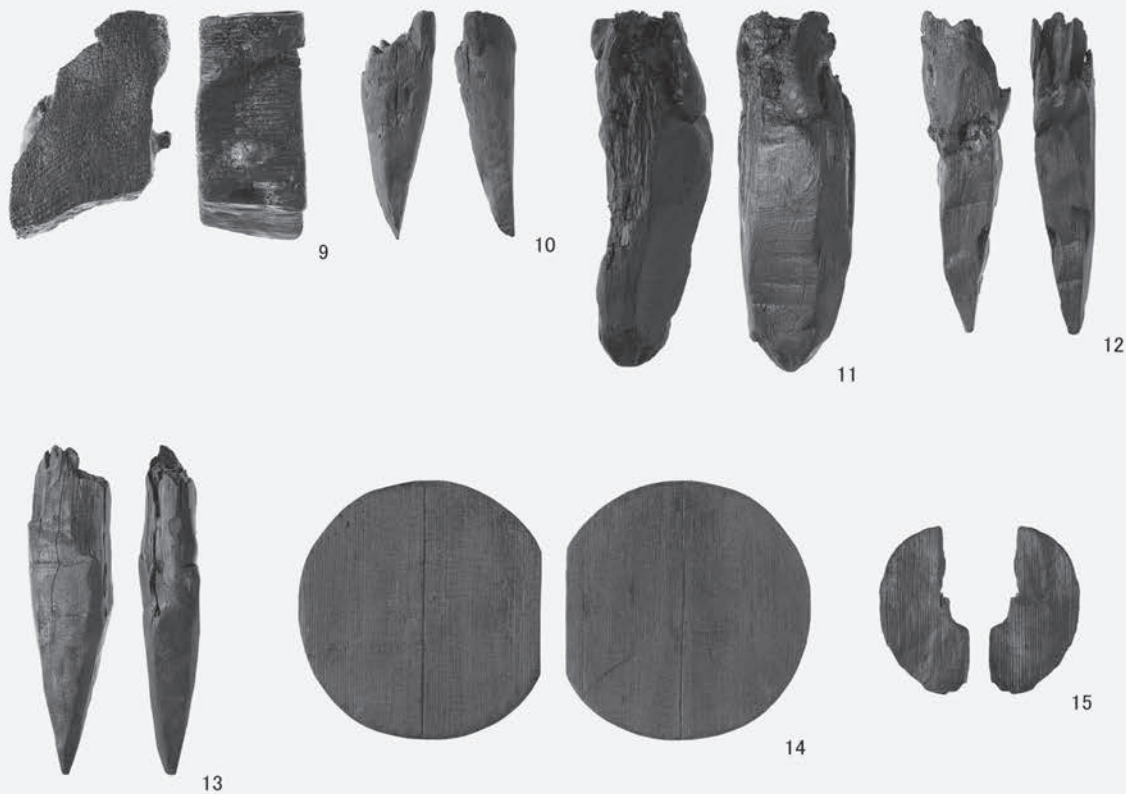
2

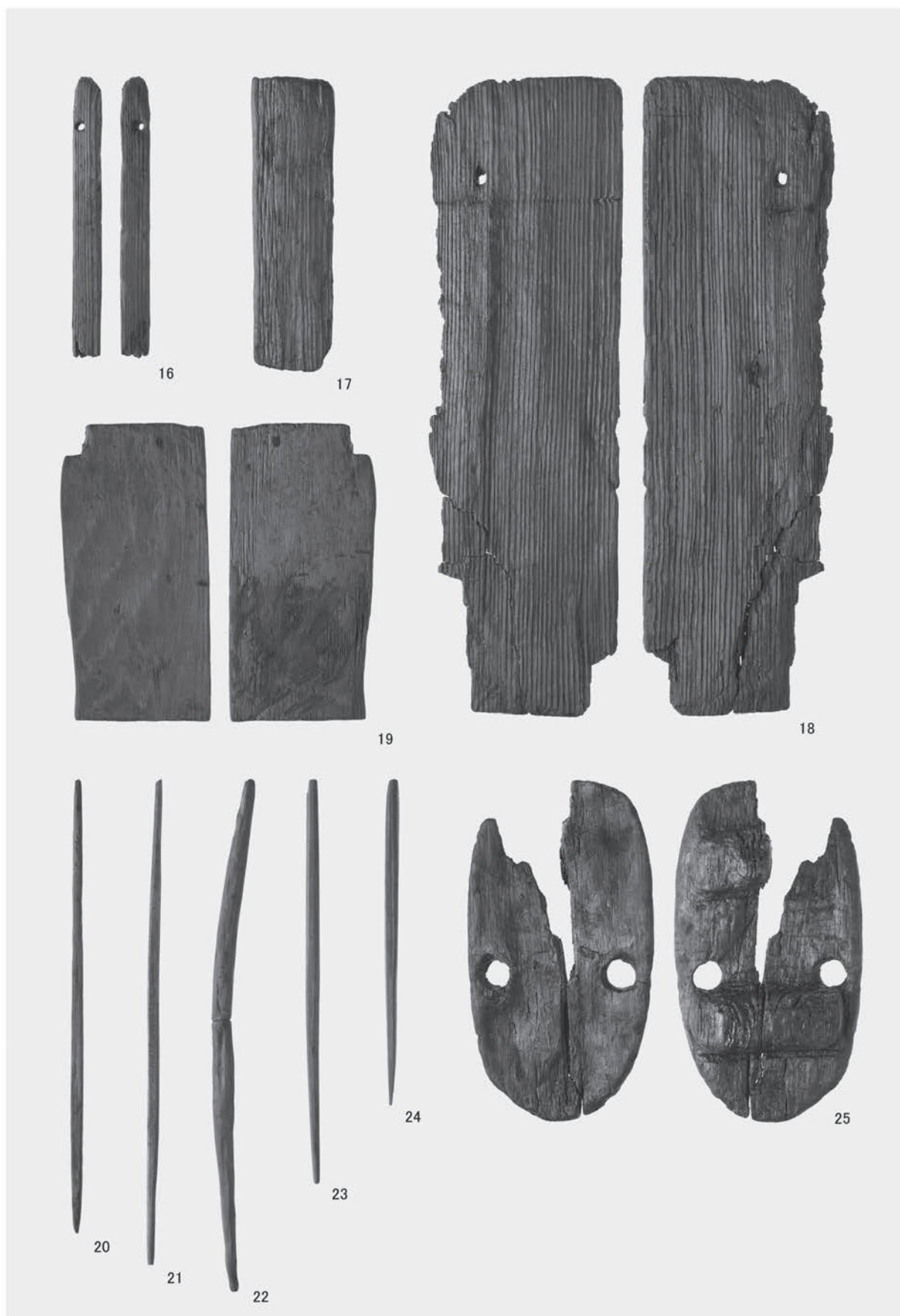
木製品等 (3)

B掘込2

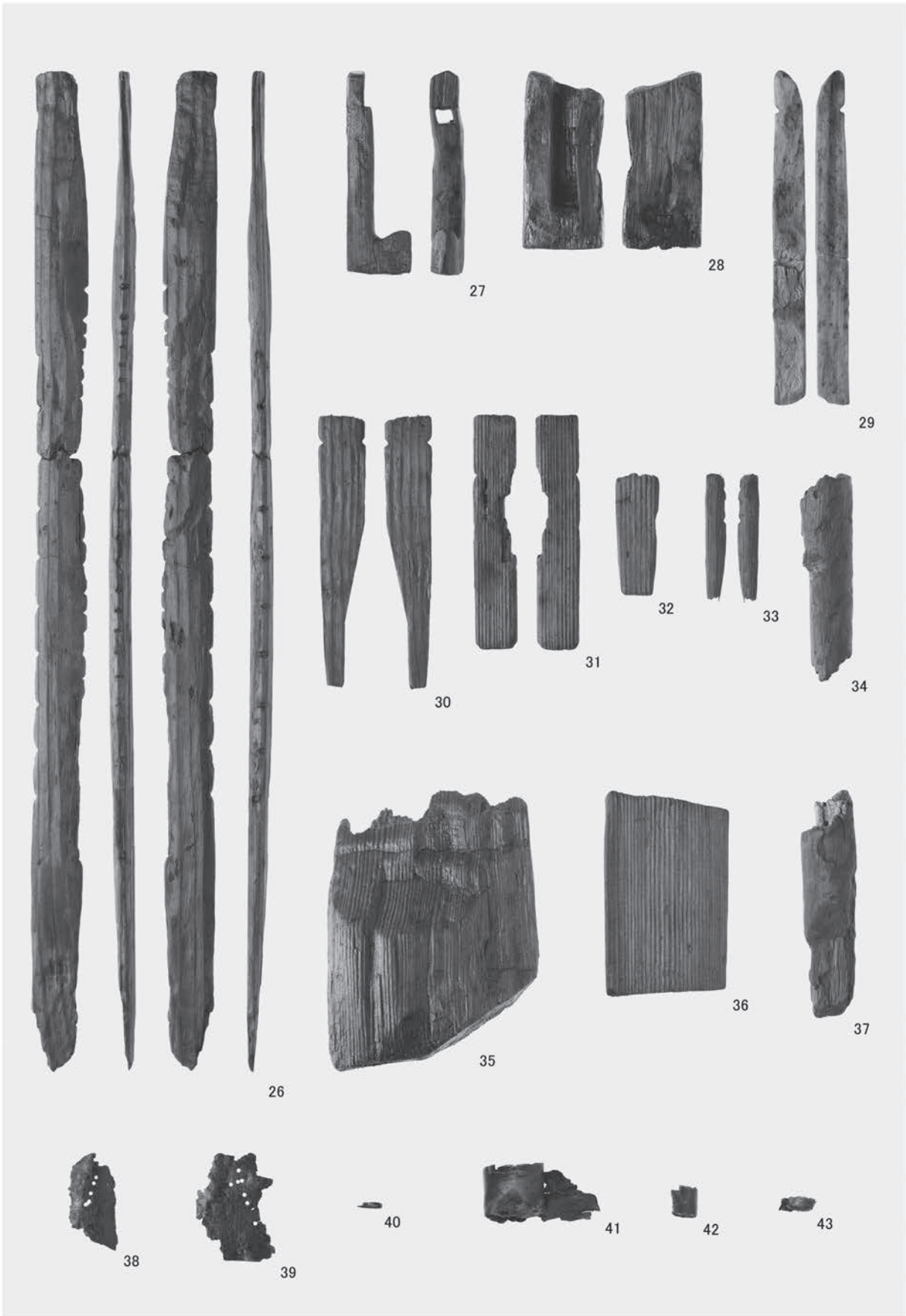


D13木製品集中





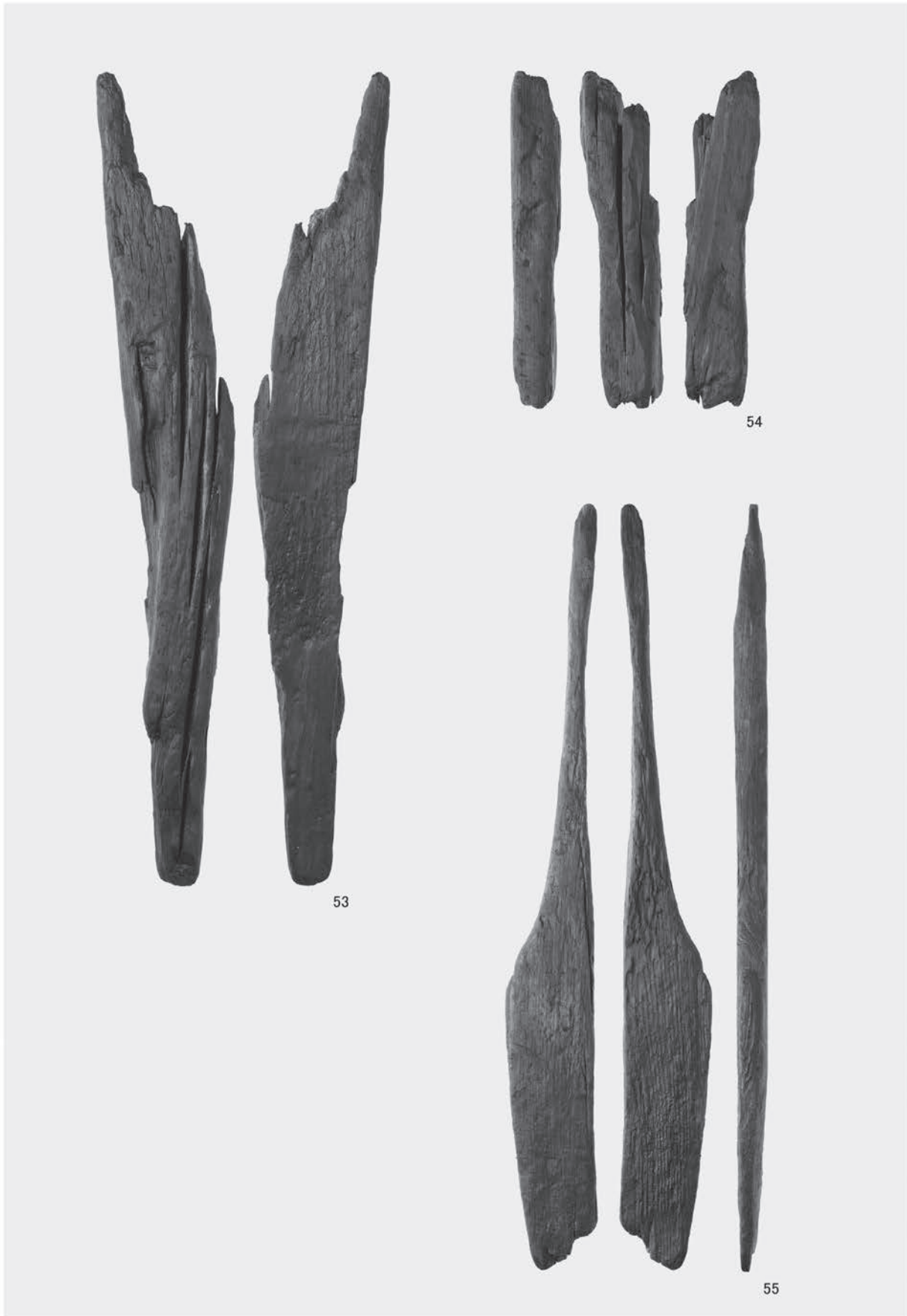
木製品等 (5)



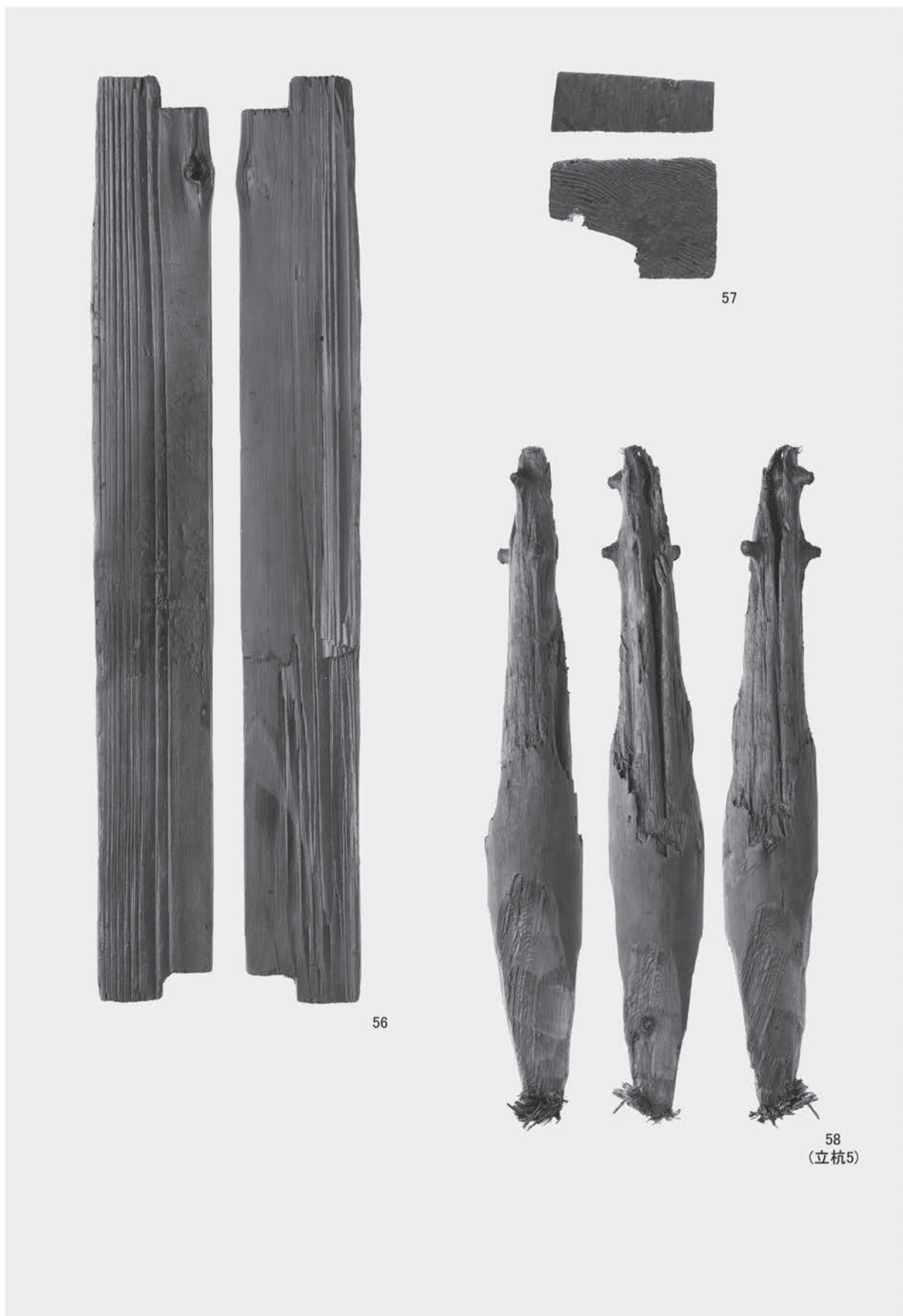
木製品等(6)

D14-1木製品集中





木製品等(8)

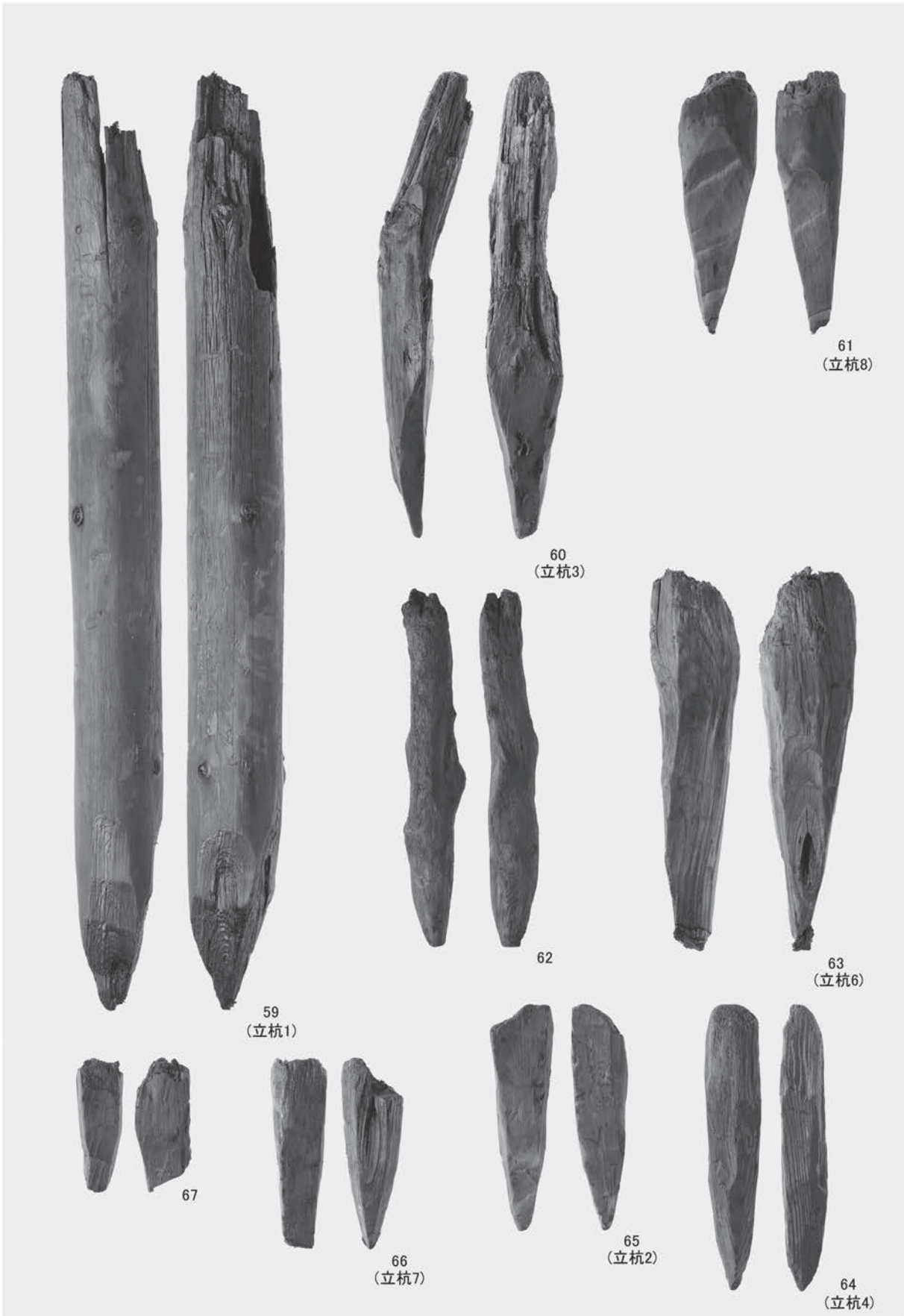


56

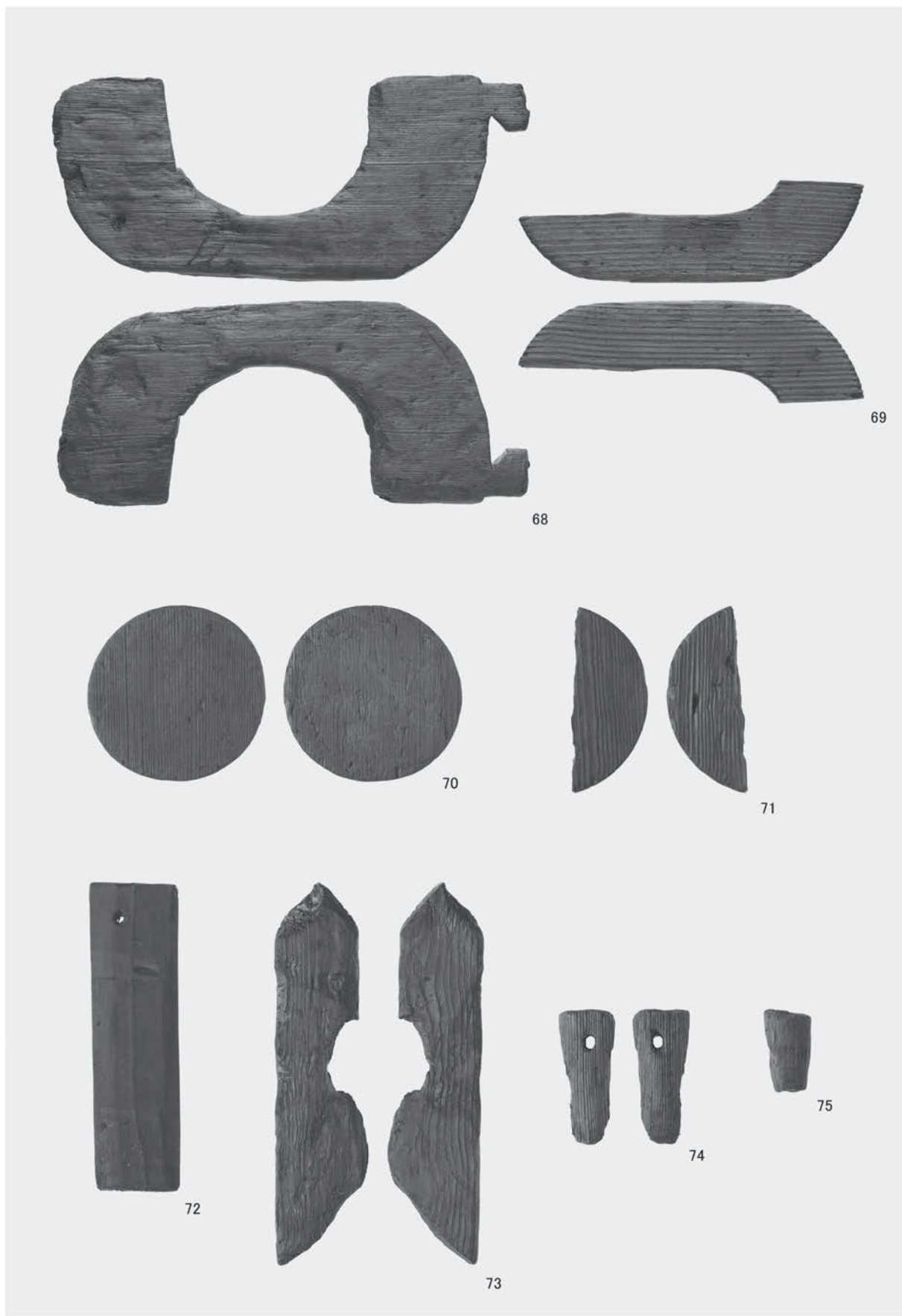
57

58
(立杭5)

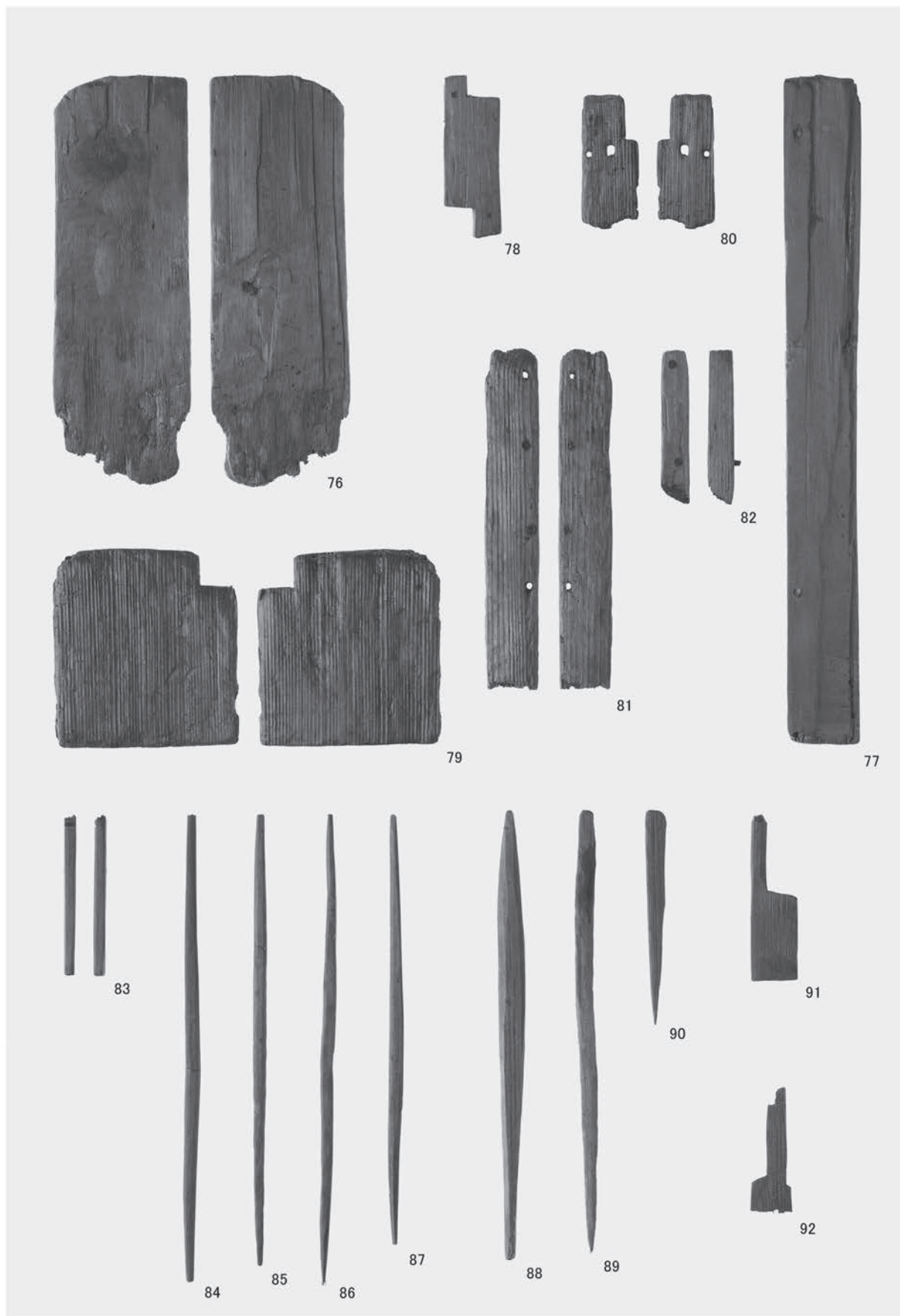
木製品等 (9)



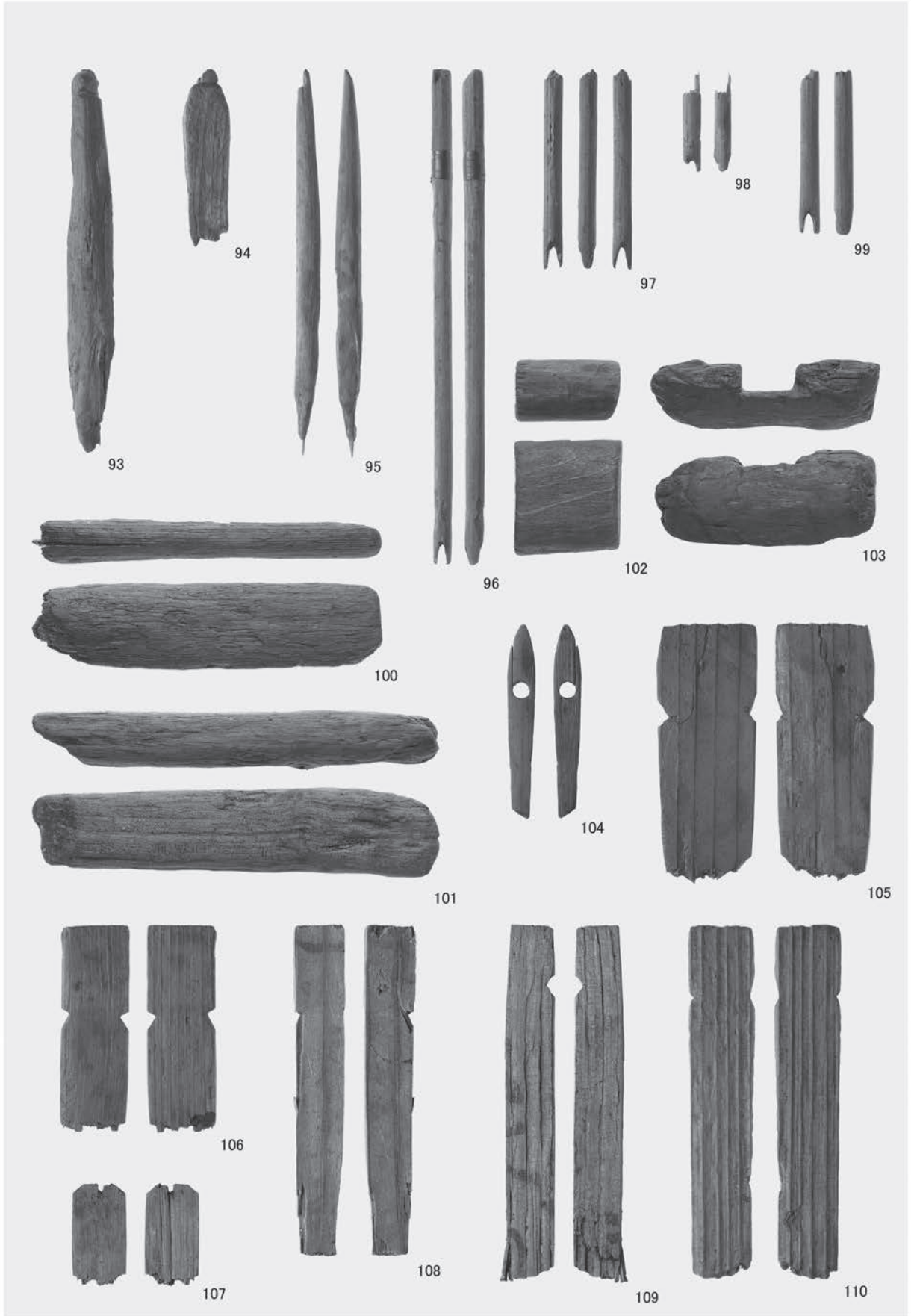
木製品等(10)



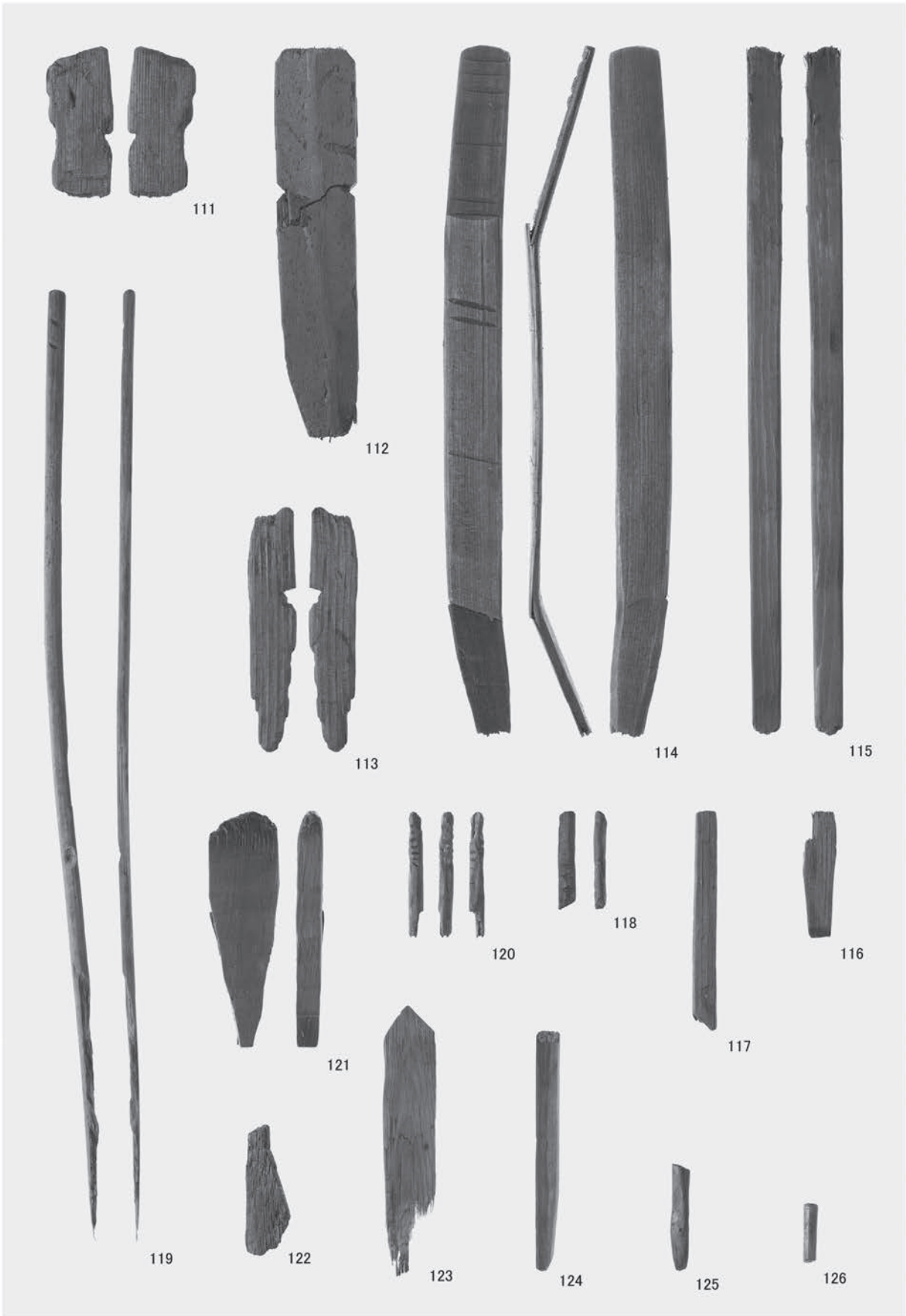
木製品等(11)



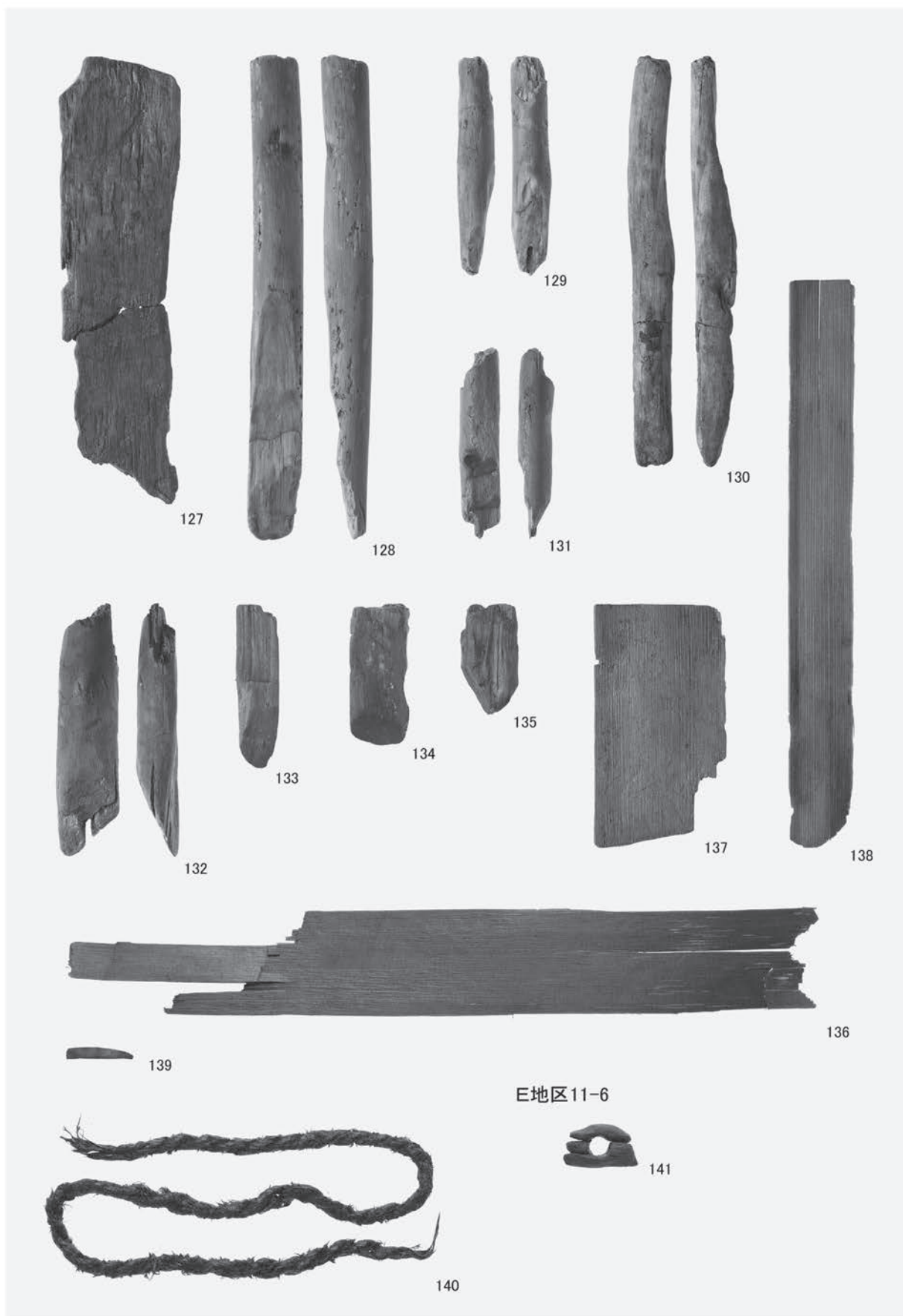
木製品等(12)



木製品等(13)



木製品等(14)



E地区11-6

木製品等(15)

D14-1木製品集中(④D14-1地先)



142
(立杭9)



143
(立杭10)



144
(立杭11)



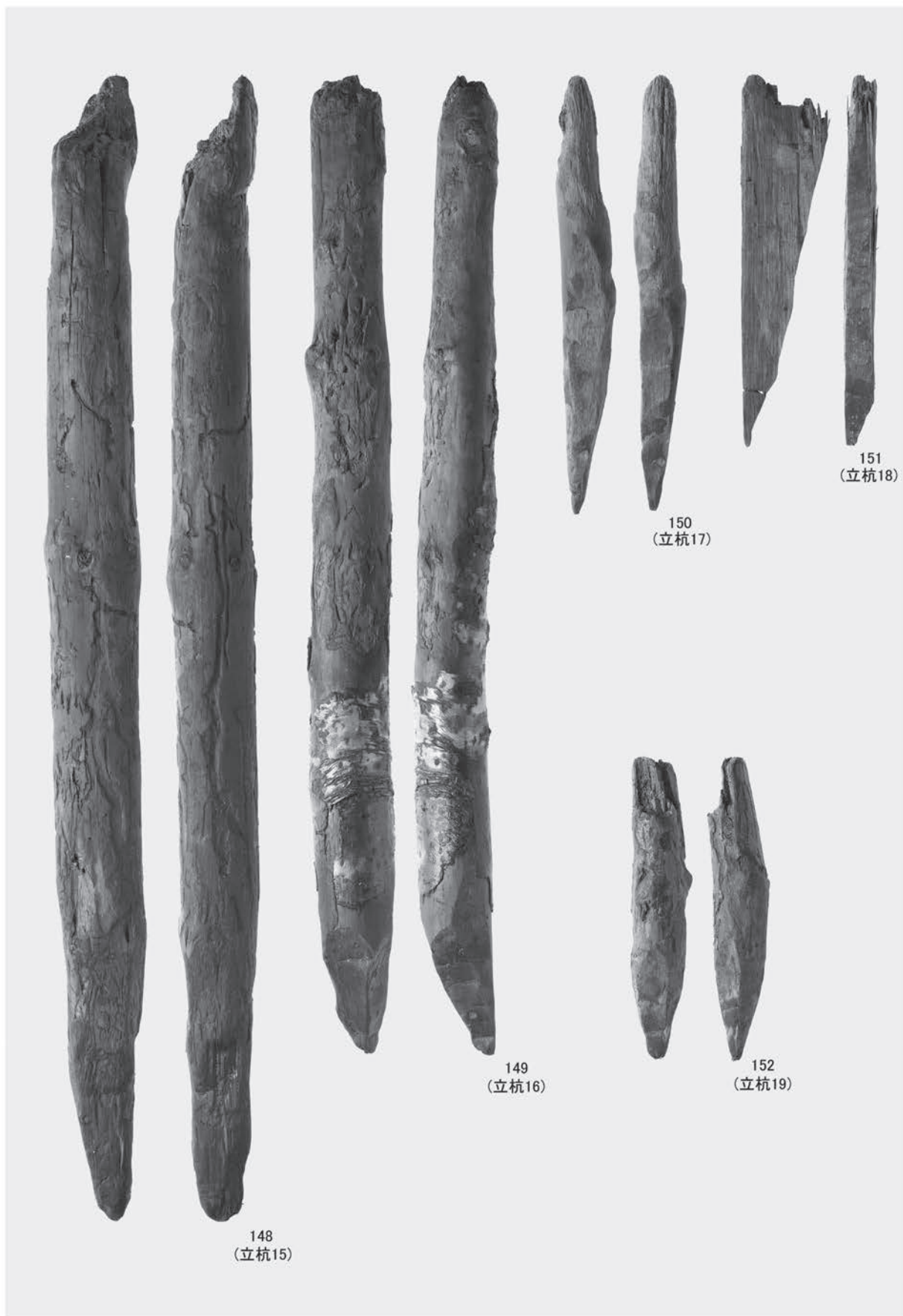
145
(立杭12)



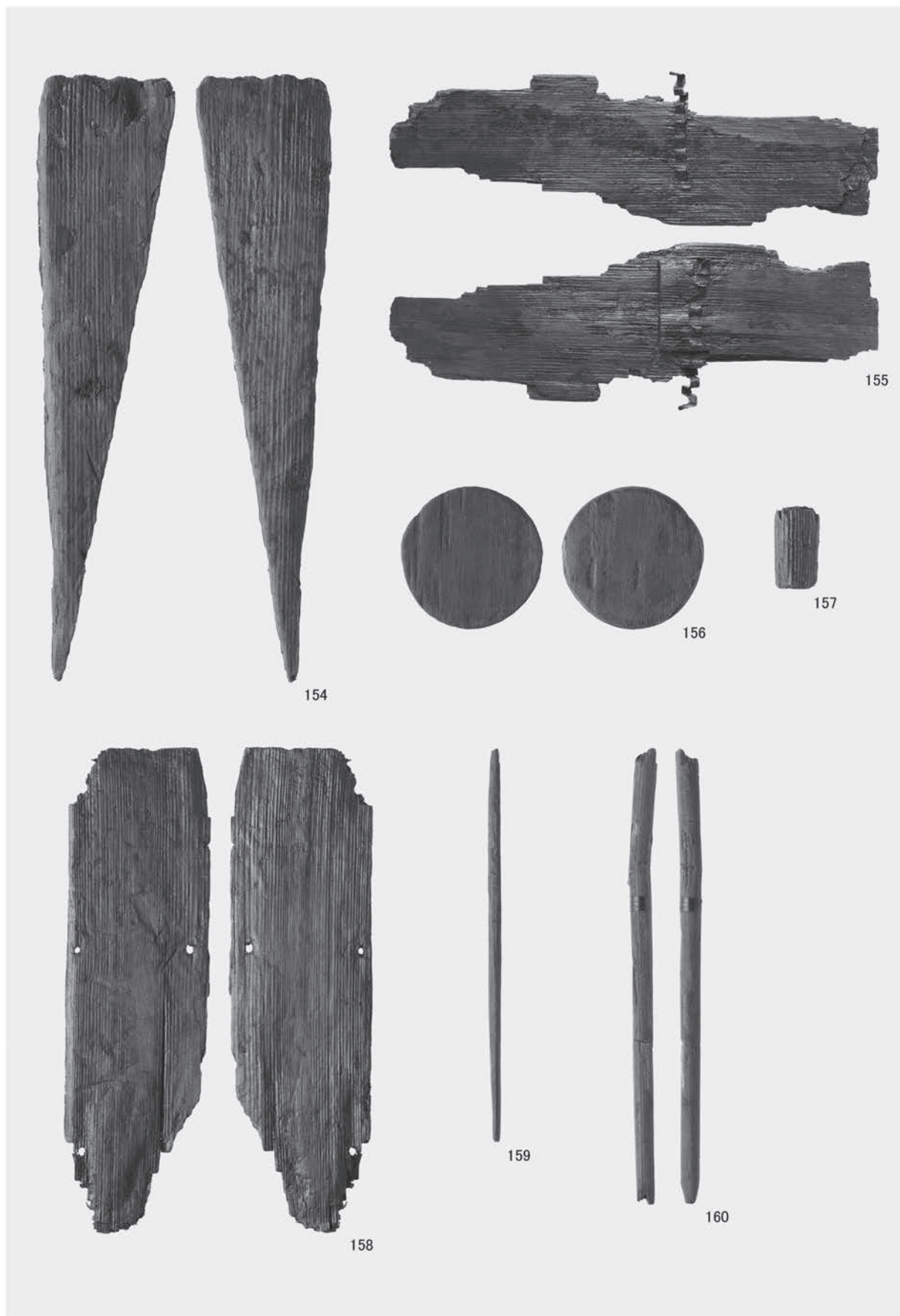
146
(立杭13)



147
(立杭14)



木製品等(17)



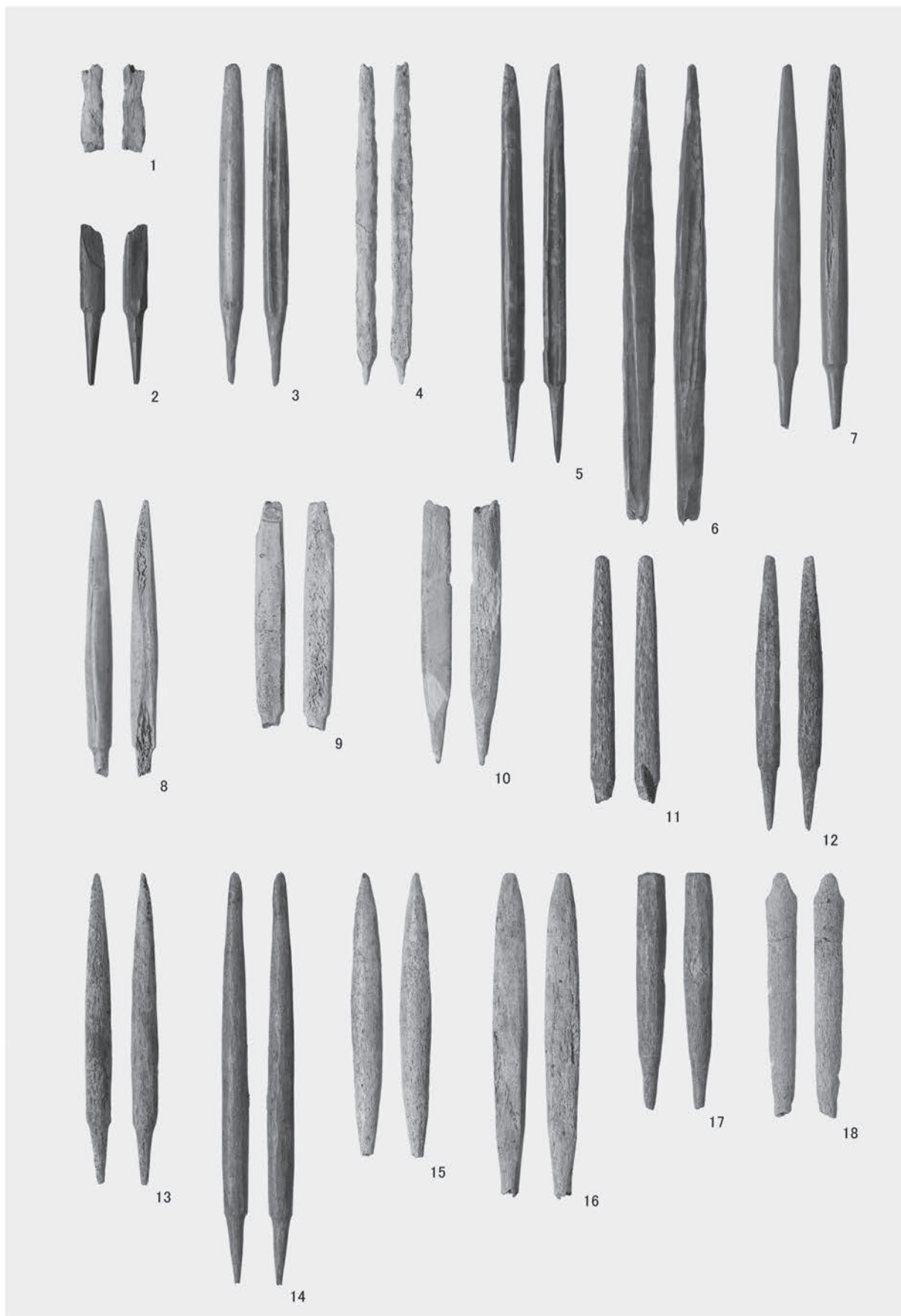
木製品等(18)



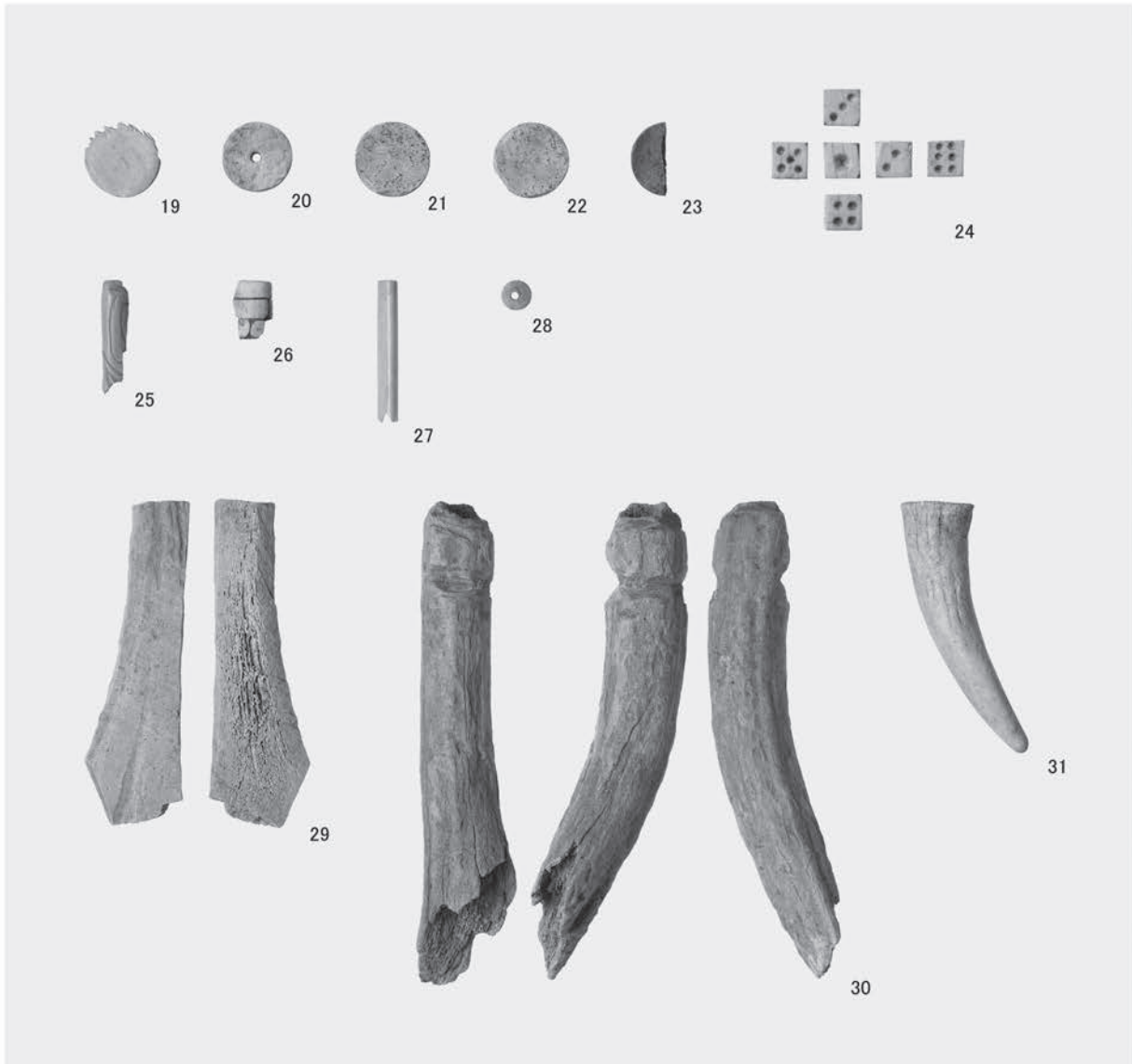
木製品等(19)



石製品



骨角貝製品(1)



骨角貝製品(2)

報告書抄録

ふりがな	まつまえちょう ふくやまじょうかまちいせき(2)							
書名	松前町 福山城下町遺跡(2)							
副書名	松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第377集							
編著者名	新家水奈 菊池慈人 鈴木 信 立田 理 中山昭大 福井淳一 山中文雄							
編集機関	(公財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL(011)386-3231							
発行年月日	西暦2024年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふくやまじょうかまちいせき 福山城下町遺跡	ほっかいどうまつまえぐん 北海道松前郡 まつまえちょうあざからつ 松前町字唐津 10-5・11-6・11-7・11-8・ 12・13-2・14-3・15-3・15- 4・17-2・18-4・19-2・88- 2・89-2・90-2・91-2・92- 2・92-4	01331	B-02-029	41° 25' 37.5"	140° 06' 21.1"	20220512 ～ 20220930 20230703 ～ 20230929	1,385	記録保存 調査 (松前港線 改良工事)
				SP1700				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
福山城下町遺跡	集落跡	中世・近世	石積1、 礎石18、 石列1、 柱1、 炉3、 溝1、 土坑42、 掘込9、 火事場整理穴1、 鍛冶関連 遺物集中1、 磁器片集中1、 木製品集中2、 立杭22、 柵1	陶磁器 金属製品 金属生産関連遺物 木製品 石製品 骨角貝製品 ガラス玉 動物遺存体		くぼ地や沢状地形から出土した16世紀中葉・後半～17世紀初頭の木製品を中心とする遺物。17世紀前葉の火災跡からまとまって出土した漳州窯系磁器の破片。ねずみ鑄鉄破片を伴う18世紀前葉の炉と、金微粒子等が付着した埴塼を伴う18世紀前葉の炉。19世紀後半の火事場整理穴から出土した陶磁器をはじめとする大量の遺物。		
要約	発掘区は福山城跡から南西へ300～400m、松前町字唐津を通る道道松前港線(旧福山街道)沿いに位置し、福山城下町のうち、唐津内町とよばれた町人地の一部にあたる。令和4・5年度にわたる調査の結果、遺構は石積、礎石、炉、土坑等を104か所検出し、遺物は陶磁器、金属製品、木製品、石製品、骨角貝製品、ガラス玉、動物遺存体等が合計で約3万5,000点出土した。主な成果として、くぼ地や沢状地形から出土した16世紀後半～17世紀初頭の木製品を中心とする遺物、17世紀前葉の火災跡からまとまって出土した漳州窯系磁器の破片、18世紀前葉の炉に伴う金属製品生産に関連する資料、19世紀後半の火事場整理穴から出土した大量の遺物が挙げられる。木製品には、漆塗椀、曲物、桶側板、下駄等の和産物や、アイヌ文化に特徴的な板綴舟の舟敷の一部、捧酒箸等があり、それらとともに出土した陶磁器、骨角製の矢中柄、動物遺存体と合わせて、城下町建設以前の松前の様子を研究するうえで重要な資料である。一方、漳州窯系磁器や金属製品生産に関連する資料は、17～18世紀の唐津内町における商人・職人の活動を具体的に示すものとして注目される。また、火事場整理穴から出土した陶磁器をはじめとする大量の遺物は、19世紀後半の唐津内町における町人の暮らしぶりをうかがわせる興味深い資料と言える。							

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第377集

松前町 福山城下町遺跡(2)

—松前港線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和6(2024)年3月27日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp/>
Email mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社北海道機関紙印刷所
〒006-0832 札幌市手稲区曙2条3丁目2-34
TEL (011)686-6141 FAX (011)676-6684
